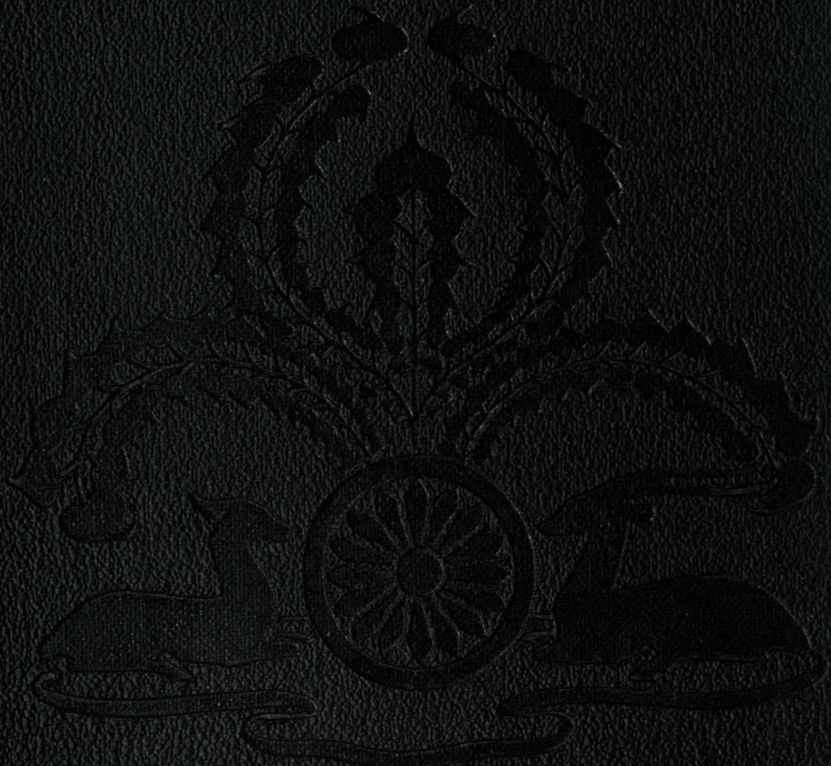

32

國譯一切經

大東出版社藏版

LIBR
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

32

大集部 五

矢吹慶輝譯

目次

（本丁）（通頁）

地藏經解題 ……〔一——三〕…… 一

大乘大集地藏十輪經 ……〔一——二〇五〕…… 一六

序 …… 一三

序品第一（卷一）…… 一六

十輪品第二（卷二）…… 四三

無依行品第三（卷三—五）…… 六七

有依行品第四（卷五—七）…… 一一六

懺悔品第五（卷七）…… 一五〇

善業道品第六（卷八—九）…… 一六六

福田相品第七（卷九—十）…… 一八九

獲益囑累品第八（卷十）…… 二二五

地藏菩薩本願經 ……〔一——四〇〕…… 二二九

忉利天宮神通品第一（卷上）…… 二二九

分身集會品第二（同）……二二四
觀衆生業緣品第三（同）……二二五
閻浮衆生業感品第四（同）……二二八
地獄名號品第五（同）……二三二
如來讚歎品第六（同）……二三四
利益存亡品第七（卷下）……二三九
閻羅王衆讚歎品第八（同）……二四一
稱佛名號品第九（同）……二四五
校量布施功德緣品第十（同）……二四七
地神護法品第十一（同）……二四九
見聞利益品第十二（同）……二五〇
囑累人天品第十三（同）……二五六
百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚……〔一——一三〕……二五九
佛說地藏菩薩陀羅尼經……〔一——一七〕……二七二

地藏菩薩儀軌……〔一―三〕……二九二
佛說延命地藏菩薩經……〔一―四〕……二九五
地藏菩薩發心因緣十王經……〔一―一四〕……二九九
第一　秦廣王官……二九九
第二　初江王官……三〇一
第三　宗帝王官……三〇二
第四　五官王官……三〇二
第五　閻魔王官……三〇三
第六　變成王廳……三〇八
第七　太山王廳……三〇九
第八　平等王……三〇九
第九　都市王廳……三一〇
第十　五道王廳……三一一

[illegible]

解　題

一、地藏菩薩の信仰

地藏菩薩の信仰中、その特異點凡そ左の如し。

大乘佛教に在りては理論上、十方三世の諸佛諸菩薩、其の數無量なりと雖も、事實上、弘く多數人の信仰對象たりし諸尊は大約十指を屈するに過ぎす。而して其の多くは本願を有せる諸尊たるは嘗て拙著、阿彌陀佛の研究に述べしが如し。而して菩薩中、普賢は行願、文殊は智慧、觀音は慈悲、虛空藏は包容、地藏は悲願を以て其の特色となす。卽ち地藏菩薩は本願の菩薩にして、悲願遙に他の諸菩薩に過ぐるものとせらる。

地藏菩薩本願經に說ける地藏の本生、一婆羅門女の孝順悲愍幷に菩薩六道普濟の本願は勿論、大方廣十輪經等亦悲願の菩薩たるを說けり。單り顯敎所說に於いて然るのみならず、密敎經軌に在りても亦同じ。地藏菩薩は金剛界に在りては寶生如來の分現にして平等性智を實體とし、福德成就の德用を標するも、胎藏界に在りては蓮華部に屬し、阿彌陀佛の分現と見られ、妙觀察智を實體となし、怨親平等の慈悲を表せり。此の故に後世、彌陀地藏一體說をすら生ずるに至れり。(沙石集二上に彌陀地藏一體說あり、諸神本懷集に法藏地藏一體說あり)。其の密號は金胎兩部を合せて與願金剛、悲願金剛、願滿金剛等とせらるゝも亦悲願の菩薩たるを語れり。此の他、六地藏、延命地藏等、苟くも地藏菩薩に關する說話にして、佛敎に於ける慈悲の說明を缺くものなし。佛敎敎學が大悲闡提(悲增菩薩)として極善不成佛の一例を地藏菩薩に求めしもの洵に所以ありと謂ふべし。要するに地藏菩薩は佛敎悲智の二門中、特に悲門の一表徵たり。

地藏菩薩像は時に寶冠瓔珞の圖像(胎曼、八大菩薩曼荼羅經)を見るも、多くは聲聞形なるを通例とす。十輪經中、地藏菩薩の南方より來會するや、玄奘譯には「作聲聞像將來至此」と云ひ、「地藏眞大士、具杜多功德、現聲聞色相、來稽大師」といひ、北涼譯には「作沙門像」と云へり。蓋し密敎經軌に說く形相に二種あり、聲聞形と菩薩形と是れなり。而して密敎曼荼羅內の圖像を除きては多くは聲聞形とす。本願經には文殊、定自在、普賢、普廣、觀音の諸菩薩を對告衆として、地藏の功德を稱讚せるも、是等諸菩薩にして聲聞形をなせるもの極めて罕なり。卽ち地藏菩薩は普通に他の菩薩と全

く其の形相を異にせり。

由來、大乘經が小乘經に對する態度に二あり。華嚴、般若は二乘を貶斥し、法華、涅槃は二乘を融和せり。十輪經は大小二乘の融和を說き、三乘は如來度生の方便なれば、大乘を修行するものも、他の二を廢すべからずとなせり(有依行品)。是れ正しく地藏菩薩が菩薩にしてしかも聲聞の形相を取れるに相應せり。卽ち十輪經は大小二乘の對立以外、一種の第三敎團を暗示せり。凡そ菩薩佛敎にして聲聞佛敎との融和を計らんとするもの地藏菩薩と十輪經との如きは稀なりと謂ふべし。

十輪經は末世、破戒比丘の擁護を主張し、破戒比丘も猶ほ人をして十種の勝想を生ぜしむるが故に、非法に害を加ふべからずとなし(無依行品)、又破戒の比丘は佛子に非ず、供を受くべからざるも、聖賢の憧相あれば害辱を加ふべからずとなせり(有依行品)。就中、衆生に佛想をなす謂ゆる佛想佛の思想は華嚴經說と共に一異色たり。地藏菩薩は自ら外に聲聞像を現じて內に菩薩行を秘し、十輪は三乘同視、破戒擁護を說けり。是れ豈に菩薩佛敎中に於ける一新佛敎に非ずして何ぞ。十輪經が偶々三階敎の根本所依たりしもの洵に所以ありと謂ふべし。

地藏本願經に、佛、地藏に告げて、二佛(釋迦彌勒)の中間、無佛世界に於ける難度と惡趣との衆生を濟度すべきを付囑せり。玆に地藏菩薩は六道能化の慈尊として、無佛世界幷に五濁惡世の敎化(捨邪歸正)を標示せり。從つて地藏信仰には地藏敎化と分身攝化とを其の特色となせり。本願經の分身集會品には觀音の分身(三十三身)示現に同じく、千百億の分身を現ずるを說き、幷譯十輪經には

或作二剡魔王身一、或作二獄卒身一、或作二地獄諸有情身一、現二作如是等無量無數異類之身一、爲二諸有情一如レ應說レ法

と云へり。彼の悉檀抄に引ける地藏讃文たる

每日晨朝入二諸定一、入二諸地獄一令レ離レ苦、無佛世界度二衆生一、今世後世能引導

は、恐らく、十輪經等の取意文ならんも、地藏尊は特に地獄救苦の菩薩とせられ、能く地藏尊の特色を標示せり。斯くして唐道液は「地藏恒居二無間一豈不二深思一」と云へり。本願經の業緣品、業感品、地獄名號品の如きは、主として衆生の罪報と地獄の苦相とを說きて、地藏尊の信仰を勸說せり。凡そ諸佛菩薩にして神通變化を除き、地獄を以て其の恒居となすが如きは極めて異數とす。卽ち地藏尊は末法濁惡の墮獄者に對する恰好の救主とせらる。

試に地藏分身說と、十輪經の「或作二剡魔王身一」と、本願經の閻羅王(剡魔王)衆讃嘆品とを聯結せば、容易に地藏剡魔一體

說を生ぜし徑路を辿り得べし。彼の十王像と共に地藏像を安置するは、元と唐末の撰出たる僞經十王經の十王治罪說に基き、弘く支那、朝鮮、日本に行はれたり。

剡魔（焰摩、閻魔、夜摩（王）Yamarājaは異音譯にして、閻羅は其の略なり）は印度古神話以來冥界の主なりしを以て、閻魔（夜摩）と同體の地藏尊が亡者の救濟を司るは當然なり。本願經利益存亡品第七は現當に亙りて廣く存亡に對する利益を說くに在るも、七々日內の修福を說き、亡者は七分の一、餘は存者に歸すとなせるが如きは永く民間の信仰に影響せり。彼の夙に西域地方に流行せしが如きも、亦此の亡者救濟の信仰に基けり。

地藏菩薩信仰の興起は比較的後期に屬するも、毎に觀音菩薩の信仰と相列んで廣く西域、支那、朝鮮、日本に流布し、民間信仰に於ける菩薩佛敎中の優位を占めたり。印度に在りては法顯傳、西域記幷に南海寄歸傳等に其の記事を見ず、從つて流行の徵證少きも、姑らく疑僞經を除き、華嚴、大集、寶積、大日、八大菩薩曼荼羅　地藏菩薩儀軌、地藏眞言、地藏問法身讃、香王菩薩陀羅尼呪、陀羅尼集（六卷）等の諸經譯軌に其の名を列し、特に北涼失譯並に唐譯、大方廣地藏十輪經並に唐譯、地藏菩薩本願經は倶に地藏經なるを以て、大乘敎中に在りての重要菩薩たるを知るべし。但し地藏尊が一菩薩としての尊格並にその位置を確定せしは密經に負ふ所多し。

宋端拱已丑（西紀九八九）常謹集、地藏菩薩像靈驗記には、梁より宋に至る大約四百年間の地藏菩薩像關係靈驗三十一條を記錄せり。此の中、隋以前に屬するものとして僅に梁朝善寂寺東廊壁上、張僧繇の畫ける地藏像放光記の一あるのみ。然かも其の靈驗は唐麟德（六六四―六六五）、垂拱（六八五―六八八）、大曆（七六六―七七九）の頃にあり。本記の後記に

余素歸二地藏尊一、或尋二其先跡一、或諮二詢口實一所得感應記二一百餘條一、就中最勝者三十餘條件、恐奄然該慈感應沉沒、疾出レ之直筆而誌、頗存二大略一而已

とあるが如く、蒐め得たる三十一條は其の全數に非ざるも、一百餘條中の代表と謂はざるべからず。卽ち北涼失譯十輪經、幷に梁朝の畫像に依りて、支那に於ける地藏尊の信仰は六朝に起因せるを證せるも、其の盛行は正しく隋唐以後に在りと知るべし。從つて十輪經鈔、本願經釋は唐以後に屬す。本邦に於ける傳來は奈良朝に在るも、其の盛行は平安中期已後に屬す。卽ち地藏尊の信仰は奈良朝に起因するも、平安朝に密敎の傳播に伴つて流行し、源平時代より漸く武將の間に尊信され、特に北條足利時代に盛行を極め、清盛、賴朝、時賴、尊氏等相繼いて之を信仰せり。德川時代に入りては二十四札

所願禮をすら生ずるの盛況觀を呈し、今尙ほ全國到る處、民間佛敎としての尊信特に篤し。

地藏の名義に關しては諸說一ならず。梵名は乞濕底蘖婆 Kṣitigarbha 或は乞濕底矩奢 Kṣitikośa 又、或は乞灑訶羅惹 Kṣaharāja といひ、共に地藏の義なり。此の他、尾薩縛鉢哩晡羅迦 Viśvapari-pūraka は一切成滿者の義にして、密敎金剛界にては金剛幢といひ、觀音經の持地菩薩、最勝王經の妙幢、智度論の金剛持地も亦地藏なりといふ。此等諸名の中、幢を除きて他は悉く地德を表徵せし菩薩たるを語れり。十輪經に云く

此大菩薩、諸微妙功德伏藏、是諸解脫珍寶出處、如二如意寶珠一雨二衆財寶一隨レ所二希求一皆令二滿足一

と。地輪の堅固にして壞すべからず、又萬物を任持して傾動せざるは地藏尊の菩提心の堅固なるに比すべく、大地の珍寶を出して伏藏窮りなく、又一切種子を含藏して朽敗せさらしむるは、斯尊が能く法界衆生の善根種子を保持し、衆生の爲に備さに衆苦を受け、無量劫を經て亡失せざらしむるに擬すべし。特に地獄救苦の菩薩たり、又從つて焰摩と同體たるが如きも、亦皆大地に關係せり。由來、天覆地載の思想は地德に賦するに、堅固不壞の德用と無邊廣大の勢力と萬物育生の功德とを以てせざるなし。而して地藏尊の內證外用亦此の外に出でず。勿論、菩薩其の他に虛空藏、天藏、月藏、日藏、梵藏の名ある所、地藏の名を見るは當然にして、若し假りに地藏尊を以て他に古代印度神話中にその聯想を求むれば、梨俱吠陀の比里底毘 Pṛthivī 密敎に於ける地神(持地神)、堅牢地神なるべし。本願經に地藏尊の現化中、大地の諸現象を數へ、又堅牢地神を擧ぐ。後世密敎家が地神地藏一體說をなせるが如きも亦偶然ならずと謂ふべし。此の他、支那傳來の摩尼敎殘經中に地藏明使あり(拙著、三階敎の研究六五二、六五三頁參照)、ゾロアスター敎の天使、スロシユ Srosh に擬する說あるも(M. Visser)、その詳細は他篇に讓る。

二、三階敎と地藏敎

地藏部に屬する諸經中、三階敎と地藏十輪經とは、三階開敎以來の親緣なりき。三階立敎の證典たりし經籍鮮からざりしも、引證の頻繁なる能く十輪の右に出づるもの無かりしこと是れ其の一なり。姑らく三階佛法四卷中、十輪の引用は前後一百數十囘に及べり。從つて三階敎籍中、十輪依義立名二卷(大方廣十輪經學依義立名)、十輪略抄一卷(大方廣十輪經人集錄略抄出)の如く、特に十輪經によりての經證集成を見しこと是れ其の二なり。玄奘の新譯十輪成るや、玄奘門下の昉法

師は三階敎旨に依りて之に序し之を讃して、第三階佛法の指南とせしもの是れ其の三なり。由來、梁唐宋の僧傳を通じて十輪の講誦を傳ふるもの僅に一二に過ぎず。此の間に在りて十輪の尊崇尋常ならさりしは一に三階敎家なりき。昉法師の經序に「十輪經者、則此土末法之敎也」として、十輪經を以て末法佛敎の最上乘となせり。昉師の傳未だ詳かならず。惠詳の自鏡錄に、神都慈悲寺僧、神昉法師を傳して、小年以來、十輪經を聽學し、精勤苦行、六時禮讃、專ら乞食を業とすとせり。昉師恐らくは神昉法師なるべし。又神昉法師に十輪經鈔の著あり三階敎籍に屬す。序者と慈悲寺僧と鈔主との同異に就きては別に稽ふべし。道忠は群疑論探要記六に右十輪經鈔の文を引用し、第三階佛法に在りては所謂、眞應中の應身、釋迦を佛とし、地藏を上首となすと傳ふ。敎祖信行は三藏敎内に於いて獨り此の經を釋して對根應病を說けるは、十輪依義立名二卷、又は十輪略抄一卷ありしに見て炳かなり。以て十輪經は敎祖以來三階敎に於ける根本聖典たるを語れり。

更に淨土敎より三階敎を批議せし慈恩撰、西方要決并に善道、道鏡共集、念佛鏡に三階敎を地藏敎となせるもの是れ其の四なり。西方要決第十一、會釋三階行者五種少疑の第五疑に、三階敎意を叙へて、「方今之際去聖時遙、下品凡愚正合レ禮二懺地藏菩薩一、當今有レ緣、理可三專稱並念二三寶一」とせり。三階敎は淨土敎を以て別法となし、第二階上根の修行に適するも、末法濁惡時の機根に當らずとなせり。乃ち去聖遙遠の時、下品凡愚の禮懺は、須らく悲願、餘菩薩に超過せる地藏菩薩に在るべし。若し否らずむば下機の上修は法根の不當を致し、徒らに障道受苦に終るべきを以てなりとは、三階敎が淨土敎に加へし疑問の要領とす。要決は五經を引いて其の所說の失當を釋し、「地藏弘願惡趣救生、彌陀大悲十念濟物、不レ求二淨土一恐落二三塗一、念二地藏名一苦々望レ救」と揶揄せり。兩者の論議其の孰れを正しとするも、本書撰述の當時、三階敎が特に地藏禮懺を勸說せしや秋毫疑ひなし。念佛鏡、第十釋衆疑惑門中、一念佛對三階門にも、三階敎の地藏敎たりし實證を存せり。

西方要決は初唐の三階敎が地藏禮懺を勸說せしことを傳へ、今又念佛鏡は晩唐の三階敎が同じく地藏信仰を皷吹せしことを記せり。是等の諸點を瞥見して、先づ直に三階敎と十輪經、又從つて三階敎との關係淺からさりしを推測し得べし。但し十輪經は三階敎以來の所依經たりしも、三階敎普法の敎義は別尊地藏の偏信を認容するを得ず。現に三階敎の勸行式たる七階佛名中に全然其の名を闕き、現存三階敎籍中、燉煌出土本、三階佛法卷

二に、若爲二一乘世界、佛在世一乘衆生、最大好世界、好時好衆生一、起レ教即常樂我淨、諸佛菩薩、盧舍那佛釋迦牟尼佛、毘盧遮那佛普賢菩薩摩訶薩爲二上首一等令レ學レ之（中略）若爲二五濁諸惡世界、佛滅度後空見有見衆生、最大惡世界、惡時惡衆生一、起レ教即苦無常無我不淨、諸佛菩薩、釋迦牟尼佛地藏菩薩摩訶薩爲二上首等一合レ學レ之」とあるが如きは上述、神昉の所說に併行せるも、一般に現存三階宗書中に在りて其の信仰を叙することと極めて稀なるを以てなり。按ずるに三階教と地藏信仰との結合は、玄弉譯、大乘大集地藏十輪經、實叉難陀譯、地藏菩薩本願經の流行に伴ひ、元と昉法師等に濫觴し、初唐より中唐を經て漸く鞏固となりしものゝ如し。即ち初期の三階教は專ら唯だ十輪經に據れり。

三階教所依經典中、概言するに、華嚴、法華、維摩、勝鬘、楞伽は第三階佛法に普法の教義を與へ、月藏、摩耶、迦葉、摩訶衍、佛藏諸經は三階分階に末法の經證を供せり。而して此の兩者を一經に兼有するものは十輪と涅槃となり。三階佛法四卷劈頭、立教開宗の宣言を始め、第一大段有空見衆生の多少分齊、第二大段佛滅度後の時節分齊、其の他、六階機根、行法行王、廿四段佛法（第十一、十二、十五、十八、二十）、十七異名等、悉く皆十輪經を引用せり。寧ろ主要なる三階教籍にして、全く十輪經を引用せざる章節極めて罕なりと言ふを當れりとす。而して初期の三階教籍は唐譯未だ出でざりしを以て偏に北涼失譯に依れり。

第三階機の經證たる北涼十輪經の、「邪見成就衆生」、「顚倒衆生」（有顚倒見者）、「行壞體壞衆生」、「無慚愧僧」、「於二佛法中一亦名二死尸一」、「彼非二我弟子一我亦非二彼師一」、「九十五種異學外道」、「瘂羊僧」、「以驢唯狗驢」、「一切諸佛不レ能レ救」、「作二五逆四重二誹二謗正法一毀二呰賢聖一」、「旃陀羅」、「墮二阿鼻地獄一」等は三階教の慣用語にして、此の他、義當としては「非二是一切三乘根機及涅槃善根衆生一」、「莫レ問二一切善惡持戒破戒一皆悉普名二一切破戒衆生一」、「剃頭或名二染衣一或名二著袈裟僧一」を常用せり。特に三階教普法の教義に於ける佛想佛（普佛）、破戒の擁護（普敬、無依行品）、三乘の共尊（普法、有依行品）は十輪經を根據とせり。要するに末法惡時に於ける逆惡衆生の救濟を說く地藏教は悉く第三階佛法の主張に對應せり。惟ふに、內に在りては三階佛法卷二幷に神昉の十輪經鈔に穢土に於ける佛は釋迦、菩薩は地藏となし、外に在りては西方要決幷に念佛鏡が三階師の地藏尊崇を傳ふるは、倶に唐代に於ける其の信仰の盛行に併行して、三階教も亦之を鼓吹せしことを示せり。

三、大乘大集地藏十輪經

十輪經は治國平天下の十種の王輪に比して、十佛輪によりて十惡業を轉ずべきを主說せるに由りて此の經題出づ。北涼失譯、大方廣十輪經は十五品八卷より成り、玄奘譯、大乘大集地藏十輪經は八品十卷より成り、前後同本異譯なりと雖も、廣略少しく異れり。隋代三階興敎當時信行幷にその門下の依用せし十輪經は固より北涼失譯八卷本なりしが、唐に及んで玄奘の異譯成るや恐らく三階師たりし神昉は經序を附して深く尊信の情を表せり。前述の大乘昉師撰玄奘譯十輪經の經序に新舊の兩本を對照して「比二諸舊本一、舊本已有今更詳明、舊本所レ無斯文具載」と云へり。新譯は品數を減ぜるも卷數を增し、以て舊譯の缺略を補へり。左に舊新を合せて經の要旨を摘記すべし。

佛、佉羅帝耶山に在りて月藏經を說き已るや、地藏菩薩、聲聞像を現じ南方より來りて此の集會に加はる。仍て地藏の往因を說きその無量功德を讃す（序品第一）。次いで地藏は偈を以て佛に問ふ。云何か五濁世に於いて佛輪を轉ずべきかと。佛、灌頂王の十輪に喩へて廣く十種の佛輪（十力）によりて能く衆生の十惡業輪を轉ぜしむべきを說く（十輪品第二）。次いで天藏大梵の請問によりて二種の依止十事（無依行法）の惡行を示し、此等惡行の一行あるも禪を完うするを得ず。又三乘を成ぜざるを宣ぶ。又凡て出家に對し十種勝想を作すべきを說き、破戒のものも尙淸淨外道に勝るを以て、國王大臣と雖も非理に侵害すべからざるを主張し、五無間罪、四根本罪、謗三寶罪（法と人にて二種）の十一種を犯すものは佛弟子に非ず又墮無間業たるを示す。更に優波離の問に答へて、惡行比丘に對する俗人の譏呵に關する十非法、十非人を擧ぐ。茲に於いてか、地藏は末世救濟の本願に因りて、末世に十惡輪あるを說き、國王大臣等、惡比丘を守護して反つて淨衆を惱害し、持戒の比丘を毀罵する等、墮無間罪の非法を列擧し、破戒無戒等しく辱害すべからざるを說けり。乃ち旃陀羅に等しき刹利、輔相、婆羅門、居士と眞善のそれ等とを對照し、象王羅刹等の袈裟を尊重せる因緣を擧げて、破戒僧を辱害するを戒しめ、刹利、旃陀羅等の十輪罪を擧ぐ。又更に眞善の國王、大臣、婆羅門、居士、長者が佛法と比丘とを守護するは、自然に十惡業輪を離れ國土安穩を得べきを說き（無依行品第三）、金剛藏のために十種の補特伽羅を說き、破戒は佛弟子に非ざるも聖賢の幢相あるを以て辱害すべからざると、三乘は幷に是れ如來度生の方便なるを以て、縱令、大乘を修すと雖も、他の二を廢すべからざることを主張し、三乘共通の十有依行を說き、

佛は衆生の根に隨つて三乘法を說き、持戒、護法、平等によりて、一切を安樂にするを大乘の眞義となせり（有依行品第四）。次に懺悔と正見とを說き、法忍を得ば王位に卽くを得べく、又十善を行じ三寶を信ぜば王たるべく、否らざれば墮獄の因たるを擧げて、正法治化の理想を說き（懺悔品第五）、十善業道を菩薩の十輪となして、廣く因果の利益を說き（善業道品第六）、瞋恚邪見等の十輪を遠離すべく、菩薩の六度幷に善巧、大慈、大悲、堅固の大甲冑輪は一切の聲聞緣覺の爲に大福田たるを詳說し（福田相品第七）、終りに會衆各各法眼を得、佛は此の法を以て虛空藏に付囑す（獲益囑累品第八）。以上を一經の本末となす。

本書國譯十輪經は唐永徽二年（西紀六五一）、玄奘の譯出にかかり、北涼失譯の後出たり。道宣は內典錄九、擧要轉讀錄に新舊二譯を擧げて「二本大同」といへり。今舊新二譯各品を對照するに、大略、唐譯の初二品は涼譯の初四品を含み、唐譯の第三品は涼譯の第五第六兩品に當り、唐譯の第四品は涼譯の第七第八兩品を收め、唐譯の第五第六兩品は涼譯の第九品に當り、唐譯の第七第八兩品は涼譯の第十品以下に當る。

古來本經の章疏として上述、三階教籍三部の外、東域傳燈目錄、諸宗章疏錄等に唐靖邁の八卷疏、本邦護命の一卷略疏等を錄せるも今傳はらず。

四、地藏菩薩本願經

于闐僧、實叉難陀 Śaksānanda が證聖元年（西紀六九五）より長安四年（七〇四）間の譯出にかかり、二卷十三品より成る。地藏尊の本願因緣幷に現當兩益を主說し、十輪經と共に地藏敎中の重要經典たり。十三品中、先づ初めに六道衆生救護の大願とその本生中に孝順の一婆羅女として邪見の母を生天せしめし往因を敍し（忉利天宮品第一）、次に分身地藏の來集幷に釋迦佛の後、彌勒の出世に至る中間に在りて衆生敎化の付囑を受けしことを說き（分身集會品第二）、次に無間地獄の苦相とその業因とを擧げ（觀衆生業緣品第三）、次に地藏の本生中、國王として菩薩たらんことを發心し幷に光目女としてその母を救ひ、兼ねて惡道衆生成佛の誓願を立てしを述べ（閻浮衆生業感品第四）、以下、地獄の名稱及び惡報（地獄名號品第五）、地藏尊の功德讚嘆（如來讚嘆品第六）、亡者への追善供養（利益存亡品第七）、閻羅王、鬼王の讚嘆及び主命鬼王の誓願（閻羅王衆讚嘆品第八）、過去諸佛稱名の功德（稱佛名號品第九）、布施の多少と功德との關係（較量布施功德緣品第十）、地神の護法と地藏菩薩禮讚の十種功德（地神護法品第十一）、地藏菩薩見聞の利益（見聞利益品第十二）、未來世人天救

護の付囑及び地藏尊供養の利益（囑累人天品第十三）等を細說す。第六品に本經の三名を擧げて、地藏本願、地藏本行、地藏本誓力とせり。

本經の章疏としては清代の靈椉に地藏本願經綸貫一卷幷に科註六卷あり、前者は釋題の玄談にして、後者は經文の註解たり。地藏本願經科文一卷は靈椉の門人、岳玄が科註より抄出せる科圖なり。本邦には眞常撰、地藏菩薩本願經手鑑六卷（貞享三年刊）、崇琛述、地藏菩薩本願經倭漢兩注撮要合解五卷（正德二年刊）、空性述、地藏本願經集要記鈔二卷等あり。尙ほ講苑一卷寫本として傳へらる。

五、其他の經典及び儀軌

百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚一卷

北天竺婆羅門種、不空 Amoghavajra が、唐天寶五年（西紀七四六）より大曆九年（西紀七七四）間の譯出にかかり、地藏本門法身讚、地藏菩薩請問法身讚、地藏法身讚とも稱せらる。五言一百二十八偈四百九十六句と附偈七言一偈四句とより成り、法身、法界、菩提、涅槃、十地、等覺、妙覺の功德を讚述す。經題に依れば大集部の所屬たるが如きも內容は寧ろ楞伽系若くは瑜伽系に親しく、特に密敎思想によりて法身觀を說く。

隋代の僞經たる像法決疑經の一異本に瑜伽法鏡經あり、開元錄にその由來を詳記して、景龍元年（西紀七〇七）三階僧師利の僞造とせり。卽ち瑜伽法鏡經は佛臨涅槃記法住經、地藏菩薩讚歎法身觀行品の兩者の各々一部を取つて像法決疑經の冠首に加へしものとなす。然るにスタイン氏蒐集敦煌出土本中に、示所犯者瑜伽法鏡經と題する寫本あり、本寫本に其の後部を殘せる地藏菩薩讚歎法身觀行品は其の典據を明かにせざるも、恐らく此百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚を底本として作製せしものならん。但し請問法身讚は五言頌にして法鏡經は七言頌なるを異とするも、文相略ぼ符合せり。此の中、佛臨涅槃記法住經は令法久住の意義によりて之を採り、地藏菩薩讚歎法身觀行品は三階敎が特に十輪經と地藏菩薩とを尊崇せしが故に、地藏菩薩關係の法身觀行品を取りて舊經に增加し、仍て以て僞作を敢へてせしもの〻如し。詳細は拙著、三階敎之研究、餘錄に讓る。

佛說地藏菩薩陀羅尼經一卷

雜密に屬し、地藏菩薩の誓願、功德幷に陀羅尼を說く。その誓願中に、「我從㆓本來㆒捨㆓身命㆒、爲㆑利㆓衆生㆒無㆓貪惜㆒、常爲㆑法故而捨㆓身、皮骨肉血㆒施㆓衆生㆒」とあり、專ら末世濁惡の救濟を說く。菩薩の名號を稱し菩薩を供養するものあれば、速かに長壽、無病等の所願を滿足せしめ乃至涅槃に入らしむることを叙ぶ。陀羅

尼は六十三句の漢音譯にて、經末にその功德を擧ぐ。

地藏菩薩儀軌一卷

唐輸婆迦羅 Śubhakara（善無畏）が貞觀十一年（西紀六三七）より開元二十三年（西紀七三五）間の譯出にして、初めに、大中小三神咒を擧げ、次に畫像法、印咒、普供養印、總說總印、請讃印、終りに成就法として護摩（十七種）を說く。

延命地藏菩薩經

延命利生の菩薩としての地藏尊の功德を說けるもの。唐不空譯と稱せらるるも、經錄にその名を缺く。亮汰の玄談に、貞元錄に載せず、又八家祕錄に記さざるを以て「蓋由行藏在時也」とせり。寂照堂谷響集二に、本經中、日本天狗を擧ぐるを指摘せり。恐らくは日本撰述か。本經には延寶六年（西紀一六七八）、亮汰撰、延命地藏經鈔二卷、元祿十年（西紀一六九七）刊、必夢述、直談鈔六卷、嘉永七年（西紀一八五四）、蓬室有常著、松川半山畫、延命地藏經和訓圖會一卷の外、淨慧述、和談鈔五卷、近くは明治三十三年刊、來馬琢道氏著、講義一卷等あり。

佛說地藏菩薩發心因緣十王經

本經は主として人の死後、十王廳經過の次第を說き、兼ねて地藏菩薩の發心因緣、十四願、六種の名字等を說けるものにて、その所說は深く我が民間信仰に影響せり。然るに續藏經所收十王藏に二部（續藏第二編乙二三）あり。倶に成都府大聖慈寺沙門、藏川述として撰者の名を出せり。二部の一は地藏菩薩發心因緣十王經（佛說十王經）にして、經尾に宋仁宗の天聖十年（西紀一〇三二）十一月、原孚の本末記を附し、嚴佛調傳に附會して、梵本に依據せし旨を記せり。但し本經は用語體裁より見て、本邦製作の疑ひあり、又本經の十王には一々本地佛を配せるを以て、之に基きて本邦流傳の十三佛を生ぜり（寂照堂谷響集六、十王經并に十三佛の項下參照）。他は佛說預修十王生七經、具には佛說閻羅王授記四衆逆修七往生淨土經といひ、首題の下、撰號の前に、「謹啓諷閻羅王預修生七往生淨土經、誓勸有緣、以五會啓經入讃、念阿彌陀佛」と標して、彌陀地藏兩者の信仰を結合し、經尾に明憲宗、成化五年（西紀一四六九）の經記を附せり。而して兩部倶に譯經に非ず人撰なり。然るにスタイン氏蒐集燉煌出土寫本中に數多の閻羅王授記四衆逆修生七往生淨土經ありて、中には十王の圖畫を挿入せるものあり（圖畫十一面、尾題、佛說十王經一卷）。釋門正統に描畫は唐、張果老仙の畫幀に始まるとなせり。恐らく唐末五代の頃の流行か。十王とは秦廣王、初江王、宋帝王、五官王、閻羅王、變成

王、太山王、平等王、都市王、五道輪轉王をいふ。十王中、閻羅王を除く以外は佛教正典に見ざる名稱にして、道教幷に支那の俗信に出づ。傳へ云ふ、唐道明和尚親しく冥界に入りて之を具述すと（釋門正統四）。但し道明の傳明かならず。摩尼教籍・下部讃の譯者に道明あるも更に攷ふべし。本邦に於ける十王信仰は地藏尊の信仰と平行し、平安末期以後の流行とすべし。日蓮上人の十王讃嘆鈔、存覺師の淨土見聞集等に十王の信仰を傳ふ。本經には亡者が冥界に入り、十王廳を過ぐるに一七日より七七日、百日、一年、三年等の十忌辰を配して、生前死後の齋供（十王供）を勸說せり。地藏十齋日に關しては、拙著、鳴沙餘韻解說（二三三頁）、大乘四齋日を參酌せよ。

大要は經文に讓るも、本文中、法華、涅槃、遺教、孔雀の諸經名あり、六識、八識、九識の諸名目あり、更に道教思想を混入せり。本經の註釋として禪珍の選註七卷、了意の直談十三卷、叶阿の科註十卷、實藏の講義三卷等世に行はる。

以上の外、地藏菩薩關係の經幷に軌あり、唐金剛智譯、地藏菩薩念誦儀軌一卷、峚圖大道心驅策法一卷、占察善惡業道經、蓮華三昧經（六地藏）等あり。今現存せざるも、僞經須彌四域經中、「地藏菩薩爲二神農一」の文ありしと傳ふ。此の他、燉煌出土スタイン寫本に佛說地藏菩薩經あり。地藏信仰と極樂往生とを聯結せり。經文中、地藏菩薩、地獄の苦惱を視るに忍びず。「卽從二南方一來二到地獄中一與二閻羅王一共二同一處一別床而坐、有二四種因緣一、一者恐二閻羅王斷罪不平一、二者恐二文案交錯一、三者恐二來合死者一、四者恐下受レ罪已不上出二地獄池邊一」等と云へり。

覺禪抄、地藏法の下に祕錄を引き、「十輪經と本願經とは偏に本誓を說いて入修儀則無く、軌の中には纔に形像根本明等を說けども、行法を明かさず。陀羅尼集經に二印一明あるも、持誦法を委うせず。大日經具緣品の中に、略して形容色物座を說き、轉字輪品に又形色印種子を說き、藏品の中に眞言を說く。密印品の中に又印眞言を說く。祕密曼陀羅品の中に曼陀羅相を說く」（大日本佛教全書本一四二五）と云へり。卽ち地藏諸經中、顯密の相違あるを指示せり。

×　　×　　×

本書所收中、十輪經一部十卷は文學士中村康隆氏により、本願經以下六部七卷は文學士加藤章一氏によりて、それぞれ國譯幷に脚註を附せられたり。居常雜緣に妨げられて精讀考證の暇なかりしも、本書の成りしは全く兩氏の努力の賚して深く感謝の意を表す。

×　　×　　×

尙ほ本解題中、便宜上、拙著、三階教之研究第二部第六の三、「三階敎と地

藏教」（六三八―六五八）より引用せし箇所少からず。併せて篇末に添記す。

昭和十一年一月

譯者　矢吹慶輝　識

大乘大集地藏十輪經序

昔時、[一]高山を旭照して[二]天宮に[三]一乘の駕に御し、原隰に流暉して[四]鹿苑に四諦の輪を轉ず。復た發軫分達すと雖も、而も塗に亂轍無し。一雲普く洽して卉木各ゝ茂り、[五]鶴林色を變じて慧日光りを寢めしより、達學電謝して以て息肩し、眞人長く往いて[六]寂滅す。且つ前賢の述聖、各をして解せしめ難く、後進の固陋、更に親承を異にす。況んや[七]正法既に往いて、久しく[八]像末に當り、定慧と福德との時を異にし、醇化と澆風との運を殊にするをや。然れば則ち一乘三乘の駕、安んぞ以て其の轍を同じうすべけんや。若し時來ること數に在り棨性違ふこと勿きを識らば、然るの後、以て沈痾の宿疾を淸うし、[九]權實の同歸を體すべし。[一〇]十輪經は則ち此土末法の敎なり。何を以てか之を明さん。佛、末法惡時聖を去ること寖く遠きを以て、敗根之を坏器に比し、空見、喩を生盲に借る。五欲に沈醉するは石田の不苗に類し、十惡を放肆するは臭身の垢穢に似たり。故に此の經、能く臭身を濯ぎ盲目を開き坏器を陶し石田を沃す。是の以に菩薩、[一一]聲聞の形を示し、象王、出家の服を敬し、此の幢相を以て彼の無慚を化し、[一二]二事の護持を顯し、三乘の道果を成ず。故に經に曰く、此土三寶の種性をして威德熾盛にして久しく世に住せしめんが爲めの故に、と。又曰く、一切諸の衆生の類猶し金剛の如き堅固の煩惱を摧滅す、と。然れば則ち三寶久住し、顯敎末法に傳り、金剛煩惱の驗障一乘に異らん乎。尋ぬるに[一四]舊經の來ること年代蓋し久し。但だ譜第の遺目人に傳へて記を失し、翻譯の主旣に往き、來茲の日聞くこと罕なり。[一五]我に同じき者は魄を眞彩に失ひ、我に異なる者は笑を淡味に大いにす。謬ちては千里を以てす、能く悲しむこと勿ん乎。夫れ、極曜、天を文るも或は薄霧に蔽虧せられ、至言物を[一六]範ぶるも時に邪辯に淪滯せらる。鍼石一び違へば死生の巨痛

※宋・元・明三本、宮內省圖書寮本に從つて、第一卷の前に出す。麗本には第十卷の後に存す。

【一】日出でて先づ高山を照らす華嚴の說法を指す。性起品に出づ。この以下、高山、幽谷、平地を照らす三照(四照)の經說に基き、華嚴・阿含の順序を經て、涅槃に至る佛一代の說法を擧ぐ。

【二】七處八會中の天上四處をいふ。

【三】華嚴別敎一乘のこと。

【四】鹿野苑 Mṛga-dāva 阿含の說處。苑字、宋・元・明三本、菀に作る。

【五】佛の入滅前、涅槃の說法を指す。鶴字、麗本には鵠、宋・元二本並に宮內省本には涸に作るも、いまは明本に從つて鶴林とす。沙羅樹林なり。佛涅槃に當り、「其林變白、猶如レ鶴」(涅槃經序品)といふ。轉じて鵠林ともいふ。

【六】いま、宋・元・明三本に依る。麗本には、寂慮に作る。

【七】佛滅後、正像末三時中像法末に當るの意。

【八】元本、痼字を涸に作る。

【九】權敎及び實敎。如來の方便にて初めに三乘（聲聞緣覺菩薩を分かつこと）の敎を

あり。纖毫も錯つて學ばば昇墜の異塗あり。其れ易かる可けん乎。屬に三藏玄奘法師と云ふ者あり。果して始は架を東朝に學び、末は乃ち道を西域に訪ふ。一生の性命を輕んじ、數萬の艱難を涉り、果して能く溟渤を竭して以て亡珠を索む。龍宮を蹈んで秘藏を窮め、法流を智海に呑んで[一七]瓶瀉して遺すこと無し。道氣を檀林に受け、香風更に馥し。[一八]因明の三量、[一九]聲論の八音に至るまで、[二〇]立破の源を究め、[二一]字轉の本を窮めずといふこと莫し。如來の所說、菩薩の所傳、已來未來一朝にして備に集る。[二二]防、薄業を以て[二三]眞應に偶はず、幸に達聖、亂を未兆に制し、後賢、燈を既夕に傳ふ。遂に定死をして命を餘さしめ、魂を法樂に反さんことを冀ふ。昏野方に迷ひ、轅を覺道に還さんことを期す。是に於て翰を染め紙を操り、外慮を杜絕し至敎を務詳して、彼の紛執疇[二四]諸を釋す。[二五]法主重ねて梵文を啓く。粤に永徽二年歲辛亥に次る正月乙未を以てし、其の年十二月甲寅を盡して翻譯始畢す。凡そ八品十卷なり。今の翻する所を以て諸を[二六]舊本に比するに、舊本に已に有するを今更に明かにし、舊本に無き所を斯の文に具に載す。是に於て處座[二七]抗談の者、法雷を響して辯を吐き、靜慮通微の者、玄波を鏡て心を照す。頂火暴腹の徒、螢暉を慧日に戢め、喜足謙懷の侶、高節を淸風に騰ぐ矣。[二八]前佛既に往き、[二九]後佛未だ興らず、庶くは、此の致、長く懸つて永く來者を濟はんことを。弘道の士、如何ぞ思ふことと勿んや。

*（大乘昉師撰）

開くを權敎とし、後に一乘（三乘を分かたぬこと）の妙理を示すを實敎といふ。

【二〇】 この經序は暗に三階佛法の宗意を顯はし、十輪經を以て末法の對根起行と見たり。解題參照。

【二一】 菩薩は地藏菩薩。普通に聲聞形相は地藏菩薩の特相。次の幢相は詳しくは解脫幢相といひ袈裟衣の姿。

【二二】 世間事と出世間事。

【二三】 土字、宋本、乜に作る。

【二四】 北涼失譯「大方廣十輪經」八卷を指す。玄奘譯以前の舊譯經。

【二五】 以下この十輪經を輕んじて淡味等となすを誡しむ。

【二六】 範字、宋・元・明三本及び宮內省本に依る。麗本軌に作る。次句の邪辯を麗本には廣辯に作る、いま、三本及び宮本に依る。

【二七】 師徒相承を、瓶の水をうつすが如きにたとふ。相傳の意。滿字、明本に依る。他本にては寫に作る。

【一八】 因明は聲明、內明、醫方明・工巧明と共に五明の一。梵名、醯都費陀 Hetuvidyā, 論理に關する學科なり。因明の三量とは、所謂る
（1） Pratyakṣa 現量
（2） Anumāna 比量
（3） Āgama 聖教量
の三つの智源をいふ。

【一九】 因明に對していふ、五明の一なる聲明（Śabdavidyā 攝拖苾馱）即ち文章聲字に關する學科文法學。聲論とは聲明記論（Vyākaraṇa即ち毘伽羅論）のこと。聲論の八音とは所謂る八轉聲、または八囀聲のこと。梵語に於ける八種の語格をいふ。
（1） Nirdeśa 體聲、汎說聲
（2） Upadeśana業聲、所說聲
（3） Kartṛkāraṇa 具聲
（4） Saṁpradāna 所爲聲、所與聲
（5） Apādāna 所從聲
（6） Svāmivacana 所屬聲
（7） Saṁnidhānārtha 所依聲
所於聲
（8） Āmantraṇa 呼聲
の所謂る（1）體格（主格）（2）作業格（目的格、賓格）（3）作

具格（具格）（4）所爲格（與格）（5）所從格（奪格）（6）所屬格（屬格、持格）（7）所依格（止格方位格）（8）呼召格（呼格）の八格なり、格に依つて語尾變化を來すは、前七なる故に、またSapta vibhaktaya七轉聲七例句、七言論句、七分別言などとも稱す。此の八音に、各一言聲二言聲多言聲の三種の別あり、更に此の二十四聲に男聲女聲中聲の性の三別あり、總じて七十二聲の語尾變化、字轉の法あるなり。

【三〇】因明に於ける、能立と能破。正しき宗因喩の三支に依つて自己の主張を立論し、亦た對手の過誤を論破すること。

【三一】聲論にいふ、八轉聲に於ける、字轉。即ち語尾變化の法則なり。

【三二】法海寺沙門、神昉法師。

【三三】眞佛應佛を指す。次句未兆、麗本には未肇、宋本及び宮本には米兆に作る。いま元・明二本に依る。

【三四】諸字三本及び宮本、春に作る。

【三五】玄奘をいふ。

【三六】北涼失譯「大方廣十輪經」八卷を指す。

【三七】元・明二本に依る。他本伉談に作る。

【三八】釋尊。彌勒佛。

※縮藏の目錄に依りて加ふ。

大乘大集地藏十輪經

卷[一]の第一

[二]三藏法師玄奘詔を奉じて譯す

序品[三]第一

※是の如く我れ聞きき。一時、[四]薄伽梵、[五]佉羅帝耶山の諸の[六]牟尼仙所依の住處に在して[六]大苾芻衆と倶なりき。謂はく過數量の大聲聞僧なり。復た菩薩摩訶薩衆有り。謂はく過數量の大菩薩僧なり。[七]月藏を說き已る。

爾の時、南方より[八]大香雲來つて大香雨を雨し、大花雲來つて大花雨を雨し、大妙殊麗寶飾雲來つて大殊麗妙寶飾雨を雨し、大妙鮮潔衣服雲來つて大鮮潔妙衣服雨を雨す。是の諸の雲雨、其の山の諸牟尼仙所依の住處に充遍す。諸の香・花・寶飾・衣服より種種なる百千微妙の大法音聲を演出す。謂はく、歸敬三寶聲・受持學處聲・忍辱柔和聲・精進勇猛聲・降伏四魔聲・趣入智慧聲・廣大名稱遍滿三界聲・勸修殊勝念定總持聲・空無相無願聲・厭離貪欲聲・色如聚沫聲・受如浮抱聲・想如陽焰聲・行如芭蕉聲・識如幻事聲・無常聲・苦聲・無我聲・空聲・慚愧聲・遠離聲・護念聲・慈悲喜捨聲・證得諸法聲・生天涅槃聲・趣向三乘聲・轉大法輪聲・雨大法雨聲・成[九]熟有情聲・度三惡趣聲・修治圓滿六到彼岸聲・善巧方便聲・趣入十地聲・遊戲神通聲・遊戲清淨無上大乘聲・不退轉地聲・無生法忍聲・灌頂受位聲・趣入一切諸佛大海聲なり。

【一】 麗本には卷字無く第一の二字の前に序品の二字を加ふ。いま宋・元・明三本等に依る。

【二】 明本、唐字を三藏の上に附加す。以下同之。

【三】 麗本、此の行無し。いま、三本並に宮內省圖書寮本に依る。以下第一卷、北凉本の卷第一「序品第一」並卷第二「諸天女問四大品第二」に當る。

※地藏菩薩の奇端

【四】 Bhagavat 世尊。

【五】 Kharādiya 佉羅提耶、佉羅帝、佉羅陀、伽羅陀等に作る。山の名。譯、驢林山。十寶山、七金山の一。曼譚抄に「摩竭陀國正中城名二伽耶一從二此城一南方去三十五里二有レ山、名二佉羅提一高九百三十丈廣七百二十丈、以二七寶一爲レ體、彼山廣度二一切衆生一」と見ゆ。

【六】 牟尼 Muni は寂默と譯す。大苾芻衆は大比丘衆の新譯。

【七】 「大方等大集月藏經、」即ち「大方等大集經月藏分」を指す。

【八】 香・花莊飾・衣服の四事

爾の時、一切諸來の大衆、咸く是の如きの種々の雲雨の見、亦た是の如きの諸の法音聲を聞いて、意の所樂に隨つて、各ゝ其の身の種種なる香・花・寶飾・衣服にて莊嚴せらるるを見、又各自に兩手の掌中に一〇如意珠を持し、是の一一の如意珠の中より種種の寶を雨し、復た一一の如意珠の中より諸の光明を放つを見る。光明に因るが故に、一一の有情皆な十方一一殑伽沙等の諸佛の世界を見、又光明に因つて、諸の佛土の一一の世尊に無量の衆會の恭敬し圍遶するを見、復た光明に因つて、諸の佛土の一切の有情を見る。若し病有らん者、此の光明に照觸せらるるに一二因つて衆病除こり愈ゆ。諸の應に殺さるべきの及び囚繫の者、光明照すが故に皆な解脫を得、諸の身・一三語・意の麁重穢濁なるもの、光に因つて、皆な輕軟清淨なることを得、諸の飢渴の者も亦た皆な飽滿し、諸の種種の刑罰に逼切せらるるもの、光明照すが故に、皆な憂苦を離れ、諸の衣服、寶飾、珍財に少くるもの、光明照すが故に、念に隨つて皆な足る。若し諸の有情、一四殺生を樂欲し、乃至、或は邪見を樂欲すること有らんに、此の光明に照觸せらるるに由つて、皆な悉く殺生を遠離せんと樂欲し、乃至、邪見を遠離せんと樂欲す。若し諸の有情、種種の一五求不得苦に於て逼切せらると爲んに、光明照すが故に、願に隨つて皆な得。又光明に因つて諸の佛土を見るに、一切の有情の受くる所の衆苦休息せずと云ふこと無く、皆な悉く歡娛して諸の妙樂を受く。又是の如きの諸の佛土の中を見るに、此の光明に照觸せらるるに由つて、一切の昬雲、塵霧、烈風、暴雨、不善の音聲、及び諸の臭穢、苦辛の惡味、惡觸の恐怖を遠離し、一切の一六邪業、邪語、邪意、一七邪歸を遠離し、寒からず熱からず、安靜坦然として、地平かなること掌の如く、諸の妙樂の具、其の中に充滿す。

爾の時、衆會の其の身、欻然たり。地界、增强堅重にして擧げ難し。既に斯の瑞を覩て、咸悉く驚疑す。「何の因、何の緣にてか、此の相を現ずる」と。衆會の中に於て、一八天帝釋有り。無垢生と名く。薄伽梵を去ること遠からずして坐す。即ち座より起つて世尊を頂禮し、掌を合せて佛に向つて頌を

供養をあぐ。

【九】 熟字、正倉院聖語藏本には、就に作る。

【一〇】 Cintāmaṇi 如意寶珠、如意摩尼ともいふ。寶珠より種々の望む所のものを出すこと意の如くなるを以て如意と名づく。龍王或は摩竭魚の腦中より出づと、いはるゝ寶珠なり。

【一一】 Gaṅgā-nandī-vāluka 恒河沙。ガンジス河の砂の數を指し、無數なるさまを示す。

【一二】 因字。宮內省本、正倉院聖語藏本、由に作る。

【一三】 語字。三本及び宮本、諸に作る。

【一四】 十惡業を擧ぐるなり。即ち、(1)殺生(2)偷盜(新譯にては不與取)(3)邪淫の身三と(4)妄語(虛誑語)(5)兩舌(離間語)(6)惡口(麁惡語)(7)倚語(雜穢語)の語四と、(8)貪欲(9)瞋恚(10)邪見の意三との、身語意の十不善業なり。

【一五】 八苦の一。求めて得ざる苦。

【一六】 邪惡なる身業、口業、意業なり。

【一七】 惡しき師と敎と信とへの歸依。

【一八】 Śakra devānām Indra

以て問うて曰く。

諦語と諦見を具へ、　諦善にして牟尼に住し、
普く衆の爲に、　諦究竟の堅法を弘宣して、
諸の有情の類をして、　苦及び苦の因を滅せしむ。
何の縁にてぞ此の中にて、　諸の雲雨等を現じて、
衆を擧げて歡悅して、　咸て淨信の心を生じ、
皆大乘に發趣して、　疑を度し[19]實見を生ぜしむる。
天人大衆の身、　地界ますます堅重にして、
自ら擧ぐるに勝ふること能はず。　此の相、何の縁かあつて、
兩手に皆な珠を現じて、　衆寶を雨して光を放ち、
十方を照して罪を除き、　苦を息めて安樂を獲せしむる。
[20]導師、復た何の因にてぞ、　衆を擧げて皆て
種種の香鬘等もて、　各各自ら身を嚴るを見せしむる。
[21]天人普く猶豫して、　何の因縁といふことを測らず。
誰ぞあつて將に來らんと欲し、　此の神通力を現ぜる。
是の佛・菩薩の爲め、　[22]梵・[23]魔・[24]釋・[25]天の爲め、
唯願はくは、大導師、　速かに衆の爲に宣說したまへ。

爾の時、世尊、無垢生天帝釋に告げて曰はく、「汝等、當に知るべし。菩薩摩訶薩有り、名づけて[26]地藏と曰ふ。已に無量無數[27]大劫[28]五濁惡時無佛世界に於て、有情を成熟す。今、[29]八十百千[30]那庾多[31]頻跋羅の菩薩と倶なりき。此に來つて我を

釋迦提桓因陀羅、釋迦提婆因達羅。釋提桓因と略稱し、忉利天の主。帝釋天ともいふ。釋迦姓の天帝の意。

【一九】眞實の認識。三法印、四諦、十二因緣等に就いて眞實の見解、體認を有つこと。

【二〇】Nāyaka 佛の異名

【二一】天趣と人趣なり。諸天世人といふに同じ。

【二二】Brahmā 梵天、梵王。また色界諸天を指す。

【二三】魔羅 Māra 他化自在天主。欲界諸天を指す。

【二四】帝釋天、天帝釋の略。

【二五】Deva 提婆。六趣中の天趣。

【二六】Kṣitigarbha 解說を見よ。

【二七】成住壞空の四期を一圓するをいふ。

【二八】劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の五つ。

【二九】八百萬に等し。

【三〇】Nayuta また那由他、那術、那述に作る。數量。億に當る。

【三一】Viṁvara 頻婆羅、毘婆訶にも作る。數量。十兆に當る。

禮敬し親近し供養せんと欲するが爲の故に、大集會を觀て隨喜を生ぜんとの故に、丼に諸の眷屬と[三二]聲聞像を作し、將に此に來至せんとし、神通力を以て是の變化を現ず。是の地藏菩薩摩訶薩、無量無數不可思議殊勝の功德もて莊嚴せらるること有りて、一切世間の[三三]聲聞、[三四]獨覺の測ること能はざる所なり。此の大菩薩は、是れ諸の微妙の功德の[三五]伏藏、是れ諸の解脫珍寶の出處、是れ諸の菩薩の明淨の眼目、是れ涅槃に趣く商人の導首なり。如意珠の衆の財寶を雨ふらすが如く、希求する所に隨つて皆な滿足せしむ。諸の商人の採る所の寶渚に譬へん。是れ能く善根を生長する良田。是れ能く解脫を盛貯するの樂器。是れ妙寶の功德を出すの賢瓶。行善の者を照すことは猶し朗日の如く、失道の者を照すことは猶し明炬の如し。煩惱の熱を除くことは月の淸涼なるが如く、無足の者の得る所の車乘の如く、遠涉の者の備ふる所の資糧の如く、迷方の者の逢ふ所の示導の如く、狂亂の者の服する所の妙藥の如く、疾病の者の遇ふ所の良醫の如く、羸老の者の[三六]憑る所の几杖の如く、疲倦の者の止む所の牀座の如し。[三七]四流を渡る者には爲に橋梁と作り、[三八]彼岸に趣く者には爲に船筏と作る。是れ[三九]三善根の殊勝の果報なり、是れ[四〇]三善本の所引の[四一]等流なり。常に[四二]惠施を行ふことは輪の恒に轉ずるが如く、持戒の堅固なることは[四三]妙高山の如く、精進の壞ち難きことは金剛寶の如し。安忍の動かざることは猶し大地の如く、[四四]靜慮の深密なることは猶し秘藏の如く、[四五]等至嚴麗なることは妙花鬘の如し。智慧深廣なることは猶し大海の如く、染著するところ無きは太虛空に譬へん。妙果の近因は衆の花葉の如く、諸の外道を伏すこと師子王の如く、諸の天魔を降すことは大龍象の如く、煩惱の賊を斬ることは猶し神劍の如く、諸の諠雜を厭ふことは獨覺乘の如く、煩惱の垢を洗ふことは淸淨水の如く、能く臭穢を除くこと疾飄風の如く、衆の[四六]結縛を斷つことは利なる刀劍の如く、諸の怖畏を護ることは親の如く友の如く、諸の怨敵を防ぐことは塹の如く城の如く、諸の危難を救ふことは猶し父母の如く、諸の怯劣を藏すことは猶し叢林の若く、夏の遠行に[四七]投ずる

【三二】 聲聞像を作すことは地藏菩薩の重要な特色。
【三三】 Śrāvaka.
【三四】 Pratyekabuddha 辟支佛、緣覺。
【三五】 地藏の名は地の諸寶を伏藏するが如きに喩ふ。
【三六】 所憑几杖の中二字、三本には、凭机とし、聖語藏本には、濕机とす。
【三七】 見・欲・有・無明の四流。四漏といふも同じ。
【三八】 Pāra. 涅槃。
【三九】 不貪・不瞋・不癡の三。
【四〇】 三善根に同じ。
【四一】 因果相應なるをいふ。
【四二】 以下、惠施・持戒・精進・安忍・靜慮・智慧の六度を擧ぐ。
【四三】 須彌山 (Sumeru) の義譯名。
【四四】 Dhyāna 禪定、禪那。
【四五】 定の別名。三摩鉢底。Samāpatti 定中身心の平等安和なる位に至れるをいふ。
【四六】 結縛、臭穢、共に煩惱をいふ。
【四七】 如夏遠行投大樹。遠行は遠出にして長旅の意。投ずるは投宿の意にして樹下に息むことを云ふ。

ところの大樹の如し。熱渴の者の與に淸冷水と作り、飢乏の者の與には諸の甘果と作り、露形の者の爲には諸の衣服と作り、[四八]熱乏の者の爲には大密雲と作り、貧匱の者の爲には如意寶と作り、恐懼の者の爲には所歸依と作り、諸の稼穡の爲には甘澤雨と作り、諸の濁水の爲には[四九]月愛珠となり、諸の有情をして善根を壞せざらしめ、妙境界を現じて、衆をして欣悅せしむ。有情を勸發して慚愧を增上せしめ、福慧を求むる者には莊嚴を具せしめ、能く煩惱を除くこと吐下の藥の如く、能く亂心を攝むること[五〇]等持の境の如く、辨才の滯り無きこと水に激ふの輪の如し。[五一]事を攝して心を繫くることは[五二]妙色を觀ずるが如く、安忍の堅住なることは妙高山の如く、[五三]總持深廣なることは猶し大海の如し。[五四]神足の無礙なるは譬へば虛空の若く、一切の[五五]惑障の[五六]習氣を滅除するは猶し烈日の輕水を[五七]銷釋するが如し。常に靜慮無色正道一切智智の妙寶の洲渚に遊んで、能く無功用にして[五八]大法輪を轉ず。善男子よ。是の地藏菩薩摩訶薩、是の如き等の無量無數不可思議殊勝の功德を具へ、諸の眷屬と、此に來至せんと欲して、先づ是の如きの神通の相を現ずるなり』と。

世尊、是の地藏菩薩の諸の功德を說き已んぬ。

爾の時、地藏菩薩摩訶薩、八十百千那庾多頻跋羅の菩薩と、神通力を以て聲聞像を現じて南方より來り佛前に至つて住し、諸の眷屬と與に世尊の雙足を恭敬し頂禮して右遶すること三帀にして如來の前に在り。掌を合して立つて頌を以て讚へて曰く、

[五九]兩足尊たる導師、　慈心もて常に普く覆ひ、
安忍なること大地の如く、　遍く瞋忿の心を除き、
殊勝の相好を具して、　諸の佛國を莊嚴す。
能く諦慈悲を以て、　一切の土に充滿し、
永く諸の[六〇]愛網を絕ちて、　如實に善く安住し

【四八】旱魃
【四九】月光摩尼(Candraprabhāmaṇi)と同じか。寶珠の名。濁水中に投ずれば即ち水淸むといふ。
【五〇】定の別名、Samādhi 三摩地の譯。
【五一】外境の事緣を攝して心を一境に繫ぐること。
【五二】例へば佛身の妙色を觀ずるが如きこと。
【五三】Dhāraṇī 陀羅尼。
【五四】Ṛddhividhijñānam.神足通。如意通のこと。六神通の一。
【五五】惑・業・報・見の四障の一。貪瞋癡等の惡惑の、正道、の障蔽たるをいふ。
【五六】惑の現行と種子とを斷ずるも、尙惑の氣分ありて惑相を現ずるを習氣といふ。
【五七】銷字、聖語藏本、消に作る。
【五八】Mahādharmacakra. 轉輪王の輪に比し、その四天下を征定する如く、法王の法輪を轉じて正法國土の建設の爲五濁惡世の征討につとむるとの意で、正法の宣布、說法を轉法輪と云ふ。
【五九】兩足尊、導師ともに如來の異名。
【六〇】恩愛の絆と云ふ如し。執著、迷、煩惱のこと。

諸の清淨の國を捨てて、　染濁の衆生を度す。
[六一]本願もて穢土を攝して、　惡しき衆生を成熟し、
堅固なる[六二]正勤を起して、　久しく諸の苦行を修す。
久しく諸の苦行を修するも、　悚懼の心の生ずることを聞いて、
[六三]諸の施と戒と忍と、　及び精進と定と慧とを修して、
曾つて無量の、　佛・菩薩・聲聞に供事し、
及び諸の有情の、　飢渴病死[六四]等を濟ふ。
[六五]本と、他の有情の爲に、　自ら多くの身命を捨て、
本と、正法の爲の故に、　多くの骨血皮を捨つ。
自らの安樂を棄捨し、　諸の有情を悲愍して、
專ら諸の有情の爲に、　勤修して惑網を斷じ、
善く[六六]六根を護つて、　恒に諸欲を遠離し、
[六七]有爲の無常にして、　苦・空・無我なる性を觀ず。
諸の苦業の增長するは、　皆て貪愛が因たり、
故に先づ六根に於て、　永く諸の貪欲を斷つ。
普く有情界に於て、　常に大悲に安住し、
勝菩提を得ると雖も、　而も本願を捨てず、
諸の有情の、　逼切して衆苦に在るを見るに隨つて、
隨つて勤精進を起し、　勇猛にして而も[六八]濟拔し、
施と戒と、　忍・進・定・般若とを勤修せしめ、

【六一】佛の因位に於て發せし誓願、また根本の願。
【六二】四正勤、四正斷。既生已生の善惡を斷滅增進せしむるための精進。
【六三】六度をあぐ。
【六四】等字。麗本、者に作る。今三本等に依る。
【六五】本。本生なり。過去世に於ての意。
【六六】眼耳鼻舌身意の六官。
【六七】有爲法の常樂我淨とする妄見を照破す。
【六八】濟拔。濟度に同じ、拔は、拔苦なり。

母の一子に於けるが如く、　慈心もて而も養育す。」
本と、有情の類に於て、　常に普慈心に住す、
故に速かに菩提を證し、　無量の衆を度脫す。
本と、[六九]菩提の行を修して、　衆生の爲にせずといふこと無し。
故に今、有情に於て、　六度を捨てず。
昔、常て末世に於て、　無上菩提を求め、
今、末世の中に還つて、　速かに無上覺を成じて、
諸の惡見、　天・[七〇]龍・[七一]人・[七二]藥叉を調伏して、
能く惑を斷ずること、　金剛の如くなる聖道に安住し、
無量の有情に、　勝菩提を得るの記を授けて、
[七三]應供たる導首の、　最上の良福田を成ず。
世尊は等侶無くして、　普く諸の群生を覆ひ、
無量の大名聞、　十方界に充滿す。
是の故に、諸の菩薩、　[七四]己事を成就せんが爲めに、
咸く共に來つて、　大牟尼の足下に歸依し、
所說の妙法を聞いて、　皆な歡喜の心を生じ、
增上の正勤を起して、　菩提の行を修習し、
導師の法力に由つて、　皆な速かに菩提を證す。
故に、今者、導師、　[七五]大集未曾有なり。
十三兆の藥叉の、　恒に諸の血肉を噉ふものも、

[六九] 提字、宮內省圖書寮本には、薩に作る。

[七〇] Nāga 那迦。八部衆の一。

[七一] Manuṣya 人間。

[七二] Yakṣa 夜叉。能啖鬼、捷疾鬼などと譯す。

[七三] Arhan 阿羅漢。供養をうくるに足る人。

[七四] 己利、己證といふに同じ。自利、自證、即ち自己の解脫證菩提の事なり。北涼本には「是故一切諸菩薩、皆悉能捨於己事」に作る。

[七五] 大集會のこと。經名の大集に二意あり、大集會と大法集となり。こゝは前者の義なり。次句の十三兆、北涼本には十三億に作る。

皆な、諸の悪業を捨てて、
勝れたる總持、
永く、諸漏[77]を盡すも有り、
[78]四無量を修するも有り、
[80]四辯才を得るも有り、
[82]健行定を得るも有り、
[84]無生忍に住するも有り、
世尊の大威[85]徳は、
諸の外道、
盡くの[87]地獄・[88]傍生、
故に貞實なる有情、
今者は、[91]刀兵、
正道を迷失せる、
諸の煩惱の狂亂を度し、
故に、我れ、諸縁を捨てて、
無邊の諸の佛土の、
咸く世尊を廣讃したてまつり、
我れ、[92]遍知海の、
諸の有情を度脱するを聞いて、
曾て、無量の福を修し、

速かに大菩提に趣く。
[76]安忍及び靜慮を得るも有り、
應供・世間尊の、
[79]四攝法に住するも有り、
[81]順忍に安住するも有り、
[83]妙慧眼を得るも有り、
皆な、導師の力に由る。
衆魔怨を摧滅し、
[86]九十五の異類、
[89]餓鬼・[90]非天趣を降伏す。
咸く尊の足下に歸す。
疫病・饑饉劫を息めて、
盲冥なる諸の有情の、
皆な、寂滅の道に安んず。
來つて尊足を禮敬したてまつる。
現在の諸導師も、
聞く者は皆な此に來る。
眞實の德邊り無くして、
心歡喜して敬禮したてまつる。
今、尊足を禮したてまつるを得たり。

【七六】 Kṣanti. 忍、忍辱とも譯す。六度の一。
【七七】 漏。梵語 Āsrava 煩惱の異名。
【七八】 Catvāri-apramāṇāni四梵住、四等ともいふ。慈悲喜捨の四。無量の衆生を所縁とする佛菩薩の四德。
【七九】 Catvāri-saṃgraha-vastuni 四事攝法、四攝事四攝ともいふ。布施・愛語・利行・同事の四菩薩行。
【八〇】 Catasra pratisaṃvida 法・義・辭・樂說又は辨の四無礙の智辨。四無礙解、四無礙智、四無礙辨などといふ。
【八一】 忍の一。慧心柔軟にして能く眞理に隨順するを名けて、順忍、柔順忍と呼ぶ。
【八二】 首楞嚴三昧のこと。勇健定、健相三昧、大根本定ともいふ。佛所得の三昧の名。
【八三】 深妙なる智慧眼の意。よく諸法の空理を照觀するを慧眼と名づく、五眼の一。
【八四】 Anutpādadharmakṣanti 無生法忍。諸法の實性を觀じて無生の理に安住するもの。
【八五】 三本等、德字を力に作る。
【八六】 諸外道總じて九十五種

願はくは無量劫の中にて、　常に多くの供養を修せん。
我れ、今、世尊を學びたてまつり、　是の如きの誓願を發す。
當に此の穢土に於て、　無上の菩提を得べし。

爾の時、地藏菩薩摩訶薩、妙なる[九三]伽他を以て佛を禮讃したてまつり已つて、諸の眷屬と與に、復た無量の天の妙香花、種種の寶飾を持つて佛の上に散じ、變じて寶蓋と成して虚空の中に住らしむ。法を聽かんが爲めの故に、即ち佛の前に於て儼然として坐す。

爾の時、一切諸來の大衆、既に地藏菩薩摩訶薩を見已つて、皆な、希奇なることを獲、未曾有なることを得たり。各ゝ種種の上妙の香花、寶飾、衣服、幢幡蓋等を持して、地藏菩薩摩訶薩に散じ奉り、而して爲に供養して、皆な是の言を作さく、

『我等、今者、快く[九四]善利を得、佛の神力に因つて、親り是の如きの[九五]大士を瞻仰し、禮敬し、供養することを得たり』と。

※爾の時、衆中に菩薩摩訶薩有り、好疑問と名く。座より起つて、衣服を整理して偏へに一肩を袒ぎて、佛の雙足を禮したてまつり、右膝を地に著け、掌を合せて佛に向ひたてまつりて、佛に白して言さく、

『世尊よ。此の善男子は何れよりして來れる。所居の佛國は此を去ること遠きや近きや、何等の功善徳根を成就して世尊の種種の稱歎を蒙り、復た能く佛の不可思議功德の法悔を讃えたてまつれる、我等、昔より來た未だ曾て聞見せざるなり。唯願はくは、爲に説きたまへ』と。

世尊、告げて曰はく、

『止みね、善男子よ。是の如きの大士の功德善根は、一切世間の天人大衆の、皆な、其の量の淺深を測ること能はさるところなり。若し如來、汝が爲めに廣説することを聞かば、是の如きの大士の

ありとし、時に佛道を加へて九十六種とするもあり。今の場合は邪道のみを論ずる故に九十五種異類とす。
【八七】Naraka, Niraya 那落迦、泥犂。
【八八】明本、傍字を旁に作る傍生。梵語 Tiryagyoni. 底栗車、波戌。畜生の新譯。傍行の生類の意。
【八九】Preta 薜茘哆。(死者幽魂の義)Pitṛ 卑帝利(祖父、祖靈の意)。死者の供養なくして饑餓の苦あるを以て餓鬼と譯せるものが通例の譯語となり、六道、三惡趣の一に轉じた。
【九〇】Asura 阿修羅、阿素洛。舊に無酒と譯す。修羅道。その果報天趣に似て而も非なる故に非天趣といふ。六道の一。
【九一】中劫の末に起る小の三災を擧ぐ。
※地藏菩薩の善根功德
【九二】parijñānasāgara. 正遍智海とも呼ぶ。佛の全知、遍知の深廣なるを海に譬ふ。佛の異名。
【九三】Gāthā. 偈。諷誦、諷頌、偈頌、頌ともいふ。
【九四】善妙の利益。菩提の利益をいふ。
【九五】Mahāsattva. 摩訶薩の譯名。菩薩の美稱なり、または同じく菩薩の美稱たるMahāpuruṣa (大丈夫)の譯名。

功德善根は、一切世間の天人大衆の、皆な迷悶を生じ、或は信受せさるところならん』と。

時に、好疑問、復た重ねて請うて言はく、

『唯願はくは、如來よ、哀愍して爲めに說きたまへ』と。

佛※の言さく、

『諦に聽いて善く之を思念せよ。吾れ、當に汝が爲めに略して少分を說くべし。是の如きの大士は、無量不可思議殊勝の功德を成就し、已に能く[九六]首楞伽摩勝三摩地に安住し、善に能く[九七]如來の境界に悟入す。已に最勝無生法忍を得て、諸佛の法に於て已に自在を得て、已に能く一切智位に堪忍し、已に能く[九八]一切智海に超度し、已に能く[九九]師子奮迅幢三摩地に安住し、善に能く[一〇〇]一切智山に登上し、已に能く外道の邪論を摧伏す。一切の有情を成熟せんと欲するが爲めに、所在の佛國に悉く皆な止住す。

是の如きの大士は、隨所に諸佛の國土に止住し、隨所に諸の三摩地に安住し、無量の殊勝功德を發起して、無量の所化の有情を成[一〇一]熟す。

是の如きの大士は、是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一〇二]能發智定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして皆な悉く同じく諸の三摩地所行の境界を見せしむ。是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一〇三]具足無邊智定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして、其の所應に隨つて、能く無量の上妙の供具を以て諸佛世尊を恭敬し、供養せしむ。

是の如きの諸佛國土に住するに隨つて、若し[一〇四]具足清淨智定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして、皆な悉く同じく諸欲の境界、無量の過患の心を見て清淨なることを得せしむ。

※功德地藏菩薩安住の諸三摩地

【九六】Śūraṃgama-samādhi. 首楞嚴三昧に同じ（勝は最勝無上の意）。健行定、勇健定、健相定等に作る。堅固にして諸法を攝する三昧の意。北涼本には首楞嚴三昧に作る。

【九七】佛智の位。

【九八】佛智の深廣を海に比す。

【九九】師子奮迅三昧 Siṃhavikrīḍita-samādhi. に同じ。佛此の三昧に入れば、よく猛威を示して外道二乘の小獸を攝伏する故。北涼本には師子光三昧とす。

【一〇〇】北涼本には登切智山須彌之頂とす。一切智海に對應し佛智の高大を須彌山に比したるなり。

【一〇一】麗本、熟字を就に作る。今三本等に依る。

【一〇二】北涼本、智三昧に作る。

【一〇三】北涼本、智樂三昧に作る。

【一〇四】北涼本、淸淨樂三昧に作る。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一〇五]具足慚愧智定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして、皆な增上の慚愧を具足することを得て、諸の惡法を離れ、心に忘失すること無からしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一〇六]具足諸乘明定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして皆な善巧なる[一〇七]天眼智通、[一〇八]宿住智通、[一〇九]死生智通を得て、此世・他世の因果を了達せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一一〇]無憂神通明定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして皆な一切の愁憂昏昧を離れしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一一一]具足勝通明定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして皆な神通善巧なることを具足することを得せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一一二]普照諸世間定に入らば、此の定力に由つて、十方界をして諸昏暗を離れしめ、彼の佛土の一切の有情をして普く十方諸佛の國土を見せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し諸佛の[一一三]燈炬明定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして[一一四]邪歸依を捨て正しく三寶に歸せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一一五]金剛光定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の所有る一切の小[一一六]輪圍山、大輪圍山、[一一七]蘇迷盧山、及び諸餘の山、谿澗溝壑、瓦礫、毒刺、諸穢の草木をして皆悉く現ぜざらしめ、彼の佛土の所有る一切の衆邪蠱毒、諸惡蟲獸、災橫疫癘、昏暗塵垢、不淨の臭穢をして、悉く皆な銷滅せしめ、彼の佛土の地平らかなること掌の如く、種種の嘉祥自然に[一一八]湧現し、淸淨殊勝の衆相もて莊嚴せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一一九]智力難摧伏定に入らば、此の定力に由つて、彼

【一〇五】北涼本、慚愧三昧に作る。
【一〇六】北涼本、水濕又は水渚三昧に作る。
【一〇七】次に三明を擧ぐ。天眼智通は天眼智證通の略。俱舍論にいふ三明六通の一。天眼に依つて自他の未來世の生死の相を知る通力。
【一〇八】宿住隨念智證通の略。宿住通、宿命通、宿命智通などといふ三明六通の一。過去の宿世を念に從つて知る神通力。
【一〇九】俱舍の死生智證通の略三明の一としては天眼通と同一視されるが、こゝでは三明の一なる漏盡通の如く現世の死生の相を知る通力の意か。
【一一〇】北涼本、無憂明三昧に作る。
【一一一】北涼本、神通三昧に作る。
【一一二】北涼本、智明三昧に。作る。般若諸等持中の能照一切世間三摩地Sarvalakāraprabhākaro nama samādhi に同じか。
【一一三】北涼本、佛炬三昧に作る。
【一一四】元・明二本、「捨邪歸依

の佛土の一切の魔王及び諸の眷屬をして皆な悉く驚怖し三寶に歸依せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[二〇]電光明定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして皆な悉く後世の恐怖を遠離し、法の安慰を得せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[二一]具足上妙味定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして念に隨つて皆な飮食の充足なることを得せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[二二]具足勝精氣定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして皆な增上の力勢を得、諸の病苦を離れずといふこと無からしむ。

「是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[二三]上妙諸資具足に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして樂に隨つて皆な牀座、敷具、衣服、寶飾、諸の資身の具の乏少する所無く、殊妙端嚴にして甚だ愛樂すべきことを得せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[二四]無諍智定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして身心勇健にして一切の怨憎繫縛を遠離し、和順し、歡娛し、愛樂して、[二五]施・戒・安忍・勇猛精進を具足し、心に散亂なくして、智慧を成就せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[二六]能引勝踊躍定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして皆な無量の勝妙歡喜を受けしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[二七]具足世路光定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして[二八]無礙智を得、種種清淨の事業を修せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[二九]善住勝金剛定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして皆な諸根具足して缺くること無く、常に遠離を樂ひ、其の心寂靜なるこ

歸正三寶」を「捨邪歸正歸依三寶」に作る。

【一五】北涼本、金剛光三昧に作る。

【一六】Cakravāḍa, 鐵輪圍山、鐵圍山、金剛山などといふ。須彌山を中心として七山八海あるその第八海たる鹹海を圍遶して一小世界を區劃する鐵山。

【一七】Sumeru. 須彌山の音譯。妙高山。

【一八】涌字、麗本、踊に作る。今三本及宮本に依る。

【一九】北涼本、智力降伏三昧に作る。

【二〇】北涼本。電光三昧に作る。

【二一】北涼本、味樂三昧に作る。

【二二】北涼本、精氣悅樂三昧に作る。

【二三】北涼本、樂具三昧に作る。

【二四】北涼本、無諍智三昧に作る。諍とは煩惱の異名。有情をして煩惱を息めしむる智を無諍智といふ、

【二五】六度を擧ぐ。

【二六】北涼本、無憂怖三昧に作る。

【二七】北涼本、光樂三昧に作る。具字。宮内省本、其に作る。

【二八】佛智の通達自在なるを

とを得せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一三〇]増上觀勝幢定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして皆深く自らの惡業過を呵厭し、咸く善く[一三一]十善業道、生天の要路を護持せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一三二]具足慈悲聲定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして皆な悉く[一三三]慈心、悲心、無怨害心、普平等心、更相利益安樂心を發起せしむ。

是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一三四]引集諸福徳定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の有情をして諸の鬪諍、疾疫、饑饉、非時の風雨、苦澁、辛酸、諸の惡色觸を離し、悉く皆な[一三五]銷滅せしむ。

「是の如きの大士、是の如きの諸佛の國土に住するに隨つて、若し[一三六]海電光定に入らば、此の定力に由つて、彼の佛土の一切の大地をして、衆寶合成し、一切の過患皆な悉く遠離し、種種の寶樹、衣樹、器樹、諸の[一三七]瓔珞樹、花樹、果樹、諸の音樂樹、無量の樂具周遍して莊嚴せしむ。

要を以て之を言はば、此の善男子、一一の日に於て[一三八]晨朝の時毎に諸の有情を成熟せんと欲するが爲めの故に、[一三九]殑伽河沙等の諸定に入り、定より起ち已つて遍く十方諸佛の國土に於て一切の所化の有情を成熟し、其の所應に隨つて、利益し安樂するなり。

此の善男子、已に無量無數大劫五濁惡時無佛の世界に於て有情を成熟す。復た、當來に於ても、是の數に過ぎん。或は世界に[一四〇]刀兵劫起つて諸の有情を害する有らんに、此の善男子、是の事を見已つて、晨朝の時に於て、諸の定力を以て刀兵劫を除き、諸の有情をして互に相慈愍せしむ。或

いふ。大集經一には「無礙智慧無有邊、善解衆生三世事」とせり。

【一二九】北涼本、善住金剛三昧に作る。

【一三〇】北涼本、觀幢三昧に作る。

【一三一】不殺生乃至不邪見等の十善業はよく善處に生ずるの道なる故に十善業道とらふ。

【一三二】北涼本、大慈音聲三昧に作る。前註「一四」を見よ。

【一三三】北涼本には「皆起慈心、得無畏心、得無惱心、等心、更相悲念」に作る。

【一三四】北涼本、集福處三昧に作る。般若諸等持名中の、集一切功德三摩地 Sarvaguṇa-saṃcayagato nāma samādhi に同じか。

【一三五】消字、麗本には銷に作る。今三本等。

【一三六】北涼本、海電三昧に作る。

【一三七】瓔珞二字、聖語藏本には、纓絡に作る。

【一三八】一日を晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜の六時に分つ。晨朝毎に諸定に入つて衆生を成熟することは地藏尊の殊德の一とさる。

【一三九】北涼本、恒河沙世界三昧に作る。

【一四〇】Śastrāntara kalpa 三災

は世界あり、[一四一]疫病劫起つて諸の有情を害せんに、此の善男子、是の事を見已つて、晨朝の時に於て、諸の定力を以て、疫病劫を除き、諸の有情をして皆な安樂を得せしむ。或は世界有り、[一四二]饑饉劫起つて諸の有情を害せんに、此の善男子、是の事を見已つて、晨朝の時に於て、諸の定力を以て、饑饉劫を除き、諸の有情をして皆な飽滿を得せしむ。此の善男子、諸の定力を以て是の如き等の無量無邊不可思議にして諸の有情を利益し安樂する事を作す。

*此の善男子、無量無數の不可思議殊勝の功德を具足し成就して、常に勤めて精進して、一切の有情を利益し安樂にす。曾て過去に無量無數殑伽沙等の佛世尊の所に於て、諸の有情を成熟し利益し安樂ならしめんと欲するが爲の故に、大悲堅固にして壞ち難き勇猛精進無盡の誓願を發起す。此の大悲堅固にして難壞なる勇猛精進無盡の誓願の增上の勢力に由つて、一日夜或は一食の頃(あいだ)に於て、能く無量百千[一四三]倶胝那庾多數の諸の有情の類を度して、皆な種種の憂苦をして解脫せしめ、及び一切の如法に所求する意願をして滿足ならしむ。

(1)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、種種の希求、憂苦に逼切せられんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な如法の所求を得、諸の憂苦を離れ、其の所應に隨つて、[一四四]生天涅槃の道に[一四五]安置せん。

(2)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、飢渴に逼(せ)められんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な如法の所求を得、飲食充足して、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。

(3)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、種種の衣服、寶飾、醫藥、牀敷、及び諸の資具に乏少するならんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な如法の所求を得、衣服、寶飾、醫藥、牀敷、及び諸の資具備足せずといふこと無く、其の所應

の一。一住劫の中に二十增減劫あり、その減劫の終每に起る小の三災、卽ち、刀兵災、疾疫災、飢饉災、の第一の起る時代をいふ。

【一四一】Rogāntara-kalpa 前註を見よ。

【一四二】durbhikṣāntara-kalpa 前註を見よ。

※地藏菩薩の誓願功德

【一四三】Koṭi-nayuta 數量。倶胝は千萬。或は十萬、百萬とするもあり。那庾多は億の數。或は十萬、百萬、千萬の億に數ふ。百千倶胝那庾多とは、之を更に千倍し又百倍するなり。

【一四四】天果を受くること卽ち福果生天を獲るは、佛徒の涅槃と同じく、一般民衆の信仰の中心。

【一四五】北京本には、安住涅槃とす。

に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。

(4)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、愛樂には別離し、怨憎には合會せんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者あらば、一切皆な愛樂には合會し、怨憎には別離することを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。

(5)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、身心憂苦し、衆病に惱まされんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な身心安樂[一四六]にして衆病除こり愈ゆるを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。

(6)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、互に相乖違し、諸の鬪諍を興さんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な毒害心を捨て、共に相和穆し、歡喜忍受し、展轉悔愧し、慈心もて相向ふことを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。

(7)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、牢獄に閉在せられ、杻械枷鎖に其の身を檢繫して、具に衆苦を受けんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な牢獄の杻械枷鎖を解脫し、自在に歡[一四七]喜することを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。

(8)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、應に囚執せらるべくして、鞭撻拷楚、當に害せらるべきに臨んで、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な囚執を離れ、鞭撻加害を免るるを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。

(9)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、身心疲倦し、氣力羸惙せんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な身心暢適にして、氣力强盛なるこ

【一四六】三本等、樂字を隱に作る。

【一四七】三本及び宮本、喜字を樂に作る。

とを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。
(10)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、諸根不具、隨つて損壞あらんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な諸根具足して損壞あること無きを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。
(11)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、顚狂、心亂し、鬼魅に著かれんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な心に狂亂なく、諸の擾惱を離るることを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。
(12)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、[一四八]貪欲・瞋恚・愚癡・忿恨・慳嫉・憍慢・惡見・睡眠・放逸・疑等、皆な悉く熾盛にして身心を惱亂し、常に安樂ならざらんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な貪欲等を離れて、身心安樂なることを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。
(13)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、火の爲に焚かれ、水の爲に溺らせられ、風の爲に飄(ただよ)はせられ、或は山・巖・崖・岸・樹・舍に於て顚墜墮落して、其の心[一四九]憧惶せんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な諸の危難を離れ、安穩にして損ふこと無きことを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。
(14)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、諸の毒蛇、毒蟲の爲に螫され、或は種種の毒藥に中てられんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な諸の惱害を離るることを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。
(15)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、惡鬼に持(つ)かれ、諸の[一五〇]瘧病となり、或は日日に發し、或は隔日に發し、或は三四日にして一たび發するもの、或は身心を狂亂して[一五一]戰掉し、迷悶、失念し

【一四八】十種の煩惱を數ふ。
【一四九】三本及宮本、憧字を周に作る。
【一五〇】瘧字、明本には瘧に作る。
【一五一】戰字、三本及び宮本には顫に作る。

て、了知する所無からんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な解脱して畏れなく身心の安適なることを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。

(16)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、諸の藥叉・[一五二]羅刹・餓鬼・[一五三]畢舍遮鬼、[一五四]布怛那鬼、[一五五]鳩畔茶鬼、羯吒布怛那鬼、[一五六]吸精氣鬼、及び諸の虎狼、師子、惡獸、蠱毒、厭禱、諸の惡しき呪術、怨賊、軍陣、及び餘の種種の諸の怖畏の事に纏繞せられて、身心惶惶し、身命を失はんことを懼れ、死を惡み、生を貪り、苦を厭ひ、樂を求めんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切皆な諸の怖畏を離れ、身命を保全することを得、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。

(17)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、(1)或は[一五八]多聞の爲め、(2)或は淨信の爲め、(3)或は淨戒の爲め(4)或は靜慮の爲め、(5)或は神通の爲め、(6)或は般若の爲め、(7)或は解脱の爲め、(8)或は[一五九]妙色の爲め、(9)或は妙聲の爲め、(10)或は妙香の爲め、(11)或は妙味の爲め、(12)或は妙觸の爲め、(13)或は利養の爲め、(14)或は名聞の爲め、(15)或は功德の爲め、(16)或は工巧の爲め、(17)或は花果の爲め、(18)或或は樹林の爲め、(19)或は牀座の爲め、(20)或は敷具の爲め、(21)或は道路の爲め、(22)或は財穀の爲め、(23)或は醫藥の爲め、(24)或は舍宅の爲め、(25)或は僕使の爲め、(26)或は彩色の爲め、(27)或は[一六〇]甘露雨の爲め、(28)或は水を求むるが爲め、(29)或は稼穡の爲め、(30)或は扇拂の爲め、(31)或は涼風の爲め、(32)或は火を求むるが爲め、(33)或は車乘の爲め、(34)或は男女の爲め、(35)或は[一六一]方便の爲め、(36)或は修福の爲め、(37)或は溫暖の爲め、(38)或は清涼の爲め、(39)或は憶念の爲め、(40)或は種種なる世・出世間の諸の利樂事の爲めに、追求するの時に於いて、諸の憂苦の爲め逼切せられんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、[一六二]此の善男子の功德たる妙定の威神力の故に、彼の

【一五二】Rākṣasa 羅刹娑、羅叉娑。惡鬼の總稱。暴惡可畏なども譯す。食人鬼なり。
【一五三】Piśāca 毘舍闍、辟舍拓に作る。持國天所領の鬼の稱。
【一五四】Pūtana 富多那、布單那、富陀那に作る。臭餓鬼と譯す。餓鬼中の勝れたるもの。
【一五五】Kumbhāṇḍa 弓槃茶、拘辨茶、拘槃茶、俱槃茶、恭畔茶に作る。人間の精氣を啖ふ鬼といふ。瓶腹鬼甕形鬼、冬瓜鬼など譯す。慧苑音義に「鳩槃茶此に陰囊、亦形印」と。その陰囊の狀冬瓜の如しといふ。
【一五六】Kaṭapūtana Kaṭabhūtana 迦吒富單那、竭吒富咀那に作る。極臭鬼、或は奇臭鬼と譯す。赤、叫諜作災怪鬼といはる。餓鬼の同類。
【一五七】Ojo-āhāra 臭闍訶洛鬼（吸人精氣鬼）の類か。玄應音義二一參照。
【一五八】多聞。梵 Bahuśruta 聞信戒は所謂七財の一。
【一五九】色聲香味觸の五をあぐ。今
【一六〇】麗本、甘雨に作る。今三本及宮本に依る。

一切をして皆な憂苦を離れ、意願滿足ならしめ、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。
(18)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、諸の種子を以て荒田、或は熟田中に[一六三]植ゑて、若しくは勤めて營務し、或は營務せさらんに、能く至心に地藏菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、此の善男子の功德たる妙定の威神力の故に、彼の一切をして果實豐稔ならしめん。所以何んとなれば、此の善男子、曾て無量無數の大劫を過ぎて、過數量の佛世尊の所に於て、大精進堅固なる誓願を發し、此の願力に由つて、諸の有情を成熟せんと欲するが爲めの故に、常に普く一切の大地を[一六四]住持し、常に普く一切の種子を＊住持し、常に普く彼の一切の有情をして意に隨つて受用せしむ。此の善男子の威神力の故に、能く大地の一切の草木、根鬚、芽莖、枝葉、花果をして、皆な悉く生長し、藥穀、[一六五]苗根、花果をして茂實し、成熟して、潤澤、香潔、軟美ならしむ。
(19)所在の處に隨つて、若し諸の有情にして、貪瞋癡等皆な猛利なるが故に、＊(1)殺生、(2)或は不與取(3)或は欲邪行、(4)或は虛誑語、(5)或は麁惡語、(6)或は離間語、(7)或は雜穢語、(8)或は貪、(9)或は瞋(10)或は復た邪見の十惡業道を造作せんに、能く至心に地獄菩薩摩訶薩を稱名し、念誦し、歸敬し、供養する者有らば、一切の煩惱、悉く皆な銷滅し、十惡を遠離して十善を成就し、諸の衆生に於て、慈悲心及び利益心を起さん。此の善男子、是の如きの功德、妙定の威神力、勇猛の精進を成就し、一食の頃に於て、能く無量無數の佛土の一一の土の中にて、一食の頃を以て、皆能く無量無數殑伽沙等の所化の有情を度脫し、衆苦を離れて皆な安樂を得せしめ、其の所應に隨つて、生天涅槃の道に安置せん。
＊此の善男子、是の如きの、我が所說の如き不可思議なる諸の功德法、堅固なる誓願、勇猛の精進を成就し、諸の有情を成熟せんと欲するが爲めの故に、十方界に於て、(1)或る時は[一六六]大梵王の身を現作し、諸の有情の爲に、應の如くに說法し、(2)或は復た[一六七]大自在天の身を現作し、(3)或は欲界の

【一六二】Upāya 眞實に入る能通の法。又善巧とも善權ともいひ、善巧方便に熟す。眞實へ導く手段をいふ。
【一六三】善男子とは佛徒の美稱。今は地藏菩薩を指す。
【一六三】植字、麗本には殖に作る。今三本及び宮本に依る。
【一六四】住字、麗本には任に作る。今三本及宮本に依る。以下※同じ。
【一六五】根字、三本に依る。麗本には稼、宮本には穡に作る。
※また十不善業道（Daśākuśala-karma-pathā）といふ。即ち、身罪三業、語罪四業、意罪三業との十惡なり。
※地藏菩薩の化身相。
【一六六】Mahābrahmā 具には大梵天王、略して梵王ともいふ。色界初禪天の王。
【一六七】maheśvara 摩醯首羅、摩醯濕伐涅。色界最上の淨梵天にあり三千世界の主とさる。
【一六八】Paranirmitavaśavartina 略して他化天。欲界六天の第六に位し、一に第六天といふ。

[一六八]他化自在天の身と作り、(4)或は[一六九]樂變化天の身と作り、(5)或は[一七〇]覩史多天の身と作り、或は[一七一]夜摩天の身と作り、(7)或は[一七二]帝釋天の身と作り、(8)或は[一七三]四大王天の身と作り、(9)或は佛身と作り、(10)或は菩薩身と作り、(11)或は獨覺の身と作り、(12)或は聲聞の身と作り、(13)或は[一七四]轉輪王の身と作り、(14)或は[一七五]刹帝利の身と作り、(15)或は[一七六]婆羅門の身と作り、(16)或は[一七七]茷舍の身と作り、(17)或は[一七八]戍達羅の身と作り、(18)或は丈夫の身と作り、(19)或は婦女の身と作り、(20)或は童男の身と作り、(21)或は童女の身と作り、(22)或は[一七九]健達縛の身と作り、(23)或は[一八〇]阿素洛の身と作り、(24)或は[一八一]緊捺洛の身と作り、(25)或は[一八二]莫呼洛伽の身と作り、(26)或は龍身と作り、(27)或は藥叉の身と作り、(28)或は羅刹の身と作り、(29)或は鳩畔茶の身と作り、(30)或は畢舍遮の身と作り、(31)或は餓鬼の身と作り、(32)或は布怛那の身と作り、(33)或は羯吒布怛那の身と作り、(34)或は[一八三]孛闍訶洛鬼の身と作り、(35)或は師子の身と作り、(36)或は[一八四]香象の身と作り、(37)或は馬の身と作り、(38)或は牛の身と作り、(39)或は種種なる禽獸の身と作り、(40)或は[一八五]剡魔王の身と作り、(41)或は[一八六]地獄卒の身と作り、(42)或は地獄の諸の有情の身と作り、[一八七]是の如き等の無量無數の異類の身を現作して、諸の有情の爲めに、應の如く説法し、其の所應に隨つて、三乘の[一八八]不退轉位に安置す。

善男子よ。是の如きの大士、是の如きの不可思議諸功德の法を成就す。是れ、諸の殊勝の功德の伏藏なり。是れ、諸の解脱の珍寶の出處たり。是れ、諸の菩薩の明淨の眼目たり。是れ、涅槃に趣く商人の導首たり。是の如きのこと、乃至、能く[一八九]無功用にして大法輪を轉ずること、前に廣く說くが如し。

善男子よ。假使ひ、人有つて、其の[一九〇]彌勒及び[一九一]妙吉祥、並に[一九二]觀自在、[一九三]普賢の類にして、而も上首たる、殑伽沙等の諸の大菩薩摩訶薩の所に於て、百劫の中に於て、至心に歸依して、稱名し、念誦し、禮拜し、供養して、諸の所願を求めんよりは、人有つて、一食の頃にてもあれ、地藏菩薩

欲界主。四魔中の天魔とさる。
【一六九】Nirmāṇaratayā 化樂天、化自樂天。ともいふ。六欲天の第五。
【一七〇】Tuṣita 覩史多、兜駛多、鬪瑟多と音譯し、又都史天とも略す。舊譯の兜率天。又、兜術、兜率陀なり。上足、妙足、知足、喜足など譯す。六欲天の第四天。內外二處に分れ、內院は彌勒淨土、外院は天衆の欲樂處とす。
【一七一】Yāma 具には Suyāma 須夜摩、蘇夜摩。舊に焔摩天、炎摩天、炎天、𦬇天、焔天などといふ。時分、善時と譯す。六欲天の第三天。
【一七二】前田註、天帝釋を見よ。忉利天主。須彌山頂喜見城にありて忉利三十三天の他三十二天を領す。
【一七三】Cāturmahārājakāyikā 四王天。欲界六天の第一天。須彌山の半腹に一山あり、由揵陀羅と名け、山に四頭ありて四王これに分住し各、一天下を護る。即ち、東方持國天 Dhṛtarāṣṭra 南方增長天 Virūḍhaka 西方廣目天 Virūpākṣa 北方多聞天 Dhanada, Vaiśramaṇa. 依つて護世四天王といひ所居の天處を四王天と稱す。
【一七四】Cakravarti-rāja 單に輪王ともいふ。須彌の四洲卽

を、至心に歸依して、稱名し、念誦し、禮拜し、供養して、諸の所願を求め、速かに滿足なることを得んには、如かじ。所以は何ん。地藏菩薩、一切の有情を利益し、安樂ならしめて、諸の有情をして所願滿足せしむること、一九四如意寶の如く、亦た伏藏の如し。是の如きの大士、諸の有情を成熟せんと欲するが爲めの故に、久しく堅固の大願、大悲勇猛の精進を修すること、諸の菩薩に過ぎたり。是の故に、汝等、當に供養すべし』と。

爾の時、十方諸來の大衆、一切の菩薩摩訶薩、及び諸の聲聞・天・人・藥叉・健達縛等、皆な座より起つて、力の一九五作す所に隨つて、各々種種の金銀等の屑、衆寶の花香を持ちて、地藏菩薩摩訶薩に奉散し、復た種種の上妙の衣服、一九六末尼寶珠、眞珠の花鬘、眞珠の瓔珞、金銀の寶縷、幢、幡蓋等を持ちて、地藏菩薩摩訶薩に奉上し、復た無量の上妙の音樂、種種の讚頌を以て、地藏菩薩を恭敬し、供養したてまつる。

爾の時、地藏菩薩摩訶薩、此の種種の上妙の供具を持して、世尊に廻奉して、而して頌を說いて曰く、

天・人・龍神の供養するところ、　十方の菩薩も皆な來つて奉ず。
一九七救世の大功德を有することを聞く、　一九八唯願はくは我が最勝の供を受けたまへ。

爾の時、地藏菩薩摩訶薩、是の頌を說き已つて、佛足を頂禮したてまつる。是に於て、世尊、復た頌を說いて曰はく、

堅固の慧、淸淨の心を起して、　諸の有情の無量の苦を滅す。
衆の妙樂を施すことは一九九寶手の如く、　能く惑網を斷ずること金剛の如し。
大悲慧を起して精進を具し、　善く妙供を持して世尊に奉る。
二〇〇海智を以て苦の衆生を救ひ、　諸趣有をして無畏の岸に登す。

ち全世界を統御する大王。身に三十二相を具へ即位のとき天より輪寶を得、之を轉じて四海を威伏すといふ。此の輪寶に金銀銅鐵四種あり、次第の如く四三二一の大洲を領すと。即ち金輪王は四洲、銀輪王は東西南の三洲、銅輪王は東南二洲、鐵輪王は南閻浮提の一洲なり。
【一七五】Kṣatriya 四姓の一、武士階級。
【一七六】Brāhmaṇa 同、祭司階級。
【一七七】Vaiśya 毘舍。同、商工階級。茷字、明本及宮本には茷、聖語藏本には茂に作る。
【一七八】Śūdra 首陀。同、奴婢階級。
【一七九】Gandharva 香神、香陰、尋香等に譯す。八部衆の一、樂神。緊那羅と共に帝釋天に奉持し伎樂を司る。
【一八〇】Asura 阿修羅。無端、無酒、非天などに譯す。〔註〕非天趣參照。常に帝釋と戰鬪をなす神。八部衆の一。六道の一、修羅道。
【一八一】Kiṃnara 緊那羅、甄陀羅、眞陀羅等に作る。舊譯、人非人、疑神。新譯、歌神。八部衆の一、樂神なり。
【一八二】Mahoraga 摩護囉誐、摩呼洛伽、摩睺羅伽、休勒など音譯す。八部衆の一、大蟒

*爾の時、地藏菩薩摩訶薩、即ち、座より起つて佛に白して言さく、

『大德世尊よ。我れ、當に此の四洲諸の世尊の弟子、一切の[二〇一]苾芻及び[二〇二]苾芻尼、[二〇三]鄔波索迦、[二〇四]鄔波斯迦を濟度して、其をして皆、憶念を增長し、守護の憶念を增長し、壽命を增長し、身體を增長し、無病を增長し、色力を增長し、名聞を增長し、資具を增長し、親友を增長し、弟子を增長し、淨戒を增長し、多聞を增長し、[二〇五]慧捨を增長し、妙定を增長し、安忍を增長し、方便を增長し、覺分聖諦の光明を增長し、大乘の正道に趣入することを增長し、[二〇六]法明を增長し、有情を成熟することを增長し、大慈大悲を增長し、一切の[二〇七]白法を增長し、妙稱の三界に遍滿せんことを增長し、法雨の普く三界を潤ほさんことを增長し、一切の大地の精氣滋味を增長し、一切衆生の精氣の善く事業を作さんことを增長し、正法の精氣の善行を增長し、智慧の光明を增長し、[二〇八]六到彼岸の妙行を增長し、五眼を增長し、灌頂を增長し、生賢涅槃を增長することを得せしむ。所謂る「具足水火吉祥光明大記明呪總持の章句」と名くるもの有り。我れ、過去の殑伽沙等の佛世尊の所に於て、此の陀羅尼を親承し、受持して、能く一切の白法を增長し、一切の種子・根鬚・芽莖・枝葉・花果・藥穀の精氣滋味を增長し、雨澤を增長し、有益の地水火風を增長し、喜樂を增長し、財寶を增長し、勝力を增長し、一切受用の資具を增長せしむ。此の陀羅尼、能く一切の智慧をして猛利ならしめて煩惱の賊を破す』と。

即ち呪を說いて曰く、

識蒱一　識蒱二　識識蒱三　阿迦舍識蒱四　縛羯[二〇九]洛識蒱五　菴跋*洛識蒱六　筏羅識蒱七　伐折*洛識蒱八　阿路迦識蒱九　莒摩識蒱十　薩帝[二一〇]丁斯反・摩識蒱十一　薩帝丁斯反　眤泥吉反　訶羅識蒱十二　毘婆縛迦反　路迦挿婆識蒱十三　鄔波睒摩識蒱十四　奈野娜識蒱十五　鉢剌惹三牟底都異反　剌拏

神なり。

【一八三】Oja-āhāra 吸人精氣鬼。粵字、三本及宮本、奧に作る。

※　地藏菩薩の神呪。

【一八四】Gandhahasti 青き色に香氣を帶びる象。菩薩名に香象菩薩あり、維摩經に出づ。

【一八五】Yama-rāja 琰魔、炎魔、焔摩、閻摩羅、閻羅、閻摩羅社、琰摩邏闍などに作る。縛、雙世、雙王、平等王などに譯す。地獄の王なり。

【一八六】Bandhanapālaka 地獄にある、剡魔王の使卒。所謂、青鬼赤鬼の類なり。

【一八七】三本及び宮本、如字を缺き是等に作る。

【一八八】Avaivartika 音譯、阿毘拔致、阿惟越致、阿鞞跋致。成佛の進路を退轉せざる義。

【一八九】造作を加へざること、自然の作用をいふ。

【一九〇】Maitreya 慈氏と譯す。五十六億七千萬年の後成佛するといふ當來佛。其の淨土は兜率。

【一九一】Mañjuśrī 滿殊尸利、文殊師利、曼殊室利の譯。文殊菩薩のこと。尙、妙德、妙首、普首、濡首、敬首等の異譯あり。

【一九二】Avalokiteśvara 光世音、觀世音、觀世自在など譯す。觀音菩薩なり。その淨土を、

識蒱十六　刹拏識蒱十七　毘濕婆縛迦反　梨夜識蒱十八　舍薩多臘婆縛迦反　識蒱十九　毘[二一一]　阿[二一二]去聲　荼素上聲
吒[二一三]知戒反二十　莫醯隷二十一　莒謎二十二　睒謎二十三　斫羯洛細二十四　斫羯洛沫　哂[二一四]隷二十五　厠[二一五]初凡反　隷二十六
諢[二一六]四里反[二一七]　隷二十七　揭刺婆跋羅伐刺帝二十八　阤[二一八]上聲醯以反　噤二十九　鉢臘薛三十　鉢刺遮囉飯恒泥三十一去聲
曷刺怛泥三十二去聲　播囉三十三　遮遮遮遮三十四　阤[二一九]上聲　隷三十五　弭隷三十六　鷲羯他三十七　託契三十八　託
齺盧三十九　闥噤四十　闥噤四十一　弭[二二〇]隷四十二　磨綻四十三徒界反　癉綻四十四徒界反　矩隷四十五　弭隷隷*四十六　盎矩之
多毘四十七　遏䅽四十八　祁上聲　䅽四十九　波[二二一]囉祁上聲　䅽五十　矩吒　苦[二二二]沫隷五十一　[二二三]敦祇五十二奚計反[二二四]　敦*[二二五]祇五十三奚計反
*敦具隷五十四　涾盧五十五　涾盧五十六　涾盧五十七　矩盧窣都弭隷五十八　弭[二二六]嗪第五十九　彌嗪綻六十徒界反　叛
茶陀六十一　喝呵葛反　羅六十二　阤[二二七]上聲　梨六十三　涾盧六十四　涾魯盧六十五

[二二八]善說、能く諸有の塵を淨うす。　善說、能く鬪諍劫を淨うす。
善說、能く濁惡の意を淨うす。　善說、能く濁大種を淨うす。
善說、能く濁惡の味を淨うす。　善說、能く濁惡の氣を淨うす。
善說、能く諸の希望を滿す。　善說、能く諸の稼穡を成ず。
善說、能く一切の佛、　如來世尊をして加護する所たらしむ。」
善說、又能く一切の、　菩薩をして加護して而も隨喜せしむ。

『世尊よ。是の如きの「具足水火吉祥光明大記明呪總持の章句」を、我れ、過去の殑伽沙等の佛世尊の所に於て、親承し、受持したり。此の陀羅尼は、能く一切の白法を增長し、廣く說かば乃至、一切の受用の資具を增長せしむ。大德世尊よ。此の陀羅尼は、普く能く此の四洲渚[二二九]の、世尊の弟子

補陀落山 Potalaka といふ。勢至菩薩と對になり、彌陀の左脇士たり。

【一九三】 Viśvabhadra, Samantabhadra 郊輪跋陀、三曼多跋陀羅。遍吉とも譯す。文殊普賢と並稱され、釋迦の右脇士として、白象に乘じ、理と定と行とを司り、文殊の獅子に駕して左脇に侍り、智德、證德を司るに對す。即ち理智行證、三昧般若の雙たり。

【一九四】 如意珠 Cintāmaṇi に同じ。

【一九五】 作字、三本及宮本には能に作る。

【一九六】 Maṇi 摩尼。珠、寶、と譯し、亦た離垢、如意と譯す。珠の總名。

【一九七】 Tāyi 善護、救世者、救世尊、救世大悲者。佛の異名に用ひらる。

【一九八】 唯字、元・明二本には、惟に作る。

【一九九】 自在に財寶を手中より出すをいふ。菩薩名としては、胎藏界地藏院九尊中の一に Ratnapāṇi あり。寶掌とも譯す。

【二〇〇】 北凉本には「其心如海救一切、度諸衆生登彼岸」に作る。

【二〇一】 Bhikṣu 又、比丘に譯す。出家して具足戒を受けたるもの。乞士、を義譯とす。

たる、一切の苾芻及び苾芻尼、鄔波索迦、鄔波斯迦を濟度し、其をして皆な憶念を增長し、廣く說かば乃至、一切の受用の資具を增長することを得せしむ。此の陀羅尼は、能く世尊の甘露の聖敎をして熾然として久しく住まらしめて、[二三〇]三界の衆生を利益し、安樂にす』と。

*爾の時、地藏菩薩摩訶薩、是の如きの「大記明呪總持章句」を演說するの時、佉羅帝耶山普く皆な震動して、倶胝の天樂鼓かざるに自ら鳴り、無量種の天の妙香花及び珍寶等を雨らし、一切の衆會、成悉く驚躍して、皆な、希有なることを獲、未曾有なることを得たり。

時に、集會の中に、*大吉祥天女、具大吉祥天女、大池妙音天女、大堅固天女、具大水天女、放大光天女有つて、上首たり。總じて一萬八千の天女有り、[二三一]四大種に於て、皆な自在を得たり。座よりして起ち、佛足を稽首したてまつり、掌を合せて恭敬して佛に白して言さく、

『希有なり、大德よ。甚だ奇なり、世尊よ。我等、諸の四大種に於て自在に轉ずることを得と雖も、而も是の四大種の初中後の相、生滅違順を知ること能はざるに、此の如きの大士は、已に微細甚深の[二三二]般若波羅蜜多を得、能く善く是の四大種の初中後の相、生滅違順を了知せり』と。

佛の言はく、

『是の如し、是の如し、天女よ。此の善男子、已に微細甚深の般若波羅蜜多を得、能く善く是の四大種の初中後の相、生滅違順を了知せり。天女よ、當に知るべし。如意珠の衆德を具足して能く[二三三]種種なる上妙の珍寶を雨らし、諸の衆生に施すが如く、此の善男子も亦復た是の如し、能く種種の覺支の珍寶を雨らし、諸の衆生に施す。寶洲諸の種種の珍寶を其の中に充滿するが如く、此の善男子も亦復た是の如し、種種の覺支珍寶を成就す。天の[二三四]波利質多羅樹の衆の妙香花に嚴飾せらるるが如く、此の善男子も亦復た是の如し、種種の微妙なる佛法の珍寶もて自ら莊嚴す。師子王の一切の畜獸能く驚伏するもの無きが如く、此の善男子も亦復た是の如し、一切の衆生能く驚伏するもの

【二〇二】 Bhikṣuṇī 比丘尼。あま、びくに。

【二〇三】 Upāsaka 優婆塞、優波娑迦などと音譯し、淸信士、近事男、善宿男などと意譯す。五戒を受けたる男の信者なり。

【二〇四】 Upāsikā 優婆夷、優婆斯、優波賜迦、優婆私柯などと音譯す。淸信女、近善女、近事女と義譯す。五戒を受けし女の信女なり。

※地藏菩薩の功德稱讚。以下卷末に至る。文、北涼本の卷第二初頭の「諸天女問四大品第二」に當る。

※北涼本には、功德天女・功德樂天女・妙音聲天女・堅固地神天・未曾有天・大光明天に作る。

【二〇五】 七財中の慧財捨財なり。

【二〇六】 Dharmāloka 諸法の事相を照明し義理を分別するをいふ。是れ聖道に入る門なれば、他法と差別して、法明門 Dharmāloka-mukha とも呼ぶ。

【二〇七】 śukladharma 白淨の法。一切の善法を總稱す。蓋し衆生の垢穢を白淨し精白する故なり。

【二〇八】 Ṣaṭ pāramitā 六波羅蜜、六度。施・戒・忍・精進・禪定・智慧の六。五眼とは肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼を云ふ。

【二〇九】 洛字、三本等、略に作る。以下※同じ。

無し。譬へば朗日の能く世間一切の昏暗を滅するが如く、此の善男子も亦復た是の如し、能く一切衆生の悪見、無明の昏暗を滅す。譬へば明月の夜分の中に於て能く一切の失道の衆生に平坦なる正路を示して、其の往かんと欲するに隨つて皆な至ることを得せしむるが如く、此の善男子も亦復た是の如し、無明の夜に於て、能く一切の三乘の道に迷ひ、生死の曠野に馳騁する衆生に、三乘の正路を示して、其の所應に隨つて方便安立して出離することを得せしむ。譬へば大地の一切の種子、樹、山、稼穡、地身の衆生に依止せらるるが如く、此の善男子も亦復た是の如し、一切の殊妙なる菩提分の法に依止せらる。譬へば大寶妙高山王の善住堅固にして缺くること無く隙無きが如く、此の善男子も亦復た是の如し、善く一切の[三二五]不共佛法に住して諸の衆生を棄捨せざるに由つての故に名けて無缺と爲し、一切の善根皆な善く諸の衆生に施與するが故に名けて無隙と爲す。譬へば虛空の一切衆生の皆な受用する所なるが如く、此の善男子も亦復た是の如し一切の衆生の皆な受用する所なり。此の善男子、是の如き等の無量無邊の諸の功德の法を成ぜるなり』と。

時に、諸の大衆、地藏菩薩摩訶薩の無量の稱讚功德を成就せることを說きたまふを聞いて、皆な希奇なることを獲、未曾有なることを得て、尊重し、恭敬して、皆な大いに歡喜し、至心に地藏菩薩を諦觀して、目暫しも捨てざりき。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯はして、頌を說いて曰く、

地藏ぞ眞の大士、　[三二六]杜多の功德を具し、
聲聞の色相を現はして、　來つて[三二七]大師を稽首したてまつり、
諸の衆生に樂を施して、　[三二八]三有の苦を救脫せしめ、
無量種の雨を雨らして　大師を供養したてまつることを爲す。
天帝無垢生、　四方を觀察し[三二九]已つて、

【三一〇】斯字。三本及宮本に、は簸に作り、反字。明本には凡に作る。以下※同じ。
【三一一】阿字。三本及宮本に揺に作る。
【三一二】去聲。三本及宮本には、汪賀反に作る。
【三一三】三本、知戒反二十に作る。
【三一四】嘲字。三本及宮本には、四に作る。
【三一五】凡字を、三本、几に作る。
【三一六】諱字を、聖語藏本、俾に作る。
【三一七】四字を、元・明二本、四に作る。
【三一八】上聲醯以反の字、三本、許矣反に、聖本、上聲に作る。
【三一九】上聲二字、三本及宮本、同上に作る。※
【三二〇】隷字、三本及宮本には、隸に作る。
【三二一】囉字。聖本には羅とす。
【三二二】苦字。宮本には苦とす。
【三二三】敎字。三本には、敎とす。以下※同じ。
【三二四】夾註を、三本及宮本は、上宅耕反五十二に作る。
【三二五】夾註を、三本及宮本は、下奚計反五十三に作る。
【三二六】弭字、三本及宮本、彌に作る。
【三二七】上聲字、三本及宮本、

合掌恭敬して住まり、　大師を讃請したてまつる。
我れ、世尊、衆を見るに、　末尼寶の光明の、
徧く諸の佛國を照して、　皆な明了ならずといふことなし。
[二四〇]六通もて世間を照して、　今當に此に來至すべし、と。
勇猛なるを、地藏と名け、　出家の威儀を現はす。
[二四一]七聖財の伏藏にして、　無畏の佛音聲、
諸の菩薩の勝幢にして、　衆生の導首、
解脫寶の所依にして、　福海に精進を具へ、
[二四二]悲意樂、聰叡にして、　苦の諸の有情を救ふ。
怖る者の與には城と爲り、　明月の如く道を示し、
善根を生ずること地の如く、　惑を破ることは金剛の如く、
能く解脫寶を施して、　水の如く衆の[二四三]惑を漂ひ、
煩惱の熱には蓋と爲り、　疾を愈すことは良醫の如し。
一日地藏の、　功德大名聞を稱ふることは、
倶胝劫の中、　餘の智者の德を稱ふるに勝り、
能く諸の衆生の、　一切の煩惱の縛を解く。
健行定等の、　諸定の彼岸に至り、
[二四四]十二緣清淨にして、　諸の智は虛空の如く、
無邊の佛土の、　諸の有情の暗聚を破る。
諸の土に隨つて定に入る　[二四五]四靜慮、等流なり。

許矣反に作る。
【二二八】 Svāhā 蘇波訶の譯。善く說かれたりの意。感歎詞。又は Subhāṣita（妙說、善き所說）の譯とせば、上述の陀羅尼を指示する詞とも見らる。
【二二九】 須彌山を中心とする四大洲。即ち、東勝神洲、南瞻部洲、西牛貨洲、北瞿盧洲。Pūrva-videha, Jambudvīpa, Apara-godāniya, Uttara-kuru.
【二三〇】 欲界（Kāmadhātu）色界（Rūpadhātu）無色界（Arūpa-dhātu）の三。
【二三一】 Catvāri mahābhūta 地水火風の四大。一切の色法に周遍すれば大と名け、一切の色法を生ずれば種と名く。
【二三二】 Prajñā-pāramitā.
【二三三】 (Sapta) Bodhi-angāni 七覺支。念、擇法、精進、喜、輕安、定、捨の七。
【二三四】 Pariçitra 波利質羅、波疑質姤に作る。具には波利耶怛羅拘陀羅。譯、香遍樹。また天樹王ともいふ。忉利天上の樹の名。
【二三五】 Aveṇika-buddhadharma 一切の佛の功德他と混同せざる故不共と呼ぶ。しばらく、佛の十力と四無畏と三念住と大悲と合せて、十八不共佛法といふ。智度論二六には、大乘の十八不共法をあぐ。
【二三六】 Dhūta. 頭陀、杜荼とも

普く諸の有情をして、　定に入つて惑熱を除かしむ。
衆生の宿惡業と、　刀兵と病と饑饉との、
所在に隨つて惱害せんに、　皆能く解脫せしむ。
衆生の[二四六]五趣の身の、　諸苦に逼切せられんに、
地藏を歸敬せん者は、　有ゆる苦悉く皆な除こらん。
衆生の苦輪に乘じて、　展轉して相違害せんに、
地藏を歸敬せん者は、　皆な忍慈の心に住せん。
十二緣*の所怖にも、　追求苦の所依にも、
地藏に歸敬せん者は、　皆な無畏に安住せん。
若し諸の福と、　正念と戒・聞・慧とを修せんことを樂（ねが）はんに、
地藏に歸敬せん者は、　求むる所皆な滿足せん。
一一の功德の、　工巧の業種子を樂はんに、
地藏に歸敬せん者は、　求むる所皆な滿足せん。
諸の穀藥田、　男女の衣、僕使を求めんに、
地藏に歸敬せん者は、　求むる所皆な滿足せん。
衆德具さに相應して、　能く大地を住持す、
茲に因つて諸の穀藥、　潤澤にして細輭ならん。
諸の煩惱に覆はれて、　樂（この）んで[二四七]十惡業を行ぜんも、
地藏を歸敬せん者は、　煩惱の惡皆な除こらん。
種種の身を現作して、　衆生の爲めに說法し、

し、又、抖擻、抖揀、洮汰、浣洗などに譯す。行乞。乞食の行法。

【二三七】佛の異名。

【二三八】欲界、色界、無色界の三界の生死の苦。

【二三九】巳字、宮本には色とす。

【二四〇】Ṣaḍ abhijñā 六神通。天眼、天耳、他心、宿命、如意、漏盡の六通。

【二四一】Sapta arya-dhanāni 信、戒、慚、愧、聞、捨、慧の七財。

【二四二】慈悲の意樂。慈悲の意の滿足を得て悅樂すること。

【二四三】漂白するなり。

【二四四】Dvādaśāṅga pratītya-samutpāda 無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死の十二因緣をいふ。宮本及聖本、二字を三に作る。以下同じ。

【二四五】Catvāri dhyānāni 四禪定。色界四禪天に生ずる初、二、三、四の、四の禪定。

【二四六】Pañca-gati 地獄・餓鬼・畜生・人・天の五惡趣、五道。

【二四七】Daśa kuśalāni-karma 身三、語四、意三の十惡業。所謂、殺生・不與取・邪淫・虛誑語・離間語・麁惡語・雜穢語・貪欲・

施の功徳を具足して、　諸の衆生を悲愍むなり。
假使ひ、百劫の中に、　其の功徳を讃說すとも、
猶尙ほ盡すこと能はじ、　故に皆な當に供養すべし。

*永徽二年正月廿三日、長安大慈恩寺翻經院に於て、法師玄奘、詔を奉じて譯す。

大慈恩寺沙門大乘光筆受　法海寺沙門神昉筆受
大總持寺沙門道觀筆受　蒲洲普救寺沙門行友證文
普光寺沙門道智證文　汴洲眞諦寺沙門玄應正字
弘福寺沙門文備證義　蒲洲栖巖寺沙門神泰證義
廓洲法講寺沙門道深證義　寶昌寺沙門法祥證義
羅漢寺沙門慧貴證義　實際寺沙門道明證義
大總持寺沙門道洪證義　大慈恩寺沙門玄奘奉詔譯

瞋恚・邪見の十。

※以下、聖語蔵本奥書。

卷の第二

十輪品　第二 *

*爾の時、地藏菩薩摩訶薩、座より起つて衣服を整理し、佛足を頂禮したてまつり、偏へに[一]一肩を袒ぎ右の膝を地に著け掌を合せて恭敬して佛に白して言さく、

『我れ今、世尊、　　無量の功德海に問ひたてまつる。
唯願はくは開許を賜ひて、　　爲めに解釋して疑を除きたまへ。』と。

世尊、告げて曰はく、

『汝は眞の善士[二]なり。一切の法に於て智見無礙なるも、他の有情を饒益せんと欲するが爲めの故に、如來に請問す。汝の意に隨つて問へ。吾れ、當に汝が爲めに分別解說して汝が心をして喜ばしむべし。』と。

是に於て地藏菩薩摩訶薩、頌を以て問うて曰く

我れ、曾にし[三]　十三劫に、　　已に苦行を勤修して、
一切の有情の爲めに、　　[四]三災、[五]五濁を除かんとして
多倶胝の佛の所にて、　　已に無邊の[六]　供を設けき。
曾つて大集會を見しも、　　淸信の衆和合し、
聰哲にして勤めて精進して、　　皆な來つて同會に集ること、
未だ曾て是の如きの、　　諸の雜穢無き衆を見ず。
云何ぞ此の佛國、　　穢惡にして淨善を損じ、
智者は皆な遠離し、　　惡行の者は同居して、

※北涼本、卷第二「發問本業斷結品第三」及び卷第三「灌頂喩品第四」に相當す。
※地藏菩薩の發問。以下、北涼本「發問斷結品」に當る。
【一】宋・元・明三本並宮內省圖書寮本、一字を右に作る。
【二】Satpuruṣa また賢丈夫とも譯す。Mahāpuruṣa（大丈夫）Puruṣapuṃgava（勝男子）Puruṣavṛṣabha（勝丈夫）と同列の、敬稱。又、優婆塞を善男、または善士と譯すことあり。
【三】阿彌陀佛は、因位に於て、五劫思惟して、成佛して現に十劫なりといふ。地藏菩薩は今に、十三劫の修行を經たりといふなり。
【四】聖語藏本、除三災五濁を、三災及五濁に作る。
【五】Pañca kaṣāyā 惡世に起る五種の滓濁。五滓ともいふ。即ち(1)劫濁（Kalpa-kaṣāya）(2)見濁（dṛṣṭi-k.）(3)煩惱濁（kleśa-k.）(4)衆生濁（sattva-k.）(5)命濁（āyuṣ-k.）の五なり。
【六】供養。pūjanā.

多く[七]無間の罪を造り、　正法を誹謗し、
聖を毀り、惡見を起して、　妄りに[八]斷常の論を說き、
具さに十惡の業を造り、　後世の苦を畏れず、
多く三乘を遠離し、　臭穢にして惡趣に向ひ、
無明にして其の目を蔽ひ、　貪嫉にして[九]姦矯多き。
云何が[一〇]佛輪を轉じて、　此の衆生の類を度せん。
云何が相續すること、　金剛の如きの煩惱を破せん。
云何が總持の、　[一一]果して能く是の如きの忍を得ん。
今、我れ、導師を見たてまつるに、　大集、甚だ希有なり。
未だ曾て餘の處にて、　是の如きの衆德を具し、
杜多の功德を具して、　菩提の道を勤修するを見ず。
云何ぞ處愚の衆に、　能く佛輪を開示せん。』と。

世尊、告げて曰はく、

「善い哉、善い哉。善男子よ。汝、過去の殑伽沙等の諸佛世界の五濁惡時に於て、已に曾て殑伽沙等の諸佛世尊に是の如きの法の義を請問したてまつれり。汝、是の如きの所問の法の義に於て、已に劬勞を作し、已に善く通達し、已に衆行を圓滿せる彼岸に到り、已に[一二]善巧方便の妙智を得たるも、今、一切の有情を成熟して、利益安樂の事を得せしめんが爲の故に、一切の菩薩摩訶薩の善巧方便、聖行の伏藏、施等の六種の波羅蜜多、一切の有情を成熟する勝行、[一三]一切智智の功德の大海をして速かに圓滿ならしめんが爲の故に、一切の刹帝利王の諸の暴惡の行を轉じて、[一四]三惡趣に墮落せざらしめんが爲の故に、此の土の[一五]三寶の[一六]種姓をして威德熾盛にして久しく世に住まらしめんが

【七】五無間の罪惡業。即ち、殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血の五逆罪を指す。是れ無間地獄に墮すべき極罪なれば、無間といふ。

【八】常見、斷見の二見。常見とは世間及我の常有を執する邪見。斷見とは世間及び我の斷無を執する邪見なり。

【九】縮藏、姦字を奸に作る。

【一〇】Buddhacakra　法輪を同し。北京本には、法輪に作る。

【一一】三本並に宮內省本、果能を畏能に作る。

【一二】Upāya-kauśalya　方便善巧、善權方生、巧方便等に作る即ち機宜に順じて施設する巧好の智用を云ふ。

【一三】Sarvajñāna　薩婆若那。一切智と區別して、佛智を一切智智と呼ぶ。智中の智、佛自證の智なり。

爲の故に、復た如來に是の如きの法の義を問ひたてまつる。諦かに聽き、諦かに聽いて、善く之を思念せよ。吾、當に汝が爲に分別解說すべし。』と。

『唯然り、世尊よ、願樂して聞かんことを欲す、』と。

*爾の時、佛、地藏菩薩摩訶薩に告げて言はく、

『善男子よ、如來は、本願力に由つて「十種の佛輪」を成就して、此の佛土の五濁惡世に居するなり。一切の有情、一切の[一七]白淨の善法を退沒し、所有る七聖の財寶に[一八]匱乏し、一切の聰叡なる智者を遠離し、斷常の羅網に覆蔽せられ、常に好く諸の惡趣の車に乘馭し、[一九]後世の苦に於て怖畏を見ず、常に偏重なる無明の黑闇に處し、十種の不善業道を具足し、[二〇]五無間を造り、正法を誹謗し、賢聖を毀呰し、諸の善法を離れ、諸の惡法を具せり。吾れ是の如きの雜惡の土の中に住して、[二一]安隱住を得、無驚恐なることを得、[二二]無所畏なることを得て、自ら稱すらく、「我れ、[二三]大仙尊位に處して、佛輪を轉じ、諸の天魔外道の邪論を降し、一切の諸の衆生の類の猶し金剛の如き堅固なる煩惱を摧滅し、其の所樂に隨つて一切の有力の衆生を安置し、三乘の[二四]不退轉位に住せしめん、」と。

*善男子よ、譬へば國有つて時に君位虛しきが如し。其の中の所有る一切の人民自軍他軍の更相(たがひ)に侵害し、憂愁し、擾亂し、[二五]人衆不安にして、無量種の鬪訟違諍し、互相に[二六]欺凌し、諂言し、妄語し、麁惡もて乖離し、誣謅もて矯亂すること、種種の疾病・盲瞽[二七]昏暗・寒熱・瘧病・溫氣・疫癘・癲癇・乾枯・飲食の[二八]消せざること有りて、其の心狂亂し、諸根具はず、肢體缺減し、種種の衣食の資具に乏少し、一切の所有皆な樂しむ可からずして、諸の有情の類は種種の外道邪神に歸依し、惡見・惡意及び惡意樂、皆悉く熾盛にして、正道を迷失し、惡趣に臨墮せん。時に、彼の國の中に諸の耆舊、聰明・多智・博學・平恕・威嚴・整肅なるもの有つて、相與に謀議して諸の籌策を運らし、卽便ち國邑の人民を召集して、共に薦むる所を推して一の王子を取る。先に多種の布施と調伏と寂靜と尸羅と精

【一四】三惡道、三塗とも名づく、三善道に對す、三不善根によりて三種の其處に墮するを云ふ、卽ち、地獄、餓鬼、畜生の三道なり。

※十種の佛輪。

【一五】Ratna-traya, Tri-ratna 佛・法・僧の三寶なり。三寶の種姓とは、三寶に歸依せし徒輩は世間の四種姓の差別束縛を脫せるものなるをいふ。

【一六】三本及び宮本、姓字を性に作る。以下同之。

【一七】白淨善法とは白法（善法）に同じ、黑法（惡法）に對す、北本涅槃經第十九に「二の白法あり、能く衆生を救ふ、一に慚、二に愧」と說く。

【一八】聖語藏本、匱字を遺に作る。

【一九】Amutra 彼世、未來世。聖語藏本、後字を彼に作る。

※第一王輪。

【二〇】Pañcānantaryāṇi 五無間罪、五逆罪なり。
(1)殺父 Pitṛ-ghāta
(2)殺母 Mātṛ-ghāta
(3)殺阿羅漢 Arhad-ghāta
(4)破和合僧 Saṃgha-bheda
(5)出佛身血 Tathāgatasyāntike duṣṭa-cittarudhirotpādana

【二一】Yogakṣema 安穩。身安らかに心穩やかなるをいふ。

【二二】Vaiśāradya 無畏に同

進勇猛なるを具へ、難行苦行も一切備さに滿ちて、諸の殊勝の福德の相を具し、諸根圓滿にして支[二九]體缺くること無く、身形は長大に相好端嚴にして、最勝美妙の容色を成就し、常に一切の爲に尊重し恭敬せられ、率土の人民親愛せざるなく、稟性は淳質にして常に慈悲を懷き、博學多才にして諸の[三〇]伎藝を備へ、柔和忍辱もて其の心を莊嚴せり。是れ、大后妃の生めるところの嫡子なり。諸の妙香熏ぜる清淨水の冷暖を調和せるを以て其の身を沐浴し、種種なる上妙を香熏ある衆の寶もて莊嚴せる鮮淨の衣服を著し、[三一]末尼珠寶を髻の中に置在し、金寶の[三二]華鬘を其の首に冠飾し、素練の輕繒を髮際に束ね、又種種の末尼・眞珠・金銀等の寶を以て共に合成せられし[三三]珥璫・[三四]瓔珞・[三五]環珮・[三六]印等の衆の妙なる寶飾もて其の身を莊嚴し、寶履を織り成して下、其の足に承け、衆寶の傘蓋、上、其の頂を覆ふ。古昔の一切天仙の護持する所の座を安置し、一切の天帝の同許し共に護持する所の善巧に營構せる殊妙の大殿に趣入して、自ら先王の昇れる所の尊座に登り、王位を紹ぎ已つて、一切の天帝・龍帝・藥叉神帝・阿素洛帝・鳩畔荼帝の各ゝ護持する所の廣大の鍾鼓を扣擊するに、其の聲振響して國界に周遍す。刹帝利等の四大種姓の無量の人は、其の身を沐浴し、淨き衣服を著けて、種種の[三七]妙寶・繒綵・傘蓋・幢旛・末尼・眞珠・金銀・[三八]螺貝・[三九]璧玉・[四〇]珊瑚・[四一]頗瑠璃等の生色可染の無量の珍奇を執持して新王に奉獻して、以て嘉瑞を呈し、貴族にして淨行、博學、多才なる諸の婆羅門は、無量種の微妙の讃頌を以て帝德を歌詠し、種種の善事を王に於て呪願し、諸の吉祥を以て散じて王の頂に灑ぎ、先王の重んぜる所の宿望の貴族にして、博學多藝性直賢明なる、其の所應に隨つて授くるに種種の職位を以てせる、官僚は、諸の王事を理して、先には國境に於て自軍他軍更相に侵害せるに、今ま皆な息めしめ、亦た一切の怨敵惡友の能く害を爲す者をして皆な悉く殄滅し、自國の一切の[四二]黑品を損除し、自國の一切の[四三]白品を增益せしむ。

善男子よ、刹帝利種なる[四四]灌頂大王は、是の如きの「第一王輪」を成就せり。此の輪に由るが故

じ。佛の大衆中に於て法を說くに泰然として畏るることなき德。十力四無畏と對し、四種を數ふ。即ち一切智無所畏、漏盡無所畏、說障道無所畏、說盡苦道無所畏。

【二三】大仙尊位とは、佛位の敬稱。大仙とは、Mahārṣi の譯、また金仙ともいふ。如來の異名なり。

【二四】不退轉位とは不退に同じ、又阿鞞跋致、阿惟越致にして、聖果を得たるものは下位に退轉せざるを云ふ。

【二五】聖語藏本、人衆不安の四字を缺く。

【二六】三本、宮內省本、聖語藏本等、淩字を陵に作る。

【二七】三本及び宮本、營字を翳に作る。

【二八】宋・元・明三本、消字を銷に作る。

【二九】支字、三本及び宮本、肢に作る以下※同之。

【三〇】伎字、三本及び宮本、技に作る。以下※同之。

【三一】Maṇi（寶珠）。また摩尼。末尼寶珠。離垢、如意等と譯す。

【三二】Kusumamālā 冠りがた。花環。首、頭等に飾るもの。

【三三】Kuṇḍala 耳環、耳飾り。

flow? 自らの國土に於て安樂住を得、能く一切の怨敵惡友を伏し、善く身を守護し、壽命を増せしむ。

＊善男子よ、是の如きの雜染五濁惡世[四五]索訶佛土空無佛の時、其の中の所有る一切の衆生、自らの心中に[四六]隨眠・纏・垢を爲し、自軍他軍惱害し侵逼し愁憂し擾亂して愚冥にして安からず、無量種の斷常に執着することを起して鬪訟違諍し互相に輕蔑し、貪瞋癡諂誑言等を起して十種の不善業道を[四七]具足し、有情の紛擾の世界に執着して種種の煩惱・疾病を成就し、正法眼を闕いては忿恨もて[四八]燒惱し常に眞實の正法を思惟せず、正法味を棄てては善行を譏毀して受くる所の喜樂滋味に乏少しく、常に種種の煩惱の羅網の爲に覆蔽せられ、[四九]六種の外道邪師に歸依しては聖道を迷失して三惡趣に向ふ。此の土の中に於て諸の菩薩摩訶薩有り。已に過去に於て無量の諸佛に親近し供養じたてまつり、已に諸佛の功德大海に入り、已に諸佛の本と行ぜし所の道に住したるが、皆な共に集會して我が所に來至し、同じく我れに謂つて言はく、

『汝は、過去に於て已に無量の布施・調伏・寂靜・尸羅・精進・勇猛を修し、雜行苦行一切備さに滿せり。是れ諸の微妙の福慧・方便・大慈悲等の共に莊嚴する所の大いなる功德藏なり。是れ一切の[五〇]定・總持・安忍・[五一]諸地の功德の圓滿せる大海なり。諂ひ無く、誑り無し。身形は長大に相好も圓滿し、忍辱柔和にして、端正なること殊妙なり。復た他に依つて菩提の道を修せず、一切智海の已に圓滿なることを得、最も勝れたる美妙の容色を成就せり。能く一切の聲聞・獨覺の爲に大導師と作り、亦た能く一切の生死怖畏の衆生を安慰して、與に親友と作る。大慈悲等の無量の功德の共に莊嚴する所、是れ[五二]羯洛迦孫馱・[五三]羯諾迦牟尼・[五四]迦葉波如來等を父とする眞の子なり。此の[五五]賢劫に於て、當に作佛を得べし。一切の菩薩摩訶薩中、最も上首と爲す。諸の功德の種種の妙香の熏ぜる[五六]奢摩他・[五七]毘鉢舍那の清淨水を以てして自ら沐浴し、慚愧の衣を著け、清淨法界もて髻中の珠と爲し、諸佛所行の境界の廣大なる華鬘を冠飾し、束ねるに解脫の殊妙なる素練を以てし、又種種の一切智智・無生忍

【三四】Keyūra 臂嚴。

【三五】Valaya ? 腕環。玔字、聖語藏本には釧に作る。

※第一佛論。

【三六】Mudrikā ? 戒指印、指環？

【三七】Prṅga ? 綵帛、綵絹。

【三八】Śaṅkhādi.

【三九】Śilā ? 玻璃。

【四〇】Pravāḍa

【四一】Vaiḍūrya 毘琉璢。七寶の一、瑠璃に同じ。

筏字、三本及び宮本、吠に作る。

【四二】苦集二諦の事、流轉門を云ふ。惡法なり。

【四三】滅道二諦の事、還滅門を云ふ。善法なり。

【四四】Abhiṣecanī-mahārāja 天竺の國王は卽位の時に四大海の水を以て頂に灌ぐ。

【四五】sahā, sabhā. 娑婆に同じ。堪忍土又は雜會土と譯す。釋尊所化の土たる此の世界を云ふ。

【四六】隨眠(Anuśaya)纏(Paryavasthāna)垢(Mala)、共に煩惱の異名。俱舍論には、貪・瞋・慢・無明・見・疑の六隨眠を、無慚・無愧・嫉・慳・悔・眠・掉擧・惛沈の八纏を、また惱・害・恨・諂・誑・憍の六垢を擧げたり。

【四七】流布の一刊本には「貪

等の功德珍寶を以てして自ら莊嚴し、[五八]慈・悲・喜・捨を以て寶履と爲して能く三界を覆ひ、[五九]三種の妙行圓滿せる聖因を以て傘蓋と爲し、古昔の諸佛・天仙の共に護持する所の[六〇]金剛定の座を安置し、一切の聲聞・獨覺の恭敬し護持する[六一]四種の念住に趣入し、先に諸佛の敷ける所の座に坐して、[六二]無上正等菩提の一切智位を證得し、一切の三寶の種*姓をして斷絕せざらしめんが爲の故に、法輪を轉じ、法鍾鼓を擊ち、妙法の音聲もて三界に遍滿して、諸の天・龍・藥叉・羅刹・阿素洛・揭路茶・緊捺洛・莫呼洛伽・鳩畔茶・[六三]彌茘多・畢舍遮・布怛那・羯吒布怛那・人・非人等をして、[六四]四聖諦に於て皆な明解を得せしむ。[六五]三轉十二行相法輪は、一切の世間の所有る沙門若しは婆羅門、諸の天・魔・梵・人・非人等の[六六]轉ずること能はざる所なり。世間の無量の天人を利益し安樂にして、殊勝廣大なる義利を得せしめんと欲するが爲め、昔し未だ轉ぜざる所なるも、而も今ま之を轉ずるなり。」と。

善男子よ。我れ、是の如きの「第一佛輪」を成ぜり。此の輪に由るが故に、如實に此世・他世・[六七]是處非處を了知し、安隱住を得、無驚恐を得、無所畏を得て、諸の天・魔・外道の邪論を降し、[六八]大梵輪を轉じ、[六九]大梵行を成ず。我れ、此の[七〇]雜染世界の五濁惡時に應住し、大衆の中に處して正に師子吼し、諸の有情の五無間の業を、廣く說かば乃至は、諸の不善根をも滅し、一切の諸の衆生の類の堅きこと金剛の如くなる相續の煩惱を摧滅して、一切の永く諸漏を盡せる解脫の妙果を建立し、其の所樂に隨つて、一切の有力の衆生を安置して、三乘不退轉の位に住せしむ。

*善男子よ。剎帝利の灌頂大王の如きは、初めて王位に登り、帝職を受け已つて過去・未來・現在の諸王の法道を觀察し、其の種種の王業輪中に於て、「善く因果を觀察する報智」を以て、其の所應に隨つて、一切の輔臣僚佐、普く及び、國邑の愚智の人民の「三種の業輪」を建立し、此の業輪に由つて、率土の衆生の長夜に受用する所有る種種の意に適へる資具もて喜樂增長し、能く一切の怨敵惡友を滅す。

瞋癡諂誑言等の煩惱の十種の不善業道を起し」として、具足を煩惱に作る。

【四八】　宋・元・明三本並宮內省本、僥字を撓に作る。

【四九】　また六師外道ともいふ。佛在世當時に於ける六種の外道なり。名を擧ぐれば、

(1)富蘭那迦葉(2)末伽黎拘賒黎(3)刪闍耶毘羅胝子(4)阿耆多翅舍欽婆羅(5)迦羅鳩馱迦旃延(6)尼犍陀若提子

【五〇】　Samādhi　三摩地、三昧。等持とも譯す。

【五一】　菩薩の修行の階位を示す。十地の類を指す。

(1)Pramuditā　歡喜地。
(2)Vimalā　離垢地。
(3)Prabhākarī　發光地。
(4)Arciṣmatī　焰慧地。

※第二王輪。

(5)Sudurjayā　極難勝地。
(6)Abhimukhī　現前地。
(7)Dūraṃgamā　遠行地。
(8)Acalā　不動地。
(9)Sādhumatī　善慧地。
(10)Dharmameghā　法雲地。

右の諸地に於て、檀・戒・忍辱・精進・禪定・慧・方便・願・力・智の十波羅蜜を配當し、夫夫その一を成就しゆく修行の過程を、名けしもの。

※王の三種業輪。

(1)建立帝王業輪

何等をか名けて「三種の業輪」と爲す。一には、「建立帝王業輪」なり。謂く、善く軍陣鬪戰を教習して、他の兵衆を降して、人民を撫育す。二には、「建立田宅業輪」なり。謂く、善く造舍營農を教習して、安隱にして飲食充足なることを得せしむ。三には、「建立財寶業輪」なり。謂く、善く工商雜藝を教習して、種種の珍玩資財もて意に隨つて受用して諸の快樂を隨すことを得せしむ。善男子よ。刹帝利種の灌頂大王は、是の如きの「第二王輪」を成就せり。此の輪に由るが故に、自らの國土に於て、安樂住を得、能く一切の怨敵惡友を伏し、善く身を守護して壽命を增さしむ。

*善男子よ。是の如く如來も、初めて佛果を成じ、無上智を得て、過去・未來・現在の諸佛の法眼を觀察したまひ、「善く諸業法受の因果を觀察する報智」を以て、一切の所化の有情の「三種の業輪」を建立す。此の業輪に由り、能く三寶種*姓の法眼、長夜に不滅なる無上の正法をして熾盛に流通せしめ、諸の有情をして長く種種の生天涅槃安隱の快樂を受けしめ、及び、一切の外道の邪論をして我が正法眼を降伏すること能はざらしめ、而も能く如法に彼の邪論を摧く。

*善男子よ、何等をか名けて「三種の業輪」と爲す。一には「建立修定業輪」、二には「建立習誦業輪」、三には「建立營福業輪」なり。

*善男子よ、云何が如來の「修定業輪」なる。

定に十種有り。何等をか十と爲す。

謂く、(1)正に諸の有識身の六種の境界を觀察す。我我所執を以て其の因と爲し、業を良田と爲し、無明の覆蓋、愛を滋潤と爲して、自在有ること無く、他に依つて立ち、衆緣に繫屬す、と。業と煩惱と苦との三種の流を斷滅せんと欲するが爲の故に、是の如く觀察す。

(2)如何が業流なる。謂く、諸の有情の行ずる所の諸行なり。

(3)若し此の諸行、由る所の無明及び愛を因と爲して能く諸有を生ずるを、煩惱流と名く。

---

(2)建立田宅業輪
(3)建立財寶業輪

【五二】 Krakucchanda 舊稱の拘留孫佛なり。佛名。又、迦羅鳩忖馱、迦羅鳩飡陀。過去七佛の第四佛。

【五三】 Kanakamuni 過去七佛の第五佛。舊稱の倶那含佛。

【五四】 Kāśyapa 迦攝波、迦葉波に作る。過去七佛の第六。現在賢劫千佛の第三佛にして即ち釋尊の前出なり。舊稱の迦葉佛。人壽二萬歲時出世。

※第二佛輪。

【五五】 Bhadrakalpa 過去の住劫を莊嚴劫と名け、未來の住劫を星宿劫と名け、現在の住劫を賢劫と名く。亦善劫といふ。現在の住劫二十增減中に千佛の出世を說く。

※佛の三種業輪。
(1)建立修定業輪
(2)建立習誦業輪
(3)建立營福業輪
北本には、(1)坐禪(2)誦經(3)經營僧事の三業を擧ぐ。

※第一修定業輪。
十種の定を擧ぐ。

【五六】 śamatha. 寂靜、亦は止と譯す。諦理に停止し、又忘念を止息して不動なる狀態をいふ。止觀の一。

【五七】 vipaśyanā. 觀、見、觀

(4)若し煩惱に由りて、識を其の因と爲して衆緣和合せば名色生起し、名色を因と爲して衆緣和合せば六處生起し、六處を因と爲して衆緣和合せば觸受あり、後ち生・老死等有つて、次第に生起する、是を[七二]苦流と名く。

是の如きの三流、業を良田と爲し、無明を因と爲し、愛を滋潤と爲して、而して生長することを得、と。

(5)業を良田と爲し、無明を因と爲し、愛を滋潤と爲る三種の流を枯涸せんと欲するが爲の故に、[七三]五取蘊に於て觀じて、[七四]無常及び苦・無我なりと爲す。愚鈍無動にして、幻の如く、焰の如く、水中の月の如く、夢の所見の如し。[七五]空にして所有すること無く、無相・無願にして造作する所無く、生無く、起無く、出無く、像無く、寂靜・遠離にして出生する所無し、とす。五取蘊に於て、是の如く觀察して、能く空忍に順じ、無相忍に順じ、無願忍に順ず。

(6)五取蘊を觀ずることに隨順せんと欲するが爲に、復た方便し[七六]て入出息觀を修す。卽ち是れ、修習持來して念を去るなり。云何が、念に由つて如實に入る息、出づる息を歡察する。謂く、正に觀察すること、數の故に、隨の故に、止の故に、觀の故に、轉の故に、淨の故に。應に知るべし。此の中の數、能く二種の事業を造作す。一には能く依と爲り諸の尋伺を伏し、二には能く入出息の相を取る。隨も能く二種の事業を造作す。一には出離に依つて諸の尋伺を捨て、二には能く善く入出息の相を取る止も能く二種の事業を造作す。一には能く入出息の滅を示現し、二には能く[七七]勝三摩地に安住す。觀も能く二種の事業を造作す。一には能く入出息の盡を示現し、二には能く[七八]心及び心[七九]所法に安住して別異に觀察す。轉も能く二種の事業を造作す。一には能く方便して諸の取蘊を捨し、二には能く方便して聖地に趣入す。淨も能く二種の事業を造作す。一には能く結を捨し、二には能く見を淨らす。

察等と譯す、事理を觀見する禪觀の狀態を云ふ。止觀の二。なり。

【五八】所謂る四量心を擧ぐる。慈 Maitrī 悲 Karuṇā 喜 Muditā 捨 Upekṣā また、四等、四梵行などと稱す。此の四普く無量の衆生を緣じ無量の福を引くより、四無量心といふ。

【五九】また、三妙行、三牟尼といふ。身語意の三業を指す。

【六〇】Vajro nāma samādhi. 菩薩の最後位に最極微細の煩惱を斷ずる禪定の名。また、如金剛定卽ち金剛喩定と同一視され、或は、金剛喩定、金剛輪定と共に三種の金剛三昧の一ともせらる。

【六一】Catvāri smṛtyupasthānāni 四念處ともいふ。身(Kāya-s.) 受(Vedanā-s.) 心(Citta-s.) 法(Dharma-s.)の四種。

【六二】Anuttara-samyak-sambodhi 阿耨多羅三藐三菩提の譯。舊譯、無上正偏知、無上正遍道。眞正に徧く一切の眞理を知る無上の智慧。佛智の意。

【六三】Preta 俾禮多、薜禮多、薜荔多、閉黎多、閉戾多、閉麗多等に作る。死者、幽魂の義。餓鬼の總名。元・明二本、彌字を薜に作る。

【六四】Catvāry āryasatyāni.

是の如く六種に方便して、入出息觀を修習して、便ち能く五取蘊を觀ずることに隨順す。所以は何ん。是の如きの入息出息の自性をば色の取蘊と名け、是の如きの入息出息の領納をば受の取蘊と名け、是の如きの入息出息の取相をば想の取蘊と名け、是の如きの入息出息の造作をば行の取蘊と名け、是の如きの入息出息の了別をば識の取蘊と名く。是の如きの所説の五種の取蘊、各各別異にして互に相似せず、新新にして故に非ず、住無く積無きこと言說す可らざるなり。

是の如く五種の取蘊を觀察すれば能く[八〇]三行を除く。若し能く是の如く究竟じて隨觀せば三種の行盡きん。便ち、能く此の諸の有識の身、六種の境界に於て、究竟じて隨觀せば、我我所執・業・[八一]無明・愛の因・田・覆・潤、一切皆な盡く。

(7)是の如く四種の念住を修習すれば皆な圓滿なることを得。

(8)乃至、[八二]八支聖道を修習すれば皆な圓滿なることを得。

(9)是の如く、乃至、[八三]十八不共佛法を修習すれば皆な圓滿なることを得。

(10)是の如く、乃至、一切種の無生法忍・首楞伽摩三摩地等を修すれば皆な圓滿なることを得。

是の如く修習して持來し、念を去りて諸の靜慮に入るを、正法の勝義に住するの有情と名け、名けて眞實に靜慮を修習せりと爲し、名けて眞實に三世の諸佛世尊を供養せりと爲し、[八四]一切の佛心中の子の佛口より生ぜるものと名く。是れ法の所成、是れ法の所化なり。或は菩薩有つて、是の如く修習して漸漸に退轉し、乃至漏盡きて、[八五]阿羅漢と成らんに、[八六]六神通を具せん。或は菩薩有つて、是の如く修習して漸漸に増長し、功德圓滿して大菩薩と成り、乃至十八不共の佛法、一切種智、修習し圓滿せんに、此の人、久しからずして當に無上正等菩提を得べし。

善男子よ。我れ、是の如きの諸業法受因果の報智を以て三世諸佛の法眼を觀察して有情を安立し、此の十種の「修定業輪」に於て、其をして修習せしむ。善男子よ。是を如來の「修定業輪」と名く。

苦(Duḥkha)集(Samudaya)滅(Nirodha)道(Mārga)の四諦。

【六五】 Tri-parivarta-dvādaśâkāra-dharma-cakra-pravartana 三たび法輪を轉ずるに十二種の行相あるを云ふ。又、三轉四輪十二行法輪、四諦法輪三會十二轉說、三轉十二行法輪轉、三轉十二行等に作る。三轉とは、四諦を、三度繰返して說けるものにて、之を示相轉、勸相轉、證相轉といふ。十二行相とは、三周に四聖諦を循歷するが故に十二行相と云ひ、亦た三轉に各各眼・智・明・覺の四行相あるが故ともいふ。

【六六】 宮內省本、轉字を等に作る。

【六七】 如來十力の一なる「是處非處智力」をいふ。事の善惡を了知する智力。此世・他世を了知するといふは、三明を指すなり。

【六八】 Mahābrahma cakra 大法輪に同じ。

【六九】 Mahābrahmacarya 最勝淸淨行業・淨行といふに同じ。梵とは淸淨にして空有二邊を離れ、此淨心を以て慈悲心を起し普ねく衆生の苦を拔くを梵行と云ふ。大智度論卷八には十善業道を梵行と稱す。

*善男子よ、云何が如來の習誦業輪なる。謂く、諸の苾芻、或は苾芻尼、鄔波索迦、鄔波斯迦、或は復た淨信の諸の善男子、或は善女人の、善根微薄にして[八七]世俗諦に依りて[八八]根機未だ熟せざらんに、我れ當に是の如きの有情を安置して、其をして習誦して、[八九]初夜[九〇]後夜に精勤して怠ること無からしむべし。若し諸の有情、無上智を求めんに、我れ當に純淨の大乘を安置して、其をして自ら讀ましめ、或は他をして讀ましめ、其をして自ら誦せしめ、或は他をして誦せしめ、其をして自ら說かしめ、或は他をして說かしめ、大乘の中に於て其をして自ら習はしめ、或は他をして習はしむ。自身及び他身中の[九一]大煩惱聚をして皆な除滅せしめんが爲の故に、無上智を證得せしめんが爲の故に、一切有情の苦を除かんが爲の故に、[九二]無畏城に趣入せしめんが爲の故となり。若し諸の有情、緣覺乘を求めんに、我れ當に諸の緣起法を安置して、其をして習誦せしむべし。若し諸の有情、聲聞乘を求めんに、我れ當に百千[九三]文頌の四阿笈摩、百千文頌の[九四]毘奈耶藏、百千文頌の[九五]阿毘達磨及び[九六]毘婆沙を安置して、其をして習誦せしむべし。善男子よ。是を如來の「習誦業輪」と名く。

*善男子よ、云何が如來の「營福業輪」なる。謂く、諸の有情の根機愚鈍にして未だ善根を種ゑず、智慧微劣にして懈怠失念し、種種の受用の資具に染著して善友を遠離せんに、我れ當に是の如きの有情は安置して、福業を營ましむべし。謂く、佛法僧の事、及び[九七]親教師、[九八]軌範師の事を修作せしむべし。善男子よ、是を如來の「營福業輪」と名く。

善男子よ、我れ是の如きの「第二佛輪」を成ぜり。此の輪に由るが故に、其の無上の[九九]三世業智を以て如實に一切有情の諸業法受の、因及び果報を了知し、其の所應に隨つて三の業輪を立てて一切所化の有情を成熟し、安穩住を得、無驚恐を得、無所畏を得、諸の天・魔・外道の邪論を摧き、大梵輪を轉じ、大梵行を成じ、如實に衆生の因報を了知するなり。

※第二、習誦業輪。
【七〇】 娑婆世界のこと。雜會とも稱す。
【七一】 以下十二因緣の次第生起を觀察するなり。是れ緣覺佛、即辟子佛の觀門にして衆生が三世に涉りて六道に輪廻するの次第の緣起を說きしものなり。今その名目を示せば次の如し。
(1)無明 Avidyā (2)行 Saṃskāra (3)識 Vijñāna (4)名色 Nāmarūpa (5)六處（六入）Ṣaḍāyatana (6)觸 Sparśa (7)受 Vedanā (8)愛 Tṛṣṇā (9)取 Upādāna (10)有 Bhava (11)生 Jāti (12)老死 Jarāmaraṇa
【七二】 苦、字三本及び宮本、業に作る。
※第三、營福業輪。
【七三】 Pañca upādāna-skandhā 五受陰又は五蘊ともいふ。煩惱を生ずる。五種の有爲法をいふ。即ち
(1)色蘊 rūpa-skandha
(2)受蘊 vedanā-skandha
(3)想蘊 saṃjñā-skandha
(4)行蘊 saṃskāra-skandha
(5)識蘊 vijñāna-skandha
此の五取蘊の苦集滅道の四諦十六行相を觀ずるなり。
※第三王輪
【七四】 三法印を擧ぐ。また無

*善男子よ、刹帝利の灌頂大王の如きは、[一〇〇]善巧智を成じて、一切の[一〇一]沙門・婆羅門・刹帝利・[一〇二]茷舍・戍達羅等の種種の功德、多聞・勇健・工巧・*伎藝を觀察す。若し諸の衆生、功德を富有し、[一〇三]巧便智を成じ、精進勇猛堅固にして退せず、種種の福德もて而も自ら莊嚴せんに、此の殺帝利の灌頂大王、彼の所應に隨つて、珍寶・財穀・田宅・奴婢・僕使を給施す。自らの國土に於て、若し諸の衆生、德藝輕微にして[一〇四]功德尠薄ならんに、此の刹帝利の灌頂大王、彼の所應に隨つて、微しく[一〇五]賑恤を加ふ。自らの國土に於て、若し諸の衆生、功德薄劣にして精進に少しく、懈怠懶惰にして正念を忘失し、慈悲の心無く、恩報を知らず、後世の[一〇六]苦に於て怖畏を見ず[一〇七]居家の泥に沒して諸の惡行を積まんに、此の刹帝利の灌頂大王、彼の所應に隨つて、種種に謫罰し、或は言教を以て苦切し、呵責し或は種種の珍寶資財を奪ひ、或は受用如意なる產業を奪ひ、或は鞭杖もて罰し、或は牢獄に禁じ、或は*支節を斷ち、或は身首を斬り、是の如く無量に應に隨つて[一〇八]謫罰す。

善男子よ。刹帝利種の灌頂大王は、是の如きの「第三王輪」を成就せり。此の輪に由るが故に、自らの國土をして增長安樂ならしめ、能く一切の怨敵惡友を伏し、善く身を守護して、壽命を增さしむ。

善男子よ。是の如く、如來も、「善巧知根機智」を成就せり。若し諸の弟子、福慧・巧方便智及以び、[一〇九]布施・[一一〇]調伏・寂靜を遠離し、失念心亂して、我が所に來至して我に歸依せんに、而も我れ、善く彼が根・意樂・隨眠・勝解を知り、其の所應に隨つて、爲に[一一一]治罰毘奈耶の法を說く。若し諸の衆生、其の性[一一二]佷戾にして諸の[一一三]學處に於て奉持すること能はざらんに、我が聖教を久住せしめんが爲に、多く所作すること有り、[一一四]或は爲に憶念治罰を制立し、[一一五]或は言教を以て恐怖呵責して或暫く驅擯し、[一一六]或は折伏し歸誠して禮拜せしめ、[一一七]或は與に語らず共に利を同うせず、[一一八]或は草布の如くし、[一一九]或は復た滅擯す。我れ、妙智を以て諸の有情の[一二〇]補特伽羅の根機・意樂・隨眠・勝解を知り、應の如くに謫

常・苦・空無我に作る。五取蘊の(1)無常 Anitya (2)苦 Duḥkha (3)無我 Anātmaka を覺ずとは苦聖諦を觀ずるなり。

【七五】三解脫門 Tripi vimokṣa-mukhāni を擧ぐるなり。所謂る、空(Śūnyatā)無相(Animitta)無願(Apraṇihita)の三三昧なり。また三治、三空、三三摩地、三定、三等持といふ。空三昧とは、苦諦の空・無我の二行相と相應する三昧。諸法は因緣生にして、我なく、我所有なしと觀ず。無相三昧とは、滅諦の滅・靜・妙・離の四行相と相應ずる三昧。涅槃は色聲等の五法、男女の二相及び三有爲相を離るれば無相と名く。無願三昧とは、又無起三昧、無作三昧ともいふ。苦諦の苦・無常の二行相、集諦の因・集・生・緣の四行相と相應ずる三昧。此の六行相は厭離すべく、又道諦の道・如・行・出口の四行相も捨つべきが故に、總して之を願樂せざれば、無願三昧といふ。

※第三佛輪

【七六】Anāpānabhāvanā 又、阿那波那、阿那阿波那、阿那般那、安那般那、安般等に作る。數息觀ともいふ、出息入息を數へて心を鎭る觀法。その入出息念の次第は、即ち

罰す。皆て廣大の積聚せる無義にして黒闇なる枯竭せる煩惱の諸[一二一]瀑流を破せしめんが爲の故に、生天涅槃の樂を得せしめんが故に、惡道を行ずる補特伽羅に調伏を得するが爲の故に、其の所應に隨つて、治罰の法を說く。[一二二]黒說と[一二三]大說の差別を觀察して、其の所應に隨つて、行惡道を治罰するの法を授與す。我れ、妙智を以て諸の有情の增上の信敬、純淨の意樂を具足し成就することを知つて、其の所應に隨つて、爲に種種の[一二四]善品の差別を說きて、其をして修學せしめ、乃至、彼をして一切の善根皆な圓滿なることを得て、無畏城に入らしむ。

善男子よ。我れ、是の如きの「第三佛輪」を成ぜり。此の輪に由るが故に、諸の有情の補特伽羅の種種の根機・意樂・隨眠、及與び、勝解の諸業法受を知つて、其の所應に隨つて、利益し安樂にして、安隱住を得、無驚恐を得、無所畏を得て、自ら稱すらく、『我れ、大仙の尊位に處して、佛輪を轉じ、諸の天・魔・外道の邪論を摧く』と。大衆の中に處して、正に師子吼す。

*善男子。よ剎帝利の灌頂大王の如きは、自らの國土に無量の有情、補特伽羅有つて、種種の邪神外道に歸依し、邪信を起し及び邪見を起して、[一二五]邪の禁戒を學び、邪の吉凶相を執著し、修治して、具さに種種の無利益の苦を受くることを知るに、大王、知り已つて數數召し集めて、其の先王の治國の正法を以て、開悟し示現し教習し誡勅して、其をして倒の信、倒の見を捨除して、先王の正直の舊法を修學せしめ、自らの國土の一切の有情をして、一趣・一歸・一意・一欲にして、一切和合して、同じく、先王の正法に依つて、而も轉じて、詔命を聽受し隨順奉行し、率土和同して、所應の作を作さしむ。時に剎帝利の灌頂大王、常に群臣と數數集會して、共に嘉[一二六]餚を味ひ諸の快樂を受け嬉戯遊行し、相猜貳せず、咸く共に讌咨して、諸の王務を理す。

善男子よ。剎帝利種の灌頂大王は、是の如きの「第四の王輪」を成就せり。此の輪に由るが故に、自らの國土をして增長安樂ならしめ、能く一切の怨敵惡友を伏し、善く身を守護して、壽命を增さ

---

(1)數 Gaṇanā.
(2)隨 Anugama.
(3)止 Sthāna.
(4)觀 Upalakṣaṇā.
(5)轉 Vivartanā.
(6)淨 Pariśuddhi.
等なり。

【七七】勝れたる三摩地、即ち三昧。三摩地とは、譯して定、等持、又は一境性といふ。

【七八】心・心所法、また心・心所有法ともいふ。(1)心 Citta-dharmā 事物を了識するもの。(2)心所有法 Caitasika-dharmā 心法に附隨して起るもの、心所法、心法所有の法なれば、心所法、心所有法と名く。五位七十五法又は五位百法の中の二位なり。

※第四王輪

【七九】所字、麗本之を缺く。今は三本及び宮本の心所法と作るに從ふ。

【八〇】三行、とは身、口、意の三業を云ふ。

【八一】麗本、究竟以下、「究竟隨觀我我所執業於無明愛因田潤一切皆盡」に造る。今、三本及宮內省本に依り於字を省路せり。

【八二】Āryāṣṭāṅgika-mārga 八正道支、八正道分、等に作

しむ。

＊善男子よ。是の如く、如來も、善巧知勝解智を成就せり。諸世間の種種なる邪歸・邪見・邪意もて、邪法[一二七]・邪行の業行に樂著し、是の因緣に由つて、無量の苦を受くるを見るに、如來、見已つて、數數召し集めて、大衆の前に於て、其の過去の諸佛世尊の三寶種性の因果、[一二八]六種の波羅蜜多[一二九]瑜伽依因の[一三〇]三律儀等の諸の因果法を以て、一切の衆會を開悟し示現し慶慰し誡勅して、其をして諸の顚倒の見を解脫して正見を建立せしめ、十善の正直の舊道を安置し、諸の有情と共に數數同じく[一三一]法隨法行[一三二]・方便引攝[一三三]・因果等流を修し、諸の有情の爲に[一三四]四衆和合して同じく一切の殊勝の善行を修し、便ち共に四種の念住に遊戲し、三摩地[一三五]・解脫知見の諸の道品中に於て歡娛受樂し、聖敎をして世に久住せしめんが爲の故に、三寶の種を紹ぎて斷絕せざらんが故に、便ち共に[一三六]四正勤[一三七]・四神足・[一三八]五根・[一三九]五力・[一四〇]七等覺支・[一四一]八聖道支に遊戲し、其の種種の勝三摩地・解脫知見の諸の道品中に於て歡娛受樂す。

善男子よ、我れ、是の如きの「第四佛輪」を成ぜり。此の輪に由るが故に、諸の有情、補特伽羅の種種の勝解・歸趣・意樂の諸業の法受を知り、其の所應に隨つて、利益し安樂にして、安隱住を得、無驚恐を得、無所畏を得て、自ら稱すらく、「我れ大仙の尊位に處して、佛輪を轉じ、諸の天・魔・外道の邪論を摧く、」と、大衆の中に處して正に師子吼す。

＊善男子よ。刹帝利の灌頂大王の如きは、自らの國土、或は他の國土に無量の有情、補特伽羅の有つて、自らの財色に於て耽染して厭くこと無く、他の財色に於て貪求して追愛するを知り、卽便ち堅固の城[一四二]郭・村坊・戍邏・國邑・王宮、廣く說かば乃至は、舍羅・鸚鵡・防守の衆具を安置して損失することと無からしむ。

善男子よ。刹帝利種の灌頂大王は、是の如きの「第五王輪」を成就せり。此の輪に由るが故に、自

る、三十七道品の一、八正道は四諦中、滅諦に至る道諦なり、卽ち、
(1)正見
(2)正思惟
(3)正語
(4)正業
(5)正命
(6)正精進
(7)正念
(8)正定

※第四佛輪

【八三】十八不共法。十八種の共通ならざる法の意、卽聲聞、緣覺に通ぜず、唯佛のみ有せらるる十八種の功德法、を云ふ。大毘婆沙論卷十七、倶舍論第二十七に依れば、十八とは、十力、四無畏、三念住、及び大悲、の十八種を言ふ。

【八四】婆羅門の、自らの尊貴なる性質の由來を梵主の口より生ぜりとするに比し、佛子の尊貴なる性質を述べたもの。

※第五王輪

【八五】Arhān 略して羅漢。應供と譯し、又、殺賊、不生ともいふ。人天の供養を受くべき人、煩惱の賊の殺害者、永く涅槃に入り再び生死の果報を受けざる者の意。小乘の極果なり。

【八六】Ṣaḍ abhijñā 六通、六種神通力など云ふ。卽ち、身如意通、天眼通、天耳通、他

らの國土をして增長安樂ならしめ、能く一切の怨敵惡友を伏し、善く身を守護して、壽命を增さしむ。

善男子よ。是の如く、如來も、「善巧知諸性智」を成就せり。諸の惡魔及び[一四三]九十五衆の邪外道、並に餘の無量の衆魔外道所[一四四]惑の有情の、自らの財色に於て耽染して厭くこと無く、他の財色に於て貪求して追愛し、我が自らの身、及び我が徒衆に於て[一四五]深く憎嫉を生じ、我を害せんが爲の故に假に珍饌を設けて雜るに毒藥を以てし、闇に火坑を置きて僞つて床座を敷き、或は山石を推し、或は狂象を放ち、劍を拔きて追逐し、坌塵の穢を散じ、婬欲を行ずるを謗りて、是れ[一四六]不男と毀り、或は非人と謂ひ、或は幻化と言ひ、是の諸の惡を以て、而も相誹毀し、佛法僧に於ても亦た無量の種種なる誹謗、罵詈、毀辱を起し、我が近住の聲聞弟子に於て嫉妬して因緣もて諸の毀謗を起すを知るに、如來、知り已つて、善く六根を守つて、四梵住に依り、四辨才を具して、諸の聲聞の爲に[一四七]法要を宣說して、淸淨の[一四八]三解脫門を安立す。我れ、是の如きの世・出世間の知諸性智を以て、如實に一切の衆生の種種無量の諸性の差別を了知して、其の所應に隨つて、爲に饒益を作すなり。

善男子よ。我れ、是の如きの「第五佛輪」を成ぜり。此の輪に由るが故に、世・出世の知諸性智を以て、諸の有情の補特伽羅の種種なる無量の諸性の差別を知つて、其の所應に隨つて、利益し安樂にして、安隱住を得、無驚恐を得、無所畏を得て、自ら稱すらく、「我れ、大仙の尊位に處して、佛輪を轉じ、諸の天・魔・外道の邪論を摧く」と、大衆の中に處して、正に師子吼す。

*善男子よ。刹帝利の灌頂大王の如きは、一切の堅固なる城郭・村坊・戍邏・國邑・王宮、廣く說かば乃至は、舍羅・鶡鳿・防守具を安置し已つて、自らの宮中に處して、諸の眷屬、后妃、[一四九]婇女と與に、而も自ら圍遶せられて、五欲の種種の樂具を遊戲して、六根を放恣して諸の喜樂を受く。

善男子よ。刹帝利種の灌頂大王は、是の如きの「第六王輪」を成就せり。此の輪に由るが故に、

心通、宿命通、漏盡通、の六通をいふ。

【八七】 Saṃvṛtisatya 眞諦に對す。世間の生滅の法を云ふ。

【八八】 機根ともいふ。根性、性質、人間性の意。轉じて、佛の敎化を受くるに堪うる性質を指す。

【八九】 晝夜六時の一、夜間の初分。六時より十時に至る頃。

【九〇】 同じく夜間の、初中後三分中の後分、寅の剋より日出の二時より六時の間の頃。

【九一】 麗本、衆字を衆に作る。今は三本及宮本に依る。

【九二】 涅槃のこと。

【九三】 四阿含 Āgama. のこと。長・中・雜・增一の四。小乘の經部なり。今、經藏を指す。

【九四】 Vinaya-piṭika. 律藏。

【九五】 abhidharma. 阿毘曇に作り、略して毘曇とも云ふ。論のこと。論藏を指す。

【九六】 vibhāṣā. 廣說、勝說、異說、又は種種說と譯す。

※第六王輪

【九七】 Upādhyāya 鄔波馱耶。親敎師と譯し、略して親敎ともいふ。舊に和尙と謂ふ。親しく敎を受くる師なり。

【九八】 Acārya. 阿闍梨、阿祇利、阿遮利夜、阿遮梨耶。敎授と譯し、亦た、軌範、正行と譯す。弟子の行爲を矯正し

自らの國土をして增上安樂ならしめて、能く一切の怨敵惡友を伏し、善く身を守護して、壽命を增さしむ。

*善男子よ。是の如く、如來も、諸の菩薩摩訶薩衆及び大聲聞と與に、一切の堅固なる聖教の防守の事を安置せり。卽便ち、現に[一五〇]最初の靜慮に入り、乃至、現に第四の靜慮に入り、現に[一五一]無邊虛空處定に入り、廣く說かば乃至、現に悲想非非想定に入り、是の如くして乃至は、現に一切の佛所行の定に入る。此の定に入り已るに、無量の百千　*倶胝那庾多の天・龍・藥叉・羅刹・健達縛・阿素洛・揭路荼・緊捺洛・莫呼洛伽・*彌茘多・畢舍遮・布怛那・羯吒布怛那等、諸の衆生に於て常に毒惡損害の心を懷き、慈無く悲無く、後世の苦に怖畏を見ざれど、而も彼れ、我の一切の佛所行の定に入るを見て、皆な我が所に於て大歡喜を生じ、淨信の心を起して、三寶の中に於て皆な最勝の歡喜と淨信とを生じ、尊重し恭敬して未曾有なることを得、一切の惡を慚愧發露して、深心に過を悔ひ、永く斷たんことを誓願して、是の因緣に由つて、一刹那の頃に無量無數の諸の[一五二]煩惱障・業障・法障の皆な[一五三]銷滅することを得、無量無數の福慧資糧の皆な成滿することを得て、生死を背離し、涅槃に趣向し、如來の無上の正法を護持す。

善男子よ。我れ、是の如きの「第六佛輪」を成ぜり。此の輪に由るが故に、如來は、靜慮・解脫・等持・等至の無量の百千の微妙の深き定に遊戲して、淨智を以て、隨つて諸の有情の無量の煩惱を轉滅し、其の所應に隨つて利益し安樂にして、安隱住を得、無驚恐を得、無所畏を得て、自ら稱すらく、「我れ大仙の尊位に處して、佛輪を轉じ、諸の天・魔・外道の邪論を摧く、」と、大衆の中に處して、正に師子吼す。

*善男子よ。刹帝利の灌頂大王の如きは、諸の群臣と與に、[一五四]四兵衆を領して周巡して一切の自國の城邑、聚落、山川、[一五五]谿澗、園苑、田澤、陂河、池沼、曠野、叢林、鎭邏等の處を觀察し、彼の所在

その軌則師範となるべき師僧。
【九九】如來十智の一。三世智。三世の法に通達圓明なる智。
※第六佛輪。
以下北涼本「灌頂喩品」に當る。
【一〇〇】善巧方便智の略。善良に巧妙に衆生を導く方便に關する智慧。
【一〇一】śramaṇa. 具には舍囉摩拏。桑門、功勞、劬勞、靜志、勤息、貧道等に譯す。出家の總稱なり。
【一〇二】伐字、明本及び宮本、聖本等、筏に作る。
【一〇三】善巧智に同じ。善巧方便智の略。
【一〇四】麗本等、德字を業に作る。今は明本及び宮本に依る。
【一〇五】聖語藏本、賑を振に作る。
【一〇六】苦字、宮內省本、共に作る。
【一〇七】居字、宋本及び宮本、尼に作る。
【一〇八】讁字、三本及び宮本、之を謫に作る、以下※同之。
【一〇九】毘奈耶、毘尼の飜。律儀のこと。
【一一〇】涅槃の理。
※第七王輪。
【一一一】所謂不癡毘奈耶(Amūḍhavinaya.)を指す。治罰毘奈耶とは、治罪羯磨の意にして、今は、七滅諍法のこと。

に隨つて、國界の諸方の[一五六]嶮阻多難にして營理するに任せず、外境の怨敵惡友の投竄し藏伏するを容るるに堪ふるの疑有り怖れ有らんに、此の刹帝利の灌頂大王、其の力能に隨つて、方便して種種の修理、[一五七]堅固の防守を安置して、彼の諸方をして、平坦にして難無く營理に堪任し、其の外境の怨敵惡友の投竄し藏伏するを遮るに疑無く怖無くして、自國の一切の人民を安撫し、皆な衆苦を離れて、諸の快樂を受けしむ。

善男子よ、刹帝利種の灌頂大王は是の如きの「第七王輪」を成就せり。此の輪に由るが故に、自らの國土をして增上安樂ならしめて、能く一切の怨敵惡友を伏し、善く身を守護して壽命を增さしむ。

※善男子よ。是の如く、如來も、其の[一五八]佛眼を以て、如實に一切の有情、補特伽羅の貪有り、瞋有り、癡心等有るを了知し、如實に是の諸の有情の種種の煩惱の病行の差別を了知するに、如來、知り已つて、便ち、無量の精進・勇猛・方便の勢力を起して、其の宜しき所に隨つて、授くるに種種の修定の妙藥を以てし、諸の有情をして精進し修學して煩惱の病を除かしむ。若し、諸の有情の、宜しく不淨を修して煩惱の病を除くべきには、即便ち、授くるに修不淨の藥を以てし。若し、諸の有情の、宜しく梵住を修して煩惱の病を除くべきには、即便ち、授くるに修梵住の藥を以てし。若し、諸の有情の、宜しく緣起を修して煩惱の病を除くべきには、即便ち、授くるに修緣起の藥を以てし。若し、諸の有情の、宜しく[一五九]息念を修して煩惱の病を除くべきには、即便ち、授くるに修息念の藥を以てし。若し、諸の有情の、宜しく三解脫門を修して煩惱の病を除くべきには、即便ち、授くるに三解脫門を修するの藥を以てし。若し、諸の有情の、宜しく靜慮を修して煩惱の病を除くべきには即便ち、授くるに修靜慮の藥を以てし。若し、諸の有情の、宜しく[一六〇]無色を修して煩惱の病を除くべきには、即便ち、授くるに修無色の藥を以てし。若し、諸の有情の、乃至は宜しく首楞伽摩諸

【一二二】三本及び宮本、假字を很に作る。

【一二三】śikṣāpada. 所學の處の意。即ち五・八・十・具等の戒にして、此等は比丘比丘尼等の所學の處なるが故なり。

【一二四】憶念毘奈耶(Smṛtivinaya.)のこと。七滅諍法の一。餘人をして憶念陳述せしめて、犯罪を所決し治罰す。

【一二五】現前毘奈耶(sammukhavinaya.)を指す。現前に三寶の教法、戒律の制條を引證して治罰す。又、現前に對決せしめて、治罰するをもいふ。

※第七佛輪

【一二六】所謂る自言毘奈耶(Tatsvabhavaiṣiya. 求彼自性)を指す。自ら發露懺悔して治服す。

【一二七】所謂る多語毘奈耶(pratijñākāraka. 自言)をいふ。或は顯露に、或は祕密に、籌に依りて所存を投票せしめ多數決に依て治罰す。

【一二八】所謂る草覆地毘奈耶(Tṛṇastāraka.)をいへり。諍ふ二衆中の各一の上座に依て、滅諍の言を陳べしめて止息せしむ。恰も草の地を覆ふが如く、法藥の諍論を覆ふなり。

【一二九】所謂る罪處所毘奈耶(Yadbhūyasikīya.)を指すなるべし。擯出羯磨即ち白四羯磨に依り、その罪を治罰す。

三摩地を修して煩惱の病を除くべきには、即便ち、授くるに首楞伽摩三摩地の藥を以てす。如來の諸の有情に是の如きの法藥を授くるが所以に、一切の所化の有情をして[一六一]四魔怨の爲に繫攝せられしめず、一切の所化の有情をして人天乘に背いて諸の惡趣に向はしめず、如來の無上の法眼、三寶の種姓をして速疾ゞに壞滅せしめず。是に由つて、如來、諸の有情に是の如きの法藥を授くるなり。

善男子よ。我れ、是の如きの「第七佛輪」を成ぜり。此の輪に由るが故に、其の「無上遍行智」を以て、諸の有情に種種の法藥を授けて、勸めて修學して煩惱の病を除かしめ、安隱住を得、無驚恐を得、無所畏を得て、自ら稱すらく、「我れ大仙尊位に處して、佛輪を轉じて、諸の天・魔・外道の邪論を摧く、」と、大衆の中に處して、正に師子吼す。

*善男子よ。刹帝利の灌頂大王の如きは、自他の本昔の種姓、初生の童子の嬉戲等の事を憶念す。謂く、自他を憶念すとは、是の如きの處に於て、初生沐浴し、懷抱乳哺し、支節を按摩し、乃至、戲笑し、或は灰土を弄し、或は侍徒と種種に遨遊し、或は技藝を習ひ、或は復た種種の事業を修營し、或は他國に遊んで夙夜に[一六二]栖泊し或は王に奉事し、或は王務を理り、或は太子と爲り、或は王位に登つて、大自在を得て、諸の快樂を受け、廣く大いに名稱諸方維に遍し、と。是の事を念じ已りて、先王の遵ふ所の王法を安立し、一切の國土の人民を撫育して、自國を守護して他境を侵さず。

善男子よ。刹帝利種の灌頂大王は、是の如きの「第八王輪」を成就せり。此の輪に由るが故に、自らの國土をして增長安樂ならしめ、能く一切の怨敵惡友を伏し、善く身を守獲して壽命を增さしむ。

*善男子よ。是の如し、如來も、大衆會に處して、自他の宿世に經し所の無量の雜事を憶念す。謂く、一生、或は二、或は三、乃至、無量百千の生事を憶す。或は[一六三]成劫を憶し、或は[一六四]壞劫を憶し、

滅擯とは、重罪を犯して悔心なきものは僧籍を滅して之を擯出するをいふ。
【一二〇】Pudgala. 舊に人又は衆生と譯し、新には數取趣と譯す。しばしば五趣を取つて輪廻する義。
【一二一】瀑字、三本及び宮本、暴に作る。瀑流又暴流とも作るなり。梵語 Ogha. 三界の煩惱能く善品を漂流するが故に、暴流と名く。倶舍には、欲・有・見・無明の四暴流を說く。
【一二二】邪說。邪教。
【一二三】佛說。佛陀の教說。
【一二四】五戒、十善業等の善法のこと。白品ともいふ。
※第四王輪。
【一二五】禁戒。戒律のこと。律儀とも云ふ。Saṃvara. または Saṃyama. 或は亦た Saṃvarakaraṇīyā. 等の譯語とさる。亦は、護、應護等とも譯す。特に五戒八戒等の別解說脫律儀を指す。邪禁戒とは十惡不律儀等なり。
【一二六】聖語藏本、餚字を肴に作る。
【一二七】邪行の二字、麗本には、行邪に造る。今は、三本及び宮本に依る。
※第八佛輪。
【一二八】Sad pāramitā. 六波羅蜜、六度、六到彼岸ともいふ。

或は無量の成劫壞劫を憶す。曾て過去に於て、是の如きの處に住して、是の如きの名字、是の如きの種姓、是の如きの種類、是の如きの飲食にして、是の如く苦受樂受を領納せること、是の如きの壽量、是の如きの久住にして、是の如く壽量の邊際を極めて彼處より沒して此の間に來生し、復た此より沒して彼處に往生せること。宿世の是の如き等の事の無量無邊を憶念して、諸の衆生の根性の差別に隨つて、正法を建立して、爲に饒益を作す。

善男子よ。我れ、是の如きの「第八佛輪」を成ぜり。此の輪に由るが故に、無量の有情を利益し安樂にして、安隱住を得、無驚恐を得、無所畏を得て、自ら稱すらく、「我れ大仙の尊位に處して、佛輪を轉じて、諸の天魔外道の邪論を摧くなり」と、大衆の中に處して、正に師子吼す。

*善男子よ、刹帝利の灌頂大王の如きは、念に隨つて、自國の有情の種姓、伎藝、及び諸の事業の、此に死し彼に生ずるの因果の勝劣差別あつて同じからざることを觀察して、彼の有情の是の如きの家に生じて、其の身の勇健、或は復た怯弱、諸の伎藝に於ける已學と無學、所有の事業の善作と惡作、富貴と貧賤、端正と醜陋、是の如き等の類、乃至、命終するに、或は自業未だ盡きずして死する有り、或は自業已に盡きて死する有り、或は王法を犯して刑戮されて死し、或は遞ひに相ひ殘害して死し、或は鞭杖の捶楚に因つて死し、或は囹圄の幽縶に因つて死し、或は習學の伎藝に因つて死し、或は戰陣の傷殺に因つて死し、或は鬪諍の歐擊に因つて死し、或は財寶の貪悋に因つて死し、或は色欲の耽湎に因つて死し、或は忿恨の結憤に因つて死し、或は勞倦の頓弊に因つて死し、或は飢渴の[一六五]乏絕に因つて死し、或は過有つて死し、或は過無くて死し、或は耆[一六六]年にして死し、或は壯年にして死し、或は幼年にして死し、或は種種の善業を作して死し、或は種種の惡業を作して死することを知り、諸の有情の善業を行ずる者は身壞し命終らば當に[一六七]善趣に往くべきことを知り、諸の有情の惡行を行ずる者は身壞し命終らば當に[一六八]惡趣に往くべきことを知る。是の事を知り已つ

布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六種。

【一二九】Yoga. また觀、修習とも譯す。相應に、境・行・理・果・機相應の五義あり。顯教には理相應、密教には行相應の義を取る。觀法なり。瑜伽觀行ともいふ。

【一三〇】無表(無作)の戒體を名けて律儀となす。又、護とも譯す。梵語 Saṃvara 三律儀とは、(1)別解脫律儀。欲界に於て戒法を受けて發生する戒體。(3)靜慮生律儀。色界諸定に入て自ら發生する戒體。又、禪律儀ともいふ。(3)道生律儀。無漏定に入て發生する戒體。又、無漏律儀ともいふ。前二者は有漏の律儀なりとす。

※第九王輪

【一三一】華嚴經の法師十德の一。說法を聞きて、一切衆生の如說に修行し隨順して違ふことなく、諸の勝行を修すること。

【一三二】方便引入ともいふ。方便をめぐらして無緣の衆生を佛道に引入攝取すること。

【一三三】因果の相應せること。

【一三四】比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の、佛徒たる出家在家の男女を指す。

【一三五】Vimuktijñānadarśana. 出世五蘊、無等等五蘊、又は五分法身、即ち、戒・定・慧・解脫・解脫知見の第五。已の解脫

て、復た自ら思惟すらく、「我れ、當に正勤に身の善行を修し、語の善行を修し、意の善行を修すべし。我れ、當に種種の方便を施設して、布施・調伏・寂靜を修行すべし。身壞し命終らば、當に善趣に往き、惡趣に墮すること勿るべし、」と。

此の刹帝利灌頂大王は、是を思惟し已つて、勇猛精進に、身語意の三種の善行を修し、常に布施を行じて、一切の所有る飲食、衣服、象馬騎乘、臥具醫藥、房舍燈明、及び餘の資具、奴婢僮僕、種種の珍財、[一六九]頭目手足、乃至は身命もて、悋惜する所無く、及び、(1)殺生を離れ、(2)不與取を離れ、(3)欲邪行を離れ、(4)虛誑語を離れ、(5)麁惡語を離れ、(6)離間語を離れ、(7)雜穢語を離れ、(8)諸の貪欲を離れ、(9)諸の瞋恚を離れ、(10)諸の邪見を離る。

是の因緣に由つて、此の刹帝利の灌頂大王は、當に十種の功德勝利を獲べし。

何等をか、十と爲す。一には、大名稱を具へ。二には、大財寶を具へ。三には、妙色相を具へ。四には、多くの眷屬を具へ。五には、病少く惱少し。六には、朋友眷屬、聰慧多聞なり。七には、正至正行にして親近し供養す。八には、廣美の聲譽、十方に流振し。九には、大威德天神の常に隨つて衞護し。十には、身壞し命終つて、當に天上に生じて、常に善趣の安樂國土に居すべし。

善男子よ。刹帝利種の灌頂大王は、是の如きの「第九王輪」を成就せり。此の輪に由るが故に、自らの國土をして增長安樂ならしめ、能く一切の怨敵惡友を伏し、善く身を守護して壽命を增さしむ。

*善男子よ。是の如く、如來も、如實に一切の有情の死生等の事を了知す。謂く、如實に、若し諸の有情の身に惡行を成じ、語に惡行を成じ、意に惡行を成じて、賢聖を誹謗し、邪見と邪見業因とを具足すれば、身壞し命終つて、諸の惡趣に墮して、或は地獄に生じ、或は傍生に生じ、或は餓鬼に生ずることを、若し諸の有情の、身に善行を成じ、語に善行を成じて、意に善行を成じて、賢聖を

を知る知見。亦た解脫知見蘊、解脫知見法身ともいふ。

知字、麗本、之を智に作る。今、三本及び宮本に依る。以下※同之。

【一三六】Catvāri prahāṇāni. 四意斷、四正斷、四正勝ともいふ。三十七科の道品中、四念住の次に修する行品。一に巳生の惡に對して除斷の爲に勤めて精進す。二に未生の惡に對して更に生ぜざらしめんが爲に勤めて精進す。三に未生の善に對して生ぜんが爲に勤めて精進す。四に巳生の善に對して增長せしめんが爲に勤めて精進するなり。

【一三七】Catvra ṛddhi-pādā. 四如意足ともいふ。三十七科道品中、四正勤に次で修する行品。四種の禪定なり。欲等の四法力に由つて種種の神用を現起する三摩地をいふ。四とは、欲・心・勤・觀の四三摩地斷行成就神足なり、また欲・念・精進・思惟の四如意足なり。

※第九佛輪。

【一三八】Pañcendriyāṇi. 信・進・念・定・慧の五なり。此の五法、能く他の一切の善法を生ずる本となれば五根と名く。七科道品中の第四行品。

【一三九】Pañca balāni. 五根增長し五障を治する勢力を有せるを名けていふ。七科中第五。

謗らず、正見と正見業因とを具足すれば、身壞し命終つて、諸の善趣に昇り、或は天上に生れ、或は人中に生れ、或は諸漏を盡すことを、了知す。

如來は是の如く如實に知り已つて、彼の衆生に於て、大慈悲を起し、勇猛精進にして[一七〇]三神變を現し、彼の衆生をして佛法の教誡に歸趣し、世間・出世間の信を安置し成立せしむ。

何等をか、三と爲す。一には[一七一]神通變現、二には[一七二]記說變現、三には[一七三]教誡變現なり。是の三の變現の威力に由つて、有情を勸發し、教誡して、世間・出世間の信を安置し成立して、一切の有趣の死生に於て、皆な解脫を得せしむ。

善男子よ。我れ、是の如きの「第九佛輪」を成ぜり。此の輪に由るが故に、無量の有情を利益し安樂して、安隱住を得、無驚恐を得、無所畏を得て、自ら稱すらく、「我れ、大仙の尊位に處し、佛輪を轉じて、諸の天魔外道の邪論を摧く」と、大衆の中に處して、正に師子吼す。

*善男子よ。刹帝利の灌頂大王の如きは、四洲の無量の有情の種種なる身病を除かんが爲に、王位を棄捨して、諸の香湯を以て身首を沐浴して鮮淨の衣を著け、端坐思惟して、諸の衆生に於て其の心平等にして慈悲護念し、一切の病を解脫せしめんが爲の故に、共の種種の香[一七四]花・伎樂及び餘の供具を以て、一切の大威德天神を供養す。爾の時、一切の天帝・龍帝、乃至、莫呼洛伽神帝まで、の事を知り已つて、各〻相ひ謂ひて言はく、「此の刹帝利の灌頂大王は、諸の功德を具し、大威神有つて、應に輪王と作つて、四洲渚を統ぶべし。我等宜しく應に共に往いて建立して王位に復し、四洲渚を統べしめ、諸の衆をして無病安樂ならしむべし」と。時に、諸の天帝、乃至、莫呼洛伽神まで、即便ち、共に往いて、刹帝利の灌頂大王を轉輪王の位に立てて、七寶を具して、四大洲を統べて皆な自在なることを得、[一七五]千子具足し、勇健端正にして、能く怨敵を摧き、[一七六]王の大地を跨りて[一七七]亘(あま)ねく海際を窮め、讁罰皆な停め、[一七八]刀杖擧げず、咸く正法を修し、普く安樂を受けしむ。

【一四〇】Sapta bodhy-angāni. 七菩提分、七覺支、七覺分といふ。七科中の第六。念・擇法・精進・喜・輕安・定・捨（又、行捨）の七覺支なり。此の七事を以て能く無學果を證するを得れば、七覺支といふ。

【一四一】Āryāṣṭāṅga-mārga. 八正道分ともいふ。正見・正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八法。四諦の道諦の行法なり。七科中第七なり。

以上、四念住・四正勤・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支、七科道品をなし、總じて三十七科道品、または三十七道品と稱す。

※第十王輪。

【一四二】郭字、聖語藏本、埽に作る。

【一四三】九十五種外道ともいふ。外道の總數なり。

【一四四】聖語藏本、惡字を或に作る。

【一四五】宮內省圖書寮本、深を染に作る。

【一四六】根缺 Indriyavaikalya. をいふ。男根の不全なり。

【一四七】教法の要義。要文、主眼なり。

【一四八】略して三解脫ともいふ。空・無相・無願の三は、能く涅槃に到るべき法門なりとなす。註〔七五〕參照。

善男子よ。刹帝利種の灌頂大王は、是の如きの「第十王輪」を成就せり。此の輪に由るが故に、四大洲爰及八萬四千の小渚に於て、其の中の諸の有情の類に十善業道を安立し、善く身を守護して、壽命を増さしめ、身壞し命終つて、當に天中に生じて諸の妙樂を受くべし。

*善男子よ。是の如く、如來も、昔、菩薩位にして、自他身の無量種の諸の煩惱の病を有することを知りて、定香の永を以て其の身を洗浴し、及び諦法の大慈大悲を以て其の首を灌沐して、慚愧の衣を著せり。十方一切の諸佛世尊、諸の靜慮・等持・精進・方便・智慧を以て慈悲護念して咸く是の言を作したまはく、「是の如きの大士は、是れ、大福慧莊嚴の寶器にして一切の[一七九]三種不護・[一八〇]四無所畏・[一八一]如來十力と及び[一八二]十八不共佛法とを容るるに堪へ、無上の一切智智を得るに堪へ、大慈大悲の具足せざること無く、常に欣んで一切衆生を利樂す。是れ、佛寶を求むる商人の導首なり。能く有情の生死の衆苦を救ひ、能く有情に涅槃の大樂を施す。我等一切の諸佛世尊、應に誠言を以て其の所願を與へて、如來正等覺を成ぜしめ、無上法を得て、大法王と爲すべし」と。我れ、爾の時に於て福慧力に依て勇猛精進し、四聖諦に於て如實に知り已つて、無上正等菩提を證得す。善男子よ。轉輪王の四大洲を統べて皆な自在なることを得るが如く、是の如く如來も、[一八三]四靜慮・四無色定・[一八四]四種梵住・[一八五]四無礙辯・四聖諦觀・四無所畏・如來十力、及與び、十八不共佛法・[一八六]一切種智に於て、皆な自在なることを得て、轉輪王の[一八七]七寶を具足する如く、是の如く如來も、七種の菩提分の寶を成就せり。轉輪王の千子を具足し勇健端正にして能く怨敵を伏するが如く、是の如く如來も、阿若多憍陳那を最初とし[一八八]蘇跋陀羅蘇刺多を最後と爲す諸大聲聞の、佛心より生じ佛口より生じ法化より生じ、佛法の分を得て諸漏永く盡くるものあり、名づけて勇健と爲し、四梵住を具へたるを名づけて端正と爲し、能く一切の天・魔・外道の異論の怨敵を伏す。轉輪王化の八萬四千小渚に及ぶが如く、是の如く如來も、[一八九]百倶胝の[一九〇]南贍部洲に於ても、百倶胝の[一九一]西瞿陀尼洲に於ても、百倶胝の[一九二]東毘提訶洲に於て

【一四九】姝字、聖語藏本には釆に作る。

※第十佛輪。

【一五〇】最初の、乃至、第四の靜慮とは、色界の四禪定を擧ぐるなり。即ち四靜慮天に生ずる禪定なり。

【一五一】無邊虛空處定（又、空無邊處定 Akāsānantāyatana-dhyāna.）、乃至、非想非非想定（具には非想非非想處定）とは、即ち、中間の、識無邊處定、無所有處定を加へて、所謂る四無色定、又は四空定を擧ぐるなり。

【一五二】三障を擧ぐるなり。
(1) 煩惱障とは、貪瞋癡等の諸惑。
(2) 業障とは、五退十惡等の業。
(3) 法障とは、法は因果法の義、報障ともいふ。即ち地獄餓鬼畜生等の苦報なり。

【一五三】銷字、聖語藏本には消に作る。

【一五四】caturaṅga-balakāya. 印度にて戰陣に用ふる四種の兵力。即ち(1)馬(2)車(3)象(4)歩の四種なり。

【一五五】聖語藏本、凋字を凋に作る。

【一五六】宮內省本、嶮字を險に作る。

【一五七】宮內省本、理字を治に

も、百倶胝の[一九三]北倶盧洲に於ても、百倶胎の諸大溟海に於ても、百倶胝の諸妙高山に於ても、百倶胝の四大王天に於ても、百倶胝の乃至は非想非非想天までに於ても、百倶胝の大輪圍山に於ても、此の高廣の一佛土中に於ても、言音施化皆な自在なることを得。

善男子よ。我れ、是の如きの「第十佛輪」を成ぜり。此の輪に由るが故に、如實に自身他身の諸漏永く盡きたるを了知し、無量の有情を利益し安樂して、安隱住を得、無驚恐を得、無所畏を得て、自ら稱すらく、「我れ、大仙の尊き位に處して、佛輪を轉じ、諸の天・魔・外道の邪論を摧く」と、大衆の中に處して、正に師子吼す。

善男子よ。我れ、是の如きの「十種の佛輪」を成じて、本願力の故に、此の佛土の五濁惡の世に居す。一切の有情の、一切の自淨の善法を損減し、所有の七聖財の寶を*匱乏し、一切の聰[一九四]慜なる智者を遠離して、斷常の羅網の覆蔽する所となり、常に好んで諸の惡趣の車に乘り、後世の苦に於て怖畏を見ず、常に遍重の無明の黑闇に處して、十惡業を具して五無間を造り、正法を誹謗して賢聖を毀呰し、諸の善法を離れて諸の惡法を具す。我れ、其の中に於て、是の如きの「佛の十輪」を成就するが故に、安隱住を得、無驚恐を得、無所畏を得て、自ら稱すらく、「我れ、大仙の尊位に處して、佛輪を轉じ、諸の天・魔・外道の邪論を降し、一切の諸の有情の類の猶し金剛の如くなる堅固なる煩惱を摧滅して、其の所樂に隨つて、一切の有力の衆生を安立して、三乘の不退轉位に住せしむ」と。』

爾の時、會中の一切の菩薩摩訶薩衆、一切の聲聞、一切の天・龍、廣說すれば乃至一切の羯吒布怛那衆・人・非人等まで、皆な大に歡喜して、同じく『善き哉』と唱ふ。大香雨を雨らし、大華雨を雨らし、衆寶雨を雨らし、大衣雨を雨らして、一切の大地皆な悉く震動して、是の如きの「十種の佛輪」を說きたまふを聞く。衆會の中に於て、八十四百千那庾多の菩薩摩訶薩有りて無生法忍を得、復た無量の菩薩摩訶薩有りて種種なる諸の陀羅尼・三摩地・忍を獲得し、復た無量無數の有情有りて初めて無上正覺心を發して不退轉なることを得、復た無量無數の有情有りて果證を逮得せり。

作る。

【一五八】所謂る肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼の五眼の第五。諸法、實相を照了する眼。智度論に「一切法の中に佛眼は常に照す。」と言へり。次句の、不淨とは、不淨觀を修するをいふ。不淨行に非ず。

【一五九】數息觀、又は數息觀を含む五停心觀をいふか。

【一六〇】四無色定なり。

【一六一】四魔に同じ。魔とは、奪命者の意。人の身命及慧命を奪ふものに四種の別あるを云ふ。即ち、蘊・煩惱・死・天子の四なり。

【一六二】聖語藏本、栖字を棲に作る。

【一六三】Vivartakalpa. 四劫の第一。四劫とは、成・住・壞・空。若しくは壞・成・中・大の四劫一順をいふ。成劫とは二十增減あり、初の一增減中に器世間、後の十九增減中に有情世間の成立する間をいふ。又、渾沌よりの成立として四劫の第二にも數ふ。

【一六四】Saṃvartakalpa. 四劫の第三。劫中、二十增減を數へ、初の十九增減中に、有情世間壞し、後の一增減に大火災を發して器世間を蕩盡すれば、之を壞劫と云ふ。倘ほ、「渾沌」の時を意味して之を第一に數へる擧げ方も存す。

【一六五】聖語藏本、乏字を之に作る。

【一六六】聖語藏本、年字を季に作る。以下※同之。

【一六七】Sugati. 惡趣に對す。三惡道、又は四惡趣に對して、殘餘の、人・天又は修羅・人・天の二趣若くは三趣を善趣とす。

【一六八】Durgati. 善趣に對して、地獄・餓鬼・畜生等をいふ。此の三趣を、三惡趣と言ひ、之に修羅を加へて四惡趣と稱し、時には、人・天二趣を三惡趣に加へて之を五惡趣と稱することあり。修羅は此の場合、天趣に歸屬せしむるなり。

【一六九】珍字、元本には𤦲に作る。

【一七〇】Triṇi prātihāryāṇi. 三種神變。また三示導ともいふ。この三種よく衆生を正法に示導すればなり。三種とは、即ち、神通・說法・敎誡の三なり。如來を稱して、時に、具足三示導者 Triprātihāryasampanna. ともいふ。

【一七一】Ṛddhiprātihārya また神變示導とも譯す。如來の、憍慢の衆生を調伏せんが爲に種種の神通を現ずるを、神通神變といふ。

【一七二】Ādeśanāprātihārya. また說法神變、記心示導ともいふ。如來無礙の大智、諸の衆生の善惡の業因及び善惡の果報を知り、之に應じて說法を爲すを、いふ。

【一七三】Anuśāsanīprātihārya. また敎誡示導ともいふ。如來の、諸の弟子に對して、是の法應に作すべし、是の法應に作すべからず、是の道は緣覺乘を、乘を得、是の道は聲聞乘を得、乃至、大乘を得、と敎誡するを、敎誡神變といふなり。

【一七四】花字、宋本は葉に作る。

【一七五】轉輪王は、輪・象・馬・珠・女・居士・主兵の七寶を有し、千子を具足して、勇健雄猛なりとさる。例へば、長阿含六「轉輪聖王修行經」を見よ。千人王子物語は印度の古話にて、轉輪王も、千子に補佐されて四洲を征伏すとせり。

【一七六】原文「跨ニ王大地一、亘ニ窮海際一」。北凉失譯には、「能降ニ伏外敵一、遊ニ巡四海一、案ニ行天下一切大地一」とあり。

【一七七】亘字、恐らくは亙ならん。

【一七八】杖字、三本、仗に作る。

【一七九】Triṇi ārakṣyāṇi. 如來の三業の、純淨にして過を離れ、防護を要さざるをいふ。三不護。三無持ともいふ。身・語・意の三不護なり。之に活命を加へて四不護ともいふ。

【一八〇】catvāri vaiśāradyāni. 四無畏ともいふ。化他の心何物にも怯れざる佛菩薩の力用をいふ。佛の四無畏とは、智度論四八、俱舍論二七等に明すが如く、

(1)一切無所畏（正等覺無畏、諸法現等覺無畏）、(2)漏盡無所畏（漏永盡無畏、一切漏盡智無畏）、(3)說障道無所畏（說障法無畏、障法不虛決定授記無畏）、(4)說盡苦道無所畏（說出道無畏、爲證一切具足出道如性無畏）の四種をいふ。十八不共法の一科。

【一八二】Daśa tathāgata-balāni. 如來のみ成就する十種の智力。十八不共法の一科をなす。十とは、

(1)知是所非所力（處非處智力）、(2)知業報力（業異熱智力）、(3)知他衆生種種欲樂力（種種勝解智力）(4)知世間種性力（種種界智力）(5)知他衆生諸根上下力（根上下智力）(6)知一切道智處相力（徧趣行智力）(7)知一切諸禪三昧力（一切靜慮解脫三摩地三摩鉢底出離雜染淸淨智力）(8)知宿命力（宿住隨念智力）(9)知天眼力（死生智力）(10)漏盡力（漏盡智力）なり。

【一八三】十力、四無所畏、三念住、大悲との十八なり。註〔八三〕を見よ。

【一八三】Catasra ārūpya-samāpattaya. 四空定ともいふ。(1)空無邊處定（無邊虛空處定）(2)識無邊處定(3)無所有處定(4)非想非非想處定の無色界の四處に至るべき三昧。

【一八四】慈悲喜捨の四無量、又は四無量心に同じ。第一卷註〔七八〕參照。

【一八五】四辨才、四無礙辨、四無礙智ともいふ。法・義・辭・辨の四。第一卷註〔八〇〕參照。

【一八六】佛智をいふ。三智の一。佛智圓明にして總相別相化道斷惑一切種の法に通達する故なり。

【一八七】sapta ratnāni. 轉輪聖王の具有する七種の寶とは、輪・象・馬・珠・女・居士・主兵臣の七寶なり。轉輪王は此の七寶を有し、更に千子を具足して、勇健雄猛なりといはる。

【一八八】subhadra. 蘇跋陀羅、婆藪頭樓、須跋陀、須拔等に作り。善賢、好賢等に譯す。佛の最後の敎誡を受けて得道せし弟子の名。蘇刺多 surata. とは、此の人名に、妙適、妙樂を意味する語を、愛稱語として附せしものか。

【一八九】正倉院聖語蔵本、倶字を拘に作る。以下同。
【一九〇】Jambudvīpa. 贍部。

【一九一】Avaragodānīya. 西牛貨。
【一九二】Pūrvavideha. 東勝身。
【一九三】Uttarakuru. 北倶盧。

第一巻註〔二〇八〕参照。
※匱字、正倉院聖語蔵本には、遺に作る。

【一九四】宋・元・明三本等、慾を欲に作る。

卷の第三

※無依行品　第三之一[一]

※爾の時、會中に大梵天有り。名づけて天藏と曰ふ。久しく善根を[二]殖ゑて、[三]第十地に住し、諸の菩薩摩訶薩の德を具す。卽ち、座より起つて、掌を合せて佛を禮したてまつり、而うして頌を說いて言はく、

「[四]功德藏なる[五]妙慧海よ。　我れ、今、所疑を問ひまつる。
願はくは、慧海よ、垂聽して、　我が爲に疑滯を除きたまへ。
我等、今、渴仰す、　德藏の勝れし法味と、
及び最上義の味とを。　衆を擧げて咸く聞かんと欲す。」

佛、天藏大梵天に告げて、言はく。

『如來、今者は、汝が意を恣にして問へ、當に問に隨つて答へて、汝が心をして喜ばしめむ』と。

大梵天言はく、

『唯然り、世尊よ』と。

頌を以て問ふて曰く。

利慧もて定を修する者は、　安住して、放逸ならず、
[六]勝義諦に住するが爲に、　生死に依止するが爲に。
晝も夜も、法義に於て、　精勤して而も誦習す、
煩惱の海を渡らんが爲に、　惡趣に退墮するが爲に。
勇猛にして勤めて福を營む、　定んで涅槃に趣かんが爲に、

※北京本第三卷後半、「相輪品第五」（又は「證相品第五」）に當る。
【一】之一の二字、宋・元二本之を缺く。
※天藏大梵天の發問
【二】殖字、三本及び宮本、植に作る。以下同之。
【三】十地 Daśa-bhūmi. には諸說あり。暫く智度論七八に說く三乘共通の地說十に依れば、第十地は卽ち佛位なるも所謂る大乘菩薩の十地說に依れば、第十地は卽ち法雲地 Dharmameghabhūmi. なり。般若波羅蜜を成就し修惑を斷して無邊の功德を具足して無邊の功德水を生ずること、大雲の衆水を出すが如くなるが故に、法雲と稱す。今の第十地とは是れなり。
【四】功德の寶藏。
【五】妙慧海、智海、智慧海ともいふ、佛智の深廣なること海の如きをいふ。
【六】第一義諦に同じ。又、眞諦、聖諦など呼ぶ。世俗諦に對して、涅槃、眞如、法界中道等の深妙の眞實の理法を指す。

生死の中に處して、　惡趣に退墮するが爲に。
聰慧の刹帝利は、　「十種の輪」を成就す、
生死の中に沈むが爲に、　當に佛果に[七]升らんとするが爲に。
雜染の心は、伏し難くして、　諸の煩惱の亂す所たり、
何を以てか其の心を淨うし、　[八]定・福・誦の業を修せん。

爾の時、世尊、彼の天藏大梵天に告げて曰はく。

『善哉、善哉。汝、善く辯才もて、能く斯の義を問ひまつれる。汝、此の法に於て、已に劬勞を作せり。汝、諸行に於て已に圓滿なることを得たり。汝、過去の殑伽沙に等しき佛世尊の所に於て、已に[九]三業を勤めて、正法を興隆し、三寶の種を紹げり。今ま、無量の衆生を饒益せんが爲に、復た如來に是の如きの深義を問ひまつる。

*善男子よ。[一〇]大記別の法有りて、「無依行」と名く。過去の一切の諸佛世尊は、諸の有情を成熟せんと欲するが爲の故に、生死の法を厭離せしめんが爲の故に、[一一]業煩惱を除斷せしめんが爲の故に、三乘をして速に圓滿ならしめんが爲の故に、此の「無依行大記別の法」を宣說し住持したまふ。現在の十方の諸佛世尊も亦た、諸の有情を成熟せんが爲の故に、生死の法を厭離せしめんが爲の故に、業煩惱を除斷せしめんが爲の故に、三乘をして速に圓滿ならしめんが爲の故に、此の「無依行大記別の法」を宣說し住持したまふ。未來の一切の諸佛世尊も亦た、諸の有情を成熟せんが爲の故に、生死の法を厭離せしめんが爲の故に、業煩惱を除斷せしめんが爲の故に、三乘をして速に圓滿ならしめんが爲の故に、此の「無依行大記別の法」を宣說し住持したまふ。汝、過去の諸の如來の所に於て、已に具に此の「無依行大記別の法」を聞くことを得たり。我れ、今者に於て亦た、諸の有情を成熟せんが爲の故に、生死の法を厭離せしめんが爲の故に、三乘をして速に圓滿ならしめんが爲

【七】升字、宮內省圖書寮本には、昇に作る。
【八】第二卷所說の第二佛輪中の修定・習誦・營福の三種の佛業輪を指す。
【九】身口意の三業なり。
※無依行大記別法　北涼本にては依止威儀大記莂論に作る。
【一〇】大字、宮內省本には、上に作る。
【一一】略して業惱といふ。惡業と煩惱。

の故に、此の「無依行大記別の法」を宣說し住持す。汝、應に諦かに聽いて善く之を思念せよ。吾れ、當に汝が爲に、分別して解說すべし」と。

爾の時、天藏大梵天、言はく、

『唯然り、世尊よ。願樂して聞んと欲す』と。

佛の言はく、

*『大梵よ。「十種の無依行の法」有り。若し修定の者、隨つて一行を有さば、尙ほ欲界の善根すら成ずること能はず。設使ひ、先に成ずとも尋いで還つて退失せん。況んや當に能く[一二]色・無色定、乃至、三乘を成じ、隨て一乘を成ずべけんや。

何等をか、[一三]十と爲す。

一には、世に一類有り。修定を欲すと雖も、而も[一四]資緣に乏しくして、經求し擾亂す。二には、復た、一類有り。修定を欲すと雖も、而も[一五]尸羅行と諸の惡行とを犯す。三には、復た、一類有り。修定を欲すと雖も、而も顚倒の見、妄りに吉凶を執して、身心剛强なり。四には、復た、一類有り。修定を欲すと雖も、而も心掉動し、賢聖に順ぜずして、諸根輕躁なり。[一六]五には、復た、一類有り。修定を欲すと雖も、而も離間語もて、彼此を破亂す。六には、復た、一類有り。修定を欲すと雖も、而も麁惡語もて、賢聖を毀罵す。七には、復た、一類有り。修定を欲すと雖も、而も雜穢語及び虛誑語をなす。[一七]八には、復た、一類有り。修定を欲すと雖も、而も貪嫉を懷きて、他の所得の利養恭敬に於て、心歡悅せず。九には、復た、一類有り。修定を欲すと雖も、而も瞋忿を懷きて、諸の有情に於て心常に憤恚す。十には、復た、一類有り。修定を欲すと雖も、而も邪見を懷きて、因果を撥無す。

大梵よ。當に知るべし。是を「十種の無依行の法」と名づく。若し修定の者、隨つて一行を有さ

※第一の十種無依行法。

【一二】色「無色とは、欲界と共に、三界を擧げたるなり。

【一三】北凉本には、十不善輪に依止するものとして次の十を擧ぐ。

(1)有欲修禪衆事不具
(2)有欲破戒成就惡法
(3)生於倒見亦著吉相
(4)惡心難調不順賢聖諸根輕躁而不具足微少善根
(5)但作兩舌多喜鬪亂
(6)作麁惡語而恒罵言
(7)好作綺語及諸妄言
(8)生於貪嫉見他得利
(9)常生嫉妬一切衆生有惱害心
(10)作大邪見說無因果

【一四】衣食住は佛道修行を資する外緣なれば、資緣といふ。

【一五】Sila 尸羅ともいひ、淸凉性善、などとも譯す。戒のこと。戒は三業の熱惱を消滅するが故に、淸凉と名く。

【一六】五乃至七、語の四惡業を擧ぐ。

【一七】八乃至十、意業の三惡を擧ぐ。

ば、尚ほ欲界の善根すら成ずること能はず。設使ひ、先づ成ずとも、尋いで還つて退失せん。況んや、當に能く色・無色定、乃至、三乘を成じ、隨つて一乘を成ずべけんや。

*復た次に、大梵よ。又「十種の無依行の法」有り。若し修定の者、隨つて一行を有せば、終に諸の三摩地を成ずること能はず。設使ひ、先づ成ずとも、尋いて還つて退失せん。

何等をか[一八]十を爲す。

一には、事業に樂著す。二には談論に樂著す。三には[一九]睡眠に樂著す。四には營求に樂著す。五には艷色に樂著す。六には妙聲に樂著す。七には芬香に樂著す。八には美味に樂す。九には細觸に樂著す。十には[二〇]尋伺に樂著す。

大梵よ。當に知るべし。是を「十種の無依行の法」と名づく。若し修定の者、隨つて一行を有さば、終に諸の三摩地を成ずること能はず。設使ひ、先づ成ずとも、尋いで還つて退失せん。若し諸の三摩地を成ずること能はずんば、所餘の諸の[二一]善法聚を集むと雖も、而も是の事有り。信施を受用するの因緣を追求し、惡しき[二二]心・心所有の法を發起して、諸の國王大臣等の所に於て、諸の過罪を犯し、或は呵罵せられ、或は捶打せられ、或は[二三]肢節手足を斷截せらる。此の因緣に由つて、或は重病と成りて長時に苦を受け、或は疾く命終して、三惡趣に於て隨つて一所に生じ、乃至、或は無[二四]間地獄に生ぜんこと、[二五]嗢達洛迦(うつたらくか)・[二六]阿邏荼(あらだ)・[二七]底沙・[二八]瞿波理迦(くはりか)・[二九]提婆達多の如くならん。是の如き等の類、靜慮を退失し、乃至、無間地獄に墮して、無量種の忍び難き大苦を受けん』と。

爾の時、世尊、[三〇]阿若多憍陳那に告げて言はく、

『吾れ、汝等に、[三一]阿練若の修定の苾芻に、最上の房舍、最上の臥具・最上の飲食を給ひ、一切の僧[三二]事を皆な應に放免すべきことを、聽す。所以は何ん。諸の修定者、若し資緣に乏しくんば、即ち一切の惡しき心、心所有の法を發起して、諸の三摩地を成就すること能はず、乃至、無間地獄に墮

※第二の十種無依行法

【一八】北涼本には、次の十事を擧ぐ。
(1)樂著作伎
(2)樂著言說
(3)多好睡眠
(5)種種所求
(5)貪著美色
(6)樂著於香
(7)樂著諸味
(8)樂著音聲
(9)樂著於觸
(10)樂著覺觀

【一九】Middha 八不定地法の一。心をして闇昧ならしむる精神作用のこと。

【二〇】七十五法中八不定地法の二。尋 Vitarka とは、事理を尋求する麁性の作用、伺 Vicāra とは、事理を伺案する細性の作用。舊に覺觀に譯す。二者共に、定心を妨ぐるものとす。

【二一】善法聚とは、五戒十善の世間的諸善法、三學六度十波羅蜜等の出世間的諸善法を總括していふ。所餘のとは定を除く他の六度等の諸善法。

して、無量種の忍び難き大苦を受けん。修定の行者、若し資緣を具すれば、諸の三摩地の、未だ成ぜざるものも能く成じ、若し先に已に成ぜるものは終に退失せざらん。此に由つて、一切の惡法、廣く說かば、乃至、不善の尋伺を起さずして、天上に往生して涅槃を證得す。修定の行者、若し未だ諸の三摩地を成就せずんば、[三三]初夜後夜に、當に睡眠を捨てて、精進修學して、憒閙を遠離し、[三四]小欲知足にして、顧戀する所無かるべし。一切の貪瞋・忿覆・惱害・憍慢・貢高・慳悋・嫉妬・離間・麁惡・虛誑・雜穢、一切の人間の嬉戲・放逸、皆な悉く遠離せん。是の如きの行者は、應に釋・梵・[三五]護世四王・轉輪王等の、讃歎し禮拜し恭敬し承事して、百千那庾多の供を奉施するを受くべし。況んや、剎帝利・婆羅門・[三六]筏舍・戍達羅等をや。未だ定を得ざる者も、尙ほ、應に此の讃歎し禮拜し恭敬し承事して供養を奉施することを受くべし。何に況んや、已に三摩地を得たる者をや』と。

爾の時、世尊、而も頌を說いて曰はく、

修定は能く惑を斷ず　餘業の能はざる所なり。
故に修定を尊しと爲す、　智者、應に供養すべし。

*爾の時、天藏大梵天、言はく、

『大德世尊よ。佛法の中に於て、而も出家する者あらんに、若し*剎帝利の大臣・宰相の、鞭杖等を以て、其の身を捶[三七]拷し、或は牢獄に閉し、或は復た呵罵し、或は肢節を解き、或は其の命を斷たんに、當に爾る合しと爲んや、合からずと爲んや』と。

佛、天藏大梵天に告げて言はく、

『善男子よ。若し諸の有情ありて、我が法の中に於て出家し、乃至、鬚髮を剃除し、片袈裟を被むり、若くは持戒、若くは破戒、下至、無戒ならんに、一切の天・人・阿素洛等の、俗の正法に依るすら、猶ほ尙ほ、鞭杖等を以て其の身を捶*拷し、或は牢獄に閉し、或は復た呵罵し、或は*肢節を解き

【三三】五位中の心法と心所有法となり。心とは身識等の心王なり。心所有略して心所とは、心王に隨つて生ずる、故に心王の所有なる、貪瞋等の數多の別作用なり。心心數法ともいふ、梵 Citta, Caitasika dharma

【三三】肢字、聖語藏本には支に作る。以下※同之。

【三四】Avīci. 阿鼻旨。阿鼻地獄ともいふ。八熱地獄の一。五逆罪の一を造りし者、此に墮して苦を受くること無間なるよりいふ。

【三五】Udraka Rāmaputra. また、鬱頭頭弗、優陀羅羅摩子、鬱陀羅加仙人、人名。譯雄傑。佛初に出家して道を問へる仙人なり。洛字、聖語藏本、池に作る。北凉本には、阿蘭迦蘭、鬱頭藍弗、蛭數拘迦梨、提婆達多、とせり。

※出家功德の稱揚

【三六】Arāḍakalāma. 北凉本に阿蘭迦蘭とす。前註者と並稱される、阿邏茶迦邏摩のこと、又、阿邏茶、阿羅邏、阿藍、阿羅邏迦羅摩、阿羅邏迦藍などに作る。譯、懈怠。佛出家の始め就て學べる仙人名、

【三七】Tissa. 底沙の名南北諸經論に散見す。ここの底沙は恐らく舍利弗の父 Vaṅganta

或は其の命を斷つ合からず。況んや非法に依るをや。

何を以ての故に。其の一切の持戒多聞をば除き、我が法中に於て出家する者ありて、若し、破戒にして諸の悪法を行じ、内に腐敗を懐くこと〔三八〕穢蝸螺の如く、實には〔三九〕沙門に非ずして自ら沙門と稱し、實には〔四〇〕梵行に非ずして自ら梵行と稱し、恒に種種の煩惱の爲に勝たれて敗壊傾覆するもの有らんに、是の如きの破戒の諸の悪苾芻すら、猶ほ能く一切の天・龍・藥叉・健達縛・阿素洛・掲路茶・緊捺洛・莫呼洛伽・人・非人等の無量の功德珍寶の伏藏を示導せん。

＊又、善男子よ。我が法中に於て而も出家する者ありて、戒行を破ると雖も、而も諸の有情、其の形相を覩て、應に〔四一〕「十種の殊勝の思惟」を生ずべし。當に無量の功德寶聚を獲べし。

何等をか、十と爲す。(1)謂く、我が法中にて而も出家する者ありて戒行を破ると雖も、而も諸の有情、或は見已つて佛を念じて〔四二〕慇重に信敬する殊勝の思惟を生ずること有り。是の因縁に由つて、終に諸の外道の師と書論と徒衆とに歸信せず、乃至、能く諸の怖畏を離れて大涅槃の城に入る。(2)或は見已つて聖戒を念ずる殊勝の思惟を生ずること有り。是の因縁に由つて、能く殺生を離れ、不與取を離れ、欲邪行を離れ、虚誑語を離れ、諸酒を飲みて放逸を生ずる處を離れ、乃至、能く諸の怖畏を離れて大涅槃の城に入る。(3)或は見已つて、〔四三〕布施を念ずる殊勝の思惟を生ずること有り。是の因縁に由りて、大財位を得、親近・供養・正至・正行、乃至、能く諸の怖畏を離れて大涅槃の城に入る。(4)或は見已つて忍辱の柔和質直なるを念ずる。殊勝の思惟を生ずること有り。是の因縁に由つて、便ち能く離間・麁悪・雜穢・瞋忿を遠離し、乃至、能く諸の怖畏を離れて大涅槃の城に入る。(5)或は見已つて、出家の精勤修行を念ずる殊勝の思惟を生ずること有り。是の因縁に由つて、能く〔四四〕家法を捨てて非家に趣き、勇猛精進に諸の勝行を修し、乃至、能く諸の怖畏を離れて大涅槃の城に入る。(6)或は見已つて、諸の散亂心を遠離する靜慮・等至を念ずる殊勝の思惟を生ずること有り。是の因

婆羅門ならん。舍利弗嘗て衆比丘に語りて我父母は邪見なれば弟の出家を許さざるべしと云へり。

【二八】Gopāli, Gokālika. 瞿迦離、倶迦利、倶迦離、瞿伽離、仇伽離などに作る。譯、牛守、惡時者。提婆達多の弟子なる一比丘の名。誹聖墮無間の者と傳へらる。涅槃經二〇に「瞿伽離比丘、生身入地、至阿鼻獄」と出づ。

※十種の殊勝功德

【二九】Devadatta. 提婆、提婆達など略稱す。譯名、天授、天熱。斛飯王の子、阿難の兄、佛の從弟なり。三逆罪を造り佛法を破壊して生ながら地獄に墮ちたりといふ。但し、法華經には、其の本地は深位の菩薩にして、天王如來たる記別を受くと云ふ。

【三〇】Ajñāta-kauṇḍinya. 佛の苦行時に從へる五比丘の一人にして、佛の教を最初に理解したる人の名。

【三一】Araṇya. 阿蘭若、阿蘭壤、阿練茹、曷刺額。無諍聲、閑寂、遠離處などと譯す。比丘の住處。

【三二】僧園中の諸事務。寺院の總名なり。

【三三】一日を六分し、その晝間の三時を、晨朝、日中、日沒といひ、その夜間の三時を初夜、中夜、後夜と稱す。

縁に由つて、心に山林・阿練若の處を樂み、晝夜に精勤に諸の定行を修し、乃至、能く諸の怖畏を離れて大涅槃の城に入る。(7)或は見已つて、智慧を念ずる殊勝の思惟を生ずること有り。是の因縁に由つて、正法を欣樂し聽聞し讀誦し、乃至、能く諸の怖畏を離れて大涅槃の城に入る。(8)[三五]或は見已つて、宿に出離の善根を殖*うることを念ずる殊勝の思惟を生ずること有り。輭語もて慰問し、乃至、足を禮し、此の因縁に由つて、當に尊貴なる大勢力の家に生じて、無量の有情、咸く共に瞻仰すべく、乃至、能く諸の怖畏を離れて大涅槃の城に入る。

善男子よ。我が法中に於て出家する者ありて、戒行を破ると雖も、諸の有情、其の形相を覩て、此の十種の殊勝の思惟を生じて、當に無量の功德寶聚を獲べし。是の故に、一切の刹帝利の王・大臣・宰相、決定して、鞭杖等を以て其の身を捶拷し、或は牢獄に閉し、或は復た呵罵し、或は[四六]支節を解き、或は其の命を斷つ合からず。

復た次に、大梵よ。若し、我に依つて而も出家する者ありて、犯戒惡行にして、內に腐敗を懷くこと穢蝸螺の如く、實には沙門に非ずして自ら沙門と稱し、實には梵行に非ずして自ら梵行と稱し、恒に種種の煩惱の爲に勝たれて敗壞傾覆するもの有らんに、是の如きの苾芻、禁戒を破し諸の惡行を行ずと雖も、而も一切の天・龍・藥叉・健達縛・阿素洛・揭路茶・緊捺洛・莫呼洛伽・人・非人等の爲に、善知識と作りて、無[四七]量の功德の伏藏を示導す。是の如きの苾芻、[四八]法器に非ずと雖も、而も鬚髮を剃り、袈裟を被服し、進止する威儀は、諸の賢聖に同じきなり。彼を見るに因るが故に、無量の有情、種種の善根の皆な生長することを得。又能く無量の有情に善趣生天涅槃の正路を開示す。是の故に我に依つて出家する者ありて、若しは持戒、若しは破戒、下至、無戒なるも、我れは尙ほ、轉輪聖王及び餘の國王・諸の大臣等の、俗の正法に依つて、鞭杖等を以て其の身を捶*拷し、或は牢獄に閉し、或は復た呵罵し、或は支*節を解き、或は其の命を斷つことを許さず。況んや非法に依るをや。

【三四】多く求めざるを少欲(Alpeccha)といふ、少きも悔惱せざるを知足(Saṃtuṣṭi)といふ。涅槃經に「少欲者不レ求不レ取。知足者得レ少不ニ悔恨ー」と云へり。

【三五】護世四天王の略。護國四王、四天王ともいふ。須彌の中復にありて、各一天下を護る四大王天のこと。第一卷註(一七三)を見よ。

【三六】筏字、明本及び宮本には筏に作る。縮藏また然り。

【三七】拷字、聖語藏本には考に作る。以下※同之。

【三八】Kaśambakajāta. 沙門の誤過を譬諭する名目の一。

【三九】Śramaṇa. 室摩那拏、舍囉磨拏、室囉磨拏、沙門、那、婆門、桑門、名喪門に作り息、息心、靜志、淨志、乏道、貧道功勞、勧息など譯す。勞劬して聖道を志す義。總じて出家者をいふ名。

【四〇】Brahmacarya. ここには、涅槃を證する爲の諸行を云ふ。涅槃を目して梵とするなり。婆羅門にては、婬欲を斷じて梵天に生ずる行法を梵行といふ。淨行の意。

【四一】北涼本には「十種勝想」といへり。合集して五種を出すのみ。

【四二】宮內省本、懸字を殿に作る。

大梵よ。是の如きの破戒・惡行の苾芻は、[四九]我が法毘奈耶の中に於て名づけて死尸と爲すと雖も、而も出家の戒德の餘勢を有す。譬へば、牛や麝の身命終つての後、是れ無識の傍生の死尸なりと雖も、而も[五〇]牛に黃有り而して麝に香有りて、能く無量無邊の有情の爲に、大饒益を作すが如し。破戒の苾芻も亦復た是の如し。我が法毘奈耶の中に於て、名けて死尸と爲すと雖も、而も出家の戒德の餘勢有りて、能く無量無邊の有情の爲に、大饒益を作すなり。

「大梵よ。譬へば、賈客の、大海に入りて、彼の一類の無量の衆生を殺して、其の目を挑り取つて、[五一]末達那果と和合擣篵して眼の寶藥を成ずるが如し。若し、諸の有情の盲冥にして目無く、乃至、胞胎にして生じて盲なる者、此の寶藥を持して、彼の眠中に塗らんに、患ふ所皆な除こりて明淨の目を得ん。破戒の苾芻も亦復た是の如し。我が法毘奈耶の中に於て名けて死尸と爲すと雖も、而も出家の威儀・形相を有して、能く無量無邊の有情の、暫くも見ることを得たる者をして、尙ほ淸淨の智慧の法眼を獲しめむ。況んや、能く他の爲に、正法を宣說するをや。

大梵よ。譬へば、燒香の、其の質壞すと雖も、氣芬馥として他を熏じて、香しからしむるが如し。破戒の苾芻も、亦復た是の如し。破戒に由るが故に、[五二]良福田に非ず。恒に晝夜の[五三]信施に燒かれ、身壞し命終つて三惡趣に墮すと雖も、而も無量無邊の有情の爲に、大饒益を作す。[五四]謂く、皆てをして、生天涅槃の香氣を聞くことを得せしむ。

是の故に、大梵よ。是の如きの破戒・惡行の苾芻の一切の白衣も、皆な應に守護して恭敬し供養すべし。我れ、終に諸の在家の者に、鞭杖等を以て其の身を捶*拷し、或は牢獄に閉し、或は復た呵罵し、或は支*節を解き、或は其の命を斷つを許さず。我れは、唯だ、彼の淸淨の僧衆に、布薩の時或は自恣の時に於ては、驅擯して出さしむ。一切の給施・[五五]四方僧物・飮食・資具を受用することを聽さず。一切の沙門の毘奈耶事には、皆て驅出して衆に在るを得さらしむ。而も我れ、其に鞭杖を加へ

【四三】正しき等至、即ち正しき定なり。
【四四】在家しての處世の法。
【四五】聖語藏本、或字を缺く。
【四六】支字、三本及び宮本、肢に作る。以下※同之。
【四七】量字、宮内省本には邊に作る。
【四八】佛道を行ずるに堪ゆるものを法器といふ。
【四九】Dharma-vinaya. 毘奈耶・律・法律・律法の意なり。
【五〇】牛黃(Gorocanā)と、麝香(mṛganada)とを指していふ。
【五一】madana. 摩陀那、摩達那、摩陀羅。醉果、醉人果と譯す。果の名。
【五二】善良の福田。三寶を供養すれば無量の福利を生ずるが故に、三寶を呼んで良福田となす。
【五三】信者の施物。
【五四】「謂皆令得聞」の皆令の二字、三本、宮本、聖本何れも、令皆に作る。いま、之に依て譯す。
【五五】招提僧物。全僧伽に屬する事物。又、十方僧物・僧祇物などいふ。

繋縛して命を斷つことを許さざるなり。
爾の時、世尊、而も頌を說いて曰はく、

[五六]瞻博迦華は、萎悴すと雖も、　而も尙ほ、彼の諸の餘の華に勝る。
破戒・惡行の諸の苾芻も　猶ほ、一切の外道の衆に勝る。

*復た次に、大梵よ、[五七]五無間の大罪惡業有り。何等をか王と爲す。一には、故思に父を殺す。二には、故思に母を殺す。三には、故思に阿羅漢を殺す。四には、倒見して聲聞僧を破る。五には、惡心もて佛身より血を出す。是の如きの五種を名けて無間の大罪惡業と爲す。若し人、此の五無間の中に於て、隨つて一種を造らば、出家し及び具戒を受く合からずとす。若し、出家し或は具戒を受けしめば、師は、便ち罪を犯すなり。彼をば應に驅擯して我が法より出さしむべし。是の如きの人も、[五八]以て出家の威儀・形相を有さば、我れ、亦た其に鞭杖を加へ、或は牢獄に閉し、或は復た呵罵し、或は支節を解き、或は其の命を斷つことを許さざるなり。

*復た、[五九]四種の近[六〇]五無間の大罪惡業根本の罪有り。何等をか、四と爲す。一には、不善心を起して獨覺を殺害す。是れ、生命を殺すの大罪惡業根本の罪なり。二には、阿羅漢苾芻尼僧を婬す　。是れ、欲邪行の大罪惡業の根本く罪なり。三には、所施の三寶の財物を侵損す。是れ、不與取の大罪惡業根本の罪なり。四には、倒見して和合僧衆を破壞す。

是れ、虛誑語の大罪惡業根本の罪なり。若し、人、此の「四の近無間の大罪惡業根本の罪」の中に於て、隨つて一種を犯さば、出家し及び[六一]具戒を受く合からずとす。若し、出家し或は具戒を受けしめば、師は、便ち罪を得。彼をば應に驅擯して我が法より出さしむべし。是の如きの人も、

【五六】 Campaka. 又、旃簸迦、占博迦、旃波迦、瞻博、瞻波瞻婆、瞻匐、占婆、瞻婆に作る。譯、「金色花樹」樹名なり、その華は、「香氣に勝れ遠く薫ず。

※五無間大罪惡業
【五七】 Pañcānantaryāṇi. 五無間業、五無間罪、五逆罪、五逆ともいふ。無間地獄に墮すべき五の罪惡業。卽ち、(1)殺父Pitṛghāta. (2 殺母 Mātṛghāta. (3)殺阿羅漢Arhadvadha. (4)破和合僧Saṃghabheda. (5)出佛身血 Tathāgatasyāntike duṣṭacittarudhirotpādana. 以上三乘通相の五逆なり。

【五八】 以字、三本及び宮本、已に作る。以下※同之。

※四種の近五無間大罪惡業根本之罪

【五九】 四種とは、所謂る四波羅夷罪(Catvāra-pārājikā.を指す。) 波羅夷は、又、波羅闍已迦、波羅市迦とも作り、斷頭、他勝、無餘、不共住、退沒、棄、墮不如意處などに譯す。左の四根本極惡をいふ。
(1)Abrahmacarya. 婬戒、非

*以て出家の及び受具戒の威儀・形相を有さば、我れ、亦た、其に鞭杖を加へ、或は牢獄に閉し、或は復た呵罵し、或は*支節を解き、或は其の命を斷つことを許さざるなり。

*是の如く、或は、是れ根本罪にして無間罪に非ざる有り。無間罪にして根本罪に非ざる有り。根本罪にして亦た無間罪なる有り。根本罪にも非ず、亦た無間罪にも非ざる有り。

何等をか名けて、是れ根本罪にして亦た無間罪なりと爲す。謂く、我が法中にして、先に已に出家して具戒を受けし者、故思に他の已に究竟に到りて諦を見し人等を殺す。是の如きを名けて、是れ根本罪にして亦た無間罪なりと爲す。此をば、我が法毘奈耶の中に於て、應に速かに驅擯すべし。

何等をか名けて、是れ根本罪にして無間罪に非ずと爲す。謂く、我が法中にして先に已に出家して具戒を受けし者、故思に他の〔六二〕異生の人を殺害し、下至、方便して人に毒藥を與へて其の胎藏を墮すあり。是の如きを名けて、是れ根本罪にして無間罪に非ずと爲す。此の人は、應に僧と共住すべからず。諸有の給施・四方僧物も、亦た、中に於て受用せしむべからざるなり。

何等をか名けて、是れ無間罪にして根本罪に非ずと爲す。謂く、若し、人有りて、或は〔六三〕三歸を受け、或は〔六四〕五戒を受け、或は〔六五〕十戒を受けんに、五無間に於て隨つて一種を造らば、是の如きを名けて、是れ無間罪にして根本罪に非ずと爲す。是の如きの人は、出家し及び具戒を受く合からざるなり。若し、出家し或は具戒を受けしめば、師は、便ち、罪を得。彼をば、應に驅擯して我が法より出さしむべし。

何等をか名づけて、根本罪にも非ず亦た無間罪にも非ずと爲す。謂く、若し、人有りて、或は三歸を受け、或は五戒を受けんに、佛法僧に於て而も疑心を生じて、或は外道に歸して以て師〔六六〕導と爲し、或は種種なる若しは少の若しは多の吉凶の相に執して、鬼神を祠祭す。若くは復た、人有りて、諸の如來の所說の正法の、或は聲聞乘相應の正法、或は獨覺乘相應の正法、或は是れ大乘相應

梵行。
(2)Adattādāna. 盗戒、不與取
(3)Vadha(Ahiṁsā) 殺人戒
(4)Uttaramanuṣya-dharma-pralāpā. 大妄語戒、妄說上人罪。此の四波羅夷罪にして而も五無間同類のものを擧ぐるなり。

【六〇】 五無間同類なり。近とは近似して準ずるの意。

【六一】 具足戒の略。比丘は二百五十戒、比丘尼は五百戒を具足圓滿の戒とす。

※四種の根本無間罪の分別
(1)根本罪非無間罪
(2)無間罪非根本罪
(3)根本罪亦無間罪
(4)非根本罪亦非無間罪

【六二】 Bālapṛthagjana. 婆羅必栗託仡那。異生、悉しくは愚異生と譯す。凡夫の異名なり。凡夫は異見に執して惡を作り、六道に輪廻して別異の果報を受くるが故なり。

【六三】 Tri-śaraṇa-gamana; 佛法僧の三寶に歸ゝするなり。三歸戒ともいふ。

【六四】 Pañca-śīla. (1)不殺生(2)不偸盜(3)不邪淫(4)不妄語(5)不飲酒の五。五學處五大施、とも呼ばれ、また優婆塞、優婆夷、即ち近事男、近事女の受持すべき戒なる故に近事律儀とも稱す。

【六五】 Daśa.śīla. 先の五戒に更

の正法に於て、誹謗遮止して自ら信受せず、他をして他人の讀誦書寫を厭背し障礙せしめ、下至、一頌の正法を留め難からしむ。是の如きを名けて、根本罪にも非ず亦た無間にも非ずと爲す。而も極重大罪惡業の近無間罪を生ずるなり。是の如くの人、若し未だ是の如きの大罪惡業を懺悔し除滅せずんば、出家及び具戒を受く[六七]合からざるなり。若し、出家し或は具戒を受けしめば、師は、便ち罪を得。彼をば、應に驅擯して我が法より出さしむべし。若し已に出家し或は具戒を受けて、是の如くの罪を犯して若し懺悔せずんば、此をば我が法毘奈耶の中に於て、應に速かに驅擯すべし。所以は何ん。此の二種の人は、正法の眼を破毀するの行を習行し、[六八]正法の燈を隱滅するの行を習行し、三寶の種を斷絶するの行を習行し、諸の天人をして無義無利の苦行を習行して、諸の惡趣に墮せしむ。此の二種の人は、自ら正法を謗り、賢聖を毀呰し、亦た他人をして、正法を誹謗し賢聖を毀呰せしむ。命終らば當に無間地獄に墮すべく、劫を經て苦を受け、療治べからず。

*復た次に、大梵よ。(1)或は[六九]遮罪の無依行の法有り。(2)或は[七〇]性罪の無依行の法有り。(3)性罪の中に於ても、或は根本の無依行の法有るなり。

云何んが、「根本の無依行の法」なる。謂く、若し、苾芻、(1)非梵行を行じて根本罪を犯し、(2)或は故思を以て異生の人を殺して根本罪を犯し、(3)或は復た非三寶物を偸盜して根本罪を犯し、(4)或は大妄語して根本罪を犯す。若し、苾芻有りて、此の[七一]四種根本罪の中に於て、隨て一種を犯さば諸の苾芻の所作の事業に於て、折伏を受けしめ、一切の給施・四方僧物を、皆な悉く中に於て受用することを聽さず。而も、亦た、其に鞭杖を加へ、或は牢獄に閉し、或は復た呵罵し、*或は支節を解き、或は其の命を斷つ合からず。此の如きを名けて、性罪の中に於て「根本重罪の依行の法」と爲す。何が故に說きて名けて、根本罪と爲す。謂く、若し人有りて、此の四法を犯さば、身壞し命終つて諸の惡趣に墮せん。是れ諸の惡趣の根本罪なるが故なり。是の故に、說きて名けて、根本罪と

に次の五を加ふ。
(6)不下著二華鬘一好香塗上レ身
(7)不下歌二舞倡一伎亦二往觀聽一
(7)不レ得レ坐二高廣大牀上一。
(9)不レ得二非時食一。
(10)不レ得レ捉二錢金銀寶物一。

【六六】導字、元・明二本及び宮本には、尊に作る。

【六七】元本、合字を令に作る。

【六八】明本を本とする一刊本には佛法燈に作る。

※三種の無依行法
(1)遮罪
(2)性罪
(3)根本

【六九】性罪に對す。飲酒伐木の如き、佛の遮制に依て罪と定められしもの、自性の罪にあらず。但、梵網菩薩戒にいふ七遮罪は、遮止して菩薩戒を受けざらしむべき七逆罪を指すものなり。

【七〇】遮罪に對す。る殺盜等の如き佛制を待たずして、自性是れ惡なる諸惡罪。

【七一】四根本極罪ともいふ。即ち、(1)Abrahmacarya. 淫、非梵行(2)Adattādāna. 盜、不與取(3)Vadha. 殺(4)Uttaramanuṣyadharma-pralāpa. 妄語、妄說上人法、四波羅夷なり。

爲す。

何が故に、無間及び近無間・根本罪等を、說きて「極重大罪惡業の無依行の法」と名くるや。善男子よ。譬へば、鐵摶・鉛錫摶等を空中に擲置するに終に暫くも住すること無く、必ず速かに地に墮つるが如し。(1)五無間、及び近無間の四の根本罪を造り、幷に、(2)正法を謗り、三寶を疑ふ等の[七二]二種の罪人も、亦便た是の如し。若し、人あつて、此の[七三]十一罪の中に於て、隨つて一種を造らば、身壞し命終つて、餘の間隔無く、定んで無間の大地獄の中に生じて、諸の劇苦を受けん。故に「極重大罪惡業の無依行の法」と名く。此の極重大罪惡業の無依行の法を犯す補特伽羅は、現身の中に於て、決定して諸の煩惱を盡すこと能はず、尙ほ諸の三摩地を成ずること能はず、況んや、能く[七四]正性離生に趣入するをや。彼の人、命終らば、定んで、地獄に生じ、諸の重苦を受けん。

復た次に、大梵よ。若しは善男子、若しは善女人あつて、淨信心を以て、我が法に歸依して、或は聲聞乘に趣き、或は獨覺乘に趣き、或は大乘に趣いて、我が法中に於て淨信もて出家し具足戒を受けて、諸の[七五]學處に於て[七六]深心に敬重し、四の根本性罪戒中に於て、堅固に勇猛精勤して守護せんに、是の如きの人は、常に一切の人・非人等の爲に隨逐擁衞せられ、虛にして人天の供養を受けずと名け、三乘中に於て、欣樂する所に隨つて、速かに能く趣入して、成辨し究竟せん。是の故に、眞實に涅槃を求むる者は、寧ろ身命を捨つとも、終に是の如きの四法を毀犯せず。所以は何ん、諸の有情の類、要ず[七七]三因に由つて、涅槃の樂を得。一には如來に依止するを因と爲し、二には我が聖教に依るを因と爲し、三には我が弟子に依るを因と爲す。諸の有情の類は、此三因に依つて、精勤に修行して涅槃の樂を得るなり。若し人あつて、是の如きの四法を毀犯せば、我は彼の師に非らず、彼は弟子に非らざるなり。若し人あつて、是の如きの四法を毀犯せば、則ち我が宣說する所の甚深廣大なる無常・苦・空・無我相應の一切の有情を利益安樂する[七八]別解脫の敎に違越すと爲す。若

【七二】 二字、元・明二本、之を三に作る。

【七三】 五無間罪と四近無間根本罪と誹謗正法と疑三寶との十一なり。

【七四】 唯識には聖性離生とし、俱舍に正性離生といふ。無漏智を離れて煩惱を斷ずるを正性といふ。俱舍論十に「何名二正性一。謂契經言。貪無餘斷。瞋無餘斷、痴無餘斷。一切煩惱皆無餘斷。是名二正性一」とあり。かく煩惱障を斷じて、永く異生即ち凡夫の生を離るるを、正性離生といふなり。

【七五】 Śikṣāpada. 戒基本、學ぶべき基本的箇處。自利、利他、眞實、力、成熟衆生、自熟佛法、無上菩提の七を菩薩の七學處と稱す。

【七六】 深く信ずる心。

【七七】 得涅槃の三因。三寶に依止すること。

【七八】 Prātimokṣa. 波羅提木叉、婆羅提木叉、鉢喇底木叉に作り、別解脫、處處解脫、隨順解脫などと譯す。戒律三名の一。七衆所受の戒律は別別に身口七支の惡を解脫する義。定共戒、道共戒と區別し別解脫戒と稱するなり。

し、是の如きの別解脱の教を起せば、則ち一切の靜慮・等持に於て、皆な盲冥を成じて趣入する能はずして、諸の煩惱の惡業の爲に[七九]纒縛され、三乘の法に於ても亦た、非器と爲し、當に惡趣に墮して諸の重苦を受くべし。

若しは善男子、若しは善女人あつて、我が所說の別解脱の教、所制の四種の根本重罪に於て、淸淨にして犯すこと無くんば、我は是れ彼の師、彼は是れ弟子なり。我が語に隨順して善く我が法に住し、一切の所作、皆な當に成滿せん。此の人、善く尸羅蘊に住するが故に、名けて善く一切の善法に住すと爲し、或は具足して聲聞乘に住すと名け、或は具足して獨覺乘に住すと名け、或は具足して大乘に住すと名く。所以は何ん。若し、能く是の如きの性罪の四根本の法を護持すれば、當に知るべし、則ち、一切の[八〇]有漏・無漏の善法を建立するの勝因と爲す。是の故に、是の如きの四法を護持するを、名けて一切善法の根本と爲す。大地に依つて一切の藥穀・卉木・叢林の皆な生長することを得るが如く、是の如く、極善に依止して四根本戒を護持すれば、一切の善法、皆な生長することを得。大地に依つて一切の諸山・小輪圍山・大輪圍山・妙高山王、皆な安住することを得るが如く、是の如く、極善に依止して四根本戒を護持すれば、諸の聲聞乘・及び獨覺乘・無上の大乘、皆な安住することを得。大地に依つて一切の世間の美味を求め得るが如く、是の如く、極善に依止して四根本戒を護持すれば、一切の念・定・總持・安忍の聖道、乃至、無上正等菩提を求得す。又、大地の淨・不淨に於て、皆な等しく[八一]任持するが如く、極善にして四根本戒を護持する諸の善男子、及び善女人も亦[八二]復た是の如く、其の法器及び非法器に於て、其の心平等にして譏らず弄せず自ら貢高せず、[八三]卒かに呵擧せず、能く一切善法の生ずる處と爲る。又、大地の一切の有情の皆な共に受用して而も存活を得るが如く、極善にして四根本戒を護持する諸の善男子及び善女人も、亦復た是の如し。諸の如來の所說の正法に於て、第一の歡喜淨信を生長して、諸の有情に於て差別の想無く、

【七九】 縛字、三本及び宮本には伏に作る。

【八〇】 有漏Sāsrava.無漏Anāsrava.漏(Āsrava)とは煩惱の異名。煩惱を含有する事物を有漏といふ。一切世間の事は悉く有漏法にして、煩惱を離れたる出世間の事は盡く無漏法なり。

【八一】 任字、宋本及び宮本には住に作る。

【八二】 復字、元・明二本、之を得に作る、

【八三】 卒字、元・明二本、之を率に作る。※同之。

四攝法を以て平等に攝受し、一切の有情皆な共に依止して受用し法樂して而も自ら存活す、」と。

*爾の時、尊者[八四]優波離、佛の所説を聞いて、座從りして起つて衣服を整理し、佛足を頂禮したてまつりて、偏に一肩を袒ぎ、右の膝を地に著けて、掌を合せて恭敬して佛に白して言さく、

『世尊よ。佛の所説の如く、極善にして四根本戒を護持する諸の善男子、及び善女人は、其の法器及び非法器に於て、其の心平等にして譏らず弄せず自ら貢高せず、*卒かに呵擧せず。若し是の如くならば、未來世に於て、諸の苾芻の破戒惡行なる有りて、實には沙門に非ずして自ら沙門と稱し、實には梵行に非ずして自ら梵行と稱せんに諸の苾芻僧、是の人等に於て、云何んが方便して、呵擧し驅擯せん』と。

佛、尊者優波離に告げて言はく、

『我れ、終に外道・俗人に苾芻の罪を擧ぐることを許さず。我れは、尙ほ、諸の苾芻僧に、[八五]法に依らずして率爾に破戒の苾芻を呵擧することを許さず。何に況んや、驅擯するをや。若し法に依らずして率爾に破戒の苾芻を呵擧し、或は復た驅擯せば、便ち、大罪を獲。

*優波離よ。汝、今ま、當に知るべし。十の非法有りて、率爾に破戒の苾芻を呵擧すれば、便ち大罪を獲と。諸の有智の者は、皆な應に受くべからず。

何等をか、十と爲す。一には、僧衆に和せずして、國王の前に於て、率爾に破戒の苾芻を呵擧す。二には、僧衆に和せずして、[八六]梵志衆の前に、率爾に破戒の苾芻を呵擧す。三には、僧衆に和せずして、宰官衆の前に、率爾に破戒の苾芻を呵擧す。四には、僧衆に和せずして、諸の[八七]長者[八八]居士衆の前に於て率爾に破戒の苾芻を呵擧す。五には、女人衆の前に、率爾に破戒の苾芻を呵擧す。六には、男子衆の前に、率爾に破戒の苾芻を呵擧す。七には、[八九]淨人衆の前に、率爾に破戒の苾芻を呵擧す。八には、衆多の苾芻・苾芻尼の前に、率爾に破戒の苾芻を呵擧す。九には、宿怨嫌の前に、率爾

※破戒苾芻の擯出法

【八四】 Upāli 人名。又優婆離、鄔波離、憂波利に作り、近取、近執に譯す。元、悉達太子の執事たりし、持律第一、持戒第一の稱ある、一羅漢。

【八五】 依法とは。驅擯するに必要なる作法、所謂る「擯出羯磨」のこと。

※十の非法

【八六】 梵志 Brahmacārin. 婆羅門四期の一なる梵行を志求する外道の出家者。智度論五六に「梵志者是一切出家の外道。若有承用其法一者。」亦名二梵志こ」と云へり。

【八七】 sreṣṭhin. 富豪又は、年齡德行の長ぜる者を云ふ。

に破戒の苾芻を呵擧す。十には、內に忿恨を懷きて、率爾に破戒の苾芻を呵擧す。
是の如きの十種を、名けて非法と爲す。率爾に破戒の苾芻を呵擧すれば、便ち、大罪を獲。設ひ實事に依つて而も呵擧する者も、尙ほ應に受くべからず、況んや非實に於てをや。諸の受くること有らん者も、亦た大罪を得。

復た、十種の非法有りて、破戒の苾芻を呵擧すれば、便ち、大罪を獲。諸の有智の者は、亦た應に受くべからず。

何等をか、十と爲す。一には、諸餘の外道、苾芻を呵擧す。二には、禁戒を持せざる在家の[九〇]白衣、苾芻を呵擧す。三には、無間罪を造りて、苾芻を呵擧す。四には、正法を誹謗して、苾芻を呵擧す。五には、賢聖を毀呰して、苾芻を呵擧す。六には、癡狂心亂して、苾芻を呵擧す。七には、痛惱に纏はられて、苾芻を呵擧す。八には、四方僧の淨人、苾芻を呵擧す。九には、園林を守る人、苾芻を呵擧す。十には、罰せられし苾芻、苾芻を呵擧す。

是の如くの十種の非法もて、破戒の苾芻を呵擧すれば、便ち、大罪を獲ん。設ひ、實事に依つて呵擧する者も、亦た應に受くべからず、況んや非實に於てをや。諸の受くること有らん者も、亦た大罪を得。

復た次に、優波離よ。若し、苾芻有つて、禁戒を毀犯して僧と與に共住せんに、僧衆の中に於て餘の苾芻有りて、軌則所行皆な悉く具足し、一切の[九一]五德圓滿せずといふこと無し。應に、座より起つて、衣服を整理し、苾芻僧の足を恭敬し頂禮して、便ち破戒の惡苾芻の前に至りて、罪を擧ぐるを聽さんことを求めて、是の如くの言を作すべし。「長老、憶念せよ。我れ今ま長老の所犯を擧げんと欲す。[九二](1)實を以てして、虛妄に非ず。(2)時に應じて、非時ならず。(3)輭語にして麁獷に非ず。(4)慈心にして瞋恚ならず。(5)利益にして損減に非ず。如來の法眼・法燈をして久しく熾盛ならしめ

【八八】 gṛha-pati 家長、家主、長者の義、或は家に居する士の意とす。即ち、毘舍種 vaiśya の豪富なるもの。又は家に居して德を集むる有道の士を云ふ。

【八九】 寺に使用する僕、又苦行とも云ふ。釋氏要覽下（住持）に「毘奈耶に云ふ、淨業を作するに由るが故に淨人と名づくと。若し住處を防護するをば守園民と名づけ、或は使人と云ふべし。今京寺にて家人を呼べり」と云ふ。更に十誦律を引いて其の緣起を示し、「瓶沙王（頻婆娑羅）大迦葉自ら泥を蹋ね屋を修するを見る。王後に於て五百の賊人を捕へ得たり。王問ふ、汝能く比丘に供給せば當に汝が命を救ふべし、皆願ふ、王遂に祇園に往かしめ淨人に充つ、謂く僧の爲めに作淨して僧の有過を免る故に淨人と名づく」と云へり。

【九〇】 沙門を緇衣といふに對して、在俗の人を白衣といふなり。印度にては沙門を除き、人皆鮮白の衣を用ふ。故に俗士を指して白衣と云ふ。西域記第二卷に「衣裳服玩旣に裁製する處なし。鮮白を貴び雜彩を輕んず」と云ふ。

【九一】 一切五德無不圓滿、北涼本には「成就五法」に造る。

んが爲の故なり。長老聽さば、我れ當に如法に長老の[九三]罪を擧ぐべし」と。彼れ若し聽さば、便ち應に如法如實に之を擧ぐべし。彼れ若し聽さずば、復た應に上座の僧の足を頂禮し、恭敬して白して言すべし。「是の如きの苾芻、是の如くの事を犯す。我れ[九四]五法に依つて、如實に之を擧げん」と。時に僧衆中の上座の苾芻、應に審かに能擧と所擧と及び所犯事との虚實輕重を觀察すべし。毘奈耶及び[九五]素怛纜に依つて、方便して檢問し、慰喩し、呵責して、[九六]七種の法を以て、應の如く滅除すべし。若し重罪を犯さば、重に應じて治罰し、若し中罪を犯さば、中に應じて治罰し、若し輕罪を犯さば輕に應じて治罰して、其をして所犯を慚愧し懺悔せしめよ』と。

時に、優波離、復た佛に白して言さく、

『世尊よ。若し、實に過惡行を有するの苾芻、白衣の力・或は財寶の力・或は多聞の力・或は詞辨の力・或は弟子の力を恃みて、是の如き等の諸の勢力を以ての故に、僧衆の上座の苾芻の、素怛纜及び毘奈耶と[九七]摩怛理迦とを持せん者、如法に教誨せんをば[九八]凌拒して、皆な承順せずんば、是の如きの苾芻をば、云何んが治罰せん』と。

佛の言はく、

『優波離よ。上座の苾芻の[九九]三藏を持せん者は、應に僧衆を和して使を遣はして、國王大臣に告白して、威力を助けしめ、然して後に、如實に法に依つて、治罰べし』と。

時に、優波離、復た佛に白して言さく、

『世尊よ。若し、彼の過惡行を有するの苾芻、財寶の力・或は多聞の力・[一〇〇]或は詞辨の力を以てし、或は種種巧方便の力を以てして、彼の國王大臣をして歡喜して皆な破戒非法の朋中に任せしめ、容縱して是の如きの惡苾芻の罪も、如實に法に依つて治罰することを聽さざらんに、爾の時には、僧衆、應當に云何がすべき』と。

五德(Pañca-guṇā)とは、所謂る自恣(Pravāraṇa)の五德なり。安居究竟の日に、僧衆に擇ばれて自恣擧罪の任を爲すものの具ふべき二種の五德をいふ。(1)不愛(2)不恚(3)不怖(4)不癡(9)自恣と不自恣とを知るの、所謂る自恣の五德と、又、(1)時を知る(2)眞實(3)利益(4)柔軟(5)慈心の所謂る擧罪の五德となり。四分律に「二の五法」とは、上の二種をいふ。

【九二】所謂る擧罪の五法、又は五德を擧ぐるなり。前註を見よ。

【九三】罪字、宋・明二本には非に作る。

【九四】擧罪の五法を指す。前出註「九一」、「九二」を見るべし。

【九五】素怛纜、(sūtra.)修多羅、修妒羅、修多闌、に作り、契經、正經、貫經とも譯す。(一)三藏の一、即、律及論に對する佛所說の敎法。(二)九部敎の一、十二部敎の一、即散文を以て直說せる經。との二種あり、今は前者を指す。

【九六】Sapta adhikaraṇa-śamatha dharmāḥ. 即ち七滅諍法を指す。比丘の諍論を滅

佛の言はく、

『優波離よ。若し、彼の苾芻、無依行を行じて、僧衆の中に於て、麁重の罪相未だ彰露せずんば、是の時には、僧衆、應に權に捨置すべし。若し彼の苾芻、無依行を行じて、僧衆の中に於て、麁重の罪相已に彰露せば、是の時には、僧衆、應に共に和合して法に依つて驅擯して、佛の法より出でしむべし。

優波離よ。譬へば、穢麥の麥田の中に在るが如し。[一〇一]芽莖・枝葉、麥と相似たるも、淨麥を穢雜せんに、乃至、彼の草、其の穗未だ出でず。是の時には、農夫は、應に權に捨置すべし。穗、既に出で已る。是の時には、農夫は、淨麥を穢さんを恐れて、根を幷せて剪拔して、田の外に棄つ。無依行を行ずる破戒の苾芻も、亦復た是の如し。白依等の種種の勢力を恃んで、僧中に住して、威儀・形相、僧と相似たるも、清衆を穢雜せんに、乃至、善神未だ相覺發せずして、僧衆の中に於て麁重の罪相未だ彰露せずんば、是の時には、僧衆は、應に權に捨置すべし。若し、諸の善神已に相覺發して、僧衆の中に於て麁重の罪相已に彰露せば、是の時には、僧衆は、應に共に和合して、法に依つて驅擯して、佛法より出でしむべし。

優波離よ。譬へば、大海の、死尸を宿さざるが如く、我が聲聞僧の諸の弟子衆も、亦復た是の如し。破戒惡行の苾芻の死尸と與に共住せざれ』と。

時に、優波離、復た佛に白して言さく、

『世尊よ。若し、彼の破戒・惡行の苾芻をば、僧衆和合して共に驅擯し已らんに、彼の惡苾芻、財寶の力・或は多聞の力・或は詞辯の力を以てし、或は種種の巧方便の力を以てして、彼の國王大臣をして歡喜して、皆な破戒非法の朋中に住せしめて、威勢力を以て、僧衆を凌*逼して、還つて是の如きの破戒の苾芻をして、僧と與に共住せしめんに、爾の時には、僧衆は、當に復た云何がすべき』

除する爲の戒律。比丘比丘尼の受持すべき具足戒八篇の第八聚。所謂比丘間の四諍(言・覓・犯事)を滅するに、七種の毘尼、毘奈耶を應用すべしとなり。即ち次の七種の滅淨法なり。

(n) 前現毘尼 Saṃmukha-vinaya.

(2) 憶念毘尼 smṛti-v

(3) 不癡毘尼 amūḍha-v

(4) 自言治毘尼 pratijñākāraka.-v.

(5) 多人語毘尼 yadbhūyasikīya-v.

(6) 罪處所毘尼 tatsvabharaiṣiya-v.

(7) 草覆地毘尼 tṛṇastāraka-v.

【九七】 Mātṛkā. 摩怛履迦、摩得勒伽、摩德勒迦、摩多羅迦、摩夷などに作る。論藏の別名なり。譯、本母、行母。論藏は理本を生ずる母なれば本母、行法を生ずる母なれば行母といふ。

【九八】 凌字、三本及び宮本聖本等之を陵に作る。以下同之。

【九九】 Tri-piṭaka. 經・律・論の三藏。即ち(1)素怛纜藏 Sūtrānta-piṭaka. (2)毘奈耶藏 Vinaya-p. (3)阿毘達磨藏 Abhidharma-p. 即ち本譯の摩怛理迦の三なり。佛典をその內

と。

佛の言はく、

『優波離よ。爾の時には、僧の中に能く悔愧を有する、持戒の苾芻、戒を護らんが爲の故に、應に破戒の苾芻を瞋罵すべからず。但だ、應に國王大臣に告白すべし。或は淩逼を恐れて而して告白せずんば、應に本居を捨てて、別れて餘處に[一〇三]往くべし』と。

容に依り。三種に類採せしものなり。また三法藏とも名く。

【一〇〇】聖語藏本、或字の下に或を加ふ。

【一〇二】芽字、麗本には牙に作る。

【一〇三】往字、明本には住に作る。

卷の第四

＊無依行品　第三之二

＊爾の時、地藏菩薩摩訶薩、復た佛に白して言さく、

『大德世尊よ。頗る佛土有り。五濁惡世の空しく無佛の時、其の時其の中の衆生、煩惱熾盛にして諸惡行を習ひ、愚癡[一]佷戾（れい）にして[二]化導すべきこと難し。謂く、刹帝利の[三]旃茶羅、宰官の旃茶羅、居士の旃茶羅、長者の旃茶羅、[四]沙門の旃茶羅、婆羅門の旃茶羅、是の如き等の人、善根微少にして信心有ること無く、諂曲愚癡にして聰明の慢を懷き、後世の苦果を見ず、畏れず。[五]善知識を離れて、乃至、無間地獄に趣向す。是の如き等の人、財利の爲の故に、諸の破戒惡行の苾芻と、相助けて共に非法の朋黨と爲り、皆な定んで無間地獄に趣向す。若し、是の處有らば、我れ、當に彼に往き、佛世尊如來法王の一切有情を利益し安樂する無上微妙の甘露の法味を以て、方便もて化導して、受行を得せしめ、是の如きの刹帝利の旃茶羅、乃至、婆羅門の旃茶羅を拔濟して、無間地獄に趣向せざらしめん』と。

＊爾の時、佛、地藏菩薩摩訶薩に告げて言はく、『善男子よ。未來世の此の佛土の中に於て、諸の衆生有つて、煩惱熾盛にして諸の惡行を習ひ、愚癡佷戾にして化導すべきこと難し。

謂く、刹帝利の旃茶羅、宰官の旃茶羅、居士の旃茶羅、長者の旃茶羅、沙門の旃茶羅、婆羅門の旃茶羅、是の如き等の人、善根微少にして信心有ること無く、諂曲愚癡にして聰明の慢を懷き、善知識を離れて、言に眞實無く、善知識の語に隨順すること能はずして、常に誹謗を行じて諸の正法に於て毀呰し罵詈して、猶豫し倒見して、後世の苦果を見ず畏れずして、常に樂（この）んで諸の惡律儀を習近し、好んで殺生、乃至、邪見を行じて、世間を欺誑し、自他倶に損ず。是の刹帝利の旃茶羅、乃

※北京本卷第四「刹利旃陀羅現智相品第六」前半に相當す。

※地藏菩薩の墮無間地獄者拔濟の願。

【一】佷字、三本及び宮本、很に作る。以下※同之。

【二】難可化導、三本に依る。麗本、導字を不に作る。

【三】Caṇḍāla.　また、旃陀羅ともし、居者、嚴熾、執暴惡人、下姓などに譯す。法顯傳に「旃茶羅、名爲二惡人一、與レ人別居」「旃茶羅、此云二執暴惡人一、亦言二惡殺一」といへり。

【四】沙門旃茶羅の五字、三本、宮本及び聖本、之を缺く。

【五】Dakṣa.　善とは善く導くの意、知識とは知人、知友の義。自己を善道に導く良友なり。

※墮無間地獄者の相。

至、婆羅門の旃茶羅は、我が法を壞亂し、我が法の中に於て而も出家することを得て、禁戒を毀破し、樂んで俗業を營む。彼の刹帝利、乃至、婆羅門等、恭敬し供養す。利を貪り財を求め、言有つて行無く、書を傳へて印を送り、通信往來し、商[六]賈販易し、好んで外典を習ひ、種[七]殖して農を營み、寶物を藏貯し、園宅・妻妾・男女を守護し、符印・呪術・使鬼を習行し、吉凶を占相し、湯藥を合和して、病を療して財を求め、以て自ら活命す。飲食・衣服・寶飾を貪著して、勤めて俗務を營み、尸羅を毀犯して諸の惡法を行じ、[八]貝音し、[九]狗行す。實には沙門に非ずして自ら沙門と稱し、實には梵行に非ずして自ら梵行と稱す。彼の刹帝利の旃茶羅、乃至、婆羅門の旃茶羅、愛樂し親近し恭敬し供養して、言教を聽受す。此の破戒の者、刹帝利の旃茶羅、乃至、婆羅門の旃茶羅に於て、亦た樂んで親近し恭敬し、供養して、言教を聽受す。若し、人有つて我が法の中に於て出家することを得て、已に戒を具へ、德に富み、精進修行して[一〇]無學の行を學し、乃至、最後の[一一]極果を證得することを見ば、彼の刹帝利の旃茶羅、乃至、婆羅門の旃茶羅は、[一二]反つて憎嫉を生じ、樂んで親近し恭敬し供養して言教を聽受せず。

善男子よ。譬へば、人有つて寶洲渚に入りて種々の[一三]帝青・[一四]大青・金・銀・眞珠・[一五]紅蓮華色・[一六]茷琉璃等の大價の眞寶を棄捨して[一七]迦遮珠を取るが如し。未來世の此の佛土の中に於て、刹帝利の旃茶羅、乃至、婆羅門の旃茶羅有りて、亦復た是の如く、我が正法の寶洲渚の中に入りて、種々の、戒を具して德に富み、勝義諦を樂ひて慚愧を具足し、無學の人及び善き異生に學び、[一八]六到彼岸を精勤し修學して諸の功德を具する、眞聖の弟子を棄捨して、諸の破戒の、好んで衆惡を行じ、無慚無愧にして[一九]言辭麁獷に身心憍慢にして諸の白法を離れ、無慈無悲にして惡行なる、苾芻を取つて、以て福由と爲し、恭敬し供養して言教を聽受す。是の如きの惡人の師及び弟子は、倶に定んで無間地獄に趣向す。

【六】賈字、三本、宮本及び聖本、估に作る。
【七】殖字、三本、之を植に作る。以下※同之。
【八】貝は法螺なり。法儀時を知らして以て大衆を招集するに用ふ。
【九】狗法を行ずる所謂る狗戒外道の行法を指す。狗法を天上の生因と邪度し、狗に則りて戸外に臥し、人糞を食らふなどするなり。
【一〇】Aśaikṣa. 聲聞乘四果中、前三果を有學とし、第四阿羅漢果を無學と呼ぶ。學道圓滿して更に修學することなきをいふ。
【一一】至極の證果。佛果。
【一二】反字、宋・元二本及に、宮本、乃に作る。
【一三】Indranīla. 帝釋青、鶴青天青珠。珠寶の名。玄應音義に「帝靑。梵言二因陀羅尼羅目多(-muktā)一。是帝釋寶。亦作二青色一。以二其最勝一故稱二帝釋青一。目多此云レ珠。以二此寶一爲レ珠也。」と。
【一四】Mahānīla. 大青寶、大青珠。摩訶尼羅、摩訶泥羅と

*善男子よ。[二〇]「十の惡輪」有り。未來世の此の佛土の中に於て、刹帝利の旃茶羅、宰官の旃茶羅、居士の旃茶羅、長者の旃茶羅、沙門の旃茶羅、婆羅門の旃茶羅、是の如き等の人、十の惡輪に於て、或は隨つて一を成じ、或は具さに成就せば、先に修集する所の一切の善根、摧壞し燒滅して皆な灰燼と爲り、久しからずして、便ち、當に[二一]肢體廢缺し、多くの日夜に於て、舌を結んで言へず、諸の苦毒を受けて、痛切忍び難く、命終つて、定んで無間地獄に生ずべし。

何等をか、十と爲す。

(2)是の如きの破戒惡行の苾芻は、刹帝利及び宰官等有らんに、惡見を忍受して、阿練若の清淨の苾芻を謗りて言はく、

『諸の仁者よ。是の如きの苾芻は、愚癡凡猥なり。詐つて異相を現じて、世間を誑惑し、飮食・衣服・利養・恭敬・名譽を求めんが爲めに自讃毀他し、嫉妬鬪亂し、名利に貪著して厭足すること有ることとなし、應當に擯黜すべし。其の言を受くること勿れ。是の如きの苾芻は、專ら妄語を行じて、諂實の法を離る。此に於て皆な道果を得る者無く、亦た欲を離れて永く諸漏を盡すこと無し。但だ、利養・恭敬・名譽の爲めに、阿練若に住して、自ら有德を現ず。愼んで供養し恭敬し承事すること莫れ。是の如きの諂曲なるは、眞の福田に非ず。行道の者に非ず』と。

時に、刹帝利の旃茶羅、乃至、波羅門の旃茶羅、阿練若の清淨の苾芻に於て、[二二]實信の心・希有の想を生ずること能はず、心に恭敬することなく、意に[二三]凌蔑を懷き、親近し、承事し、供養することを樂はず、所有の言說は、皆な聽受せずして、是の如きの阿練若に住する清淨の苾芻を輕毀す。即ち、是れ一切の法眼・三寶の種[二四]姓を輕毀するなり。

時に、彼の國中に、諸の天・龍・藥叉神等の、三寶を信敬して、動壞することなき者有り。刹帝利の旃茶羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃茶羅の人に於て、心に瞋恚を生じて、互相に謂ひて言はく、

も音譯す。青色の寶玉名。亦た帝釋所用の寶とさる、

※十惡輪

【一五】 Padmarāga.（鉢摩羅伽。譯、赤光珠、映紅、紅鴉鶻）のことか？

【一六】 筏字、明本及び宮・聖二本筏に作る。琉字、明本、瑠に作る。

【一七】 Kāca-mani. 又迦柘、迦遮末尼に作る。玄應音義には水精とせるも、慧琳音義には、琨瑤珉玉の類の珠寶名とし、また惡寶の名と言へり。Kācaka.（鍮石）といふも同じ。

【一八】 Saḍ pāramitā. 六波羅蜜多、六度。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六。

【一九】 辭字、三本及び宮本、之を詞に作る。

【二〇】 北涼本と同じく、十惡輪をいふも、具さにその數を擧げず。殺生乃至邪見等の十不善、十惡業を指すとも見えず。

【二一】 肢字、聖語藏本、支に作る。

【二二】 「不能生實信心希有之想」三本及び宮・聖二本には、「不生信心云々」に作る。

【二三】 凌字、宮本には欻に作る。蔑字、三本及び宮本、懱に作る。

【二四】 姓字、三本俱に、性に

『仁等、當に觀ずべし。此の刹帝利・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人は、皆な悉く一切の法眼・三寶の種姓を輕毀し、善根を損[二五]減し、惡友の力に由つて諸の罪業を攝す。當に惡趣に墮すべし。我等、今より、復た此の刹帝利の旃荼羅等、幷びに其の所居の國土・城邑を擁護すること勿れ』と。

是の語を作し已つて、一切の天・龍・藥叉神等、皆な悉く棄捨して、復た彼の刹帝利の旃荼羅等、幷びに彼の所居の國土・城邑を擁護せず。彼の國土に於ける、一切の法器・眞實の福田は、皆な其の國を出で、設ひ、住まる有らん者も亦た、捨心を生じて復た護念せず。諸の天・龍・藥叉神等、及び諸の法器・眞實の福田の、刹帝利の旃荼羅、幷びに彼の所居の國土・城邑に於て、皆な守護を捨てて、護念せずして已むに由つて、時に、彼の國土には、自軍他軍競ひ起つて侵[二六]凌し、更相に殘害し、疾疫饑饉、此れに因つて復た興る。彼の刹帝利の旃荼羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃荼羅の人、一切の國民も、皆な歡樂すること無し。先に愛樂せし所は今悉く別離し、朋友・眷屬、更相に瞋恨して、[二七]潛謀猜貳し、無慈・無悲にして、嫉妬慳貪し、衆惡皆な起る。所謂る殺生、乃至、邪見、無慚・無愧にして、一切の[二八]窣堵波物、及び[二九]僧祇物を食用して、曾て悔心なし。彼の刹利の旃荼羅王は、忠賢を憎嫉し、諂佞を愛樂して、[三〇]已の官庶をして互相に侵[三一]凌して憤恚し怨を結びて諸の鬪諍を興さしめ、餘の隣國と共に陣戰を交ふるの時には軍士離心して退敗せずといふことなし。彼の刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人は、久しからずして、便ち、當に[三二]支體廢缺し、多くの日夜に於て、舌を結びて言へずして、諸の苦毒を受け、痛切忍び難く命終つて定んで無間地獄生ずべし。

(3)復た次に、善男子よ。刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人有り。惡友に隨つて行ひ、善根微少に、諂曲愚癡にして、聰明の慢を懷き、三寶の所に於て淳淨の心なく、

作る。以下※同之。

【二五】減字、三本及び宮本、滅に作る。

【二六】凌字、三本及び聖本、陵に作る。

【二七】潛字、三本及び宮本、譖に作る。

【二八】Stūpika. 窣堵波、塔婆、即ち佛塔に屬する一切の資物。佛塔維持の爲の財物、並に佛塔に供施せられたる事物。佛物ともいふ。佛前の供物等なり。

【二九】Sāṃghika. 僧伽物、僧物ともいふ。僧團に屬する一切の資物。一切の沙門比丘等の僧團人の共用すべき、寺舍、厨庫、田園、僕畜等のものは、之を四方僧物、招提僧物、十方僧物、或は常住僧物等と名

後世の苦果を見ず畏れず。

此に一類有り。聲聞乘に於て、微少の信を得、實には是れ愚癡にして自ら聰敏なりと謂ひ、我が所説の緣覺乘の法、及び大乘の法に於て、毀呰誹謗して、衆生の、下至、一頌を受持し讀誦することを聽さず。

復た一類有り。緣覺乘に終て、微少の信を得、實には是れ愚癡にして自ら聰敏なりと謂ひ、我が所説の聲聞乘の法、及び大乘の法に於て毀呰し、誹謗して、衆生の、下至、一頌を受持し讀誦することを聽さず。

復た一類有り。大乘の法に於て微少の信を得、實には是れ愚癡にして自ら聰敏なりと謂ひ、我が所説の聲聞乘の法、緣覺乘の法に於て毀呰し誹謗して、衆生の、下至、一頌を受持し讀誦することを聽さず。

斯くの如き等の人を、名けて佛の正法を毀謗する者と爲す。亦た三世の諸佛に違逆すと爲す。三世の佛の一切の法藏を破り、焚燒し斷滅して皆な灰燼と爲し、一切の八支聖道を斷壞し、無量の衆生の法眼を挑壞す。

若し、刹帝利の旃荼羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃荼羅の人、佛の所説の聲聞乘の法・緣覺乘の法、及び大乘の法に於て、障礙し覆藏して其をして乃至一頌を隱沒せしめば、當に知るべし、是の人を、一切の法眼・三寶の種*姓を恭敬せずと名く。是の因緣に由つて、國土を護る一切の天・龍・藥叉神等の三寶を信敬して動壞なき者をして、刹利帝の旃荼羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃荼羅の人に於て、心に瞋恚を生ぜしめ、廣く説かば乃至、法彼の刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人、久しからずして便ち當に支*體廢缺して、多くの日夜に於いて舌を結びて言へずして、諸の苦毒を受けて痛切忍び難く、命終つて定んで無間の大獄に生ずべし。

け、特定の現前僧の特に受用すべき共有物、即ち施主より現前の僧衆に施與せられしもの、亡比丘の遺物等は、之を現前僧物と呼ぶ。

【三〇】今已官庶互相侵凌云々、明本には、今已云々に作る。

【三一】凌字、明本及び聖本、陵に作る。

【三二】支字、三本には肢に作る。以下※同之。

(4)復た次に、善男子よ。刹帝利の旃茶羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃茶羅の人有り。破戒の惡苾芻の行に隨逐す。廣く說かば乃至は、彼の國土に於て、諸の法器・眞實の福田有るも、刹帝利の旃茶羅等に於て、皆な捨心に住して而も護念せず。其の國に居すと雖も、法に依つて住して、常に俗間の居止を喜樂せず。亦た、數數施主の家に往かず。設令ひ、暫く往くとも而も語言を護る。縱ひ、語言有りとも、曾つて虛誑無し。終ひに、彼の在家の人の前に對して、諸の破戒の者を譏毀し輕弄せず。諸の破戒惡行の苾芻に於て終ひに輕然として輙く相ひ檢問せず。亦た相を現じて、故らに其の非を顯さず。常に、福田に近づき諸の破戒を遠ざく。而も、彼の破戒惡行の苾芻、此の持戒眞善の行者に於て、反つて瞋恨を生じ、輕毀し侵[三三]凌す。刹帝利の旃茶羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃茶羅の人、在家の男女大小等の前に於て、種種に諂曲し虛妄して談論し、此の持戒の者を毀呰し誹謗して、刹帝利の旃茶羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃茶羅の人をして、我が弟子の小欲・知足・持戒・多聞にして妙辯才を具せる、諸の苾芻の所に於て、心に瞋恨を生じて、種々の麁言もて呵罵して逼功し、心をして憂惱に、身をして安泰ならざらしめ、或は衣鉢の諸の資身の具を奪つて、其れをして[三四]匱乏ならしめ、或は施す所の四方僧物を奪つて、受用することを聽さず、或は牢獄に閉して枷鎖し拷楚し、或は*支節を解き、或は身首を斬らしむ。

善男子よ。當に觀るべし。是の如きの諸の刹帝利の旃茶羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃帝羅の人、破戒惡行の苾芻に親近して、是の如きの種々の大罪を造作し、乃至、當に無間地獄に墮すべし。若し、諸の衆生、五無間を作り、或は重戒を、或は近無間の性罪・遮罪を犯すも、猶ほ輕し。是の如きの諸の刹帝利の旃茶羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃茶羅の人の、破戒越法の重罪に親近するよりは。

(5)善男子よ。是の如きの破戒惡行の苾芻、是の如きの越法の重罪を作ると雖も、而も我が法に依

【三三】凌字、聖本には陵に作る。以下※同之。

【三四】匱字、聖本には遺に作る。

つて、鬚髮を剃除し袈裟を被服して、進止の威儀諸の賢聖に同じくんば、我れ、尙ほ國王・大臣・諸の在家の者の俗の正法に依つて、鞭杖等を以て其の身を捶[三五]拷し、或は牢獄に閉し、或は復た呵罵し、或は支節を解き、或は其の命を斷つことを許さず。況んや非法に依るをや。國王・大臣・在家の者、若し、此の事を作さば、便ち大罪を獲て、[三六]決定して當に無間地獄に生ずべし。

諸の破戒惡行の苾芻に於てすら、猶ほ尙ほ、應に是の如く讁罰すべからず。何に況んや、持戒眞善の行者をや。

(6)善男子よ。若し苾芻有りて、諸の根本の性の重罪中に於て、隨つて一罪を犯さんに、破戒惡行苾芻と名づくと雖も、而も親教の和合僧中の所得の律儀に於て、猶ほ斷絕せず、乃至は、所學の尸羅を棄捨するも、猶ほ自法の香氣有つて隨逐す。國王・大臣・諸の在家の者は、律儀あること無し。應に輕慢し、及び、讁罰を加ふからず。是の如きの苾芻は、法器に非ず、聖法を退失し、淸衆を穢雜し、一切の沙門の法事を破壞して、四方僧物を受用することを得ずと雖も、而も親教の和合僧中の所得の律儀に於て棄捨せざるが故に、猶ほ一切の在家の白衣に勝れり。性罪を犯ずる者すら、尙ほ應に是の如くなるべし。況んや、其の餘の諸の小遮罪を犯すをや。是の故に、國王・大臣・諸の在家の者の、輕慢し讁罪することを許さず。

所以は何ん。

＊善男子よ。乃往、過去に[三七]迦奢國王有り、[三八]梵授と名けき。旃荼羅に勅すらく、『大象王有り。[三九]青蓮目と名く。六牙具足して[四〇]雪山の邊に住む。汝、彼に往きて牙を拔取して來る可し。若し得ざれば、汝等五人は定んで活くる義無からん』と。時に、旃荼羅、身命を護らんが爲に、弓箭を執持し、赤き[四一]袈裟を[四二]被り、詐つて沙門の威儀形相を現じて、雪山の邊に往き、象王の所に至る。時に彼の母の象、遙かに人の來るを見るに、弓箭を執持せり。驚怖して馳走し、象王の所に詣りて、白言すらく、

【三五】拷字、聖本には考に作る。以下※同之。

【三六】決字、元本、之を法に作る。

※六牙象王因緣。

【三七】Kāśa (?) 佉沙國、即ち今の Kashgar.（疏勒）か。北顯傳の竭叉國と同じか。北凉本には、迦尸(Kāśi.)とせり。迦奢は今のベナレス地方なり。迦奢はその訛音か。

【三八】Brahmadatta. 北凉本、梵摩達多に作る。

『大天よ。今ま人有りて、弓を張り箭を捻りて、徐行して覘覘しつつ、我等に來趣す。將に我等が命を盡さんと欲するに非ざるか』と。

象王、聞き已つて目を擧げて、卽ち、鬚髮を剃除し袈裟を著せる人を見る。卽ち、母象の爲に、而も頌を說いて曰く、

殑伽沙に等しき　諸佛の法幢の相を被る。
此を觀ば諸惡を離る。　必ず衆生を害さじ。」

時に、彼の母象、頌を以て答へて[四三]曰く、

法服を被るを知ると雖も、　而も弓箭を執持す。
是の惡しき旃荼羅は、　惡を樂んで悲愍無からん。」

時に、大象王、復た頌を說いて曰く、

袈裟の一相を見て、　是れ慈悲の本なりと知る。
此は必ず佛に歸する者、　諸の衆生を愍念せん。
汝、疑慮を懷くこと勿れ、　宜しく應に速かに心を攝すべし。
此の法衣を被る人は、　生死の海を渡らんと欲するなり。

時に、旃荼羅、卽ち毒箭彎弓を以て、審射して象王の心に中つ。母象、之を見て、聲を擧けて號[四四]咷し、悲哀哽噎して、頌を以て自言す。

此の法衣を披る人、　宜しく應に定んで佛に歸すべし。
威儀は寂靜なりと雖も、　而も毒惡の心を懷く。
應に速かに彼の身を踏んで、　其の命根をして斷たしめ、
此の怨を滅して盡さしむべし、　天身を射ちしを以ての故に。」

【三九】北京本、「鬱波羅華（Utpala. 眼（Cakṣu.）」に作る。
【四〇】Himavān. 雪藏ともいふ。今のヒマラヤをいふ。
【四一】Kaṣāya. 不正、壞、濁、染赤色などに譯す。比丘らの法衣なり。
【四二】被字、三本及び宮本、披に作る。
【四三】曰字、三本及び宮本、言に作る。
【四四】咷字、三本、眺に作る。

時に、大象王、頌を以て答へて曰く、

寧ろ速かに身命を捨つとも、　惡心を生ずべからず。
彼れ、詐りの心を懐くと雖も、　猶ほ佛の弟子に似たり。
智者は、命の爲に、　而も清淨心を[四五]壞するに非らざるなり。
諸の衆生を度せんが爲に、　常に菩提の行を習ふなり。

時に、大象王、心に悲愍を生じ、徐ろに人に問うて曰はく、
『汝、何をか須ゐる所ぞ』と。
彼の人答へて曰はく、
『汝が牙を須ゐんと欲す』と。
象王、歡喜して、卽ち自ら牙を拔いて、旃荼羅に施して、而して頌を說いて曰はく、

我れ、白牙を以て、今ま、汝に施す。　忿り無く、恨み無く、貪惜すること無し。
願はくは此の施福もて、當に成佛して、　諸の衆生の煩惱の病を滅すべし。

善男子よ。當に觀るべし。是の如く、過去の象王は、無[四六]暇の傍生趣の身を受くと雖も、[四七]阿耨多羅三藐三菩提を求めんが爲の故に、而も能く身命を棄捨して悋むこと無く、袈裟を著けし人を恭敬し尊重して、彼れ怨を爲すと雖も、而も報を加へざりき。

然るに、未來世に刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人有りて、實には是れ愚癡にして聰明の慢を懐き、諂曲虛詐して世間を欺誑し、後世の苦果を見ず畏れず、我が法に歸して而も出家せる者の、若しは是れ法器若しは非法器の、諸の弟子の所に於て、惱亂し呵罵して、或ひは鞭杖を以て其の身を楚撻し、或ひは牢獄に閉し、乃至、命を斷つ。此は、一切の過去・未來・現在の諸佛に於て、諸の大罪を犯すなり。決定して當に無間地獄に趣くべし。善根を斷滅して、焚

【四五】壞字、三本及び宮本、懐に作る。此の二行、北涼本には「智者は己れの爲に、卒暴に瞋心を起さず。常に衆生の爲を思うて、菩提を修行す」とせり。

【四六】暇字、三本及び宮・聖二本倶に、暇に作る。以下※同之。

【四七】Anuttara-samyak-sambodhi.無上正遍知、無上正遍覺、無上正等覺、無上正等菩提、など譯す。

燒し相續す。一切の智者の遠離する所なり。

彼れ既に是の如きの重罪を造作し、復た傲慢を懷きて世間を誑惑して、自ら稱すらく、

『我等も亦た、無上正等菩提を求む。我は是れ大乘、當に作佛を得べし』と。

譬へば、人有りて、自ら其の目を挑り、盲ひて所見無く、而も他を導いて大山に登上せんと欲するに、終に是の處り無きが如し。

未來世に於て、刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人有るも、亦た復た、是の如し。我が法に歸して、而も出家せる者の、若しは是れ法器若しは非法器の、弟子の所に於て、惱亂し呵罵して、或ひは鞭杖を以て其の身を楚撻し、乃至、命を斷つ。此は、一切の過去・未來・現在の諸佛に於て、諸の大罪を犯すなり。善根を斷滅して、焚燒し相續す。一切智者の遠離する所なり。決定して當に無間地獄に趣くべし。

彼れ、既に是の如きの重罪を造作し、復た傲慢を懷きて世間を誑惑して、自ら稱すらく、

『我等も亦た、無上正等菩提を求む。我れは是れ大乘、當に作佛することを得べし』と。

彼れ、出家の人を惱亂するに由つての故に、下賤の人身すら、尚ほ得べきこと難し。況んや當に能く二乘の菩提を證すべき。無上の大乘は、其に於ては、分を絶せり。

*又、善男子よ、過去に國あり。[四八]般遮羅と名づく。王は[四九]勝軍と號して、彼の國を統領す。時に彼に一の大丘壙の所あり、[五〇]掲藍婆と名づく。甚だ怖畏すべし。藥叉・羅刹、多く其の中に住す。若し[五一]入る者有らば、心驚きて毛竪つ。時に、國に人有りて罪應さに死すべし。王、典獄に勅して、其の五處を縛し、掲藍婆大丘壙の所に送り、諸の惡鬼をして其の身を食噉せしむ。罪人、聞き已つて、命を護らんが爲の故に、即ち鬚髮を剃り袈裟を求覓めて、遇ま、一片を得て、自ら其の頸に繫ぐ。時に、典獄の者、王の勅する所の如く、其の五處を縛して、丘壙の中に送る。諸人還り已つて、夜分に至

※掲藍婆塚羅刹因縁。
【四八】 Pañcāla. 般沙羅ともす。古印度の十六大國の一。五執と譯す。此の國の王、仁慈にして死刑を廢し、但だ罪人の五體を縛して之を山に捨つるのみといふ。北涼本、般闍羅に作る。
【四九】 Prasenajit. 波斯匿、鉢邏犀那時多。
【五〇】 又、掲藍波。北涼本には、輞藍に作る。鬼の住む塚處。玄應音義には「掲藍婆、舊經云ニ可羅一。此云レ强也」とし、慧琳音義には「唐云ニ伏剛强處一」とせり。
【五一】 入者、三本及び宮本、人見に作る。「若し人見ること有らば」なり。

る。大羅刹母有り、刀劍眼と名く。五千の眷屬と與に來つて塚間に入る。罪人、遙かに見て身心驚悚す。時に、羅刹母、此の人の五處を縛せられ、鬚髮を剃除し、片赤袈裟を其の頸下に繫くること有るを見て、卽便ち、右遶し尊重し頂禮して、合掌し恭敬して、而して頌を說いて言はく、

人よ、自ら安慰すべし。　我れは終に汝を害せず。
剃髮・染衣を見るに、　我をして佛を憶念せしむ。

時に、羅刹子、其の母に白して曰はく、

母よ、我れ、飢渴の爲に、　甚だ身心を逼切せり。
願はくは、此の人を食することを聽せ。　苦を息めて身心樂ならん。

時に、羅刹母、便ち、子に告げて言はく、

殑伽沙の佛の、　解脫幢相の衣を被る。
此に於て惡心を起さば、　定んで無間の獄に墮さん。

時に、羅刹子、諸の眷屬と與に、此の人を右遶し、尊重し頂禮し合掌し恭敬して、而して頌を說いて曰はく、

染衣の人に懺悔す。　我れ、寧ろ、父母に於て、
身語意の惡を造るとも、　汝に於ては、終に害すること無からん。

爾の時、復た大羅刹母有り。[五二]驢騾齒と名く。亦た五千の眷屬有りて圍遶し、來りて塚間に入る。時に、羅刹母、亦た此の人の、五處を縛せられ、鬚髮を剃除し、片赤袈裟を其の頸下に繫くるを見て、卽便ち、右遶し頂禮し合掌して恭敬して、而して頌を說いて言はく、

人よ、我れに於て怖るること勿れ。　汝が頸に繫くる所の服は、
是れ、仙幢相の衣なり。　我れ頂禮し供養しまつる。」

【五二】北京本には、牛齒に作る。

是に、羅刹子、其の母に白して曰はく、

人の[五三]血肉は甘美なり。　願はくは母よ、我が食することを聽せ。
身心の力を増長し、　勇猛にして所畏無からん。

時に、羅刹母、便ち、子に告げて言はく、

人天等の妙藥は、　出家を恭敬するに由る。
故に染衣を供養せば、　當に無量の樂を獲べし。

時に、羅刹子、諸の眷屬と與に此の人を右遶し尊重し頂禮し合掌し供敬して、而して頌を說いて曰はく、

我れ今ま、恭敬して、　剃髮染衣の人を禮す。
願はくは[五四]常に未來に於て、　佛を見たてまつりて深く信を生ぜん。

爾の時、復た大羅刹母有り。[五五]髯鬘髮と名く。亦た五千の眷屬有りて圍遶し、來つて塚間に入る。時に、羅刹母、亦た此の人の、五處を縛せられ、鬚髮を剃除して、片赤袈裟を其の頸下に繋くるを見て、即便ち、[五六]右遶し尊重し頂禮し合掌して恭敬し、而して頌を說いて言はく、

大仙の幢相の衣を、　智者は應に讚奉すべし。
若し能く供養を修せば、　必ず諸有の縛を斷ぜん。

時に、羅刹子、其の母に白して曰はく、

此の人の身の血肉は、　國出の[五七]賚ふ所なり。
願はくは飲噉することを聽せ。　力を得て母に承事せん。

時に、羅刹母、便ち子に告げて言はく、

是の如きの染衣の人は。　汝の應に食らふべき所に非ず。

【五三】血字、三本倶に母に作る。
【五四】常字、三本及び宮本、當に作る。
【五五】北涼本、黃髮に作る。
【五六】右字、宮本、石に作る。
【五七】賚字、麗本には賴に作る。今、三本及び宮本に依る。

此に於て惡を起す者は、　當に大苦器を成ずべし。

時に、羅刹子、諸の眷屬と與に、此の人を右遶し、尊重し頂禮し合掌し恭敬して、而して頌を說いて曰はく、

汝は、是れ大仙の種、　良福田と爲るに堪へたり。

故に、我れ、供養を修す。　願はくは諸有の縛を絕たん。

爾の時、復た大羅刹母有り。[五八]刀劍口と名づく。亦た五千の眷屬有りて圍遶し、來つて塚間に入る。時に、羅刹母、亦た此の人の、[五九]五處を縛せられ、鬚髮を剃除して片赤袈裟を其の頸下に繫るを見て、卽便ち、右遶して、尊重し頂禮し合掌し恭敬して、而して頌を說いて言はく、

汝は、今ま、法衣を被る。　必ず涅槃の樂に趣かん。

故に、我れ、汝を害せず。　諸佛に呵せらるるを恐るるなり。

時に、羅刹子、其の母に白して曰はく、

我れ、常に精氣を吸ひ、　人の血肉を飮噉す。

願はくは此の人を食らふことを聽せ。　色力をして充盛ならしめん。

時に、羅刹母、便ち子に告げて言はく、

若し、袈裟を著して、　鬚髮を剃除する者を害さば、

必ず無間の獄に墮して、　久しく大苦器を受けん。

時に、羅刹子、諸の眷屬と與に、此の人を右遶し、尊重し頂禮し合掌し恭敬して、而して頌を說いて曰はく、

我等、地獄を怖る。　故に、汝が命を害せず。

當に汝が身を解放すべし。　願はくは地獄の苦を脫れん。

【五八】北京本、刀口羅刹に作る。

【五九】宮本、「見下此人被レ縛二五處一剃二除鬚髮一片赤袈裟繫中其頸下上。卽便右遶尊頂云々」の括弧內（五…便）十六字を缺く。

時に、諸の羅刹の母・子・眷屬、同じく慈心を起して、此の人の縛を解き、懺謝し慰喩し、歡喜して放ちて還す。此の人、淸旦に、疾く、王の所に至りて、如上の事を以て、具さに王に白す。

時に、勝軍王、及び諸の眷屬、之を聞いて驚躍して、未曾有なりと歎じて、卽ち條制を立てて國人に頒告すらく、「今より〔五〇〕已後、我が國中に於て、佛弟子の、若しは持戒、若しは破戒、下至、無戒にして、但だ鬚髮を剃り袈裟を被服するもの有らんに、諸の侵凌し、或ひは害を加ふること有らん者は、當に死罪を以てして之を刑罰すべし」と。此の因緣に由つて、衆人、徳を※慕ひ、漸々に化に歸して、贍部洲に王たり。皆な共に誠心にして三寶に歸敬す。

善男子よ。當に觀るべし。是の如く、過去の羅刹、無暇の餓鬼趣の身を受けて、人の精氣を吸ひ、血肉を飲噉し、惡心熾盛にして慈悲有ること無しと雖も、而も無戒なるも鬚髮を剃除して片袈裟を以て其の頸に掛くる者を見ば、卽便ち、右遶し尊重し頂禮し恭敬し讃頌して損害の心無かりき。

然るに、未來世に、刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人有つて、心に毒惡を懷き、慈愍有ること無く、罪を造ること、藥叉・羅刹に過ぎたり。愚癡・憍慢にして、善根を斷滅し、我が法に歸して而も出家する者の、若しは是れ法器、若しは非法器の、鬚髮を剃除し袈裟を被服する諸の弟子の所に於て、恭敬を生ぜず、惱亂し呵罵して、或は鞭杖を以て其の身を楚撻し、或は牢獄に閉し、乃至、命を斷つ。此は、一切の過去・未來・現在の諸佛に於て、諸の大罪を犯すなり。善根を斷滅して、焚燒し相續す。一切の智者の遠離する所なり。決定して、當に無間地獄に生ずべし。

※又、善男子よ。昔し國王有り。〔五一〕超福徳と名づく。人有つて過を犯して、罪、應に合死すべし。王、性仁慈にして命を斷つことを欲せず。一の大臣の、諸の智策多き有り。前みて、王に白して曰はく、『願はくは、憂を爲すこと勿れ』と。

【五〇】　已字、三本には以に作る。

※　慕字、明本には募に作る。

※辟象生信因緣。

【五一】　北涼本、福徳に作る。

終に王をして殺生の罪を得せしめず。魁膾に付して此の人を殺さしめず。時に彼の大臣、己が智力を以て、犯罪の人を將ゐて、惡醉の象に付す。時に、惡醉の象、鼻を以て罪人の兩脛を卷取り、空中に擧上して、其の勢力を盡して地に撲たんと欲す。忽ち此の人を見るに、裳に赤色なるもの有り、謂く是れ袈裟なり。心に淨心を生じて、便ち徐ろに地に置いて、懺謝し悲號して、前に跪伏し、鼻を以て足を拭ひ、深心に彼の人を敬重し瞻仰す。大臣、見已つて馳り還つて王に白す。王、聞いて喜愕して未曾有なりと歎じ、便ち國人に勅して、(六三)加へて三寶を敬す。斯に因つて殺を斷じて、贍部洲に王たり。

善男子よ。當に觀るべし。是の如く、過去の醉象は、無暇の傍生趣の身を受くと雖も、而も袈裟を敬して惡業を造して惡業を造らず。然るに、未來世に、刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人有り。心に毒惡を懷き、慈愍有ること無く、諸の惡業を造ること、惡醉の象に過ぎたり。愚癡・憍慢にして、善根を斷滅し、我が法に歸して而も出家せる者の、若しは是れ法器、若しは非法器の、鬚髪を剃除し袈裟を被服するの弟子の所に於て、恭敬を生ぜず、惱亂し呵罵して、或は鞭杖を以て其の身を楚撻し、或は牢獄に閉し、乃至、命を斷つ。此は、一切の過去・未來・現在の諸佛に於て、諸の大罪を犯すなり。善根を斷滅し、焚燒し相續す。一切の智者の遠離する所なり。決定して、當に無間地獄に生ずべし。若し、刹帝利の旃荼羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃荼羅の人、是の如きの第三の惡輪を成就せば、此の因緣に由つて、國土を護る、一切の天・龍・藥叉神等の三寶を信敬して動壞無き者をして、刹帝利の旃荼羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃荼羅の人に於て、心に瞋忿を生ぜしむ。廣く說かば、乃至、彼の刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人、久しからずして、便ち當に支體廢缺し、多くの日夜に於て、舌を結んで言はず、諸の苦毒を受けて痛切忍び難く、命終つて定んで無間地獄に生ずべし。

【六三】加字、明本、弘字に作る。

(7)復た次に、善男子よ。未來世の此の佛土の中に於て、刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人有り。惡友に隨つて行じ、善根微少にして、廣く說かば乃至は、後世の苦果を見ず畏れず。施す所の四方の僧物有ることを見る。謂はく、諸の寺舍、或は寺舍物、或は諸の園林、或は園林物、或は諸の莊田、或は莊田物、或は攝受する所の淨人の男女、或は攝受する所の畜生の種類、或は攝受する所の衣服飲食、或は攝受する所の床座敷具、或は攝受する所の病緣醫藥、或は攝受する所の種々の資身の、應に受用すべき物なり。是の如きの所施の四方の僧物は、戒を具し、德に富み、精進修行して無學の行を學し、乃至、最後の極果を證得せる、淸淨の苾芻の、應に受用すべき所なるに、彼の刹帝利の旃荼羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃荼羅の人、强勢の力を以て侵奪し、具戒の淸淨の苾芻に受用することを聽さずして、破戒惡行の苾芻の、在家の諸の俗業を經營する者に廻與して、共に受用し、或は獨り受用せしむ。破戒の苾芻、既に受得し已つて、或は共に受用し、或は獨り受用し、或は俗人と與に同じく共に受用す。是の因緣に由つて、國土を護る一切の天・龍・藥叉神等の、三寶を信敬して動壞なき者をして、刹帝利の旃荼羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃荼羅の人に於て、心に瞋恚を生ぜしめ、廣く說かば、乃至は、彼の刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人は、久しからずして、便ち、當に支體廢缺して、多くの日夜に於て舌を結んで言へず。諸の苦毒を受けて、痛切忍び難く、命終つて、定んで無間地獄に生ずべし。

(8)復た次に、善男子よ。未來世の此の佛土の中に於て、刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人あり。惡友に隨つて行じ、善根微少にして、廣く說かば、乃至は、後世の苦果を見ず畏れず。我が法に依つて出家する者の、聰叡多聞にして、語[六三]甚だしく圓滿に、或は能く獨覺乘の法を傳通し、或は能く無上乘の法を傳通して、廣く流布せしめて、有情を利樂するを見るに、彼れ、是の如きの說法師の所に於て、呵罵し毀辱し誹謗し輕弄し欺誑して逼迫して、法師を惱亂

【六三】甚字、宮本及び聖本、具に作る。

し、正法を障礙す。是の因緣に依つて、國土を護る一切の天・龍・藥叉神等の、三寶を信敬して動壞無き者をして、刹帝利の旃荼羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃荼羅の人に於て、心に瞋忿を生ぜしめ、廣く說かば、乃至は、彼の刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人、心に瞋忿を生じ、廣く說かば、乃至は、彼の刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人、久しからずして、便ち、當に*支體廢缺して、多くの日夜に於て舌を結んで言はず、諸の苦毒に受けて、痛切忍び難く、命終つて定んで無間地獄に生ずべし。

(9)復た次に、善男子よ。未來世の此の佛土の中に於て、刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人有り。惡友に隨つて行じて、善行微少にして、廣く說かば、乃至は、後世の苦果を見ず畏れず。施す所の四方僧物の有ることを見んに、寺舍・莊田・人畜・財寶・花樹・果樹・染樹・蔭樹・香藥樹等、及び餘の資身の種々の雜物にして、我が諸の弟子の戒を具へ、德に富み、精進修行して無學の行を學し、乃至、最後の極果を證得せる、淸淨の苾芻の、應に受用すべき所なるに、彼の刹帝利の旃荼羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃荼羅の人、强勢の力を以て、或は自ら逼奪し、或は人をして奪はしめて、或は自用の爲めにし、或は他用の爲めにす。是の因緣に由つて、國土を護る一切の天・龍・藥叉神等の、三寶を信敬して動壞なき者をして、刹帝利の旃荼羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃荼羅の人に於て、心に瞋忿を生ぜしめ、廣く說かば、乃至は、彼の刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人、久しからずして、便ち、當に*支體廢缺して、多くの日夜に於て舌を結んで言はず、諸の苦毒を受けて、痛切忍び難く、命終つて定んで無間地獄に生ずべし。

(10)復た次に、善男子よ。未來世の佛土の中に於て、刹帝利の旃荼羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃荼羅の人有り。善根微少にして、信心有ること無く、諂曲・愚癡にして、聰明の慢を懷き、言に眞實無く、善友を遠離して惡友に隨つて行じ、諸の聖法に於て心に猶豫を懷き、後世の苦果を

見ず畏れず、常に樂（この）んで諸の惡律儀に[六四]習近して、好んで殺生、乃至、邪見を行じ、而も慠慢を懷きて世間を誑惑して、自ら我は是れ律儀に住する者なりと稱す。彼の刹帝利の旃茶羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃茶羅の人、種々に方便して我が法を毀滅して、我が法に歸して而も出家せる者に於て、數々、瞋忍し、呵罵し毀辱し、*拷楚し禁閉し、*支節を割截し、乃至、命を斷つ。我が所說の法を、背つて信受せず、窣堵波、及び諸の寺舍を壞し、苾芻を驅逼して退けて俗に還らしめ、髮を剃り袈裟を被服することを障礙して、種々に驅使すること、諸の僕庶に同じくす。是の因緣に由つて、國土を護る一切の天・龍・藥叉神等の、三寶を信敬して、動壞無き者をして、刹帝利の旃茶羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃茶羅の人に於て、心に瞋恚を生ぜしめ、廣く說かば、乃至は、彼の刹帝利の旃茶羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃茶羅の人、久しからずして、便ち、當に*支體廢缺し、多くの日夜に於て舌を結んで言はず、諸の苦毒を受けて痛切忍び難く、命終つて定んで無間地獄に生ずべし。

善男子よ。若し、刹帝利の旃茶羅王・宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等の旃茶羅の人、上の所說の「十種の惡輪」に於て、或は隨つて一を成じ、或は具さに成就せんに、先に修集する所の一切の善根は、摧壞し燒滅して皆な灰燼となり、久しからずして便ち、當に*支體廢缺して、多くの日夜に於て舌を結んで言はず、諸の苦毒を受けて、痛切忍び難く、命終つて定んで無間地獄に生ずべし。

此の刹帝利の旃茶羅王宰官・居士・長者・沙門・婆羅・門等の旃茶羅の人は、當來の世に於て、下賤の人身すら尙ほ得べきこと難し。況んや、當に能く二乘の菩提を證すべき。無上の大乘は、其に於ては、分を絕せり。是の如き惡人は、大乘の名字すら尙ほ聞くことを得ること難し。況んや、當に能く無上の佛果を證すべき。是の人、究竟じて、自ら損し、他を損す。一切の諸佛の救ふこと能はざる所なり。

【六四】習近の二字、聖本には、修習に作る。

善男子よ。譬へば、人有つて、壓油を業と爲すが如し。一々の麻粒に皆な蟲の生ずること有り、輪を以て之を壓すれば、油、便ち、流出す。汝、當に觀ずべし。此の壓麻油の人、日夜の中に於て幾ばくの生命をか殺す。假使へば、是の如きの壓麻油の人、十具輪を以て相續して恒に壓し、一日夜に於て、一一の輪中の壓する所の麻油の數千斛に滿つ。是の如く相續して千年に滿るに至る。汝、觀よ。此の人、幾くの生命をか殺し、獲る所の罪業、寧ろ多しと爲さんや、不や』と。

地藏菩薩摩訶薩の言さく、

『甚だ多し、世尊よ。甚だ多し、大德よ。此の人、殺す所無量無邊にして、獲る所の罪業稱計すべからず。算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。唯だ佛のみ能く知り、餘は知る者無し』と。

佛の言はく、

『善男子よ。假使へば、人有りて財利の爲の故に、十の婬坊を置く。一々の坊中に千の婬女を置き、一々の婬女、種々に莊嚴して、多くの人を誑惑し、恒に欲事を爲す。是の如く相續して、千年に滿るに至る。此の人、罪を獲ること稱計すべからず。算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。前の如きの十輪もて壓油する人の罪も、一の婬坊の獲る所の罪業に等し。

又、善男子よ。假使へば、人有りて、財利の爲の故に、十の酒坊を置く。一々の坊中、種々に嚴飾し、方便もて千の耽酒の人を招誘して、飮興し歡娛して、晝夜に廢すること無し。是の如く相續して、千年に滿るに至る。此の人、罪を獲ること稱計すべからず。算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。前の所說の如きの、十の婬坊の罪も、一の酒坊の獲る所の罪業に等し。

又、善男子よ。假使へば、人有りて、財利の爲の故に、十の屠坊を置く。一々の坊中に一日夜に於て千の生ける牛・羊・駝・鹿・雞・猪等の命を殺害す。是の如く相續して千年に滿るに至る。此の人、罪を獲ること稱計すべからず。算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。前の所說の如きの十の酒坊の

罪も、一の屠坊の獲る所の罪業に等し。

[六五]前の所說の如きの十の屠[六六]坊の罪も、刹帝利の旃茶羅王、乃至、沙門・婆羅門等の旃茶羅の人の、前の十惡に於て、隨つて一輪を成じて、一日一夜にして獲る所の罪業に等しきなり。

爾の時、世尊。而も頌を說いて曰はく、

十の壓油輪の罪は、　彼の一婬坊に等しく、
十の婬坊を置くは、　一の酒坊の罪に等し。
十の酒坊を置くの罪も、　彼の一の屠坊に等しく、
彼の十の屠坊を置くの、　罪すらも、王等の一に等しきなり。

【六五】前字、三本及び宮本、是に作る。
【六六】坊字、宮本には妨に作る。

卷の第五

※無依行品　第三之三

※爾の時、地藏菩薩摩訶薩、復た佛に白して言さく、

『大德、世尊よ。若し眞善の刹帝利・眞善の宰官・眞善の居士・眞善の長者・眞善の沙門・眞善の婆羅門有り。是の如き等の人、能く自ら善く護り。亦た善く他を護り。善く後世を護り。善く佛法を護り。出家の人の、若しは是れ法器、若しは非法器、下至、無戒なれども、鬚髮を剃除して袈裟を[一]被る者を、普く善く守護して、恭敬し供養し。又、能く聲聞乘の法、緣覺乘の法、及び大乘の法を善護して、恭敬し聽聞し信受し供養し。大乘に住する、戒を具し德に富み精勤に修行し、乃至、[二]住果の、補特伽羅に於て、能く善く守護して、其の勢力を助け、諮問し聽受し歡喜し談論し。破戒惡行の苾芻を遠離し。諸の施す所の四方僧物に於て、終に、人をして非法に費用せしめずして、勸めて守護を加へて、四方僧に供し。窣堵波及び僧祇物に於て、終に、自ら奪はず、他をして奪はしめず、亦た、自ら用ひず、他をして用ひしめず。能く[三]三乘の法を辯說する人に於て、恭敬し供養し加護して、力を與へて、他人をして誹謗し毀辱せしめず、諸の出家の人を、尊重し安慰して、佛の所說の法を、信受し護持し、終に、諸の窣堵波を、破壞せしめず、亦た常に、[四]僧伽藍舍を護持し。鬚髮を剃り袈裟を被服せる出家の人の所に於て、終に毀廢せず。「十惡輪」に於て、自ら染習せず、亦た常に他を勸めて、「十惡輪」を離れしめ。具さに先王の治國の正法を學し、三寶の種を紹ぎて、常に熾盛ならしめ。恒に樂んで、諸の善知識に親近し。慈心もて一切の國人を撫育して、其の所宜に隨つて、方便もて化導して、邪法を捨て丶正法を修行せしむ。是の如きの、眞善の刹帝利王、乃至、眞善の婆羅門等は、幾くの所福をか得、幾くの所罪をか滅せん』と。

※北凉本卷第四「刹利旃陀現智相品第六」後半部に相當。

※眞善人の福德

【一】被字、宮本、披に作る。

【二】各所得の三乘の證果に安住して、更に勝道を進求せざるを住果といふ。

【三】以下、三乘法等の佛所說の法(法寶)と、諸窣堵波等(佛寶)と、出家人(僧寶)との、三寶を列擧せるなり。

【四】僧伽藍 Saṃghārāma. 具には僧伽藍摩、僧伽羯羅摩、略して伽藍といふ。衆園と譯す。僧衆の住する園林なり。後、俗に園林中の僧房等をも、伽藍といふに至れり。

佛の、言はく、

『善男子よ。假使へば、人有つて、世間に出現して、大威力を具して、日の初分に於て、[五]七寶を積集して、贍部洲に滿たして、諸佛及び弟子衆に奉施し、日の中分に於ても、亦た七寶を集めて、贍部洲に滿たして、諸佛及び弟子衆に奉施し、日の後分に於ても、亦た七寶を集めて、贍部洲に滿たして、諸佛及び弟子衆に奉施して、是の如く、日々相續して布施して、百千年に滿たらんに、此の人の福聚は、寧ろ多しと爲さんや、不や』と。

地藏菩薩摩訶薩、言さく、

『甚だ多し、世尊よ。甚だ多し、大德よ。此の人の福聚は、無量無邊にして、稱計すべからず。算數譬喩も、及ぶこと能はざる所なり。惟だ佛のみ能く知らせたまひ、餘には知る者無し』と。

佛の言はく、

『善男子よ。是の如し、是の如し。汝が所說の如し。

若し、眞善の刹帝利王、乃至、眞善婆羅門等有つて、十の惡輪に於て、自ら柔習せず、亦た常に、他を勸めて十の惡輪を離れしめば、獲る所の福聚は、前の福聚に過ぐること、無量無邊にして、稱計すべからざるなり。

又、善男子よ。假使へば人有つて、世間に出現し、大威力を具して、四方僧の爲めに、寺宇を營建して、其の量の寬廣なること、四大洲に等しく、上妙の房舍・牀敷・衣服・飲食・醫藥・資緣、充備して、諸の如來の聲聞・菩薩の大弟子衆をして、其の中に止住せしめて、種々の善品を精進し修行して、若しは晝、若しは夜に、懈息有ること無くして、百千[六]俱胝那庾多の歲を經て、供給し供養して、相續して絕へざらんに、此の人の福聚は、寧ろ多しと爲さんや、不や』と。

地藏菩薩摩訶薩、言さく、

【五】 Sapta ratnāni.
(1)Suvarṇa. 金。
(2)Rūpya. 銀。
(3)Vaiḍūrya. 瑠璃。
(4)Sphaṭika. 玻瓈。
(3)Musāragalva. 硨磲。
(6)Rohitamuktikā. 赤珠。
(7)Aśmagarbha. 碼碯。
等の七種の寶。

【六】 俱字、聖本、之を拘に作る。以下悉同之。

『甚だ多し、世尊よ。甚だ多し、大德よ、此の人の福聚は、無量無邊にして、稱計すべからず。算數譬喩も、及ぶこと能はざる所なり。[七]惟だ佛のみ能く知らせたまひ、餘には知る者無し』と。

佛の、言はく、

『善男子よ。是の如し、是の如し。汝の所說の如し。

又、善男子よ、假使へば、人有つて、世間に出現し、大威力を具して、四方僧の爲めに、寺宇を營建して、寬廣なる量、十の四大洲に等しく、上妙の房舍・牀敷・衣服・飮食・醫藥・資緣、充備して、諸の如來の聲聞・菩薩の大弟子衆をして、其の中に止住せしめて、種種の善品を精進し修行して、若しは晝、若しは夜に、懈息有ること無くして、*百千俱胝那庾多の歲を經て、供給し供養して、相續して絕えざらんに、此の人の福聚は、寧ろ多しと爲さんや、不や』と。

地藏菩薩摩訶薩、言さく、

『甚だ多し、世尊よ。甚だ多し、大德よ。此の人の福聚は、無量無邊にして、稱計すべからず。算數譬喩も、及ぶこと能はざる所なり。唯だ佛のみ能く知らせたまひ、餘には知る者無し』と。

佛の、言はく、

『善男子よ、是の如し、是の如し。汝が所說の如し。

又、善男子よ。假使へば、人有つて、世間に出現し、大威力を具して、[八]佛舍利の爲に、窣堵波を起て、嚴麗高廣なる量、[九]三千大千世界に等し。前の所說の如き、四方僧の爲に寺を造るの福聚も此の所說の、佛舍利の爲めに窣堵波を起てて獲る所の福聚に類せば、百分が中に於て其の一にも及ばず、千分が中に於ても亦た一にも及ばず、百千分に於いても亦た一にも及ばず、*俱胝分に於ても亦た一にも及ばず、那庾多分・數分・算分・計分・喩分、乃至は、[一〇]鄔波尼殺曇分にも亦た一にも及ばざるなり。

【七】惟字、三本及び宮・聖二本、俱に、唯に作る。

【八】佛の遺骨なり。舍利(Śarīra.)、また、設利羅、室利羅に作る。玄應音義には「譯して身骨と云ふ。舍利には、全身なる者有り、碎身なる者有り」といひ、資持記には「此に遺身と翻ず。即ち死屍なり」といへり。

【九】Trisāhasramahāsāhasralokadhātu. 須彌山世界を、一小世界と稱し、之を一千合したるを小千世界とし此の小千世界を一千合せたるを中千世界(中二千世界)と云ひ、此の中千世界を一千合せたるを大千世界(三千大千世界)と稱す。即ち、大千世界は、百億小世界にして、小千と中千と大千との三種の千世界なる故、三千大千世界といふ。之を以て一佛の化境となす。

【一〇】Upaniṣad. 近少、微細、因などに譯す。慧琳音義に「優波尼沙陀分は、梵語の算法にして、數の極なり。大論の釋に、微細分析至極の言を爲すなり。」と言ひ、玄應音義にも、「鄔波尼殺曇分は、又、優婆沙陀分とも言ふ。此れ、數の極なり」とす。

又、善男子よ、假使へば、波羅蜜多を得、八解脱[一一]を具し、靜慮等至なる、大阿羅漢有りて、三千大千世界に徧滿すること、稻・麻・竹・葦・甘蔗・叢林の如くなるが、一切皆な堅く五處を縛せられて、百千年を經ん。時に、一人有つて、世に出現して、大威力を具して、福德を樂ふが故に、悉く、縛せられし諸の阿羅漢を解きて、香湯もて澡浴して、衣鉢を奉施し、百千年を經ても、上の房舍・牀敷・衣服・飮食・醫藥、種種の須る所の如法の資具を給し、諸の阿羅漢、般涅槃し已らば、供養し焚燒して舍利を收取して、妙なる七寶を以て、窣堵波を起して、其の中に安置して、復た種々の寶幢・旛蓋・香華・伎樂を以て而も之を供養せんに、前の所說の如きの、佛舍別の爲めに、窣堵波を起して獲る所の福聚をば、此の所說の、阿羅漢を解きて供養する福聚に、類すれば、百分が中に於て其の一にも及ばず、千分が中に於ても亦た一にも及ばず、百千分に於ても亦た一にも及ばず、倶胝分に於ても亦た一にも及ばず、那庾多分・數分・算分・計分・喩分、乃至は、鄔波尼殺曇分にも亦た一にも及ばざるなり。

善男子よ。若し、眞善の刹帝利王、乃至、眞善の婆羅門等有りて、「十惡輪」に於て、自ら染習せず、亦た常に他を勸めて「十惡輪」を離れしめば、獲る所の福德は、前の福聚に過ぐること無量無邊にして稱計すべからず。福を生ずる數の如く、罪を滅することも亦た爾り。

善男子よ、若し、眞善の刹帝利王、及び諸の眞善の宰官・居士・長者・沙門・婆羅門等有りて、未來世の後五百歲[一二]に於て、法滅せんと欲する時に、能く善く我の法眼[一三]を護持して、能く自ら善く護り、亦た善く他を護り、善く後世を護り、善く我が法を護り。出家の弟子の、若しは是れ法器、若しは非法器、下至、無戒なれども、鬚髮を剃除して袈裟を被る、者をば、普く善く守護し、恭敬し供養して、損惱無からしめ。又、能く善く三乘の正法を護つて、聲聞の法を聽受し供養するの時は、獨覺乘及び大乘の法に於て誹謗を生ぜず、獨覺乘及び大乘の人に於ても亦た憎嫉せず。獨覺の法を

【一一】 Aṣṭau vimokṣā. 八背捨ともいふ。三界の煩惱に違背し之を捨離して其の繫縛を解脱する八種の禪定。即ち、(1)內有色想觀外色解脱。(2)內無色想觀外色解脱。(3)淨解脱身作證具足住(4)空無邊處解脱。(5)識無邊處解脱。(6)無所有處解脱。(7)非想非非想處解脱。(8)滅受想定身作證具住。即ち第一、第二、第四の四禪定中の三の解脱と、四無色定の解脱と、滅盡定の解脱との、八種なり。

【一二】 後五百年ともいひ、略して後五ともいふ。五五百年、即ち解脱・禪定・多聞・塔寺・鬪諍の五堅固の五期五百年の第五。最後の五百年なれば、かくいふ。三學廢して唯だ鬪諍を事とし邪見を增長する時にして、即ち法滅の時なり。

【一三】 眼字、聖本、眼に作る。

聽受し供養するの時にも、聲聞乘及び大乘の法に於て誹謗を生ぜず、聲聞乘及び大乘の人に於ても亦た憎嫉せず。大乘の法を聽受し供養する時にも、聲聞乘・獨覺乘の法に於て誹謗を生ぜず、聲聞乘・獨覺乘の人に於ても亦た憎嫉せず、聲聞乘・獨覺乘の法に於て趣證せんことを求めずして唯だ大乘の正法のみを趣證せんごとを求め。大乘に住して戒を具し徳に富み精勤に修行する、乃至、住果*の補特伽羅に於て、多數に親近し承事し供養し、*深心もて敬重し請問し聽受し。破戒惡行の苾芻を遠離し。諸の所施の四方僧物に於て、終に人をして非法に費用せしめずして、勤めて守護を加へて四方僧に供し。窣堵波、及び僧祇物に於て、終に自ら奪はず、[一四]他をして奪はしめず、亦た自ら用ひず、他をして用ひしめず。能く三乘の法を辯說する人に於て、恭敬し供養し、加護して力を與へて、他人をして誹謗し毀辱せしめず。諸の出家の人を尊重し安慰し。如來の聖教を信受し護持し、終に、諸の窣堵波を破壞せず。亦た、[一五]常に、四方僧寺を護持し。我が出家の諸の弟子の所に於て、終に毀廢し還俗し策使せず。「十惡輪」に於て自ら染習せず、亦た常に他を勸めて「十惡輪」を離れしめ。具さに先王の治國の正法たる十善業道を學して、世間を攝化し。常に當に諸の善知識に親近して、三寶の種を紹ぎ、常に熾盛ならしめて、善く法眼を護つて滅沒せざらしむべし。

是の如きの眞善の刹帝利王、乃至、眞善の婆羅門等は、是の如きの諸の功德を具するに由るが故に、虛しく國人の俸祿を受けざるものと名く。一切の天・龍・藥叉・鬼神、乃至、羯吒布怛那等、皆な歡喜を生じて慈悲もて[一六]擁護し、一切の法器、眞實の福田も亦た、歡喜を生じて慈悲もて護念す。是の因緣に由つて、所居の國土及び諸の有情、展轉熾盛にして、安隱豐樂す。隣國の兵戈も、侵害すること能はず。皆な德を敬慕して、自ら來つて歸附す。此に由つて、展轉して善業を勸修して、惡趣を枯竭し、天人を增長して、身命を守護して長遠なることを得せしむ。自ら煩惱を滅し、亦た他をして滅せしむ。菩提道の六波羅蜜多を[一七]住持し、一切の衆邪・惡道を破壞し、生死の海に於て久

※住果。聲聞緣覺二乘の人、各〻所得の證果に安住して、更に勝道を進求せざるをいふ。次の深心とは、深く信ずる心なり。

[一四] 不レ教二他奪一の不字、元・明二本には、及に作る。以下*同之。

[一五] 常字、元・明二本、當に作る。

[一六] 擁護の二字、元・明二本には、護念に作る。

[一七] 住字、宋・明二本及び宮本、俱に、任に作る。

しく沈〔一八〕淪せず。常に惡友を離れ、常に善友に近づき、生生に常に諸佛菩薩に遇ひたてまつりて、恭敬し承事して、曾て暫くも廢すること無し。久しからずして皆な當に心の所樂に隨つて、各各、佛國土に安住して、無上正等菩提を證得すべし』と。

＊爾の時、衆中の一切の天帝及び諸の眷屬、乃至、一切の畢舍遮帝及び諸の眷屬、座從りして起つて、佛足を、頂禮したてまつり、合掌し恭敬して、佛に白して言さく、

『大德・世尊よ。未來世の後五百歲に於て、此の佛土に於て、法滅せんと欲するの時に、若し眞善の刹帝利王、乃至、眞善の婆羅門等有りて、「十惡輪」に於て、自ら能く遠離し、亦た能く他を勸めて其をして遠離せしめ、善く自他を護り、善く後世を護り、正法を護持して、三寶の種を紹ぎて皆な熾盛ならしめて斷絕すること有ること無し。要を以て之を言はば、佛の所說の如く、是の如き等の人、三乘の法に於て恭敬し聽受して終に隱藏せず、三乘の人に於ても護持し供養して、擾惱せしめず、三寶物に於ても勸めて守護を加へて侵損せしめずんば、我等眷屬、此の眞善の刹帝利王、乃至、眞善の婆羅門等に於て、勸めて擁護を加へて、其の「十法」をして、皆な增長することを得せしむ。

何等をか十と爲す。一には、壽命を增長す。二には、無難を增長す。三には、無病を增長す。四には、眷屬を增長す。五には、財寶を增長す。六には、資具を增長す。七には、自在を增長す。八には、名稱を增長す。九には、善友を增長す。十には、智慧を增長す。

大德世尊よ。若し、彼の眞善の刹帝利王、乃至、眞善の婆羅門等、十惡輪に於て、自ら善く遠離し、亦た能く他を勸めて其をして遠離せしめ、前に說く所の諸の功德を具せば、我等擁護して、定んで當に此の十法の增長することを得しむべし。

復た次に、世尊よ。若し、眞善の刹帝利王、乃至、眞善の婆羅門等有りて、前に說く所の如きの功德を成就せば、我等眷屬は勸めて擁護を加へて「十法」に於て、皆な遠離する事を得せしめん。

〔一八〕淪字、宋元二本及び宮本、倶に、輪に作る。以下同之。

※諸天鬼神の加護

何等をか、十と爲す。一には、一切の怨家の寇敵を遠離す。二には、一切の非愛の色・聲・香・味・觸の境を遠離す。三には、一切の障[一九]癘の疾病を遠離す。四には、一切の邪執の惡見を遠離す。五には、一切の邪妄の歸依を遠離す。六には、一切の邪惡の災怪を遠離す。七には、一切の邪惡の事業を遠離す。八には、一切の邪惡の知識を遠離す。九には、一切の[二〇]居家の淤泥を遠離す。十には、一切の非時の夭喪を遠離す。

大德世尊よ。若し、彼の眞善の刹帝利王、乃至、眞善の婆羅門等、前に說く所の諸の功德を成ぜば、我等擁護して、定んで當に此の「十法」の遠離することを得しむべし。

復た次に、世尊よ。若し、眞善の刹帝利王有りて、具さに前の所說の如きの功德を修して、圓滿せしめば、我等眷屬、勤めて擁護を加へて、此の帝王、幷びに諸の眷屬、及び其の國土の一切の人民をして、「十法」に於て、皆な遠離することを得せしむ。

何等をか、十と爲す。一には、一切他國の怨敵を遠離す。二には、一切自國の怨敵を遠離す。三には、一切の凶惡の鬼神を遠離す。四には、一切の[二一]諐陽の[二二]亢旱を遠離す。五には、一切の伏陰の滯雨を遠離す。六には、一切の非時の寒熱・烈風・暴雨・霜雹の災害を遠離す。七には、一切の惡星の變怪を遠離す。八には、一切の飢饉の荒儉を遠離す。九には、一切の非時の病死を遠離す。十には、一切の邪執の惡見を遠離す。

大德世尊よ。若し、彼の眞善の刹帝利王、具さに前に說く所の如きの功德を修して、圓滿ならしめば、我等眷屬、勤めて擁護を加へて、此の帝王、幷びに諸の眷屬、及び其の國土の一切の人民をして、定んで當に此の十法の遠離することを得しむべし』と。

爾の時、世尊、諸の天帝及び其の眷屬、乃至、一切の畢舍遮帝及び眷屬を、讃へて、言はく、『善い哉、善い哉。汝等、乃ち能く此の誓願を發す。此の事、皆な是なり。汝等、應に作すべし。

【一九】癘字、三本及び宮本、惱に作る。
【二〇】Kula, の譯なるべし、即ち家族、族姓のこと。家柄を指す。家事の俗務に沈溺するなり。
【二一】諐字、三本及び宮本には愆に作る。
【二二】亢字、聖本には炕に作る。

是の因縁に由つて、〔二三〕當に汝等をして長夜に安樂ならしむべし』と。

*爾の時、天藏大梵、復た佛に白して言さく、

『世尊よ。唯だ願はくは、我に、未來世の此の佛土中の一切の眞善の刹帝利王の爲めに、能く〔二四〕「護國不退輪心大陀羅尼明呪の章句」を說くことを聽したまへ。此の「護國不退輪心大陀羅尼明呪の章句」の威神力に由るが故に、未來世の此の佛土中の一切の眞善の刹帝利王をして、一切の怨敵・惡友の摧伏する所と爲さざらしめ、能く一切の怨敵・惡友をして自然に退散せしめ、能く善く身語意の業を護持し、諸の智者の爲めに、常に稱讚せられ、諸の惡法を離れて常に善法を行じ、常に一切の邪見・邪歸を離れて、常に大乘に於て、精進し修行すること勇猛堅固にして、常に能く無量無數の所〔二五〕化の有情を成就し、智は他に依らずして自然に善巧し、能く六到彼岸を修行する珍寶の伏藏を具し、一切の忿・慳・嫉等の煩惱の纒垢を遠離し、常に一切の人・非人等の爲めに恭敬し護念し、諸所爲有れば心に忘失すること無く、有情を捨てず、四攝事を樂つて、常に法器の福田を遠離せざらん』と。

佛の言はく、

『天藏よ。吾れ、今ま汝に恣す。未來世の此の佛土中の一切の眞善の刹帝利王の爲めに、能く「護國不退輪心大陀羅尼明呪の章句」を說け。此の「護國不退輪心大陀羅尼明呪の章句」の威神力に由るが故に、未來世の此の佛土中の一切の眞善の刹帝利王をして、一切の怨敵・惡友の摧伏する所と爲さざらしめ、廣く說かば、乃至は、常に一切の諸佛及び佛弟子を遠離せざらん』と。

爾の時、天藏大梵、即ち、「護國不退輪心大陀羅尼明呪の章句」を說く。

〔二六〕怛經他[1]唐言謂　牟尼冐[2]䘵一　牟那揭𦢐[3]茷二　牟尼紇梨逹曳三　牟尼嚧訶毘折[4]常列反隷四　牟尼曷栗制五　牟尼筊謎六　束訖羅博差[5]七初戒反鉢邏奢[6]博差*八初戒反蜜羅博差*九初戒反騷刺[7]婆紇栗帝十　姤刺拏紇栗折*章列反切隷十一　鉢怛邏叉紇栗帝十二　具具拏密隷十三　[8]唈*烏合反*茷叉薩隷十四　遏怒訶祇𡁠*茷

〔二三〕當レ令ニ汝等長夜安樂一。の中の令字、三本及び宮本には、得に作る。

※護國不退輪心陀羅尼

〔二四〕北京本には「不退轉地陀羅尼心呪章句」に作る。

〔二五〕化字、三本、之を供に作る。

〔二六〕北京本、次の如し。多闍他　牟尼冐梨　牟那舍囉韓　牟尼夷梨陀夜※末啼盧闍呲闍隷　牟那栗芝阿呢伽彌　啾迦囉博差　波羅舍博差　蜜羅博差

十五 牟尼鉢塔 *茷十六 9莎訶 唐言善說

天藏大梵、是の呪を說き已つて、復た佛に白して言さく、
『唯だ願はくは、世尊及び諸の大衆よ。我が所說の大陀羅尼に於て、皆な隨喜を生ぜんことを』と。
世尊、告げて曰はく、
『善い哉、善い哉』と。
一切の大衆も亦た、是の言を作す、
『善い哉、善い哉』と。
爾の時、世尊、復た尊者 二七 大目乾連に告げ、及び彌勒菩薩摩訶薩に告げて曰はく、
『善男子よ、汝等、皆な應に、是の如きの天藏大梵の所說の、「護國不退 二八 輪心大陀羅尼明呪の章句」を、受持すべし。未來の此の佛土中の、一切の眞善の刹帝利王に傳授して、自ら受持せしめ、及び流布せしめよ。是の因緣に由つて、彼の諸の眞善の刹帝利王、并びに諸の眷屬、及び國の人民、一切皆な、利益・安樂なることを得、常に法輪を轉じて、名稱高遠に、威德熾盛にして、邪見を摧滅し、正見を建立して、法眼を守護し、三寶の種を紹ぎて、皆な熾盛にして斷絕有ること無からしめ、無量無邊の有情を成熟し、大乘の中に於て堅固なる淨信もて久住圓滿し、能く具さに六波羅蜜多を修して、一切の障を斷じて、速かに究竟に到らしむ。
爾の時、世尊此の義を顯はして、而して頌を說いて曰はく、

時に天藏大梵、　兩足尊に請問したてまつる。
利根等の有情は、　樂んで定・誦・福を修し、
聰慧なる王は、法を成じて、　三〇 *沉淪を昇進せんが爲に、
修する所の 二九 三事中、　唯だ惑を除かば、不退ならん、と。

掃囉婆慄啼 兜羅拏栗婆隸鉢哆叉栗婆隸 奮奮拏彌隸 阿鞞叉婆隸阿衮阿祇梨梵 牟尼波陀鞞 私婆呵
(三本及び宮本に依る。冐字明本冐麗本置、婆字、麗本、缺く。奮奮、麗本には舊舊に作る。※印、三本字間を開けず。
(1)唐言謂の割註の三字、明本之を缺く。
(2)隸字、三本には隸、宮本には㗶に作る。
(3)茷字、明本には筏、宮・聖二本には茂に作る。以下同。
(4)反字、明本の音註には、切に作る。以下同
(5)七初戒反字、三本及び宮本には初戒反七(句數在音註下)反字、明本には同じく切に作る。
(6)博字、明本には搏に作る。
(7)婆字、三本及び宮本、娑に作り、聖本、字下に婆を加ふ。
(8)唈字、三本には悒に作る。
(9)莎訶の二字、宮本には、計に作る。
【二七】 mahā-maudgalyāyana. 摩訶目犍連、大目犍連、摩訶沒特伽羅に作り、又、沒特伽羅子、目犍連、目連ともいふ。大讚誦、大萊茯根、大胡豆、大採菽など譯す。佛十大弟子の一人。常に舍利弗と並稱され。神通第一の稱あり。大は

世尊、彼に告げて言はく、若し、無依行を犯さば、
覺慧猛利なりと雖も、而も無間の獄に趣かん。
眞の聽慧に非ざるが[三一]故に、樂んで「十の惡輪」を行じ、
諸の善根を斷滅して、速かに地獄に趣かん。
定んで能く煩惱を斷ずるは誦福業を聽するに非ず
故に涅槃を求めんと欲せば、常に當に靜慮を修すべし。
有慧にして勤めて精進し、我が正法を護持し、
袈裟を敬信するに由つて、能く煩惱の海を度らん。
樂んで空閑林に處して、造無間の類を遠ざけ、
持戒・修定を敬せば、能く諸有の海を度らん。
普く三乘を[三二]信敬し、我が正法を興隆して、
染衣の者を供養せば、當に功德海を成ずべし。
能く難調心を伏して、苾芻の罪を擧げず、
知足を修するの聖種は、當に兩足尊と成るべし。
惡苾芻を遠離し、聖行處に親近し、
僧物を食用せずんば、速かに大菩提を證せん。
三界中の安樂なることは、皆な三寶に由つて生ず。
故に安樂を求むる人は、常に三寶を供養せよ。
旃茶羅の王等、惡苾芻に朋黨し、
三寶に於て過を起さば、速かに無間の獄に墮さん。

尊稱語。
【二八】 輪字、宋・元二本及び宮本、轄に作る。
【二九】 三事とは、定・誦・福の三を指す。即ち、第一卷第二佛輪中の修定・習誦・營福の三種業輪のこと。第三卷初頭に見えたり。
【三〇】 唯字、三本及び宮本には、誰に作る。(「誰か惑を除いて不退なる。」)
【三一】 故字、三本及び宮本には、者に作る。
【三二】 信敬、明本、敬信に作る。

十の壓油輪の罪は、　彼の一の婬坊に等しく、
彼の十の婬坊を置くは、　一の酒坊の罪に等しく、
十の酒坊を置くの罪は、　彼の一の屠坊に等しく、
彼の十の屠坊を置くすら、　罪、王等の一に等しとす。
眞善の國王等、　我が正法を興隆し、
普く三乘を供養せば、　當に功德海を成ずべし。
七寶もて贍部に滿して、　佛及び僧に奉施して、
彼が獲る所の福聚も、　佛法を護るには如かず。
佛僧の爲めに寺を造つて　量、十の四洲に等しくして、
彼が獲る所の福聚も、　佛法を護るには如かず。
佛の窣堵波を造り、　量、三千界に等しくして、
彼が獲る所の福聚も、　佛法を護るには如かず。
阿羅漢の縛を解き、　種々に供養を修し、
我が正法を障へずば、　其の福、彼に勝れり。
*千の俱胝劫の中、　智者、勤めて修定して、
[三三]生ずる所の勝れし覺慧も、　我が法を護るには如かず。
眞善の國王等の、　「十の惡輪」を遠離し、
我が正法と、　及び袈裟を著せる者とを護持して、
我が說の、　三乘の法と及び人とを毀謗せず、
普く聽聞し供養して　說法者を護持し、

【三三】所生の二字、三本及び宮本には、不生に作る。

三四 三寶物を損せず、　袈裟を著せるをば障へず、
常に器・非器を敬はば、　福の勝ること、倫匹するもの無し。」
三五 五日並びに現れて、　大海皆な枯竭する如きにも、
是の如く我が法を護れば、　能く煩惱を枯竭す。
風災起るの時、　諸山皆な散滅する如きにも、
是の如く我が法を護れば、　能く煩惱を除滅す。
水災の起るの時、　大地皆な漂壞する如きにも、
是の如く我が法を護れば、　能く三六愛果を壞非す。
如意寶珠の　所願に隨つて皆な滿たすが如く、
是の如く三乘の法は、　能く衆生の願を滿たす。
三七 賢瓶に遇ひ得て　貧を除きて富樂を獲るが如く、
是の如く佛法に遇はば、　惑を滅して菩提を證す。
十五夜の月の　明かに照して虚空に滿つるが如く、
是の如く護法の人は　智慧、法界に周し。
虚空の平等にして　無物、亦た、無相なるが如く、
是の如く護法の人は、　諸法の一味を知る。
日の光明を放つて、　恒に世間の闇を除くが如く、
是の如く法を護る者は、　常に普く世間を照すなり。

*有依行品　第四之一

【三四】 三寶に屬する資物。佛寶に屬すべき物、即ち、佛物とは、所謂る佛像殿堂香花幡蓋供物等なり。法物とは、經卷紙筆箱函巾帊等なり。僧物とは、僧房田園等の常住僧物、衣鉢藥具穀菜等の現前僧物の二なり。此の三寶物、各所屬を異にし盜用互用とを許さず。
【三五】 以下壞劫の最後の増減劫に器世間の壞する時生ずる所謂る大の三災を擧ぐるなり。即ち、一に火災。七日同時に現れて世間を焚燒す。二に水災。無間より第二禪まで水に浸潤せらる。三に風災。無間より第三禪天まで、一切の物質、風に飄散せらる。
【三六】 此の一句北涼本には、「永消諸煩惱」に作る。愛果とは、愛欲の果報。大悲經「に生死三有の愛果に樂著す」と。
【三七】 Bhadra-kumbha. 又、善瓶、德瓶、天德瓶、吉祥瓶、如意瓶、有德瓶ともいふ。人、天神に祈つて此の瓶を感得すれば、所求、意の如く瓶より出づといふ。智度論十三に「人有りて、常に天を供養す。其人貧窮にして、二十歳に滿ち、一心に供養して、富貴を求索す。天此の人を愍みて……一器を與ふ。名けて德瓶といふ。……其人得已つて、

爾の時、[三八]金剛藏菩薩摩訶薩、大衆の中に於て、座從りして起つて、佛足を頂禮したてまつり、遍へに一肩を袒ぎ、右の膝を地に著け、合掌し恭敬して、頌を以て問ふて曰はく、

昔し言ひたまふ、破戒にして淨徳を失へば、　賢聖の器に非ず、我が子に非ず。
諸の沙門の法の棄つること燼の如くんば、　應に我が清衆の中に居すべからず。
三垢に汚されて道を失滅すれば、　彼は勝供養を消するに堪へず。
四根本罪は、隨つて一を犯せば、　清衆に棄てらるること海尸の如し、と。
施の四方僧の衆物に於て、　少分も我れは亦た受くることを聽さず。
云何ぞ、今ま、惡苾芻をも、　應に忍ぶべく、應に悲みて、讁罰を遮すべしと、說きたまふ。
復た、應に、勸めて彼を供養し、　悲愍して、微惡の心をも生ずること勿るべしと、勸めたまふ。
所說の法を恭敬し聽受せば、　當に福慧大悲を獲る者なるべし。
六通の救世は、餘經に說きたまへり、　汝等、皆な當に大乘の、
正直微妙の菩提道を信ずべし、　應に二乘の解脫路を捨つべし、と。
云何ぞ、今ま復た、三乘を說きて、　普く聽持して供養を修するを勸めたまふ。
[三九]根・力・覺・道・[四〇]沙門果は、　此の經の中に有つて餘處には無し。
八支聖道は等倫無くして、　[四一]三乘皆な同じく此の[四二]道を行じ、
解脫を欲求して勤めて精進して、　各々所願に從つて菩提を證す。
有情中の尊よ、當に[四三]照察したまひて、　今も昔も教[四四]使して違ふこと無きを、*會るべし。
諸の天・人・菩薩衆をして、　解悟して心歡びて眞實を證せしむ。
大乘を說くを聞いて、誰か益有る。　大乘を說くを聞いて、誰か損有る。
[四五]十種解脫の聲聞乘をば、　說くを聞いて誰か損あり誰か益有る。

意の所欲に應じて、得ざる所無し」云々と云へり。賢字、明本には賣に作る。

※ 北涼本卷第五「衆善品第七」に相當。麗本等、「大乘大集地藏十輪經」の九字を、有字の上に冠す。今は明本に從ひ之を省く。宋・元二本及び宮・聖二本は、俱に之の一の二字を缺く。

※ 金剛藏菩薩の發問

【三八】 Vajragarbha.

【三九】 五根・五力・七等覺支・八聖道分、並に四沙門果を擧ぐ。北涼本には、此の前後左の如し。「云何んぞ此の經に、忍辱を說きて。惡比丘に於て悲心を起して。一切の諸の讁罰を遮制し、復た惡比丘を供養せしめたまふ。昔は餘經に於て復た說きて言ひたまへり。汝等皆な當に大乘を信ぜよ。是をば質直の勝菩提なりと名く。汝

何人か法を聞いて轉た昇進し、　何人か法を聞いて翻つて退沒する。
*云何んぞ、諸の有爲を厭患して、　能く速かに老死を枯竭す。
晝夜に勤めて諸善を修する者、　何れの妙理にか依り、何れの乘にか御して、
能く深廣なる四[四六]瀑流を渡らん。　救世よ、皆な當に爲めに宣說したまふべし。

爾の時、佛、金剛藏菩薩摩訶薩に、告げて言はく、

『善い哉、善い哉。善男子よ、汝、今ま、無量の有情を利益し安樂ならしめんと欲するが爲めに、諸の天・人・阿素洛等の爲めに、大義利を作さんと欲して、如來に是の如きの深義を、請問したてまつる。汝、應に諦かに聽いて善く之を思念すべし。吾れ、當に汝が爲めに分別して解說すべし』と。

金剛藏菩薩の言さく、

『唯だ然り。世尊よ。願樂して聞んと欲す』と。

*佛の言はく、

『善男子よ、「十種の補特伽羅」有りて、生死に輪廻して、人身を得ること難し。

何等をか、[四七]十の補特伽羅と爲す。一には、善根を種へず。二には、未だ福業を修せず。三には、雜染相續す。四には、惡友の行に隨ふ。五には、後世の苦果を見ず畏れず。六には猛利の貪欲。七には、猛利の瞋恚。八には、猛利の愚癡。九には、其の心迷亂す。十には、惡邪見を守る。

*是の如きの「十種の無依行」の因は、諸の衆生をして、根本罪を犯し、尸羅を毀犯して、諸の惡趣に隨せしむ。

何等をか、名けて[四八]十の無依行と爲す。

謂はく、我が法の中にして、而も出家する者、(1)加行は壞するも、意樂の壞せざる有り。(2)意樂壞するも加行の壞せざる有り。(3)加行・意樂、倶に壞する有り。(4)戒は壞するも見の壞せざる有り。(5)

等應に當に二乘を離るべし、と。復た此の經に於て、三乘と。及び諸の根・力・覺・道分と。禪定・解脫・三乘の法とを、說きたまひ。諦聽して解脫の因を信受せしむる。此に沙門の四聖果有り。此の經を除きて外に沙門無し。三乘皆な八正道を同じくし。解脫を欲求して勸めて精進す。」

【四〇】四沙門果なり。即ち、豫流・一來・不還・阿羅漢の聲聞乘の四聖果。前三果を亦た、梵名にて、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果ともいふ。

【四一】三字、宮本、二に作る。

【四二】道字、宮本、須に作る。

※十種の補特伽羅

【四三】照字。明本、嚴に作る。

【四四】使字、宮本、便に作る。

※會、明本に依る刊本には、曾今昔敎使無ㇾ違に作る。

【四五】北涼本、十種分別聲聞人に譯す。

※十種無依行

※明本に依る流布刊本、「云何厭患誰有ㇾ爲」に作る。

【四六】瀑字、三本及び宮本には暴に作る。

【四七】北涼本には次の如し。「(1)善根を宿殖せず。(2)未だ福を修せざる者。(3)心常に憒鬧す。(4)惡知識に隨ふ。(5)後世を畏れず。(6)貪欲に、(7)瞋

見は壞するも戒の壞せざる有り。(6)戒・見、倶に壞する有り。(7)加行と意行と戒見とに於て皆な壞せずと雖も、而も但だ惡友の力行に依止して無依行をば作す有り。(8)善友の力行に依止すと雖も、而も復た愚鈍なること、猶し瘂[四九]羊の如く、諸の事業に於て都て分別せず、善友の善・不善の法を說くを聞くも領受すること能はず、記持すること能はず、善・不善の義を解了すること能はず、是の因緣に由つて、無依行を作す有り。(9)種々の財寶衆具に於て、常に厭足すること無く、追求する因緣もて、其の心迷亂して、無依行を作す有り。(10)衆病の爲めに逼惱せられて、便ち、種々の祠祀・呪術をば求め、是の因緣に由つて、無依行を作す有り。

是の如きの十種の無依行の因、諸の衆生をして、根本罪を犯して、現法の中に於て賢聖の器に非ず、尸羅を毀犯して、諸の惡趣に墮せしむ。

善男子よ。若し、補特伽羅の加行は壞するも意樂の壞せざる有りて、隨つて一種の無依行因に遇つて、根本罪を犯すも、便ち、深く怖懼し慚愧して棄捨し、而して數數、諸の惡行を、作らされば、如來、彼を益せんが爲の故に、[五〇]汙道の沙門有りと說きたまふ。所以は何ん。彼れ、是の如きの重惡業を作し已つて、卽便ち、發露して敢て覆藏せず、慚愧し懺悔せば、彼れ、是の如きの慚愧・懺悔に由つて、罪、除滅することを得て、永く相續を斷じ、復た更に作さず。一切の沙門の法事に於て、皆な應に擯出すべく、一切の沙門の所有の資具をば、受用することを聽さずと雖も、而も彼の人、三乘の中に於て法器を成ずるに由るが故に、如來、慈悲もて、或は彼が爲めに聲聞乘の法を說き、或は彼れが爲めに緣覺乘の法を說き、或は彼が爲めに無上乘の法を說きたまふ。彼れ、是の處り有りて轉じて第二第三生の中に於て、正願力を[五一]發し善友の力に遇ふて、一切の作す所の諸の惡業障皆な悉く消滅して、或は聲聞乘の果を證得すること有り、或は緣覺乘の果を、證得すること有つて而も般涅槃し、或は廣大にして甚深なる無上乘の理に、悟入すること有らん。

恚に、(8)愚癡に、耽著す。(10)乃至(9)顚狂して心を失す。は邪見なり。」

【四八】北涼本には次の如し。「何等をか十の無依止の威儀と爲す。我が法に依つて而して出家する者有り。(1)內心壞せずして修道壞す。(2)修道壞せずして內心壞す。(3)內心修道倶に壞する有り。(4)戒壞して見壞せざる有り。(5)見壞して戒壞せざる有り。(6)戒見倶に壞する有り。(7)內心修道戒見倶に壞せざるも、若し惡知識に隨はば依止の威儀無く。(8)善知識に遇ふと雖も而も復た愚癡なること猶し白羊の如く、善法を聞き已るも受持すること能はず。亦た他の爲に分別して演說せず。善不善を識らず、依止の威儀無し。(9)衆具無量なるも而も知足せず、是の因緣を以て心常に散亂す、是を依止の威儀有ること無しと名く。(10)種種の病の爲に苦惱せられて、是の因緣を以て、諸の呪術を修し、若は依止すること有り。」

【四九】瘂字、聖本には、啞に作る。瘂羊。梵名 Eḍamūka. 又、啞如羊。至愚の人に譬ふ。啞羊僧といふ時は、智度論三にいふ、啞羊・無羞・有羞・眞實の四種僧の第一。本經には

是の如く、戒は壞するも見の壞せざる者も、應に知るべし、亦た爾りと。

若し、補特伽羅の意樂は壞するも加行の壞せざる有らば、如來彼を益せんが爲めの故に、四梵住の法を求むることを說きたまひ、彼は、是れ聲聞乘の器、或は是れ緣覺乘の器とす。

若し、補特伽羅の加行も意樂も倶に壞する有らば、彼れ、諸乘に於て皆な法器には非ざるも、如來、彼を益せんが爲めの故に、布施を讃說したまふ。

若し、補特伽羅の見は壞するも戒の壞せざる有らば、如來、彼を益せんが爲めの故に、緣起の法を說きたまひて、惡見を捨てて、現身の中に於て聲聞の法、或は緣覺の法に入り、或は餘身に於て方に能く悟入せしむ。

若し、補特伽羅の、戒も見も倶に壞する有り。彼れ、聖法に於て亦た器を成ぜざるも、如來、彼を益せんが爲の故に、布施を讃說したまふ。

若し、補特伽羅の加行も意行も戒も[五二]見も壞せざるも、[五三]但だ惡友の力行に、依止する有らば、如來、彼を益せんが爲めの故に、十善業道を讃說したまふ。

若し、補特伽羅の、復た善友の力行に依止すと雖も、而も復た愚鈍にして、猶ほし[五四]啞羊の如く、善不善の法を領受すること能はざる有らば、如來、彼を益せんが爲めの故に、習誦を讃說したまふ。

若し、種々の貧病の爲めに逼められ、種々の見趣の爲めに迷惑すること有らば、如來、是の如きの等を益せんが爲めの故に、解脫を求むる者には、其れが爲めに能く生死趣を出づる、聲聞乘の四聖諦の法を開示し、[五五]斷見論の者には、其れが爲めに諸の緣起の法を讃說し、[五六]常見論の者には、爲めに、三界の諸有・諸趣の此に死して彼に生ずること陶家の輪の如くして往來絕ゆること無き、無常等の法を說きたまふ。

勝義僧・世俗僧・瘂羊僧・無慚愧僧の四とせり。先の眞實・有羞・啞羊・無羞に同じ。又、天笠に啞羊外道あり啞羊の如くして語らざるを以て勝行とする外道なり。

【五〇】 Mārgadūṣī. 能窮道。倶舍論十五に說く、勝道・示道・命道・汚道の四種沙門の一。汚道沙門とは、犯重の比丘なり。戒を犯して濫に他の信施を受くるを云ふ。

【五一】 發字、宮本には、顯に作る。

【五二】 見不壞、明本には、不見壞に作る。

【五三】 但字、宮本には、俱に作る。

【五四】 啞字、三本及び宮本、瘂に作る。以下同之。

【五五】 二邊卽ち二の邊見の一。衆生の身心は此の一期にて斷絕するとなす謬見。また一般的には無見といふ。卽ち實には物なしとし、一切の歸滅を

善男子よ。如來には、所說の名字・言說・音聲の空しくして果無き者の、有ること無し。皆な、有情を成熟せんが爲ならざること無し。是の故に、一切の、如來の所說の正法を毀謗し、諸の有情の正法眼を壞するの罪は、諸の、無間・似無間等の無量の重罪に過ぎたり。若し、我が一切の有情を利樂せんと欲するが爲めに說く所の正法、——謂ゆる、聲聞乘に依る所說の正法、或は緣覺乘に依る所說の正法、或は大乘に依る所說の正法に於て、下至、一頌をも、誹謗し遮止し障蔽し隱沒せば、當に知るべし、是をば正法を謗る者と名け、亦た八聖道を毀滅する者と名け、亦た一切の有情の正法眼を破壞する者と名く。是の如きの人は、既に自ら大無利行を習行し、亦た一切の有情をして、大無利行を習行せしむ。此の人、無慚愧僧に依止して、是の如く、如來の正法を毀謗するなり。

*復た次に、善男子よ。「四種の僧」有り。何等をか、四と爲す。一には、[五七]勝義僧、二には、[五八]世俗僧、三には、[五九]啞羊僧、四には、[六〇]無慚愧僧なり。

(1)云何んが勝義僧と名く。謂はく、(1)佛世尊、(2)若しは諸の菩薩摩訶薩衆の、其の德尊高にして、一切の法に於て自在を得たる者、(3)若しは[六一]獨勝覺、(4)若しは[六二]阿羅漢、(5)若しは[六三]不還、(6)若しは[六四]一來、(7)若しは[六五]預流、是の如きの七種の補特伽羅は勝義僧の攝なり。(8)若しは、諸の有情、在家の相を帶して、鬚髮を剃らず、袈裟を服せずして、一切の出家の[六六]別解脫戒を受くることを得ず、一切の[六七]羯磨・[六八]布薩・[六九]自恣をも悉く皆な遮遣すと雖も、而も聖法有りて勝果を得ば、故に勝義僧の攝とし、是をば勝義僧と名く。

云何んが、世俗僧と名く。謂はく、鬚髮を剃り、[七〇]袈裟を被服し、出家の別解脫戒を成就せば、是を世俗僧と名づく。

云何んが、啞羊僧と名づく。謂はく、根本等の罪の犯と不犯とを了知せず、輕重を知らず、種々の小

信ずる虛無主義なり。その特に人生觀に就いての妄見をいふ。

【五六】斷常二邊見の一。身心の常住不滅を信ずるもの。即ち、一切の事實は實存して不滅なりとする有見の、特に人生觀に就ての妄見を指す。

※　**四種僧**

【五七】智度論の四種僧中の眞實僧に同じ。見道以上聖德を具する僧。

【五八】智度論の四種僧中の有羞僧の同じ。善惡持犯を知り悔除を知るもの。

【五九】智度論の四種僧にても啞羊僧といふ。善惡持犯を知らず所犯の罪に於て悔除するを知らず、啞咩の如きの僧。註〔四九〕參照。

【六〇】智度論の四種僧中の無羞僧に同じ。善惡持犯を知るも、羞恥の心なく無慚愧なるもの。

【六一】Pratyekabuddha. 獨覺、緣覺、辟支佛といふに同じ。

[七一]隨・小罪を毀特して犯する所を、發露し懺悔することを知らず、惷愚魯鈍にして微小の罪に於ては見ず畏れず、聰明の善士に依つて而して住せず、時時の間に多聞聰明の者の所に往詣して親近し承事せず、亦た數數恭敬して、如何んが善と爲し云何んが不善とし云何んが罪有りとし云何んが罪無しとし、何を修するをか妙と爲し何を作すをか[七二]惡と爲すと、請問せず。是の如きの一切の補特伽羅は、啞羊僧に攝し、是をば、啞羊僧と名く。

如何んが、無慚愧僧と名く。謂はく、若し、有情にして、活命の爲めの故に、我が法に歸依して而して出家を求め、出家することを得已るも、受持する所の別解脫戒に於て、一切毀犯し、無慚無愧にして、後世の苦果を見ず畏れず、內に腐敗を懷くこと穢蝸螺の如くにして、貝音し狗行し、常に虛言を好みて曾て一實無く、慳貪・嫉妬・愚癡・憍慢にして、[七三]三勝業を離れ、利養に貪著し名譽を恭敬し、[七四]六塵に耽湎して好んで淫[七五]佚を樂しみ、色・聲・香・味・觸の境を愛欲すれば、是の如きの一切の補特伽羅は、無慚僧の攝にして、正法を毀謗す。是をば無慚愧僧と名く。

*善男子よ。勝義僧とは、中に於て、或は亦た是れ[七六]勝道の沙門の所攝なる有り。勝道と言ふは、謂はく、若し能く八支聖道に依つて自ら一切の煩惱の駛流を度し、亦た他をして度せしむるなり。此れ復た云何ん。謂はく、佛世尊と、及び獨勝覺と、諸の阿羅漢となり。是の如きの三種の補特伽羅は、已に一切の[七七]有支の眷屬を離る。故に、勝道と名く。復た、菩薩摩訶薩衆有り。他緣を假らずして、一切の法智見に於て障り無くして一切の有情を攝受し利樂するをも、亦た勝道の沙門の所攝と名く。

其の勝義僧及び世俗僧には、中に於て、或は、亦た是れ[七八]示道の沙門の所攝なる有り。若し、別解脫戒を、成就する眞善の異生、乃至、世間の正見を具足する有り。彼れ[七九]記說變現力に由るが故に、能く廣く他の爲めに諸の聖道の法を宣說し開示す。當に知るべし。是の如きの補特伽羅をば最下劣の示道の沙門と名け、預流果を證する補特伽羅は、是を第二と名け、一來果を證する補特伽羅は

【六二】Arhat. 羅門四聖果中の極果。上、悲想非非想處に至る一切の修惑(思惑)を斷じ盡せる聲聞乘至極の位なり。又、殺賊・應供・不生など譯す。一切の見思二惑を斷ずる故殺賊既に極果を得て人天の供養を受くべければ應供と呼び、一世の果報盡くれば永く涅槃に入つて再び三界に生じ來らざるが故に不生と名く。

【六三】Anāgāmi. 阿那含果ともいふ。阿羅漢・一來・預流と共に、聲聞乘の四果の一。欲界九品の修惑を斷じ盡して再び欲界に還生せざる聖者の位。

【六四】Sakṛdāgāmi. 斯陀含果。一來とは、尙ほ人天界に一度來往すべき義なり。欲界九品の修惑中前六品を斷して尙後の三を殘す位。その後三品の修惑の爲に、欲界の人界と天界とに尙一度受生する位。

※四種沙門

【六五】Srotāpanna. 須陀洹果舊に、入流又は逆流と譯す。凡夫を去て初めて聖道の法流に入るを云ふ。逆流とは聖位に入て生死の暴流に逆ふ身たるをいふ。三界の見惑を斷じ盡せる位なり。

【六六】Prātimokṣa. 波羅提木叉。又、處處解脫、隨順解脫ともいふ。定共戒、道共戒と共に三種戒とす。七衆所學の

是を第三と名け、不還果を證する補特伽羅は是を第四と名け、復た菩薩摩訶薩衆有り、是を第五と名く。謂はく、初地に住し、第十地に至り、乃至は最後の有身に安住するなり。此は、皆な、示道の沙門の所攝なり。

若し、別解脱戒を成就して、軌則・所行淸淨にして具足するもの有らば、此れ皆な[八〇]命道の沙門の所攝なり。道を以て活命するが故に、命道と名く。復た、菩薩摩訶薩衆有り。一切の有情を攝受し利益し安樂ならしめんと欲するが爲めに、六到彼岸を具足し修行するをも、亦た命道と名く。

是の如きの、勝道・示道・命道の三種の沙門を、名けて世間の眞實の福田と爲し、所餘の沙門を名けて、[八一]迂道と爲す。眞實には非ずと雖も、亦た福田の數の中に墮在することを得るなり。

若し、無慚愧僧に依止する補特伽羅有らば、我が正法の毗奈耶の中に於て、名けて[八二]死屍と爲す。淸衆の海に於て、應に當に擯棄すべし。法器に非るが故なり。我れ、彼の人に於て、大師と稱せず、彼の人も、我れに於て、亦た弟子に非ざるなり。無慚僧有りて、法器を成ぜざるも、我を稱して師と爲し、我が舍利及び我が形像に於て深く敬信を生じ、我が法と僧と聖なる[八三]所受の戒に於ても亦た深く敬信して、旣に自ら諸の惡邪見を執せず、亦た他をして惡邪見を執せしめず、能く廣く他の爲めに我が法を宣說して、稱揚し讃歎して毀謗を生ぜず、常に正願を發し、所犯の罪に隨つて數數厭捨し、發露懺悔して衆多の業障皆な能く除滅すれば、當に知るべし、是の如きの補特伽羅は、三寳聖戒の力を信敬するが故に、九十五の諸の外道衆に、勝ること多くして百千倍し、速かに能く般涅槃の城に入るには非ざれども、轉輪聖王も尙ほ及ぶこと能はず、況んや餘の雜類の一切の有情をや。是の義を以ての故に、如來一切の有情の諸の業法受の差別相を觀察し已つて、是の如きの說を作したまふ。「我が法中に於て、鬚髮を剃除し、袈裟を被る者は、我れ、終に刹帝利等の毀辱し譴罰することを聽さず。若し、一切の出家の人を毀辱し、譴罰すること有らば、獲る所の罪報は、前に

戒律（五戒、乃至、出家の具足戒）は、別々に身口七支の惡業を解脫するが故に、別解脫戒といふ。

【六七】 Karma. 業、所作、事、辨事、作法など譯す。比丘の受戒の、或は懺悔等をなすときの作法。

【六八】 Pogadha 布沙他、布灑他、褒沙陀等に作り、淨住、善宿、長養とも譯す。出家の法には半月每即ち十五日と二十九或は三十日とに衆僧を集めて戒經を說き比丘をして淨く戒中には安住せしめ能く善法を長養せしめ、また在家の法には六齋日に八戒を持して善法を增長するをば、名けて布薩といふ。說戒とも呼ぶ。又此の日人に向つて所犯の罪を懺悔するが故に、鉢羅帝提舍耶寐 Pratideśayāmi.（我對說）ともいふ。又、優補陀婆（Upavasatha ?）と呼び、斷增長と譯す。惡を斷じ善を增長すればなり。

【六九】 Pravāraṇa. 鉢刺婆刺拏。又、隨意とも譯す。夏安居の竟日、即ち舊律に在ては七月十六日、新律にては八月十六日に、淸衆をして恣に已が所犯の罪を各他比丘に對して擧げしめて之を懺悔するをいふ。又、他人の意に隨つて恣に其の所犯を擧ぐれば隨意といふ。

廣く說くが如し。又、我が法に依つて、俗を捨てて出家し、鬚髮を剃除し、赤袈裟を被らば、卽ち、一切の過去・未來・現在の諸佛の爲めに慈悲もて護念さる。威儀の形相たる所服の袈裟も、亦た過去・未來・現在の諸佛・世尊の爲めに慈悲もて守護さるるなり。是の故に、鬚髮を剃除し赤袈裟を被る出家の人を輕毀せば、卽ち是れ、一切の過去・未來・現在の諸佛・世尊を、輕毀するなり。是の因緣に因つて、諸の智慧有りて、衆苦を厭怖し、人天の涅槃の樂を欣求する者は、應に、俗を捨てて出家し鬚髮を剃除して袈裟を被る者をば、輕毀すべからず。

無慚僧有り。禁戒を毀破し、三乘の賢聖の法器を成ぜず、旣に自ら諸の惡邪見を堅執し、亦だ能く他をして惡邪見を執せしむ。謂はく、眞善の刹帝利・眞善の婆羅門・眞善の宰官・眞善の居士・眞善の沙門・眞善の長者・眞善の筏舍・眞善の戍達羅の若しは男、若しは女の爲めに。諸の世間の父無く、母無く、乃至、善業惡業の所得の果報の有ること無く、能く聖道の果を得ん者有ること無く、一切の諸法、因より生ぜずと、說き。或は執して色界は是れ常にして變壞の法に非ずと、言ふこと有り。或は執して、無色界は常にして變壞の法に非ずと言ふこと有り。或は執して外道の所計の諸の苦行の法は究竟の淨を得と言ふこと有り、或は執して、唯だ聲聞乘のみ究竟淨を得、獨覺乘にも非ず亦た大乘に非ずと言ひて、聲聞乘に於て信敬し稱讚し宣說し開示して、獨覺乘及び大乘に於て誹謗し輕毀し障蔽し隱沒して流布せしめざること有り。或は執して唯だ獨覺乘のみ究竟淨を得、聲聞乘にも非ず、亦た大乘にも非ずと言ひて、獨覺乘に於て信敬し稱讚し宣說し開示して、聲聞乘及び大乘に於ては誹謗し輕毀し障蔽し隱沒して流布せしめざること有り。或は執して、唯だ大乘のみ有つて究竟淨を得、聲聞乘にも非ず、獨覺乘にも非ずと言ひて、大乘の法に於て、旣に自ら信を生じ他をして信を生ぜしめ、旣に自ら恭敬し他をして恭敬せしめ、旣に自ら稱讚し他をして稱讚せしめ、旣に自ら書寫し他をして書寫せしめ、旣に自ら[八四]讀誦し他をして讀誦せしめ、旣に自ら聽受し他をして聽受

【七〇】被服袈裟、三本及び宮本には、被二勝袈裟一に作る。
【七一】隨とは、隨惑、卽ち隨煩惱のこと。倶舍には、一に一切の煩惱を呼ぶも、亦た一には、六隨眠の根本煩惱に對して自餘の煩惱を隨煩惱と名け、また根本といふに對し、枝末惑ともいふ。根本煩惱に從つて生ずるが故に隨といふ。大乘百法中にては、六大惑に對して自餘の二十を隨煩惱と名け、更に之を大・中・小の三隨惑とす。小隨惑とは、忿・恨・惱・覆・誑・諂・憍・害・嫉・慳の十をいふ。
【七二】惡字、聖本には、怨に作る。
【七三】身口意の三の善業をいふ。
【七四】色聲香味觸法の六境をいふ。その淨心を染汚するが故に塵と呼ぶ。
【七五】佚字、麗本には、泆に作る。今は、三本及び宮本に從ふ。
【七六】Mārga-jina. 倶舍論十五にいふ、勝道・示道・命道・汚道の四種沙門の一なり。勝道とは、佛と獨覺との如き、自ら能く覺するものをいふ。瑜伽論二九の四種沙門にても、勝道沙門と稱せり。
【七七】十二支中の有支。三有

せしめ、既に自ら思惟し他をして思惟せしめ、他の有情に於て、若しは是れ法器・若しは非法器にも、皆な微細にして甚深なる大乘の法義を廣說し開示し解釋することを爲し、聲聞乘及び獨覺乘に於ては誹謗し輕毀し障蔽し隱沒して流布せしめずして、自ら信を生ぜず他の信を生ずることを障り自ら恭敬せず他の恭敬することをも障り、自ら稱讃せず他の稱讃することをも障り、自ら書寫せず他の書寫することをも障り、自ら讀誦し聽受し思惟せずして他の讀誦し聽受し思惟することをも障り、[八五]二乘の法義を廣說し開示し解釋することを樂まざること有り。[八六]或は執して、唯だ布施を修してのみ究竟淨を得、戒にも非ず、忍にも非ず、乃至は、慧にも非ずと言ふこと有り。或は執して唯だ禁戒を修してのみ究竟淨を得、施にも非ず、忍にも非ず、乃至は慧にも非ずと言ふこと有り。或は執して、唯だ安忍を修してのみ究竟淨を得、施にも非ず、戒にも非ず、乃至、慧にも非ずと言ふこと有り。或は執して唯だ精進を修してのみ究竟淨を得、施にも非ず、戒にも非ず、乃至、慧にも非ず、と言ふこと有り。或は執して唯だ靜慮を修してのみ究竟淨を得、施にも非ず、戒にも非ず、乃至、慧にも非ず、と言ふこと有り。或は執して唯だ般若を修してのみ究竟淨を得、施にも非ず、戒にも非ず、乃至、定にも非ずと言ふこと有り。[八七]或は執して唯だ種々の世間の所習の諸の[八八]伎藝智を修してのみ究竟淨を得、と言ふこと有り。或は執して唯だ種々の[八九]投巖・赴火・自餓等の行を修してのみ究竟淨を得、と言ふこと有り。

善男子よ。是の如きの破戒・惡行の苾芻の法器に非ざる者、種々に眞善の法器の諸の有情等を誑惑して、惡見を執せしむ。彼れ、[九〇]顚倒の諸の惡見に由るが故に、眞善の刹帝利王、乃至、眞善の戍達羅等の、若しは男、若しは女の、所有の淨信・戒・聞・捨・慧を破壞し、刹帝利を轉じて旃荼羅と成し、乃至、*筏舍・戍達羅等を旃荼羅と成す。此の法器に非ざる破戒の苾芻並びに刹帝利の旃荼羅等の、師及び弟子は、俱に善根を斷じ、乃至、當に無間地獄に墮すべし。

の因なり。愛取の煩惱に依て種種の惑の業を作り、當來の果を定むるなり。

【七八】 Mārga.deśika. 智度論の四種沙門の一。舍利弗等の如く、法を說いて道を示すものをいふ。瑜伽論の說道沙門なり。

【七九】 Adeśanāprātihārya. 記法神變、記心示導ともいふ。三神變、三神導の一。第二卷註〔一七一〕記說神變に同じ。

【八〇】 Mārgajīvi. 智論の四種沙門の一。戒定慧を以て命となすもの、一に以道養者ともいふ。瑜伽論には活道沙門といふ。

【八一】 Mārgadūṣi. 瑜伽論の壞道沙門。禁戒を壞し惡法を行ずるもの、佛道を汚染すれば汚道といふ。註〔五〇〕に出づ。

【八二】 犯罪の比丘に譬ふ。四重罪を犯さば既に比丘の生命を斷つものなれば死屍と稱す。智度論二二「に衆僧大海中。……若有二破戒者一。修不レ在二僧衆一。譬如二大海水一。下レ共二死屍一宿上。」と言へり。

【八三】 受字、麗本には、愛に作る。今ま三本及び宮本に從ふ。

【八四】 讀字、聖本には、讃に作る、以下※同之。

【八五】 二字、麗本には三に作る。今は、三本及び宮・聖二

善男子よ。人の死尸の如きは、[九一]膖脹爛臭して、諸の來り見る者、皆な臭の爲に熏ぜられ、爛臭せる死尸に觸近する所に隨ひ、或は與に交翫すれば、隨つて、臭穢に熏染せらるるなり。是の如く、眞善の刹帝利王、乃至、眞善の戍達羅等の、若しは男、若しは女も、破戒・惡行の法器に非ざる僧に、親近する所に隨ひ、或は與に交遊し、或は與に住止し、或は事業を同じうすれば、隨つて、[九二]惡見の臭穢もて熏染せらるることも、是の如し、是の如し。彼の眞善の刹帝利王、乃至、眞善の戍達羅等の、若しは男、若しは女をして、淨信・戒・聞・捨・慧を退失して、旃荼羅と成さしむる、師及び弟子は、倶に善根を斷じ、乃至、當に無間地獄に墮すべし」と。

本の、二乘とせるに依れり。
聲聞乘と獨覺乘との二。
以上、ここには、生信・恭敬・稱讚・書寫・讀誦・聽受・思惟・廣說・開示・解釋の十法行を擧げたるなり。名目、若干の相異あり。第六卷(131頁)には、信敬・聽受・讀誦・書寫・施與・宣說・思惟・修行・廣布に作る。又、辯中邊論には、書寫・供養・施他・諦聽・受持・開演・諷誦・思惟・修習の十法行を擧ぐ。

【八六】以下、六度の一に偏執して、他の五を輕視するを擧ぐ。

【八七】以下、世間の知識に執すると、及び、出世間中佛道以外の外道の行法に執するとの二者を擧ぐ。

【八八】伎字、三本、技に作る。

【八九】諸の苦行の名目なり。

【九〇】諸法の、無常・苦・無我・涅槃を、常樂我常と執する四顚倒の見なり。

【九一】膖字、宮本には、胮に作る。

【九二】被二惡見臭穢熏染一の被字、三本及び宮本には、彼に作る。

卷の第六

※有依行品　第四之二

※「善男子よ。汝、觀よ、是の如きの刹帝利等の無量の有情[一]、是の如きの破戒惡行の非法器の僧に親近せば、一切の所有の善法を退失し、乃至は、當に無間地獄に墮すべし。是の故に、上妙の生天涅槃の樂を得んと欲する者は、皆な應に勝道の沙門に親近し、承事し、供養して、三乘の要法を諸稟し聽聞し、或は示道・命道の沙門を求むべし。若し、是の如きの三道の沙門無くば、當に汙道の沙門の中に於て求むべし。復た戒は壞すと雖も而も正見有りて意樂及び加行を具足する者には、應に往きて親近し承事し供養して、三乘の要法を諸稟し聽聞すべきも、應に加行と意樂と及び見との壞せる者には親近し承事し供養すべからず。彼れ、戒は壞すと雖も而も邪見無くして意樂・加行・見の具足するが故に、應に其の所に詣りて、聲聞乘の法・獨覺乘の法・及び大乘の法を諸稟し聽聞すべく、應に輕毀すべからず。三乘の中に於て、意の所樂に隨つて、發願し精進して、隨つて一乘を學んで、所[二]餘の乘に於て、應に輕毀すべからず。若し、三乘に於て、隨つて一を、下至、一頌を輕毀せば、應に親近し、或は與に交遊し、或は共に住止し、或は事業を同じうすべからず。若し、親近し或は與に交遊し、或は共に住止し、或は事業を同じくすること有らば、倶に定んで當に無間地獄に墮すべし。

善男子よ。是の故に、若し三乘の中に於て隨つて一乘に依て生死を出ることを求めて安樂を欣樂し危苦を厭はんと欲する者は、應に如來の所說の正法――或は聲聞乘に依る所說の正法、或は獨覺乘に依る所說の正法、或は大乘に依る所說の正法に於て、普く深く、信敬して、下至、一頌をも謗毀し障礙し隱沒することを生ずること勿れ。常に應に恭敬し讀誦し聽聞すべし。應に堅牢の正願を發し

※北凉本卷五「衆善相品第七」後半、並に卷六「刹利依止論相品第八」前半に相當す。

※親近供養すべき僧及び人以下北凉本「衆善相品」後半

【一】sattva. 情識を有する物の意。木石等の非常に對し人畜等の情識ある物を云ふ。衆生とも譯す。

【二】所字、三本には別に作る。

て證を求むべし。三乘を謗毀して一法に隨ふ者には、應に共に住し、下至、一宿すべからず。應に親近し諮稟し聽法すべからず。若し、諸の有情、隨つて三乘に於て一乘を毀謗し、或は復た三乘を謗る人に親近して諮稟し聽受せば、此の因緣に由りて、皆な定んで、當に無間地獄に墮し、大苦惱を受けて出期有ること難かるべし。

何を以ての故に。

*善男子よ。我れ、過去に於て、菩薩の行を修して、精勤して無上智を證せんと求めし時、或は聲聞乘に依る所說の正法、下至、一頌を求請せんが爲に、乃至は自身の手足・血肉・皮骨・頭目・髓腦を棄捨し、或は獨覺乘に依る所說の正法、下至、一頌を求請せんが爲に、乃至は自身の手足・血肉・皮骨・頭目・髓腦を棄捨し、或は大乘に依れる所說の正法、下至、一頌を求請せんが爲に、乃至は自身の手足・血肉・皮骨・頭目・髓腦を棄捨しき。是の如くに勤苦して三乘の中に於て、下至、一頌の法を求得し已つて、深く歡喜を生じて恭敬し受持して如說に修行して、時に暫くも廢すること無く、無量劫を經て一切の難行苦行を修行して、乃ち、究竟無上の智果を證して、復た有情を利益し、安樂にせんが爲に三乘の正法を宣說し開示するなり。是の義を以ての故に、應に下至一頌をも謗毀し障蔽し隱沒すべからず。常に應に恭敬し讀誦し聽聞すべし。應に堅牢の正願を發して證を求むべし。

*善男子よ。是の如きの三乘出要の正法は、一切の過去・未來・現在の過殑伽沙の諸佛の同じく說きたまひて、大威神力もて共に護持したまふ所なり。一切の有情の生死の大苦を拔濟せんと欲するが爲に、三寶の種[三]姓を紹隆して、斷絕せざらしめんと欲するが爲なり。是の故に、此の三乘の正法、に於て、應に普く信敬すべし。謗毀し障蔽し隱沒することを生ずること勿れ。若し、三乘の正法、下至、一頌を、謗毀し障蔽し隱沒すること有らば、決定して、當に無間地獄に墮すべし。

復た次に、善男子よ。未來世の此の佛土の中に於て、刹帝利の旃荼羅・婆羅門の旃荼羅・宰官の旃

※　捨身聞頌本生の引喩

※　三乘の護持

【三】姓字、三本及び宮本には性に作る。以下皆同之。

茶羅・居士の旃茶羅・沙門の旃茶羅・長者の旃茶羅・[四]茷舍の旃茶羅・戍達羅の旃茶羅の、若しは男、若しは女有りて、諂曲愚癡にして聰明の慢を懷き、其の性兇悖にして[五]慄厲麁獷なり、後世の苦果を見ず畏れず、好んで殺生、乃至、邪見を行じ、嫉妬・慳貪にして、善友に憎背して惡友に親近す。是れ三乘の賢聖の法器に非ず。或は少れに聲聞乘の法を聽習すれば、便ち諸佛の共に護持したまふ所の獨覺乘の法・[六]無上乘の法に於て誹謗し毀呰し隱沒して流布せしめず。或は少れに獨覺乘の法を聽習すれば、便ち諸佛の共に護持したまふ所の聲聞乘の法・無上乘の法に於て誹謗し毀呰し障蔽し隱沒して流布せしめず。或は少れに無上乘の法を聽習すれば、便ち諸佛の共に護持したまふ所の聲聞乘の法・獨覺乘の法に於て誹謗し毀呰し障蔽し隱沒して流布せしめず。名利を求めんが爲に、是の如きの言を唱ふ。「我は、是れ大乘、是れ大乘の黨なり。唯だ大乘のみを聽習し受持することを樂ひ、聲聞・獨覺乘の法を樂はず、二乘を學ぶ人に親近することを樂はず」と。是の如く詐つて大乘の人等と稱し、自らの愚癡・憍慢の勢力に由つて、是の如く三乘の正法を謗毀し障蔽し隱沒して流布せしめず、三乘の法を修學する人を憎嫉して誹謗し毀辱して威勢無からしむ。

*善男子よ。一切の過去・未來・現在の諸の佛世尊及び諸の菩薩摩訶薩は、一切の有情を利樂せんと欲するが爲めに、大悲力を以て[七]二事を護持したまふ。

一には、*三寶の種姓を紹隆して常に絕へざらしめんと欲するが爲めに、俗を捨てて出家し鬚髮を剃除して袈裟を被服するなり。二には、三乘の[八]出要たる四聖諦等の相應の正法なり。是の如きの二事は、唯だ佛世尊及び大菩薩のみ能く善く護持したまふ。諸の聲聞・獨[九]勝覺等には非ず、亦た百千那庾多數の大梵天王・及び天帝釋王・四大洲の轉輪王等の能く護持する所に非ず。

未來世の此の佛土の中に於て、刹帝利の旃茶羅王有り。我が法に依つて出家することを得て鬚髮を剃除し袈裟を被る者を見て、方便して犯す所の過失を伺求して、種種の緣を以て、呵罵し毀辱し、

【四】茷字、明本には筏に作る。以下亦同之

【五】慄字、三本俱に慓に作る。

【六】無上乘。菩薩乘乃至大乘の意。

※ 二事の護持

【七】出家の僧衆と、並びに三乘相應の正法との二者なり。神昉法師撰の經序に出づる「二事之護持」も、世・出世の二事を指すよりも、むしろ此の二者なるべし。

【八】生死を出離する要道なり。

【九】勝覺、明本には覺勝に作る。

或は鞭杖を加へ、或は牢獄に閉し、或は資具を奪ひ、或は袈裟を脫して廢して俗に還らしめて種種の[一〇]居家の事業を作さしめ、或は横に驅役(はしつかひ)し、或は濫りに擯遣し、或は飮食を斷じ、或は身命を害す。彼の刹帝利の旃荼羅王、己が愚癡・憍慢の勢力を以て、諸の佛菩薩の大悲力を以て共に護持したまふ所の我が諸の弟子を毀辱し謫罰し、諸の佛菩薩の大悲力を以て共に護持したまふ所の我が甚深の法を誹謗し毀滅して、其の三世の諸佛菩薩の共に護持したまふ所の三乘の正法に於て障蔽し隱沒して流布せしめず。刹帝利の旃荼羅王、乃至、伐舍・戍達羅等の旃荼羅の人の、若しは男若しは女有り。愚癡・憍慢にして、自ら大乘と號す。彼の人、尙ほ聲聞・獨覺二乘の法器に非ず、況んや是れ無上大乘の法器ならんや。利養・恭敬・名譽を求むるが爲めに、世間の愚癡の雜類を誑惑して、自ら、「我等は、是れ大乘の人なり」と言つて、如來の二乘の正法を謗毀す。是の如きの人等、愚癡・諂曲・憍慢・嫉妬・慳貪の因緣もて、我が法眼を毀して速かに隱滅せしむ。彼は、三世一切の諸佛に於て、大過罪を犯し、亦た三世一切の菩薩に於ても大過罪を犯し、又、三世一切の聲聞に於ても大過罪を犯すなり。久しからずして、便ち、當に[一一]支體廢缺して種種の重惡の疾病に遭遇すべし。彼の刹帝利の旃荼羅王、乃至、茷*舍の戍達羅等の旃荼羅の人の、若しは男若しは女は、惡業を造り[一二]倒見を起すに由つての故に、一切の[一三]所有の善根を[一四]損斷す。復た時有つて多く施福を修して、未來世に於て、當に鬼趣・傍生趣の中に生じて富樂の果を受くべしと雖も、而も、彼の身中に尙ほ色・無色界の下劣の善根をすら起すこと能はず、況んや、當に能く聲聞・獨覺・及び無上乘の無功用にして一切智智を起す善根の種子を種うるべけんや。又、其の舌をして病の爲めに害なはれて、多くの日夜に於て舌を結んで言へず、諸の苦毒を受けて痛切なること忍び難く、命終して、定んで、當に無間の大地獄の中に生ずべし。

*是の故に、如來は、一切の眞善の刹帝利王、乃至、眞善の戍達羅等の、若しは男若しは女を、慈悲

【一〇】俗家の家業に從事せしむるなり。

【一一】支字、三本及び宮本には、肢に作る。以下※同之。

【一二】顚倒の妄見。諸法の無常等を信ぜず、常住等なりと執するなり。

【一三】所有の二字、三本及び宮本、之を缺く。

【一四】損字、三本及び宮本、之を缺く。

※　三乘共信の勸め

し憐愍して、長夜に利益し安樂なることを得せしめ、慇懃懇切に、是の如きの言を作したまはく、「汝等、應に當に我が法に歸して鬚髮を剃除し片袈裟を被れる出家の人の所に於て、愼しみて惱亂し[一五]譏訶し讁罰すること勿く、我が所說の三乘の正敎に於て、愼んで謗毀し障蔽し隱沒すること勿るべし。若し我が言に違ひて故らに作さば、獲る所の罪報は、前に廣く說くが如し。

所以は如何ん。

此の我が法に歸して鬚髮を剃除し赤袈裟を被れる出家の形相は、乃ち、是れ過去・未來・現在の諸の佛菩薩の大悲神力の護持したまふ所なり。此の鬚髮を剃りて赤袈裟を被れる出家の威儀は、是れ諸の賢聖の解脫幢相なり。亦た是れ一切の聲聞乘の人の受用する解脫法味の幢相なり。亦た是れ一切の獨覺乘の人の受用する解脫法味の幢相なり。亦た是れ一切の大乘の人の受用する解脫法味の幢相なり。如來の所說の三乘の正法も、亦た是れ三世の諸佛菩薩の大悲神力の護持し給ふ所なり。[一六]是れ諸の賢聖の解脫の依止なり。亦た是れ一切の聲聞乘の人の受用する解脫法味の依止なり。亦た是れ一切の獨覺乘の人の受用する解脫法味の依止なり。亦た是れ一切の大乘の人の受用する解脫法味の依止なり」と。

善男子よ。是の義を以ての故に、解脫を求むる者は、應に當に諸の我が法に歸して鬚髮を剃除し赤袈裟を被れる出家の人に、親近し恭敬し供養すべし。應に先づ聲聞乘の法を信敬すべし。若しは自ら聽受し他をして聽受せしめ、若しは自ら讀誦し他をして讀誦せしめ、若しは自ら書寫し他をして書寫せしめ、若しは自ら施與し他をして施與せしめ、若しは自ら宣說し他をして宣說せしめて、思惟し修行して、廣く流布せしめよ。是の如くに、獨覺乘の法を信敬して、若しは自ら聽受し他をして聽受せしめ、若しは自ら讀誦し他をして讀誦せしめ、若しは自ら書寫し他をして書寫せしめ、若しは自ら施與し他をして施與せしめ、若しは自ら宣說し他をして宣說せしめて、思惟し修行して

【一五】讁字、三本には謫に作る、以下同之。

【一六】是字、三本には具に作る。

廣く流布せしめよ。是の如くに、大乘の法を信敬して、若しは自ら聽受し他をして聽受せしめ、若しは自ら讀誦し他をして讀誦せしめ、若しは自ら書寫し他をして書寫せしめ、若しは自ら施與し他をして施與せしめ、若しは自ら宣說し他をして宣說せしめて、思惟し修行して廣く流布せしめよ。若し器に非ざれば、應に自ら聽くべからず、他をして聽かしむる勿れ。乃至、廣く說かば、又た應に一切の惡法を遠離すべし。應に惡友を捨つべし。應に善友に親むべし。應に勤めて六到彼岸を修習すべし。應に數〻一切の惡業を懺悔すべし。應に所宜に隨つて勤めて正願を發すべし。若し能く是の如くにして、斯く是の處(ことは)りを有さば、現身に聲聞乘の器を成ずることを得、或は獨覺乘の種子を退せず、或は復た大乘の種子を退せず。是の故に、三乘は、皆な應に修學すべし。應に憍慢して妄りに大乘と號して聲聞・獨覺乘の法を誹毀すべからず。我れ、先には唯だ大乘の法器にして堅く修行する者の爲めに、是の如きの言を說けるなり。「唯だ大乘のみを修して、能く究竟を得よ」と。是の故に、今と昔との說は相違せざるなり』と。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯して、而も頌を說いて曰はく、

諸の大衆の前に對して、　金剛藏は、我に問ふ。
云何んが勤めて、　破戒の惡苾芻をも供養するや。
杜多の功德を失せる　癡惡見に持せらるる
非法器の汚道をも、　而も*譴罰するを聽さざるや。
復た彼に從つて、　三乘微妙の法の
眞の解脫の良藥を聞いて、　寂靜の涅槃に趣くことを、說きたまふや。
何が故に餘經には、　一大乘の解脫を言ひて、
二乘法を學ぶことを遮し、　今ま復た三乘を說きて、

諸の有情を[一七]哀愍して、
利益安樂なることを得せしむるや。
刹帝利、
苾芻を惱ますことを聽さず、
髪を剃り袈裟を[一八]被るは、
諸佛の等しく護持したまふ
諸の律儀を破ると雖も、
能く諸の惡見を捨てて
腐敗の良藥の如きは、
是の如く、律儀を破るも、
彼の苾芻は、
他の爲めに說法することを許す。
若し三寶に歸敬し、
能く衆惡を棄捨すること、
[二〇]羅刹渚に墮せる
各々獸の一毛を執りて
是の如く破戒の者も、
一信を因と爲すに由りて、
解脱の相を[二二]護るに由つて、
破戒の僧をも惱まさず、

邪惡の業を捨てて
願くは爲めに說いて疑を除きたまへ、と。
乃至は戌達羅を益せんが爲めに、
彼れの大罪に染まんことを恐るるなり。
諸の佛法の幢相なり。
解脱の道[一九]服なり。
永く解脱を遮せるには非ず。
當に速かに涅槃に趣くべし。
猶ほ能く衆病を療す。
亦た能く他の苦を滅す。
布薩羯磨に在ることをば聽さざるも、
倶に福を獲ること疑ひ無し。
我を稱して大師と爲さば、
諸の外道の衆に勝れり。
商衆の悉く驚惶するも、
海を渡りて難を免るることを得るが如し。
諸の惡邪見を離るることは、
煩惱の羅刹を[二一]脱す。
諸佛等しく護持したまひて、
能く諸の重惡を離る。

【一七】哀字、三本には、傷に作る。
【一八】被字、宮内省本には、披に作る。
【一九】服字、麗本には眼に作る。今は三本及び宮本に依る。
【二〇】商人、海に財寶を求めて、羅刹渚に漂著し、その羅刹國なるを知つて、遂に海馬の一毛にすがつて、難を免れしとの、その飛迦經說に依る。
【二一】脱字、明・元二本に、說に作る。
【二二】由護の二字、三本及び宮本には如是に作る。「是の如きの解脱相は云々」なり。

諸の多福を樂はん人、
等しく器・非器を護らば、
癡慢にして大乘と號するも、
尙ほ二乘の法に迷ふ、
譬へば眼を闕壞すれば、
是の如く信を闕壞すれば、
池河を飮む力無くして、
二乘の法を習はずんば、
先づ二乘の法を信ぜば、
信無くして大乘を誦すとも、
內には眞に斷見を懷きて
三業の罪を護らずして、
彼の人は、命終して後ち
故に應に機を觀じて說くべし、
憍慠にして[二三]慈悲無く、
智者は、應に知るべし。
聲聞・緣覺に非ず、
謟りて諸佛を[二四]毀謗せば、
持戒して喧鬧を樂ひ、
智者は應に當に了すべし、

眞の解脫を欣求せんに、
解脫を證するに難きこと無し。
彼れ智力有ること無し。
況んや能く大乘を解せんや。
衆の色を見ること能はざるが如し。
大乘を解くこと能はず。
詎んぞ能く大海を呑まん。
何ぞ能く大乘を學ばん。
方に能く大乘を信ぜん。
空言にして益する所無し。
妄りに自ら大乘と號し、
我が正法を壞亂す。
定んで無間の獄に墮せん。
器に非ざる者には爲すこと勿れ。
暴惡にして志し下劣なり。
是の斷見を懷く者は、
亦た大乘の器にも非ず。
必ず無間獄に墮せん。
法を慳みて苦惡を畏る、
是を聲聞乘と名づくと。

【二三】悲字、三本及び宮本には、慇に作る。

【二四】毀謗の二字、明本には、謗毀に作る。

施を樂んで生滅を觀じ、　常に獨靜處を欣ふ、
智者は應に當に了すべし、　是を獨覺乘と名づくと。
諸の善根を具足し、　慈悲の本を守護して、
常に樂んで物を攝利す。　是を名づけて大乘と爲す。
身命を捨てて戒を護り、　衆生を惱害せず、
精進にして[二五]空法を求む。　應に知るべし、是れ大乘なりと。
心は諸法を忍ぶに堪え、　善言にして祕悋すること無く、
法に於て常に欣樂す。　應に知るべし、是れ大乘なりと。
法器にも非法器にも、　利樂して心平等にして、
諸の世法に染まず。　應に知るべし、是れ大乘なりと。
是の故に、有智の者は、　普く敬つて三乘を説いて、
我が僧徒を惱まさずんば、　速かに無上覺を成ぜん。

*『復た次に。善男子よ、若し、眞善の刹帝利・眞善の婆羅門・眞善の宰官・眞善の居士・眞善の長者・眞善の沙門・眞善の*筏舍、眞善の戌達羅の、若しは男、若しは女、「十種の有依行輪」を成就せば、現身の中に於て、速かに能く聲聞乘の種を種[二六]殖して退出せざらしめ、或は現身に於て、聲聞乘の諸の聖法の器を成ず。獨覺乘・大乘の聖器には非ず。

*何等をか、十と爲す。一には、淨信を具足し、一切の善惡の業果有ることを信ず。二には、慚愧を具足し、一切の惡友・惡見を遠離す。三には、律儀に安住し、殺生乃至飲酒を遠離す。四には、慈心に安住し、一切の瞋恚・忿惱を遠離す。五には悲心に安住し、一切の羸弱の有情を救拔す。六には、喜心に安住し、一切の語の四惡業を遠離す。七には、捨心に安住し、一切の慳貪・嫉妬を遠離

【二五】空の理法なり。諸法皆空の眞理なり。

※二類の十種有依行輪　以下、北涼本卷六「剎利依止輪相品第八」に相當す。

【二六】殖字、三本及び宮本には、植に作る。以下同之。

※ (1)共の十有依行

す。八には、正歸依を具し、一切の妄りに吉凶を執することを遠離し、終に邪神・外道に歸依せず。九には、精進を具足し、堅固勇猛にして諸の善法を修す。十には、常に寂靜を樂ひて、法義を思求し、歡悅して倦むこと無し。

善男子よ。若し眞善の刹帝利王、乃至、眞善の戍達羅等の、若しは男若しは女、有りて、此の「十種の有依行[二七]輪」を成ぜば、現身の中に於て、速かに能く聲聞乘の種を種殖*して退失せざらしめ、或は現身に於て聲聞乘の所有の聖法を證して聲聞乘の諸の聖法の器を成ず。獨覺・大乘の聖法を證するには非ず、獨覺・大乘の聖器を成ずるには非ず。應に知るべし、此の中に獨覺も大乘も皆な是の如くに說くなり。善男子よ。是の如きの「十種の有依行輪」は、一切の聲聞・獨覺・菩薩・諸佛如來の、皆な同じく共に有す。

※善男子よ、復た「十種の有依行輪」有りて、聲聞に共ならず、唯だ獨覺・菩薩・如來のみ、皆な同じく共に有す。若し、眞善の刹帝利王、乃至、眞善の戍達羅等の、若しは男若しは女有りて、此の「十種の有依行輪」を成ぜば、現身の中に於て、速かに能く獨覺乘の種を種殖*して、退失せざらしめ、或は現身に於て獨覺乘の所有の聖法を證し、獨覺乘の諸の聖法の器を成ず。

何等をか、十と爲す。一には、淸淨の身語意の業を修行す。二には、慚愧を具足し、自身を厭患す。三には、五取蘊に於て、深く怖畏を生ず。四には、生死の河の極めて渡り難きと爲すを見る。五には、常に寂靜を樂ひて、諸の憒鬧を離る。六には、阿練若を樂ひ、他の失を譏らず。七には、諸根を守護して、心常に寂定なり。八には、善く緣起を觀じて、審さに因果を察す。九には、常に樂んで等持・靜慮を勤修す。十には、[二九]集起の法に於て、能く善く除滅す。

善男子よ。若し眞善の刹帝利王、乃至、眞善の戍達羅等の若しは男若しは女有りて、此の「十種の有依行輪」を成ぜば、現身の中に於て速かに能く獨覺乘の種を種殖*して退失せざらしめ、或は現身

【二七】輪字、宮本には論に作る。

※　(2) 不共の十有依行

【二八】種字、宮本には、輪行に作る。

【二九】Citta. 質多。心と譯す。阿賴耶識の名とす。一切の現行の法の、此の識にその種子を薰ずる義を集となし、此の識より一切の現行法を生ずる義を起となす。

に於て、獨覺乘の所有の聖法を證し、獨覺乘の諸の聖法の器を成ず。

善男子よ。是を一切の聲聞・獨覺の「有依行輪」と名づく。一切の聲聞、及び諸の獨覺は、此の輪に依止して、速かに能く三有の大海を超渡し、速かに能く涅槃の城に趣入す。

善男子よ。「有依行輪」とは、是れ何の句義ぞ。「有依」と言ふは、執取有り、我の依る所有り、攝取する所有り、繫屬する所有るに名づく。「行」とは、謂く[30]蘊行・界行・處行・有繫屬行なり。「輪」とは、謂く、教授・教誡の輪なり。轉輪王の乘る所の車輪、或は[31]首行輪の如し。

是の如きの一切の聲聞・獨覺は、此の輪に依止して、涅槃の道を求む。故に此の二種は大乘の器には非ず。所以は何ん。彼は下劣の行に依止するに由つての故に、大乘の器に非ず。彼は自らの諸の蘊行を執取して驚怖し厭患して、自ら一切の憂苦を解脫することを求め、一切の有情を解脫せしむることを求めずして、修行するに由つての故に、大乘の器に非ず。彼は自らの諸の界行に依止して驚怖し厭患して、自ら一切の憂苦を解脫せんことを求め、一切の有情を解脫せしむることを求めずして、修行するに由つての故に、大乘の器に非ず。彼は自らの諸の處行を攝受して驚怖し厭患して、自ら一切の憂苦を解脫することを求め、一切の有情を解脫せしむることを求めずして、修行するに由つての故に、大乘の器に非ず。彼れは有繫屬行に繫屬して、諸の有情に於て、攝受することを樂はず、慈悲有ること無く、繫屬有るに由つての故に、大乘の器に非ず。彼は他の具に衆苦を受くるを觀るも捨てて救はず、但だ自身の爲めにのみ解脫を求むるに由つての故に、大乘の器に非ず。彼は自らは諸の[32]煩惱首を斷ずるも、一切の有情の諸の煩惱首を斷除することを樂はざるに由つて、大乘の器に非ず。彼は[33]大乘輪を馭して菩提に趣くこと能はざるに由つての故に、大乘の器に非ず。彼は[34]大光輪に隨つて菩提に趣くこと能はざるに由つての故に、大乘の器に非ず。彼は獨一にして侶無く涅槃の城に入ることを[35]憙樂して、修行するに由つての故に、大乘の器に非ず。

【三〇】所謂蘊處界即ち五蘊、十八界、十二處をそれぞれ依因として起る處の行爲を因によりて蘊行界行處行と名づけ、それら蘊界處の諸行の有爲の側より總稱して有繫屬行といふなり。

【三一】轉輪王所乘の輪 Cakra に四種あること前註に出づ。首行輪は先導たる輪の意か。

【三二】煩惱を斷ずるに同じ。

【三三】北涼本には「大乘道輪」に作る。

【三四】北涼本には「梵音輪」に作る。

【三五】憙字、縮冊藏經には喜に作る。

*善男子よ。諸の衆生有りて、聲聞乘・獨覺乘の法に於て、未だ[36]劬勞を作して正勤に修學せず。是の如きの衆生は、根機未だ熟さず、根機下劣にして精進微少なり。若し、爲めに微妙甚深の大乘の正法を說くこと有らば、說聽の二人、倶に大罪を獲、亦た一切の諸佛に違逆すと爲す。

所以は何ん。若し、諸の衆生、聲聞乘・獨覺乘の法に於て、未だ劬勞を作して正勤に修學せず、根機未だ熟せず、根機下劣にして精進微少なるに、便ち、微妙甚深大乘の正法を聽受すれば、是の如きの衆生は、實に是れ愚癡にして自ら聰叡と謂ひ、[37]斷滅の邊に陷り、[38]顚狂の想に墜り、[39]無因論に執して、諸の業果に於て斷滅の想を生じ、一切の善作・惡作を撥無し、妄りに大乘を說いて我が法を壞亂し、非法を法と說き、法を非法と說き、實には沙門に非ざるをば是れ沙門なりと說き、實には沙門なるをば沙門に非ずと說き、實には毘奈耶に非らざるをば是れ毘奈耶なりと說き、實には毘奈耶なるをば毘奈耶に非ずと說き、愚癡・顚倒・憍慢・嫉妬・朋黨の心もて、大乘の法に於て稱讃擁衞して廣く流布せしめ、聲聞乘・獨覺乘の法に於て謗毀し障蔽して流布せしめず、如實に聲聞乘・或は獨覺乘・或は無上乘に依ること能はずして、俗を捨てゝ出家して[40]具足戒を受けて苾芻の性を成ずとも、亦た如實に一切の善法の因緣を修集せず、我が弟子の或は是れ法器、或は非法器にして、謂ゆる勤めて無學の行を修行するもの、乃至、最後の極果を證得せるもの、眞善の異生の持戒・破戒・無戒の者、の所に於て、種種に毀罵し[41]呵嘖し惱亂して、其の[42]衣鉢を奪ひて、諸の資生の具を受用することを聽さず、繫縛し禁閉す。

是の如きの一切の因果を撥無する[43]斷滅論の者は、人中に在りと雖も、實には是れ羅刹なり。當來世の無數の大劫に於て、人身を得ること難し。寧ろ地獄に在りて無量の苦を受くとも、人中に處して、斷滅の見を起さゞれ。是の如きの癡人は、久しからずして、便ち、當に支*體廢缺して多くの日夜に於て舌結ぼれて言へず、諸の苦毒を受けて、痛切忍び難く、命終して定んで無間地獄に生ずべ

※ **大乘妄執・機教不一致の排斥**

【三六】苦勞すること。沙門の義譯にも用ふ。

【三七】斷常の二邊見の一。斷滅の見。又は斷見ともいふ、諸法の因果相續を撥無するをいふ。

【三八】顚倒、倒見等に同じ。諸法の常樂我淨を偏執するもの。

【三九】因果相應を信ぜざる論。これに二種あり。即ち無因有果と無因無果なり。外道の論なり。

【四〇】具足戒、upasampadā. 涅槃に親近するが故に近圓とも譯す、出家僧尼の受くる所の戒にして、四分律によれば出家は二百五十戒、僧尼は三百五十五戒を擧ぐ。第三卷註六一具戒を見よ。

【四一】嘖字、三本及び宮本には、責に作る。

【四二】僧尼常用の具たる三衣と鐵鉢とを云ふなり。

【四三】斷滅論。uccheda-dṛṣṭi. 斷見又は斷滅見の事にして亦た無見ともいふ。即ち斷は斷無の義にして一切を否定し滅無を主張する論。

し。諸の惡趣に於て、輪轉往來して諸の苦惱を受け、救濟すべきこと難く、多くの百千劫にも人身に復すること難し。無量無數の劫を過ぎ已つて、還つて人身を得と雖も、而も五濁無佛の世界に生じて、生盲・生聾・瘖啞[四四]・無舌の種種の重病に常に嬰纏せられ、或は身[四五]矬醜にして、人見ることを憙ばず、言詞拙訥にして耳に惡しく聞かれ、心常に迷亂して解了する所無く、貧窮の家に生じて衆事闕乏し、善友に逢はずして惡友の行に隨ひ、樂んで惡業を作し好んで惡見に執して、無間の罪を造り、復た還つて重ねて無間地獄に墮し、惡趣に輪轉して、出期有ること難し。此の如きの愚癡なる斷滅論の者は、我が正法を壞亂し毀滅し、我が諸の弟子の持戒・破戒・及び無戒の者を逼惱し讁罰して、皆な諸の善品を安んじて修せざらしむ。是の因緣に由つて、多くの百千劫に、衆の惡趣に沒して、闇きより闇きに入りて、出期有ること難し。是の如きの衆生の所有の罪報は、皆な、未だ聲聞・獨覺乘の法を聽習することを求めずして、先づ微妙甚深の大乘の正法を聽習することを求むるが爲めなり。是の如きの愚癡の斷滅論の者は、不劣の人身すら尙ほ得べきこと難し、況んや當に能く賢聖の法器を成ずべけんや。尙ほ聲聞・獨覺の所證の涅槃を得ること能はず、況んや廣大甚深の無上正等菩提を得んや。是の如きの衆生の所有の過失は、皆な、未だ聲聞乘の法・獨覺上の法を學ばずして、先づ大乘に入るに由つてなり。

善男子よ。譬へば、坯瓶の諸の瑕隙多きが如し。油乳等を盛るとも、盡く皆な滲漏して、能盛・所盛の二、倶に壞失す。所以は何ん。器に失有るが故なり。是の如く、衆生も、聲聞乘・獨覺乘の法に於て、未だ劬勞を作して正勤に修學せず、根機未だ熟せず、根機下劣にして精進微少ならんに、若し、爲めに微妙甚深なる大乘の正法を說くこと有らば、說聽二人倶に大罪を獲、亦た一切の諸佛に違逆すと爲す。所有の過失は廣く說かば前の如し。譬へば、世間の庫藏の頹穴せば、諸の寶貨を置くも、多く散失すること有るが如し。是の如く、衆生も、二乘の法に於て譏毀して信ぜず、肯つて修學

【四四】啞字、三本には、瘂に作る。
【四五】矬字、三本及び宮本には痤に作る。

せずんば、爲めに大乘を說くとも如實に解せず。此に因つて、罪を造つて、輪轉すること窮り無し。譬へば、舟船の諸の泄漏多からんに、乘載して大海に泛ぶに任へざるが如し。是の如く、衆生も、多く慳嫉を懷いて、二乘の法に於て未だ曾つて修學せず、妄りに大乘と號して實には斷見を懷き、憍慢・諂曲にして泄漏の身と成り、一切智海に漂入するに堪へず。譬へば、人有りて其の目盲瞽にして種種の珍寶を呈示するに堪へざるが如し。是の如く、衆生も、憍慢放逸にして、空見に執著し、二乘を學ばざれば、盲にして慧目無く、無上大乘の功德の珍寶を顯示するに任へず。譬へば、人有りて其の身臭穢にして、種種の上妙の香を以て塗ると雖も、而も竟に身をして香潔ならしむること能はざるが如し。是の如く、衆生も、愚癡憍慢にして、二乘の法に於て勤修することを樂はず、殺生、乃至、邪見を斷ぜずんば、勤めて無上の大乘を聽受すと雖も、而も竟に甚深の法を解すること能はず。譬へば、石田の、好種を*殖ゑて勤めて營耨を加ふと雖も、終に果實無きが如し。是の如く、衆生も、二乘の法に於て、憍慢懈怠にして、勤修することを樂はず、五欲を貪求して、曾て厭倦すること無くんば、彼の身に於て大乘の種を*殖ゑて精進勤苦すと雖も、終に成ずる所無し。譬へば、甕器の、先づ毒藥を貯ふれば、[四六]小石蜜を投ずとも、食用するに任へざるが如し。是の如く、衆生も二乘の法に於て、肯つて修學せず、無因論に執すれば、爲に大乘を說くとも、終に自他の利益を成ずること能はず。譬へば、甕器に先づ石蜜を貯ふるも、少しく毒藥を投ずれば、食用に任へざるが如し。是の如く、衆生も、二乘の正法を精勤し修學すれども、猶ほ未だ成就せざれば、爲めに大乘を說くとも、二つ倶に壞失す。譬へば、人有りて癡狂心亂せば、爲めに音樂を作すとも了知すること能はざるが如し。是の如く、衆生も、二乘の法に於て、未だ曾つて修學せず、貪・瞋・癡等の猛利の煩惱其の心を擾亂して、無因及び斷滅の論に執著して、根機未だ熟せざれば、爲めに大乘を說きて多時を經ると雖も、而も解くこと能はず。譬へば、人有りて、甲冑を著せず。刀仗を持せずして、輙ち陣中に

【四六】石蜜、氷砂糖のこと。
無因論、因果を信ぜざるの論。

入れば、必ず傷害に遭ひて、諸の苦惱を受くるが如し。是の如く、衆生も、二乘の法に於て、未だ曾つて修學せずして、智慧狹劣にして根器未だ成せずんば、爲に大乘を說くも、必ず妄執を生じ、此に由つて展轉して惡を造ること窮り無し。是の如きの癡人は、久しからずして、便ち當に支體廢*缺して、多くの日夜に於て、舌を結んで言はず、諸の苦毒を受けて、痛切忍び難く、命終して定んで、無間地獄に生ずべし。諸の惡趣に於て輪轉往來すること、應に知るべし、前に次第に廣く說くが如しと。

*善男子よ。是の故に、智者は、先づ應に一切の衆の心を觀察して、然る後に說法すべし。先づ當に[四七](1)慈心(2)悲心(3)喜心(4)益心(5)不懈怠心(6)能忍受心(7)不憍慢心(8)不嫉妬心(9)不慳悋心[四八](10)等引定心を發起して、然る後に他の爲に、正法を宣說すべし。終に他の諸の衆生の類をして、所說の法を[四九]聞きて、生死に輪轉し、大險難に墮せしめざれ。是の故に、如來は、善く一切衆生の心相に達して、「無塵垢・無取の行輪」を以て、爲に正法を說く。大甲冑を具する一切の菩薩摩訶薩衆も、他の爲に法を說くこと亦復た是の如く、悲愍に由つての故に、諸の煩惱を斷滅せしめんが爲の故に、三有の海を超渡せしめんが爲の故に、諸の衆生の、三乘の中に於て、心の所樂に隨つて、隨つて一乘に趣きて、速かに圓滿ならしめんが爲の故に、爲に正法を說きて、終に其をして、生死に輪轉し、大險難に墮せしめざるなり。

*云何んが、「無塵垢行輪」と名づく。「無塵垢」とは、謂く、法を說くの時、蘊有りと爲さず、處有りと爲さず、界有りと爲さず、欲界有りと爲さず、色界有りと爲さず、無色界有りと爲さず、此世有りと爲さず、他世有りと爲さず、諸行有りと爲さず、受有りと爲さず、想有りと爲さず、思有りと爲さず、觸有りと爲さず、作意有りと爲さず、無明有りと爲さず、乃至、老死有りと爲さず、行及び不行有りと爲さゞるが故に、諸の衆生の爲に正法を宣說し、唯だ一切の諸の蘊・處・界、廣く說

※ 諸佛菩薩の二種行輪

【四七】北京本には「以慈悲喜捨心及利益心、以忍辱心不憍慢(放逸(心無嫉妬心無恡惜心、以修定心、以人說法」に作る。

【四八】等引とは、三摩呬多Samāhita.の譯なり。定名。定に於て心の專註する性に名づく。

【四九】聞字、宮本には離に作る。

※ (1)、無塵垢行輪
北京本には「斷一切行輪」に作る。

かば乃至は、行と不行とは皆な寂滅と爲すが故に、諸の衆生の爲めに正法を宣說す。是の義を以ての故に「無塵垢」と名づく。「行」とは、所謂、能く永く此に死し彼に生ずることを斷ぜんが爲に、諸の衆生の爲めに正法を宣說し、能く永く諸の蘊・處・界を斷ぜんが爲めに、廣く說かば乃至は、能く永く行と不行とを斷ぜんが爲に、諸の衆生の爲めに正法を宣說す。是を名づけて「行」と爲す。「輪」とは、所謂、滿月の光りの、淸凉にして礙るもの無く、虛空に遍[五〇]滿して、一切を照觸し、境界を障ぎること無きが如し。是の如く、如來及び諸菩薩の[五一]所有の神通・記說・敎誡の三種の勝輪は作用無礙にして諸世界に遍く、一切所化の衆生を利樂し、諸の衆生をして、歸趣を異ならさらしめ、一切の世間の衆生に共ならず、一切の聲聞・獨覺に共ならず、能く衆生をして生死の諸の苦惱の法を斷滅して、安樂の菩提涅槃を證得せしむ。是を名けて「輪」と爲し、是の如きを名けて、諸佛菩薩の「無塵垢行輪」と爲す。

＊云何んが名づけて「無取行輪」とす。謂く、諸法に於て、罣礙する所無きこと、猶し日光の普く一切を照すが如く、三乘の根器に其の所宜に隨つて、正法を宣說して、執著する所無し。謂く、諸の如來は、諸の衆生の爲めに是の如きの法を說きたまふこと、猶し虛空に差別の相無きが如く、無量定の遊戲自在の莊嚴の住持を以て、諸の衆生の爲めに微妙の法を說いて、執著する所無し。大甲冑を具せる一切の菩薩摩訶薩衆も、他の爲に說法すること亦復た是の如し。謂く、諸法は有に非ず、空に非ず、[五二]色空に卽するに非ず色空を離るゝにも非ず、乃至、識空に卽するに非ず識空を離るゝにも非ず、[五三]眼空に卽するに非ず眼空を離るゝにも非ず、乃至、意空に卽するに非ず意空を離るゝにも非ず、[五四]色空に卽するに非ず色空を離るゝにも非ず、乃至、法空に卽するに非ず法空を離るゝにも非ず、[五五]眼識空に卽するに非ず眼識空を離るゝにも非ず、乃至、意識空に卽するに非ず意識空を離るゝにも非ず、[五六]欲界空に卽するに非ず欲界空を離るゝにも非ず、乃至、虛空無邊處空に卽するに非ず

【五〇】 滿字、三本及び宮本には、諸に作り。「諸虛空に遍く、」とす。
【五一】 所謂る三示導、三神變を擧ぐるなり。第二卷註「一六九」等を見よ。

※ (2)、無取行輪

【五二】 以下、色受想行識の五蘊の空に就ていふ。
【五三】 以下、眼耳鼻舌身意の六根を擧ぐ。
【五四】 以下、色聲香味觸法の六境を擧ぐ、
【五五】 以下、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六識を擧ぐ。
【五六】 以下、欲界、色界、乃至、無色界の四空天(空無邊處識無邊處・無所有處・非想非非想處)の三界諸天を擧ぐ。

虚空無邊處空を離るゝにも非ず、識無邊處空に即するに非ず識無邊處空を離るゝにも非ず、無所有處空に即するに非ず無所有處空を離るゝにも非ず、非想非非想處空に即するに非ず非想非非想處空を離るゝにも非ず、[57]四念住空に即するに非ず四念住空を離るゝにも非ず、乃至、八支聖道空に即するに非ず八支聖道空を離るゝにも非ず、緣起法空に即するに非ず緣起法空を離るゝにも非ず、[58]三不護空に即するに非ず三不護空を離るゝにも非ず、四無所畏空に即するに非ず四無所畏空を離るゝにも非ず。十力空に即するに非ず十力空を離るゝにも非ず、十八不共法空に即するに非ず十八不共法空を離るゝにも非ず、[59]大慈・大悲・大喜・大捨空に即するに非ず大慈・大悲・大喜・大捨空を離るゝにも非ず、涅槃空に即するに非ず涅槃空を離るゝにも非ずと說く。是れを、如來及び諸の菩薩、諸の衆生の爲めに、[60]處中の微妙の正法を宣說すと名く。

善男子よ。是の如く如來は、諸の衆生の爲めに、「無塵垢行輪」を以て說法す。滿月の光り、清凉にして礙るもの無く、虚空に遍滿して一切を照觸して、境界を障ること無きが如し。乃至、廣說す。又、「無取行輪」を以て、微妙の法を說きて、一切の法に於て罣礙する所無きこと、猶し日光の普く一切を照すが如く、三乘の根器に其の所宜に隨つて正法を宣說して、執著する所無し。謂く、諸の如來は、諸の衆生の爲に、是の如きの法を說くこと、猶し虛空の差別相無きが如く、無量定の遊戲自在の莊嚴の住持を以て、諸の衆生の爲に微妙の法を說きて、執著する所無く、三乘に於て宜しきに隨つて趣入せしむ。大甲冑を具せる一切の菩薩摩訶薩衆の、他の爲に說法すること、亦復た是の如し。諸の衆生をして、此の最勝甚深の法を聞き已つて、三乘の中に於て、其の所樂に隨つて、隨つて一乘に趣き、種種の善根をして皆な成熟することを得せしめ、隨つて一乘に於て極めて善く安住し、終に其をして生死中に於て種種の惡不善の法を增長せしめず、涅槃に於て堅固にして退かざらしむ。

【五七】四念處ともいふ。身受心法の四の觀法をいふ。以下、四念住、四正斷又は四正勤、四神足、五根、五力、七覺、八聖道支の三十七道品を擧ぐるなり。

【五八】如來の身語意三業は純淨にして過を離れ防護を須ゐざるが故に、三不護と名く。之に活命淸淨を加て四不護ともいふ。第二卷註「一七八」を見よ。

【五九】四無量心なり。

【六〇】中道不偏なり。

※善男子よ。菩薩摩訶薩は、無量無數の衆生の生死[六一]流轉を斷ぜんが爲めに、他の爲に說法し、聲聞・獨覺は、但だ自ら生死流轉を斷ぜんが爲にのみ、他の爲に說法す。菩薩摩訶薩は、無量無數の衆生をして[六二]四瀑流を渡らしめんが爲に、他の爲に說法し、聲聞・獨覺は、但だ己れをして四瀑流を渡らしめんが爲にのみ、他の爲に說法す。菩薩摩訶薩は、無量無數の衆生の諸の煩惱の病を除かんが爲に、他の爲に說法し、聲聞・獨覺は但だ自ら諸の煩惱の病を除かんが爲にのみ、他の爲に說法す。菩薩摩訶薩は、衆生の諸蘊・煩惱の習氣の相續を斷じて盡く餘り無らしめむが爲めに、他の爲に說法し、聲聞・獨覺は、但だ自ら諸蘊・煩惱の習氣の相續して有餘不盡なるを斷ぜんが爲にのみ、他の爲に說法す。菩薩摩訶薩は、大悲の等流果を成ぜんが爲の故に、大悲を因と爲して、他の爲に說法し、聲聞・獨覺は大悲の等流果の爲ならさるの故に、大悲の因無くして他の爲に說法す。菩薩摩訶薩は、諸の衆生に於て顧念する所有りて、爲に說法し、聲聞・獨覺は、諸の衆生に於て顧念する所無くして、爲に說法す。菩薩摩訶薩は、一切の他の衆生の苦を息めむが爲に、他の爲に說法し、聲聞・獨覺は、但だ自ら己れの所有の苦を息めむが爲に、他の爲に說法す。菩薩摩訶薩は、一切の衆生の法味を滿ぜんが爲に、他の爲に說法し、聲聞・獨覺は、但だ自ら己身の法味を滿ぜんが爲に、他の爲に說法す。菩薩摩訶薩は、諸の衆生の勝れし[六三]法明を得ることの爲に、他の爲に說法し、聲聞・獨覺は、但だ自己に勝れし法明を得んが爲に、他の爲に說明す。

善男子よ。要を以て之を言はゞ、菩薩摩訶薩は、無量の律儀もて、普く一切の衆生の大無明闇・大怖畏事・一切の衰損を除滅して、大光明及び大名稱を得て、如實に一切智智を覺悟せしめんが爲に、他の爲に說法し、聲聞・獨覺は、少分の律儀もて、但だ自らの無明の闇を滅除して、小光明及び小名稱を得て、如實に少分の法智を覺悟せんが爲にのみ、他の爲に說法す。

善男子よ。聲聞・獨覺は、他に於て實に顧念を懷くこと有ること無く、他に於て實に悲惻を懷く

※　菩薩と二乘との相異

【六一】　流字、三本及び宮本には、輪に作る。

【六二】　瀑字、三本には、暴に作る。以下※同之。四瀑流とは、欲・有・見・無明の四。瀑流とは三界の煩惱の能く善品を漂流するが故に暴流と名く、煩惱の異名なり。第一卷註、第二卷註「一二一」を見よ。

【六三】　諸法の事相を照明し義理を分別するを法明といふ。

こと有ること無く、他に於て實に輕弄せざること有ること無く、他に於て實に利益すること有ること無く、他に於て實に拔濟を爲すこと有ることなく、他に於て實に薦擧を行ふこと有ること無く、他に於て實に稱歎せんと欲すること有ること無く、他に於て實に諂曲無くして讃美を行ふこと有ること無く、他に於て[六四]己身を顧みずして彼をして安樂ならしむること有ること無く、他に於て誤失を起さゞる身語意業有ること無し。善男子よ。大乘に住する者は、己れに於て實に顧念を懷くこと有ること無く、廣く說かば乃至は、他に於て誤失を發起する身語意業有ること無し。

【六三】身字、三本及び宮本には命に作る。

卷の第七

*有依行品　第四之三

*復た次に、善男子よ。諸の衆生有り。稟性暴惡言[一]辭麁獷なり。實には是れ愚癡にして聰明慢を懷き、殺生乃至邪見を斷ぜず。他の所得の利養と恭敬と世の稱譽する所とに於て深く嫉妬を生じ、常に自ら利養と恭敬と世の稱譽する所とを追求して曾つて厭倦すること無し。恒に自ら讃[二]譽して他を輕毀し、自ら身語意業を防護せず、常に樂んで一切の惡行を習行し、內[三]行險毒にして悲愍有ること無く、慚無く、愧無し。憙(この)んで他を觸惱し、諸の福田に於て好んで勝劣を簡び、我が法に歸する諸の出家人に於て、常に樂んで所有の瑕隙を伺求し、纔かに少相を得て未だ眞虛を審にせずして卽便ち輕毀し呵罵し譴罰す。其の心剛强・[四]佷戾・迷亂にして、常に憙んで諸の出家人を觸惱し、已れの過を省りみずして他の闕を譏らんことを念ふ。大乘の功德を讃歎するを聞きて意を發して趣求すと雖も、而も心は好んで諸の重惡事を爲し、曾つて未だ寂靜ならず。他を誑惑するが故に、大乘の法に於て、現に自ら聽聞し他をして聽聞せしめ、現に自ら讀誦し他をして讀誦せしむ。自ら薦擧して他を[五]陵伏するが故に、大乘の法に於て恭敬して讃美するも、自らは大乘の諸行の境界に於て、曾つて修學せず未だ悟解すること能はず。而も自ら稱して「我は是れ大乘なり」と號し、他人を誘勸して己の修學に附し、名利を規求して以て自ら活命す。譬へば、破戒・惡持の律師の如し。自らは尸羅を犯し、樂んで惡行を行ずるも、名利の爲めの故に、他人を誘勸して、勤めて毘奈耶藏を修學せしむ。

是の如きの諂曲・虛詐の衆生は、下賤の人身すら尙ほ當に得難かるべく、善趣・二乘の涅槃を退失す、況んや大乘を得るをや。終に是の處(ことは)り無くして、當に惡趣に墮して出期有ること難かるべし。

※ 北凉本卷六「剎利依止輪相品第八」後半に相當す。
※ 三乘共信の要
【一】辭字、三本及び宮內省本には、詞に作る。
【二】譽字、三本及宮內省本には擧に作る。
【三】行字、三本及び宮本には心に作る。
【四】佷字、三本及び宮內省本には很に作る。
【五】陵字、三本及び宮本には凌に作る。

諸の有智の人は、應に親近すべからず。而も慚愧無くして、大衆の中に於て、自ら大乘と號すること、師子吼の如し。名利の爲の故に、愚癡を誘誑して、已れに親附せしめて、共に朋黨を爲す。譬へば、驢有りて師子の皮を[六]被りて、便ち自ら謂ひて以て師子と爲さんに、人有りて、遙かに見て、眞の師子なりと謂ひ、鳴くに至るに及んで、已に皆な是れ驢なるを識り、咸く共に唾して、此れ師子に非ず、是れ不淨を食する眞に弊惡なる驢なりと言ひて、種種に呵叱して、皆な共に捨て去るが如し。

我は說く。是の如きの補特伽羅、常に樂んで十惡業道を習行し、一切の人天の種子を燒滅すれば、尙ほ聲聞・獨覺乘の法をすら退す。況んや大乘に於て、能く法器を成ぜんや。愚癡・憍慢にして自ら大乘と號し、他人を誑惑して利養を招集するは、譬へば、礙慢にして手足無き人、戰を興して大陣に伐入せんと欲するも、徒らに功効を設けて終に剋成すること無きが如し。詐りて大乘と號するも、亦復た是の如し。信手・戒足、一として全きこと有ること無く、自ら堪ふる所の行業を崖揆せずして、戰を興して煩惱の大陣を伐たんと欲するも、徒らに功効を設けて終に剋成すること無し。我は說く。是の人、三業を護らず、專ら惡行を行ひ、妄りに大乘と號し、實には三乘に於て皆な法器に非ずして、而も一切衆生の勇健にして堅牢なる煩惱の大陣を破壞せんと欲し、皆な一切の衆生に八支聖道を顯示して、無畏涅槃の城に入らしめんと欲するも、終に是の處り無し。

所以は何ん。

善男子よ。夫れ、大乘とは、第一の淸淨の律儀を受持し、第一の微妙の善行を修行し、第一の堅固の慚愧を具足し、後世の苦果を深く見て深く畏れ、所有の一切の惡法を遠離し、常に樂んで一切の善法を修行し、慈悲は常に一切の有情に遍くして恒に普く爲に利益し安樂することを作し、一切の有情の所有の厄難、生死の衆苦を救濟し度脫し、自身の所有の安樂を顧みずして、唯だ一切の有

【六】被字、麗本には披に作る。今は三本に依る。

情を安樂にせんことを求む。是の如きを名けて、大乘に住する者と爲す。

善男子よ。何等の相か有つて、聲聞乘と名くるや。謂く、諸の衆生、常に勤めて精進して正念に安住し、等引定を樂ひて諸の諂誑を離れ、業果を信知して五欲に著せず、世間の[七]八法も染する能はざる所にして、善く勇猛を修すること頭然を救ふが如く、常に審さに諸の蘊・界・處を諦觀し、恒に樂んで所有の聖種に安住す。此の相を具する者をば、聲聞乘と名く。是の如きの衆生も、尙ほ未だ獨覺乘の器をすら成ずる能はず、況んや復た能く大乘の法器を成ぜんや。

善男子よ。何等の相か有つて、獨覺乘と名くるや。謂く、諸の衆生、上の聲聞の一切の功德を具し、復た能く彼の五取蘊の中に於て、數數安住して無常觀に隨ひ、數數安住して生滅觀に隨ひて、普く一切の緣生法の中に於て、能く審さに皆な是れ滅法と諦觀す。此の相を具する者をば、獨覺乘と名く、是の如き衆生も、大乘の器には非ず。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯して、而して頌を說いて曰はく

若し眞善人の刹帝利、　乃至は眞善の戍達羅、
信等の十有依輪を修し、　聲聞乘に於て速かに器を成ず。
獨覺乘を求めて三業淨く、　慚愧を具足して諸蘊を怖れ、
過を知り靜を樂ひて空閑に住し、　念じて諸根を守りて心寂定なり。
善く緣起を觀じて靜慮を修し　諸の蘊界處を巧みに能く觀じ、
此の十行有依輪を具して、　勝乘の器を成じて有海を度るも、
共に三乘・二乘の輪を修し、　自ら煩惱の苦を解脫せんことを求めて、
有情を度せず、習を捨てざれば、　此の人は、倶に大乘の器に非ず。
愚癡・懈怠・根下劣にして、　二乘の法に於て勤修せず、

【七】八法、また八風ともいふ。世間に八事あり、能く人心を扇動すれば、又八風といふ。一に利、二に衰、三に毀、四に譽、五に稱、六に譏、七に苦、八に樂なり。智度論に、衰利毀譽稱譏苦樂の四順四違は能く物情を動かせば名けて八風と爲すといへり。思益經にも「利衰及び毀譽と。稱譏と苦樂との、此の如きの八法は常に世間を牽ゆ」と云へり。八字、宮本には、人に作る。北凉譯にても、世間八法となすも、その三本には、世間八苦法に作れり。

次句の頭然は、また頭燃に同じく、頭上の燃ゆることを云ひ、それを拂ふが如く、急ぐさまに形容す。

定んで大乘の輪を具すること能はず、故に大乘の廣大の器に非ず。
愚癡獨一にして解脱を求め、劣意下行にして慈悲無く、
斷見に樂著して惡趣に向ひ、正法を棄捨して非法を說き、
二乘を毀謗して律行を捨て、具足戒を受けて大乘と號し、
我が法を破亂して衆生を惑はし、此に由つて人身をも復た得ること難し。
我が法の諸賢聖を惱亂し、赤袈裟を被る人を[八]謫罰し、
呵罵し、衣鉢等を遮奪して、長時に人天の趣を退失す。
是の故に若し人身に復せんと欲せば、舌[九]疹を患はずして而も命を捨てよ。
常に諸佛に値遇せんと樂ふ者は、普く應に弘く三乘の法を護るべし。
三乘・最上乘を得んと欲せば、應に善く三乘の法を觀察すべし。
歡喜して他の爲に普く開示せば、當に成佛を得べきこと定んで疑ひ無し。
破戒[一〇]慳嫉にして憍慢を懷き、自ら讃め他を毀ちて大乘と號す、
此の人を捨離して、智者に依らば、定んで當に成佛して三界を度すべし。
三乘の器に於て所宜に從つて、慈悲もて爲に三乘の法を說き、
願に隨つて滿ぜしめて慳嫉無くんば、當に成佛を得べきこと定んで疑ひ無し。
蘊界處の皆な空寂なることを知り、依住する所無きこと虛空に譬へん。
法を說き等しく諸の有情を攝せば、當に妙覺無邊智を獲べし。
詐つて大乘と號して名利の爲にすれば、弊驢の師子皮を披るが如し。
我今ま普く一切の衆に告ぐ。若し疾く勝菩提を得んと欲せば、
當に善く十善業を修持すべし、我が法を護持して毀壞すること勿れ。

【八】謫字、三本及び宮本には、讁に作る。
【九】疹字、三本及び宮本には齡に作る。以下※同之。
【一〇】嫉字、三本及び宮本には、貪に作る。

『大德世尊よ。我等、本、獨覺乘の中に在りて、曾て善根を種ゑ、未だ獨覺乘を成熟する能はざるに、後ち復た大乘の法を說くを聞くに遇ひ、愛樂を生ずと雖も、而も解する能はず、愚冥にして疑惑し、便ち空見を生じ因果を撥無し、是の因緣に由つて、身語意の無量の罪業を造り、此の業緣に乘じて、無量劫に於て諸の惡趣に墮ち、種種の苦を受けて楚毒忍び難かりき。我等、今者、世尊の前に於て、此の經を說くを聞き、還りて正見を得、[一四]深心に慚愧し、發露して懺悔し、敢て覆藏せず、願はくは悉く除滅して、今より[一五]已往永く復た作さず、當來の所有の罪障を防護したまへ。唯だ願はくは、世尊よ。哀愍し攝受して、我等が罪をして皆な[一六]悉く銷滅せしめ、當來世に於て永く更に造らさらしめ給へ。唯だ願はくは、世尊よ。哀愍して、我等の當求の惡趣の苦報を濟拔したまへ。我等、今者、還りて、先に修集せし所の獨覺乘の行を受行せんことを願ふ。[一七]惟だ願はくは、世尊よ、哀愍し敎授したまへ、』と。

世尊、告げて曰はく、

『善い哉、善い哉。汝等、乃ち能く是の如く慚愧し發露して懺悔せる。我が法の中に於て、二種の人有りて、「無所犯」と名く、一には禀性專精にして本來犯さず。二には、犯し已つて慚愧し發露して懺悔す。此の二種の人は、我が法の中に於て、名けて「勇健にして淸淨を後たる者」と爲す、』と。

是に於て、世尊、其の所樂に隨ひて、方便して爲に、諸の緣起法を說き、彼の一切をして緣覺乘を修せしめ、漸次に圓滿して、皆な悉く[一八]幢相緣定を證得し、獨覺乘に於て不退轉を得たり。觀喜して佛を禮し、還りて本座に復す。

時に、衆會の中に、復た八十百千那庾多の衆生有り。曾て過去の諸佛の法中に於て、佛の敎、下至、一頌を毀謗し、是の因緣に由つて、諸の惡趣に墮ちて、衆ろの苦報を受け、初めて人身に復せるも、生れて便ち瘖[一九]瘂にして、常に舌*疼を患ひて、口言ふこと能はざりしが、此の經を說くを聞

【一四】心字、三本及び宮本には生に作る。

【一五】已字、三本及び宮本には以に作る。

【一六】悉字。三本及び宮本には。得に作る。

【一七】惟字。三本及び宮本には、唯に作る。以下※同之。

【一八】北涼本には「光明三昧」に作る。

【一九】瘂字、三本及び宮本には、𤸎に作る。以下※同之。

きて、還りて正見を得たり。卽ち座より起つて、佛足を頂禮し、世尊の前に於て、深く慚愧を生じ、至誠もて宿世の惡業を懺悔し、合掌し恭敬して世尊を瞻仰し、佛の神力の故に皆な悉く能く語れり。

爾の時、世尊、知りて而も故らに問ひたまふ。

『汝等、宿世に何の惡業をか作して、今ま衆中に處りて口語る能はざる』と。

彼の諸の人衆、倶時に佛に白す。中に於て、一類は、是の如きの言を作す。

『大德世尊よ。我等、往昔、[二〇]毘鉢尸如來の法中に於て、或は言ひて大乘の正法を毀謗し、或は言ひて獨覺乘の法を毀謗し、或は言ひて聲聞乘の法、下至、一頌を毀謗せり。我等、是の惡業障に由つての故に、九十一劫も生死に流轉し、常に地獄・傍生・餓鬼に處り、瘖瘂・無舌にして都て言ふこと能はず、諸の苦毒を受けて*痛切にして忍び難し。[二一]始めて、今世に於て、人身に復するを得たるも、而も猶ほ瘖瘂にして、常に舌疼を患ひ、佛の神力を蒙りて方に始めて能く言ひ、復た能く過去世よりの所有の因緣の諸の惡業障を憶念す』と。

復た一類有りて、是の如きの言を作す。

『大德世尊よ。我等、往昔、[二二]尸棄如來の法中に於て、或は言ひて大乘の正法を毀謗しき』と。各本緣に隨ひて、前に廣く說けるが如し。

復た一類有りて、是の如き言を作す。

『大德世尊よ。我等、往昔、[二三]毘攝浮如來の法中に於て、或は言ひて大乘の正法を毀謗しき』と。各本緣に隨ひて、前に廣く說けるが如し。

復た一類有りて、是の如きの言を作す。

『大德世尊よ。我等、往昔、[二四]羯洛迦孫駄如來の法中に於て、或は言ひて大乘の正法を毀謗しき』と。各本緣に隨ひて、前に廣說するが如し。

【二〇】 Vipaśyin. また毘婆尸、微鉢尸、鞞婆尸、毘婆沙、維衞に作り、勝觀、淨觀、種種觀、種種見などに譯し、或は底沙、弗沙ともいふ。過去七佛の第一佛。賢劫の九十一大劫前の出世なりといふ。

【二一】 始字。明本には如に作る。

【二二】 Śikhin. また式、式棄、式詰に作り、舊倶舍十三には刺那尸棄 Ratnaśikhin. に作り、持髻、寶髻、寶頂、螺髻等に譯す。過去七佛中の第二佛。賢劫前三十一劫時の出世二佛中の一なり。

【二三】 Viśvabhū. また毘舍浮、毘舍符、毘濕婆部、鞞恕婆附、毘恕沙付、毘舍婆、鞞舍、隨葉、浮舍に作る。一切勝、遍一切、一切有、遍勝、種種變現、廣生などに譯す。過去七佛の第三、賢劫前第三十一劫中の第二佛なり。

【二四】 Krakucchanda. 舊の拘留孫佛なり。過去七佛の第四、現在賢劫一千佛の最首なり。賢劫中第九減劫人壽六萬歲時の出世なり。第二卷註參。

『大德世尊よ。我等、本、獨覺乘の中に在りて、曾て善根を種ゑ、未だ獨覺乘を成熟する能はざるに、後ち復た大乘の法を說くを聞くに遇ひ、愛樂を生ずと雖も、而も解する能はず、愚冥にして疑惑し、便ち空見を生じ因果を撥無し、是の因緣に由つて、身語意の無量の罪業を造り、此の業緣に乘じて、無量劫に於て諸の惡趣に墮ち、種種の苦を受けて楚毒忍び難かりき。我等、今者、世尊の前に於て、此の經を說くを聞き、還りて正見を得、[一四]深心に慚愧し、發露して懺悔し、敢て覆藏せず、願はくは悉く除滅して、今より[一五]已往永く復た作さず、當來の所有の罪障を防護したまへ。唯だ願はくは、世尊よ。哀愍し攝受して、我等が罪をして皆な[一六]悉く銷滅せしめ、當來世に於て永く更に造らざらしめ給へ。唯だ願はくは、世尊よ。哀愍して、我等の當求の惡趣の苦報を濟拔したまへ。我等、今者、還りて、先に修集せし所の獨覺乘の行を受行せんことを願ふ。[一七]惟だ願はくは、世尊よ、哀愍し敎授したまへ。」と。

世尊、告げて曰はく、

『善い哉、善い哉。汝等、乃ち能く是の如く慚愧し發露して懺悔せる。我が法の中に於て、二種の人有りて、「無所犯」と名く、一には稟性專精にして本來犯さず。二には、犯し已つて慚愧し發露して懺悔す。此の二種の人は、我が法の中に於て、名けて「勇健にして淸淨を後たる者」と爲す。』と。

是に於て、世尊、其の所樂に隨ひて、方便して爲に、諸の緣起法を說き、彼の一切をして緣覺乘を修せしめ、漸次に圓滿して、皆な悉く[一八]幢相緣定を證得し、獨覺乘に於て不退轉を得たり。觀喜して佛を禮し、還りて本座に復す。

時に、衆會の中に、復た八十百千那庾多の衆生有り。曾て過去の諸佛の法中に於て、佛の敎、下至、一頌を毀謗し、是の因緣に由つて、諸の惡趣に墮ちて、衆ろの苦報を受け、初めて人身に復せるも、生れて便ち瘖[一九]啞にして、常に舌*瘂を患ひて、口言ふこと能はざりしが、此の經を說くを聞

【一四】心字、三本及び宮本には生に作る。
【一五】已字、三本及び宮本には以に作る。
【一六】悉字。三本及び宮本には。得に作る。
【一七】惟字。三本及び宮本には、唯に作る。以下※同之。
【一八】北涼本には「光明三昧」に作る。
【一九】啞字、三本及び宮本には、瘂に作る。以下※同之。

きて、還りて正見を得たり。即ち座より起つて、佛足を頂禮し、世尊の前に於て、深く慚愧を生じ、至誠もて宿世の惡業を懺悔し、合掌し恭敬して世尊を瞻仰し、佛の神力の故に皆な悉く能く語れり。

爾の時、世尊、知りて而も故らに問ひたまふ。

『汝等、宿世に何の惡業をか作して、今ま衆中に處りて口語る能はざる』と。

彼の諸の人衆、倶時に佛に白す。中に於て、一類は、是の如きの言を作す。

『大德世尊よ。我等、往昔、[二〇]毘鉢尸如來の法中に於て、或は言ひて大乘の正法を毀謗し、或は言ひて獨覺乘の法を毀謗し、或は言ひて聲聞乘の法、下至、一頌を毀謗せり。我等、是の惡業障に由つての故に、九十一劫も生死に流轉し、常に地獄・傍生・餓鬼に處り、瘖瘂・無舌にして都て言ふこと能はず、諸の苦毒を受けて痛切にして忍び難し。[二一]始めて、今世に於て、人身に復するを得たるも、而も猶ほ瘖瘂にして、常に舌疼を患ひ、佛の神力を蒙りて方に始めて能く言ひ、復た能く過去世よりの所有の因緣の諸の惡業障を憶念す、』と。

復た一類有りて、是の如きの言を作す。

『大德世尊よ。我等、往昔、[二二]尸棄如來の法中に於て、或は言ひて大乘の正法を毀謗しき』と。各本緣に隨ひて、前に廣く說けるが如し。

復た一類有りて、是の如き言を作す。

『大德世尊よ。我等、往昔、[二三]毘攝浮如來の法中に於て、或は言ひて大乘の正法を毀謗しき、』と。各本緣に隨ひて、前に廣く說けるが如し。

復た一類有りて、是の如きの言を作す。

『大德世尊よ。我等、往昔、[二四]羯洛迦孫駄如來の法中に於て、或は言ひて大乘の正法を毀謗しき』と。各本緣に隨ひて、前に廣說するが如し。

【二〇】 Vipaśpin. また毘婆尸、微鉢尸、鞞婆尸、毘婆沙、維衞に作り、勝觀、淨觀、種種觀、種種見などに譯し、或は底沙、弗沙ともいふ。過去七佛の第一佛。賢劫の九十一大劫前の出世なりといふ。

【二一】 始字。明本には如に作る。

【二二】 Śikhin. また式、式棄、式詰に作り、舊倶舍十三には刺那尸棄 Ratnaśikhin. に作り、持髻、寶髻、寶頂、螺髻等に譯す。過去七佛中の第二佛。賢劫前三十一劫時の出世二佛中の一なり。

【二三】 Viśvabhū. また毘舍浮、毘舍符、毘濕婆部、鞞恕婆附、毘恕沙付、毘舍婆、鞞舍、隨葉、浮舍に作る。一切勝、遍一切、一切有、遍勝、種種變現、廣生などに譯す。過去七佛の第三、賢劫前第三十一劫中の第二佛なり。

【二四】 Krakucchanda. 舊の拘留孫佛なり。過去七佛の第四、現在賢劫一千佛の最首なり。賢劫中第九減劫人壽六萬歲時の出世なり。第二卷註參。

復た一類有りて、是の如きの言を作す。

『大德世尊、我等往昔、[二五]羯諾迦牟尼如來法中に於て、或は言ひて大乘の正法を毀謗しき』と。各本緣に隨ひて前に廣說するが如し。

復た一類有りて是の如き言を作す。

『大德世尊よ。我等、往昔、[二六]迦葉波如來の法中に於て、或は言ひて大乘の正法を毀謗し、或は言ひて獨覺乘の法を毀謗し、或は言ひて聲聞乘の法、下至、一頌を毀謗せり。我等、是の惡業障に由つての故に、爾れより以來、生死に流轉し、常に地獄・傍生・餓鬼に處り、瘖瘂・無舌にして都て言ふこと能はず、諸の苦毒を受けて、痛切にして忍び難し。始めて今世に於て人身に復するを得たるも、[二七]而も猶し瘖瘂にして、常に舌疼を患へり。佛の神力を蒙りて方に始めて能く言ひ、復た能く過去世より所有の因緣の諸の惡業障を憶念す。我等、今者、世尊の前に於て、此の經を說くを聞きて、正見を獲得し、深心に慚愧し、發露して懺悔し、敢て覆藏せず。願はくは、悉く除滅し、今より以往永く復た作さず、當來の所有の罪障を防護したまへ。唯だ願はくは、世尊よ。哀愍し攝受して、我等が罪をして皆な悉く銷滅せしめ、當來の世に於て永く更に造らざらんことを。唯だ願はくは、世尊よ。我等を哀愍して、爲に正法を說きたまへ、』と。

世尊、告げて曰はく、

『善い哉、善い哉。汝等、乃ち能く是の如く慚愧し發露して懺悔せる。我が法の中に於て、二種の人有りて、「無所犯」と名く。一には、禀性專精にして本來犯さず。二には、犯し已つて、慚愧し發露して懺悔す。此の二種の人は、我が法中に於て、名けて「勇健にして清淨を得たる者」と爲す、』と。

是に於て世尊、其の所樂に隨つて、爲に、種種の正法を說きたまふ。各所宜に隨つて皆な利益を得、歡喜して佛を禮したてまつり、還りて本座に復す。

【二五】 Kanakamuni. また迦那伽牟尼、舊稱の拘那含佛。金寂、金仙人と譯す。賢劫中の第二佛。過去七佛中の第五なり。人壽三萬歲の時淸淨城に生る。第二卷註參。

【二六】 Kāśyapa. 舊に迦葉佛といふ。過去七佛中の第六佛なり。人壽二萬歲時の出現、釋迦佛の前の佛なり。

【二七】 元・明二本、共に、而字を却に作る。

時に、衆會の中に、復た無量の百千の聲聞及び無量の百千那庾多の菩薩有り。此の經を說くを聞き、昔造る所の諸の惡業障を憶ひ、卽ち座より起ちて佛足を頂禮したてまつり、世尊の前に於て、深く慚愧を生じ至誠もて懺悔し合掌し恭敬して、皆な佛に白して言さく。

『大德世尊よ。我等、昔し曾て無量の諸佛の法中に於て、』或は說言有り。『我等、彼の諸佛の弟子の、或は是れ法器或は非法器に於て、多く忿恨を行じて、呵罵し毀辱し譏刺し輕誚し種種に誹謗して善を隱し惡を揚げしを、憶ふ。我等此の惡業障に由つての故に、無量劫を經て諸の惡趣に墮して諸の重苦を受け楚毒忍び難かりき。後ち無量の諸佛に値遇することを得て、皆な曾て親近し承事し供養したてまつれり。又無量の菩薩摩訶薩衆に値遇することを得ても、亦た皆な親近し承事し供養せり。一一の佛・一一の菩薩摩訶薩の前に於て、皆な深く慚愧して、諸の惡業障を發露し懺悔して、一一の佛、一一の菩薩摩訶薩の所に於て、皆な無量の法門を聽受することを得て精勤に護持し、無量の難行苦行を修學せるも。彼の業障の餘り有りて未だ盡きざるに由つて、我等が輩をして未だ安樂涅槃を證得すること能はず、未だ三摩地門の殊勝の功德を證得すること能はざらしむ。我等、今者、世尊の前に於て、此の經を說くを聞き、復た深く慚愧し、發露して懺悔し、敢て覆藏せず。願はくは、悉く除滅して、今より以往永く復た作さず、當來の所有の罪障を防護したまへ。唯だ願はくは、世尊よ。哀愍し攝受して、我等が罪をして、皆な悉く除滅せしめて當來世に於ても永く更に造らさらしめ給へ。唯だ願はくは、世尊よ。哀愍して、我等の當來の惡趣の苦報を濟拔したまへ。我等、今者、佛の威力を承けて、願はく、は所樂に隨つて速かに能く安樂涅槃を證得させ給へ。或は能く三摩地門殊勝の功德を證得させ給へ。』と。

復た說言有り。『我等、彼の諸佛の弟子の或は是れ法器或は非法器に於て、麁惡の言を以て期尅し逼惱せり。我等、此の惡業障に由つての故に、無量劫を經て諸の惡趣に墮せり。』應に知るべし、前

に次第に廣く說けるが如し。

復た說言有り。『我等、彼の諸の佛弟子の或は是れ法器或は非法器に於て、打棒し傷害せり。我等、此の惡業障に由つての故に、無量劫を經て諸の惡趣に墮せり。』應に知るべし。前に次第に廣く說けるが如し。

復た說言有り。『我等、彼の諸佛の弟子の、或は是れ法器或は非法器に於て、衣鉢を侵奪せり。我等此の惡業障に由つての故に、無量劫を經て諸の惡趣に墮せり。』應に知るべし。前に次第に廣く說けるが如し。

復た說言有り。『我等、彼の諸佛の弟子の或は是れ法器或は非法器に於て、種種の資生の衆具を侵奪し、其の飮食を絕てり。我等、此の惡業障に由つての故に、無量劫を經て諸の惡趣に墮せり。』應に知るべし、前に次等に廣く說けるが如し。

復た說言有り。我等、彼の無量の諸佛の出家の弟子或は是れ法器或は非法器に於て、退けて還俗せしめて、其の袈裟を脫して、課稅し役使せり。我等、此の惡業障に由つての故に、無量劫を經て諸の惡趣に墮せり。』應に知るべし。前に次第に廣く說けるが如し。

復た說言有り。『我等、彼の無量の諸佛の出家の弟子の或は是れ法器或は非法器に於て、或は罪犯有るをも、或は罪犯無きをも、枷鎖し繫縛して牢獄に禁閉せり。我等、此の惡業障に由つての故に、無量劫を經て諸の惡趣に墮せり。』應に知るべし。前に次第に廣く說けるが如し。

復た說言有り。『我等彼の無量の諸佛の出家の弟子の或は是れ法器或は非法器に於て、輕慢心を起して、種種に觸惱して安樂ならさらしめぬ。我等、此の惡業障に由つての故に、無量劫を經て諸の重苦を受け楚毒忍び難し。後ち無量の諸佛に値遇することを得て、皆な曾て親近し承事し供養し、又無量の菩薩摩訶薩衆に値遇することを得ても、亦た皆な親近し承事し供養せり。一一の佛・一一

の菩薩摩訶薩の前に於て、皆な深く諸惡業障を慚愧して[二九]發露し懺悔して、一一の佛・一一の菩薩摩訶薩の所に於て、皆な無量の法門を聽受することを得て、精勤し護持して、無量の難行苦行を修學せるも、彼の業障の餘有りて未だ盡きざるに由つて、我等が輩をして未だ安樂涅槃を證得する能はず、未だ三摩地門の殊勝の功德を證得する能はざらしむ。我等、今者、世尊の前に於て、此の經を說くを聞き、復た深く慚愧して發露し懺悔して敢て覆藏せず。願はくは、悉く除滅して、今より[三〇]以往永く復た作さず、當來の所有の罪障を防護せんことを。唯だ願はくは、世尊よ。哀愍し攝受して、我等が罪をして皆な悉く消滅せしめ、當來世に於ても永く更に造らざらしめ給へ。唯だ願はくは、世尊よ。哀愍して、我等の當來の惡趣の苦報を濟拔したまはんことを。我等、今者、佛の神力を承けて、願はくは、所樂に隨つて速かに能く安樂涅槃を證得させ給へ、或は能く三摩地門の殊勝の功德を證得させ給へ』と。

是に於て、世尊、普く聲聞・菩薩衆に告げて曰はく、

『善い哉、善い哉　汝等、乃ち能く是の如く慚愧し發露して懺悔す。二種の人有りて、「無所犯」と名く。一には、稟性專精にして本來犯さず。二には、犯し已つて、慚愧し發露して懺悔す。此の二種の人は、我が法中に於て、名けて「勇健にして清淨を得たる者」と爲す。

*又、善男子よ。是の如く佛の弟子を惱亂せし罪を、前の所說の近無間罪に比せんに、彼は但だ名のみ有りて未だ罪と稱するに足らず、然るに、此の佛弟子を惱亂せる罪は、亦た前說の五無間罪に過ぐること、無量倍數せり。

所以は何ん。若し、諸の苾芻、禁戒を毀破し諸惡法を作すも、猶ほ能く無量の百千俱胝那庾多の衆生に善趣涅槃の無顚倒路を示導して、諸の衆生と與に大功德を作す、珍寶の伏藏すること、前に廣く說けるが如し。況んや、禁戒を持し善法を修むる者をや。是の義を以ての故に、若し、佛の弟

【二九】 元・明二本、共に、發字を已に作る。

【三〇】 以字、元・明二本倶に、已に作る。

※ 佛弟子惱亂の罪性

子衆の諸の出家人を惱亂すること有らば、當に知るべし、則ち三寶種を斷ずと爲し、亦則ち名けて一切衆生の法眼を挑壞すと爲し、亦た我れ久しく勤苦して所得せし正法を毀滅すと爲す。諸の衆生と與に大衰損を作すなり。是の故に、佛弟子を惱亂する罪は、前に所說の五無間罪に過ぐること、無量倍數せり。

是の故に、汝等、今ま我が前に於て至誠心を起して、增上に慚愧し慇懃に懇切に往昔造れる所の諸の惡業障を發露し懺悔せよ。我れ、今ま慈悲もて汝等を攝受し、惡業障をして漸く消滅を得せしめん。

此の佛土の大賢劫中に於て、千の如來有りて世に出現す。汝等、彼の諸の如來の前に於て、亦た當に至誠もて諸惡業障を發露し懺悔し、當來の所有の罪[三一]咎を防護すべし。此の[三二]賢劫の千如來中に於て、最後の如來を名けて[三三]盧至如來・應正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛・薄伽梵、と曰ひ、[三四]十號具足せり。汝等、彼の盧至佛の前に於て、亦た當に至誠もて諸の惡業障を發露し懺悔すべし。乃ち、滅盡を得て遺餘有ること無からん』と。

時に、諸の聲聞及び菩薩衆、俱時に佛に白さく、

『唯然り、世尊よ。「我等、審かに當に彼の最後の盧至佛の所に於て、正見を獲得して、諸の邪見を離るべし。諸の惡業障盡く滅して餘無く、一切の衆の苦惱を解脫せんには、若し我等をして大の賢劫に於て常に無間大地獄の中に處して恒に種種の極重の苦惱を受けしむるも、亦た能く堪忍せん。」』と。

世尊、告げて曰はく、

『善い哉、善い哉。汝等、乃ち能く是の如く勇猛なれ。汝等、此の堅固の精進、自誓の願力に由つて、定んで能く、彼の盧至佛の前に於て、宿世に集めし所の諸の惡業障皆な悉く消滅せん。定ん

【三一】咎字、宋本には、各に作る。

【三二】賢劫の千佛ともいふ。過現未の三住劫に各一千佛の出世ありとなす。賢劫の千佛とは、その住劫に二十增減ある中、初の八增減は無佛時にして、第九の減劫にて初めて拘留孫佛出世す。是れ千佛の第一にして亦た過去七佛の第一なり。次に釋迦牟尼佛に至る所謂過去七佛ありて、次で、第十增減の減劫に於て彌勒の出世あり、次に第十增減の減劫中に師子佛等の九百九十四佛あり、次に第二增減の增劫に於て、樓至佛出世し合計一千佛なりといふ。

【三三】Rucika. 樓至、樓由、盧遮佛等に作る。賢劫の千佛

で能く、增上の信敬を發起して、盧至如來に親近し供養せん。定んで能く永く、一切の煩惱を斷じて、阿羅漢を成ぜん。或は定んで能く、三摩地門の殊勝の功德を證せん。」と。

時に、諸の聲聞及び菩薩衆、歡喜して佛を禮したてまつり、還りて本座に復す。

爾の時、世尊、金剛藏菩薩摩訶薩に告げて言はく、

『善男子よ。我れ、佛眼を以て、諸の世間を觀じて、未來世を見るに、此の佛土の中に無量無數百千俱胝那庾多の刹帝利の旃荼羅・婆羅門の旃荼羅・宰官の旃荼羅・居士の旃荼羅・長者の旃荼羅・沙門の旃荼羅・[三五]茷舍の旃荼羅・戍達羅の旃荼羅の、若しは男女有りて、少しく善根を種ゑて人身を得ると雖も、而も惡友に隨ひて諸の邪見を起し、諸の惡行を造り、我が甚深無上の正法を壞し、我が所說に於て熾然有ること無くして、熾然の法を滅し、信樂を生ぜず。或は、我の聲聞乘と相應せる正法を說くに於て、誹謗し輕毀し障蔽し隱沒して流布せしめず。或は、我に歸する諸の出家人の若くは是れ法器若くは非法器に於て、多く忿恨を行じて、呵罵し毀辱し譏刺し輕誚し種々に誹謗して善を隱し惡を揚げ、廣く說かば、乃至、輕慢心を起して種々に觸惱せんに、是の如きの諸の人は、聖法器に非ず、自らは實には愚癡にして聰明慢を懷き、此より命終つて三惡趣に墮して、無量の種種の增上の猛利にして忍び難き苦毒を受け、無量の百千俱胝那庾多劫を經るも、人身に復し難きこと、前に廣く說けるが如し。善男子よ。是の如きの衆生は、寧ろ無間の大地獄の中に處りて、諸の重苦を受けんや。是の如きの鄙惡の人身を受けて、憍慢・貢高にして、惡友に隨順し、是の如きの惡不善の業を造作して、生死に流轉して濟度す可きこと難く、常に生死に處りて諸の苦惱を受けざらんや。』と。

*爾の時に、會中に無量無數の大慧の有情有り。座よりして起ちて佛足を頂禮したてまつり、合掌して佛に向ひて悲泣し墮涙して、佛に白して言さく、

中最後の佛なり。愛樂佛又は啼哭佛と譯す。

【三四】北涼本には、「樓至如來應供至眞等正覺」とす。今の十號には、應供を省けり。通常、十號とは、(1)如來 Tathāgata,(2)應供 Arhat.(3)正等覺、正遍知 Samyak-saṁbuddha.(4)明行足 Vidyācaraṇa-sampanna.(5)善逝 Sugata.(6)世間解 Lokavid.(7)無上士 Anuttara.(8)調御丈夫 Puruṣadamya-sārathi.(9)天人師 Śāstā-devamanuṣyānāṁ.(10)佛世尊 Buddha-lokanātha. 今は應供を省略し世尊を別開して、薄伽梵 Bhagavān.(有德)として擧げ、十に數ふ。時には無上士調御丈夫を一に世尊を別開して十とする場合もあり。

【三五】茷字、明本には筏に作る。

※ 懺悔誓願

『大德世尊よ。是の如きの世間の衆生を諦觀せば、皆な得難き人身を獲得すと雖も、而も正信を遠離し、正願を遠離し、正意樂を遠離し、正見を遠離し、善知識を遠離し、好時を遠離し、好處を遠離し、淨戒を遠離し、正定を遠離し、正慧を遠離せり。是の如きの衆生は、皆な得難き人身を獲得すと雖も、而も愚癡・憍慢力に由つての故に、前の所說の如き重罪を造作し、世尊の所說の正法を毀謗し、世尊の出家の弟子を觸惱せり。我等、今者、世尊の前に對して、至誠心を以て眞の誓願を發さん。我等、今ま生死に流轉し、乃至、未だ解脫し得ざるより已來、常に願はくは、是の如きの惡緣に遇はず、決定して是の如きの重罪を造らず、終に諸佛の正法を毀謗せず、亦た諸の出家人を觸惱せず、必ず衆生の法眼を損壞せず、亦た三寶の種性を斷滅せざらんことを惟だ願はくは、世尊よ。哀愍して我等の發する所の是の如きの誓願を攝受したまへ』と。

時に、衆會の中に、復た無量百千俱胝那庾多の聰慧の有情有り。座より起ちて、佛足を頂禮したてまつり、合掌し恭敬して佛に白して言さく、

『大德世尊よ。我等、今者、世尊の前に對して、至誠心を以て、眞の誓願を發さん。我等、今ま生死に流轉し、乃至、未だ法忍を得ざるより已來、其の中間に於て、常に願はくは、諸の諸王の位に處らざらんことを。常に願はくは、諸の宰官の位に處らざらんことを。常に願はくは、諸の國師の位に處らざらんことを。常に願はくは、城邑・聚落の鎭邏長の位に處らざらんことを。常に願はくは、諸の軍將の位に處らざらんことを。常に願はくは、諸の商主の位に處らざらんことを。常に願はくは、一切の祠祀・寺觀の主の位に處らざらんことを。常に願はくは、長者・居士・沙門の主の位に處らざらんことを。常に願はくは、諸の師長の位に處らざらんことを。常に願はくは、諸の家長の位に處らざらんことを。常に願はくは、斷事者の位に處らざらんことを。常に願はくは、乃至、一切の富貴の尊位に處らざらんことを。乃至、未だ法忍を得ざる已來、我等、若し、是の如き

の諸位に處れば、則ち佛法に於て惡因緣と名く。諸の重罪を造り、諸佛の所說の正法を毀謗し、諸佛の出家の弟子を觸惱し、必ず當に衆生の法眼を挑壞し、亦た三寶の種性を斷滅することを爲し、亦た無量の有情を損惱することを爲すべく、是に由つて、定んで當に、無間地獄に墮し、惡趣に輪轉し、出期有ること難かるべし。唯だ願はくは、世尊よ。哀愍して我等の發す所の是の如きの誓願を攝受したまへ』と。

爾の時、一切の諸來の大衆、天・龍・藥叉・健達縛・人・非人等、皆な座より起ちて、佛足を頂禮したてまつり、悲號感切にして涕淚交流し、合掌し恭敬して佛に白して言さく、

『大德世尊よ。我等、無始の生死已來、愚癡・憍慢にして、諸の惡業、或は身惡業・或は語惡業・或は意惡業を起して、自ら作し他をして見聞隨喜せしめたり。是の如きの諸の罪を、今ま佛の前に對して、皆な深く慚愧し、發露して懺悔し、敢て覆藏せず。願はくは、悉く除滅して、今より以往永く復た作さず、當來の所有の罪咎を防護せんことを。』第二、第三も亦た是の如く說く。『我等、至誠もて眞の誓願を發さん。今より、乃至、生死の後際まで、其の中間に於て、常に願はくは、諸の惡知識に逢はざらんことを。亦た願はくは、諸の惡因緣に遇はざらんことを。說へ、當に逢遇すべきも、願はくは、隨順せざらんことを。決定して、前の所說の如きの諸の惡罪業を造らざらんことを。我等をして長夜に苦を受けしむること勿れ。唯だ願はくは、世尊よ。哀愍して、我等の發す所の是の如きの誓願を攝受したまへ、』と。

※爾の時、世尊、普く一切の諸來の大衆に告げたまはく、

『善い哉、善い哉。汝等、乃ち能く、後世の苦に於て深く怖畏を見、發露し懺悔す。汝等、今者、生死の深廣の[三六]瀑流を度らんと欲し、無畏涅槃の城に入らんと欲して、是の如きの願を發せり、諸の善男子よ。「十種の法」有りて、能く菩薩摩訶薩等をして、「無罪・正路の法忍」を獲得せしむ。

※ **十種の法の功德**
即ち、身・受・想・行・識・此世・他世・欲界・色界・無色界に著せざる十法。

【三六】 瀑字、三本には、暴に作る。

何等をか、十と爲す。

(1)諸の善男子よ。若し、菩薩摩訶薩等、內身に著せず、外身に著せず、內外身に著せず、過去身に著せず、未來身に著せず、現在身に著せざるをば「第一の法」と名く。能く菩薩摩訶薩等をして「無罪・正路の法忍」を獲得せしむ。

(2)又、善男子よ。若し、諸の菩薩摩訶薩等、內受に著せず、外受に著せず、內外受に著せず、過去受に著せず、未來受に著せず、現在受に著せさるをば「第二の法」と名く、能く菩薩摩訶薩等をして、「無罪・正路の法忍」を獲得せしむ。

(3)又、善男子よ。若し、諸の菩薩摩訶薩等、內想に著せず、外想に著せず、內外想に藏せず、過去想に著せず、未來想に著せず、現在想に著せざるをば「第三の法」と名く。能く菩薩摩訶薩等をして、「無罪・正路の法忍」を獲得せしむ。

(4)又、善男子よ。若し、諸の菩薩摩訶薩等、內行に著せず、外行に著せず、內外行に著せず、過去行に著せず、未來行に著せず、現在行に著せさるをば「第四の法」と名く。能く菩薩摩訶薩等をして、「無罪・正路の法忍」を獲得ぜしむ。

(5)又、善男子よ。若し、諸の菩薩摩訶薩等、內識に著せず、外識に著せず、內外識に著せず、過去識に著せず、未來識に著せず、現在識に著せざるをば、「第五の法」と名く。能く菩薩摩訶薩等をして、「無罪・正路の法忍」を獲得せしむ。

(6)又、善男子よ。若し、諸の菩薩摩訶薩等、此世に著せさるをば、[三七]「第六の法」と名く。能く菩薩摩訶薩等をして、「無罪・正路の法忍」を獲得せしむ。

(7)又、善男子よ。若し、諸の菩薩摩訶薩等、他世に著せざるをば、「第七の法」と名く。能く菩薩摩訶薩等をして、「無罪・正路の法忍」を獲得せしむ。

【三七】第字、明本には、等に作る。

(8)又、善男子よ。若し、諸の菩薩摩訶薩等、欲界に著せざるをば、「第八の法」と名く。能く菩薩摩訶薩等をして、「無罪・正路の法忍」を獲得せしむ。

(9)又、善男子よ。若し、諸の菩薩摩訶薩等、色界に著せざるをば、「第九の法」と名く。能く菩薩摩訶薩等をして「無罪・正路の法忍」を獲得せしむ。

(10)又、善男子よ、若し、諸の菩薩摩訶薩等、無色界に著せざるをば、「第十の法」と名く。能く菩薩摩訶薩等をして、「無罪・正路の法忍」を獲得せしむ。

諸の善男子よ。是を「十法」と名く。能く菩薩摩訶薩等をして、「無罪・正路の法忍」を獲得せしむ。」と。

世尊、衆の爲に此法を說きたまふの時、衆會の中に於て、七十二百千倶胝の菩薩摩訶薩有りて、同時に[三八]無生法忍を證得し、復た八十四百千那庾多の菩薩有りて、[三九]隨順法忍を證得し、復た無量百千の聲聞有りて、乃至悉く一切の煩惱を斷じて阿羅漢を成じ、復た百千那庾多の衆生有りて、先に未だ發心せざるも、今ま無上正等覺心を發して、如來智に於て[四〇]不退地に住し、復た無量無數の衆生有りて、先に未だ發心せざるも、今に於て乃ち獨覺乘の心を發し、復た無量無數の衆生有りて、先に未だ發心せざるも、今に於て即ち聲聞乘の心を發せり。

爾の時、世尊、復た大衆に告げたまはく、

『若し、諸の有情、已に法忍を得ば、刹帝利の灌頂王位に處して、種々の勝大の財業を受用し、及び、種々の富貴の尊位に處せん。是れ我が許す所なり。餘の有情には非ず、』と』。

*金剛藏菩薩、佛に白して言さく、

『世尊よ。若し、諸の有情、未だ法忍を得ざれば、刹帝利の灌頂王位に於て、種々の勝大の財業を受用し、及び、餘の種々の富貴尊位には、定んで處するを許さざるや、亦た許すと爲す耶。』と。

【三八】無生忍ともいふ。即ち、無生無滅の眞如實相の理に安住して動かざるをいふ。初地或は七八九地に於て得べき悟なり。

【三九】慧心柔軟にして能く眞理に隨順するを、いふ。順忍。柔順忍ともいふ。仁王經には、四地より六地の間にて、菩提の道に順じて無生の果に趣向する位に名けて、順忍とす。

※　十善業道の功德

【四〇】阿鞞跋致 Avaivarti.即ち不退、不退轉の位地なり。通不退に諸種の差別あるも、通常、菩薩初地の位をいふ。

世尊、告げて曰はく、

『若し、諸の有情にして、未だ法忍を得ざるも、能く十善業道を受行し、亦た衆生に勸めて受學せしむる者有らば、我れ、亦た刹帝利の灌頂王位に處して種々の勝大の財業を受用するを聽許す。及び餘の種々の富貴の尊位をも。若し、諸の有情にして、未だ法忍を得ず、亦た十善業道を受行し及び衆生に勸めて勤めて受學せしめざるに、强勢力を以て刹帝利の灌頂を位に處し、種々の勝大の財業を受用し、及び種々の富貴の尊位に處せば、刹帝利の旃茶羅王、及び餘の種々の富貴尊位の旃茶羅王と名く。愚癡・憍慢にして、我が甚深の法を毀壞し擾亂して、正しき法燈を滅し、三寶の種を斷じ、我が出家の諸の弟子衆に於て種々に惱亂し捶拷し刑罰し、其の衣鉢・基業・財產を奪ひ、退けて還俗せしめ課稅して役使し、牢獄に繋閉し、乃至、命を斷じ、我が所說の微妙の法義に於て誹謗し輕毀し障蔽し隱沒して流布せしめず、窣堵波及び僧祇物を奪ふ。是の如きの諸の人は皆な當に無間地獄に墜墮して諸の劇苦を受け惡趣に輪轉して出期有ること難かるべし』と。

※ 三乘敬信の功徳

*時に金剛菩薩、復た佛に白して言さく。

『世尊よ。若し、諸の有情にして、未だ法忍を得ず、亦た十善業道を受行し及び衆生に勸めて勤めて受學せしめざるに、强勢力を以て刹帝利の灌頂王位に處して種々の勝大の財業を受用せん。及び餘の種々の富貴尊位にも。頗る別緣有りて方便の救を得ば、其をして無間地獄及び餘の惡趣に墮して諸の苦を受くるを免かれしむるや、不や』と。

世尊、告げて曰はく、

『亦た、別緣有りて、方便の救を得。謂く、衆生有りて、刹帝利の灌頂王位及び餘の種々の富貴の尊位に處して、復た未だ法忍・十善業道を成就し得ずと雖も、而も信力有りて、三寶を尊敬し、佛の所說の三乘相應の諸の出要の法、下至、一頌に於て、終に誹毀し障蔽し隱沒して流布せざらしめ

ず、佛の出家の諸の弟子衆の持戒・破戒・下至無戒なるも鬚髮を剃除し袈裟を被る者に於て、皆な惱亂し捶拷し謫罰して、衣鉢・基業・財産を侵奪し、退けて還俗せしめ、課税して役使し、牢獄に繫閉し、乃至、命を斷ずることをせず、亦た窣堵波物及び僧祇物を侵奪せず、諸の暴惡人を[四一]遮斷し催伏して、諸の出家衆を惱亂せしめず、三寶の財物を侵奪せしめず、佛の所說の三乘相應の諸の出要の法に於て恭敬し聽受して、既に聽受し已つて精進して[四二]法隨・法行を修行し、我が三乘の賢聖の弟子に於て恭敬し供養し親近し、承事し、大果の中に於て誓願堅固にして終に疑難・退屈の心無く、亦た常に勸導して衆坐を安置して大乘に於て信受し修學せしめば、此の刹帝利の旃荼羅王及び餘の種々の富貴尊位の旃荼羅王には、過去の諸佛も皆な共に、帝王の位及び餘の種々の富貴の尊位に處することを聽許す。復た種々の國土・城邑・聚落・勝大の財業を受用すと雖も、而も無間地獄及び餘の惡趣に墮するを免がれ得。我も亦た、帝王の位及び餘の種々の富貴の尊位に處することを聽許す。復た種々の國土・執邑・聚落を受用すと雖も、而も無間地獄及び諸惡趣に墮するを免がれ得。若し、諸の有情にして懺悔して一切の諸惡業障を除滅し餘無らしむるを得んと欲せば、我が所說の是の如きの法門に於て、當に勸めて修學すべし。廢忘せしむる勿れ。能く此の如く現前の大衆に慚愧して諸の惡業を懺悔する者有らば、先世に造る所の一切の惡業は、皆な鎖滅することを得て、遺餘有ること無からん。

【四一】制字、宮本には、製に作る。

【四二】二行の修行相を擧ぐ。即ち法隨とは、鈍根者の法に隨信する意にして、他の言教を信ずるに由つて隨つて修行する、所謂る隨信行又は信行を云ひ、法行とは、利根者の自ら法を思惟し法の如く修行する、所謂る隨法行又は法行を云ふなるべし、倶舍論には隨信隨法の二行とし、玄義には信法二行とせり。

卷の第八

※善業道品　第六之一[一]

※爾の時、金剛藏菩薩摩訶薩、復た、佛に白して言さく、

『大德世尊よ。菩薩摩訶薩、云何にしてか聲聞乘に於て誤失すること無きことを得、云何にしてか聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得ん。云何にしてか獨覺乘に於て誤失無きことを得。云何にしてか獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得ん。云何にしてか大乘に於て誤失無きことを得、云何にしてか大乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得ん。云何にしてか常に能く三寶の種[二]姓を熾然せしめん。云何にしてか諸の如來の出家の弟子の、若しは是れ法器、若しは非法器、下至、一切の片袈裟を被り鬚髮を剃る者に於て、誤失無きことを得ん。云何にしてか大乘の法に於て常に昇進することを得て退轉有ること無けん。云何にしてか利慧・勝論を常に増長することを得ん。云何にしてか一切の定・諸の陀羅尼・諸の忍・諸の地に於て、速かに自在を得て退轉有ること無けん。云何にしてか常に諸の善知識に値遇し隨順して行ずることを得ん。云何にしてか常に一切の佛及び諸の菩薩・聲聞の弟子を見ることを離せず、法を聞くを離せず、衆僧に親近し供養することを離せざるを得ん。云何にしてか諸の善根に於て常に精進して求めて心に厭足無けん。云何にしてか常に菩提の種々の行願に於て心に厭足無けん。』と。

爾の時、世尊、金剛藏菩薩摩訶薩に告げて言さく、

『善男子よ。菩薩摩訶薩の「十輪」有り。若し、菩薩摩訶薩にして、此の「十輪」を成ぜば、聲聞乘に於て誤失無きことを得、聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、獨覺乘に於て誤失無きことを得、獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、其の大乘に於て誤失無きことを得、其の大乘の補

※　北涼譯卷第七「遠離護殺縁品第九」前半に相當す。

【一】　之一の二字、明本に從って加ふ。他本、之を缺く。

※　菩薩摩訶薩の十輪

【二】　姓字、三本及び宮本共に、性に作る以下同之。

特伽羅に於て誤失無きことを得、常に能く三寶の種姓を燃然にし、諸の如來の出家弟の子の若しは是れ法器、若しは非法器、下至、一切の片裂裟を被り鬚髮を剃る者に於て誤失無きことを得、大乘の法に於て、常に昇進を得て退轉有ること無く、利慧・勝福を常に增長すること得、一切定・諸陀羅尼・諸忍・諸地に於て速かに自在を得て退轉有ること無く、常に諸の善知識に値遇し隨順して行ずることを得、常に一切の佛及び諸の菩薩・聲聞の弟子を見ることを離れず、法を聞くを離れず、衆僧に親近し供養するを離せざることを得、諸の善根に於て常に精進し求めて心に厭足無く、常に菩提の種々の行願に於て心に厭足無く、常に一切の先に造作せる所の惡不善の業に於て [三] 聖金剛堅利法智を以て推壞し散滅して遺餘無からしめて果報を受けず、更に新に惡不善の業を造らず、心に厭倦することなく、速かに能く無上の法輪を證得し常に勤めて [四] 七覺分寶を修習して、心に厭倦することなく、常に能く一切の衆生の諸の煩惱の病を除滅して、心に厭倦することなく、一切の衆生、依止し存活せん。

善男子よ。轉輪王の、七寶を具足し、凡そ行動する所に輪寶前に導き、餘寶後に隨ひて四大洲を巡り、普く能く一切の衆生の身心の濁穢を除滅し、普く能く一切の衆生の身心の安樂を生長するが如し。菩薩摩訶薩も、亦復た是の如し。「十輪」を成就せば、聲聞乘に於て誤失無きことを得、廣く說かば、乃至は一切の衆生、依止し存活せん。

善男子よ。大車輅の、四輪を [五] 具足し、多くの人之に乘りて大路を遊行せんに、其の路上に於る土塊・瓦礫・草木・根莖・枝葉・華果、輪の爲めに輾ぜられて皆な悉く摧壞して、受用に任ぜざるが如し。菩薩摩訶薩も、亦復た是の如く、十輪を成就せば、悉く能く諸の [六] 煩惱障、諸の [七] 有情障、一切の [八] 法障を摧壞して報を受けざらしめん。

善男子よ。利劍輪の、纔かに一投擊にして能く怨敵の首及び [九] 支節を斬りて勢用無からしむるが

【三】 北凉本には「賢聖金剛地智」に作る。
【四】 北凉本には「七覺意寶」に作る。七覺分とは、七等覺支（第二卷註一四〇）に同じ。念・擇法・精進・喜・輕・安・定・捨の七なり。
【五】 具字、明本には、其に作る。
【六】 修道の五障の一。諸の根本煩惱は、よく淨心を障蓋して、道機を妨害して佛法に入らしめざれば是を煩惱障と名く。
【七】 諸の有情、惡友となりて、淨心を障礙し道機を妨害して佛法に入らしめず。
【八】 五障の一。先世の障法等の緣を以ての故に、善友に遇はず、正法を聽くを得ざれば、法障といふ。
【九】 支字、三本及び宮本には、肢に作る、以下同之。

如し。菩薩摩訶薩も亦復た是の如く、「十輪」を成就せば、能く一切の五趣の牢獄の生死の大苦を破り、永く一切の煩惱の惡業を斷じて、報を受けざらしめん。

善男子よ、火災起り五日出づるの時には。四大洲に遍き一切の河海水界の津潤も枯竭せずといふこと無きが如し。菩薩摩訶薩も、亦復た〔一〕、是の如く、「十輪」を成就せば、一切の四因・諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障の、苦報の根本、悉く皆な枯竭せん。

善男子よ。風災起り四方に猛風俱時に頓發すれば、一切の世界の大小の諸山及び諸大地の悉く皆な散滅するが如し。菩薩摩訶薩も、亦復た是の如く、十輪を成就せば、世間の四倒・憍慢の諸山も崩壞せざる無く、一切の衆生の諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障の、苦報の根本、悉く皆な散滅せん。

善男子よ。師子王の吼聲の、一たび發すれば、一切の禽獸悉く皆な驚怖し飛落し走伏して敢て輒（たやす）く動くこと無きが如し。菩薩摩訶薩も、亦復た是の如く、十輪を成就せば、法音一たび震へば、乃至、一切の外道・異學・惡知識等悉く皆な驚怖して言辯を忘失して敢て酬抗すること無けん。

善男子よ。天帝釋の阿素洛と將に戰ひを欲せんとするの時、天軍圍遶して手に金剛を執りて陣敵に奔趣すれば、諸の阿素洛驚怖し退散するが如し。菩薩摩訶薩も、亦復た是の如く、十輪を成就せば、一切の倒見の外道・異學・惡知識等驚怖し退散せん。

善男子よ。如意珠の、高幢上に置くに、能く種々の上妙の珍寶を雨ふらして、一切の貧乏の衆生に給施するが如し。菩薩摩訶薩も、亦復た是の如く、十輪を成就せば、淨戒幢に處して、大法雨を雨ふらして、一切の無量の衆生に給施せん。

善男子よ。闇き夜分の世間の幽冥にして都て所見なく正道を迷失せんに、滿月出で已れば、諸闇皆な除かれ、諸の失道者も皆な正路を見るが如し。菩薩摩訶薩も、亦復た是の如く、十輪を成就せ

〔一〕北涼譯には「是の如く菩薩も、十輪を成就すれば、能く衆生を爲に、諸業障及び障法等の罪を除きて衆苦の根本一切消滅す」に作る。四因は煩惱、有情、法、業報の四か。

ば、若し諸の衆生、無明昏闇にして、此に由つて八支聖道を迷失せんに、菩薩、其の爲に正法を宣說して、無明の闇を除き、法の光明を生じて、八支聖道を開示し顯現して、諸漏を斷じ諸の苦際を盡くさしめん。

善男子よ。大日殿の、世間に出現して、一切の苗稼悉く皆な增長し、一切の花葉悉く皆な敷榮し、一切の臭穢悉く皆な除歇し、諸穀・果藥悉く皆な成熟し、雪山〔一〕銷流し、諸河充溢して、漸次に轉往して大海に滿つるが如し。菩薩摩訶薩も亦復た是の如く、十輪を成就して依止し增上せば、布施・調伏・寂靜・尸羅・安忍・正勤・靜慮・般若・方便・慈悲・辯才の功德皆な悉く熾盛にして、諸の衆生の爲に、正法を宣說し、法の威光に由りて、諸の衆生の種々の增上の善根、苗稼をして悉く皆な增長し、種々の增上の妙行の華葉をして悉く皆な敷榮し、種々の煩惱・惡業・惡行をして悉く皆な除歇し、善趣涅槃の諸穀・果藥をして悉く皆な成熟し、邪見慢山をして悉く皆な銷流し、種々の〔二〕正信・戒・聞・捨・慧及び諸の定の河をして充溢せずといふこと無く、漸次に大涅槃海に盈滿せしめ、諸の有情をして意の所樂に隨ひ無畏涅槃の城に趣入せしむ。

善男子よ。云何んが菩薩摩訶薩の十輪と名くるや。

善男子よ。此の十輪とは、餘法に非る也。當に知るべし。卽ち是れ、十善業道なり。是の如き十種の輪を成就する故に、菩薩摩訶薩と名くるを得る也。一切惡に於て皆な能く解脫し、一切の善法を意に隨ひて成就し、速かに能く大涅槃海に盈滿し、大善巧方便の智光を以て一切の衆生の類を成熟し、皆な利益安樂なることを獲得せしむ。

所以は何かん。善男子よ。過去の一切の諸佛世尊は、皆な悉く十惡業道を遠離して、皆な悉く是の如きの十善業道の所得の果報を稱揚し讚歎したまふ。是の故に、若し能く此の所說の十善業道に於て、隨ひて一を守護し、乃至、命終るまで究竟じて犯すこと無くんば、少ず一切の殊勝の果報を

【一】銷字、三本には、消に作る。以下※同之。

【二】信・戒・慚・愧・聞・捨・慧の七聖財に就て、その五を擧ぐ。

獲んこと、前後に說くが如し。

*善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、能く形壽を盡して殺生を遠離せば、即ち是れ、一切の衆生に無驚無怖を施與し、諸の衆生をして憂苦を生ぜずして毛竪の畏を離れしめ、此に由つて善根速に成熟することを得。所有の前際に五趣に輪轉し生死の河に沒して、殺生に因るが故に身語意の諸の[一三]惡業障・諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障・諸の[一四]壽命障を造り、自ら作し他をして見聞隨喜せしめしも、此の「殺生を遠離するの輪」に由つての故に、皆な悉く輾壞し摧滅して餘すこと無くして果報を受けず。現身中に於て諸人天等皆な共に親愛して猜慮[一五]有ること無く、身心安樂に壽命長遠なり。將に命を終らんとするの時も、身心憂苦の爲に逼切せられず、所愛の妻子・眷屬に圍遶せられ、命終の時に臨んで、怖るべき剡魔王の使を見ず、唯だ可意の成調善法・具戒富德の眞實の福田を見て善知識と爲して身心歡悅し、深く敬信を生じ。既に命終し已つて還りて人中に生ずれば諸根圓滿し*支體具足して、所生の處に隨つて無病長壽に端正聰明にして、安穩快樂なり。復た可意の成調善法・具戒富德の眞實の福田に遇ひて、善知識と爲し、彼れに依つて殺生を離るゝ法を修學して、能く一切の惡不善の法を斷じ、能く一切の殊勝の善法を成じ、能く一切の大乘の法義を求め、能く一切の菩薩の願行を修し、漸次に深廣の智海に趣入し、乃至、無上菩提を證得す。所居の佛土は、諸の兵器を離れ、怨害鬪戰の名有ること無く、諸の怖畏を絕ちて安穩快樂にして、一切の無病長壽の有情其の國に來生し、如來は、自らの壽は無量無邊なれども諸の有情の爲に如應に說法したまひ、般涅槃後も、正法久しく住し、無量の有情を利益し安樂にす。

善男子よ。是を、菩薩摩訶薩の第一の「殺生を遠離するの輪」と名くるなり。菩薩摩訶薩は、此の輪を成就するが故に、聲聞乘に於て誤失無きことを得、聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、獨覺乘に於て誤失無きこと得、獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、其の大乘に於て誤

※　第一、遠離殺生輪

【一三】以下、修道の五障（煩惱・業・生・法・所知）を擧ぐ。惡業障とは、過去に犯せる重罪乃至誹謗正法等の先業の障り、除かずして、種種の難ありて佛法に入るを得ざるなり。

【一四】前に殺生を犯すに依り、壽命の障りありて、正法に入り得ざるとなり。

【一五】有字、三本及び宮本には所に作る。

失無きことを得、其の大乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、常に能く三寶の種性を熾然し、諸の如來の出家の弟子の若しは是れ法器若しは非法器、下至、一切の片袈裟を被り鬚髮を剃る者に於て誤失無きことを得、大乘の法に於て常に昇進することを得て退轉有ること無く、利慧・勝福は常に增長することを得、一切定・諸陀羅尼・諸忍・諸地に於て速かに自在を得て退轉有ること無く、常に諸の善知識に値遇し隨順して行ずることを得、常に一切の佛及び諸の菩薩・聲聞の弟子を見るを離れず、法を聞くを離れず、衆僧に親近し供養するを離れざること得、諸の善根に於て常に精進して求めて、心に厭足すること無く、常に菩提の種々の行願に於て心に厭足すること無し。得る所の果報[二六]廣くは前に說くが如し。

*復た次に、善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、能く形壽を盡して、不與取を離せば、即ち是れ、一切の衆生に無驚無怖を施與して、熱惱有ること無く、亦た擾動無く、自らの得る所の如法の財利に於て喜足して住し、終に非法の財利を希求せず、此に由つて、善根速かに成熟することを得。所有の前際に五趣に輪轉し生死の河に沒して、不與取に因つて、身語意の諸の惡業障・諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障・諸の[二七]財寶障を造りて、自ら作し他をして見聞隨喜せしめしも、此の「不與取を遠離するの輪」に由つて、皆な悉く輾壞し摧滅して餘すこと無くして、果報を受けず。現身の中に於て諸の人天等皆な共に親愛して猜慮せらるること無く、身心安樂にして、財寶具足す。將に命終らんとするの時も、身心憂苦の爲に逼切せられず、所愛の妻子・眷屬に圍遶せられ、命終の時に臨んで、可怖の剡魔王の使を見ず、唯だ可意の或調善法・具戒富德の眞實の福田を見て善知識と爲し、身心歡悅し深く敬信を生ず。既に命終し已つて還りて人中に生じて、諸根圓滿し支*體具足し、所生の處に隨ひて大財寶を具し端正聰明にして安穩快樂なり。五家と與に諸の財寶を共にせず。復た、可意の成調善法具戒富德の眞實の福田に遭ひて善知識と爲し、彼れに依つて修學して不與取を離れて、

【二六】廣如前說、三本及び宮本には「廣說如前」とす。

※ 第二、遠離不與取輪

【二七】前に不與取を守らざりし障に依て、財寶のために心を迷惑して、正法に入るをさまたぐるなり。

能く一切の惡不善の法を斷じ、能く一切の殊勝の善法を成じ、能く一切の大乘の法義を求め、能く一切の菩薩の願行を修し、漸次に深廣の智海に趣入し、乃至、無上の菩提を證得せん。所居の佛土は、衆寶もて莊嚴し、寶樹・寶池・寶臺殿等充備せざること無く、我我所を離れて攝受せらるること無く、一切具足して嚴飾せる有情、其の國に來生せん。如來は、自身の壽命は無量なるも、諸の有情の爲に如應に說法したまひ、般涅槃の後も正法久しく住して、無量の有情を利益し安樂にす。

善男子よ。是を菩薩摩訶薩の第二の「不與取を遠離するの輪」と名く。菩薩摩訶薩は、此輪を成就するが故に、聲聞乘に於て誤失無きことを得、聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、獨覺乘に於て誤失無きことを得、獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、其の大乘に於て誤失無きことを得、其の大乘の補特伽羅に於て誤失無きを得、常に能く*三寶の種姓を熾然にして、諸の如來の出家の弟子の若しは是れ法器若しは非法器、下至、一切の片袈裟を被り鬚髮を剃る者に於て誤失無きことを得、大乘の法に於て常に昇進すること得て退轉有ること無く、利慧・勝福常に增長することを得て、一切定・諸陀羅尼・諸忍・諸地に於て速かに自在を得て退轉有ること無く、常に諸の善知識に値遇し隨順して行ずることを得、常に一切の佛及び諸の菩薩・聲聞の弟子を見るを離れず、法を聞くを離れず、衆僧に親近し供養するを離れざることを得、諸の善根に於て常に精進し求めて心に厭足無く、常に菩提の種々の行願に於て心に厭足無し。所得の果報、廣く說くこと前の如し。

*復た次に、善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、能く形壽を盡して欲邪行を離せば、即ち是れ、欲流に漂はさるる一切の衆生に無驚・無怖・無嫉・無害を施與して、熱惱有ること無く、亦た擾動すること無く、己が妻室に於て喜足して住して、終に非法の色欲を希求せず、是に由つて善根速かに成熟することを得ん。所有の前際に、五趣に輪轉し生死の河に沒して、欲邪行に因つて、身語意の諸の惡業障・諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障・諸の[一八]室家障を造り、自ら作し他をして見聞隨喜せしめし

第三、遠離欲邪行輪

【一八】邪淫を犯せしにより、妻室の障りあつて、正法に入り難きをいふ。

も、此の「欲邪行を遠離するの輪」に由つて皆な悉く輾壞し摧滅して餘すこと無くして、果報を受けず。現身の中に於て諸の人天等皆な共に親愛して猜慮せらるること無く、身心安樂にして妻室貞良なり。將に命終らんとするの時も、身心憂苦の爲に逼切せられず、所愛の妻子・眷屬に闕遠せられ、命終の時に臨んで、可怖の剡魔王の使を見ず、唯だ可意の成調善法・具戒富德の眞實の福田を見て、善知識と爲し、身心歡悅して深く敬信を生ず。既に命終し已つて還りて人中に生じて、諸根圓*滿し支體具足して、所生の處に隨つて諸の眷屬を具し端正聰明、安隱快樂にして、復た可意の成調善法・具戒富德の眞實の福田に遇ひて善知識と爲し、彼に依つて修學して欲邪行を離れて、能く一切の惡不善の法を斷じ、能く一切の殊勝の善法を成じ、能く一切の大乘の法義を求め、能く一切の菩薩の願行を修め、漸次に深廣の智海に趣入し、乃至、無上菩提を證得す。所居の佛土は、諸の女人無くして諸の婬欲を離れ、第一の梵行を具足せる有情、其國に來生し、一切の有情、皆な化生を受けて胞胎・臭穢・不淨に處せず。如來自身の壽命は、無量なるも、諸の有情の爲に如應に說法したまひ、般涅槃の後も正法久しく住して無量の有情を利益し安樂にす。

　善男子よ。是を菩薩摩訶薩の第三の「欲邪行を遠離するの輪」と名く。菩薩摩訶薩は、此輪を成就するが故に、聲聞乘に於て誤失無きことを得、聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、獨覺乘に於て誤失無きことを得、獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、其の大乘に於て誤失無きことを得、其の大乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、常に能く三寶の種姓*を熾然にして、諸の如來の出家の弟子の若しは是れ法器若しは非法器、下至、一切の片袈裟を被り鬚髮を剃る者に於て誤失無きことを得、大乘の法に於て常に昇進することを得て退轉有ること無く、利慧、勝福を常に增長すること得、一切定・諸陀羅尼・諸忍・諸地に於て速かに自在を得て退轉有ること無く、常に諸の善知識に値遇し隨順して行ずることを得、常に一切の佛及び諸の菩薩・聲聞の弟子を見ることを離れ

ず、法を聞くことを離れず、衆僧に親近し供養することを離れざることを得、常に精進して求めて心に厭足すること無く、常に菩提の種々の行願に於て心に厭足すること無し。所得の果報は、廣く說くこと、前の如し。

*復た次に、善男子よ。若し菩薩摩訶薩、能く形壽を盡して虛誑語を離せば、一切の衆生常に共に愛敬す。出す所の言詞、皆な[一九]誠諦の量にして聞かば悉く敬奉して猜疑する所無し。此に由つて善根速かに成熟することを得。所有る前際に五趣に輪轉し生死の河に沒して、虛誑語に因つて、身語意の諸の惡業障・諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障・諸の[二〇]信言障を造りて、自ら作して他をして見聞隨喜せしめしも、此の「虛誑語を遠離するの輪」に由つて皆な悉く蠲壞し摧滅して餘すこと無く果報を受けず。現身の中に於て諸の人天等皆な共に親愛して猜慮せらるること無く、身心安樂にして、出す所の言詞を他皆な信奉す。將に命終らんとするの時、身心憂苦の爲に逼切せられず、所愛の妻子・眷屬に圍遶せられ、命終の時に臨んで、可怖の剡魔王の使を見ず、唯だ可意の成調善法・具戒富德の眞實の福田を見て、善知識と爲し、身心歡悅して深く敬信を生ず。既に命終し已つて還りて人中に生じて、諸根圓滿し*支體具足し、所生の處に隨つて、言ふ所誠諦に、端正聰明にして安穩快樂なり。復た可意の成調善法、具戒富德の眞實の福田に遇ひて、善知識と爲し、彼れに依つて修學して虛誑語を離れて、能く一切の惡不善の法を斷じ、能く一切の殊勝の善法を成じ、能く一切の大乘の法義を求め、能く一切の菩薩の願行を修し、漸次に深廣の智海に[二一]趣入し、乃至、無上菩提を證得す。所居の佛土は、一切眞實にして諸の虛僞を離れ、妙香潔物もて莊嚴せられ、諂無く誑無く心行正[二二]眞にして純淨の善法を希求する有情、其の國に來生し、香潔の妙服・寶飾もて莊嚴せり。如來自身の壽命は、無量なるも、諸の有情の爲に如應に說法したまひ、般涅槃の後も正法久しく住して無量の有情を利益し安樂にす。

※第四、遠離虛誑語輪

【一九】誠字、三本及び宮本には成に作る。

【二〇】前に虛誑語を犯すに依り、今ま信言の障ありて、眞實の語を用ひて正法に入ることをさまたげらるるなり。

【二一】趣字、三本及び宮本には、能に作る。

【二二】眞字、三本及び宮本には直に作る。

善男子よ。是を菩薩摩訶薩の第四の「虚誑語を遠離するの輪」と名く。菩薩摩訶薩は、此の輪を成就するが故に、聲聞乘に於て誤失無きことを得、聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、獨覺乘に於て誤失無きことを得、獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、其の大乘に於て誤失無きことを得、其の大乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、常に能く三寶の種姓を熾然にして、諸の如來の出家の弟子の、若しは是れ法器若しは非法器、下至、一切の片袈裟を被り鬚髪を剃る者に於て誤失無きことを得、大乘の法に於て常に昇進することを得て退轉有ること無く、利慧・勝福を常に增長すること得、一切定・諸陀羅尼・諸忍・諸地に於て速かに自在を得て退轉有ること無く、常に諸の善知識に値遇し隨順して行ずることを得、常に一切の佛及び諸の菩薩・聲聞の弟子を見るを離れず、法を聞くを離れず、衆僧に親近し供養することを離れざるを得、諸の善根に於て常に精進して求めて心に厭足すること無く、常に菩提の種々の行願に於て心に厭足すること無し。所得の果報、廣く說くこと、前の如し。

※復た次に、善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、能く形壽を盡して離間語を離せば、一切の衆生常に共に愛敬す。所發の言詞は皆な和順ならしめて、聞かば悉く敬奉して猜疑さるること無し。此に由つて、善根速かに成熟すること得。所有の前際に、五趣に輪轉し生死の河に沒して、離間語に因つて身語意の諸の惡業障・諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障・諸の〔三〕和敬障を造りて、自ら作し他をして見聞隨喜せしめしも、此の「離間語を遠離するの輪」に由つて、皆な悉く輾壞し摧滅して餘すこと無くして、果報を受けず。現身の中に於て諸の人天等皆な共に親愛して猜慮せらるること無く、身心安樂なり。所發の言詞は皆な和順ならしむ。將に命終らんとするの時、身心憂苦の爲に逼切せられず、所愛の妻子・眷屬に圍遶せられ、命終の時に臨んで、可怖の剡魔王の使を見ず、唯だ可意の成調善法・具戒富德の眞實の福田を見て、善知識と爲して、身心歡悅し深く敬信を生ず。既に命終し已つて、

※ 第五、遠離離間語輪

【三】前に離間語を犯せる障りに依て、互に和敬して佛道に入るをさまたげらるるなり。

還りて人中に生じて、諸根圓滿し支體*具足して、所生の處に隨つて、言ふ所和順し、端正聰明にして、安穩快樂なり。復た可意の成調善法・具戒富德の眞實の福田に遇ひ、善知識と爲して、彼れに依つて修學して離間語を離れて、能く一切の惡不善の法を斷じ、能く一切の殊勝の善法を成じ、能く一切の大乘の法義を求め能く一切の菩薩の願行を修し、漸次に深廣の智海に趣入し、乃至、無上菩提を證得す。所居の佛土は、一切堅密にして破壞す可きこと難く、諸の美妙物もて莊嚴せられ、違ふこと無く競ふこと無く善く訴訟を和し淳質の善法を希求するの有情、其の國に來生して常に和敬を修し、正法を聽聞す。如來自身の壽命は、無量なるも、諸の有情の爲に如應に說法したまひ、般涅槃の後も正法久しく住して、無量の有情を利益し安樂にす。

善男子よ。是を、菩薩摩訶薩の第五の「離間語を遠離するの輪」と名く。菩薩摩訶薩は、此の輪を成就するが故に、聲聞乘に於て誤失なきことを得、聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、獨覺乘に於て誤失なきことを得、獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、其の大乘に於て誤失無きことを得、其の大乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、常に能く三寶の種姓*を熾然にして、諸の如來の出家の弟子の若しは是れ法器若しは非法器、下至、一切の片袈裟を被り鬚髮を剃る者に於て誤失無きことを得、大乘の法に於て常に昇進すること得て退轉有ること無く、常に諸の善知識に値遇し隨順して行ずることを得、常に一切の佛及び諸の菩薩・聲聞の弟子を見るを離せず、法を聞くを離せず、衆僧に親近し供養するを離せざることを得、諸の善根に於て常に精進し求めて心に厭足すること無く、常に菩提の種々の行願に於て心に厭足すること無し。所得の果報は廣く說くこと前の如し。

*復た次に、善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、能く形壽を盡して麁惡語を離せば、一切の衆生常に共に愛敬す。所發の語言は皆な歡悅ならしめ、聞かば悉く敬奉し猜疑せらるること無し。此に由つて

※第六、遠離麁惡語輪

善根速かに成熟することを得。所有の前際に、五趣に輪轉し、生死の河に沒して、麁惡語に因つて身語意の諸の惡業障・諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障・諸の[二四]調善障を造りて、自ら作し他をして見聞隨喜せしめしをも、此の「麁惡語を遠離する輪」に由つて、諸の人天等皆な共に親愛して、猜慮せらるること無く、身心安樂にして、出す所の言詞は皆な歡悅せしむ。將に命終らんとするの時も、身心憂苦の爲に逼切せられず、所愛の妻子・眷屬に圍遶せられ、命終の時に臨んで、可怖の剡魔王の使を見ず、唯だ可意の成調善法、具戒富德の眞實の福田を見て、善知識と爲して、身心歡悅し深く敬信を生ず。既に命終し已つて還りて人中に生じて、諸根圓滿し*支體具足して、所生の處に隨つて、言ふ所柔軟に、端正聰明にして、安穩快樂なり。復た可意の成調善法具戒富德の眞實の福田に遇ひて、善知識と爲し、彼れに依つて、修學して麁惡語を離して能く一切の惡不善の法を斷じ、能く一切の殊勝の善法を成じ、能く一切の大乘の法義を求め、能く一切の菩薩の願行を修し、漸次に深廣の智海に趣入し、乃至、無上菩提を證得す。所居の佛土は、一切の不可意聲を遠離して種々の上妙の如意和雅なる諸の[二五]意樂聲・結集法聲、其の土に充滿し、念慧を具足し梵音淸徹し調善なる有情、其の國に來生して、常に軟語を以て更に相勸進す。如來自身の壽命は無量なるも、諸の有情の爲に如應に說法したまひ般涅槃の後も正法久しく住して、無量の有情を利益し安樂にす。

善男子よ。是を、菩薩摩訶薩の第六の「麁惡語を遠離するの輪」と名く。菩薩摩訶薩は、此の輪を成就するが故に、聲聞乘に於て誤失無きことを得、聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、獨覺乘に於て誤失無きことを得、獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、其の大乘に於て誤失無きことを得、其の大乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、常に能く三寶の種姓を熾然し、諸の如來の出家の弟子の若しは是れ法器若しは非法器、下至、一切の片袈裟を被り鬚髮を剃る者に於て

【二四】麁惡語を犯さば、即ち正法に入る業障と作るをいふ。

【二五】意字、三本及び宮本には、音に作る。

誤失無きことを得、大乘の法に於て常に昇進すること得て退轉有ること無く、利慧・勝福を常に增長することを得、一切定・諸陀羅尼・諸忍・諸地に於て速かに自在を得て退轉有ること無く、常に諸の善知識に値遇し隨順して行ずることを得、常に一切の佛及び諸の菩薩・聲聞の弟子を見るを離せず、法を聞くを離せず、衆僧に親近し供養するを離せざることを得、諸の善根に於て常に精進して求めて心に厭足すること無く、常に菩提の種々の行願に於て心に厭足すること無し。所得の果報は、廣く說くこと前の如し。

※復た次に、善男子よ。[二六]若し、菩薩摩訶薩、能く形壽を盡して、雜穢語を離せば、一切の衆生常に共に愛敬す。所發の言詞皆な義利有つて、聞かず悉く敬奉して猜疑せらるること無し。此に由つて善根速かに成熟することを、所有の前際に五趣に輪轉し、生死の河に沒して、雜穢語に因つて、身語意の諸の惡業障・諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障・諸の[二七]義利障を造り、自ら作して他をして見聞・隨喜せしめしも、此の「雜穢語を遠離するの輪」に由つて、皆な悉く毀壞し摧滅して餘すところ無くして果報を受けず。現身の中に於て諸の人天等皆な共に親愛して猜慮せらるること無く、身心安樂なり。所發の言詞は皆な義利を成ず。將に命終らんとするの時も、身心憂苦の爲に逼切せられず、所愛の妻子・眷屬に圍遶せられ、命終の時に臨んで、可怖の剎魔王の使を見ず、唯だ可意の成調善法・具戒富德の眞實の福田を見て善知識と爲し、身心歡悅して深く敬信を生ず。既に命終し已つて還りて人中に生じて、諸根圓滿し*支體具足し、所生の處に隨つて、言はば必ず饒益し、端正聰明にして安隱快樂なり。復た可意の成調善法、具戒富德の眞實の福田に遇ひて善知識と爲し、彼れに依つて、修學して雜穢語を離して、能く一切の惡不善の法を斷じ、能く一切の殊勝の善法を成じ、能く一切の大乘の法義を求め、能く一切の菩薩の願行を修し、漸次に深廣の智海に趣入し、乃至、無上の菩提を證得す。所居の佛土は、一切の無義利聲を遠離し、種々の上妙の菩薩藏攝の大法音聲、

※第七、遠離雜穢語輪

【二六】若字、三本宮本には、之を缺く。

【二七】雜穢語を犯さば、諸の義利を失ひて、正法に入るさまたげとなるなり。

國土に周遍し、無邊の大願妙智を成就して能く善く種々の法義を辯説す。是の如きの有情、其の國に來生す。如來自身の壽命は、無量なるも、諸の有情の爲に、如應に説法したまひ、般涅槃の後も正法久しく住して、無量の有情を利益し安樂にす。

善男子よ。是を、菩薩摩訶薩の第七の「雜穢語を遠離するの輪」と名く。菩薩摩訶薩は、此の輪を成就するが故に、聲聞輪に於て誤失無きことを得、聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、獨覺乘に於て誤失無きことを得、獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、其の大乘に於て誤失無きことを得、其の大乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、常に能く三寶の種姓を熾然にして、諸の如來の出家の弟子の若しは是れ法器若しは非法器、下至、一切の片袈裟を被り鬚髪を剃る者に於て誤失無きことを得、大乘の法に於て常に昇進することを得て退轉有ること無く、利慧・勝福を増長することを得、一切定・諸陀羅尼・諸忍・諸地に於て速かに自在を得て退轉有ること無く、常に諸の善知識に値遇し隨順して行ずることを得、常に一切の佛及び諸の菩薩・聲聞の弟子を見るを離せず、法を聞くを離せず、衆僧に親近し供養するを離せざることを、諸の善根に於て常に精進して求めて心に厭足すること無く、常に菩提種々の行願に於て心に厭足すること無し、所得の果報は、廣く説くこと前の如し。

*復た次に、善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、能く形壽を盡して貪欲を遠離せば、一切の衆生に常に愛重せられ、其の心清淨にして諸の染濁を離る。此に由つて、善根速かに成熟することを得。所有の前際に、五趣に輪轉し生死の河に沒して、貪欲に因つての故に、身語意の諸の惡業障・諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障・諸の[二八]無貪障を造り自ら作して他を見聞、隨喜せしめしも、此の「貪欲を遠離するの輪」に由つての故に、皆な悉く輾壞し摧滅して餘すところ無くして果報を受けず。現身の中に於て、諸の人天等皆な共に親愛して猜慮せらるること無く、身心安樂にして、其の心清淨

※ 第八、遠離貪欲輪

【二八】貪欲を犯さば、正法に入るさまたげとなるなり。

にして諸の染濁を離る。將に命終らんとするの時も、身心憂苦の爲に逼切せられず、所愛の妻子・眷屬に圍遶せられ、命終の時に臨んで、可怖の剡魔王の使を見ず、唯だ可意の成調善法・具戒富德の眞實の福田を見て、善知識と爲し、身心歡悅して深く敬信を生ず。既に命終し已つて、還りて人中に生じて、諸根圓滿し支*體具足し、所生の處に隨つて、其の心清淨にして諸の染濁を離れ、端正聰明にして安穩快樂なり。復た可意の成調善法・具戒富德の眞實の福田に遇ひて、善知識と爲し、彼れに依つて修學して貪欲法を離れて、能く一切の惡不善の法を斷じ、能く一切の殊勝の善法を成じ、能く一切の大乘の法義を求め、能く一切の菩薩の願行を修し、漸次に深廣の智海に趣入し、乃至、無上の菩提を證得す。所居の佛土は、地平かなること掌の如く、衆寶充滿して、種々の寶樹行列して莊嚴し、種々の寶衣・寶莊嚴具・寶幢・幡蓋・金銀・眞珠・羅網等の樹處々に皆な有りて、甚だ愛樂しつ可べし。憍慢を遠離し顏貌端嚴にして諸根缺くる無く其の心平等なる、是の如きの有情、其の國に來生し、無貪の功德、圓滿し莊嚴す。如來自身の壽命は、無量なるも、諸の有情の爲に如應に說法したまひ、般涅槃の後も正法久しく住して無量の有情を利益し安樂にす。

善男子よ。是を、菩薩摩訶薩の第八の「貪欲を遠離するの輪」と名くる也。菩薩摩訶薩は、此の輪を成就するが故に、聲聞乘に於て誤失無きことを得、聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、獨覺乘に於て誤失無きことを得　獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、其の大乘に於て誤失無きことを得、其の大乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、常に能く三寶の種姓を熾然にして、諸の如來の出家の弟子の若しは是れ法器若しは非法器、下至、一切の片袈裟を被り鬚髮を剃る者に於て誤失無きことを得、大乘の法に於て常に昇進することを得て退轉有ること無く、利慧・勝福を常に增長することを得、一切定・諸陀羅尼・諸忍・諸地に於て速かに自在を得て退轉有ること無く、常に諸の善知識に値遇し隨順して行ずることを得、常に一切の佛及び諸の菩薩・聲聞の弟子を見るを離せ

ず、法を聞くを離せず、衆僧に親近し供養するを離せさることを得、諸の善根に於て常に精進して求めて心に厭足すること無く、常に菩提の種々の行願に於て心に厭足すること無し。所得の果報は廣く說くこと前の如し。

巻の第九

*善業道品　第六之二

*復た次に、善男子よ。若し菩薩摩訶薩、能く形壽を盡して瞋恚を遠離せば、一切の衆生に常に愛重せられ、其の心清淨にして諸の垢穢を離れ、此に由つて、善根速かに成熟することを得。所有る前際に、五趣に輪轉し、生死の河に沒して、瞋恚に因つての故に、身語意の諸の惡業障・諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障・諸の[一]無瞋障を造りて、自ら作し、他をして見聞隨喜せしめしも、此の瞋恚を遠離するの輪に由つての故に、皆悉く輾壞し摧滅して餘すところ無くして、果報を受けず。現身中に於て、諸の人天等、皆共に親愛して、猜慮する所無く、其の心清淨にして、諸の垢穢を離る。將に命終らんとする時も、身心憂苦の爲に逼切せられず、所愛の妻子眷屬に圍遶せらる。命終の時に臨んで、怖る可き剡魔王　使を見ず、唯だ可意の成調善法・具戒富德の眞德福田を見て、善知識と爲し、身心歡悅して深く敬信を生ず。既に命終し已つて、還つて人中に生ず。諸根圓滿し、[二]支體具足して、所生の處に隨つて、其の心清淨にして、諸の垢穢を離れ、端正聰明にして安隱快樂なり。復た可意の成調善法具戒富德の眞實福田に遇ひて善知識と爲し、彼れに依つて修學して瞋恚の法を離れ、能く一切の惡不善の法を斷じて、能く一切の殊勝の善法を成じ、能く一切の大乘の法義を求め、能く一切の菩薩の願行を修し、漸次に深廣の智海に趣入し、乃至、無上の菩提を證得す。所居の佛土は、一切の濁穢風雲鬱烝塵垢諸の麁弊の物を遠離し、衆寶莊嚴して甚だ愛樂しつ可し。惰慢を遠離し、顏貌端嚴にして、諸[三]根缺くること無く、心常に寂定なり。是の如きの有情、其の國に來り生じ、慈悲の功德、圓滿莊嚴す。如來は、自身は壽命無量なるも、諸の有情の爲に、如應に說法したまひ、般涅槃の後も正法久しく住して、無量の有情を利益し安樂にす。

※ 北涼本卷七「遠離惡業品第九」後半に相當す。

※ 第九、遠離瞋恚輪

【一】 麗本には、無明障に作る。いま三本の無瞋障に作るに依る。

【二】 支字、三本及び宮本には肢に作る。以下※同之。

【三】 根字、三本及び宮本には、相に作る。

善男子よ、是を菩薩摩訶薩の第九の「瞋恚を遠離するの輪」と名づくる也。菩薩摩訶薩、此の輪を成就するが故に、聲聞乘に於て誤失無きことを得、聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、獨覺乘に於て誤失無きことを得、獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、其の大乘に於て誤失無きことを得、其の大乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得て、常に能く三寶の種[四]姓を熾然にし、諸の如來の出家の弟子の、若しは是れ法器、若しは非法器、下至、一切の片袈裟を被り鬚髮を剃る者に於て誤失無きことを得、大乘の法に於て常に昇進することを得て退轉有ること無く、利慧勝福常に增長することを得、一切定・諸陀羅尼・諸忍・諸地に於て速かに自在を得て退轉有ること無く、常に諸の善知識に値遇し隨順して行ふことを得、常に一切の佛及び諸菩薩聲聞の弟子を見るを離れず、法を聞くを離れず、衆僧に親近し供養するを離れざるを得て、諸の善根に於て常に精進して求めて心に厭足すること無く、常に菩提の種種の行願に於て心に厭足すること無し。所得の果報、廣說すること前の如し。

*復た次に、善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、能く形壽を盡して、邪見を遠離すれば、一切衆生に常に愛重せられ、其の心清淨にして、邪分別を離る。此に由つて、善根速かに成熟することを得。所有る前際に、五趣に輪轉し、生死の河に沒して、邪見に因つての故に、身語意の諸の惡業障、諸の煩惱障・諸の有情障・一切の法障・諸の[五]正見障を造りて、自ら作し、他をして見聞隨喜せしめしも、此の「邪見を遠離するの輪に由つての故に、皆悉く輾壞し摧滅して餘すところ無く、果報を受けず。現身中に於て、諸の人天等、皆共に親愛して猜慮さるること無く、身心安樂に、其の心清淨にして、邪分別を離る。將に命終らんとするの時も、身心憂苦の爲に逼切せられず、所愛の妻子眷屬に圍遶せらる。命終の時に臨んで・怖る可き剡魔王の供を見ず、唯だ可意の成調善法、具戒富德の眞實福田を見て善知識と爲し、身心歡悅して深く敬信を生ず。旣に命終し已つて、還つて人中に生じ、諸根

【四】姓字、三本及び宮本には、性に作る。以下※同之。

※第十、遠離邪見輪

【五】邪見を犯さば、即ち正見に依て佛道を成ずるさまたげとなるなり。

圓滿し、*支體具足して、所生の處に隨つて、其の心清淨にして、邪分別を離れ、端正聰明にして安隱快樂なり。復た、可意の成調善法、具戒富德の眞實の福田に遇ひて善知識と爲し、彼に依て修學して邪見法を離れ、能く一切の惡不善の法を斷じて、能く一切の殊勝の善法を成じ、能く一切の大乘の法義を求め、能く一切の菩薩の願行を修し、漸次に大乘の大海に趣入し、乃至、無上の菩提を證得す。所居の佛土は、一切の聲聞・獨覺二乘の[六]人法を遠離し、一切の天魔の徒衆を遠離し、一切の外道の朋黨を遠離し、衆寶莊嚴して甚だ愛樂しつ可し。一切の妄執吉凶・[七]常見斷見・[八]我我所見を遠離す。是の如きの有情、其の國に來り生じ、壽命長遠にして、[九]一味を受用す、謂ゆる[一〇]大乘味なり。如來は、自身は壽命無量なれども、諸の有情の爲に、如應に說法したまひ、般涅槃の後も正法久しく住して、無量の有情を利益し安樂にす。*聖教一味にして乖諍有ること無く、熾盛に流通して諸の障難を離る。

善男子よ、是を菩薩摩訶薩の第十の「邪見を遠離するの輪」と名づくる也。菩薩摩訶薩、此の輪を成就するが故に、聲聞乘に於て誤失無きことを得、聲聞乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、獨覺乘に於て誤失無きことを得、獨覺乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得、其の大乘に於て誤失無きことを得、其の大乘の補特伽羅に於て誤失無きことを得て、常に能く三寶の種姓を熾然ならしめ、諸の如來の出家の弟子の、若しは是れ法器、若しは非法器、下至、一切の片袈裟を被り鬚髪を剃る者に於て誤失無きことを得、大乘の法に於て常に昇進することを得て退轉有ること無く、利慧勝福常に增長することを得、一切定・諸陀羅尼・諸忍・諸地に於て速かに自在を得て退轉有ること無く、常に諸の善知識に値遇し隨順して行ふことを得、常に一切の佛及び諸の菩薩・聲聞の弟子を見るを離れず、法を聞くを離れず、衆僧に親近し供養することを離れざるを得て、諸の善根に於て常に精進して求めて心に厭足すること無く、常に菩提の種種の行願・六波羅蜜多に於て心に厭足する

【六】人とは衆生、法とは數法。また、人とは一切の有情數、法とは一切の非情數なり。

【七】斷常二見。一切を常住なりと偏執するを常見、虛無なり斷滅すと執するを斷見といふ。第二卷註【八】第六卷註【三七、四三】參照。

【八】我とは自我、自身を云ひ、我所とは、我所有の略にして、身外の諸事物を以て自我所有の法となす。

【九】法華經に「如來の說法は、一相一味なり」といへり。その如來の教法を甘味と譬へ、その理趣唯一無二なれば、一味といふ。

【一〇】大乘の法味なり。一大乘を以て甘味に比す。

こと無し。所得の果報、廣說すること前の如し。

善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、是の如きの「十輪」を成就すれば、能く速かに阿耨多羅三藐三菩提を證得す。所以は何ん。過去世に於て、一切の如來應正等覺、皆悉く十惡業道を遠離し、皆悉く是の如きの十善業道の所得の果報を稱揚し讃歎したまひ、一切の衆生を長養し、菩提の道を利益し安樂しめんと欲するが爲の故に、一切の衆生の業煩惱の苦を除滅して餘すところ無からしめんと欲するが爲の故に、三惡趣を枯竭せんと欲するが爲の故に、三寶の種を紹隆ならしめんと欲するが爲の故に、三界の有を斷除せんと欲するが爲の故に、永く蘊界處を斷ぜんと欲するが爲の故に、一切をして速かに無畏涅槃城に入らしめんが爲の故に、前の如きの、十種の不善業道を遠離して得る所の果報を廣說したまふ。

是の故に、善男子よ。若し、眞實ならずして、是の如きの十善業道の所證の佛果を希求し、及び眞實ならずして、下至、一善業道を守護し、乃至、命終して自ら稱して言ふらく、「我は是れ眞實に大乘を行ずる者なり、我れ無上正等菩提を求む」と。當に知るべし。是の如きの補特伽羅は、是れ極めて虛詐なり、是れ大妄語なり。十方界の佛世尊の前に對して世間を誑惑し、無慚無愧にして空斷見を說いて愚癡を誘誑す。身壞命終すれば、諸の惡趣に墮す、と。

善男子よ。若し、但だ言說、乃は但だ聽聞のみして、十善業道を修行するに由らずして、能く菩提般涅槃を得るとせば、一劫の中、或は一念の頃に於て、十方一切の佛土地界の微塵算數の衆生をして、皆な正覺に登[一]り般涅槃に入らしむ可し。然し、是の事無し。所以は何ん。十善業道は、是れ大乘の本、是れ菩提の因、是れ涅槃を證するの堅固なる梯蹬[二]なればなり。善男子よ。若し、但だ心を發し、誓願力を發すのみにして、十善業道を修行するに由らずして、能く菩提般涅槃を得るとせば、一劫の中、或は一念の頃に於て、十方一切の佛土地界の微塵算數の衆生をして、皆な正覺に登*り般

【一】登字、宮本には、證に作る。以下※同之。
【二】蹬字、三本及び宮本には隥に作る。

涅槃に入らしむる可し。然も、是の事無し。所以は何ん。十善業道は、是れ世・出世の殊勝の果報功德の根本なればなり。善男子よ。若し十善業道を修行せずして、設ひ十方一切の佛土の微塵數の劫を經て、自ら大乘と號して、或は說き、或は聽き、或は但だ心を發し、或は誓願を發すとも、終に菩提涅槃を證すること能はず。亦た、他をして生死の苦を脫せしめず。

善男子よ。十善業道を修行するに由らんことを要す。世間、方に、諸の刹帝利・婆羅門等の大富貴族、四[一]大王天、乃至、非想非非想處、或は聲聞乘、或は獨覺乘、乃至、無上正等菩提有るも、皆な十善業道の品類差別を修行するに由る。

是の故に、善男子よ。若し、速かに無上正等菩提の願を滿ぜんことを欲する者は、當に是の如きの十善業道を修し、以て自ら莊嚴すべし。十惡不律儀に住するに非ざる者、能く是の如きの無上正等菩提の大願を滿ぜん。若し、速かに大乘の境界を悟り、速かに無上正等菩提を證し、速かに一切善業の願を滿ぜんことを求むる者は、先づ應に十善業道を護持すべし。所以は何ん。十善業道は、是れ能く一切善法の功德を安立するの根本、是れ世・出世の勝果報の因なり。是の故に、應に十善業道を修すべし。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯はして、頌を說いて曰はく、

諸の有苦を除き、　大菩提を證得せんと欲せば、
應に十善輪を修すべし、　精勤して放逸なること勿れ。
便ち、三乘の法、　及び補特伽羅、
一切の出家の人に於て、　皆な誤失無きことを得、
信受して大乘を行じ、　一切の衆を利益し、
勝法と淨土とを覺り、　速かに大菩提を證せん。

【一】大字、元明二本には、天に作る。

若し殺生を離るれば、
恒に無病長壽にして、
一切所生の處にて
常に佛法僧に遇ひまつり、
一切皆な愛敬し、
常に不害の法を樂しみ、
恒に佛の所行を樂しみ、
速かに無上覺を成ぜん。

若し不與取を離るれば、
貪所生の業を滅して
生生常に巨富にして
衆寶の莊嚴を得て
智者皆な愛敬し、
貪所生無きことを獲、
能く大施主と爲り、
淨佛國を愛すべし。

若し欲邪行を離るれば、
貪愛の河を枯竭して
諸の衆生の類を拔いて
大乘に安置して
臭穢の煩惱を滅し、
速かに淨佛國を得、
欲の淤泥を出さしめ、
梵行を勤めて修せしめん。

若し虛誑語を離るれば、
常に諦實の言を樂しみ
一言、證量を爲し、
速かに大菩提を得、
一四聖自在智を得、
虛妄の衆苦を滅し
常に佛法僧に遇ひまつりて、
勸めて不妄語を修せしめん。

若し離間語を離るれば、
常に佛法僧に遇ひまつりて、
一五聖なる染一六著無き
深法海の源に達し、
衆善の法器を成じ、
斷滅に歸せず、
陀羅尼の寶藏を得て
速かに無上覺を成ぜん。

【一四】通達無礙なる智。華嚴の菩薩十自在又は十明の一に、無障無礙なるを智自在を數ふ。
【一五】以下、北涼本「寧なる無染著を得て、總持辯才を逮へ、能く深法海を知り、久からずして菩提を得ん。」となす。
【一六】著字、三本及び宮本には、著に作る。

若し麁惡語を離るれば、
衆生皆な愛敬し、
衆をして常に歡悦せしめ、
諸佛の所行を知り、
若し雜穢語を離るれば、
他の爲に發する所の言、
常に聖言を聽受し、
諸の佛海を圓滿して、
若し貪欲を離るれば、
服袈裟を供養し、
一九當に淨佛國、
無上乘に乘じて、
若し瞋恚を離るれば、
速疾かに等持を證し、
彼の證菩提に住して、
*當に淨佛土に生じ、
若し邪見を離るれば、
樂んで三乘を開示し、
永く諸の惡趣を脱し、
諸の菩薩の德を具し、
常に柔軟の言を說き、
先の世の罪業を滅し、
菩薩の導師と成り、
第十地を超過せん。
智者皆な愛敬し、
一七五の功德を具獲し、
恒に聖道を欣求し、
速かに一切智を得ん。
聖教を一八誹謗せず、
三乘の聖道を弘めて、
導師の所居に生じ、
速かに最勝智を得ん。
一向に慈心を修し、
衆聖の行處を樂しみ、
諸の過惡を遠離し、
諸の瞋忿を離れしめん。
純ら淨信心を修し、
亦た諸佛を供養しまつりて、
衆の賢聖者に遇ひ、
最上智を速得せん。

【一七】眞實、利益、柔軟、慈心、舉罪等の所謂五德か。
【一八】誹字、三本及び宮本には毀に作る。
【一九】當字。三本及び宮本には、常に作る。以下※同之。

我れ十善業を說く。　能く勝菩提に趣き、
諸の等持　陀羅尼・忍・地を生長せん。
此の輪の大威德は、　能く諸の惡趣を摧き、
諸の惡障を破壞し、　速かに大菩提を證せしむ。

※△福田相品　第七之一

『※復た次に、善男子よ。菩薩摩訶薩は、「十の財施大甲冑輪」を有す。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、初發心より、一切の五欲、皆な能く除斷し、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等、皆な應に供養し承事し守護すべし。

何等をか、十と爲す。所謂、種種の飮食・衣服・寶飾・象馬・車乘及び自身の手足耳鼻頭目髓腦皮骨血肉・國城・妻子・奴婢・田宅を、布施するなり。

是の如く、一一に、布施を行ずるの時、身命を顧みず、專ら己れが爲に世間・出世間の樂を求めずして發心して布施し、但だ普く一切有情の爲に大慈大悲の〔一〇〕芽を生長せんと欲するが故に發心して布施し、善巧方便殊勝の智を引發せんと欲するが爲の故に發心して布施し、一切有情の安樂の事を引發せんと欲するが爲の故に發心して布施し、一切の有情の苦惱の事を除滅せんと欲するが爲の故に發心して布施し、勝他の心無く麁獷の心無く、嫉妬の心無く慳悋の心無くして布施を行じ、所施の物に於て若しは多、若しは少、下至、一食なるも終に自ら果報を希求せずして發心して布施し、終に聲聞乘の果を希求せずして發心して布施し、終に獨覺乘の果を希求せずして發心して布施し、所施の物に於て若しは多、若しは少、下至、一食なるも但だ一切種智を希求するが爲に發心して布施す。

※ 北京本卷七後半「布施品第十、持戒相品第十一、忍辱品第十二」三品及び卷八前半「精進相品第十三、禪相品第十四」第二品に相當す。

※ **十財種施大甲冑輪** 以下、北京本卷七「布施品第十」に相當す。

〔△〕 明本に依る。麗本等、福字の上に「大乘大集地藏十輪經」の九字を加ふ。

〔一〇〕 芽字、宋本及び宮本には、牙に作る。

善男子よ。菩薩摩訶薩、是の如きの「十種の財施大甲冑輪」を成就して、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。所以は何ん。聲聞・獨覺の發心せる布施は、〔二二〕大慈悲無くして、但だ己身に貧窮を捨てんが爲の故に、但だ己身に衆苦を脫せんが爲の故に、但だ己身に安樂を得んが爲の故に、但だ己身に涅槃を證せんが爲の故にして、普く一切の有情の爲に、而も布施を行ふこと能はず。菩薩摩訶薩の發心せる布施は、大慈悲有りて、普く有情に貧窮を捨てしめんが爲の故に、普く有情に衆苦を脫せしめんが爲の故に、普く有情に安樂を得しめんが爲の故に、普く有情に涅槃を證せしめんが爲の故にして、自身の爲に而も布施を行ぜざるなり。是の義を以ての故に、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。菩薩摩訶薩、財施波羅蜜多を修行するの時、妙なる五欲に於て心に染著無く、自ら攝受する所の一切の樂具を、普く能く一切の有情に施與して、普く諸の有情を攝受する心に依り、自ら一切の苦を忍受する心に依り、一切の有情の苦を滅せんとする心に依り、一切の有情に樂を與へんとする心に依り、有情に大涅槃を與へんとする心に依りて、而も布施を行ず。是の義を以ての故に、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の勝聞・〔二三〕獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

善男子よ。若し、五欲に於て心に染著無く、大慈悲を具して、而も布施を行ず。是を菩薩摩訶薩と名づくる也。亦た、一切の聲聞・獨覺の眞實の福田と名づく。若し、世間の五欲を除斷せず、大慈悲無くして、而も布施を行ぜば、無量無邊の施物を捨つと雖も、而も猶ほ名づけて菩薩摩訶薩と爲すことを得さる也。亦た、一切の聲聞・〔二四〕獨覺の眞實の福に非らず。此の施は、聖印の所印を蒙っす。是の故に、應に世間の五欲を斷じ、大慈悲を具して、而も布施を行ずべし。若し、世間の五欲

【二二】大字、三本及び宮本には、上に作る。

【二三】覺字の下に、三本及び宮本には、乘字を加へて獨覺乘に作る。

【二四】法印のこと。所謂三法印、實相印の如き聖道の法印なり。

を斷ぜず、大慈悲無くして、而も布施を行ぜば、菩薩と名づけず、眞の福田に非らず。善男子よ。五欲に染著して、布施輪を行せば、尙ほ自身所有の少分の苦惱をすら滅すること能はず、況んや能く一切の有情の無量の苦惱を除滅せんや。』

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯はして、而して頌を說いて曰はく、

財施輪を成就するは、　智者の淨意樂にして、
盡く五欲を離れて　諸の有情を安樂にす。
諸の有情を樂にせんが爲にして　自らの果報を求めずば、
少分の施を行ずと雖も　而も眞の福田と名づく。
復た衆多を施すと雖も　而も五欲に依止せば、
聖印の印する所に非ず、　二四不安聚の中に住すべし。
少分の施を行ずと雖も　而も五欲に依らずんば、
聲聞・獨覺の　眞實の良福面と名づく。
故に應に五欲を捨てて、　常に淸淨の施を行じ、
有情衆を安樂にして、　眞實の福田を成ずべし。

*「復た次に、善男子よ。菩薩摩訶薩は、「十の法施大甲冑輪」を有す。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、初發心より、一切の五欲、皆な能く除斷して、速かに能く二五日燈光定を獲得し、一切の聲聞・獨覺に超勝して、一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等、皆な應に供養し承事し守護すべし。

何等をか、十と爲す。謂く、諸の如來所說の正法にして、(1)或は聲聞乘相應の正法、(2)或は獨覺乘相應の正法(3)或は大乘と相應する正法、(4)或は世間法、(5)或は出世間法、(6)或は有漏法、(7)或は

【二四】Samyaktva-niyata-rāśi 正定聚、邪定聚と共に、三聚の一。無量壽經に「彼の佛國土中には、諸の邪聚及び不定聚無し。」とせり。不定性聚ともいふ。倶舍論九に「正・邪定の餘を、不定と名く。彼れ、二緣を待ちて二を成すべきが故に」といへり。此の性・聖邪に遇つて或は邪とも正ともなるべく、一向に定りたるものならざれば、不定性聚と名く。諸の聖人を正定、五無間業を造りし者を邪定と呼び、之を除く自餘の凡夫を不定と名くるなり。倶舍論十には「正と邪と不定との聚は、聖と無間を造ると、餘となり」といふ。尙ほ三聚には、智度論八四、起信論、釋摩訶衍論等の諸說あるも、今は倶舍の說を舉ぐ。

※ **十種法施大甲冑輪**

【二五】Sūryapradīpo-nāma-samādhi? 即ち日燈三摩地か。北涼本には「日光三昧」に作る。

無漏法、(8)或は[二六]有爲法、(9)或は[二七]無爲法、(10)或は[二八]不二法なり。

菩薩摩訶薩、此の十法に於て、一切の聽聞を、深信敬重して、力の能ふ所に隨つて、審諦に領受し、思惟し觀察し、究竟して利に通じて、其の宜しき所に隨つて、他の爲に演說す。法を說く時に於て、嫉妬の心無く、慳悋の心無く、憍慢の心無く、利を求むるの心無く、他を輕んずるの心無く、自擧の心無くして、恭敬の心有り、饒益の心有り、大慈の心有り、大悲の心有りて、聲聞乘の補特伽羅には聲聞の法を說いて、彼が爲に獨覺乘の法及び大乘の法を說かず、獨覺乘の補特伽羅の爲には獨覺の法を說いて、彼が爲に聲聞乘の法及び大乘の法を說かず、大乘の補特伽羅の爲には大乘の法を說いて、彼が爲に聲聞乘の法・獨覺乘の法を說かず、諸の有情の根器の能ふ所に隨つて、爲に正法を說く。根器に非ざる者には、終に爲に說かず。其の大乘の諸の有情の所に於ては、終に獨覺乘の行・聲聞乘の行を修するを勸めず。獨覺乘の諸の有情の所に於ては、或る時は彼に大乘の行を修するを勸め、聲聞乘の諸の有情の所に於ては、或る時は獨覺乘の行及び大乘の行を修するを勸む。諸の如來所說の正法、下至、一頌乃至は半句に於ては、深信敬重して、終に毀謗し障蔽し隱沒せず。說法の師に於ては、世尊の想ひを起し、聽法の衆に於ては、病者の想ひを起し、所說の法に於ては良藥の想ひを起す。五欲を斷除して、希求する所無くして、正法を宣說す。

善男子よ。是を菩薩摩訶薩の「十種の法施大甲冑輪」と名づく。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、能く五欲を斷じて、速かに能く日燈光定を獲得し、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯はして、而して頌を說いて曰はく、

智者は法施を修して　器に隨つて三乘を說き、
爲に餘乘を說かず、　聞いて法を謗らんことを恐る。

【二六】爲とは造作の義、因緣所生の事物は、造作を有する故に有爲といふ。卽ち能生の因緣は所生の事物を造作し、所生の事物は此の因緣の造作を有すれば、有爲法と名く。猶ほ、有因緣と言ふ如し。之に對して、本來自爾にして因緣所生に非るものを無爲法と云ふ。

【二七】前註參照。

【二八】一實の理如平等にして彼此の別なき故不二といふ。猶ほ、不異といふが如し。一實平等の理法を指す。

根器に稱つて法を說き　非根器の爲にせず、
各ゝ其の所樂に隨つて　勸進して歡喜せしむ。
終に大乘に勸めて／　二乘の行を修せしめず、
或る時は彼の[二九]二に勸めて　[三〇]中上乘を修せんことを進む。
常に恭敬して法を聽き　深く信じて毀謗せず。
說法の師を供養すること、　佛世尊の想ひの如くし、
勸めて妙法の藥を聞き　煩惱の病を除かしむ。
利養と名譽とを捨てて、　而も正法を宣說す。

*復た次に、善男子よ。菩薩摩訶薩は、復た「淨戒大甲冑輪」を有す。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。何をか「淨戒大甲冑輪」と云ふ。善男子よ。菩薩の淨戒に、二種の相有り。一には共、二には不共なり。

(1)何をか菩薩の共の淨戒輪」と云ふ。[三一]謂く、諸の在家の、[三二]近事近住して受くる所の律儀、或は復た出家及び具足別解脫戒を受くる、是を菩薩の「共の淨戒輪」と名づく。諸の聲聞・獨覺乘等と共なり。菩薩は、此の淨戒輪に由つて、能く一切の有情の煩惱と諸の惡見趣と及び能く解脫の業障生死とを、除かず。此を名づけて大甲冑輪と爲さず。亦た、此に由らざるを、名づけて菩薩摩訶薩と爲す也。及び、一切の聲聞・獨覺の眞實の福田と名づくるなり。

(2)何をか菩薩の「不共の淨戒大甲冑輪」と云ふ。謂く、諸の菩薩の、普く十方一切の有情に於て、平等の心を起し、擾動の心無く、怨恨の心無くして淨戒を護持し、普く一切の持戒・犯戒・布施・慳

【二九】聲聞獨覺の二乘。
【三〇】獨覺乘及び大乘。

※ 淨戒大甲冑輪　以下、北涼本卷七「持戒相品第十一」に相當す。

(1) 共の淨戒輪
(2) 不共の淨戒大甲冑輪」

【三一】謂字、三本及び宮本には、於に作る。
【三二】近事とは、三寶に近づきて奉事、承事すること。優婆塞、優婆夷を近事男、近事女と譯す。これら在家信者の受くる律儀をまた近事律儀ともいふ、卽ち五戒のこと。近住とは、三寶に親近して宿住する意。近住律儀とは、八戒

貪・慈悲・忿恚・精進・懈怠なる下・中・上品の、諸の有情の所に於て、差別の心無く、差別の想無くして淨戒を護持し、普く三界一切の有情に於て、恚無く、忿及び諸の惡行無くして淨戒を護持し、普く三有の蘊界處の中に於て、分別する所無くして淨戒を護持し、欲界に依らずして淨戒を護持し、色界に依らずして淨戒を護持し、無色界に依らずして淨戒を護持し、諸有の一切の果報を觀せずして淨戒を護持し、一切の得と不得とに依らずして淨戒を護持し、諸行に依らずして淨戒を護持す。是を、菩薩の「不共の淨戒大甲冑輪」と名づく。

善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、此の「淨戒大甲冑輪」を成ぜば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、菩薩摩訶薩と名づくることを得るや。一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯はして、而して頌を說いて曰はく、

在家の律儀と　出家の解脱戒とに住して、
二乘と等しく共なるをば、　摩訶薩と名づけず。
智者は空法を修して　諸の世間に依らず、
亦た諸有に依らずして、　清淨戒を護持して
取相の尸羅を離れ、　染無く諸漏無し。
是の如きの戒を護持するをば、　眞實の福田と名づく。

*復た次に、善男子よ。菩薩摩訶薩は、復た「安忍大甲冑輪」を有す。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。何をか「安忍大甲冑輪」と云ふ。善男子よ。菩薩の安忍に、二種の相有り。一には世間、二には

のこと。在家の信者八戒を受持して三寶に親近し宿住するを、近住といふなり。出家に沙彌、沙彌尼(十戒)あり、具足戒を受ぐる迄に式叉摩那あり、出戒にも未具足の戒あるによつて、「出家及具足」といふ。

※安忍大甲冑輪　以下、北涼本卷七「忍辱品第十二」に相當す。

出世間、なり。

〔1〕何をか菩薩の「世間の安忍」と云ふ。謂く、(1)有漏の忍、(2)諸の有情の有取有相を緣とし諸の果報に依り諸の福業に依つて發起する所の忍、(3)自らの諸の色・聲・香・味・觸に依つて發起する所の忍、(4)發趣有る忍、(5)堪能無き忍、(6)力贏劣なる忍、(7)衆生を棄つる忍、(8)諂詐有る忍、(9)矯りて他を悅ばしむる忍、(10)諸の有情を利樂することを爲さざる忍、なり。是を菩薩の「世間の安忍」と名づく。是の如きの安忍は、諸の聲聞・獨覺乘等と共なり。此を名づけて大甲冑輪と爲さず。亦た、此に由らざるを、名づけて菩薩摩訶薩と爲す也。及び、一切の聲聞・獨覺の眞實の福田と名づくるなり。

〔2〕何をか菩薩の「出世の安忍大甲冑輪」と云ふ。謂く、(1)無漏の忍、(2)一切の賢聖の大法光明なる普く一切の有情を利樂することを爲して染著無きの忍、(3)永く一切の所作・事業・語言・因相・文字・音聲の行依處を斷ずる安忍にして、此の忍を修するが故に能く一切の[三三]三結・[三四]三受・[三五]三相・[三六]三世・[三七]三有・[三八]三行・[三九]三不善[四〇]根・[四一]四種の[四二]瀑流・[四三]四扼・[四四]四取・[四五]四種の身繫を斷じ、此の忍を修するの時、心意寂靜なり。是を菩薩の「出世の安忍大甲冑輪」と名づく。

善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、此の「安忍大甲冑輪」を成ずれば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、菩薩摩訶薩と名づくることを得るや。一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯はして頌を說いて曰はく、

安忍に二種を說く、　謂く有相と無相となり。
有相の忍は有著にて、　智者は稱譽せざるなり。
忍を修するに三行に依り　蘊界處等に依る、

(1) 世間の安忍

(2) 出世の安忍大甲冑輪　北涼本には「云何んが菩薩の以大莊嚴出世間忍と名く。諸の衆生の爲の故に忍に於て修行して染著せず。若くは一切の所作・事務・言語・相貌・音聲名字の聖の所住處に於て皆悉く隨順して捨てず。三結三受三相三世三有三業是の如き等の事に於て悉く依止せず、心恒に寂滅にして忍を修行す。是を菩薩の出世間の忍輪と名くに作る。

【三三】見結(我見)戒取結(邪戒を行ず)疑結(正理を疑ふ)の三過の見惑中の最も重き故見惑の總稱とし、此三結を斷ずるを預流果となす。

【三四】苦・樂・不苦不樂の三受。

【三五】解脫相・離相・滅相の三。卽ち生死の無相。涅槃の無相。及び其の無相も亦無相とする、非有非無の中道なり。

【三六】又三際とも云ふ。過現

是をば有漏の忍と名づく、　摩訶薩の相に非ず。
四顛倒を滅せんが爲に、　染著無き忍を修し、
三行等を寂靜ならしむる、　此の忍は稱譽す可し。
能く諸行を寂靜ならしめ、　一切の分別を離れ、
心平等にして空の如き、　此の忍は稱譽す可し。
諸法同一趣にして　空・無相・寂滅なる
心に住著する所無き、　此の忍は大利を成ず。

*復た次に、善男子よ。菩薩摩訶薩は、復た「精進大甲冑輪」を有す。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、初發心より一切の五欲皆な能く除斷して、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。何をか「精進大甲冑輪」と云ふ。善男子よ。菩薩の精進に二種の相有り。一には世間、二には出世間なり。

(1)何をか菩薩の「世間の精進」と云ふ。謂く、諸の菩薩、精進勇猛して、三種の世福業事を勤修す。〔四六〕何等をか三と爲す。一には施福業事、二には戒福業事、三には修福業事なり。此を修するを、卽ち、三種の精進と名づく。是の如きの精進は、諸の衆生の有漏・有取を緣として諸の果報に依り諸の福業に依る。是を、菩薩摩訶薩の世間の精進と名づく。是の如きの精進は、諸の聲聞・獨覺乘等と共なり。此を名づけて大甲冑輪と爲さず。亦た、此に由らざるを名けて菩薩摩訶薩と爲す也。及び、一切の聲聞・獨覺の眞實の福田と名づくるなり。

(2)何をか、菩薩の「出世の精進大甲冑輪」と云ふ。謂く、諸の菩薩、勇猛精進して、諸の衆生に於て其の心平等にして一切の煩惱業苦を除滅せしむ。是の如きの精進は、一切の賢聖の共に稱譽す

未の三世なり、
【三七】三界の生死。
【三八】福行（十善等）非行、又は非福行（十惡等）不動業、又無動行（有漏禪定）を。
【三九】貪瞋癡の三毒。
【四〇】根字、三本及び宮本には、相に作る。
※二種の精進大甲冑輪　以下、北涼本卷八「精進相品第十三」に相當す。
【四一】四瀑流。第二卷註「一二一」參照。
【四二】瀑字、三本及び宮本には暴に作る。以下同之。
(1)世間精進（世間の三福業事）
【四三】欲・有・見・無明の四。四軛。四瀑流に同じ。倶舍論十に「應に知るべし。四軛は四暴流と同じ」と云へり。
【四四】四の執著なり。所謂欲取・見取・戒取（また惑取、戒禁取）・我語取の四取。倶舍には百八煩惱を此の四に攝す。
(2)出世の精進大甲冑輪（出世の三福業事）
【四五】四縛、四身縛、また四結ともいふ。欲愛身縛、瞋恚身縛、戒盜身縛（取戒自縛）・我見身縛の四。鞞婆沙論二に出づ。繫、縛、結何れも煩惱の異名なり。又、四軛を四縛とも呼ぶ。

る所、無漏・無取にして依止する所無く、普く一切の精進・懈怠・布施・慳貪・持戒・破戒、慈悲・忿恚なる下・中・上品の諸の衆生の所に於て、差別の心無く、差別の想無くして勇猛精進し、普く三界の一切の衆生に於て、平等無二にして、事業・語言・思惟の諸の行依處を爲作して住著する所無く勇猛精進し、欲界に依らずして勇猛精進し、色界に依らずして勇猛精進し、無色界に依らずして勇猛精進し、諸有の一切の果報を觀ぜずして勇猛精進し、一切の得と不得とに依らずして勇猛精進し、諸行に依らずして勇猛精進し、諸行に依らずして勇猛精進し、三種の世福業事に依らずして勇猛精進し、出世の[46]三福業事を具足して勇猛精進す。是を、菩薩の「出世の精進大甲冑輪」と名づく。

善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、此の「精進大甲冑輪」を成ぜば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、菩薩摩訶薩と名づくるを得る也。一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯はして頌を說いて曰はく、

六根に染著し　[47]*五瀑流に漂愚せば
勇猛精進すと雖も　智者皆な厭毀す。
衆生の精進は、　有漏及び有取を緣とす、
眞實の福田に非らず、　摩訶薩を名づけざるなり。
智者は勤めて精進して、　一切の著を遠離し、
心依[48]止する所無きを、　眞實の福田と名づく。
[49]名色に染著せず、　蘊界處等を離れ、
衆の爲に歸依と作る、　是を摩訶薩と名づく。
世に行じて水月の如く、　精進を修して究竟す。

【四六】三類福業事、三性福業事、三福業、三福ともいふ。倶舎論一八に說く施類福・戒類福・修類福の三福なり。所謂、布施を行じて大富の福果を感ずると、性遮の戒を持して生天の福を感ずると、禪定を修して解脫の福果を感ずるとの三種の福業なり。今は之に世・出世を分別す。別に觀無量壽經には世・戒・行の三福、増一阿含十二には施、平等・思惟の三福業の說あり。今經は倶舎論の法數名目に做ふ。

【四七】北凉本には「六情根に染著し、四流に愚闇すれば、精進常に勇猛なるも、智者に譏嫌せらる。」とす。

【四八】止字、宮本には、力に作る。

【四九】nāma-rūpa. 十二因緣の第四。五蘊の總名なり。

此の輪は能く永く　衆生の煩惱の縛を斷つ。

*復た次に、善男子よ。菩薩摩訶薩は、復た「靜慮大甲冑輪」を有す。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

何をか「靜慮大甲冑輪」と云ふ。善男子よ。菩薩の靜慮に、二種の相有り。一には世間、二には出世間なり。

(1)何をか、菩薩の「世間の靜慮」と云ふ。謂く、諸の菩薩、諸蘊に依著して靜慮を修習し、諸界に依著して靜慮を修習し、諸處に依著して靜慮を修習し、欲界に依著して靜慮を修習し、色界に依著して靜慮を修習し、無色界に依著して靜慮を修習し、[五〇]三律儀に依著して靜慮を修習し、[五一]三解脫に依著して靜慮を修習し、[五二]四念住に依著して靜慮を修習し、[五三]四正斷に依著して靜慮を修習し、[五四]四神足に依著して靜慮を修習し、五根に依著して靜慮を修習し、五力に依著して靜慮を修習し、七等覺支に依著して靜慮を修習し、八聖道支に依著して靜慮を修習し、[五五]地界に依著して靜慮を修習し、水界に依著して靜慮を修習し、火界に依著して靜慮を修習し、風界に依著して靜慮を修習し、空界に依著して靜慮を修習し、識界に依著して靜慮を修習し、[五六]樂受に依著して靜慮を修習し、苦受に依著して靜慮を修習し、不苦不樂受に依著して靜慮を修習し、[五七]虛空無邊處に依著して靜慮を修習し、識無邊處に依著して靜慮を修習し、無所有處に依著して靜慮を修習し、非想非非想處に依著して靜慮を修習し、[五八]此世に依著して靜慮を修習し、他世に依著して靜慮を修習し、[五九]小想に依著して靜慮を修習し、大想に依著して靜慮を修習し、無量想に依著して靜慮を修習す。是の如きの靜慮は、有漏有取にして依著する所有り。是を、菩薩の「世間の靜慮」と名づく。是の如きの靜慮は、諸の聲聞・獨覺乘等と共なり。此を名づけて大甲冑輪と爲さず。亦た、此に由らさるなし、名づけて菩薩摩訶薩

※　二種の靜慮大甲冑輪以下、北凉本卷八「禪相品第十四」に相當す。

(1)　世間の靜慮

【五〇】　俱舍論十四に出づる、別解說・靜慮・道共又は無漏の三律儀。又は身語意の三律儀をも稱す。

【五一】　第二卷註〔七五、一四八〕參照。

【五二】　第二卷註〔六一、四四〕參照。

【五三】　第二卷註〔一三六〕參照。

【五四】　Catvāri ṛddhipādāḥ 欲念・精進・思惟の四如意足。

【五五】　次に、六界、六大を擧ぐ。

【五六】　次に三受を擧ぐ。

【五七】　次に無色界の四空天を擧ぐ。

【五八】　次に、二世を擧ぐ。

【五九】　次に、小・大・無量の三想擧ぐ。

と爲す也。及び、一切の聲聞・獨覺の眞實の福田と名づくるなり。

(2)何をか菩薩の「出世の靜慮」と云ふ。謂く、諸の菩薩、諸蘊を遠離して靜慮を修習し、諸界を遠離して靜慮を修習し、諸處を遠離して靜慮を修習し、欲界を遠離して靜慮を修習し、色界を遠離して靜慮を修習し、無色界を遠離して靜慮を修習し、三律儀を遠離して靜慮を修習し、三解脫を遠離して靜慮を修習し、四念住を遠離して靜慮を修習し、四正斷を遠離して靜慮を修習し、四神足を遠離して靜慮を修習し、五根を遠離して靜慮を修習し、五力を遠離して靜慮を修習し、七等覺支を遠離して靜慮を修習し、八聖道支を遠離して靜慮を修習し、地界を遠離して靜慮を修習し、水界を遠離して靜慮を修習し、火界を遠離して靜慮を修習し、風界を遠離して靜慮を修習し、空界を遠離して靜慮を修習し、識界を遠離して靜慮を修習し、樂受を遠離して靜慮を修習し、苦受を遠離して靜慮を修習し、不苦不樂受を遠離して靜慮を修習し、虛空無邊處を遠離して靜慮を修習し、識無邊處を遠離して靜慮を修習し、無所有處を遠離して靜慮を修習し、非想非非想處を遠離して靜慮を修習し、此世を遠離して靜慮を修習し、他世を遠離して靜慮を修習し、小想を遠離して靜慮を修習し、大想を遠離して靜慮を修習し、無量想を遠離して靜慮を修習す。是の如きの靜慮は、能く賢聖の廣大の光明を發し、無漏・無取にして、依著する所無し。是を、菩薩の「出世の靜慮大甲冑輪」と名づく。

善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、此の「靜慮大甲冑輪」を成ぜば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、菩薩摩訶薩と名づくることを得る也。一切の聲聞、獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯はして頌を說いて曰はく、

已が重擔を捨んが爲め、　有所得の定を修して

(2) 出世の靜慮

自らの煩惱を斷するを〔六〇〕求むるは、　眞の智者の相に非らず。
器に所觀あるに依り、　解脫を求めて定を修し
此の彼岸に取著するは、　有情を利樂するに非らず。
有情を利樂せんが爲めにして　定を修して重擔を捨て
一切の煩惱を滅するは、　是れ眞の智者の相なり。
諸の有情を潤ほさんが爲に、　依著無き定を修し
永く諸の有〔六一〕愛を斷す、　是を大慧の者と名づくるなり。
諸の有縛を解いて　無畏の城に住せしめんが爲に、
寂止の定を修行する、　是を摩訶薩と名づくるなり。

【六〇】宋・元・明三本、求字を永に作り、「永斷ニ自煩惱一」となす。
【六一】愛字、宮本には受に作る。

巻の第十

*福田相品　第七之二

*復た次に、善男子よ。菩薩摩訶薩は、復た「般若大甲冑輪」を有す。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

何をか「般若大甲冑輪」と云ふ。善男子よ。菩薩の般若に、二種の相有り。一には世間、二には出世間なり。

(1)何をか菩薩の「世間の般若」と云ふ。謂く、諸の菩薩、唯だ、讀誦し書寫し聽聞するのみに依つて、他の爲に三乘の正法を演說して、一切の衆生の無明黑暗を除滅せんことを求めんと欲し、一切の衆生の大慧光明を發起せんことを求めんと欲するなり。謂く、如來所說の種種の聲聞乘と相應する正法に於て、精勤に讀誦し聽聞し書寫し他の爲に演說し勸めて正に修行せしめ、或は如來所說の種種の獨覺乘と相應する正法に於て精勤に讀誦し聽聞し書寫し他の爲に演說し勸めて正に修行せしめ、或は如來所說の種種の無上乘と相應する正法に於て、精勤に讀誦し聽聞し書寫し他の爲に演說し勸めて正に修行せしめて賢聖の無漏の道支を求めず、聖道を求めず、聖道所攝の解脫を求めず、寂靜眞實の般若を行ぜず、常に有見・有相の般若を行ず。是の如きの般若は、有取・有著なり。是を菩薩の「世間の般若」と名づく。是の如きの般若は、諸の聲聞・獨覺乘等と共なり。此を名づけて大甲冑輪と爲さず。亦た、此に由らざるを名づけて菩薩摩訶薩と爲す也。及び、一切の聲聞・獨覺の眞實の福田と名づくるなり。

(2)何をか「菩薩の出世の般若」と云ふ。謂く、諸の菩薩、精勤に菩提の道を求むる時、力に隨つて

※北涼本卷八後半「智相品第十五」に相當す。

※ **般若大甲冑輪**

(1) **世間の般若**

(2) **出世の般若**

讀誦し聽聞し書寫し、他の爲に三乘の正法を演說して、其の中に於て、無所得の方便に依つて而も住して、行動する所無く、思惟する所無く、根本有ること無くして、[一]虛空の如き心、普く寂滅する心、增減あること無き慧、取著あること無き心、退轉あること無き心、法平等なる心、眞如の心、實際の心、法界の心、無我の心、分別あること無き心、寂靜安忍にして分別を離るゝ心を以て、善巧して無成壞の地に安住し、善巧して無住・無著なる勝妙慧の地に安住す。是の如きの般若は無取・無著なり。是を菩薩の「出世の般若大甲冑輪」と名づく。

善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、此の「般若大甲冑輪」を成ぜば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、菩薩摩訶薩と名づくることを得る也。一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

＊復た次に、善男子よ。菩薩摩訶薩に、復た、「善巧方便大甲冑輪」有り。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。云何が名づけて「善巧方便大甲冑輪」と爲す。善男子よ、菩薩の善巧方便に、二種の相有り。一には世間、二には出世間なり。

(1)云何が、名づけて菩薩の「世間の善巧方便」と爲す。謂く、諸の菩薩、或は自利の爲にし、或は他利の爲にし、或は俱利の爲にし、常に彼此を懷いて、種種の工巧[二]技術を示現し、自及び他の成熟を得んが爲の故に、諸佛世尊に承事し供養し、或は諸の菩薩の、或は諸の獨覺の、或は諸の聲聞の、或は母の、或は父の、或は諸の病者の、或は諸の羸劣にして依怙無き者の、若し厄難にて害せらるゝに臨む者を見ば、種種に勤苦し方便して救濟し、四攝事を以て、有情を成熟す。是の諸の菩薩、自らは大乘に住して、諸の聲聞及び獨覺乘の大乘の器に非ざる、若しくは、諸の聲聞及び獨

【一】以下、北涼本には「心如虛空、同於寂滅、觀法平等、都無所著、亦無所繫、無生無滅、心無退轉、常行平等、諸法實際、深入寂滅、得無生忍、不取諸相、心無增減、不依諸地、亦不住智慧」に作る。

※　善巧方便大甲冑輪

(1)　世間の善巧方便

【二】麗本には、伎術に作る。いま宋・元・明三本の技術とするに從ふ。

覺乘の根の未だ熟せざる者に於て、爲に[三]微妙甚深の法を說き敎へて其をして修學せしめ、或は勸めて諸の聖なる靜慧を勤修せしめ、或は爲に[四]最勝義諦を開示して勸めて修行して、四顚倒を超え、[五]四種の無墮の法性を覺悟せしめ、或は四無礙解に趣入せしめ、或は復た、乃至、勸めて四念住・四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支・[六]有餘無餘の道及び道果に安住して、巧智に趣入して、其をして成熟せしめ、若し諸の有情の名稱・利養・富貴を貪求し諸根躁擾にして善根未だ熟せざらんには、勸めて諸の[七]阿笈摩・及び[八]毘奈耶・[九]阿毘達磨を讀誦せしめ、或は勸めて[一〇]佛の所說を除く[一一]順解脫の論を讀誦せしめて、其をして成熟せしめ、若し諸の有情の布施を樂はざらんには、勸めて種種の珍財を惠捨せしめて、其をして成熟せしめ、若し諸の有情の暴惡不仁ならんには、勸めて[一二]四種の梵住を修學せしめ、若し諸の有情の心に忿恚多からんには、勸めて忍を修せしめ、若し諸の有情の心に懈怠多からんには、勸めて精進を修せしめ、若し諸の有情の心に散亂多からんには、勸めて靜慮を修せしめ、若し諸の有情の[一三]惡慧を具足せんには、爲に正法を說き、謂ゆる記說敎誡方便を以てして、其をして成熟せしめ、若し諸の有情の三寶を敬せず[一四]無依行を具せんには、勸めて三歸を受けしめて三寶を敬せしめ、或は勸めて[一五]近事律儀を受學せしめ、或は勸めて[一六]近住律儀を受學せしめて、其をして成熟せしめ、或は勸めて種種の工巧*技術業處を修習せしめて、其をして成熟せしむ。是の如き等の菩薩摩訶薩の種種の世間の巧方便智は、殑伽沙を過ぎたり。菩薩摩訶薩、是の一切の書論・工巧*・技術・業處に加行精進する巧方便智を以て、一切の外道・異學を摧伏す。是の如きを、名づけて、菩薩の「世間の善巧方便」と爲す。此の巧方便は、諸の聲聞・獨覺乘等と共なり。亦た一切の佛法の依因と作す。亦た是の善巧は、諸行の依處たり。亦た是の善巧は、任運無思にして[一七]退墮の法を滅す。

又、善男子よ。若し、諸の菩薩、明師に依らず、善友に依らずして、世間の善巧方便を修行すれ

【三】微字、宮本には、敎に作る。
【四】勝義諦、第一義諦などいふに同じ。眞如實相中道等の眞實の道理。
【五】北京本には「依二於四依一具二四辯才一云云」に作る。四依に行法人說の各四依を說く。人四依とは(1)具煩惱性の人即ち三賢四善根(2)預流果及び一來果の人(3)不還果の人(4)阿羅漢の人、その內證は大乘菩薩なるも外に聲聞相を現じて法を傳へて人天を化しその依止となる。世親の涅槃論には此の內證を諸地に配し、初依は初地、二依は六七地、三依は八九地、四依は第十地とせり。
【六】小乘の涅槃は有餘、大乘の涅槃は無餘なり。
【七】Agama 阿含。
【八】Vinaya. 律。
【九】Abhidharma. 論。
【一〇】原文「或勸讀二誦除佛所說順解脫論一」とあり、佛を除く以外の諸賢聖の順解脫の善說と見たり。北京本には「如是人等敎令レ習二誦如來所說聲聞辟支佛乘一」に作る。
【一一】順解脫とは所謂順解脫分なり。俱舍論一八に「順解脫分とは、謂く定んで能く涅槃の果を感ずる善なり。此善生

ば、是の諸の菩薩は、世間の善巧方便に愚にして、諸の惡趣に向ひ、出世の巧方便智に隨順し安住する能はず。亦た、一切の眞實の福田に非らず。善巧して諸の有情の根・行の差別を知る能はず。善巧方便に於て愚なるを以ての故に、諸の聲聞及び獨覺乘の大乘の器に非ざる、及び大乘に於て根未だ熟せざる者の爲には、大乘を宣說して其をして修學せしめ、又、大乘法器の有情の爲には、聲聞・獨覺乘の法を宣說して聲聞・獨覺乘の行を修せしめ、獨覺乘の法器の有情の爲には、聲聞乘を說いて其をして聲聞乘の行を修習せしめ、聲聞乘の法器の有情の爲には、生死の法を說いて其をして愛著せしめて、爲に生死を厭ふの法を宣說せず。又、善巧方便に於て愚かなるが故に、若し諸の有情の樂んで殺生を行ひ、廣說すれば乃至、邪見を執著せんには、彼が爲に甚深の大乘を宣說して、爲に生死に流轉して此に死し彼に生ずるの衆苦の果報を宣說して、其をして厭怖して諸の惡法を離れしめず。又、善巧方便に於て愚かなるが故に、乃至、若し諸の有情の樂んで淨戒を修せんには、布施を修せしめ、若し諸の有情の樂んで安忍を修せんには、勸めて安忍を捨てゝ淨戒を修せしめ、若し諸の有情の樂んで精進を修せんには、勸めて精進を捨てゝ安忍を修せしめ、若し諸の有情の樂んで靜慮を修せんには、勸めて靜慮を捨てゝ精進を修せしめ、若し諸の有情の樂んで般若を修せんには、勸めて般若を捨て靜慮を修せしむ。是の如きの菩薩は、世間の善巧方便に於て愚にして、眞實に有情を利樂する能はず、諸の有情の與に、惡知識と爲る。此の巧方便は、所得有り執著する所有るに依つてなり。是の如きを、名づけて、菩薩の「世間の善巧方便」と爲す。是の如きの「世間の善巧方便」は、諸の聲聞・獨覺乘等と共なり。此の、名づけて、大甲冑輪と爲さず。亦た、此に由らざるを名づけて、菩薩摩訶薩と爲す也。及び、一切の聲聞・獨覺の眞實の福田と名づくるなり。

(2)云何が名づけて菩薩の出世の善巧方便と爲す。謂く、諸の菩薩、但だ他を利せんが爲にし、自利の爲にせずして、種種の*工巧技術を示現し、他を成熟せんが爲に、諸佛世尊に承事し供養し、或

じ已れば彼の有情をして名けて身中に涅槃の法有りと爲さしむ。若し生死には過あり、諸法は無我なり、涅槃には德有りと說くを聞くこと有りて、身毛爲に竪ち悲泣して涙を墮さば當に知るべし、彼れ已に順解脫分の善を植うるなり。」と云へり。

【一二】慈悲喜捨の四無量心なり。又、四梵堂、四等心ともいふ。

【一三】北涼本、愚癡に譯す。

【一四】三寶に歸依せざる行爲。

【一五】優婆塞優婆夷の受持すべき律儀即ち五戒をいふ。儀字、宮內省藏舊宋本に依る。他本、儀を義に作る。

【一六】近住とは、三寶に親近して宿住する義。在家の男女の受くる八戒をいふ。倶舍論十四に「若し八の應に遠離すべき所を離することを受くれば、第二の近住律儀に安立す」と云へり。

【一七】佛法より退墮する法の意。殺盜婬妄の四波羅夷罪を四墮といひ、又退沒不共法とも呼ぶ。

(2) 出世の善巧方便

は諸の菩薩の、或は諸の獨覺の、或は諸の聲聞の、或は母の、或は父の、或は諸の病者の、或は諸の羸劣にして依怙無き者の、若し厄難にて害せらるゝに臨む者を見ば、種種に勤苦し方便して救濟し、四攝事を以て、有情を成熟し、其の意樂に隨ひ其の根器に隨つて、諸の有情の爲に正法を宣説し、又、能く漸次に諸の聲聞を勸めて獨覺乘を修せしめ、諸の獨覺を勸めて大乘を修習せしめ、若し聲聞及び獨覺乘の根の未だ熟せざらん者に於ては、爲に生死の苦法を厭離せんことを説いて其をして修學して生死を厭離して涅槃を欣求せしめ、若し諸の有情の樂んで殺生を行じ、廣説すれば乃至、邪見に[一八]樂著せんには、其の根性に隨つて、或は爲に生死に流轉し此に死し彼に生ずるの衆苦の果報を宣説して其をして厭怖して諸の惡法を離れしめ、或は爲に聲聞乘と相應する正法を宣説し、或は爲に獨覺乘と相應する正法を宣説し、或は爲に無上乘の中の淺近之法を宣説して漸に修學せしめ、若し諸の有情の已に布施を樂まんには、爲に勝上の受持淨戒を説いて其をして修學せしめ、廣説すれば乃至、若し諸の有情の已に靜慮を樂まんには、爲に勝上の無漏の聖道所攝の般若を説いて其をして修學せしむ。此の巧方便は、所得無く執著する所無し。是の如きを、名づけて、菩薩の「出世の善巧方便大甲冑輪」と爲す。

善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、是の如きの「善巧方便大甲冑輪」を成就すれば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、菩薩摩訶薩と名づくることを得る也。一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯はさんと[一九]欲して頌を説いて曰はく、

修する所の慧に二あり、　　世間と出世間となり。
取著するを世間と名づけ、　　取著無きは出世なり。

【一八】樂字、三本及び宮本には、執に作る。

【一九】欲字、三本及び宮本には、之を缺く。

善巧方便を修すること、　二種の差別に依る。
有所得は世間にして、　無所得は出世なり。
若し唯々一乘のみを說かば、　是を惡說法と名づく。
自ら成熟すること能はず、　亦た他を度すること能はず。
一向の惡衆生に、　爲に三乘の敎を說く、
是を則ち愚癡と爲し、　摩訶薩と名づけず。
三乘に趣いて、　欣求して正法を聞くに堪ふるものあり、
爲に生死を樂はんことを說くは、　智者の相と爲すに非らざるなり。
意を專らにして諦かに思惟して　根に隨つて敎化せんと欲す、
此の善巧方便は、　智者の稱譽する所なり。
衆生は惡有りと雖も、　而も三乘に入るに堪へたり、
根器に隨つて敎導して、　衆惡を解脱せしめよ。

*復た次に、善男子よ。菩薩摩訶薩は、復た、「大慈大甲冑輪」を有す。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、一切の聲聞・獨覺に超勝し、普く爲に一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

云何が、「大慈大甲冑輪」なる。

善男子よ。慈に二種有り。謂く、「法緣の慈」と「有情緣の慈」となり。「法緣の慈」は、名づけて大慈と爲し、大甲冑と名づく。「有情緣」の慈は、大慈と名づけず、大甲冑に非らず。

所以は何ん。

(1)「有情緣の慈」は、諸の聲聞・獨覺乘等と共なり。聲聞・獨覺は、自らの寂靜の爲にし、自らの涅

※　大慈大甲冑輪

(1)　有情緣の慈
有情緣の慈とは苦の有情を見て起す慈悲。法緣・無緣と共に、三種緣慈の一。

槃の爲にし、自らの惑を滅せんが爲にし、自らの結を滅せんが爲にして、有情の爲に、精勤に「有情緣の慈」を修習せず。是の故に、此の慈は、大慈と名づけず、大甲冑に非らず。

(2)其の「法緣の慈」は、聲聞・獨覺乘等と共ならず。唯だ諸の菩薩摩訶薩衆のみ能く修行する所なり。菩薩摩訶薩、普く一切の有情を利樂せんが爲に、精勤に此の「法緣の慈」を修習す。菩薩摩訶薩、普く一切の有情の寂靜と、及び涅槃を得ると、煩惱の結を滅するとの爲に、精勤に此の「法緣の慈」を修習す。是の故に、此の慈を名づけて、大慈と爲す。是れ、大甲冑なり。又、諸の菩薩、「法緣の慈」を修せんに、諸蘊に依らず、諸處に依らず、諸界に依らず、念住に依らず、乃至、道支に依らず、欲界に依らず、色界に依らず、無色界に依らず、此世に依らず、他世に依らず、此岸に依らず、彼岸に依らず、得に依らず、不得に依らさるなり。是の如く菩薩の「法緣の慈」を修すること、諸の聲聞・獨覺乘の地に超えたり。是を、菩薩の「法緣の大慈大甲輪」と名づく。

善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、此の「大慈大甲冑」を成せば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、菩薩摩訶薩と名づくることを得る也。一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆に供養し承事し守護すべし。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯はして頌を說いて曰はく、

「聲聞と及び獨覺とは　　有情緣の慈を修して。
心に[二〇]十三の過を帶び、　　唯だ自利の樂を求むるのみなり。」
菩薩の大名稱は、　　普く諸の有情の爲に、
不共の大慈を修して、　　心に十三の過を離る。
心に[二一]十三の垢を除き、　　大菩提に趣かんが爲に、
法緣の大慈を修して、　　福田を成ずること遠きに非らず。」

(2) 法緣の慈　法緣の慈とは、深く諸法因緣生の理を見て平等に起す慈悲。

[二〇] 十三の煩惱なり。十三縛ともいふ。

[二一] 十三煩惱のこと。垢は煩惱の異名。

〔二二〕十三の力に安住すること、　諸の有情に出過す、
猶し師子王の　諸の禽獸に超勝するが如し。
〔二三〕十三の怨を降伏して、　斷常の邊執を離れ、
心に染濁有ること無く、　速かに大菩提を證す。

*復た次に、善男子よ。菩薩摩訶薩は、復た「大悲大甲冑輪」を有す。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就せば、初發心より、一切の五欲皆能く除斷して、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆應に供養し承事し守護すべし。

所以は何ん。[illegible]一切の聲聞・獨覺乘等は、但だ己身に利樂を得んが爲の故にのみ、而も悲を修行し、普く一切の有情の利樂を得んが爲の故に、大悲を修行するを欲せざるなり。菩薩摩訶薩は、己身に利樂を得んが爲の故に、而も悲を修行せず、但だ普く一切の有情の利樂を得んが爲の故に、大悲を修行するを欲するなり。是の故に、菩薩、「大悲大甲冑輪」を成就して、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆應に供養し承事し守護すべし。

是の菩薩摩訶薩は、普く諸の有情を饒益せんが爲の故に、〔二四〕四攝事を行じて、之を成熟す。謂はく、大悲に由つて、普く諸の有情を利樂せんが爲の故に、布施攝を行じて、能く一切の珍寶・財物・禽獸・僕使・國城・妻子・乃至は身命を捨てゝ、悋惜する所無く、無所得を行じて、方便の爲の故に、一切所化の有情を見ず、施者を見ず、受者を見ず、施物を見ず、施行を見ず、施行所得の果報を見ず、乃至、無所得行を見ざるなり。是の如く、大悲もて、普く諸の有情を利樂せんが爲の故に、愛語攝を行じ、利行攝を行じ、同事攝を行じて、其の所應に隨つて、上の如く廣說すれば、乃至無所得行を見ざるなり。是の菩薩摩訶薩、常に、最勝にして能く調伏する心、能く寂靜なる心、〔二五〕無數量の心、

【二二】ここには十三煩惱を伏す力か。或は又、因・緣・意・願・方便・常・善・定・慧・多聞・持戒・忍辱・精進・禪定・正念正觀三諸通明・如法調伏諸衆生の十三力。西方淨土の菩薩は此の十三力を具足して自利利他すといふ。

※　大悲大甲冑輪

【二三】怨は我を害するもの。十三煩惱を指す。

【二四】布施・愛語・利行・同事の四菩薩行。

【二五】慈・悲・喜・捨の四無量心等を指すか。

一切の蘊・處・界を行ぜざる心の所生の、動ずること無く住すること無き、「大悲大甲冑輪」を以て、一切所化の有情を成熟して、心に厭倦すること無し。是の如きを、名づけて、菩薩の「大悲大甲冑輪」と爲す。一切の聲聞・獨覺に共ならざるなり。

善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、此の「大悲大甲冑輪」を成ぜば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、菩薩摩訶薩と名づくることを得る也。一切の聲聞・獨覺に超勝し、普く一切の聲聞・獨覺の爲めに大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯はして頌を說いて曰はく、

甚深微妙の法の　成ずる所の大悲は、
測り難きこと虛空に類し、　無色にして無安住なり。
菩薩の大精進は、　杜多の功德を具し、
勝智は、大悲を成じて、　勇健なること諸世に超えたり。
依怙無き有情の、　生死の苦穢の縛も、
大悲水に沐浴すれば、　衆苦を解脫せしむ。
菩薩は大悲を行じて、　能く生死の海を竭す、
諸の聲聞衆、　及び獨覺の所行に非ず。
衆生は貪恚癡もて　迷謬して惡趣に墮す、
濯ぐに大悲の水を以てすれば、　苦を脫して蕭然たることを得。

*復た次に、善男子よ。菩薩摩訶薩は、復た[三六]「能引遍滿虛空無量無邊廣大衆具辯無礙解一切佛法諸三摩地諸陀羅尼堅固大忍大甲冑輪」を有す。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く、一切の聲聞・獨覺の爲めに大福

※能引遍滿虛空無量無邊廣大衆具辯無礙解一切佛法諸三摩地陀羅尼堅固大忍大甲冑輪

【三七】北涼本には「廣邊虛空

田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。

云何が、菩薩摩訶薩の「能引遍滿虚空無量無邊廣大衆具辯無礙解一切佛法諸三摩地諸陀羅尼堅固大忍大甲冑輪」なる。謂はく、諸の菩薩、一切の法に於て、審諦に照察すること、明月の光りの虚空に遍滿するが如く、其の心平等に無依・無相・無住・無染にして、普く一切の三摩地門・陀羅尼門に於て、心の行動すること無く、[二七]諸の眼色・眼識・眼觸に於て、意の染著を離れ、心の行動すること無く、眼觸の緣に於て內に三受・或は樂・或は苦・或は非苦樂を[二八]生ずるも、心常に寂定にして取著する所無く、諸の耳聲・耳識・耳觸に於ても、諸の鼻香・鼻識・鼻觸に於ても、諸の舌味・舌識・舌觸に於ても、諸の身觸・身識・身觸に於ても、諸の意法・意識・意觸に於ても、廣說すれば亦た爾く、普く一切の心意識の中に於て、心常に寂定にして取著する所無く、心意識の所生の三受・或は樂・或は苦・或は非苦樂に於て、心常に寂定にして取著する所無く、普く三世の諸の蘊・界・處の一切の品類に於て、皆な取著すること無く、心の行動すること無く、一切の三界・三行・三觸・三受・三根・三乘・三律儀・三解脫の一切の品類に於て、其の心寂靜にして無住・無相にて取著する所無く平等にして住し、普く一切の[二九]布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多に於て、心の行動すること無く寂靜にして住し、是の應く普く四念住・四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支に於て、心の行動すること無く寂靜にして住し、普く一切の[三〇]九次第定に於て、心の行動すること無く寂靜にして住し、又、[三一]三行無障法智の道支・道體所引の作用に於て、皆な取著すること無く心の行動すること無く、[三二]阿賴耶・非阿賴耶、有取、無取・有漏、無漏・此岸・彼岸、小・大・無量、作と不作、[三三]善・惡・無記、の諸の品類中に於て、心の行動すること無く寂靜にして住し、普く一切の大慈大悲の善巧方便成熟有情、乃至、十地・三不護・四無所畏・乃至は十八不共佛法、の一切の品類に於て、皆な取著すること無く心の[三四]行動すること無く寂靜にして住す。

無邊無有量數種種差別普摩持才一切三昧總持忍辱大莊嚴輪」と作す。

【二七】 眼・耳・鼻・舌・身・意の六根、六境、六識を擧ぐ。

【二八】 生字、宮本には坐に作る。

【二九】 六度を擧ぐ。

【三〇】 四禪、四無色定、及び滅受想定(又は滅盡定)の九種の禪定を、他心を雜へず次第に一定より一定に入る法なり。

【三一】 北京本には「乃至三行如不如相にも亦た悉く不動」に作る。

【三二】 Alaya. 八識の第八。譯、無沒、藏、實。玄弉は藏と譯す。有情根本の心識。

【三三】 善・惡・無記の三性。無記とは善惡記別し得ざる非善非惡の中間性のもの。

【三四】 麗本、所動に作る。いま、宋・元・明三本の行動とするに依る。

*菩薩摩訶薩、此の輪に由るが故に、能く永く三受の過失を息除し、能く永く一切の分別を寂滅し、能く永く一切の法相を遠離し、復た能く[三五]「能引一切虚空眼頂諸三摩地諸陀羅尼善巧方便大甲冑輪」に安住す。菩薩、是の如きの輪に安住するが故に、一切の過去所引の未だ盡きざる惡不善の業、無暇の惡趣、諸有・諸趣死生の諸業、皆な能く除滅して盡く餘すこと無くして果報を受けざらしむ。

又、善男子よ。譬へば、世界の火災將に起らんとして五日出づるの時、一切世間の小池・大池・小河・大河・小海・大海の水の、皆な枯竭し滅盡して餘すこと無きが如し。是の如く、菩薩は、「能引遍滿虚空無量無邊廣大衆具辯無礙解一切佛法諸三摩地諸陀羅尼堅固大忍大甲冑輪」を成就し、復た能く「能引一切虚空眼頂諸三摩地諸陀羅尼善巧方便大甲冑輪」に安住して、一切の過去所引の未だ盡きざる惡不善の業、無暇の惡趣、諸有・諸趣死生の諸業、皆な能く除滅して、盡く餘すこと無くして果報を受けざらしむ。

又、善男子よ。譬へば、世界の水災浸るの時、此の三千大千世界の諸の小世界・各の四大洲・八萬の小渚・妙高山王・及び諸山等に於て、皆[三六]灰水の爲に[三七]浸爛銷盡して、餘り有ること無からしむるが如し。是の如く、菩薩は、「能引遍滿虚空無量無邊廣大衆具辯無礙解一切佛法諸三摩地諸陀羅尼堅固大忍大甲冑輪」を成就し、復た能く「能引一切虚空眼頂諸三摩地諸陀羅尼善巧方便大甲冑輪」に安住して、一切の過去所引の未だ盡きざる惡不善の業、無暇の惡趣、諸有・諸趣死生の諸業、皆な能く除滅して、盡く餘すこと無くして果報を受けざらしむ。

又、善男子よ。譬へば、黒暗の虚空に遍滿するも、朝日出づるの時、皆な能く除滅するが如し。是の如く、菩薩は、「能引遍滿虚空無量無邊廣大衆具辯無礙解一切佛法諸三摩地諸陀羅尼堅固大忍大甲冑輪」を成就し、復た能く、「能引一切虚空眼頂諸三摩地諸陀羅尼善巧方便大甲冑輪」に安住して、無邊虚空の智日を發起して、能く永く自身の[三八]四倒無明の黒暗を除滅し、一切の過去所引の未だ盡き

※ 能引一切虚空眼頂諸三摩地諸陀羅尼善巧方便大甲冑輪

【三五】 北涼本には「離一切相得虚空眼火光照三昧一切三昧王方便大莊嚴輪」と作す。

【三六】 宋・元・明三本、災水に作る。

【三七】 同上三本、浸潤消に作る。

【三八】 四顛倒に同し。

さる惡不善の業、無暇の惡趣、諸有・諸趣死生の諸業、皆な能く除滅し、盡く餘すこと無くして果報を受けさらしむ。

又、此に由るが故に、諸の佛法に於て、增進自在にして常に退轉無く、復た惡友力行に隨順せず、常に一切の佛及び諸の菩薩、聲聞・弟子に見ゆるを離れず、法を聞くを離れず、衆僧に親近し供養するを離れさるを得て、諸の功德に於て、心に常に厭ふこと無く、乃至は菩提に恒に間斷すること無く、[illegible]

又、常に念佛思惟を離れず、乃至は夢中にも亦た暫くも廢すること無し。

又、善男子よ。云何が、菩薩摩訶薩の「能引遍滿虛空無量無邊廣大衆具辭無礙解一切佛法諸三摩地諸陀羅尼堅固大忍大甲冑輪」なる。謂はく、諸の菩薩、[三九]初靜慮、乃至、第四靜慮に入り、[四〇]無邊虛空處、乃至、非想非非想處に入り、[四一]滅受想定に入り、此の定中に住して、一切の三受・三行斷滅して心の行動すること無く、諸の受・想」・思・觸・作・意等悉く皆な斷滅す。此の定に安住して、或は一日夜、或は復た乃至、七七日夜、定味食を受け、此の定[四二]從り起つて、其の心寂靜にして取著する所無く、宴然として住し、復た、[四三]勝義究竟空定に入り、此の定中に住して、其の心平等にして取著する所無きは猶し虛空の如く、身の諸の毛孔より皆な霜液を出すの狀は昴星の如くにして一切の欝烝結縛を滅し、此の定より起つて、正憶念を得て最勝の喜樂其の身に充遍す。大自在天子の[四四]現一切樂定に入りて身の諸の毛孔皆な遍く樂を受くるが如し。是の如く、菩薩、樂其の身に觸れて、便ち佛を思念す。佛を思念するが故に、則ち唯だ佛のみを見たてまつりて餘相を見ず。菩薩、爾の時、若し一佛を念ずれば則ち一佛を見、若し多佛を念ずれば則ち多佛を見、若し小身の佛を念ずれば則ち小身の佛を見、若し大身の佛を念ずれば則ち大身の佛を見、若し無量身の佛を念ずれば則ち無量身の佛を見、若し自身の佛身相を爲すことを念ずれば則ち自身の佛身に同じく衆相圓滿するを見、若し他身の佛

【三九】四禪を指す。[illegible]
【四〇】四無色定（空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非非想處）を指す。前の有心定の四禪と合して、八等至を擧げたるなり。
【四一】又、滅盡定といふ。無心定の一。六識の心心所を滅盡して起らしめざる禪定なり。非想天に屬す。特に受と想とを厭ふが故に、滅受想定と異名す。
【四二】元本、從二此定一起を、生二此定一起に作る。
【四三】また眞空觀ともす。北涼本、第一義空に作る。所謂る空定とは三三昧を指す。所謂る空無相無願三昧なり。
【四四】北涼本も亦た「現一切樂三昧」に作る。[illegible]

身相を爲すことを念ずれば則ち他身の佛身に同じく衆相圓滿するを見、若し一切の情非情數の所有の色像の佛身相を爲すことを念ずれば則ち一切の情非情數の所有の色像の皆な佛身に同じく衆相圓滿するを見て其の餘の一切の色像を見ず。菩薩、爾の時、便ち是の念を作す。一切の諸法、一切の色像は、皆な幻等の如くに、諦實にして虛ならず。我れ、今復た應に皆な悉く一切の三受・三行等の法を斷滅して、餘り有ること無からしむべしと。是の念を作し已つて、[四五]滅盡定に入る。此の定に住して、心に期する所の如く、皆な盡く斷滅して、定味の食を受く。或は一七日夜、或は二七日夜、或は三四五六七八九十の七日夜、或は無量百千俱胝那庾多劫を經、力の所能に隨つて此の定に安住して、定味の食を受く。此の定より起つて、其の心寂靜にして取著する所無く、宴然として住す。復た、勝義究竟空定に入り、廣說すれば前の如く、乃至、佛身相を思念し已つて、一切の法、一切の色像は皆な幻等の如くに諦實にして虛ならず、と知る。

善男子よ。是を、菩薩摩訶薩の「能引遍滿虛空無量無邊廣大衆具辭無礙辯一切佛法諸三摩地諸陀羅尼堅固大忍大甲冑輪」と名づく。菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、則ち能く「能引一切虛空眼頂諸三摩地諸陀羅尼善巧方便大甲冑輪」に安住す。此の輪に住するが故に、無邊虛空智日を發起して、能く永く自身の四倒無明の黑暗を除滅し、一切の過去所引の未だ盡きざる惡不善の業、無暇の惡趣、諸有・諸趣死生の諸業を、皆な能く除滅して、盡く餘すこと無くして果報を受けざらしむ。

善男子よ。若し、菩薩摩訶薩、此の輪を成就すれば、初發心より、一切の五欲皆な能く除斷して、一切の聲聞・獨覺に超勝して、普く一切の聲聞・獨覺の爲に大福田と作り、一切の聲聞・獨覺乘等皆な應に供養し承事し守護すべし。此の輪に由るが故に、諸の佛法に於て、增進自在にして常に退轉無く、復た惡友力行に隨順せず、常に一切の佛、及び諸の菩薩、聲聞の弟子に見ゆるを離れず、法を聞くを離れず、衆僧に親近し供養するを離れざることを得て、諸の功德に於て心に常に厭ふこと無

【四五】Nirodhasamāpatti. 滅受想定に同じ。前註(四一)を見よ。受と想とを厭ふに依り。一に滅受想定と異名す。

く、乃至は菩提に恒に間斷無く、又、常に念佛思惟を離れず、乃至は夢中にも亦た暫くを廢すること[四六]無し。是の如くにして、菩薩は、福德智慧速疾かに圓滿し、久しからずして清淨佛國に安住して、無上正等菩提を證得せん。彼の佛國に於て、一切の有情は、皆な化生を受けて、色相佛の如く、煩惱微薄にして、皆な大乘に住さん。

爾の時、世尊、重ねて此の義を顯して頌を說いて曰はく、

諸の法器を成ぜんと欲して、　一切の煩惱を斷じ、
常に眞空に趣入せば、　衆事作し難きこと無し。
諸有の縛を斷んが爲には、　當に勤めて等持を修すべし。
功德定相應して　必ず難思慧を獲ん。
[四七]靜慮と無色と　滅定と眞空觀とを修さば、
念佛の勝智を起して、　能く一切の惡を盡さん。
有無の一切の法は、　破するに眞空觀を以てすれば、
永く諸の惡趣を離れて、　常に諸佛に見ゆることを得ん。
善く眞空觀を修して、　勤めて諸の善法を學び、
一切の佛を供養しまつれば、　速かに當に佛果を成ずべし。
有情の親友と爲りて、　煩惱の病を滅除して、
速かに淨佛國に住して、　大菩提を證得せん。
衆生は佛相の如くにして　佛土に於て遍滿し、
皆な佛乘を趣求して、　聲聞・獨覺を離れなん。

【四六】宋・元・明三本、無を不に作りて、不二暫廢一とす。

【四七】以下、四禪定と四無色定と滅盡定と勝義究竟空定とを指下。

獲益囑累品*　第八

佛*、是の如きの大法門を說きたまふの時、衆會の中に於て、殑伽沙に等しき菩薩摩訶薩有り。過去に久しく念佛思惟を習ひき。今、世尊所說の念佛修觀の方便を聞きて、皆な[四八]「念佛三摩地門」を得たり。復た、無量無邊の衆生有りて、是の法を聞き已つて、皆な[四九]「一切定命華鬘陀羅尼門」を得たり。復た、無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、皆な[五〇]「一切首楞伽摩電光依止陀羅尼門」を得たり。復た、無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、皆な[五一]「一切法自在轉光明依止順忍」を得たり。復た、無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、塵を遠ざかり垢を離れて、諸法の中に於て、[五二]淨法眼を生じて、預流果を得たり。復た、無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、一來果を得たり。復た、無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、不還果を得たり。復た、無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、皆な最上阿羅漢果を得たり。復た、無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、心に三界の牢獄を出離せんことを求めて、佛に依つて出家して、正法に趣入せり。復た無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、壽を盡して十善業道に安住し、聲聞乘に依つて發心して退かず。復た、無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、壽を盡して十善業道に安住して、獨覺乘に依つて發心して退かず。復た、無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、壽を盡して十善業道に安住して、大乘中に依つて、阿耨多羅三藐三菩提心を發して復た退轉せず。復た、無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、世の正見を得、此の正見に由りて一切の惡趣に往く因たる煩惱の惡業を除滅して、一切の善趣に向ふ因たる正願の善業を増長せり。復た、無量無邊の衆生有りて、佛の所說を聞きて、皆な三歸を受けて近事・近住の淨戒に安住し、樂んで佛を供養し、樂んで法を聽聞し、樂んで僧に奉事して、晝夜に精勤し、曾て懈廢すること無し。復た、無量無邊の

※ 北涼本卷八「智相品第十五」末尾に相當す。麗本等「大乘大集地藏十輪經獲益囑累品第八」に作るも。今明本に依り、經名九字を略す。

※獲益分

【四八】念佛三摩地門。北涼本には「是の念佛百千三昧を聞きて、悉く一切三昧方便に入りて」に作る。

【四九】一切定命華鬘陀羅尼門。北涼本には「憶念總持華鬘」に作る。

【五〇】一切首楞伽摩電光依止陀羅尼門。北涼本には「首楞嚴三昧」と「電光三昧」とに分つ。

【五一】一切法自在轉光明依止順忍。北涼本には「一切法照明逮無生忍」とす。

【五二】北涼本には法眼淨。

衆生有りて、佛の所說を聞いて、一切の邪趣・邪歸の惡意・惡業を遠離して、佛法の中に於て、決定の信を得て、家法を棄捨して、淸淨にして出家せり。

*爾の時、世尊、[五三]虛空藏菩薩摩訶薩に告げて言はく、

『善男子よ。吾れ、今、此の「地藏十輪大記法門」を持して、汝が手に付囑す。汝、當に受持して廣く流布せしむべし。若し、諸の衆生、此の法門に於て、能く其の義を讀誦し思惟し他の爲に解說して正行に住する者有らば、汝、當に彼が爲に「十法」を守護して長夜に於て利益安樂ならしむべし。

*何等をか、十と爲す。一には、彼が爲に一切の財位を守護して、損[五四]乏無からしめよ。二には、彼が爲に一切の怨敵を守護して、侵害せざらしめよ。三には、彼が爲に守護して、一切の邪見・邪歸の十惡業道を捨てしめよ。四には、彼が爲に守護して、一切の身語の譴罰を免ぜしめよ。五には、彼が爲に守護して、一切の誹毀輕弄を遮斷せよ。六には、彼が爲に守護して、一切の軌範・尸羅に於て、皆な犯すこと無きを得せしめよ。七には、彼の爲には、彼の爲に守護して、悉く一切の非人・[五五]四大乖反・非時の老病を除滅せしめよ。八には、彼が爲に守護して、一切の非時・非理の災横に遭ひて天歿せざらしめよ。九には、彼が爲に守護して、命終らんと欲するの時、一切の諸佛の色像を見たてまつることを得せしめよ。十には、彼が爲に守護して、其をして終りて後ち善趣に往生して利益安樂ならしめよ。

善男子よ。若し、諸の有情の、此の法門に於て、能く其の義を讀誦し思惟して他の爲に解說して正行に住する者有らば、汝、當に彼が爲に勤めて是の如きの十法を守護するを加へて、長夜に於て利益安樂ならしめよ』と。

時に、虛空藏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、

『唯然り。世尊よ。我れ、當に是の如きの法門を受持して、廣く流布せしむべし。若し、諸の有

※付囑分
【五三】北京本には、金剛藏菩薩とす。
※十法
【五四】乏字、宮本には、之に作る。
【五五】地水火風の四。

情の、此の法門に於て、能く其の義を讀誦し思惟して他の爲に解說して正行に住する者有らば、我れ、當に彼が爲に「十法」を守護して、長夜に於て利益安樂ならしめん。』と。

時に、薄伽梵、是の經を說き已りたまふ。衆會の中に於て、虛空藏菩薩摩訶薩・地藏菩薩摩訶薩・金剛藏菩薩摩訶薩・好疑問菩薩摩訶薩・天藏大梵等、及び諸の天・龍・藥叉・健達縛・阿素洛・揭路茶・緊捺洛・莫呼洛伽・人・非人等の一切の大衆、佛の所說を聞きて、皆な大いに歡喜し信受して奉行しき。

大乘大集地藏十輪經（終）

註訂正

神昉師撰「經序」中、二事の註「一二」に、世・出世の二事とせるは誤りにつき左の如く訂正す。

「二事とは、出家形相の僧衆と三乘相應の正法となり。此の二事の護持、第六卷に詳し。」

[illegible]

地藏菩薩本願經

唐于闐國三藏沙門　實叉難陀譯

卷の上

忉利天宮神通品第一[一]

是の如く我聞きぬ。一時、佛、[二]忉利天に在して、母の爲に說法したまふ。爾の時に十方無量の世界、不可說不可說の一切の諸佛及び大菩薩摩訶薩皆來つて集會し、釋迦牟尼佛の能く[三]五濁惡世に於て、不可思議大智慧神通の力を現し、剛彊の衆生を調伏し、苦樂の法を知らしめたまふことを讃歎し、各侍者を遣はして世尊を問訊す。是の時に如來、笑を含み、百千萬億の[四]大光明雲を放ちたまふ。所謂る大圓滿光明雲、大慈悲光明雲、大智慧光明雲、大般若光明雲、大三昧光明雲、大吉祥光明雲、大福德光明雲、大功德光明雲、大歸依光明雲、大讃歎光明雲なり。是の如き等の不可說の光明雲を放ち、已つて、又、種種微妙の音を出したまふ。所謂る[五]檀波羅蜜の音、尸波羅蜜の音、羼提波羅蜜の音、毘離耶波羅蜜の音、禪波羅蜜の音、般若波羅蜜の音、慈悲の音、喜捨の音、解脫の音、無漏の音、智慧の音、大智慧の音、師子吼の音、大師子吼の音、雲雷の音、大雲雷の音なり。是の如き等の不可說不可說の音を出したまひ已つて、娑婆世界、及び他方國土に無量億の天龍、鬼神有り。亦集りて忉利天宮に到る。所謂る[六]四天王天、忉利天、須焰摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵衆天、梵輔天、大梵天、少光天、無量光天、光音天、少淨天、無量淨天、遍淨天、福生天、福愛天、廣果天、無想天、無煩天、無熱天、善見天、善現天、色究竟天、摩醯首羅天、乃至、

【一】この品は全卷の序分に當る。後半は地藏菩薩の本生を擧げ、昔、母を度する因緣を述ぶ。

【二】忉利天＝Trāyastriṃśa 欲界六天中の第二天。須彌山の頂、閻浮提の上八萬由旬の處にありと云ふ。帝釋は善法堂天に在り。三十三天名は正法念處經に出づ。

【三】五濁惡世＝五濁とは一に劫濁、二に見濁、三に煩惱濁、四に衆生濁、五に命濁なり。人壽二萬歲劫已後に於ては見濁等の四濁起れば之を劫濁と云ふ。見濁とは身見、邊見等の見惑を云ひ、煩惱濁とは貪瞋痴等の一切の修惑を云ふ。衆生濁とは濁時の衆生は見濁、煩惱濁の結果短命寡福なるを云ひ、命濁とは壽命漸く縮少して乃至十歲に至るを云ふ。要するに四濁を起す惡時なれば劫濁と云ひ、合せて五濁惡世と云ふ。

【四】大光明雲＝大圓滿以下

非想非非想處天、一切の天衆、龍衆、鬼神等の衆、悉く來りて集會す。復た他方の國土、及び娑婆世界の海神、江神、河神、樹神、山神、地神、川澤神、苗稼神[七]、晝神、夜神、空神、天神、飲食神、草木神有りて、是の如き等の神皆來りて集會す。復た他方の國土、及び娑婆世界の諸大鬼王有り。所謂る惡目鬼王、噉血鬼王、噉精氣鬼王、噉胎卵鬼王、行病鬼王、攝毒鬼王、慈心鬼王、福利鬼王、大愛敬鬼王、是の如き等の鬼王、皆來りて集會す。

爾の時に釋迦牟尼佛、文殊師利法王子菩薩摩訶薩に告げたまはく、「汝、是の一切の諸佛菩薩、及び天龍、鬼神、此の世界、他の世界、此の國土、他の國土より、是の如く、今來つて集會して、忉利天に到る者を觀ずるに、汝、數を知るや不や。」と。文殊師利、佛に白して言さく、「世尊、若し我が神力を以て、千劫に測度すとも、知ることを得ること能はず。」と。佛、文殊師利に告げたまはく、「吾、佛眼を以て觀ずるすら、猶[八]、數を盡さず。此れは皆是れ、地藏菩薩、久遠劫より來、已に度したると、當に度すべきと、未だ度せざると、已に成就せると、當に成就すべきと、未だ成就せざるとなり。」と。文殊師利、佛に白して言さく、「世尊、我、已に過去より久しく、善根を修して、無礙智[九]を證す。佛の言ふ所を聞いて、即、當に信受すべし。小果の聲聞、天龍八部、及び未來世の諸の衆生等は如來の誠實の語を聞くと雖も、必ず、疑惑を懷かん。設使[一〇]、頂受せしむとも、未だ謗りを興すことを免れず。唯、願はくは世尊、廣く、地藏菩薩摩訶薩の因地に何の行を作し、何の願を立ててか、而も能く不思議の事を成就せるかを說きたまへ。」と。佛、文殊師利に告げたまはく、『譬へば、三千大千世界の所有る草木、叢林、稻麻、竹葦、山石を微塵として一物一數を一の恒河と作し、一恒河沙の一沙を界とし、一界の內の一塵を一劫とし、一劫の內に積む所の塵數を盡克く劫と爲すが如きも、地藏菩薩、十地の果位を證してより已來、千倍上の喩よりも多し。何に況や、地藏菩薩の聲聞、辟支佛地に在せしをや。文殊師利、此の菩薩の威神誓願は不可思議なり。若し未來世に、

の十種光雲をいふ。

【五】檀波羅蜜の音＝以下般若波羅蜜の音までは六波羅蜜の音を擧ぐ。波羅蜜とは到彼岸又は度の義にして、彼岸に度る菩薩の行法なり。檀（Dāna）とは布施、尸羅（Śīla）とは持戒、羼提（Kṣānti）とは忍辱、毘離耶（Vīrya）とは精進、禪（Dhyāna）とは禪定、般若（Prajñā）とは智慧を云ふ。

【六】四天王天＝以下は三界二十八天等を擧げ、一切の天衆を盡くせしものなり。今之を三界に分別すれば、四天王天（東方持國天、西方廣目天、南方增長天、北方多聞天）忉利天、焰摩天、兜率天、化樂天、他化自在天の六天は欲界。梵衆天、梵輔天、大梵天、（以上三天は初禪）、少光天、無量光天、光音天、（以上三天は第二禪）、少淨天、無量淨天、遍淨天、（以上三天は第三禪）、福生天、福愛天、廣果天、無想天、無煩天、無熱天、善見天、善現天、色究竟天（以上九天は第四禪）の十八天は色界。摩醯首羅天はこの色界の最頂に居す。乃至非想非非想處天とは無色界の空處、識處、無所有處、非想非非想處の四天なり。

【七】苗稼神＝苗稼とは稻の苗なれど百穀を指す。民に稼

善男子、善女人有りて是の菩薩の名字を聞き、或は讃歎し、或は瞻禮(せんらい)し、或は名を稱へ、或は供養し、乃至、形像を彩畫し、刻鏤塑漆せんに是の人は、當に、百返三十三天[一一]に生ずることを得て、永く、惡道に墮せざるべし。文殊師利、是の地藏菩薩摩訶薩は過去久遠不可說不可說劫の前に於て、身、大長者の子たりし時、世に佛有り。號して、師子奮迅具足萬行如來と曰ふ。時に長者の子、佛の相好の千福莊嚴せるを見て、因つて、彼の佛に問ひたてまつる。「何なる行願を作してか、而も、此の相を得たまへるか。」と。時に師子奮迅具足萬行如來、長者の子に告げたまはく、「此の身を證せんと欲せば、當に須く久遠より一切受苦の衆生を度脫すべし。」と。文殊師利、時に長者の子、願を發して言く、「我、今より未來際を盡して不可計劫に、是の罪苦六道の衆生の爲に、廣く方便を設けて、盡く解脫せしめて、而も我自身、方に佛道を成せん。」と。是を以つて、彼の佛前に於て、斯の大願を立て、今に百千萬億[一二]那由他不可說劫に尙菩薩たり。又、過去不可思議阿僧祇劫に於て、時に、世に佛有り。號して覺華定自在王如來と曰ふ。彼の佛の壽命は四百千萬億[一三]阿僧祇劫なり。[一四]像法の中に一りの婆羅門の女有り。宿福深厚にして衆に欽敬せられ、行住臥に諸天衞護す。其の母、邪を信じ常に三寶を輕んず。是の時、聖女、廣く方便を說いて其の母を勸誘し正見を生ぜしむ。而れども此の女の母、未だ全く信を生ぜず。久しからずして命終し、魂神、[一五]無間地獄に墮在す。時に、婆羅門女、母の世に在りしとき因果を信ぜざりしことを知つて、計るに當に業に隨つて必ず惡趣に生ずべしと。遂に家宅を賣つて廣く香華及び諸の供具を求めて、先づ佛の[一六]塔寺に於て、大に供養を興す。覺華定自在王如來の其の形像、一寺の中に在つて威容を塑畫して、端嚴畢く備れるを見る。時に婆羅門女、尊容を瞻禮して倍(ますます)敬仰を生じ、私に自ら念言すらく、「佛は大覺と名く。一切智を具へたまへり。若し〔佛〕在世の時ならんには、我が母の死後を儻(もし)來つて佛に問ひたてまつらば必ず處所を知りたまはん。」と。時に婆羅門女、泣(なみだ)を[一七]垂るること、良や久しうして、如來を瞻戀(せんれん)した

積を數うる神なり。

【八】原文に以佛眼觀故猶不盡數の故字を省く。

【九】無礙智＝無礙とは通達自在にして一切の礙りなきこと。

【一〇】頂受＝頂戴受持すること。

【一一】三十三天＝忉利天のこと。前出。

【一二】那由他＝Nayuta 數目の名。億に當る。

【一三】阿僧祇劫＝阿僧祇(Asaṃkhya)とは數目の名。無央數の義。劫(Kalpa)とは時分を云ふ。長時の義なり。

【一四】像法＝正像末三時の一。像とは似にして正法に似たる訛替の義。正像の分時に異說あり。一說に依れば佛滅後正法五百年の後一千年間は正法に似た佛法のみ行はるるを像法時といふ。證果の者なく但だ敎、行のみあるを云ふ。

【一五】無間地獄＝Avici-naraka 八熱地獄の一。阿鼻地獄とも云ふ。五逆罪を犯せしものは此に墮して苦を受くること無間なればなり。無間苦に

てまつる。忽ち空中の聲を聞く。曰く、「泣く者、聖女よ、悲哀に至ること勿れ。我、今、汝が母の去處を示さん。」と。婆羅門女、合掌して、空に向ひ而して空に白して曰く、「是れ何の神德か。我が憂慮を寬めたまふ。我、母を失うてより已來、晝夜憶戀すれども母の生界を問知す可き處無し。」と。時に空中に聲有り。再び、女に報じて曰く、「我は是れ、汝が瞻禮する所の者、過去の覺華定自在王如來なり。汝、母を憶ふこと常情の衆生の分に倍するを見て、故（ことさら）に來つて告げ示すなり。」と。婆羅門女、此の聲を聞き已つて、身を擧げて自ら撲ち支節皆損ず、左右扶侍して、良や久しうして、方に蘇へり、而も空に白して曰く、「願はくは、佛、慈愍して、速に我が母の生界を說きたまへ。我、今、身心將に死せんとすること久しからず」と。時に覺華定自在王如來、聖女に告げて曰はく、「汝、供養し畢つて但だ早く舍に返つて端坐し、吾の名號を思惟せよ。卽、當に母の所生の去處を知るべし」と。時に、婆羅門女、尋いで、佛を禮し已つて、卽ち其の舍に歸る　母を憶ふを以ての故に端坐して、覺華定自在王如來を念ず。一日一夜を經て、忽ち、自身を見るに、一海邊に到れり。其の水、涌沸して、諸の惡獸多く、盡く復た鐵身なり。海上に飛び走りて、東西に馳逐す。諸の男子、女人、百千萬數、海中に出沒して、諸の惡獸爭ひ取つて、食噉せらるるを見る。又、夜叉を見る。其の形、各異なり。或は多手多眼、多足多頭、口牙、外に出で、利刄、劍の如し。諸の罪人を驅つて、惡獸に近かしめ、復た自ら搏攫し、頭足相就く。其の形萬類、敢へて久しく視られず。時に波羅門女、佛を念ずるの力を以つての故に自然に懼るること無し。一りの鬼王有り、名づけて無毒と曰ふ。稽首し、來り迎へて、聖女に白して曰く、「善哉。菩薩、何に緣つてか此に來る。」と。時に波羅門女、鬼王に問うて曰く、「此れは是れ、何れの處ぞ。」と。無毒答へて曰く、「此れは是れ、[一八]大鐵圍山の西面、第一重海なり。」と。聖女問うて曰く、「我れ聞く。鐵圍の內、地獄、中に在りと。是の事實なりや不や」と。無毒答へて曰く、「實に地獄有り。」と。聖女問うて曰く、「我、今、云何か

關しては異說あり。

【一六】塔寺＝塔に二種あり。一に塔婆（又は窣塔婆）とは梵語 Stupa の略音にして元と佛舍利を藏せるより起りしもの。二に制底（支提 Chaitya）とは塔と同じく土石を積集して造れども佛舍利を藏せず。この塔と制底に就きては總別、同異の異說あるも今は略す。寺とは毘訶羅（Vihāra）と云ひ遊行處と譯す。僧の住處を云ふ。漢字の寺は元と支那の官司の名の轉用にして白馬寺に起因す。魏に招提と云ひ、隋に道場と云ひ、唐以後再び寺と云ふ。邦語のテラに就きては異說あり。

【一七】經文垂泣に作る。

【一八】大鐵圍山＝古代印度の地理說によれば、須彌山を中心として外に七山八海あり、第八海は鹹海にして、之を圍繞して一小世界を區劃する一大鐵山あり。これ大鐵圍山にして、贍部等の人界四大洲はこの鐵圍山の中第八海中にありと云ふ。

獄所に到ることを得ん。」と。無毒答へて曰く、「若し威神に非ずんば、卽、須く業力なるべし。此の二事に非んば、終に、到ること能はず。」と。聖女又問ふ。「此の水何に緣つてか乃ち涌沸し、諸の罪人及以惡獸多きや。」と。無毒答へて曰く、「此れは是れ、閻浮提[19]、造惡の衆生新死の者四十九日を經て後、人の繼嗣の〔その〕爲に功德を作し、苦難を救拔すること無く、生ける時も又善因無きもの、當に本業に據つて感ずる所の地獄なるべし。自然に先づ此の海を渡る。海東十萬[20]由旬に、又、一つの海有り。其の苦此れに倍す。彼の海の東に、又、一つの海有り。其の苦復た倍す。三業惡因の招感する所なり。共に業海と號す。其の處、是れ也。」と。聖女、又、鬼王無毒に問うて曰く、「地獄は何くにか在る。」と。無毒答へて曰く、「三海の內は、是れ大地獄なり。其の數百千にして各々差別あり。所謂る大なる者は具に[21]十八有り。次に五百有り。苦毒無量なり。次に千百有り。亦無量の苦あり。」と。聖女、又、大鬼王に問うて曰く、「我が母、死して來た、未だ久しからず。知らず、魂神當に何の[22]趣に至るべきや。」と。鬼王、聖女に問うて曰く、「菩薩の母、在生に何の行業を習へるか。」と。聖女、答へて曰く、「我が母邪見にして三寶を譏毀し、設ひ或は暫く信ずれども、旋つて又敬せず。死して日淺しと雖も、未だ生處を知らず。」と。無毒、問うて曰く、「菩薩の母の姓氏は何等ぞや。」と。聖女、答へて曰く、「我が父、我が母、俱に、波羅門[23]の種なり。父を[24]尸羅善現と號し、母を[25]悅帝利と號す。」と。無毒、合掌して菩薩に啓して曰く、「願くは、聖者本處に却返りたまへ。憂憶し、悲戀するに至ること無かれ。悅帝利罪女は天に生じてより以來、今三日を經たり。孝順の子、母の爲に供を設け、福を修し、覺華定自在王如來の塔寺に布施せしを承くと云ふ。唯だ菩薩の母、地獄を脫することを得るのみに非ず、應に是の無間の罪人、此の日悉く樂を受くることを得、俱に同じく生じ訖るべし。」と。鬼王、言ひ畢つて合掌して退く。婆羅門女、尋いで夢の如くにして歸る。此の事を悟り已つて、便ち覺華定自在王如來の塔像の前に於いて弘誓願を立つ。「願くは

【一九】閻浮提＝Jambudvīpa 贍部洲、南閻浮提とも云ふ。須彌山の南方にある大洲の名にして印度大陸のこと。引いては吾人の住する世界を云ふ。此の洲の中央に閻浮樹の林あれば洲名とせり。

【二〇】由旬＝Yojana 又、踰繕那に作る。里程を計る稱目にして、或は三十里、或は四十里と云ふ。

【二一】十八＝十八地獄の名は十八泥犂經に出づ。一に光就居、二に居倨倅略、三に桑居都、四に樸、五に房卒、六に草烏卑次、七に都盧難且、八に不盧半呼、九に烏竟都、十に泥盧都、十一に烏略、十二に烏滿、十三に烏籍、十四に烏呼、十五に須健居、十六に末都乾直呼十七に區遮途、十八に陳莫なり。

【二二】趣＝六道を六趣といふが如く道に同じ。

【二三】婆羅門＝Brahmaṇa 四姓の第一位。

【二四】尸羅善現＝Śīla-subhūti 尸羅は戒と譯せられ、善現は原語Subhūti須善提なり。

【二五】悅帝利＝詳かならず。

我れ盡未來劫、應に罪苦有る衆生を廣く方便を設けて、解脫せしむべし、」と』。佛、文殊師利に告げたまはく、「時の鬼王無毒は當今の[二六]財首菩薩是なり。波羅門女とは卽ち地藏菩薩是なり。」と。

[二七]分身集會品第二

爾の時に、百千萬億不可思、不可議、不可量、不可說、無量阿僧祇世界の所有る地獄處の分身の地藏菩薩俱に來り集りて、忉利天宮に在り。如來の神力を以ての故に、各の方面を以て諸の解脫を得て、業道より出づる者と與なりき。亦各千萬億那由他の數有り。共に香華を持して、來つて佛を供養したてまつる。彼の諸の同じく來れる等の輩、皆、地藏菩薩の敎化に因りて、永く阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず。是の諸衆等、久遠劫より來、生死に流浪し、[二八]六道に苦を受けて、暫も休息無し。地藏菩薩、廣大の慈悲、深き誓願を以ての故に各果證を獲て、既に忉利に至り、心に踊躍を懷き、如來を瞻仰して、目、暫も捨てず。

爾の時に世尊、金色の臂を舒べて、百千萬億、不可思、不可議、不可量、不可說無量阿僧祇世界の諸の分身の地藏菩薩摩訶薩の頂を摩して、而も是の言を作したまふ。「吾、五濁惡世に於て、是の如き剛彊の衆生を敎化し、心を調伏し、邪を捨て、正に歸せしむるに、十に一二、尙、惡習の有るもの在らんに、吾、亦、身を千百億に分つて、廣く、方便を設く。或は、利根なるもの有れば聞いて卽ち信受す。或は、善果有るものは勤勸めて成就す。或は暗鈍のもの有りて、久しく化して方に歸す。或は業重のもの有りて、敬仰を生ぜざる是の如き等の輩の衆生、各各の差別あるを、身を分つて度脫す。或は男子の身を現じ、或は女人の身を現じ、或は天龍の身を現じ、或は神鬼の身を現じ、或は山林、川源、河池、泉井を現じ、利、人に及ぼして、悉く皆度脫す。或は天帝の身を現じ、或は梵王の身を現じ、或は轉輪王の身を現じ、或は居士の身を現じ、或は國王の身を現じ、或は宰輔

【二六】財首菩薩＝佛名經によれば、信、戒、多聞、捨、慧慚、愧の七財寶有れば財首と云ふ。又、觀佛三昧經によれば甚深首楞嚴定を獲得して等覺位に登ると云ふ。

【二七】以下第十品まで正宗文に當る。この品、初に世尊の詔告を叙べ、次に各分身の地藏菩薩自らの誓願を述ぶ。

【二八】六道＝六趣とも云ふ。地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上の六なり。この六所は衆生輪廻の道なれば六道と云ふ。

の身を現じ、或は官屬の身を現じ、或は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の身、乃至聲聞、羅漢、辟支佛、菩薩等の身を現じて以て化度す。但だ、佛身獨り其の前に現ずるのみに非ず。汝、吾が累劫勤苦して、是の如き等の難化剛强の罪苦の衆生を度脱することを觀よ。其の未だ調伏せざる者有れば、業報の應に隨つて、若は惡趣に墮して大苦を受けん時、汝、當に憶念すべし。吾、忉利天宮に在りて、殷勤に付囑せしことを。娑婆世界をして、彌勒の出世に至るまで已來の衆生をして悉く解脱し、永く諸苦を離れ、佛の授記に遇はしめよ。」と。

爾の時に諸の世界に分身せる地藏菩薩、共に一形に復して涕涙哀戀して、其の佛に白して言さく、「我、久遠劫より來、佛の接引を蒙り、不可思議の神力を獲て、大智慧を具せしめらる。我が分つ所の身は、百千萬億恒河沙の世界に遍滿す。一世界毎に百千萬億の身を化し、一身毎に百千萬億の人を度して三寶に歸敬して永く生死を離れ、涅槃の樂に至らしむ。但し佛法の中に於て爲す所の善事は一毛、一渧、一沙、一塵、或は毫髮許りなるも、我、漸く度脱して大利を獲せしめん。唯、願はくは世尊、後世惡業の衆生を以つて、慮を爲したまはざれ。」と。是の如く三たび、佛に白して言さく、「唯、願はくは世尊、後世惡業の衆生を以て、慮を爲したまはざれ。」と。爾の時、「佛、地藏菩薩を讃して言はく、「善哉。善哉。吾、汝が喜を助く。汝能く、久遠劫來發せる弘誓の願を成就して、廣く度し、將に畢らんとして、卽、菩提を證せよ」と。

[29] 觀衆生業緣品第三

爾の時に、佛の母、[30] 摩耶夫人、恭敬合掌して、地藏菩薩に問うて言く、「聖者、閻浮の衆生、造業の差別、所受の報應、其事云何。」と。地藏答へて言く、「千萬の世界乃及國土、或は地獄有り、或は地獄無し。或は女人有り、或は女人無し。或は佛法有り、或は佛法無し。乃至聲聞、辟支佛も亦、

【二九】この品は地藏菩薩、佛母摩耶夫人ために閻浮の衆生の業緣の差別を說き、無間地獄を詳說す。
【三〇】摩耶夫人＝Māyā 釋尊の母。

復、是の如し。但だ地獄の罪報一等のみに非ず。」と。摩耶天人重ねて菩薩に白さく、「且く、願はくは閻浮に於ける罪報所感の惡趣を聞かん。」と。地藏答へて言く、「聖母、唯、願はくは聽受したまへ。我粗之を說かん。」と。佛母白して言さく、「願はくは聖者、說きたまへ。」と。爾の時に、地藏菩薩、聖母に白して言さく、「南閻浮提の罪報の名號是の如し。若し衆生有つて、父母に孝ならずして、或は殺害に至らば當に無間地獄に墮して、千萬億劫にも出んことを求むとも期無かるべし。若し衆生有りて、佛身より血を出し、三寶を毀謗し、尊經を敬せざれば、亦、當に無間地獄に墮して、千萬億劫にも出んことを求むるに期無かるべし。若し衆生有りて、常住[三]を侵損し、僧尼を點汚し、或は伽藍の內にて恣に婬欲を行じ、或は殺し、或は害す。是の如き等の輩は當に無間地獄に墮して、千萬億劫にも出んことを求むるに期無かるべし。若し衆生有りて、僞りて沙門と作り、心は沙門に非ず、常住を破り用いて白衣を欺誑し、戒律に違背し、種々に惡を造らば、是の如き等の輩は當に無間地獄に墮して、千萬億劫にも出んことを求むるに期無かるべし。若し衆生有りて、常住の財物、穀米、飲食、衣服を偸竊し、乃至、一物をも與へざるを取らば、當に無間地獄に墮して、千萬億劫にも出んことを求むるに期無かるべし。」と。地藏、聖母に白して言さく、「若し衆生有りて、是の如きの罪を作らば、當に五無間地獄に墮すべし。暫く苦を停めんことを求むとも、一念をも得さらん。」と。

摩耶夫人、重ねて地藏菩薩に白して言さく、「云何なるをか、名けて無間地獄と爲すや。」と。地藏、聖母に白して言さく、「諸有地獄は大鐵圍山の內に在り。其の大地獄に一十八所有り。次に五百有り。名號各別なり。次に千百有り。名字も亦別なり。無間獄とは、其の獄城周匝せること八萬餘里。其の城純ら鐵にして、高さ一萬里、城上に火聚あり。空缺有ること少し。其の獄城の中に諸獄相連りて、名號各別なり。獨り一獄有り。名けて無間と曰ふ。其の獄の周匝、萬八千里、獄墻の高きこと

【三】常住＝共通に使用する常住物を云ふ。四方の僧物なり。之に四種あり。一に常住常住とは衆僧の厨庫、寺舍、衆具、華果等なり。二に十方常住とは日日僧に供する常食の如きもの。三に現前現前とは各比丘所屬の私物なり。四に十方現前とは亡僧の殘せる遺物等なり。

一千里、悉く是れ鐵をもつて爲れり。上の火は下に徹し、下の火は上に徹す。鐵蛇、鐵狗、火を吐いて獄牆の上に馳逐し、東西に走る。獄中に床有り、萬里に徧滿す。一人罪を受けて、自ら其の身を見るに、遍く臥して床に滿つ。千萬人罪を受くるも、各亦自ら身の床上に滿つることを見る。衆業の所感にして報を獲ること、是の如し。又、諸の罪人備さに衆苦を受く。千百の夜叉、及以、惡鬼の口牙は劍の如く、眼は電光の如し。手復た銅の爪にして、罪人を拖き拽く。復た夜叉有りて大鐵の戟を執りて、罪人の身に中て、或は口鼻に中て、或は腹脊に中て、空に拋げて、翻接す。或は床の上に置く。復た鐵鷹有りて罪人の目を啗ふ。復た鐵蛇有りて罪人の頸に繳ふ。百肢節の內に悉く長釘を下し、舌を拔きて耕犂し、腸を抽きて剉斬し、洋銅を口に灌ぎ、熱鐵を身に纏ふ。萬死千生、業感是の如し。動すれば億劫を經て出づることを求むるも期無し。此の界の壞する時、生を他界に寄せ、他界次いで壞すれば轉じて他方に寄す。他方の壞する時、展轉して相ひ寄す。此の界成じて後、還つて復た來る。無間の罪報其の事是の如し。又、五事の業感あり。故に無間と稱す。何等をか五と爲す。〔三〕一には日夜に罪を受けて以て劫數に至るに、時として間絕無し。故に無間と稱す。二には一人も亦滿ち、多人も亦滿つるが故に無間と稱す。三には罪器、叉棒、鷹蛇、狼犬、碓磨、鋸鑿、剉斫、鑊湯、鐵網、鐵繩、鐵驢、鐵馬、生革首に絡ひ、熱鐵身に澆ぐ。飢えては鐵丸を呑み、渴しては鐵汁を飲む。年より劫竟へ、數那由他にして苦楚相連りて更に間斷無きが故に無間と稱す。四には男子、女人、羌胡、夷狄、老幼、貴賤を問はず、或は龍、或は神、或は天、或は鬼、罪行業感して悉く同じく之を受くるが故に無間と稱す。五には若し此の地獄に墮して、初入の時より百千劫に至るまで、一日一夜に萬死萬生し、一念の間、暫く住することを求むれども得ず。業盡きて方に受生を得るをば除非す。此の連綿を以ての故に、無間と稱す。

地藏菩薩、聖母に白して言さく、「無間地獄を麁說すること是の如し。若し廣く地獄の罪器等の名、

【三】以下時無間、形無間、苦無間、果無間、命無間の五無間を述ぶ。

及び諸の苦事を說かば、一劫の中に說くことを求むとも、盡きさらん」と。摩耶夫人聞き已りて愁憂し、合掌頂禮して退く。

[三三]閻浮衆生業感品第四

爾の時に、地藏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、我、佛如來の威神力を承るが故に、徧く百千萬億の世界に是の身形を分ち、一切業報の衆生を救拔す。若し如來大慈力の故に非んば、卽ち是の如きの變化を作すこと能はず。我、今又、佛の付囑を蒙る。[三四]阿逸多の成佛に至らんより已來の六道の衆生を度脫せしめん。唯然り、世尊、願はくは慮り有らんことを。」と。

爾の時に、佛、地藏菩薩に告げたまはく、「一切の衆生、未だ解脫せざる者は[三五]性識定まること無く、惡習業を結び、善習果を結び、善を爲し、惡を爲し、境を逐うて生じ、[三六]五道に輪轉して暫くも休息すること無く、動もすれば塵劫を經て迷惑障難あり。魚の網に遊ぶが如し。是を將つて長流するに入ることを脫して暫く出づるも、又復た網に遭ふ。是れ等の輩を以て、吾當に憂念すべし。汝既に是の往願、累劫の重誓を畢へて廣く罪輩を度す。吾復た何をか慮らん。」と。是の語を說きたまふ時、會中に一りの菩薩摩訶薩有り。定自在王と名く。佛に白して言さく、「世尊、地藏菩薩は累劫より已來、各〻何の願を發して、今、世尊より慇懃の讚歎を蒙るや。唯、願はくは世尊、略して之を說きたまへ。」と。

爾の時に、世尊、定自在王菩薩に告げたまはく、「諦に聽け。諦に聽きて善く之を思念せよ。吾、當に汝が爲に分別し、解說すべし。乃往、過去無量阿僧祇那由他不可說劫に、爾の時に佛有り。[三七]一切智成就如來、[三八]應供、[三九]正遍知、[四〇]明行足、[四一]善逝、[四二]世間解、[四三]無上士、[四四]調御丈夫、[四五]天人師、[四六]佛世尊と號す。其の佛の壽命六萬劫なり。未だ出家したまはさりし時、小國の王たり。一の隣國の王と友たり。

【三三】この品は閻浮衆生の業感の因緣を詳說す。

【三四】阿逸多＝Ajita 阿氏多、阿制多に作る。彌勒菩薩の字なり。

【三五】性識＝衆生の性質や心を云ふ。

【三六】五道＝地獄、餓鬼、畜生、人、天を云ふ。六道の中、阿修羅を缺けるものなり。

【三七】一切智成就如來＝如來(Tathāgata)とは二解あり。如より來生せるもの、如に向つて去るものとなり。故に如

同じく十善を行じて衆生を饒益す。其の隣國の內に所有る人民多く衆惡を造る。二りの王議り計りて廣く方便を設く。一王發願すらく、早く佛道を成じて、當に是の輩を度して餘り無からしむべしと。一王、發願すらく、若し先づ罪苦を度して、是をして安樂ならしめ、菩提に至ることを得しめずんば、我終に未だ成佛を願はず。」と。佛、定自在王菩薩に告げたまはく、「一王發願して早く成佛せん者は、卽ち一切知成就如來是なり。一王發願して永く罪苦の衆生を度して未だ成佛を願はざる者は、卽ち地藏菩薩是れなり。復た過去無量阿僧祇劫に於いて、佛有りて世に出でたまふ。淸淨蓮華目如來と名く。其の佛の壽命四十劫なり。像法の中に一りの 四七 羅漢有り。福をもつて衆生を度す。次でに因つて敎化す。一りの女人に遇ふ。字を光目と曰ふ。食を設けて供養す。羅漢之に問ふ。「何等をか願はんと欲するや。」と。光目答へて言く、「我が母、亡ぜしの日なるを以て、福を資けて救拔すれども、未だ我が母の生處何れの趣たることを知らず。」と。羅漢之を愍みて、爲に定に入りて觀見するに、光目の母、惡趣に墮在して極大の苦を受く。羅漢、光目に問うて言く、「汝が母は在生に何なる行業を作してか、今惡趣に在りて極大の苦を受くるや。」と。光目答へて言く、「我が母の所習、唯、好んで魚鼈の屬を食噉す。食する所の魚鼈、多くは其の子を食し、或は炒り、或は煮て情を恣にして食噉す。其の命數を計るに千萬も復た倍す。尊者、慈愍して如何にかして哀救したまへ。」と。羅漢之を愍みて爲に方便を作して、光目に勸めて言く、「汝、志誠に淸淨蓮華目如來を念じ、兼ねて形像を塑畫す可し。存亡、報を得ん。」と。光目聞き已つて卽ち所愛を捨て、尋いで佛像を畫きて之を供養し、復た恭敬の心をもつて悲泣し、瞻禮す。忽ち夜後に於いて夢に佛身を見るに、金色晃耀にして須彌山の如し。大光明を放つて光目に告げたまふ。「汝が母久しからずして當に汝が家に生ずべし。纔に飢寒を覺えば、卽ち當に言說すべし。」と。其の後、家內の婢一子を生ず。未だ三日を滿たずして乃ち言說す。稽首悲泣して光目に告ぐ。「生死の業緣は果報自ら受く。吾は是れ汝が母。久し

去とも云ふ。一切智を成就せる如來の意にして、佛の尊稱なり。

【三八】 應供、正遍知……=これ佛の功德を讃歎せし尊稱にして、如來の十號と云ふ。應供=Arhat 一切天地の衆生の供に應ずべきが故なり。

【三九】 正遍知=Samyaksambuddha 正しく遍ねく一切法を知るが故なり。

【四〇】 明行足=Vidyācaraṇasampanna 宿命、天眼、漏盡の三明行を具足するが故なり。

【四一】 善逝=Sugata 一切智を以て八正道を行じ、涅槃に入るが故なり。

【四二】 世間解=Lokavit 世間の有情、非情、一切種の煩惱及び淸淨をよく知るが故なり。

【四三】 無上士=Anuttara 一切諸法の中に於て涅槃は無上なるが如く、一切衆生の中に於ては佛は最無上なればなり。

【四四】 調御丈夫=Puruṣadamyasārathi 佛は大慈大智の故に或時は柔軟語もて、或時は苦切語もて能く丈夫を調節して善道に入らしむるが故なり。

【四五】 天人師=Śāstā 佛は人天の導師にして善く應作、不應作、善、不善、を敎示すればなり。

【四六】 佛=Buddha 佛とは知

く暗冥に處す。汝に別れてより來、累ねて大地獄に墮す。汝が福力を蒙りて、方めて生を受くることを得たり。下賤の人と爲りて又復た短命なり。壽年十三にして更に惡道に落ちん。汝何の計有つてか吾をして脫免せしめんや。」と。光目、說を聞き、母と知ること疑なし。哽咽悲啼して婢子に白す。「既に是れ我が母なり。本罪を知る合し。何の行業を作りてか、惡道に墮ちたまふや。」と。婢子答へて言く、「殺害と毀罵との二業を以て報を受く。若し福を蒙り、吾が難を救拔するに非ずんば、是の業を以ての故に未だ解脫す合からず。」と。光目問うて曰く、「地獄の罪報、其の事云何。」と。婢答へて言く、「罪苦の事、稱說するに忍びず。百千歲の中にも卒に白すとも竟へ難し。」と。光目聞き已りて、啼淚號泣して空界に白く、「願はくは我が母永く地獄を脫し、十三歲を畢へて更に重罪及び惡道を歷ること無く、十方の諸佛、慈をもつて我を哀愍し、我、母の爲めに發する所の廣大の誓願を聽きたまへ。若し我が母永く四八三塗及び斯の下賤乃至女人の身を離ることを得て、永劫に受けずんば、願はくは我れ今日自り後、清淨蓮華目如來の像の前に對して、却後百千萬億劫の中、應に世界の所有る地獄及び三惡道の諸の罪苦の衆生有らんに、誓願して救拔し、地獄、惡趣、畜生、餓鬼等を離れしむべし。是の如き罪報等の人盡く成佛し竟りて、我れ然して後に方に正覺を成ぜん。」と。誓願を發し已りて、具に清淨蓮華目如來の之に告げて曰ふことを聞く。「光目、汝、大慈愍ありて、善く能く母の爲に是の如き大願を發す。吾、汝が母を觀るに、十三歲畢りて此の報を捨て已りて、生じて四九梵志と爲り、壽年百歲ならん。是の報を過ぎて後、當に無憂國土に生じて、壽命不可計劫なるべし。後、佛果を成じて、廣く人天を度すること、數、恒河沙の如くならん。」と。佛、定自在王に告げたまはく、「爾の時の羅漢、福をもつて光目を度するは、卽ち無盡意菩薩是なり。光目の母とは卽ち解脫菩薩是なり。光目女とは卽ち、地藏菩薩是なり。過去久遠劫の中より是の如く慈愍して、恒河沙の願を發して廣く衆生を度す。未來世の中に、若し男子、女人有りて、善を行ぜざる者、惡

者、覺者の故なり。世尊＝Bhagavat又はLokanātha上の九號等を具すれば世に尊重せらるるが故なり。

【四七】　羅漢＝Arhān具には阿羅漢と云ふ。小乘の悟を極めたる位、又はその位の人を云ふ。

【四八】　三塗＝塗は途の義。火途、血途、刀途の三を云ふ。血途とは地獄趣の猛火に燒かるる處、血途とは畜生趣の互に相食む處、刀途とは餓鬼趣の刀劍杖を以て逼迫せらるる處なり。

【四九】　梵志＝Brahmacārin梵天の法を志求するものを云ふ。

を行ずる者、乃至因果を信ぜざる者、邪婬妄語する者、兩舌惡口する者、大乘を毀謗する者、是の如きの諸業の衆生、必ず惡趣に墮せん。若し善知識の勸めに遇うて、一彈指の間も地藏菩薩に歸依せしめば、是の諸の衆生、卽ち三惡道の報を解脱することを得ん。若し能く、志心に歸敬し、及び瞻禮し、讃歎し、香華、衣服種々の珍寶、或は復た飮食をもつて、是の如く奉事せん者は、未來百千萬億劫の中、常に諸天に在りて、勝妙の樂を受けん。若し天福盡きて人間に下生すとも、猶百千劫に常に帝王と爲りて、能く宿命因果本末を憶せん。定自在王、是の如し。地藏菩薩は此の如きの不可思議、大威神力有りて、廣く衆生を利す。汝等諸の菩薩、當に是の經を記して廣宣流布すべし。」と。定自在王、佛に白して言さく、「世尊、願はくは慮ること有らざらんことを。我等千萬億の菩薩摩訶薩必ず能く佛の威神を承けて廣く是の經を演べ、閻浮提に於て衆生を利益せん。」と。定自在王菩薩、世尊に白し已つて、合掌恭敬し、禮を作して退く。

　爾の時四方の天王倶に座より起つて、合掌恭敬して佛に白して言さく、「世尊、地藏菩薩は久遠劫より來(このかた)、是の如き大願を發したまふ。云何が今に至るも猶度すること未だ絕えず、更に廣大の誓言を發したまふか。唯、願はくは世尊、我等が爲めに說きたまへ。」と。佛、四天王に告げたまはく、「善哉。善哉。吾、今、汝及び未來、現在の天人衆等を廣く利益せんが爲めの故に、地藏菩薩、娑婆世界閻浮提の內、生死道中に於て、慈哀し、救拔し、一切罪苦の衆生を度脫する方便の事を說かん。」と。四天王言く、「唯、然り、世尊、願樂して聞かんと欲す。」と。佛、四天王に告げたまはく、「地藏菩薩は久遠劫より來、今に至る迄で衆生を度脫して猶未だ願を畢へず、此の世の罪苦の衆生を慈愍して、復た未來無量劫中を觀るに因蔓斷えず。是を以つての故に又重願を發したまふ。是の如く菩薩は娑婆世界閻浮提の中に於いて百千萬億の方便をもつて敎化を爲す。四天王、地藏菩薩は若し殺生の者に遇はば、宿殃短命の報を說く。若し竊盜の者に遇はば、貧窮苦楚の報を說く。若し邪婬

の者に遇はば、雀鴿鴛鴦の報を說く。若し惡口の者に遇はば、眷屬鬪諍の報を說く。若し毀謗の者に遇はば、無舌瘡口の報を說く。若し瞋恚の者に遇はば、醜陋癃殘の報を說く。若し慳悋の者に遇はば、所求違願の報を說く。若し飮食度無き者に遇はば飢渴咽病の報を說く。若し[50]畋獵恣情の者に遇はば驚狂喪命の報を說く。若し父母に悖逆する者に遇はば、天地災殺の報を說く。若し山林の木を燒く者に遇はば、狂迷取死の報を說く。若し前後父母惡毒の者に遇はば、返つて鞭撻を生じ[51]現受の報を說く。若し生雛を網捕する者に遇はば、骨肉分離の報を說く。若し三寶を毀謗する者に遇はば、盲聾瘖瘂の報を說く。若し法を輕んじ敎を慢する者に遇はば、永く惡道に處るの報を說く。若し常住を破用する者に遇はば、億劫地獄に輪迴するの報を說く。若し梵を汚し、僧を誣る者に遇はば、永く畜生に在るの報を說く。若し湯火斬斫して生を傷る者に遇はば、輪廻遞償の報を說く。若し破戒犯齋の者に遇はば、獸禽飢餓の報を說く。若し非理毀用の者に遇はば、所求闕絕の報を說く。若し吾我貢高の者に遇はば、卑使下賤の報を說く。若し兩舌鬪亂の者に遇はば、無舌百舌の報を說く。若し邪見の者に遇はば、[52]邊地受生の報を說く。是の如き等の閻浮提の衆生の身口意業の惡習の結果、百千報應、今粗略して是の如き等の閻浮提の衆生の業感の差別を說きぬ。地藏菩薩は百千の方便をもつて而も之を敎化したまふ。是の諸の衆生は先づ是の如き等の報を受けて後、地獄に墮し、動もすれば劫數を經て出期有ること無し。是の故に汝等人を護り、國を護り、是の諸の衆業をして衆生を迷惑せしむること無かれ。」と。四天王聞き已つて涕涙悲歎し、合掌して退く。

[53]地獄名號品第五

爾の時に普賢菩薩摩訶薩、地藏菩薩に白して言く、「仁者、願はくは天龍、[54]四衆及び未來、現在の一切衆生の爲めに娑婆世界及び閻浮提の罪苦の衆生の受くる所の報處、地獄の名號及び惡報等の事

【五〇】　畋獵＝田獵、狩獵のこと。

【五一】　現受＝現世に業を作りて現世にその果報あるをいふ。

【五二】　邊地受生＝邊鄙な土地に生を受けること、本來は印度以外の土地に生るることを云ふ。

【五三】　この品は閻浮衆生の業報を說き併せて地獄の名號を述ぶ。

【五四】　四衆＝比丘（Bhikṣu）比丘尼（Bhikṣuṇī）、優婆塞（Upāsaka）、優婆夷（Upāsikā）の四衆を云ふ。

を說きたまへ。未來世の末法の衆生をして、是の果報を知らしめん。」と。地藏、答へて言く、「仁者、我、今、佛の威神及び大士の力を承けて、略して[五五]地獄の名號、及び罪報、惡報の事を說かん。仁者、閻浮提の東方に山有り。號して鐵圍と曰ふ。其の山黑邃にして日月の光無し。大地獄有り、[五六]極無間と號す。又地獄有り。大阿鼻と名く。復た地獄有り。名けて四角と曰ふ。復た地獄有り。名けて飛刀と曰ふ。復た地獄有り。名けて火箭と曰ふ。復た地獄有り。名けて夾山と曰ふ。復た地獄有り。名けて通槍と曰ふ。復た地獄有り。名けて鐵車と曰ふ。復た地獄有り。名けて鐵床と曰ふ。復た地獄有り。名けて鐵牛と曰ふ。復た地獄有り。名けて鐵衣と曰ふ。復た地獄有り。名けて千刄と曰ふ。復た地獄有り。名けて鐵驢と曰ふ。復た地獄有り。名けて洋銅と曰ふ。復た地獄有り。名けて抱柱と曰ふ。復た地獄有り。名けて流火と曰ふ。復た地獄有り。名けて耕舌と曰ふ。復た地獄有り。名けて剉首と曰ふ。復た地獄有り。名けて燒脚と曰ふ。復た地獄有り。名けて啗眼と曰ふ。復た地獄有り。鐵丸と曰ふ。復た地獄有り。名けて諍論と曰ふ。復た地獄有り。名けて鐵銖と曰ふ。復た地獄有り。名けて多瞋と曰ふ。」と。地藏言く、「仁者、鐵圍の內に是の如き等の地獄有り。其の數限り無し。更に叫喚地獄、拔舌地獄、糞尿地獄、銅鎖地獄、火象地獄、火狗地獄、火馬地獄、火牛地獄、火山地獄、火石地獄、火床地獄、火梁地獄、火鷹地獄、鋸牙地獄、剝皮地獄、飮血地獄、燒手地獄、燒脚地獄、倒刺地獄、火屋地獄、鐵屋地獄、火狼地獄、是の如き等の地獄有り。其の中、各各に復た諸の小地獄有り。或は一、或は二、或は三、或は四、乃至百千、其の中の名號各各同じからず。」と。地藏菩薩、普賢菩薩に告げて言く、「仁者、此は皆是れ、南閻浮提の行惡の衆生の業感なり。是の如き業力甚だ大にして能く須彌に敵し。能く巨海よりも深く、能く聖道を障ふ。是の故に衆生、小惡を輕んじて、以つて罪無しと爲すことなかれ。死後に報有り。纖毫も之を受く。父子至つて親しけれども岐路各別なり。縱然、相ひ逢ふとも肯て代つて受くること無し 我、今、佛の威力を承けて地獄の罪報の事を說かん。唯、

【五五】地獄の名號＝一般には八寒、八熱地獄を擧げ、或は合せて十六地獄と云ふ。智度論によれば八熱地獄とは一に活大地獄、二に黑繩地獄、三に合會地獄、四に叫喚大地獄、五に大叫喚大地獄、六に大熱地獄、七に大熱大地獄、八に阿鼻大地獄を云ひ、八寒地獄とは一に頞浮陀地獄、二に尼羅浮陀地獄、三に阿羅羅地獄、四に阿婆婆地獄、五に睺睺地獄、六に漚波羅地獄、七に婆特摩地獄、八に摩訶波頭摩地獄を云ふ。

【五六】極無間＝普通に無間は阿鼻の漢譯とし同一とせらるるも、本經は之を二獄と見たり。楞嚴經にも二獄說あり。阿鼻無間が主地獄にて四角以下は眷屬地獄なり。

願はくは仁者、暫く是の言を聽きたまへ」と。普賢答へて言く、「吾、久しく三惡道の報を知るを以つて望むらくは仁者、說きたまへ。後世末法の一切惡行の衆生をして仁者の說を聞かしめて、佛に歸せしめん。」と。地藏白して言く、「仁者、地獄の罪報、其の事是の如し。或は地獄有り。罪人の舌を取つて牛をして之を耕さしむ。或は地獄有り。罪人の心を取つて夜叉之を食ふ。或は地獄有り。鑊湯盛んに沸いて罪人の身を沸煮す。或は地獄有り。赤く銅柱を燒いて罪人をして抱かしむ。或は地獄有り。諸の火をして燒き、及び罪人を趁はしむ。或は地獄有り。一向に寒冰なり。或は地獄有り、限り無く糞尿あり。或は地獄有り。純ら鏃鏁を飛す。或は地獄有り。多く火槍を攅む。或は地獄有り。唯だ胸脊を撞く。或は地獄有り。倶だ手足を燒く。或は地獄有り。鐵蛇を盤繳[五七]す。或は地獄有り。鐵狗を驅逐す。或は地獄有り。盡く鐵驟に駕す。仁者、是の如き等の報、各各に獄中に百千種の業道の器有り。是れ銅、是れ鐵、是れ石、是れ火に非ずといふこと無し。此の四種の物は衆の業行より感ずるなり。若し廣く地獄罪報等の事を說かば、一一の獄中に更に百千種の苦楚有り。何に況んや多獄をや。我、今、佛の威神及び仁者の問を承けて、略して說くこと是の如し。若し廣く解說せば、劫を窮むとも盡きざらん。」と。

如來讚歎品第六[五八]

爾の時に世尊、身を擧つて大光明を放ち、遍く百千萬億恒河沙等の諸佛世界を照し、大音聲を出して普く諸佛世界の一切の諸の菩薩摩訶薩及び天、龍、鬼神、人非人等に告げたまはく、「吾が今日、地藏菩薩摩訶薩の十方世界に於いて、大不可思議、威神、慈悲の力を現じて一切の罪苦を救護するの事を稱揚し、讚歎することを聽け。吾れ滅度の後、汝等諸の菩薩、大士及び天、龍、鬼神、廣く方便を作して是の經を衞護し、一切の衆生をして涅槃の樂を證せしめよ。」と。是の語を說き已

【五七】盤繳＝盤はめぐる意。繳はまとふことなり。

【五八】この品は閻浮衆生度脫の因緣を說き、併せて地藏菩薩を讚歎す。

つて、會中に一りの菩薩有り。名けて普廣と曰ふ。合掌恭敬して佛に白して言く、「今、世尊の地藏菩薩を讃歎したまふことを見たてまつるに、是の如き不可思議大威神德有り。唯、願はくは世尊、未來世末法の衆生の爲に、地藏菩薩人天を利益する因果等の事を宣說して、諸の[五九]天、龍、八部及び未來世の衆生に佛語を頂受せしめたまへ。」と。

爾の時に世尊、普廣菩薩及び四衆等に告げたまはく、「諦に聽け。諦に聽け。吾れ當に汝が爲めに略して地藏菩薩、人天を利益する福德の事を說くべし。」と。普廣、白して言さく、「唯だ然り。世尊、願樂して聞かんと欲す。」と。佛、普廣菩薩に告げたまはく、「未來世の中に、若し善男子、善女人有つて是の地藏菩薩摩訶薩の名を聞かん者、或は合掌せん者、讃歎せん者、作禮せん者、戀慕せん者、是の人三十劫の罪を超越せん。普廣、若し善男子、善女人有つて或は形像を彩畫し、或は土石、膠膝、金銀、銅鐵をもつて此の菩薩を作つて一瞻、一禮せん者、是の人百返三十三天に生じて永く惡道に墮せざらん。假ひ如し天福盡くるが故に人間に下生すとも、猶し國王と爲りて大利を失せざらん若し女人有つて女人の身を厭ひ、心を盡して地藏菩薩の畫像及び土石、膠漆、銅鐵等の像を供養し、是の如くして日日退せず、常に華香、飲食、衣服、繒綵、幢幡、錢、寶物等を以つて供養せば、是の善女人、此の一報の女身を盡して百千萬劫に更に女人有る世界に生ぜざらん。何に況んや復た受くるをや。慈願力の故に要ず女身を受けて衆生を度脫せんものをば[六〇]除非す。斯の地藏を供養する力を承くるが故に、及び功德力をもつて、百千萬劫に女身を受けず。復た次に普廣、若し女人有つて是の醜陋にして疾病多きを厭はん者、倶だ地藏の像の前に於いて志心に瞻禮せんこと食頃の間にもせよ、是の人千萬劫中に受くる所の生身、相貌圓滿ならん。是の醜陋の女人、如し女身を厭はずんば卽ち百千萬億生の中、常に王女乃及王妃、宰輔、大姓、大長者の女と爲りて端正に受生し、諸相圓滿ならん。志心に由るが故に、地藏菩薩を瞻禮したてまつりて福を獲ること是の如し。復た次に

【五九】天龍八部＝天龍等の八部衆を云ふ。八部衆とは、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽なり。

【六〇】除非＝摩耶夫人は永く千佛の母たらんがために、不轉女身の願を發す等を除く。

普廣、若し善男子、善女人有つて能く菩薩の像の前に對して諸の伎樂及び歌詠、讃歎、香華、供養を作して、乃至一人多人を勸めば是の如き等の輩、現在世の中及び未來世に常に百千の鬼神に日夜衞護せらるることを得て、惡事をして輒く其の耳に聞かしめさらん。何に況んや親り[六一]諸橫を受けんや。復た次に普廣、未來世の中に若し惡人及び惡神、惡鬼有つて、善男子、善女人、地藏菩薩の形像を歸敬し、供養し、讃歎し、瞻禮するもの有るを見て、或は妄りに譏毀を生じ、功德及び利益の事無しと謗り、或は齒を露して笑ひ、或は面を背けて非り、或は人を勸めて共に非り、或は一人にて非り、或は多人にて非る。乃至一念だも譏毀を生ぜん者、是の如きの人は[六二]賢劫の千佛滅度したまふとも譏毀の報、尙阿鼻地獄に在つて極重罪を受けん。是の劫を過ぎ已つて方に餓鬼を受け、又、千劫を經て復た畜生を受け、又千劫を經て方めて人身を得ん。縱ひ人身を受くるとも貧窮下賤にして諸根不具ならん。多く惡業來つて其の心を結ぶことを被り、久しからざるの間に復た惡道に墮せん。是の故に普廣、他人の供養を譏毀するすら尙此の報を獲。何に況んや別して惡見を生じて毀滅せんものをや。復た次に普廣、若し未來世に男子、女人有つて久しく床枕に處して生を求め、死を求むれども了に得可からざらん。或は夜、惡鬼乃及家親を夢み、或は險道に遊び、或は魘寐多く、鬼神と共に遊び、日月歲深けて轉復た尫瘵し、眠中に苦を叫び慘悽にして樂まさる者、此れ皆是れ業道の論對なり。未だ輕重を定めず、或は壽を捨て難く、或は愈ゆることを得ず。男女の俗眼は是の事を辨ぜず。但だ當に諸佛菩薩の像の前に對して、高聲に此の經を轉讀すること一徧すべし。或は病人可愛の物、或は衣服、寶貝、莊園、舍宅を取つて病人の前に對して高聲に唱へ言ふべし。「我れ某甲等、是の病人の爲めに、經像の前に對して諸等の物を捨て、或は經像に供養し、或は佛菩薩の形像を造り、或ば塔寺を造り、或は或は油燈を然し、或は常住に施す。」と。是の如く三たび病人に白して聞知せしめよ。假令諸識分散して氣盡くるに至るものにも、乃至一日、二日、三日、

【六一】諸橫＝諸の邪事を云ふ。

【六二】賢劫＝現在の住劫增減中には千佛の出世あれば稱して賢劫又は善劫と云ふ。これに對して過去の住劫を莊嚴劫、未來の住劫を星宿劫と云ふ。

四日、七日に至りてより已來、但だ高聲に白し、高聲に經を讀まば、是の人命終の後宿殃の重罪、[六三]五無間罪に至るまで、永く解脫することを得て、受くる所の生處に常に[六四]宿命を知らん。何に況んや善男子、善女人自ら此の經を書き、或は人に敎へて書かしめ、或は自ら菩薩の形像を塑畫し、乃至人を敎へて塑畫せしめば、受くる所の果報必ず大利を獲ん。是の故に普廣、若し人有りて是の經を讀誦し、乃至一念も是の經を讃歎し、或は恭敬する者を見ば、汝須く百千方便をもて是れ等の人を勸めて勤心に退すること莫く、能く未來、現在、千萬億不可思議の功德を得せしむべし。復た次に普廣、若しくは未來世の諸の衆生等或は夢み、或は寐て諸の鬼神乃及諸の形を見るに、或は悲み、或は啼き、或は愁へ、或は歎き、或は恐れ、或は怖るるを見ん。此れ皆是れ一生、十生、百生、千生、過去の父母、男女弟妹、夫妻眷屬の惡趣に在つて未だ出離を得ず、福力の救拔を希望するに處無し。當に[六五]宿世の骨肉に告げて方便を作さしめ、惡道を離るることを願ふなるべし。普廣、汝神力を以つて是の眷屬をして、諸佛、菩薩の像の前に對して志心に自ら此の經を讀ましめよ。或は人を請じて讀しむべし。其の數三徧、或は七徧。是の如き惡道の眷屬、經の聲、是の徧數を畢へば、當に解脫を得べし。乃至夢寐の中に永く復た見ざらん。復た次に普廣、若し未來世に諸の下賤等の人有つて或は奴、或は婢、乃至諸の自由ならざるの人、宿業を覺知して懺悔せんと要せば、志心に地藏菩薩の形像を瞻禮し、乃至一七日の中、菩薩の名を念じて萬徧を滿す可し。是の如き等の人此の報を盡して後、千萬生の中、常に尊貴に生じて更に三惡道の苦を經ざらん。復た次に普廣、若し未來世の中、閻浮提の內[六六]刹利、[六七]婆羅門、長者、居士、一切の人等及び異姓種族の新に產れし者有らんに、或は男、或は女、七日の中に早く與に此の不思議經典を讀誦し、更に爲めに菩薩の名を念ずること萬遍を滿す可し。是の新生の子或は男、或は女、宿殃報有るも便ち解脫を得て、安樂にして養ひ易く、壽命增長せん。若しは是れ福を承けて生ずる者ならんには、轉安樂と及び壽命とを增さん。復た次に

【六三】五無間罪＝五逆罪に同じ。無間地獄の苦果を感ずる五種の惡業なり。即ち一に父を殺し、二に母を殺し、三に阿羅漢を殺し、四に佛身より血を出し、五に和合僧を破るを云ふ。

【六四】宿命＝宿世の生命を云ふ。即ち過去の一生乃至無量生に於ける受報の差別、善惡苦樂等の有らゆる情態を云ふ。

【六五】宿世＝Pūrva 宿昔の世を云ふ、前世乃至無量前世なり。

【六六】刹利＝Kṣatriya 印度四姓の次位。王種を云ふ。

【六七】波羅門＝Brāhmaṇa 印度四姓の最上位。僧族を云ふ。

普廣、若し未來世の衆生ありて月の一日、八日、十四日、十五日、十八日、二十三、二十四、二十八、二十九日乃至三十日、是の諸の日等に於いて諸罪結集して其の輕重を定めらる。南閻浮提の衆生の擧止、動念是れ業にあらずといふこと無く、是れ罪にあらずといふこと無し。何に況んや情を恣にして殺害し、竊盗し、邪婬し、妄語するの百千の罪狀あるをや。能く是の〔六八〕十齋日に於いて、佛、菩薩、諸賢聖の像の前に對して是の經を讀むこと一編せば、東西南北百由旬の內に諸の災難無く、當に此の居家の、若しは長、若しは幼、現在、未來百千歲の中、永く惡趣を離るべし。能く十齋日に於いて每に一徧を轉ぜば、現世に此の居家をして諸の横病無く、衣食豐溢ならしめん。是の故に普廣、當に知るべし、地藏菩薩には是の如き等の不可說百千萬億の大威神力利益の事有り。閻浮の衆生此の大士に於いて大因緣有り。是の諸の衆生、菩薩の名を聞き、菩薩の像を見、乃至是の經の三字、五字、或は一偈、一句を聞かん者は、現在は殊妙安樂にして、未來の世は百千萬生常に端正を得て、尊貴の家に生ぜん。」と。

爾の時に普廣菩薩、佛如來の地藏菩薩を稱揚し讚歎したまへるを聞き已つて、胡跪合掌して復た佛に白して言く、「世尊、我れ久しく是の大士に此の如きの不可思議神力及び大誓願力有ることを知れり。未來の衆生に利益を知らしめんが爲め、故に如來に問ひたてまつる。唯然として頂受せん。世尊、當に何を以て此の經に名け、我れをして云何が流布せしめん。」と。佛、普廣に告げたまはく、「此の經に三名有り。一には地藏本願と名け、亦は地藏本行と名け、亦は地藏本誓力經と名く。此の菩薩久遠劫より來、大重願を發して衆生を利益するに緣る。是の故に汝等願に依りて流布せよ。」と。普廣聞き已つて合掌恭敬し、禮を作して退く。

【六八】十齋＝齋（Upavasatha）とは清淨の義、罪を懺悔することを云ふ。後には一般に非時食を離るるを齋といふ。鳴沙餘韻解說（二三三）大乘四齋日參照。

卷の下

利益存亡品第七

爾の時に地藏菩薩摩訶薩、佛に白して言く、「世尊、我れ是の閻浮の衆生を觀ずるに、擧心動念是れ罪に非ずといふこと無し。脫し善利を獲るも多くは初心を退す。若し惡緣に遇はば念念に增益す。是れ等の輩の人は泥塗を履んで重き石を負ふが如し。漸く困み、漸く重く足步深邃ならん。若し知識に遇ふことを得れば、替つて與に負ふことを減じ、或は全く與に負はる。是の知識に大力有るが故に復た相ひ扶助して、勸めて脚を牢うせしむ。若し平地に達せば須く惡路を省いて再び經歷すること無かるべし。世尊、習惡の衆生、纖毫の間より便ち無量に至る。是の諸の衆生此の如きの習ひ有り。命終の時に臨んで、父母眷屬宜しく爲めに福を設けて以つて前路を資くべし。或は幡蓋を懸け及び油燈を然し、或は尊經を轉讀し、或は佛像及び諸の聖像を供養し、乃至佛、菩薩及び辟支佛の名字を念じ、一名、一號臨終の人の耳根を歷て、或は聞いて本識に在れば是の諸の衆生造る所の惡業、其の感果を計るに必ず惡趣に墮せん。是の眷屬の、臨終の人の爲めに此の聖因を修するに緣つて、是の如くの衆罪悉く皆銷滅す。若し能く更に爲めに、身死の後七七日の內に廣く衆善を造り、能く是の諸の衆生をして永く惡趣を離れ、人天に生ずることを得て勝妙の樂を受けしむれば、現在の眷屬も利益無量ならん。是の故に我れ今佛世尊及び天、龍、八部、人、非人等に對して閻浮提の衆生に勸めて臨終の日、愼んで殺害し及び惡緣を造り、鬼神を拜祭し、諸の魍魎を求むること勿れ。何を以つての故に、爾所の殺害乃至拜祭、纖毫の力も亡人を利益すること無し。但た罪緣を結んで轉增深重なり。假使來世、或は現在の生に聖分を獲て人天の中に生ずることを得とも、是の臨終に諸の眷屬に是の惡因を造らるるに緣つて、亦是の命終の人をして殃累對辯して晚く善處に生ぜしむ。何

【一】この品は現在の眷屬が亡人の冥福の爲に佛菩薩の名號を念ずれば、亡人惡趣を離れて勝妙の樂を受くることを得るのみならず、現存の眷屬も亦無量の利益を得ることを明す。

に況んや臨命終の人、在生に未だ曾つて小善根も有らざるものをや。各の本業に據つて自ら惡趣を受くべし。何ぞ忍びん、眷屬の更に爲に業に增すをや。譬へば人有つて遠地より來つて糧を絕つこと三日、負擔する所の物强きこと百斤に過ぎんに、忽ちに隣人に遇うて更に少物を附けらる。是を以つての故に轉た復た困重するが如し。世尊、我れ閻浮の衆生を觀るに、但だ能く諸佛の敎の中に於いて乃至善事の一毛、一渧、一沙、一塵も是の如きの利益悉く皆な自ら得べし。

是の語を說きたまふ時に、會中に一の長者有り。名けて大辯と曰ふ。是の長者久しく無上を證して十方を化度す。長者の身を現じて合掌恭敬して地藏菩薩に問うて言く、「大士、是の南閻浮提の衆生命終の後、小大の眷屬爲めに功德を修し乃至齋を設け衆の善因を造らんに、是の命終の人大利益及び解脫を得るや不や。」と。地藏答へて言く、「長者、我れ今未來、現在の一切衆生の爲めに佛の威力を承けて略して是の事を說かん。長者、未來、現在の諸の衆生等の命終に臨むの日、一佛の名、一菩薩の名、一辟支佛の名を聞くことを得ば、有罪、無罪を問はず悉く解脫を得ん。若し男子、女人有つて在生のとき善因を修せず、多く衆罪を造らんに、命終の後、眷屬小大爲めに福利一切の聖事を造らんに、七分の中而も乃ち一を獲ん。六分の功德は生者自ら利せん。是を以つての故に未來、現在の善男女等、聞け、健かなるとき自ら修せば分分に己れ獲ん。無常の大鬼は期せずして到る。冥冥たる遊神未だ罪福を知らず。七七日の內は癡の如く、聾の如く、或は諸司に在つて業果を辯論せられ、審かに定めての後、業に據つて生を受く。未だ測らざるの間に千萬の愁苦あり。何に況んや諸の惡趣等に墮せんをや。是の命終の人未だ受生を得ざるとき、七七日の內に在つて念念の間に諸の骨肉眷屬の、與に福力を造りて救拔せんことを望む。是の日を過ぎて後、業に隨つて報を受く。若し是れ罪人なれば、動もすれば千百歲を經る中に解脫の日無し。若し是れ[二]五無間罪なれば大地獄に墮ちて千劫、萬劫永く衆苦を受く。復た次に長者、是の如きの罪業の衆生命終の後、眷屬骨肉の

【二】五無間罪＝前出。

爲めに[三]齋を修營し、業道を資助せんとき、未だ齋食竟らざるとき及び齋を營まんの次でに、米泔、菜葉を地に棄てざれ。乃至諸の食未だ佛僧に獻ぜざるに先づ食すること勿れ。若し違して食ひ及び精勤ならざること有らば是の命終の人、了に力を得ざらん。如し精勤護淨して佛僧に奉獻せば、是の命終の人七分に一を獲ん。是の故に長者、閻浮の衆生若し能く其の父母乃至眷屬の爲めに命終の後、齋を設けて供養し、志心に勤懇すべし。是の如きの人は存亡利を獲ん。」と。

是の語を說きたまふ時に、忉利天宮に千萬億那由他の閻浮の鬼神有つて、悉く無量菩提の心を發しぬ。大辯長者禮を作して退く。

[四]閻羅王衆讚歎品第八

爾の時に鐵圍山の內に無量の鬼王有り。[五]閻羅天子と俱に忉利に詣りて佛所に來到す。所謂る惡毒鬼王、多惡鬼王、大諍鬼王、白虎鬼王、血虎鬼王、散殃鬼王、飛身鬼王、電光鬼王、狼牙鬼王、千眼鬼王、噉獸鬼王、負石鬼王、主耗鬼王、主禍鬼王、主食鬼王、主財鬼王、主畜鬼王、主禽鬼王、主獸鬼王、主魅鬼王、主產鬼王、主命鬼王、主疾鬼王、主疾鬼王、三目鬼王、四目鬼王、五目鬼王、祁利失王、大祁利失王、祁利叉王、大祁利叉王、阿那吒王、大阿那吒王、是の如き等の大鬼王各各百千の諸の小鬼王と與に盡く閻浮提に居す。各所執有り。各所主有り。是の諸の鬼王、閻羅天子と與に佛の威神及び地藏菩薩摩訶薩の力を承けて俱に忉利に詣りて一面に在りて立つ。

爾の時に閻羅天子と胡跪合掌して佛に白して言く、「世尊、我等今者諸の鬼王と與に佛の威神及び地藏菩薩摩訶薩の力を承けて方に此の忉利の大會に詣ることを得たり。亦是れ我等善利を獲るが故なり。我今少しく疑ふの事有り。敢へて世尊に問ひたてまつらん。唯、願はくは世尊、慈悲宣說したまへ。」と。佛、閻羅天子に告げたまはく、「汝が所問を恣にせよ。吾れ汝が爲めに說かん。是の時、閻羅

【三】齋＝又は時に作る。齋食、時食なり。この齋は正しき齋食を設けて佛僧に供養するをいふ。

【四】この品は閻羅王、惡毒鬼王、主命鬼王等と佛との問答にして、佛はそれ等鬼王の大慈悲心を地藏菩薩のために讚歎したまふ。

【五】閻羅天子＝Yamarāja 又は耶摩(天部の一)琰魔(冥王)に作る。雙世雙王ともいふ兄妹共に地獄の王と作り、兄は男事を治め、妹は女事を治む。地獄の總司なり。

天子世尊を瞻禮し、及び地藏菩薩を廻視して佛に白して言さく、「世尊、我れ地藏菩薩を觀るに、六道の中に在つて百千の方便をもて罪苦の衆生を度して疲倦を辭せず。是の大菩薩に是の如き不可思議神通の事有り。然も諸の衆生罪報を獲ることを脫すれども、未だ久しからざるの間に又惡道に墮す。世尊、是の地藏菩薩は既に是の如きの不可思議神力有り。云何が衆生而も善道に依止して永く解脫を取らざるや。唯だ願はくは世尊、我が爲めに解說したまへ。」と。佛、閻羅天子に告げたまはく、「南閻浮提の衆生、其の性剛彊にして調し難く、伏し難し。是の大菩薩百千劫に於いて（六）頭頭に是の如きの衆生を救拔して早く解脫せしむ。是の罪報の人乃至大惡趣に墮せば、菩薩方便力を以つて根本の業緣を拔出して宿世の事を悟らしむ。自ら是の閻浮の衆生惡習を結ぶこと重くして、旋く出せば旋く入る。斯の菩薩を勞して久しく劫數を經て而も度脫を作さしむ。譬へば人有つて本家を迷失して誤つて險道に入るが如し。其の險道の中に諸の夜叉、及び虎狼、師子、蚖蛇、蝮蠍多くして是の如きの迷人險道の中に在つて須臾の間に卽ち諸の毒に遭はんとするとき、一りの知識の多解、大術なる有つて善く是の毒乃及夜叉、諸の惡毒等を禁ず。忽ちに迷人の險道に進まんと欲するに逢つて之に語つて言く、「咄哉。男子、何事の爲めの故に此の路に入る。何の異術有つてか能く諸毒を制すべき。」と。是の迷路の人忽ち是の語を聞いて方に險道なることを知つて、卽便、退步して此の路を出でんことを求む。是の善知識提携して手を接して、險道を引き出して諸の惡毒を免れしめ、好道に至つて安樂を得せしめ、之に語つて言く、「咄哉。迷人、今自り已後是の道を履むこと勿れ。此の路に入る者、卒に出づることを得ること難し。復た性命を損ず。」是の迷路の人亦感重を生ず。」と。別れに臨む時知識又言く、「若し親知及び諸の路人、若しは男、若しは女を見ば此の路に於いて諸の毒惡多くして性命を喪失すと言うて、是の衆をして自ら其の死を取らしむること無れ。」と。是の故に地藏菩薩は大慈悲を具して、罪苦の衆生を救拔して天人の中に生じて妙樂を受けしむ。是

【六】頭々‖一人一人の意味か。或は頭然か。一本に頭燃に作る。

の諸の罪衆、業道の苦を知つて脱して出離することを得、永く再び歴ざらん。迷路の人の誤つて險道に入るも善知誰の引接に遇うて、出ださしめられて永く復た入らず、他人に逢ひ見るも復た入ること莫れと勸め、自らも是の迷ひに因るが故に解脱を得て、竟に更に復た入らずと言ふが如し。若し再び履踐して猶尙迷ひ誤つて舊會つて落ちし所の險道なることを覺えずして、或は命を失ふことを致さば惡趣に墮するが如し。地藏菩薩は方便力の故に解脱せしめて人天の中に生ぜしむれども、旋く又再び入る。若し業結[七]重ければ永く地獄に處して解脱の時無し。」と。

爾の時に惡毒鬼王合掌恭敬して佛に白して言く、「世尊、我等諸の鬼王其の數無量、閻浮提に在つて或は人を利益し、或は人を損害すること各各同じからず。然れども是れ業報なり。我が眷屬をして世界を遊行せしむるに、惡は多く善は少し。人の家庭或は城邑、聚落、莊園、房舍を過ぐるに、或は男子、女人有りて毛髮の善事を修し、乃至一幡、一蓋を懸け、少香少華を佛像及び菩薩の像に供養し、或は尊經を轉讀し、香を燒き、一句、一偈をも供養せば、我等鬼王是の人を敬禮すること過去、現在、未來の諸佛の如くならん。諸の小鬼各大力有るもの、及び[八]土地の分に勅して便ち衞護せしめて、惡事、橫事、惡病、橫病乃至不如意の事をして此の舍等の處に近づかしめざらん。何に況んや門に入らしむるをや。」と。佛、鬼王を讚したまはく、「善哉、善哉、汝等及び閻羅と能く是の如く善男女等を擁護せよ。吾れも亦梵王、帝釋に告げて汝を衞護せしめん。」と。

是の語を說きたまふ時、會中に一りの鬼王有り。名けて主命と曰ふ。佛に白して言く、「世尊、我れ本、業緣によりて閻浮の人命を主る。生ずる時、死する時、我れ皆之を主る。我が本願に在つては甚だ利益せんと欲す。自ら是の衆生我が意を會せずして、生死をして倶に安きことを得ざらしむることを致す。何を以つての故に、是の閻浮提の人初めて生ずる時、男女を問はず、或は生ぜんと欲する時、但だ善事を作せば舍宅を增益し、自ら土地を[九]して無量に歡喜せしめ、子母を擁護し、大

【七】業結＝結とは煩惱の異名。惡業と煩惱なり。

【八】土地の分＝各地の所司を云ふ。知事の如きものを指す。

【九】令＝正藏は今に作る。本國譯は貞享三年版地藏菩薩本願經手鑑に依る。

安樂を得て眷屬を利益せしめん。或は已に下生下せば愼んで殺害し、諸の鮮味を取つて產母に供給し及び廣く眷屬を聚めて酒を飲み、肉を食ひ、歌樂絃管すること勿れ。能く子母をして安樂なることを得ざらしめん。何を以つての故に、是の產難の時、無數の惡鬼及び魍魎、精魅有つて、腥血を食はんと欲す。是に我れ早く、舍宅土地の靈祇をして子母を荷護し、安樂にして利益を得せしむ。是の如きの人安樂を見るが故に、便ち福を設けて諸の土地に答ふべきに、飜じて殺害を爲し、眷屬を集め聚む。是を以つての故に犯殃自ら受け、子母倶に損ず。又、閻浮提の臨命終の人、善惡を問はず、我れ是の命終の人をして惡道に落ちさらしめんと欲す。何に況んや自ら善根を修せば我が力を増すの故あるをや。是の閻浮提の善を行ずるの人すら命終の時に臨みては、亦百千の惡道の鬼神有つて或は變じて父母乃至諸の眷屬と作つて、亡人を引接して惡道に落さしめんとす。何に況んや本(もと)惡を造りし者をや。世尊、是の如く閻浮提の男子、女人命終の時に臨みては、神識惛昧にして善惡を辯ぜず、乃至眼耳更に見聞無し。是の諸の眷屬は當に須く大供養を設けて尊經を轉讀し、佛、菩薩の名號を念ずべし。是の如きの善緣をもつて能く亡者をして諸の惡道を離れしめば、諸魔、鬼神悉く皆退散せん。世尊、一切の衆生、命終の時に臨んで、若し一佛の名、一菩薩の名、或は大乘經典の一句、一偈をも聞くことを得ば、我れ是の如き輩の人を觀るに五無間、殺害の罪を除き、小小の惡業の惡趣に墮す合き者も尋いで即ち解脫せん。」と。佛、主命鬼王に告げたまはく、「汝大慈の故に能く是の如きの大願を發して、生死の中に於いて諸の衆生を護す。若し未來世の中、男子、女人有つて生死に至らん時、汝是の願を退すること莫れ。總べて解脫して永く安樂を得せしめよ。」と。鬼王佛に白して言く、「願はくは慮りたまふこと有らされ。我れ是の形を畢るまで念念に閻浮の衆生を擁護して、生ぜん時、死せん時、倶に安樂を得せしめん。但だ願はくは諸の衆生、生死の時に於いて我が語を信受せよ。解脫して大利益を獲ずといふこと無からん。」と。

爾の時に佛、地藏菩薩に告げたまはく、「是の大鬼王主命は已に曾て百千生を經て大鬼王と作りて、生死の中に於いて衆生を擁護す。是の大士慈悲の願の故に大鬼の身を現ずれども、實には鬼に非ざる也。却後一百七十劫を過ぎて當に成佛することを得て、號して無相如來と曰ふべし。劫を安樂と名づけ、世界を淨住と名づけ、佛の壽命は不可計劫ならん。地藏、是の大鬼王、其の事是の如く不可思議なり。度する所の天人も亦限量す可からず。」と。

〔一〇〕稱佛名號品第九

爾の時に地藏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、我れ今未來の衆生の爲めに利益の事を演べて生死の中に於いて大利益を得せしめん。唯だ願はくは世尊、我が之を說くことを聽したまへ。」と。佛、地藏菩薩に告げたまはく、「汝今慈悲を興して一切の罪苦の六道の衆生を救拔して、不思議の事を演べんと欲す。今正に是の時なり。唯だ當に速に說くべし。吾れ卽ち涅槃して、汝をして早く是の願を畢へしめん。吾れも亦現在、未來の一切の衆生を憂ふること無からん。」と。

地藏菩薩、佛に白して言く、「世尊、過去無量阿僧祇劫に佛有りて出世したまふ。無邊身如來と號す。若し男子、女人有つて是の佛の名を聞きて暫くも恭敬を生せば、卽ち四十劫の生死の重罪を超越することを得ん。何に況んや形像を塑畫し、供養し、讃歎せんをや。其の人福を獲ること無量無邊ならん。又、過去恒河沙劫に於いて佛有りて出世したまふ。寶性如來と號す。若し男子、女人有つて、是の佛の名を聞いて一彈指の頃も心を發して歸依せば、是の人無上道に於いて永く退轉せず。又、過去に於いて佛有りて出世したまふ。波頭摩勝如來と號す。若し男子、女人有つて是の佛の名を聞いて耳根に歷れば、是の人當に千返〔一一〕六欲天の中に生ずることを得べし。何に況んや志心に稱念せんをや。又、過去不可說、不可說阿僧祇劫に於いて佛有りて出世したまふ。師子吼如來と號す。

〔一〇〕この品は衆の佛名を擧げ、念佛の功德を明す。

〔一一〕六欲天＝四王、忉利、夜摩、兜率、化樂他化の欲界の六天なり。

若し男子、女人有つて是の佛の名を聞いて一念も歸依せば、是の人無量の諸佛に遇うて〔二〕摩頂授記せらるることを得ん。又、過去に於いて佛有りて出世したまふ。〔三〕拘留孫佛と號す。若し男子、女人有つて是の佛の名を聞いて志心に瞻禮し、或は復た讃歎せば、是の人賢劫千佛の會中に於いて大梵王と爲つて上記を授くることを得ん。又、過去に於いて佛有りて出世したまふ。〔四〕毘婆尸と號す。若し男子、女人有つて是の佛の名を聞かば、永く惡道に墮せず、常に人天に生じて勝妙の樂を受けん。又、過去無量無數恒河沙劫に佛有りて出世したまふ。寶勝如來と號す。若し男子、女人有りて是の佛の名を聞かば、畢竟惡道に墮せず、常に天上に在つて勝妙の樂を受けん。又、過去に於いて佛有つて出世したまふ。寶相如來と號す。若し男子、女人有つて是の佛の名を聞いて恭敬心を生ぜば、是の人久しからずして阿羅漢果を得ん。又、過去無量阿僧祇劫に於いて佛有りて出世したまふ。袈裟幢如來と號す。若し男子、女人有りて是の佛の名を聞く者、一百大劫生死の罪を超えん。又、過去に於いて佛有りて出世したまふ。大通山王如來と號す。若し男子、女人有りて是の佛の名を聞く者、是の人恒河沙の佛に遇ふことを得て、廣く爲めに說法せられ、必ず菩提を成ずることを得ん。又、過去に於いて淨月佛、山王佛、智勝佛、淨名王佛、智成就佛、無上佛、妙聲佛、滿月佛、月面佛有り。是の如き等の不可說の佛有り。世尊、現在、未來の一切の衆生、若しは天、若しは人、若くは男、若くは女、但だ一佛の名號をも念じ得ば功德無量なるべし。何に況んや多名をや。是の衆生等生ずる時、死する時、自ら大利を得て終に惡道に墮せざらん。若し臨命終の人有らんに、家中の眷屬乃至一人だも是の病人の爲めに、高聲に一佛の名を念ぜば、是の命終の人五無間の罪を除きて、餘の業報等悉く消滅することを得ん。是の五無間の罪は至つて極重にして、動すれば億劫を經て了に出づることを得ずと雖も、斯の臨命終の時、他の人の其れが爲めに佛名を稱念することを承くれば、是の罪中に於いて亦漸く消滅す。何に況んや衆生自ら稱し、自ら念せば、福を獲ること無量に

〔二〕摩頂授記＝頭を摩で、佛と成るべき記莂を授けらるること。
〔三〕拘留孫佛＝Krakucchanda 過去七佛の一。現在の賢劫一千佛中の最上首なり。
〔四〕毘婆尸＝Vipaśyin

じて無量の罪を滅せん。」と。

一五 校量布施功德緣品第十

爾の時に地藏菩薩摩訶薩、佛の威神を承けて座より起つて胡跪合掌して佛に白して言く、「世尊、我れ業道の衆生を觀て布施を較量するに輕有り、重有り、一生福を受くる有り、十生福を受くる有り、百生、千生大福利を受くる者有り。是の事云何。唯だ願はくは世尊、我が爲めに之を說きたまへ。」と。爾の時、佛、地藏菩薩に告げたまはく、「吾れ今忉利天宮の一切の衆會に於いて、閻浮提の布施を說いて功德の輕重を輕量せん。汝當に諦に聽くべし。吾れ汝が爲めに說かん。」と。

地藏、佛に白して言く、「我れ是の事を疑ふ。願樂して聞かんと欲す。」と。佛、地藏菩薩に告げたまはく、「南閻浮提に諸の國王、宰輔、大臣、大長者、大刹利、大婆羅門等有り。若し最下の貧窮乃至癃殘、瘖瘂、聾癡、無目、是の如きの種種不完具の者に遇うて是の大國王等布施せんと欲する時、若し能く大慈悲を具して心を下し、笑を含み、親手ずから遍く布施し、或は人をして施さしめ、軟言慰喩せば、是の國王等の獲る所の福利百恒河沙の佛に布施する功德の利の如し。何を以つての故に、是の國王等是の最貧賤の輩及び不完具の者に於いて大慈心を發すに緣る。是の故に福利此の如きの報有り。百千生の中、常に一六七寶具足することを得。何に況んや衣食受用をや。復た次に地藏、若し未來世に諸の國王より婆羅門等に至る有つて、佛の塔寺、或は佛の形像乃至菩薩、聲聞、辟支佛の像に遇うて躬自營辦し、供養し、布施せば、是の國王等當に三劫帝釋身と爲ることを得て勝妙の樂を受くべし。若し能く此の布施の福利を以つて法界に廻向せば、是の大國王等十劫の中に於いて常に大梵天王と爲らん。復た次に地藏、若し未來世に諸の國王より波羅門等に至るまで先佛の塔廟、或は經像毀壞し、破落するに遇うて、乃ち能く發心し修補し、是の國王等或は自ら營辦し、

【一五】この品は衆の布施、廻向の功德を詳說す。

【一六】七寶＝七種の寶なり。七種の數目に種種あれども今一類を擧ぐ。琉璃(Vaidūrya)車渠(Musālogalva)馬碯(Aśmagarbha)大青寶(Mahānila)金剛(Hīra)帝青寶(Indranila)頗梨(Sphatika)

或は他人乃至百千人等に勸めて布施し結緣すること有らんに、是の國王等百千生の中、常に轉輪王(一七)の身と爲らん。是の如きの他人同じく布施する者、百千生の中、常に小國王の身と爲らん。更に能く塔廟の前に於いて廻向心を發さば、是の如きの國王乃及諸人盡く佛道を成ぜん。此の果報無量無邊なるを以つてなり。復た次に地藏、未來世の中、諸の國王及び婆羅門等有つて、諸の老病及び生産婦女を見て、若し一念の間も大慈心を具して醫藥、飲食、臥具を布施して安樂ならしめば、是の如きの福利最も不思議なり。一百劫の中、常に淨居天(一八)主と爲り、二百劫の中、常に六欲天主と爲り、畢竟成佛して永く惡道に墮せず、乃至百千生の中、耳に苦聲を聞かざらん。復た次に地藏、若し未來世の中、諸の國王及び婆羅門等有つて、能く是の如きの布施を作さば、福を獲ること無量ならん。更に能く廻向せば多少を問はず畢竟成佛せん。何に況んや、釋、梵、轉輪(一九)の報をや。是の故に地藏、普く衆生に勸めて當に是の如く學ばしむべし。復た次に地藏、未來世の中、若しは善男子、善女人、佛法の中に於いて、少善根の毛髮、沙塵等許りをも種うれば受くる所の福利喩を爲す可からず。復た次に地藏、若しは未來世の中、若し善男子、善女人有つて、佛の形像、菩薩の形像、辟支佛の形像、轉輪王の形像に遇うて布施し、供養せば、無量の福を得て常に人天に在つて勝妙の樂を受けん。若し能く法界に廻向せば是の人の福利喩を爲す可からず。復た次に地藏、未來世の中、若しは善男子、善女人有つて、大乘經典に遇うて、或は一偈、一句を聽聞して殷重の心を發し讃歎し、恭敬し、布施し、供養せんに是の人の大果報を獲ること無量無邊ならん。若し能く法界に廻向せば其の福喩を爲すべからず。復た次に地藏、未來世の中、善男子、善女人有つて、佛の塔寺、大乘經典の新なる者に遇うて布施し、供養し、瞻禮し、讃歎し、恭敬し、合掌し、若しは故き者、或は毀壞せる者に遇うて修補し、營理し、或は獨り發心し、或は多くの人に勸めて同じく共に發心せんに、是の如き等の輩三十生の中、常に諸の小國王と爲り、檀越(二〇)の人は常に輪王と爲り、還つて善法を以

【一七】轉輪王＝Cakravarti-rāja 轉輪聖王又は單に輪王と云ふ。七寶を成就し、四神德し、四未曾有法、三十二相を具足し、須彌四洲を統一し、正法を以て世を統治する大帝王なり。

【一八】淨居天＝色界第四禪を證せる聖者の生ずべき天にして、一に無煩天、二に無熱天、三に善現天、四に善見天、五に色究竟天の五天あり。

【一九】釋梵轉輪＝帝釋、大梵天、轉輪聖王を云ふ。

【二〇】檀越＝Dānapati 檀（Dāna）とは施、布施のこと。施主を云ふ。

つ一諸の小國王を教化せん。復た次に地藏、未來世の中、若しは善男子、善女人有つて、佛法の中に於て種うる所の善根、或は布施し、供養し、或は塔寺を修補し、或は經典を裝理せんに、乃至一毛、一塵、一沙、一滴、是の如き善事もて但だ能く法界に廻向せば、是の人の功德、百千生の中、上妙の樂を受く。如し但だ自家の眷屬、或は自身の利益のみに廻向せば、是の如きの果は卽ち三生に樂を受く。一を捨てて萬報を得ん。是の故に地藏、布施の因緣其の事是の如し。」と。

[二]地神護法品第十一

爾の時に堅牢地神、佛に白して言く、「世尊、我れ昔より來、無量の菩薩摩訶薩を瞻視頂禮するに、皆な是れ大不可思議の神通、智慧をもて廣く衆生を度せり。是の地藏菩薩摩訶薩は諸の菩薩於も誓願深重なり。世尊、是の地藏菩薩は閻浮提に於いて大なる因緣あり。[三]文殊、普賢、觀音、彌勒の如きも亦百千の身形を化して六道を度したまへるも、其の願尚畢竟すること有り。是の地藏菩薩六道の一切の衆生を敎化して發す所の誓願の劫數、千百億恒河沙の如し。世尊、我れ未來及び現在の衆生を觀るに、所住の處に於いて、南方淸潔の地に於いて土石、竹木を以つて其の龕室を作り、是の中に能く塑畫し、乃至金銀、銅鐵をもつて地藏の形像を作り、燒香し、供養し、瞻禮し、讃歎せば、是の人の居處に卽ち十種の利益を得ん。何等をか十と爲す。一には土地豐壤、二には家宅永く安く、三には先亡天に生じ、四には現存壽を益し、五には求むる所意を遂げ、六には水火の災無く、七には虛耗を辟除し、八には惡夢を杜絕し、九には出入に神護し、十には多く聖因に遇ふ。世尊、未來世の中及び現在の衆生、若し能く所住の處の方面に於いて、是の如きの供養を作さば是の如きの利益を得ん。」と。

復た佛に白して言く、「世尊、未來世の中、若し善男子、善女人有つて、所住の處に於いて此の經

【二】以下は全卷の中、流通分に當り、この品は地神護法の流通文なり。地藏菩薩の功德の、一般地神の功德に百千倍することを明す。
【三】文殊、普賢、彌勒＝十王經脚註參照。

典及び菩薩の像有らんに、是の人更に能く經典を轉讀し、菩薩を供養せば、我れ常に日夜本神力を以つて是の人を衞護し、乃至水火、盜賊、大横、小横、一切の惡事悉く皆銷滅せしめん。」と。

佛、堅牢地神に告げたまはく、「汝が大神力、諸神も及ぶこと少し。何を以つての故に、閻浮の土地は悉く汝が護を蒙れり。乃至草木、沙石、稻麻、竹葦、穀米、寶貝、地より有るは皆汝が力に因る。又當に地藏菩薩利益の事を稱揚すべし。汝が功德及以神通、常分の地神に百千倍す。若し未來世の中、善男子、善女人有つて、菩薩を供養し、及び是の經を轉讀せんに、但だ地藏本願經に依つて一時に修行せん者、汝本神力を以つて之を擁護し、一切の災害及び不如意の事をして輙く耳に聞かしむること勿れ。何に況んや受けしめんをや。但だ汝獨り是の人を護る故のみに非ず、亦、釋、梵の眷屬、諸天の眷屬有つて是の人を擁護せん。何が故に是の如き聖賢の擁護を得るとなれば、皆地藏の形像を瞻禮し、及び是の本願經を轉讀するに由るが故に、自然に畢究苦海を出離して涅槃の樂を證せん。是を以つての故に大いに擁護せらるることを得。」と。

〔三三〕見聞利益品第十二

爾の時に世尊、頂門の上より百千萬億の大毫相光を放ちたまふ。所謂る白毫相光、大白毫相光、瑞毫相光、大瑞毫相光、玉毫相光、大玉毫相光、紫毫相光、大紫毫相光、青毫相光、大青毫相光、碧毫相光、大碧毫相光、紅毫相光、大紅毫相光、綠毫相光、大綠毫相光、金毫相光、大金毫相光、慶雲毫相光、大慶雲毫相光、千輪毫光、大千輪毫光、寶輪毫光、大寶輪毫光、日輪毫光、大日輪毫光、月輪毫光、大月輪毫光、宮殿毫光、大宮殿毫光、海雲毫光、大海雲毫光なり。頂門の上於り是の如き等の毫相光を放ちたまひ已つて、微妙の音を出して諸の大衆、天、龍、八部、人、非人等に告げたまはく、「聽け。吾れ今日忉利天宮に於いて、地藏菩薩人天の中に於いて利益等の事、不思議

〔三三〕この品は見聞利益流通分なり。初は佛、觀世音菩薩のために地藏菩薩の功德を說かれ、後に至りて地藏菩薩讚歎の偈文を說かる。

の事、超聖因の事、證十地の事、畢竟して不退阿耨多羅三藐三菩提の事を稱揚し、讃歎することを。」と。

是の語を說きたまひし時に會中に一の菩薩摩訶薩有り。[二四]觀世音と名づく。座より起ち、胡跪合掌して、佛に白して言く、「世尊、是の地藏菩薩摩訶薩は大慈悲を具して、罪苦の衆生を憐愍し、千萬億の世界に於いて千萬億の身を化したまふ。所有る功德及び不思議威神の力、我れ世尊が十方無量の諸佛と與に、異口同音に地藏菩薩を讃歎して云ひたまふことを聞くに、正使過去、現在、未來の諸佛其の功德を說くとも、猶盡くすこと能はず。向者又世尊の普く大衆に告げたまうて、地藏菩薩利益の事を稱揚せんと欲したまひしことを蒙れり。唯だ願はくは世尊、現在、未來の一切の衆生の爲めに地藏不思議の事を稱揚して、天、龍、八部をして瞻禮して福を獲せしめたまへ。」と。佛、觀世音菩薩に告げたまはく、「汝、娑婆世界に於いて大因緣有り。若しは天、若しは龍、若しは男、若しは女、若しは神、若しは鬼、乃至六道罪苦の衆生汝が名を聞かん者、汝が形を見ん者、汝を戀慕せん者、汝を讃歎せん者、是の諸の衆生、無上道に於いて必ず退轉せず、常に人天に生じて具さに妙樂を受け、因果將に熟せんとして佛の授記に遇はん。汝今大慈悲を具して、衆生及び天、龍、八部を憐愍して、吾が地藏菩薩の不思議、利益の事を宣說せんことを聽かんとす。汝當に諦かに聽くべし。吾れ今之を說かん。」と。

觀世音菩薩言く、「唯だ然り。世尊、願樂して聞かんと欲す。」と。佛、觀世音菩薩に告げたまはく、「未來、現在諸の世界の中に、天人の天福を受け盡くす有つて[二五]五衰の相現ずること有り。或は惡道に墮する者有らんに、是の如きの天人若しは男、若しは女、現相の時に當つて或は地藏菩薩の形像を見、或は地藏菩薩の名を聞いて一瞻、一禮せば、是の諸の天人天福を轉增して大快樂を受け、永く三惡道の報に墮せざらん。何に況んや、菩薩を見聞して、諸の香華、衣服、飲食、寶貝、瓔珞を

【二四】觀世音＝Avalokiteśvara この菩薩は世界を觀じて拔苦與樂するに自在なればこの名ありと云ひ、又、世人この菩薩の名を稱する音を觀じて救を垂る故なりと云ふ。

【二五】五衰の相＝天人命終の時に現ずる五相を云ふ。涅槃經によれば一に衣裳垢膩、二に頭上花萎、三に身體臭穢、四に腋下汗出、五に不樂本座を云ふ。

以つて布施し、供養せば、獲る所の功德、福利無量無邊ならん。復た次に觀世音、若しは未來、現在の諸の世界の中、六道の衆生命終の時に臨んで地藏菩薩の名を聞くことを得、一聲も耳根に歷ん者、是の諸の衆生永く三惡道の苦を歷ざらん。何に況んや命終の時に臨んで、父母眷屬是の命終の人の舍宅、財物、寶貝、衣服を將つて地藏の形像を塑畫し、或は病人未だ終らざるの時に眼耳に見聞せしめ、眷屬、舍宅、寶貝等を將つて其の自身の爲めに、地藏菩薩の形像を塑畫すと道ふことを知らしむれば、是の人若し是れ業報にして重病を受く合き者ならんに、斯の功德を承けて、尋いで即ち除愈して壽命增益せん。是の人若し是れ業報にして命盡くれば應に一切の罪障、業障有るべく、惡趣に墮す合き者も斯の功德を承けて命終の後即ち人天に生じて勝妙の樂を受け、一切の罪障悉く皆消滅せん。復た次に觀世音菩薩、若し未來世に男子、女人有つて或は乳哺の時、或は三歲、五歲、十歲已下にして父母を亡失し、乃及兄弟姉妹を亡失せん。是の人年既に長大にして父母及び諸の眷屬を思憶するに、何れの趣に落在し、何れの世界に生じ、何れの天中に生ずるかを知らず。是の人若し能く地藏菩薩の形像を塑畫し、乃至名を聞いて一瞻、一禮すること一日より七日に至るまで初心を退くこと莫く、名を聞き、形を見て瞻禮し、供養せば、是の人の眷屬假ひ業に因るが故に、惡趣に墮せん者計るに當に劫數なるべきも、斯の男女、兄弟、姉妹の地藏の形像を塑畫して瞻禮する功德を承けて尋いで即ち解脫せん。人天の中に生じて勝妙の樂を受けん者は即ち斯の功德を承けて、轉た聖因を增して無量の樂を受けん。是の人更に能く三七日の中、一心に地藏の形像を瞻禮し、其の名字を念ずること萬遍に滿たば、當に菩薩の無邊の身を現じて具さに是の人の眷屬の生ずる界を告ぐることを得べし。或は夢中に於いて菩薩大神力を現じて親しく是の人を領して諸の世界に於いて諸の眷屬を見せしめん。更に能く每日菩薩の名を念ずること千遍して千日に至らば、是の人當に菩薩の所在の土地の鬼神を遣して終身衞護せらるるを得べし。現世に衣食豐溢して諸の疾苦無く、乃至

横事其の門に入らさらしむべし。何に況んや身に及ばんや。是の人畢竟じて菩薩の摩頂授記を得ん。復た次に觀世音菩薩、若し未來世に善男子、善女人有りて廣大の慈心を發して一切の衆生を救度せんと欲せん者、無上菩提を修せんと欲せん者、三界を出離せんと欲せん者、是の諸の人等地藏の形像を見、及び名を聞かん者、至心に歸依し、或は香華、衣服、寶貝、飲食を以つて供養し、瞻禮せんに、是の善男女等の所願速に成じて永く障礙無からん。

　復た次に觀世音、若し未來世に善男子、善女人有つて現在、未來百千萬億等の願、百千萬億等の事を求めんと欲せば、但だ當に地藏菩薩の形像に歸依し、瞻禮し、供養し、讃歎すべし。是の如きの所願、所求悉く皆成就せん。復た地藏菩薩の大慈悲を具して永く我を擁護せんことを願はば、是の人睡夢の中に於いて卽ち菩薩の摩頂授記を得ん。復た次に觀世音菩薩、若し未來世の善男子、善女人大乘經典に於いて深く珍重を生じて不思議の心を發し、讀まんと欲し、誦せんと欲して縱ひ明師あり、敎へ視して熟せしむるに遇うて旋く得るも旋く忘れ、動もすれば年月を經るも讀誦すること能はず。是の善男子等宿業の障有つて未だ消除することを得ざるが故に大乘經典に於いて讀誦の性無なきなり。是の如きの人、地藏菩薩の名を聞き、地藏菩薩の像を見て、具さに本心を以つて恭敬し、陳白して、更に香華、衣服、飲食、一切の玩具を以つて菩薩を供養し、淨水一盞を以つて一日一夜を經て菩薩の前に安じ、然る後合掌し、請服して、首を廻らし南に向つて、口に入るる時に臨んで、至心に鄭重なるべし。服水既に畢つて五辛、酒肉、邪淫、妄語、及び諸の殺害を愼むこと一七日、或は三七日、是の善男子、善女人睡夢の中に於いて、具さに地藏菩薩の無邊の身を現じて是の人の處に於いて[二七]灌頂の水を授けたまふことを見ん。其の人夢覺めて卽ち聰明を獲ん。應に是の經典一たび耳根に歷ば、卽ち當に永く記して更に一句、一偈をも忘失せざるべし。復た次に觀世音菩薩、若し未來世に諸の人等有つて衣食足らず、求むることは願に乖き、或は病疾多く、或は凶衰

【二六】　五辛＝大蒜、小蒜（蘭葱）、興渠、慈葱、茖葱の五種の辛味ある蔬菜を云ふ。

【二七】　灌頂＝地藏菩薩陀羅尼經脚註參照。

多くして家宅安からず、眷屬分散し、或は諸の横事多く來つて身に忤ひ、睡夢の間も多く驚怖すること有らん。是の如きの人等地藏の名を聞き、地藏の形を見て至心に恭敬し、念じて萬遍に滿たば、是の諸の不如意の事漸漸に消滅して卽ち安樂を得、衣食豐溢し、乃至睡夢の中に於いても悉く皆安樂ならん。復た次に觀世音菩薩、若し未來世に善男子、善女人有つて、或は治生に因り、或は公私に因り、或は生死に因り、或は急事に因つて山林の中に入り、河海乃及大水を過ぎ渡り、或は險道を經ん。是の人先づ當に地藏菩薩の名を念ずること萬遍なるべし。過ぐる所の土地の鬼神衞護して行往坐臥に永く安樂を保たん。乃至虎狼、師子、一切の毒害に逢ふとも之を損ずること能はさらん。」と。

佛、觀世音菩薩に告げたまはく、「是の地藏菩薩は閻浮提に於いて大なる因緣有り。若し諸の衆生に於いて見聞利益等の事を說かば、百千劫の中に說くとも盡くすこと能はさらん。是の故に觀世音、汝神力を以つて是の經を流布して娑婆世界の衆生をして百千萬劫に永く安樂を受けしめよ。」と。

爾の時に世尊而も偈を說いて言く、

吾れ地藏の威神力を觀るに　恒河沙劫に說くとも盡し難し。
見聞瞻禮すること一念の間もせば　人天を利益する無量の事あらん。
若しは男、若しは女、若しは龍神　報盡きて應當に惡道に墮すべきも
至心に大士の身に歸依せば　壽命轉增して罪障を除かん。
少うして父母の恩愛を失はん者　未だ魂神何れの趣に在りといふことを知らざるもの
兄弟、姉妹及び諸の親しきもの　生長より以來皆識らさるもの
大士の身を或は塑し、或は畫き　悲戀瞻禮して暫くも捨てず

三七日の中、其の名を念ぜば
菩薩當に無邊の體を現じて
其の眷屬の所生の界を示すべし。
縱ひ惡趣に墮つとも尋いで出離せん。
若し能く是の初心を退せずんば
即ち摩頂して聖記を受くることを獲ん。
無上菩提を修せんと欲せん者
乃至三界の苦を出離せんとするもの
是の人既に大悲心を發して
先づ當に大士の像を瞻禮すべし。
一切の諸願速に成就して
永く業障の能く遮止すること無からん。
人有つて發心し、經典を念じて
群迷を度し彼岸に超へしめんと欲す。
是の願不思議を立つと雖も
旋く讀めば旋く忘れて廢失多し。
斯の人業障の惑有るが故に
大乘經に於いて記すること能はず。
地藏を供養するに香華
衣服、飲食、諸の玩具を以つてし
淨水を以つて大士の前に安んじて
一日一夜求めて之を服し
殷重の心を發して五辛
酒肉、邪婬及び妄語を愼み
三七日の內殺害すること勿く
至心に大士の名を思念せば
即ち夢中に於いて無邊を見て
覺め來つて便ち利根耳を得ん。
是の經敎の耳を歴て聞くに應じて
千萬生の中、永く忘れざらん。
是の大士の不思議を以つて
能く斯の人をして此の慧を獲せしむ。
貧窮の衆生及び疾病
家宅凶衰して眷屬に離れ
睡夢の中、悉く安んぜず
求むることは乖違して稱遂無からんに
至心に地藏の像を瞻禮せば
一切の惡事皆な消滅せん。
夢中に至るも盡く安んずることを得て
衣食豐饒にして神鬼に護られん。

山林に入り及び海を渡らんと欲するに　毒悪の禽獣及び悪人
悪神、悪鬼并びに悪風　一切の諸難、諸の苦惱あらんに
但だ當に地藏菩薩大士の像を　瞻禮し及び供養すべし。
是の如きの山林、大海の中　應に是の諸悪皆消滅すべし。
觀音、至心に吾が説を聽け。　地藏無盡の不思議
百千萬劫に説くとも周く、廣く　大士の是の如きの力を宣べざらん。
地藏の名字、人若し聞き　乃至像を見て瞻禮せん者、
香華、衣服、飲食をもつて奉じ　供養せば、百千の妙樂を受けん。
若し能く此を以つて法界[二八]に廻せば　畢竟じて成佛し、生死を超えん。
是の故に觀音、汝當に知つて　普く恒沙の諸の國土に告ぐべし。

囑累人天品第十三[二九]

爾の時に世尊、金色の臂を擧げ、又、地藏菩薩摩訶薩の頂を摩でたまひ、而して是の言を作したまはく、「地藏、地藏、汝が神力不可思議なり。汝が慈悲不可思議なり。汝が智慧不可思議なり。汝が辯才不可思議なり。正使十方の諸佛、汝が不思議の事を讃歎し、宣説すとも千萬劫の中にも盡くすことを得ること能はざらん。地藏、地藏、記せよ。吾れ今日忉利天中に在つて、百千萬億不可説、不可説の一切の諸佛、菩薩、天、龍、八部の大會の中に於いて再び人天の諸の衆生等の未だ三界を出でずして、火宅の中に在る者を以つて汝に以囑す。是の諸の衆生をして悪趣に墮せしむること一日、一夜もすること無れ。何に況んや更に五無間及び阿鼻地獄に落ちて、動もすれば千萬億劫を經て出期有ること無からんをや。地藏、是の南閻浮提の衆生は志性定り無く、習悪の者多し。縱ひ善心を

【二八】法界＝請問法身讃脚註參照。

【二九】この品は囑累人天流通分なり。初には世尊天人衆を憂へて地藏菩薩に囑累す。次に虚空藏菩薩の地藏菩薩瞻禮の福利を問へるに對して、二十八種乃至七種の功德を說きたまふ。

發すとも須臾に卽ち退せん。若し惡緣に遇はば念念に增長す。是を以つての故に、吾れ是の形を百千億に分つて化度し、其の根性に隨つて之を度脫す。地藏、吾れ今殷勤に天人衆を以つて汝に付囑す。未來世に若し天、人及び善男子、善女人有つて、佛法の中に於いて小善根を種うること一毛、一塵、一沙、一渧ならんにも、汝、道力を以つて是の人を擁護して、漸く無上を修して退失せしむること勿れ。復た次に地藏、未來世の中に若しは天若しは人、業報に隨つて應に惡趣に落在すべきも、趣中に墮し、或は門首に至るに臨んで、是の諸の衆生若し能く一佛の名、一菩薩の名、一句、一偈をも大乘經典を念じ得ば、是の諸の衆生汝が神力を以つて方便して救拔し、是の人の所に於いて無邊の身を現じ、爲めに地獄を碎き、天に生ぜしめて勝妙の樂を受けしめよ。」と。

爾の時に世尊偈を說いて言く、

現在、未來の天人衆　　吾れ今慇懃に汝に付囑す。
大神通方便を以つて度し　　諸の惡趣に墮在せしむること勿れ。

爾の時に地藏菩薩摩訶薩、胡跪合掌して佛に白して言さく、「世尊、唯だ願はくは世尊、以つて慮りを爲したまはざれ。未來世の中に若し善男子、善女人有つて、佛法の中に於いて一念も恭敬せば、我れ亦百千の方便をもつて是の人を度脫して、生死の中に於いて速かに解脫を得せしめん。何に況んや諸の善事を聞いて念念に修行せんものをや。自然に無上道に於いて永く退轉せざらん。」と。

是の語を說きたまふ時に會中に一りの菩薩有り。[三〇] 虛空藏と名づく。佛に白して言く、「世尊、我自忉利に至つて如來の、地藏菩薩の威神、勢力、不可思議のことを讚歎したまふことを聞きぬ。未來世の中、若し善男子、善女人乃及一切の天、龍有つて、此の經典及び地藏の名字を聞き、或 形像を瞻禮せば幾種の福利をか得ん。唯だ願はくは世尊、未來、現在の一切衆等の爲めに略して之を說きたまへ。」と。佛、虛無空藏菩薩に告げたまはく、「諦に聽け。諦に聽け。吾れ當に汝が爲めに分別して

【三〇】 虛空藏＝Ākāśagarbha 又は Gaganagarbha 一切の功德を包藏すること虛空の如ければこの名あり。

之を說くべし。若し未來世に善男子、善女人有つて地藏の形像を見、及び此の經を聞き乃至讀誦し、香華、飮食、衣服、珍寶をもつて布施し、供養し、讃歎し、瞻禮せんもの二十八種の利益を得ん。一には天龍護念し、二には善果日に增し、三には聖上因を集め、四には菩提退せず、五には衣食豐足し、六には疾疫臨まず、七には水火の災を離れ、八には盜賊の厄無く、九には人見て欽敬し、十には神鬼助持し、十一には女は男身に轉じ、十二には王臣の女と爲り、十三には端正相好にして、十四には多くは天上に生じ、十五には或は帝王と爲り、十六には宿智命通にして、十七には求むること有れば皆從ひ、十八には眷屬歡樂し、十九には諸橫消滅し、二十には業道永く除き、二十一には去處盡く通じ、二十二には夜夢安樂に、二十三には先亡苦を離れ、二十四には宿福に受生し、二十五には諸聖に讃歎せられ、二十六には聰明利根にして、二十七には饒慈愍心あり、二十八には畢竟成佛す。

復た次に虛空藏菩薩、若し現在、未來の天、龍、鬼神、地藏の名を聞き、地藏の形を禮し、或は地藏本願の事行を聞きて讃歎し、瞻禮せば七種の利益を得ん。一には速に聖地に超え、二には惡業消滅し、三には諸佛護臨し、四には菩提退せず、五には本力を增長し、六には宿命皆通じ、七には畢竟成佛す。

爾の時に十方一切の諸來の不可說、不可說の諸佛如來及び大菩薩、天、龍、八部、釋迦牟尼佛の地藏菩薩の大威神力、不可思議なることを稱揚し、讃歎したまふことを聞きて未曾有なりと歎ず。是の時忉利天より無量の香華、天衣、珠瓔を雨し、釋迦牟尼佛及び地藏菩薩を供養し已つて、一切の衆會倶に復た瞻禮し、合掌して退く。

地藏菩薩本願經（終）

百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚

開府儀同三司特進試鴻臚卿肅國公食邑三千戸賜紫贈司空
謚大鑒正號大廣智大興善寺三藏沙門不空　詔を奉じて譯す。

歸命して法身を禮したてまつる。　諸の[一]有情に住したまふ。
彼に遍知せざるに由らば　[二]三有に輪廻す。
其の性即ち生死なり。　淨なる時も亦復た然り。
清淨是れ[三]涅槃なり。　亦即ち是れ[四]法身なり。
譬へば乳の相雜らば　[五]醍醐の得べからざるが如く
如し煩惱、相雜らば　法界は見るべからず。
譬へば乳を淨め已らば　酥の精妙にして無垢なるが如く
如し其の煩惱を淨むれば　法界極めて清淨なり。
燈の其の瓶に在らば　光耀所有無きが如く
如し煩惱瓶に在らば　[六]法界照耀せず。
彼彼、一邊をして　其の瓶に若し穴を得しむれば
彼彼の一邊に由り　光明外に出づ。
[七]三摩地の杵を以つて　[八]煩惱の瓶を破壞せば
虛空に遍滿して　普遍に光り照耀せん。
法界亦生ぜず。　亦曾つて壞滅せず。

【一】有情＝Sattva 情識を有するものの意。生物中動物の類を云ふ。生存即ち有(Bhava)に屬し、個體的生命を營むものを云ふ。非情（草木山河大地等）に對する語。
【二】三有＝三界のこと。
【三】涅槃＝Nirvāṇa Parinirvāṇa 譯して寂滅、解脫、圓寂等と云ふ。一切の煩惱を除斷し、再び生死流轉を繰り返すことなき佛教の最高理想を云ふ。
【四】法身＝佛の眞身を云ふ。
【五】醍醐＝牛乳より精製せるものにして味中第一のもの。その製法について、涅槃經には牛乳より酪を製し、酪より生蘇を製し、生蘇より熟蘇を製し、熟蘇より醍醐を製すとあり。
【六】法界＝眞如法性、實相等の別名にして、一般に佛教の理想概念の一として用ひらる。法とは絕對の理法界には

一切の時に染せず。　初中に常に無垢なり。
譬へば[九]吠瑠璃の如し。　常時に極めて光明あるも、
石藏もて以つて覆蔽せば　彼の光り、照耀せず。
是の如く煩惱覆はば　法界妙淸淨も
生死を照らさず。　涅槃に於いて光り明かなり。
[一〇]有性若し功有らば　則ち眞金を見
[一一]無性若し功有らば　困して獲る所無し。
穢其の上を覆はば　名けて[一二]粳米と爲さざるが如く
煩惱其の上を覆はば　亦名けて佛と爲さず。
若し穢を離るることを得ば　粳米を顯現す。
煩惱を遠離せば　法身、顯現することを得。
世間、譬喩を作さく　芭蕉は堅實無きも
而も貞實の果有りて。　食味甘露の如し。
實の生死無きも　煩惱の海に流轉するが如く
其の果は卽ち佛體にして　甘露施、有施なり。
是の如く諸の種に於いて　相似して其の果を生ず。
種も無く、亦果も無しとは　智者必ず信ぜざらん。
[一三]種子は則ち其の性にして　諸法の所依なり。
次第に若し能く淨めば　成佛の位を獲得せん。
日月は常に無垢なれども　五種を以つて覆蔽せらる。

三意あり。因より云はば聖法を生ずる依因を法界と云ひ、性より云はば萬物の本體を法界と云ひ、分より云はば理法の世界を法界と云ふ。

【七】三摩地＝Samādhi 三昧、定と譯す。心を一處に定めて動ぜざらしむる修行を云ふ。

【八】煩惱＝Kleśa 主我の私情より起る惡傾向の心作用を云ひ、目前の苦樂に迷ひ、肉慾（貪）、激情（瞋）、愚癡（痴）等より心の動搖を來し、肉體精神を惱亂する精神作用を云ふ。

【九】吠瑠璃＝Vaidūrya 寶石の一。瑠璃のこと。

【一〇】有性＝菩薩定性、緣覺定、性聲聞定性、不定性の如く佛性有るものを云ふ。

【一一】無性＝一闡提の如く佛性なく、畢竟成佛の期なきものを云ふ。

【一二】粳米＝うるち米のこと。ここでは玄米を指す。

【一三】種子＝Bīja 萬法唯識の唯心論に立脚せる唯識宗の所說によれば、吾等の心の主體ともいふべき第八識卽ち阿羅耶識中に具有する心勢力或は心作用を云ふ。この種子に六要件ありとせらる。一に萬有開發の原因たるが爲めに、始終變化し固定せざるものたること（刹利滅）。二に原因果

雲と霧と烟等と
是の如く心の光明も
貪愛と瞋恚と眠と
火の其の衣を洗ふに
若し火中に擲たば
[一六]空類の諸の契經の
一切、煩惱を斷ずるも
譬へば地下水は
智は煩惱に隱さるるも
法界亦我にも非ず
一切の執を遠離すれば
諸法に著する所無ければ
貪盲に調伏せらるるが故に
無常と苦と空との性なり。
最勝心靜慮は
胞胎に孕める子は
煩惱に覆はるれば
分別に四種有り。
我と我所と
一切佛の大願は

[一四]羅睺の手と及び塵となり。
覆蔽するに五垢を以つてす。
[一五]掉擧と疑惑となり。
種種の垢不淨なれども
垢を燒きて衣を燒かざるが如く
所有る如來の說は
曾つて其の性を壞せず。
常住にして而も清淨なるが如く、
清淨なること亦復た然なり。
女にも非ず、亦男にも非ず。
云何が我を分別せん。
女男不可得なり。
男女の相を示現す。
心靜慮に三有り。
諸法無自性なり。
之有れども現ぜざるが如く
法の實は見るべからざるが如し。
[一七]所生と大造とは[一八]
[一九]名想と及び境界とを分別するなり。
無所有・無相なり。

結五に經緣ならず、同時に俱存するものたること(果俱有)。三に作用變化するも同類として永續し、時間的に斷絕することなきこと(恒隨轉)。四に善因善果、惡因惡果と因により果に定性あること(性決定)。五に種子は直接の原因たるも、常に間接の助緣を要するものたること(待衆緣)六に發生せる結果は必ず原因たる作用と同類たるを(引自果)、是れなり。

【一四】羅睺＝Rahu 星の名。羅睺阿修羅のこと、羅睺は日月の蝕をなすとせらる。

【一五】掉擧＝Auddhatya 心をして輕浮ならしむる作用を云ふ。

【一六】空類の諸の契經＝契經とは經文を云ふ。諸法皆空の理を說く經にして、般若部の諸經を云ふ。

【一七】所生＝所造の色を云ふ。

【一八】大造＝地、水、火、風の四大種を云ふ。

【一九】名想＝名前を云ふ。

【二〇】遍計の相＝遍計所執性のこと。凡夫の妄執により誤つて實有なりと認むることを云ふ。繩を見て蛇と思ひ、又兎に角ありと云ふが如し。この場合種種の妄執を離れて繩を繩と見、因緣所成のものと認むるを依他起性と云ふ。

自覺相應するが故に
兎に角有りと言ふが如きは
是の如く一切法は
分析して微塵の如くせば
初の如く後も亦爾なり。」
是の如く和合して生じ
一法として自ら生ぜず。」
兎牛二角の喩
[21]中道に依住すれば
月及び星宿の
影像而も顯現するが如し。」
初中も亦善と爲す。
彼に[24]五種の我無し。
譬へば熱時の水なるが故に
是れ則ち其の冷時なれば
煩惱の網に覆蔽せらるれば
若し其の煩惱を離るれば
眼識、色を緣じて
生ぜず、亦滅せず。
耳識、聲を緣す。

諸佛は常に法性なり。
分別にして有に非ず。
分別するに不可得なり。
分別不可得なり。
智云何が分別せん。
和合も亦滅壞す。
云何が愚分別する。
此を[20]遍計の相と名づく。
[22]善逝の法性の如し。
清水の器に現ずれば
是の如きは[23]圓成の相なり。
常恒に欺誑せず。
云何が我を分別せん。
名けて熱水と爲し
則ち名けて冷水と爲すが如く
是れ則ち名けて心と爲し
則ち名けて[25]等覺と爲す。
影像極めて清淨なり。
法界は形相無し。
[26]清淨識に三種あり。

【二一】中道＝邪邊の迷妄を離れたる法の實理を云ふ。
【二二】善逝＝Sugata 如來の十號の一。一切智を以て八正道を行じて涅槃に入るが故なり。
【二三】圓成の相＝圓成實性のごと。圓滿に成就せる眞實性にして、法性又は眞如とも云ふ。月や星も清水の器に現れたる影像の如く、その自性なしと認むることを云ふ。
【二四】五種の我＝成唯識論第一に依るに、一に卽蘊の我（五蘊の身を總じて計して我とするもの）、二に離蘊の我（五蘊の法を離れて別に我ありとするもの）、三に非卽非離蘊の我（我は五蘊に卽するにも非ず、離るるにも非ず、五蘊と我とは不卽不離なりとするもの）の三種を擧げ、更に離蘊の我を三種に分ちて、一に數論、勝論等の我、二に無慚外道等の我、三に獸主外道等の我の三とし、五種の我を擧ぐ。三種の離蘊の我とは、その體は皆共に常なりとなすも、第一はその量、虛空に同じく遍滿し、隨處に業を造り、苦樂の果を受くとなし、第二はその量、不定にして身の大小に隨うて大小ありとし、第三はその量、至細にして一極微の如く、身中を遍に潛轉すとせり。

自の分別を以つて聞く。」
〔二五〕鼻は香に依つて嗅ぐ。
鼻識、是れ眞如なれば
〔二六〕舌界の自性は空なり
依も無く、亦識も無し。」
淸淨身は自性なり。
所緣を遠離するを
諸法は意を最と爲す。
法界は自性無し。
能く見と聞と嗅と
〔二七〕瑜伽法は是れ知なり。
眼と耳と及び鼻と
六處皆淸淨なり。
心見に二種有り。
我執は流轉を爲す。
無盡は是れ涅槃なり。
彼を覺らば是れ佛體なり。」
一切此の身に於ける
〔二九〕繋縛は自の分別なり。
〔三〇〕菩提は遠近にあらず。

法界は形相無し。
色も無く亦形も無し。
法界は應に分別すべし。」
味界の性は遠離なり。
法界の自性なるが故なり。」
觸る所は和合の相なり。」
我說いて法界と爲す。
能所の分別を離れて
法界を分別すれば
是れ味と及び所觸となり。
是の如きは　圓成の相なり。
舌と身と及び〔二七〕末那と
是の如きは彼の相なり。
世間と出世間となり。
自覺せば是れ眞如なり。
若し貪と及び癡とを盡して
有情の歸依處なり。
有智と及び無智との
悟に由つて解脫を得。
不來亦不去なり。

又、梵網經菩薩戒本疏第一には六種の我を擧げ、一に執我、二に慢我、三に習氣我、四に隨世流布我、五に自在我、六に眞我とす。或は此等の類か。

【二五】等覺＝大乘の修行階位五十二位中、菩薩の極位なる第五十一位を云ふ。將に妙覺の佛果を得んとして、其の智慧功德、妙覺に等似すればこの名あり。

【二六】淸淨識に三種あり楞伽經の所說にして一、に眞識、二に現識、三に轉識なり。眞識とは生滅の相を離れたる眞心を云ひ、現識とは眞心と無明と和合して、染淨の法を生ずる識を云ひ、轉識とは現識を緣として生ずる眼等の六識を云ふ

【二七】瑜伽法＝瑜[illegible]（yoga）とは yuj（結ぶ）を語源とし、結合抑制の意。印度古代よりある修行法にして、五感の作用を制し、外界の執着を離れ、靜平を得る方法なり。佛敎にも亦その特有の瑜伽法あり、印度佛敎に於ける重要なる一敎系をなせり。

【二八】末那＝Manas 意。六處六根のこと。

【二九】繋縛＝煩惱の異名。

【三〇】菩提＝Bodhi 新譯にては覺と譯され、舊譯にては道と譯さる。一切の煩惱障、所知障を斷じて得る覺悟を云ふ。

壞滅及び顯現は
素の契經に説かる。
照すに智慧の燈を以つてせば
菩提は遠想ならず
是れ[三二]六境の影像なり。
水と乳と合して
鵝は飲んで其の乳を盡すに
是の如く煩惱
瑜伽者は智を飲んで
是の如く我・我執
若し[三三]二無我を見ば
是れ佛の般涅槃なり。
愚夫は二の分別あり。
種種の行じ難き[三四]施と
一切の損を[三六]忍辱すると
諸法に於いて[三七]精進し
常に[三九]智慧を習はば
[四〇]方便と共なるを慧と爲す。
[四二]力と[四三]妙堅智とを以つて
應に菩薩を證すべからずとは

此の煩惱の網に於いてす。
自ら思惟に住し
即ち[三一]最勝寂を得ん。
亦、隣近の想無し。
皆是の如きの知に由りて
同じく一器に在らば
其の水常に在るが如し。
智に雜して一器に在らば
煩惱を棄捨す。
乃至所取の執は
種有るも而も減壞す。
常恒に淨にして無垢なり。
二の瑜伽句無し。
[三五]戒とを以つて有情を攝すると
界增して此を三と爲す。
[三八]靜慮の心もて加行し
復た菩提を增することを得。
[四一]願、皆清淨なるを以つて
界增して四種と爲す。
此れを甚だ惡説と爲す。

【三一】最勝寂＝阿耨多羅三藐三菩提（Anuttarasamyaksaṃbodhi）、即ち佛果の智慧なり。

【三二】六境＝境（Viṣaya, Artha, Gocara）とは境界とも云ふ。Artha は對象の義、他の二は主觀が活動する區域の義にして、凡て認識作用に於ける對象を云ふ。六境とは色、聲、香、味、觸、法なり。これらは次第の如く、眼、耳、鼻、舌、身、意（六識）識の對象となればなり。

【三三】二無我＝人法二無我のこと。我法二空、又は人法二空とも云ふ。これ佛教にては一切の執着を迷見の基本とするより起れる所論にして、我我所即ち我執の主觀的迷執を除くべきを説けるを我空（人無我）と云ひ、我執の依つて出づる根本、即ち物心諸法に對する客觀的法執を除くべきを示せるを法空（法無我）と云ふ。

【三四】施＝Dāna 又、檀那に作る施與のこと。慈善博愛の行爲を云ひ、施物に依り財施（金錢等）、法施（説法）の二に分かたる。以下大乘菩薩の修行なる十波羅蜜を説く。

【三五】戒＝Śīla 又、尸羅を作る戒律を守ることにして佛教道徳の修行なり。

菩薩に視まずんば　其の法身を生ぜず。
甘蔗の種を[四四]憎んで　石蜜を食はんと欲するも
若し甘蔗の種を壞せば、　石蜜生ずるに由無し。
若し甘蔗の種を護らば　[四五]三種而も得べし。
糖と牛糖と石蜜とは　中に於いて必ず生ずることを得ん。
若し菩提心を護らば　[四六]三種而も得べし。
羅漢と緣覺と佛とは　中に於いて必ず生ずることを得ん。
稻芽を護らば　農夫必ず當に護るべきが如く
[四七]初の勝解行を　如來必ず護を作すが如し。
[四八]白十五日にして　月輪の形を見るが如く
是の如く勝解行は　佛の形相を影現せん。
是の初月輪の　[四九]刹那刹那に增するが如く
是の如く[五〇]入地者は　念念に增益を見ん。
白十五日に　月輪圓滿を得るが如く
是の如く[五一]究竟地に　法身生ずることを得ん。
勝解、彼れ堅固なれば　常に當に佛法に於いて
能く是の如きの心を發し　爲めに[五二]不退轉を得べし。
[五三]染依は[五四]轉依を得れば　[五五]受、[五六]淨依と爲ることを得。
分に覺悟を得るに由つて　名けて[五七]極喜地と爲す。
常時に染汚の　欲等の種種の垢に於いて

【三六】忍辱＝Kṣānti 又、羼提に作る。一切の忍耐を云ふ。
【三七】精進＝Vīrya 又、毘梨耶に作る。常に修養を勵み毫も怠らぬこと。
【三八】靜慮＝Dhyāna 又、禪那、定に作る。心を靜め、統一あらしむること。
【三九】智慧＝Prajñā 又、般若に作る。凡ての邪智邪見を去つて眞智を得ること。
【四〇】方便＝Upāya-Kauśalya 具には方便善巧と云ふ。自ら菩提を求むるにも、亦他をして菩提を得せしむるにも方便手段の巧みなること。
【四一】願＝Praṇidhāna 波羅蜜(Pāramitā 到彼岸又は度と譯す)行を完成せんとする希望を云ふ。
【四二】力＝Bala 考察と實習の二力により六度(檀、戒、忍、進、禪、慧)を體現すること。
【四三】妙堅智＝Jñāna 以上の得たる凡ての力を個個の場合に應じ、差別的事實に適合する如くに運用すること。
【四四】憎＝正藏は增に作る。今三本に據る。
【四五】三種＝以下の糖、牛糖、石蜜を指す。
【四六】三種＝以下の羅漢(聲聞をさす)、緣覺、佛を云ふ。
【四七】初の勝解行＝發菩提心を云ふ。

無垢にして清淨なることを得るを
煩惱の網を滅壞して
無量の暗瞑に離るるを
清淨にして常に光明あり
智慧の焰に圍遶せらるるを
一切の明、二抜
難勝の煩惱に於いて
[六三]三種の菩提に於いて
甚深に於て生滅すれば
光網に遊戲し
欲暴流を超越するを
一切の佛、[六六]加持し
自在無功用にして
諸の無礙解に於いて
說法談論に於いて
身は智を以つて成ぜられ
諸佛皆所持し・
佛法の所依
所依皆轉ずることを得るが故に
不思議の惑を離れ

名けて[五八]離苦地と爲す。
照耀して離垢を得。
[五九]發光地と名く。
世の[六〇]吉祥を遠離して
名けて[六一]焰慧地と爲す。
種種靜慮の飾もて
勝ち難きに勝つことを得る[六二]地なり。
攝受して成就せしめ
名けて[六四]現前地と爲す。
遍く帝釋の嚴を以つてし
名けて[六五]遠行地と爲す。
智海に預入し
魔使に[六七]動ぜず。
[六八]瑜伽によつて彼岸に到り
名けて[六九]善慧地と爲す。
虛空無垢の如し。
普遍なること[七〇]法雲の如し。
行果皆所持し
名けて法身と爲す。
及び流轉の習を離る。

【四八】白月＝陰曆の一日より十五日に至る間を云ふ。
【四九】刹那＝Kṣaṇa 一念の間を云ふ。時の最少なるものなり。
【五〇】入地者＝初めて初地、歡喜地に入れるものを云ふ。
【五一】究竟地＝第十地、法雲地を云ふ。
【五二】不退轉＝Avaivartika 又は Avinivartaniya 略して不退と云ひ、梵音を譯して阿鞞跋致に作る。所修の功德善根愈〻成熟して更に退失することなきこと。
【五三】染依＝有漏のこと。
【五四】轉依＝無漏に轉ずること。
【五五】受＝五蘊中の受蘊(Vedanā-skandha)のこと。卽ち感受にして苦(不快)、樂(快)、不苦、不樂を感受する心作用を云ふ。
【五六】淨依＝無漏のこと。
【五七】極喜地＝Pramuditā-bhūmi 又、歡喜地と云ふ。菩薩十地の中、初地にして、菩薩はこの地に在りて初めて善法を得て、歡喜多ければこの名あり。
【五八】離苦地＝Vimalā-b. 第二地なり。菩薩はこの地の中に十善道を行して誤苦を離るるが故なり。
【五九】發光地＝Prabhākarī-b.

汝が思ふ如く思はば　云何が知ることを得ん。
諸語の境を超過し　一切の根、境に非ず。
意識所取の者　所有る我體の如し。
次第に而も積集して　佛子の大名稱あり。
皆法雲智を以つて　微細に法性を見る。
爾の時に心を洗濯し　生死海を超渡す。
彼れ大蓮花を以つて　安立して大座と爲す。
無量の寶葉の光あり。　寶光明を臺と爲す。
無量億の蓮花あり。　普遍く眷屬と爲す。
先づ[七一]十種の力を以つてし　[七二]無畏の四種と
餘の佛の[七三]不共法とを以つて　大自在にして坐す。
一切の善皆集り　福智以つて資糧とす。
圓月の星宿に在りて　遍滿して圍遶するが如く
則ち佛日の手を以つて　寶光無垢を以つて
長子に[七四]灌頂して　普遍く皆灌がしむ。
彼れ大瑜伽に住し　皆見るに[七五]天眼を以つてす。
無明は世を攪擾して　惡習・苦・怖畏あるも
狀、金光色の如し。　彼の瑜伽の光に從つて
彼の無知に覆はるるは　無明の門を開くことを得。
福智を以つて感招し　彼れ[七六]無執の定を得て

又、明地と云ふ。第三地なり。菩薩はこの地の中に廣博多學にして、衆のために法を說いて、能く照明をなすが故にこの名あり。
【六〇】 吉祥＝Lakṣmī 又、落吃澁弭に作る。嘉慶、吉慶の意。
【六一】 焰慧地＝Arciṣmati-b. 又、焰地とも云ふ。菩薩十地中の第四地。この地の中に布施・持戒・多聞いよいよ增して威德熾盛なるが故にこの名あり。
【六二】 地＝Sudurjayā-b. 第五地なり。菩薩この地の中に功德力盛んにして、一切の諸魔も壞すること能はざるが故にこの名あり。
【六三】 三種の菩提＝聲聞、緣覺、菩薩の三種の覺を云ふ。
【六四】 現前地＝Abhimukhī-b. 第六地なり。菩薩この地に入らば一切の障魔の事已んで、諸の菩薩の道法現前するが故なり。
【六五】 遠行地＝Dūraṃgamā-b. 又、深遠地と云ふ。第七地なり。この地は三界を去ること遠くして法王位に近づけばなり。
【六六】 加持＝Adhiṣṭhāna 加は加被、持は任持の義。密教の術語にして、佛の不思議力を以て衆生を加被(護り)し、且つ任持して捨てざるを云ふ。

緣に隨つて圓寂し
諸法は自性無し
菩薩王は　妙見
皆無垢身を以つて
卽ち衆生の利を作すこと
一切の瑜伽者は
佛影は皆變化し
或は八臂の者
彼れ皆瑜伽王なり。
皆慈悲の手を以つて
對るに般若の箭を以つてし
大力を以つて昇進し
一切の無明の𩂯
强力の諸の有情は
有情を調伏するが故に
自ら作業者と爲り
教誡すること教理の如し。」
飢渴猛熾の身には
常に諸疾を患ふる者には
魔王の眷從に於ける

心皆變化することを得。
自性は境界に於いてす。
法身は妙にして無垢なり。」
智海に安住す。
巧摩尼珠の如し。
大瑜伽自在なり。
遍滿して流出す。
三目熾盛の身なる有り。
普遍く流出す。
勝喜して弓を執持す。
皆細無明を斷す。
智慧の棒を執持す。
普遍く皆碎壞す。
金剛熾盛の身をもつて
則ち　金剛手と爲す。
種種の果を示現す。
變じて　平等王と爲る。
能く諸の飲食を施す。
則ち善醫王と爲る。
魔女の莊嚴に於けるに

又は佛力の加被を衆生が任持するを云ふ。
【六七】　魔使に動ぜず＝第八地は天魔・梵・沙門・婆羅門も能くその願を動ずることなければ不動地(Acalā-b.)と云ふ。
【六八】　諸の無礙解＝四無礙智のこと。一に法無礙智、二に義無礙智、三に辭無礙智、四に樂說無礙智なり。
【六九】　善慧地＝Sādhumatī-b. 第九地なり。菩薩この地の中に、其の慧轉た明にして調柔增上するが故なり。
【七〇】　法雲＝菩薩、第十地に至れば十方無量の世界に於いて、能く一時に法雨を雨らすこと大雨を澍ぐが如ければ、この地を法雲地(Dharmamegha-b.)と名く。
【七一】　十種の力＝如來の十力を云ふ。十住毘婆沙論卷一に、初力とは一切法の因果を了達する智、二力とは去來今の所起の業、果報を知る智、三力とは如實に諸の禪定、三昧を知つて、垢淨入出の相を分別する智、四力とは衆生の諸根の利鈍を知る智、五力とは衆生所樂の不同を知る智、六力とは世間種種の異性を知る智、七力とは至一切處道を知る智、八力とは宿命の事を知る智、九力とは生死の事を知る智、十力とは漏盡の事を知る智を云へり。

菩薩は親友と作り　能く菩提場を施す。
(八〇)猶日月の形の如し。　彼の光皆悦意す。
流出すること電光の如く　倶胝の刹を照曜す。
一燈を以ってするに由るが故に　遍く照して皆然ゆることを得。
若し一燈滅盡せば　一切皆隨つて盡く。
是の如く(八一)異熟の佛は　種種の光を示現す。
一、涅槃を化現せば　餘佛も歸寂を示す。
一亦滅度無くんば　日光豈暗と作らんや。
常に出沒を現じて　(八二)刹土海に示現す。
無智暗世に於いて　能く智慧の眼を淨くし
(八三)倶胝の刹に往き　矜愍して有情を化す。
彼れ皆疲倦せず　彼の大慈の甲に由る。
一切は(八四)神足に於いて　瑜伽すれば皆彼岸す。
皆、時、非時を觀じて　彼をして流轉を得しむ。
剛强にして諂曲に於けるも　暫時にして棄捨せしむ。
無量に有情を調し　頓に清淨ならしむることを作す。
無量の佛を變化して　頓時に暫變することを得。
三界の海中に於いて　調伏の網を擲ち
妙法の網を舒展して　普遍く成熟せしむ。
則ち調伏の網を以つて　普遍く成熟せしむ。

【七二】無畏の四種＝四無畏のこと。一に一切智無所畏、二に漏盡無所畏、三に說障道無所畏、四に說盡苦道無所畏を云ふ。
【七三】不共法＝如來の功德は無比にして他と同ぜざればこの名あり。普通に十八法を擧ぐれども廣論せば一切の如來の功德は悉く不共法なり。故に十住毘婆沙論には四十法を、地持論には百四十法を數ふ。
【七四】灌頂＝地藏菩薩陀羅尼經脚註參照。
【七五】天眼＝五眼の一。天道の眼なるが故にこの名あり。大智度論第五によれば「眼に色界四大造の淸淨識を得。是を天眼と名づく。天眼の所見は自地及び下地の六道中の衆生、諸物、若は近、若は遠、若は麁、若は細の諸色照す能はざるなし。是の天眼に二種あり。一は報より得、二は修より得」とあり、天眼に修得、生得の二種あることを擧ぐ。
【七六】無執＝執は執念又は執心を云ふ。事物に執着する妄情なり。
【七七】妙見＝妙見大士、妙見菩薩のこと、北斗七星の名。國士を擁護す。
【七八】金剛手＝Vajirapāni 手に金剛杖又は金剛杵を執るものを云ひ、金剛薩埵を云ふ。

普遍く擧出せしめ
則ち有情の如くなるも
度し已つて覺悟せしむ。
世尊の妙法鈴は
此の振聲に由るが故に
增上無明の人をして
日光の明威を以つて
暗煩惱に隨從するもの
彼をして利益を作さしめ
彼彼の人、化を現じ
煩惱、心を擾擾すれば
餓鬼の、海に於いて
是の如く少福なる者
有情少福ならば
如し生盲の手に於いては
云何が能く
倶胝の日光身に
諸天は少善を以つて
上次に大天に於いて
彼の色見ること能はず。

中に於いて漂流する者には
普遍く度せしめ已る。
妙法は疑を生ぜず。
普遍く聞くことを得しめ
煩惱の塵を除落す。
一時に淨めしめ。
衆の翳瞙を破壞す。
及び餘の罪身の者
積んで漸く清淨ならしむ。
安住すること水月の如し。
如來を見ず。
普遍く枯竭を見るが如く
無佛と分別を作す。
如來如何が作さん。
安くにか最勝の寶を以つてせん。
無上の法身を見ん。
光網以つて圍遶するも
而も見ること得ること能はず。
云何が見ることを得ん。
諸仙煩惱を離る。

【七九】平等王＝焰摩王のこと。

【八〇】猶＝正藏は由に作る。今三本に據る。

【八一】異熟＝Vipāka 善惡の業因によりて招得したる肉體の如き果報を云ふ。要するに善因樂果、惡因苦果は因果應報なれども、樂果、苦果それ自體は無記（非善非惡なるもの）なるが如きを云ふ。

【八二】刹土海＝刹は梵語 Kṣetra の訛略。土田の義。土は漢語、總じて國土を云ふ。

【八三】倶胝＝Koṭi 又、倶致に作る。數の名。億なり。

【八四】神足＝五神通の一。又、神境とも云はる。境界を不思議自在に變現する通力を云ふ。

【八五】三十二勝相＝三十二大人相のこと。具には三十二大人相と云ふ。この三十二相は佛に限らず、總ての大人相にして、此の相を具する者は家に在りては輪王となり、出家すれば無上覺を得と云ふ。その名目不定なれども今三藏法數四十八に依りて名を列ぬ。

一、足安平相
二、千輻輪相
三、手指纖長相
四、手足柔軟相
五、手足縵網相
六、足跟滿相
七、足趺高好相
八、腨如鹿王相

天、修羅、梵等
然も佛の威力を以つて
能く是の如きの類を見
有情の福端嚴なるものには
光明、身を照耀して
彼れ是の如き丈夫なり。
多時を經ずして
世尊は彼の色身
能く調す可き利を調す。」
廣壽は大瑜伽なり。
多人倶胝の餘
無量倶胝劫
因縁皆盡くること無し。
若し相應して此の理を顯す有らば
彼の人淨蓮花に生じ

云何が餘の少慧のものをや。
自心を清淨ならしむるが故に、
一切の盛を獲得せん。
佛、彼の人の前に住す。
[八五]三十二勝相あり。
當に大海の如きを見るべし。
卽ち智、海の如きことを得ん。」
多劫に安住し
趣戒に於いて種類あり。
少壽は何んが因の故に。
增減の壽を示現す。
命を以つて命增長せん。
無盡の果を獲得せん。
唯、身を慧を以つて分析を作すに
法の所說を聞いて無量の壽ならん。」

百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚（終）

九、手過膝相
十、馬陰藏相
一一、身縱廣相
一二、毛孔生青色相
一三、身毛上靡相
一四、身金色相
一五、常光一丈相
一六、皮膚細滑相
一七、七處平滿相
一八、兩腋滿相
一九、身如獅子相
二〇、身端直相
二一、肩圓滿相
二二、四十齒相
二三、齒白齊密相
二四、四牙白淨相
二五、頰車如獅子相
二六、咽中津液得上味相
二七、廣長舌相
二八、梵音深遠相
二九、眼色如紺青相
三〇、眼睫如牛王相
三一、眉間白毫相
三二、頂上肉髻相

佛說地藏菩薩陀羅尼經

*是の如く我聞きき。一時、佛、[一]佉羅提耶山、[二]牟尼仙所住の處に在り。大比丘衆と倶なりき。無量無數の聲聞大衆、菩薩摩訶薩無量無邊不可稱計なり。[三]月藏を說き訖る。爾の時に南方に大香雲雨・大香雨・大華雲雨・大華雨・無量瓔珞雲雨・種種瓔珞雨・大衣雲雨・大衣雨有り。佉羅提耶山、牟尼仙所住の處に於いて是の諸の大雨皆悉く遍滿す。大陰雲雨、而して香・華・衣服・[四]瓔珞も亦た種種無量法音を說く。是の如きの次第、乃至廣く說かん。[五]三歸の聲・持戒の聲・忍辱の聲・精進の聲・禪定の聲・具足智慧降服四魔の聲・名稱普聞遍滿三界の聲・念定總持の聲・[六]空無相無願の聲・離欲の聲・色如聚沫の聲・受如水泡の聲・想如熱炎の聲・行如芭蕉の聲・識如幻の聲・無常苦空無我の聲・慚愧の聲・念處の聲・慈悲喜捨の聲・證諸法の聲・涅槃無窟宅の聲・三乘の聲・轉法輪の聲・成就衆生の聲・度三惡道の聲・六波羅蜜の聲・善巧方便乃至具足十地の聲・遊戲神通の聲・遊戲無上大乘の聲・[七]阿鞞跋致の聲・無生法忍の聲・入佛海の聲・諸の來衆悉く種種の雨を見、亦た無量の諸法音の聲、隨意衣服嚴飾の聲を聞く。又復た皆悉く其の兩手を見るに[八]如意珠有りて如意寶を雨す。其の如意寶各光明を出す。是の如き光の中に皆十方恒河世界一切の諸佛を見る。是の諸の佛所に各々菩薩有りて而も自ら圍遶す。其の光明の中に盡く十方諸佛の世界を見る。若し病有らん者、光、身に觸るるを蒙らば衆病除愈す。一切の繫縛及び應に死すべし者、光、身に觸るるが故に皆解脫を得。若し身に惡を行ひ、口に惡を行ひ、意に惡を行ふも、光、身に觸るる時悉く三惡を除す。若し諸の飢渴の衆生、光、身に觸るることを蒙らば亦皆飽滿す。種種罰を摑つて身苦を受くること切にして、衣服・嚴飾・瓔珞、種種の物乏少なりとも、光、身に觸るることを蒙らば、憶念する所に隨つて悉く滿足を得。若し殺生・偸盜・邪婬・妄語・綺語・兩舌・惡口・罵詈有らんも、光、身に觸るることを蒙らば是の如き等の惡皆悉く除くこ

※第一序分

【一】佉羅提耶山＝延命地藏經脚註參照。

【二】牟尼仙＝寂靜行を修する仙人の通稱。

【三】月藏＝大方等大集月藏經なり。高齊の那連提耶舍譯す。

【四】瓔珞＝Keyūra 寶玉を編みて身に懸くるもの。印度人の用うる莊飾品なり。

【五】三歸＝三寶に歸依することを云ふ。三寶とは佛寶法寶、僧寶の三なり。

【六】空無相無願＝三三昧又は三解脫門と云ふ。修觀の一方法なり。

【七】阿鞞跋致＝Avaivarika Avinivartaniya の音譯にして不退の義なり。

【八】如意珠＝Cintāmaṇi 種々の所求を意の如く出す珠を云ふ。

とを得。諸の衆生苦を得ざることを求むること有らんに、光、身に觸ることを蒙らば皆悉く樂を受く。光明淸淨にして悉く翳障無く、風雲、塵霧及び諸の穢苦惱、辛酸、不善の音聲乃至怖畏、惡も觸るれば皆除滅することを得。諸惡を遠離して、一切の邪僞、諂曲亦た皆餘すこと無し。一切の惡慾も悉く棄捨することを得て、諸の妙勝の樂一切皆集る。

*爾の時に衆會皆悉く堅固難動にして動ぜざること地の如く、心に去來無く毀壞すべからず。是の如く大衆未曾有なることを得。何の因緣を以つてか我等が身體今皆大重にして自ら勝ること能はざるや。當に爾の時に於いて一[九]帝釋有り。名けて淨有と曰ふ。大衆の中に於て遠からずして坐す。是に於いて淨有卽ち座より起つて衣服を整へ、右の膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、偈を以つて聞きて曰く、

實語、實見者　　實住の牟尼尊
久しく法行に住す。　　唯だ願はくは法を演說したまへ。」
佛、實の因緣と爲りて　　能く衆生の苦を滅す。
何が故ぞ此處に於いて　　種種の雨を雨すや。
大衆皆喜悅し　　心に信安樂を生じ
諸の疑惑を開示して　　大乘に住せしめらる。
身動じ難きこと地の如く　　及び一切の人天
皆是の如きの相を見て　　大衆悉く疑有り。
兩手各皆　　[一〇]摩尼寶の光明を出せり。
一切諸の衣鬘　　嚴身の具を雜飾す。
十方の[一一]福田　　一切の過惡を離れ、

※　第二正宗分
帝釋、不思議神通の因緣を問ふ。

【九】　帝釋＝Śakar devān im Indra 忉利天の主、須彌山頂の喜見城に居り、三十二天を統轄す。

【一〇】　摩尼寶＝Maṇi 珠の總名なり。

【一一】　福田＝一切の處に供養すべきに供養して、能く諸の福報を受くべきものを云ふ。田とは生長せしめるものの義なり。

衆苦休息を得るは　皆救世の因緣による。
一切諸の天人　能く因緣を說くこと無し。
是れ誰の神通力か　而も此處に來至する。
佛、諸菩薩　梵摩、帝釋等と爲せんや。
唯だ願はくは救世し　神通の因緣を說きたまへ。

*爾の時に世尊、淨有帝釋に告げて言く、「是く如し、是の如し、汝今諦に聽け。吾れ當に之を說くべし。是の地藏菩薩摩訶薩は無量阿僧祇劫に於いて、五濁惡世の衆生を成就せんが爲の故に此に來至す。八十[一二]頻婆那由他百千億等の大菩薩と俱なり。悉く禮拜し、供養し、恭敬せんが爲の故なり。大衆會を見んと欲するが故なり。大衆の隨喜を起すを聽かんと欲するが故なり。是の地藏菩薩は沙門の像を作し、神通力の變化する所を現し、是の如き等の大莊嚴の事有り。亦、是の如來、不可思議、無量の功德あり。亦、聲聞辟支佛正法伏藏と名く。亦、解脫智寶の大寶渚と名く。亦、菩薩救世の法と名く。亦、涅槃の導師、商主と名く。猶し若しは如意寶珠の所求を滿足するが如し。亦、寶渚の一切商人の如し。亦、大地の能く善根を生ずるが如し。亦、是れ涅槃求法の神器なり。亦、是れ功德淸淨の瓶なり。亦、是れ日月照明の行處なり。亦た是れ黑闇幽冥の大炬なり。月の、煩惱の熱を淸涼ならしむるが如し。[一三]無足の者の如意乘を得るが如し。亂心の者の甘露味を得るが如し。羸老の者の其の杌杖に遇ふが如し。是れ大福田の根本也。捨心凝すること無し。彼の後流の、苦難を救ふが如し。親友を起して[一四]結使の炎の雲蓋を除くが如し。淨水珠の穢濁を除くが如し。若し嶮より起つて廻すれば正路を示す。是れ疲極する者は安隱に林に坐す。是れ[一五]四駛流の生死の橋梁たり。亦、彼岸に度する無上の大船なり。是れ三善根勝妙の果報なり。是れ諸の施者の最上の大乘なり。持戒動ぜざること須彌山の如し。精進の壞し難きこと猶し金剛の如し。忍辱の堅固なること亦

※ 世尊答へて、地藏菩薩を讃歎したまふ。

【一二】頻婆＝Bimbvara 具には頻婆羅と云ふ。數の名。十兆に當る。

【一三】無足者＝蛇等の如く足無きものなり。

【一四】結使＝二字共に煩惱の異名なり。心を纒縛する故に結と云ひ、身心を驅使する故に使と云ふ。

【一五】四駛流＝四流のこと。駛は速き意。欲流、有流、見流・無明流の四なり。流とは有情のこの四法に依つて漂流せらるるに名く。一に見流とは三界の見惑なり。二に欲流とは見、無明を除く一切の諸惑なり。三に有流とは見、無明を除く上二界の一切の諸惑にして、四に無明流とは三界の一切の無明を云ふ。

大地の如し。總持正法心に三相無く、禪定の莊嚴なること妙華鬘の如し。智慧の深廣なること猶し大海の如し。心に所依無きこと猶し虛空の如し。方便の無染なること衆の華聚の如し。外道に處すること師子王の如し。煩惱を遠離すること犀一角の如し。諸の結使を滅すること塵垢を洗ふが如し。能く臭穢を除くこと疾飄風の如し。將た疾有るを護ること彼の良醫の如し。衆病を消除すること妙藥王の如し。煩惱を斷除すること利劍を持するが如し。怖畏者の爲には大親友と作り、諸の怨敵を防ぐこと堅城の塹の如し。能く其の濁を除くこと清淨の水の如し。諸の飢乏を濟ふこと猶し菓果の如し。亦是れ裸者にも最勝の衣服たり。盛熱と與なる者には密雲の蓋と爲る。是の如き善根果報を具足し、淸淨第一にして堅固不壞なり。妙色の處に能く受樂を生じ、大會處に於いて而も慚愧を生ず。諸の結使を除き、禪定行處は[一六]四正懃に乘ず。[一七]四攝決流して忍辱大地なること亦須彌の如し。總持の深廣なること彼の大海の如く、神足無礙自在なること虛空の如し。諸魔、一切の結習を降伏し、正道無量の禪定を修行し、亦、一切種種智の洲渚と爲り、能く無上清淨の法輪を轉ず。地藏菩薩摩訶薩は來らんと欲するが爲の故に先づ此の瑞を現ず。亦我を供養し、恭敬せんが爲の故に此に來至す。」と。

※佛復た地藏菩薩を讃嘆して言く、汝南方より來る。八十頻婆百千那由他の菩薩、神通力を以て俱に此に來至す。悉く聲聞像を作して如來の前に在り。佛足を頂禮し、右に遶ること三匝、卽ち爲に合掌して偈を說いて言く、

[一八]兩足最勝の大導師　恒に慈を修して善心を發す。
能く忍辱を生ずること大地の如く　衆生を解脫せしめて、瞋恚を除す。
最大の諸の相好を具足し　而も能く一切の界を嚴飾す。
能く一切の諸の福田を滿じ　常に實語及び大慈を修す。

【一六】四正懃＝三十七菩提分法中、四念處に次いで修する行品なり。一に斷々とは已生の惡に對して除斷の爲に精進す。二に律儀斷とは未生の惡に對して更に生ぜざらんが爲に精進す。三に隨護斷とは未生の善に對して生ぜんが爲めに精進す。四に修習斷とは已生の善に對して增上せしめんが爲めに精進するなり。一心に精進してこの四法を行ずるが爲めに四正勤と名けられ、又能く解怠を斷ずる點より四正斷と名けらる。

【一七】四攝＝布施、愛語、利行、同事の四攝法を云ふ。

※佛再び地藏菩薩を讃歎したまふ。

【一八】兩足＝無足、四足等と一類の語なり。兩足の有情を云ふ。

能く悉く諸の[一九]受網を斷除し
餘の清淨なる諸の佛國の
本願には濁惡の世を度し
能く堅固の勲精進を生じ
常に難行恐怖處を修め
[二〇]布施と持戒と忍と精進と
無數の諸の佛、菩薩等
飢・渇・病なるものには湯藥を充給し
我れ本より來た身命を捨て
常に法の爲の故に而も身を捨し
已に得る所の樂皆悉く捨す。
諸の衆生の煩惱網に於いて
一切の[二二]六情根を開閉し
苦・無常・空・無我を修し
諸苦の所因、愛欲本
是の義を以ての故に六情を攝し
能く無量の大悲門を修し
我れ要ず大誓願を捨てず
一切衆生の[二三]如如相
是の如く思惟して衆生の爲に

皆能く實の如く善く安住す。
其の中の衆生善根を具するものを捨てて
一切諸の衆生を成就せんと欲す。
無量の諸の苦行を超過す。
無量の諸の苦行を超過す。
禪定と智慧とを修習す。
聲聞大衆皆供養す。
一切の諸の[二一]繫縛のものを救度す。
衆生を利せんが爲めに貪惜無し。
皮・骨・肉・血を衆生に施し
大慈悲有りて一切の爲に
寂滅を修行して悉く超度す。
常に能く諸欲を遠離し
亦善く世諦を觀察す。
悉く能く諸の煩惱を乾竭す。
能く善く一切の愛を斷除す。
普く一切の諸の群生に給す。
而も亦勝菩提に住せじ。
亦、群盲苦を受くること切なるを見る。
即ち能く大精進を勲修し

【一九】受網＝受とは五蘊の一、受蘊なり。受蘊とは境に對して事物を受け込む作用を云ふ。

【二〇】布施、持戒、忍、精進、禪定、智慧＝六波羅蜜なり。

【二一】繫縛＝煩惱の異名。

【二二】六情根＝六根のこと。眼、耳、鼻、舌、身、意なり。

【二三】如如相＝宇宙の常恆寂然たる理體としての相を云ふ。如とは法性の理體不二平等なるを云へり。

精進・施・戒・忍を發超し　諸の禪定及び智惠を修むること
猶し其の母の唯一子に　而も慈心を以て之を育養するが如し。
汝衆生に於いても亦是の如く　常に能く一切に賑給す。
是の故に汝速かに菩提を得て　一切無量の衆を度脫せよ。
汝、本、菩提を修習せし時　一衆生をも捨てざらんことを誓願す。」
便ち施・戒・忍・精進・禪定に住して　智惠を修せざること無し。
常に能く彼の末世中に於いて　無上勝菩提を求む。
是の故に世を末劫に救ひ　速に無上最勝道を得ん。
惡魔と夜叉等と諸の惡龍神と　及び人とを調伏すること
猶し金剛の諸結を斷ずるが如し。」　悉く能く諸の聖道に安住し
無量衆の爲に[二四]授記し　當に菩提無上道を成ぜしむべし。」
功德最勝にして明智なる者　是れ眞の福田の大將なり。
無量界に於いて救世の爲に　皆一切諸の群生を覆ふ。
十方界に於いて福田と作り　名聲遠く聞えて一切に遍し。
是の故に一切の諸菩薩　皆悉く能く已れが事を捨つ。
是れ汝、神足もて來集し　倶に世尊大牟尼に詣る。
願はくは[二五]如來をして特に演說せしめたまへ。、若し聞くことを得ん者は皆歡喜せん。
既に法を聞き、已に懃精進なるものは　常に菩提道を修學することを得ん。
皆猶し海に於ける大將の力のごとし。　當に疾に菩提に近づくことを得べし。
未だ曾つて大集せしむるを聞見せず。　是の故に汝等倶に來會す。

【二四】授記＝佛となるべき記莂を與へること。

【二五】如來＝Tathāgata 佛十號の一。如より來生せるもの又、如に向つて去るものの二解あり。故に如去とも云ふ。如とは眞如なり。即ち佛は窮滿せる眞實智慧を以て眞如の理を證得し、迷界に來つて衆生を救濟すればなり。

十三億諸の夜叉有り。　其れ殘害を爲し、肉血を食ふ。
疾に諸惡を捨て、此に到りて　最勝無上道に安住す。
有るは忍辱陀羅尼を得。　有るは最妙の諸の禪定を得。
有るは已に諸の[二六]漏盡を獲證す。　[二七]無著羅漢は人中の尊なり。
有るは能く善く[二八]四無量を修す。　有るは能く[二九]四攝法に住す。
有るは最勝[三〇]四辯才を得。　復た有るは諸の忍法を修することを得。
有るは[三一]三昧首楞嚴を得。　有るは虛空智惠眼を得。
有るは無生の諸の[三二]法忍を得。　皆世尊の說法したまふ所に由る。
悉く一切諸の[三三]異學　[三四]九十六種外道等を制し
一切の魔怨を摧伏し已る。　皆是れ救世の大將の力なり。
地獄・鬼・畜生を開閉し　一切の天人衆を利益す。
是の故に眞實に諸の衆生　而も皆來集するは佛の神力なり。
[三五]飢飾・疾疫・刀兵劫　悉く今日而も消滅す。
若し自ら盲冥にして正道を失はば　此の諸の衆生をして解脫せしむ。
無量の煩惱に狂亂する者　皆悉く寂滅道に安置し
衆をして悉く能く己れが業を捨てしむ。　如來を禮せんが爲の故に此に至る。
無量の世界、億佛土　皆是れ救世の所住なり。
名聞十方にして稱無量なり。　我等聞き已るが故に此に至る。
[三六]一切種智、功德海　是の如き眞實の相を聞くことを得ば
一切の諸の衆生を度脫せん。　我れ歡喜せしむるが故に敬禮す。

【二六】漏盡＝漏とは煩惱なり。三乘の極果に至り、聖智を以て煩惱を斷盡するを云ふ。即ち盡智を得るなり。

【二七】無著＝Asaṅga. 西紀四五世紀頃の印度の學僧。瑜伽教系の創唱者なり。

【二八】四無量＝慈、悲、喜、捨の四無心にして、禪定の功德の一部を云ふ。慈無量心とは衆生に對し樂を與へんとする意志にして、無瞋を體とし瞋を對治す悲無量心とは衆生より苦を拔かんとする意志にして、無瞋を體とし害を對治す。喜無量心とは衆生をして離苦得樂し、喜悅せしめんとする意志にして、喜愛を體とし不慰藉を對治す。捨無量心とは衆生を平等に見、怨賊の別を立てざらんとする意志にして、無貪を體とし、貪瞋を對治す。

【二九】四攝法＝前出。

【三〇】四辯才＝四無礙解のこと。一に法無礙、二に義無礙三に辭無礙、四に樂說無礙、なり。一は法に於て、二は法の義理に於て、三は諸方の言辭

而も百千億萬劫に於いて　常に勸めて種種の施を修習す。
我れ今當に學して弘誓を發すべし。　我れ今此に來るは佛の神足なり。
我れ當に修學して濁世に處すべし。　能く第一勝菩提に到らん。

爾の時に地藏菩薩摩訶薩、若干種の天華・香華・瓔珞を以て佛の上に散ず。散ずる所の華變じて寶蓋と成る。是の時に地藏菩薩、佛の前に在りて坐し、諦かに經を聽受す。諸の來會の衆、地藏菩薩を見て希有想を生じ、種種の香華・瓔珞・繒蓋・幢幡及び諸の衣服を以て、地藏菩薩の上に散じ、是の如き言を作す。「我等快く善利を得たり。佛の神力の故に是の如き諸の大丈夫を見ることを得たり。」と。禮敬して問訊す。

*爾の時に復た渇仰菩薩摩訶薩有り。座より起つて其の衣服を整へ、右膝を地に著け、合掌して佛に向つて、佛に白して言く、「世尊、此の善男子何れの佛國よりか而も此に來至する。何の善根を修してか能く是の如く種々に佛の功德を讚嘆し說くことを作すや。我れ昔より來、未だ聞見せず。」と。

*爾の時に世尊、渇仰菩薩に告げたまはく、「止ね、止ね。大士。是れを一切の大衆及び諸の天人に聞くべからず。佛如來を除いて能く知るもの有ること無し。此の善男子の功德數量をば、如來今日必ず當に顯に說くべし。但だ諸の天人愚闇にして自弊す。是の族性子、不可思議の功德、首楞嚴三昧を成就して如來の行處に入り、無生法忍を得、諸の佛法に於いて自在を得。深き法忍に入り已つて、一切智海を度す。此の善男子遊戲するに師子光三昧を以てし、一切智山須彌の頂に登り、異學を摧伏し、衆生を成就す。在所の佛國に悉く皆止住す。諸の佛國に隨つて智三昧に入り、是の三昧の力を以ての故に、一切の國土の衆生をして諸の菩薩に見えしむ。諸の佛國に隨つて智樂三昧に入り、彼の國土に於いて佛に所有供養す。諸の佛國に隨つて清淨樂三昧に入り、是の三昧に入つて悉く諸欲の一切の過悉を見、心相に於いて清淨無染なり。諸の佛土に隨つて慚愧三昧に入り、彼の國

に於て、四は辯說に於て通達自在なることを云ふ。

【三一】三昧首楞嚴＝首楞嚴三昧（Śūraṃgama-samādhi）のこと。三昧の名なり。

【三二】無生法忍＝無生とは涅槃の體、眞如の理はもと無生無滅なるを云ふ。忍とは無生の理に安住して動ぜざるを云ひ、眞智を無生忍と云ふ。

【三三】異學＝自已の道に異るを云ひ、此處には外道を指す。

※渇仰菩薩、地藏菩薩の因緣を問ふ。

※世尊、渇仰菩薩に答へたまふ。

【三四】九十六種外道＝外道とは佛敎以外の諸敎を云ふ。通例外道の數を擧ぐる中九十六種は最大なり。

【三五】飢饉、疾疫、刀兵＝三災と云ふ。この三災は一住劫二十增減劫中、其減劫の終ごとに起るものとせらる。

【三六】一切種智＝一切萬有を知了する佛智卽ち最上完全なる智にして無上正等覺といふも同義なり。

※地藏菩薩種種三昧に入る

に於いて諸の衆生をして悉く慚愧を得、諸惡を遠離して愚闇有ること無からしむ。諸の佛國に隨つて水渚三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして悉く是の定に入らしめ、諸の衆生をして[三七]宿命智を得しめ、能く先世に、此に死し、彼に生ずと禪定を善くせしむ。諸の國土に隨つて無憂明三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして悉く憂愁を離れしむ。諸の佛國に於て神通三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして皆神通三昧に入らしむ。佛國土に隨つて智明三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして悉く愚癡を離れて、便ち十方一切の佛國を見せしむ。諸の佛國に隨つて佛炬三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして、皆三寶に歸依せしむ。諸の佛國に隨つて金剛光三昧に入り、是の三昧に入り已つて、亦能く彼の一切の諸の佛國土の鐵圍山、鐵國圍乃至須彌山王、一切の嵠澗、溝壑をして皆悉く盡く現じ、地平なること掌の如くならしめ、能く一切の諸の惡蛇及以蟲道をして皆悉く消滅せしむ。諸の佛國に隨つて智力降伏三昧に入り、亦能く彼の魔及び魔の眷屬をして皆悉く驚怖し、三寶に歸依せしむ。諸の佛國に隨つて電光三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして後世の怖を離れ、法の安慰を得しむ。諸の佛國に隨つて味樂三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして其の所念に隨つて飮食し、悉く充足することを得しむ。諸の佛國に隨つて精氣悅樂三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして堅牢の身を得しめ、諸の病苦を離れしむ。諸の佛國に隨つて樂具三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして悉く牀敷・臥具・衣服・瓔珞を得て、乏少する所無く、病醫藥身皆端正ならしむ。諸の佛國に隨つて無諍智三昧に入り、亦能く彼の一切の衆をして身、皆、長莊、端嚴、殊大にして、一切の怨憎、繫縛を遠離して皆悉く受樂せしむ。皆、布施・持戒・忍辱・精進・禪定の如く、心に散亂無く、智惠を具足し、深く法相に入らしむ。諸の佛國に隨つて無憂怖三昧に入り、能く彼に於いて一切の衆生皆歡樂心を得、憂怖を離る。諸の佛國に隨つて光樂三昧に入り、彼の佛國に於いて一切の衆生無礙智を得、事務を離る。諸の佛國に隨つて善住金剛三昧に入り、亦能く彼の一切

ことを說く。

【三七】宿命智＝宿命を知る智慧なり。

の衆生をして諸根具足することを得て、悉く缺壞せざらしむ。諸の佛國に隨つて觀憧三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして皆悉く諸惡を厭離し、棄捨して、十善を護持し、天道に上生せしむ。諸の佛國に隨つて深く大慈音聲三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして各相哀愍し、皆慈心を起し、無畏心を得、無惱心等の心を得、更に相悲念せしむ。諸の佛國に隨つて集福處三昧に入り、亦能く彼の一切の衆生をして鬪諍を離ることを得て、疾病・飢饉・非時の風雨、飲食の苦惱、辛酸等の味、皆悉く消滅せしむ。是の地藏菩薩の至る所の佛土、海電三昧に入り、至る所の國に隨つて一切皆悉く變じて寶地と成り、諸の穢惡を離れて衣樹・瓔珞樹・華菓樹は佛界を嚴飾す。晨朝の時に於いて恒河沙世界三昧に入り、衆生を成就せんが爲の故に禪定より起つて、無量無邊の諸佛世界をして、
三八
五濁惡世に於いて衆生を成就せしめ、悉く無餘の有佛世界に刀兵の起らん時、此の族姓子、晨朝の時に入三昧の力を以つての故に、刀兵、鉀杖悉く皆消滅せしむ。諸の佛土に疾疫劫起つて諸の衆生を害することと有るに隨つて、亦た疾疫をして自然に消滅せしむ。諸の佛土若しは飢饉起ること見るに隨つて、彼の飢饉をして亦た盡く消滅し、悉く充滿を得しむ。此の族姓子の三昧の威神力を以ての故に能く一切の衆生を成就せしむ。

＊地藏菩薩は不思議の功德を以て衆生を成就し、過去無量恒河沙の諸の佛所に於いて大悲堅固の誓願を發し、皆悉く一切の衆生を成就す。莊嚴の勢力猶し電震の如し。[三九]一食の頃にも而も能く無量億等那由他の人を成就し、善根を具足せしむ。若し衆生有つて無量の種種の諸の苦の爲に惱ませられ、飢餓切逼せんも、地藏菩薩の名を稱する者有らば、悉く彼をして飲食を充足し、諸の苦惱を滅して涅槃道に置き、皆快樂を得しむ。若し衆生有つて衣服・寶冠・瓔珞・病瘦醫藥、種種の衆具を乏少せんも、若し地藏菩薩の名を稱せば、其の欲する所に隨つて具足し、涅槃道に安住して第一樂を得ん。若し衆生有つて喜樂心を離れ、與に集會することを喜樂せずとも、若し地藏菩薩の名を稱せば一切

【三八】五濁惡世＝本願經忉利天宮神通品脚註參照。

※稱名の功德を述ぶ。

【三九】一食頃＝僅少の時間を云ふ。

の樂具さに盡く之に歸す。憘ばざる所も亦悉く遠離し、是の意に樂ふ所の者は能く皆涅槃に安住して第一樂を得しむ。若し衆生有つて身心に苦を受け、衆病の持する所ならんも、能く地藏菩薩の名號を稱せば身心の苦惱皆悉く除愈し、涅槃に安置して第一樂を得ん。若し諸の衆生惡心相向ふとも、能く地藏菩薩の名號を稱して一心に歸依せば、彼の衆生をして柔和、忍辱にして更に相慚愧し、慈心懺悔して涅槃に安住せしむ。若し諸の衆生牢獄、枷鎖に繫閉せられ、其の身具さに衆苦を受けんも、能く地藏菩薩の名號を稱して一心に歸依せば、諸の衆生をして皆解脫を得て自在無礙ならしむ。乃至應に繫縛・囚執・鞭杖せらるべけんも、能く地藏菩薩の名號を稱へて一心に歸依せば、亦、復た是の如き皆解脫を得て、涅槃に安住して第一樂を得。若し衆生有つて諸根不具・疲極・懈怠・顚狂・放逸にして本心を妄失し、貪欲・瞋恚・愚癡・嫉妬・慳悋・邪疑・憍慢・眠睡等の惡皆悉く熾盛ならんも、能く地藏菩薩の名號を稱して一心に歸依せば、是の如き衆苦皆解脫せしめ、涅槃に安住して第一樂を得。若し衆生有つて大水・濁流・猛火の焚く所と爲り、或は高巖に墜ちて身を山嶮に投じ、或は樹木及び諸の屋舍より墮して身顚覆せんに、是の如き等の無量の怖畏有らんも、地藏菩薩の名號を稱へて一心に歸依せば、是の如き等の怖畏の事有らんも悉く解脫せしめて涅槃に安住して第一樂を得しむ。若し衆生有つて諸の毒蛇、種種の禽獸の螫する所と爲り、或は種種の毒藥に中てられんとも、能く地藏菩薩の名號を稱へて一心に歸依せば是の諸の怖畏悉く解脫を得。若し衆生有つて[四〇]阿波魔羅奄の爲めに傷害せられ、若しは一日・二日・三日乃至七日能く心をして狂心・亂心・戰心・調心し、顚倒乃至失心せしめんも、能く地藏菩薩の名號を稱して一心に歸依せば、是の如き族姓の男女諸の怖畏に於いて悉く皆解脫を得て、涅槃に安住して第一樂を得。若し衆生有つて諸の羅刹、惡鬼に捉へられ、鳩槃茶に捉へられ、[四一]富單那に捉へられ、[四二]迦吒富單の捉ふる所と爲り、師子・虎狼・惡毒蠱道、或は軍陣・戰鬪・怨賊の圍遶するところと爲り、敵懼に臨んで貪生求樂無きも、能く地藏菩薩の名號

【四〇】阿波魔羅奄＝Apasmāra 瘧鬼の總名。

【四一】富單那＝Pūtana 臭餓鬼と譯す。餓鬼中の最勝なるものなり。

【四二】迦吒富單＝Katabhūtana 又は Katapūtana 譯して極臭鬼又は奇臭鬼と云ふ。

を稱して一心に歸依せば、是の如き族姓子の男女速に衆苦を離れて悉く患難を除き、涅槃に安住して第一樂を得。若し衆生有つて多聞の爲に、信の爲に、戒の爲に、施の爲に、禪定の爲に、神通の爲に、解脫の爲に、色・聲・香・味・觸の爲に、諸の功德の爲めに、工巧・果菓・樹木・敷具の爲に、財利を增益せんが爲に、諸の醫藥・房舍・屋宅の爲に、水雨をして順時ならしめんが爲に、凉風を得んが爲に、男女・妻子・方便・修福を求めんが爲に、寒熱を除き正念を得しめんが爲に、是の如き等の種種の因緣を求めんに、能く地藏菩薩の名を稱して一心に歸依せば、此の善男子の威德力の故に悉く彼の無量の衆生の功德所願に稱ふこと、譬へば種を彼の荒田に下すが如し。能く地藏菩薩の名號を稱して一心に歸依せば悉く變じて微妙の勝菓と成る。何を以つての故に、此の善男子過去無量阿僧祇不可數劫を以つて、如來の前に發せし堅き誓願猶し大地の如ければ、一切衆生をして皆悉く受用せしむ。是の善男子の功德力の故に能く善き根莖・枝葉乃至華菓をして皆悉く潤澤・增長・成就せしむ。若し衆生有つて諸惡、十不善業を造作すとも、能く地藏菩薩の名號を稱して一心に歸依せば、一切の結使、煩惱消滅す。[四三]十惡を遠離して十善を成就し、諸の衆生に於いて慈悲心と利益心とを起す。是の善男子、精進力を以つて一食の頃も無量阿僧祇諸佛世界の一一の佛國に於いて、一食の頃を以つて無量恒河沙阿僧祇の衆生を度脫し、是の相貌を以つて諸惡を脫せしめ、皆悉く不思議功德を成就す。此の善男子是の堅固の誓力を以つて能く一切の衆生を成就せしむ。是の如く族姓子、或は梵天身と作つて衆生を成就し、或は[四四]自在天・[四五]大自在天・[四六]摩醯首羅天と作り、或は[四七]欲界他化自在天・[四八]化樂天・[四九]兜率天・[五〇]炎摩天・帝釋身・四天王天身と作り、或は菩薩身と作り、或は[五一]辟支佛身と作り、[五二]聲聞身と作り、或は[五三]轉輪聖王・[五四]婆羅門・[五五]刹利・[五六]毘舍・[五七]首陀等の身と作り、或は男身、女身と作り、或は童男、童女身と作り、或は[五八]乾闥婆・[五九]緊那羅・[六〇]摩睺羅伽・天・龍・夜叉身と作り、或は羅刹身と作り、或は[六一]鳩槃荼身と作り、或は[六二]毘舍闍身と作り、或は富單那身と作り、或は師子身と作り、

※　普現色身を說く。
【四三】　十惡＝殺生、偸盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、慳貪、瞋恚、邪見の十惡を云ふ。この十惡をせざるを十善と云ふ。
【四四】　自在天＝他化自在天(Paranirmitavaśavartinas)の

或は虎狼身と作り、或は鳩身、馬身と作り、或は水牛身と作り、或は種種の鳥身と作り、或は閻羅王身と作り、或は地獄卒身と作り、或は地獄身と作りて諸の衆の爲に種種說法す。衆生に隨つて三乘を顯示して、皆悉く不退轉地を作さしむ。此の善男子是の如く不思議功德伏藏を成就し、解脫寶を以て自ら莊嚴す。

*亦た是れ菩薩は諸法の母なり。大涅槃に向ふ無上の商主なり。善男子、彌勒・[六三]文殊・觀世音・普賢等上首たり。是の如き等の恒河沙の諸の大菩薩に、若し人、百劫中に於いて禮敬し、供養し、所願を欲求せんに、一食の頃も地藏菩薩を禮拜し、供養せんに如かず。功德甚だ多くして、所願速に悉く皆滿足することを得ん。何を以つての故に此の地藏菩薩は一切の衆生に於いて能く大いに饒益し、如意寶と爲るが故に。此の族姓子、若しは衆生を成就せんと欲するが故に能く堅固大悲伏藏を發し、一切の衆生の心願をして滿ぜしむ。是の故に善男子、善女人、應當に地藏菩薩を供養すべし。

*時に會の大衆十方より來れる者、菩薩摩訶薩及び諸の聲聞、一切の天人・夜叉・乾闥婆等座より起つて、力に隨つて供養す。或は金銀等を以つて、彼の地藏菩薩の上を散し、或は種種の寶華・衣服・摩尼寶珠及び華鬘珠・瓔珞・金縷・幡蓋を以つて、以つて地藏菩薩の上に散ず。復た無量の音樂、種種の讃頌を以つて地藏菩薩に供養す。

*爾の時に地藏菩薩摩訶薩復た此の供施を以つて[六四]伽陀に修す。卽ち偈を說きて言く、

天人、龍神の供養する所　十方の菩薩皆來集す。
救世の大功德有りと聞く。　願はくは佛、我が最勝の供を受けたまへ。

*爾の時に地藏菩薩摩訶薩是の偈を說き已つて、佛足を頂禮す。是に於いて世尊、復た偈を說いて言はく、

堅固淨智を起さんと欲する者　能く衆生の諸の煩惱を滅す。

と。欲界頂に住す。卽ち欲界の第六天なり。此天快樂を爲すに自ら樂具變化するを要せず、他の樂事を假て自在に遊戯すればこの名のあり。大自在天と共に正法を害する魔王なり。

※種種の功德を述ぶ。

【四五】大自在天＝Mahesvara 又、摩醯首羅に作る。色界の頂にありて、三千世界の主たり。

【四六】摩醯首羅天＝大自在天に同じ。

【四七】欲界他化自在天＝自在天に同じ。

※大衆讃歎す。

【四八】化樂天＝Nirmanarataya 欲界中の第五天。五欲の境に於て自ら變化して樂めばこの名あり。

※地藏菩薩偈頌を說く。

※世尊偈頌を說きたまふ。

【四九】兜率天＝Tuṣita 欲界中の第四天。佛教特有の天部にして、その內院は彌勒菩薩の淨土なり。又その外院は天衆

衆をして樂を得しむること寶手の如く　能く結納を斷ずること金剛の如し。
汝、大悲諸の精進を起し　是を以つて最勝尊に供養す。
其の心海の如く一切を救ひ　諸の衆生の苦を彼岸に度す。

*爾の時に地藏菩薩禮を作して、起つて佛に白して言く、「世尊、我れ當に此の四天下を濟度して、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を增長し、壽命を增長し、壽命を護念し增長し、身に病疾無く、色力を增長し、名稱を增長し、資業を增長し、親友を增長し、眷屬を增長し、信戒を增長し、多聞を增長し、施を增長し、忍辱を增長し、方便を增長し、學意及び諸の聖諦を增長し、人を大乘一切の延道に增長し、照明眞實の法相を增長し、一切の衆生を成就せんことを增長し、大慈悲を發して喜捨を增長し、無量一切の淨法を增長し、妙稱名の三界に聞ゆることを增長し、法雨の三有流を潤すことを增長し、大地一切の物味を增長し、衆生の所有善業を增長し、法氣無數の福行を增長し、智惠皆悉く照明なることを增長し、六波羅蜜所行の道を增長し、[65]五眼通達して無礙なることを增長し、[66]灌頂を增長し、涅槃を增長し、威德照明を增長す。一切未曾有の法の衆德究竟し、[67]記莂、呪術、[68]陀羅尼、章句、我れ過去恒河沙の佛所に於いて皆悉く是の如き等の呪を受持して白淨具足の法を增長し、種子・根莖・華菓、一切の藥穀を增長し、雲雨・地・水・火・風を增長し、福業を增長し、財物を增長し、無量最勝の果報を增長し、基業を增長す。*此の呪の利益能く一切の苦惱、繫縛を除く。卽ち呪を說いて曰く、

閻浮[1]　閻閻浮[2]　阿舍閻浮[3]　婆迦囉閻浮[4]　菴婆閻浮[5]　毘羅閻浮[6]　婆闍羅閻浮[7]　阿盧伽閻浮[8]　達摩閻浮[9]　婆吒摩閻浮[10]　婆帝耶尼梨阿羅閻浮[11]　鞞婆婆盧伽反摩閻浮[12]　憂婆舍摩閻浮[13]　憂波舍摩閻浮[14]　那那那閻浮[15]　闍那婆牟致囉那閻浮[16]　毘尸梨夜那閻浮[17]　奢多婆閻浮[18]　婆遮修蹬摩醯利[19]　陀彌[20]　睺彌[21]　遮迦囉斯[22]　遮迦摩私梨[23]　差利[24]　奚疑[25]　迦囉婆婆婆啼[26]　阿梨波囉鞞[27]

の欲樂處なり。
【五〇】炎摩天＝yāma 欲界中の第三天。印度古傳の樂園なり。
※地藏菩薩誓願を述ぶ。
【五一】辟支佛＝Pratyeka-buddha 又、獨覺、緣覺と云ふ。三乘又は二乘の一。獨覺とは無佛の世に他教を待たずして覺るの意、緣覺とは飛花落葉等の外緣に依りて物の哀れを觀じ覺るの意なり。阿羅漢果を最極の得果とす。
【五二】聲聞＝Śrāvaka 二乘又は三乘の一。もと如來の聲教を聽聞する人の義なれども、佛の直弟子に限らず、凡て佛の教法に依り、四諦の理を學び、專ら自己の解脫を求めて見思の惑を斷じ、阿羅漢果を證る低下なる一類の佛道修行者を云ふ。
※地藏菩薩神咒を說く。
【五三】轉輪聖王＝本願經脚註參照。
【五四】波羅門＝本願經脚註參照。
【五五】刹利＝本願經脚註參照。
【五六】毘舍＝Vaiśya 印度四姓の第三位。農工商人を云ふ。
【五七】首陀＝Śūdra 印度四姓の第四位。奴隷賤族を云ふ。

婆遮囉婆陀彌[二十八] 囉遮陀彌[二十九] 波囉遮遮遮醯梨[三十] 摩梨[三十一] 伊迦他他企[三十二] 他丘樓[三十三] 闍梨[三十四] 合利[三十五] 彌梨[三十六] 摩板[三十七] 多板[三十八] 鳩梨[三十九] 彌梨[四十] 鴦久之多毘[四十一] 額梨[四十二] 柢梨[四十三] 波囉柢梨[四十四] 叉吒苦婆梨[四十五] 眞祇眞[四十六] 眞求梨[四十七] 休樓休樓休樓[四十八] 彌梨板[五十] 婆荼婆可羅[五十一] 闍闍梨[五十二] 嘘嘀嘘樓嘀[五十三] 婆婆闍毘[五十四] 輪檀彌[五十五] 私婆呵[五十六] 摩訶復陀迦樓沙毘輪檀彌彌私婆呵[五十七] 迦樓沙羅波毘輪檀彌私婆呵[五十八] 迦樓沙烏闍毘揄檀彌私婆呵[五十九] 薩婆呵奢婆利富羅檀彌私婆呵[六十] 薩婆婆斯耶三波陀彌彌私波呵[六十一] 薩婆多他阿袠底私婆呵[六十二] 薩婆菩提薩埵阿袠底阿㝹元地底私婆呵[六十三]」

世尊、今說く所の咒是れ未曾有の威德照明有り。是れ衆德の本なり。記莂、章句、陀羅尼、神咒、我れ過淨去恒河沙の諸の佛所に於いて是の咒を受持し、一切白淨の法を增長し、諸の善き根莖・枝葉・華菓・藥穀・雨澤・[六九]地・水・火・風を增長し、喜樂を增長し、財物を增長し、勝妙を增長し、產業を增長す。此の咒の威力善く、能く繫縛も亦善く解くと名く。世尊、此の陀羅尼咒を說いて四天下の聲聞・弟子・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷と與に皆悉く護念し、財物一切の產業を增長し、佛法を增長して能く流布せしめば、廣大無量の三界、受樂せん。」と。

*爾の時に地藏菩薩廣く是の如きの大記莂を說く。時に佉羅提耶山六種に震動し、一切の音聲の樂鼓せざるに自ら鳴り、衆の寶華を雨し、一切の大衆皆悉く戰慄して希有想を生ず。

爾の時に阿難座より起つて、偏に右肩を祖ぎ、手を叉へて合掌して、佛に白して言く、「世尊、此の法の[七〇]惡(世に)、當に何の經と名け、云何か受持し、云何か修行せん。」と。佛、阿難に告げたまはく、「此の經は名けて地藏菩薩誓願度諸衆生と爲す。是の如く受持せよ。復た大方廣と[七一]名く。是の如く受持せよ。亦た師子光三昧と名く。亦た隨諸佛土入慚愧三昧と名く。是の如く受持せよ。亦た陀羅尼神咒と名く。是の如く受持せよ。修行の法用、汝今復た聽け。」と。佛、阿難に告げたまはく、

【五八】 乾闥婆＝Gandharva 又、香陰と譯す。唯だ香臭を嗅ぎて長養すればなり。
【五九】 緊那羅＝Kimnara 非人、歌人と譯す。人に似るも頭上に角あれば人非人と譯し、又、帝釋の樂天なれば歌人と云ふ。
【六〇】 摩睺羅迦＝Mahoraga 大腹行と譯す。地龍なり。
【六一】 鳩槃荼＝本願經脚註參照。
【六二】 毘舍闍＝Piśācā 持國天所領の鬼名。
【六三】 彌勒、文殊、觀世音、普賢＝地藏十王經脚註參照。
【六四】 伽陀＝Gāthā 句、頌と譯す。

※ 第三流通分

※ 佛、修行の法用を說きたまふ。

「若し衆生有つて當に形戮・杻械・枷鎖・疾病・困苦・鬼魅に著かるべきに臨まば、一心に地藏菩薩を敬禮し、名を稱し至心に此の咒を誦持して根本重罪を懺悔し、菩提心を發し、今より始めて以つて盡未來際・不殺・不盜・不淫・不妄語・不飮酒・不食肉・不食五辛して三聚戒を受せよ。何等をか三と爲す。攝善法戒・攝衆生戒・攝律儀戒なり。乃し菩提に至るまで、三寶衆に歸命して、九十六種外道の邪法に歸依せざれ。」と。佛復た阿難に告げたまはく、「若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、此の咒を受持して房舍を淨持し、道場を安建し、繒幡蓋を懸け、香泥を地に塗り、燒香、散華して地藏菩薩を稱して至心に敬禮し、此の咒を誦念して[七二]五逆・十惡・[七三]四重八禁若し除滅せずとは是の處有ること無し。不至心にして等方に[七四]僧祇物乃至一比丘の物を經倫するものを除き、此經は攝せず。若し此の經、の陀羅尼咒を受持し、讀誦すること有らば、飛尸・伏注烏鳴・百怪有るも一切の諸惡悉く皆消滅す。」と。

*爾の時に毘沙門天王、佛足を頂禮して佛に白して言く、「世尊、若し此の經、陀羅尼咒を受持し、或は讀誦する者有らば、我れ當に擁護してその勢力を蓋ふべし。若し衆生有つて邪を信じ、倒見し、或は北神・九子母神・[七五]阿魔神・竈君・社地・社神に事へ、先人を詐稱せんに、是の如き邪見のもの、我れ此の人をして行住安からず、惡夢縱橫せしめん。唯だ願はくは世尊、我が受持することを聽したまへ。」と。佛告げたまはく、「善哉、善哉。汝が大慈無量にして衆生を饒益す。我れ汝が喜を助けん。」と。

佛、經を說き已つて、梵天・帝釋・四天王・菩薩摩訶薩、一切の大集、阿難等、佛の所說を聞いて歡喜奉行す。

【六五】五眼＝肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼を云ふ。一に肉眼は凡夫所有の眼なり。二に天眼は遠近、內外、晝夜を問はず能く見ることを得、三に慧眼は一異の相を滅し、實相を見ることを得、四に法眼は一切衆生の方便門を知りて道證を得しむ。五に佛眼は前の四眼を具備し、一切法を知見することを得。

※毘沙門天王、護持を誓ふ。

【六六】灌頂＝Abhiṣeka 密教の儀式の名。修行成就して阿闍梨の位を嗣ぐ時に行ふ儀式なり。これ往昔印度に於ける國王即位式に、その頂に四大海の水を灌ぎ、祝意を表せしに傚へるものなり。

【六七】記莂＝授記に同じ。當來成道の保證をいふ。

【六八】陀羅尼＝Dhāraṇī 梵文を翻譯せず、其のまま音寫し讀誦せらるるものを云ひ、譯して總持と云ふ。これ一字一句にも無邊の義趣を含有せる意なり。又、翻譯せざるは、一義に限定せられて梵文の全意を盡し得ぬことと、眞言密語として他に祕する意味とに依る。通常、梵文の長句なるを陀羅尼又は大咒と云ひ、短句なるを眞言或は單に咒と云ふ。

【六九】地水火風＝四大と云ふ。これ物質界を構成せる四種の原素とせらる。

【七〇】惡＝惡字、或は寫誤か、或は惡の下に世字を脫するか。

【七一】大方廣＝又、毘佛略(Vaipulya)に作る。方とは方正、廣は廣陳の義。

【七二】五逆十惡＝五逆罪と十

不善道。

【七三】四重八禁＝四波羅夷と八波羅夷とをいふ。波羅夷(Pārājika)とは嚴重罪にして、四分律は之を斷頭といひ、如何なる行法も之を救うて再び比丘となすことを得ずとせり。四波羅夷とは比丘の戒にして、一に婬戒、二に盜戒、三に殺人戒、四に大妄語戒なり。八波羅夷とは比丘尼の戒にして、四重の外に五に摩觸戒、六に八事成重戒(婬心ありて、一に男子の手を捉り、二に衣を捉り、三に屛處に入り、四に共に立ち、五に共に語り、六に共に行き、七に身相ひ倚り、八に共に婬處に行くを期す)七に覆藏他重罪戒、八に隨順被擧比丘戒なり。

【七四】僧祇物＝大衆の共有に係るものを云ふ。僧祇(Sam-ghika)とは衆と譯し、比丘、比丘尼の大衆を云ふ。四方僧物十方僧物等とも云はる。

佛說地藏菩薩陀羅尼經（終）

一七

地藏菩薩儀軌

中天竺　輸婆迦羅　詔を奉じて譯す

爾の時に釋迦牟尼佛、佉羅[一]提耶山に在り。無量の諸の地藏菩薩、十[二]倶胝の比丘、比丘尼及び天、龍、八部、諸鬼神と倶なりき。無量百千大衆に圍遶せられて而も爲に法を說きたまふ。

爾の時に大衆の中に一大士有り。名けて地藏と曰ふ。偏に右肩を袒ぎ、右の膝を地に著け、合掌し、恭敬して佛に白して言く、「我れ神呪を說きて一切の衆生を利益せんと欲す。唯だ願はくは世尊、神呪を說かんと欲す。慈哀し、聽許したまへ。」と。時に佛、地藏菩薩に告げて言く、「汝等速かに一切有情を利益せんことを說け。」と。

爾の時に地藏菩薩虛空に騰り、世尊を讃歎し、歸命したてまつり、空中に有つて、亦無量の神通を現ず。神口を以つて呪を說いて曰く、

唵闍摩他囑摩爾倶苾倶苾三曼多娑婆賀

次に心呪を說く。

唵炎曼他嗜娑婆賀

次に心中心呪。

唵礘咽二合

纔に此の呪を說くに、十地等の大菩薩本心を失うて迷惑し、天、龍、八部、藥叉、鬼神驚き走りて地に倒る。日月星宿光を失ひ、空を隱蔽し、寶華を雨して繽紛たり。劫を窮めて呪力を說くも說き盡す可からず。

【一】佉羅提耶山＝山名、延命地藏經註參照。

【二】倶胝＝Koṭi 又、倶致と云ふ。數の名、億に當る。

次に畫像の法を說く。聲聞の形像を作し、袈裟を著け、端左肩を覆ひ、左手に盈華の形を持し、右手は[三]施無畏にして蓮華に坐せしむ。復た居座の大士の像は頂に天冠を著け、袈裟を著け、左手に蓮華[四]葉を持し、右手は先の如くにして九品蓮臺に安坐せしむ。（傳に云く、九品とは九重也。亦云く、八葉中臺也。）

次に印呪を說く。印、[五]二羽、[六]三補吒、[七]戒方掌に內れて、來去す。

唵炎摩智利娑婆賀。

次に普供[八]養印。二羽、三補吒、[九]禪智立て、來去す。

唵喃惹摩尼娑婆賀。

次に總說總印。二羽、三補吒。[一〇]進力立て、來去す。

呪に曰く、唵鴨只儞耶娑嚩二合賀

次に請讚印。二羽、三補吒進力來去す。

次に[一一]撥遣。[一二]觀手の[一三]禪進を以つて彈す。

復た成就の法を說く。若し大福德を得んと念ぜば[一四]阿迦木を持して護摩すること七萬遍す。若し五穀成就を得んと念ぜば稻實華を以つて護摩す。若し他人の福德を念ぜば其の家の竈の土を取得して護摩す。若し高位、[一五]高德を得んと念ぜば[一六]比哩華を以つて護摩す。若し生生世世の怨敵の伏せんことを念ぜば苦練木を以つて護摩す。若し惡靈、[一七]邪氣の伏せんことを念ぜば毒味を以つて護摩す。若し顚、狂、痾、病の除愈せんことを念ぜば、蓮實草もて護摩すること三萬遍す。若し滅罪生善、生身後生極樂を念ぜば、[一八]迦草を以つて護摩すること三萬遍す。若し惡人の呪咀還つて本人に著かんことを念ぜば、苦草を以つて火中に投じて護摩すること三萬遍す。若し無量の菓果、俸錄を得んと念ぜば、白華鳥草もて護摩すること三萬遍す。若し三昧に財德を辨ぜんと念ぜば、骨婁草を以つて護摩す

【三】施無畏＝衆生の怖畏を除き、無畏を施す印なり。大日經密印品によれば、右手の五指を申べ、面を上にして掌を外に向け、物を施す形にす。

【四】葉＝正藏本文は茶に作るも、今同本の脚註に據る。

【五】二羽＝左右の兩手を云ふ。

【六】三補吒＝十二合掌の一にして虛心合掌を云ふ。

【七】戒方＝左右の無名指なり。

【八】普供養印＝事理一切の供具を普く法界道場一切の聚衆に供養して、二利の行願を成就する印なり。

【九】禪智＝左右の二大指なり、

【一〇】進力＝左右の二頭指を云ふ、

【一一】撥遣＝奉送とも云ふ。他方世界より召請したる本尊聖衆を一修法の終末に本土に奉送し、自心の佛心を心內に奉送すること。

【一二】觀手＝右手を云ふ、左手を上手と云ひ、左右の兩手を止觀に配するなり。

【一三】禪進＝大指と頭指なり。

【一四】阿迦木＝阿迦花か、具には阿歌羅花と云ふべし。白

ること三萬遍す。若し一切の衆生を化度し、苦を離れ、樂を得しめんと念ぜば、白芥子を以つて護摩すること三萬遍す。若し無佛世界の衆生を化度せんと念ぜば、尸迦草を以つて護摩すること三七萬遍す。若し枯れたる田畠の五穀生ぜんことを念ぜば、古蔓菁を加持し、[一九]其の所を加持して散ぜよ。若し萬病を愁ふる者は牛膝草もて護摩すること三萬遍す。若し三陰、四熱、種種の病を愁へば、降乾各門草を以つて護摩す。若し夫妻不和なれば比罪草もて護摩すること三萬遍せば和合す。若し惡友善友相違はば、藤葉草もて護摩すること三萬遍す。若し白月の八日、十四日、十五日に、以上の法を修すれば必ず成就を得ん。

地藏菩薩儀軌（終）

三

色の花なり。
【一五】 高＝正藏は二に作る。今他本に據る。
【一六】 比哩華＝畢力迦(Pṛkā又はSpṛhkā)か、香の名なり。
【一七】 氣＝正藏は家に作る今他本に據る。
【一八】 迦＝正藏にこの字なし、今他本に據る。
【一九】 其の所＝正藏にはこの二字を缺く。今他本に據る。

佛說延命地藏菩薩經

不空三藏詔を奉じて譯す

是の如く我れ聞きき。一時、佛、[一]佉羅陀山に在して、大比丘衆萬二千人と倶なりき。菩薩三萬六千人と倶なりき。一切の諸天及び龍、夜叉、人、非人等、[二]金輪、銀輪、諸の輪王等十方より來れり。

爾の時に世尊是の[三]大乘無依の行を說き已る。時に帝釋有り。無垢生と名く。佛に白して言く、「世尊、我れ世を護らんと欲するに、若し佛の滅後の[四]法末の衆生は當さに何んが拔濟すべきや。」と。佛、帝釋に告げたまはく、「一りの菩薩有り。名けて延命地藏菩薩と曰ふ。每日晨朝に諸の定に入り、六道に遊化して苦を拔き樂を與ふ。若し[五]三塗に在つて此の菩薩に於いて體を見、名を聞けば人天に生じ、或は淨土に生ず。[六]三善道に在つて其の名を聞く者は現の果報を得て、後には佛土に生ず。何に況んや憶念して心眼開くことを得ば、決定して成就するをや。亦亦是の菩薩は十種の福を得。一には女人泰產、二には身根具足、三には衆病悉除、四には壽命長遠、五には聰明智慧、六には財寶盈溢、七には衆人愛敬、八には穀米成熟、九には神明加護、十には大菩提を證す。亦、八大怖を除く。一には風雨、時に隨ひ、二には他國起らず、三には自界叛かず、四には日月蝕せず、五には星宿變ぜず、六には鬼神來らず、七には飢渴發らず、八には人民病無し。」と。佛、帝釋に告げたまはく、「未來世に於いて、若し衆生有つて此の經を受持し、是の菩薩を恭敬し供養せば、百由旬の內に諸の災患、惡夢、惡相の諸の不吉祥無し。魍魎、鬼神、[七]鳩槃荼等も永く便りを得ず。天狗、土公、大歲神、宮山神、木神、江海神、水神、火神、饑餓神、塚神、蛇神、呪詛神、靈神、路神、竈宅神等、若し此の經、是の菩薩の名を聞かば諸の邪氣を吐き、自ら本空を悟つて速かに菩提を證せん。」と。

【一】佉羅陀山＝Kharādiya 山名。七金山の一。佛此の山に在りて地藏十輪經を說きたまふ。

【二】金輪銀輪＝具には金輪王銀輪王と云ふ。轉輪聖王の輪寶に金、銀、銅、鐵の四種あり、依之、金輪王、銀輪王、銅輪王、鐵輪王の別あること大毘婆沙論に出づ。然して鐵輪王は一洲に、銅輪王は二洲に、銀輪王は三洲に、金輪王は四洲に王たりと云ふ。

【三】大乘無依行＝これ地藏十輪經第三品、無依行品を指す。大乘とは小乘に對する語、大方廣の義。

【四】法末＝末法の時代を云ふ。正、像、末の三時については本願經脚註參照。

【五】三塗＝火、血、刀、に名く。地獄、畜生、餓鬼の三を云ふ。

【六】三善道＝善業の果報にして、上、中、下の三あり。天、人、阿修羅を云ふ。

【七】鳩槃荼＝Kumbhāṇḍa. 鬼の名。人の精氣を噉ふ鬼なり。

爾の時に帝釋、佛に白して言く、「世尊、延命菩薩は何んが六道を[八]化して衆生を得度するや。」と。佛、帝釋に告げたまはく、「善男子、諸法は空寂にして生滅に任せされども、緣に隨つて生ずるが故に色身同じからず、性欲無量なれども普く得度を爲す。延命菩薩は或は佛身を現じ、或は菩薩の身を現じ、或は辟支佛の身を現じ、或は聲聞の身を現ず。或は[九]梵王の身を現じ、或は[一〇]帝釋の身を現じ、或は[一一]琰魔王の身を現じ、或は[一二]毘沙門の身を現じ、或は日月の身を現じ、或は[一三]五星の身を現じ、或は[一四]七星の身を現じ、或は九星の身を現ず。或は轉輪聖王の身を現じ、或は諸の小王の身を現じ、或は長者の身を現じ、或は居士の身を現じ、或は宰官の身を現じ、或は婦女の身を現ず。或は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の身を現ず。或は天、龍、夜叉人、非人等の身を現ず。或は醫王の身を現じ、或は藥草の身を現じ、或は商人の身を現じ、或は農人の身を現ず。或は象王の身を現じ、或は師子王の身を現じ、或は牛王の身を現じ、或は馬形の身を現ず。或は大地の形を現じ、或は山王の形を現じ、或は大海の形を現ず。三界の所有る[一五]四生、[一六]五形變ぜざる所無し。延命菩薩は是の如く法身の自體遍きが故に種種の身を現じて、六道に遊化じて衆生を度脫す。能く一善を以つて三界の有を破す。悉く心、善なるを以つてなり。未來の衆生は發心すること能はず、但だ當さに一心に延命菩薩を禮拜し、供養すべし。刀杖も加へず、毒も害すること能はず、厭魅、呪詛、[一七]起屍鬼等も還つて本人に著かん。天に唾を吐き、風に向つて灰を投ぐれば還つて其の身を坋(ケガ)すが如し。」と。

爾の時に帝釋、佛に白して言く、「世尊、何んが故に名けて延命菩薩と曰ふや。其の相云何。」と。佛、天帝に告げたまはく、「善男子、眞善の菩薩は心、明圓なるが故に如意輪と名け、心に罣礙無きが故に觀自在と名け、心に生滅無きが故に延命と名け、心に摧破無きが故に地藏と名け、心に邊際無きが故に大菩薩と名け、心に色相無きが故に摩訶薩と名く。汝等信受して心に別つ所無く、妄失

【八】化＝遊化すること。

【九】梵王＝Mahābrahman 具には大梵天王と云ふ。

【一〇】帝釋＝Śakra-devānām-Indra. 又、釋提桓因と云ふ 忉利天の主なり。

【一一】琰魔王＝本願經註參照

【一二】毘沙門＝Vaiśravaṇa. 多聞天に同じ、四天王中の一王なり。

【一三】五星＝熒惑星、鎭星、歲星、大白星、辰星を云ふ。

【一四】七星＝五星に更に日、月曜を加ふ。

【一五】四生＝濕生、北生、卵生、胎生の四を云ふ。

【一六】五形＝地、水、火、風空の五を云ふ。

【一七】起屍鬼＝毘陀羅と云ふ。死屍を起たしめて、人を殺さしむる咒法を使ふ鬼なり。

せしむること莫れ。」と。

爾の時に大地[一八]六種に震動して延命菩薩地より出現して、右の膝を曲げて、臂を立て、掌に耳を承け、左の膝を申べ下し、手に錫杖を持して、佛に白して言く、「我れ毎日晨朝に諸の定に入り、諸の地獄に入りて苦を離れしめ、無佛の世界に衆生を度し、今世、後世能く引導す。若し佛滅後の一切の男女我が福を得んと欲せば、日凶なることを問はず、不淨を論ぜず、父母に孝養し、師長に奉事し、言色常に和かにして、人民を狂さず、生命を斷ぜず、邪婬を犯さされ。若しは[一九]十齋日、若しは[二〇]六齋日、若しは十八日、若しは二十四日、但だ自心を正しくして此の經を轉讀し、我が名を稱せん者、我れ[二一]法眼の威神力を以つての故に卽ち業報を轉じて現の果を得しめ、無間の罪を除きて當に菩提を得しむべし。我れ過去無量劫より來た諸の六道の一切衆生を見るに、法性は同體にして無始、無終、無異、無別なれども、[二二]無明は異相にして生住異滅せり。是れ得、是れ失なりと不善の念を起し、諸の惡業を造つて六趣に輪廻す。生生の父母、世世の兄弟悉く佛道を成じて後に我れ成佛せん。若し一人も殘らば我れ成佛せず。若し此の願を知つて、[二三]二世の所求悉く成ぜずんば正覺を取らず。」と。

爾の時に佛、延命菩薩を讚したまはく、「善哉、善哉、眞の善男子なり。我が滅度の後の未來惡世の罪苦の衆生を汝に付囑す。今世、後世、善く能く引導せよ。彈指の頃も惡趣に墮せしめされ。況んや無間、阿鼻地獄に墮せしめんをや。」と。延命菩薩而も佛に白して言く、「世尊、慮りたまはされ。我れ當さに六道の衆生を拔濟すべし。若し重苦有らば我れ代つて苦を受けん。若し爾らずんば正覺を取らず。」と。時に世尊重ねて偈を以つて讚して白く、

「善哉、善哉。延命菩薩は有情の親友なり。衆生の生ずる時は其の身命と爲り、滅すれば導師と爲る。衆生は知らずして、短命にして福無し。我が滅度の後、末法の中に於いて、國土に災起り、人

【一八】六種震動＝これに六時震動、六方震動、六相震動の三種あり。六時震動とは長阿含に、一に佛の入胎時、二に出胎時、三に成道時、四に轉法輪時、五に天魔の勸請によりて將に性命を捨てんとする時、六に入涅槃時とあり。六方震動とは大品般若に、一に東涌西沒、二、西涌東沒、三に南涌北沒、四に北涌南沒、五に邊涌中沒、六に中涌邊沒とあり。又、六相は震動とは華嚴經に動、起、涌、震、吼、覺とあり、

【一九】十齋日＝本願經、如來讚歎品第六に詳し、

【二〇】六齋日＝黑、白月の八日、十四日、十五日を云ふ。

【二一】法眼＝五眼の一、菩薩衆生を度するために照見する智慧を云ふ。

【二二】無明＝Avidyā 煩惱の根元。

【二三】二世＝今世、救世を云ふ。

王の政亂れて、他方の賊來り、刀兵劫起らんとき、但だ當さに延命菩薩を憶想すべし。今世、後世の所求滿せずんば我が所說の法、是の處有ること無けん。」と。

爾の時に三千大千世界六變に震動す。文殊師利菩薩、普賢菩薩、金剛藏菩薩、虛空藏菩薩、聖觀自在菩薩摩訶薩等、異口同音に佛に白して言く、「世尊、未來の衆生、若し此の經、是の菩薩の名を聞かば、我等皆當さに是の人に隨順して、心眼の明と作つて、其の人の前に現じて所求を圓滿せしむべし。若し爾らずんば正覺を取らず。」と。

爾の時に梵王、帝釋、四大天王、諸の天華を雨し、如來を供養して、佛に白して言く、「世尊、未來の衆生若し自心を正しうして、是非を狂さず、賞罰を捨てずして是の經を持せん者、此の菩薩を念せば我等眷屬、是の人を擁護して日夜を離れず、其の國土をして百由旬の內に諸の災難無からしめ、其の國の人民安隱を得て、穀稼成熟し、所求滿足ならしめん。若し爾らずんば護世と名けず、本覺に還らず。」と。時に二りの童子左右に侍立す。一りを[二四]掌善と名け、左に在り。白色にして、白蓮華を持し、法性を調御す。一りを[二五]掌惡と名け、右に在り。赤色にして、[二六]金剛杵を持し、無明を降伏す。佛、大衆に告げたまはく、「汝等當さに知るべし。是の二童子は法性無明にして、兩手、兩足なり。延命菩薩の中心は[二七]不動阿字の本體なり。若し衆生有つて是の心を知らば決定して成就す。即ち三毒を滅して自在力を得、佛土に生ぜんと願はば願に從つて生ずることを得。若し未來世の一切の衆生、延命菩薩を恭敬し供養して疑惑を生ぜざれば、現世の所求皆滿足し、後には淨土に生じて無生忍を得ん。」と。

佛此の經を說き已つて、一切の大會の心大いに歡喜し、信受して奉行す。

佛說延命地藏菩薩經（終）

【二四】掌善＝その身、白色なるは本來淸淨なることを表し、所持する白蓮華は眞理を表示す。不動明王の二童子中の矜羯羅に當る。

【二五】掌惡＝その身赤色なるは一切の無明を摧破する義。又、所持する金剛杵は實智を表示す。不動明王の場合の制吒迦に當る。

【二六】金剛杵＝Vajra 密教法具の一、獨股杵を云ふ。

【二七】不動阿字＝不動とは不動明王（Ārya-acalanātha）のこと。五大明王の一。是れ大日如來の教令を奉して忿怒形を示現し、一切の惡魔を降伏する大威勢を示せるものとし、大月如來の教令輪身とす。次に阿字は悉曇字母の一、普通には無、不、非等、否定の意味に解すれども、眞言宗に於ては有、空、不生の三義ありとし、有空を眞空妙有の意に解して、阿字を本不生（ものそのもの）の義ありとす。故に不動阿字とは不動そのものの義なり。

佛說地藏菩薩發心因緣十王經

成都府大聖慈恩寺[1]沙門藏川述す

[2]是の如く我れ聞きき。一時、佛、[3]鳩尸那城、[4]跋提河の邊、沙羅雙樹入涅槃處に在したまふ。諸の大聲聞前後に圍遶し、無量の菩薩皆悉く集會し、天人大會[5]五十二類皆來至し雲集す。[6]前分の後、[7]遺教の前なり。

爾の時に世尊、大光明を放つて、[8]閻魔國を照し[9]嘿然として住したまへり。閻魔王、十大王衆、獄司、候官、[10]司命令神、[11]司錄記神、閻魔使者、[12]羅刹婆、無量の異類、無數の鬼神、部類從屬忽然として涌出し、恭敬し、供養し、合掌して佛に向ひたてまつる。

[13]爾の時に世尊還つて光明を內れて閻魔法王に告げて言く、「是の[14]娑婆國の一切の衆生は根鈍にして障重く、父母に孝せず、因果を信ぜず、心を以つて師と爲し、[15]五逆、[16]四重、[17]十惡を造作す。皆悉く閻魔地獄に墮在し、[18]冥途の中間都て覺知せず。我れ世尊に非ずんば誰れ人か慈を起さん。[19]孔雀等の經には百年の壽を與ふといふ。然りと雖も終には盡く。人間の[20]八苦は猶し深樂の如し。[21]冥途の受苦は極苦中の苦なり。我れ[22]今略して說かん。」と。

爾の時に閻魔法王及び諸の王等座より起つて、合掌して佛に向ひ、佛に白して言く、「世尊、善哉。善哉。釋迦牟尼法王、能く平等の大慈大悲を以つて我等が爲めに說いて[23]三塗の闇を照したまへ。」と。

*爾の時に世尊閻魔王及び秦廣王等に告げて言く、一切の衆生、各[24]六識、[25]八識、[26]九識の義有り。前に說くが如し。今、此の經の中に唯二の說有り。[27]魂識に三を說き、魄識に七を說く。三種の魂識とは、一を[28]胎光業魂神識と名け、[29]二を幽精轉魂神識と名け、三を[30]相靈現魂神識と名く。阿賴耶

【一】大聖慈恩寺＝雍州に在り。唐高宗、永徽二年、文德皇后の爲に城南曲江の側に建立す。大聖とは王者の意なり。

【二】第一、序分。

【三】鳩尸那城＝Kuśinagara. 城名。

【四】跋提河＝Ajiravati. 河の名。世尊は此の河邊に於て入滅せらる。

【五】五十二類＝涅槃經壽命品によれば、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、離車の男女、諸王、後宮の夫人、長者、居士(以上十類)、婆羅門、毘舍、首陀、城邑の人民、四王、帝釋、日天、月天、星宿天子、諸天女(以上十類)、大梵天王梵衆天、龍王、鬼神、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦(以上十類)、貪色鬼魅、大地の鬼王、風神、雲雨神、土神、神樹、山神、海神、江河神、諸神仙人(以上十類)山獸、野獸、家畜、山鳥、林鳥、水鳥、蜂王、毒蛇甲蟲、飛蟲(以上十類)及び無足、多足の昆蟲及び潛鱗の二類を五十二類と云ふ。

識に於いて開いて三魂と爲す。心性と心相とは水中の波の如く不二にして而も二なり。性とは三身法報應の性、本覺の如來なり。一衆生として三身の如來を具足せざるは無し。我れ此の覺智に依つて[三一]覺樹に道を成じ、我れ此の理に依つて[三二]雙樹に滅を示す。相とは三魂、善惡の業に隨つて生死に流轉し、苦を受け、樂を受けて間斷有ること無し。惡業を造るに依つて三塗の苦を受く。今の衆生の如き、我れに依つて善を修すれば佛道を得せしむ。一切の衆生も亦、復た是の如し。七種の魄識とは、一を[三三]雀陰魄神識と名け、二を[三四]天賊魄神識と名け、三を[三五]非毒魄神識と名け、四を[三六]尸垢魄神識と名け、五を[三七]臭肺魄神識と名け、六を[三八]除穢魄神識と名け、七を[三九]伏尸魄神識と名く。七轉識に於いて性相を分別すること魂に准じて知る可し。一切の衆生の命終に臨む時、閻魔法王は閻魔率を遣す。一を奪魂鬼と名け、二を[四〇]奪精鬼と名け、三を縛魄鬼と名く。卽ち三魂を縛して門關の樹下に至る。樹に荊棘有り。宛ら鋒双の如し。二鳥栖み掌る。一を[四一]無常鳥と名け、二を[四二]拔目鳥と名く。「我れ汝が舊里にして化して[四三]鵄鵶と成り、怪語を示して別都頓宜壽と鳴く。我れ汝が舊里にして化して烏鳥と成り、怪語を示して阿和薩加と鳴く。爾の時知るや否や。」と。七人答へて曰く、「都て覺知せず。」と。爾の時二の鳥、忿怒熾盛にして亡人を呵して曰く、「汝、人間に在つて罪業を恐れず。我れ惡心を懲さんが爲めに飮まざれども腦を啖らん。汝人間に在つて罪業を恐れず。我れ惡心を懲さんが爲めに食はざれども汝が眼を拔かん。」と。然して樹門を通る。閻魔王國の堺は死天山の南門なり。亡人の重過あるは兩莖相ひ逼つて[四四]膝を破り、膚を割き、骨を折り、髓を漏す。死して天に死を重ぬ。故に死天と言ふ。此れより亡人向つて死山に入り、險坂に杖を尋ね、路石に鞋を願ふ。然れば卽ち男女葬送するに於いて三尺の杖を具へ、頭に地藏の狀并に隨求[四五]陀羅尼を書し、鞋一具を具し、魄神の邊に置く。輕過の亡人は大なる穴を通るが如し。微善の亡人は兩莖も礙げず。死天、冥途の間、五百[四六]繕那なり。

※その二、廣說魂識行相
第一　秦廣王

【六】前分の後＝前分とは涅槃經をさす。
【七】遺敎の前＝遺敎經なり。
【八】閻魔＝本願經閻羅王衆讃歎品第八註參照。
【九】嘿然＝嘿は默なり。佛入定の儀相を云ふ。
【一〇】司命令神＝梵王及び諸王の號令を傳ふる者を云ふ。
【一一】司錄記神＝衆生の諸の善惡を記錄して王に奏することを司る神を云ふ。
【一二】羅刹娑＝Rākṣasa. 惡鬼の總名なり。
【一三】第二、正宗文　その一、惣說造惡之相
【一四】娑婆國＝Sahā. 堪忍の義。忍土と譯す。衆生三毒の煩惱あるに。之を忍ぶが故にかく名づく、
【一五】五逆＝五無間罪のこと。地藏菩薩本願經脚註參照。
【一六】四重＝殺生、偸盜、邪婬、妄語の四を云ふ。この四罪は十惡の中、最も重ければなり。
【一七】十惡＝佛說地藏菩薩陀羅尼經註參照。
【一八】冥途＝冥は幽にして、沈冥の幽途を云ふ。地獄、餓鬼の所住處なり。
【一九】孔雀等の經＝佛說大孔

＊爾の時に[四七]秦廣王亡人に告げて言く、「哀なる哉。苦なる哉。苦を吊ふ頌に曰く、

汝去つて死山を過ぎて　漸く閻魔王に近かば
山路に衣食無し。　飢寒の苦何んか忍びん。

爾の時に[四八]天尊是の偈を說いて言く、

[四九]一七亡人[五〇]中陰の身　駈つて將に隊墮して數塵の如し。
且く初王に向つて齋しく檢點せらる。　由來未だ[五一]奈河津を度らず。
亡人を召して門關に坐せしめ、　死天山門に鬼神を集む。
殺生の類先づ推問す。　鐵杖、體を打つて通申し難し。

第二　[五二]初江王官

葬頭河の曲、初江の邊に於いて官廳相連つて所渡る所を承く、前の大河は卽ち是れ葬頭なり。渡るを見て亡人、奈河津と名く。渡る所に三有り。一には山水瀨、二には江深淵、三には有橋渡なり。官前に大樹有り。衣領樹と名く。影に二鬼を住す。一を奪衣婆と名け、二を懸衣翁と名く。婆鬼は盜業を警めて兩手の指を折り、翁鬼は義無きを惡んで頭足を一所に逼め、尋いで初開の男をして其の女人を負はしめ、牛頭、鐵棒をもつて二人の肩を挾み、追うて疾瀨を渡し、悉く樹下に集む。婆鬼は衣を脫せしめ、翁鬼は枝に懸けて罪の低昂を顯し、後、王廳に送る。

爾の時に天尊是の偈を說いて言く、

[五三]二七亡人奈河を渡る。　千群萬隊江波を涉る。
[五四]引路の[五五]牛頭は肩に棒を挾み　行けと催す。馬頭は腰に叉を擎く。
牛を苦しめ、牛を食へば牛頭來り　馬に乘り、馬を苦しむれば馬頭多し。

雀呪王經（義淨譯）、孔雀王呪經（羅什譯）、佛母大孔雀明王經（金剛智譯）等を指す。

【三〇】八苦＝生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、求不得苦、怨憎會苦、五陰盛苦の八を云ふ。

【三一】塗＝一本途に作る。

【三二】今＝一本にこの字缺く。

【三三】三塗の闇＝惡趣のこと。本願經第四品脚註參照。

【三四】六識＝眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の六を云ふ。大小乘通說の法門なり。

【三五】八識＝六識（前六識と云ふ）の外に第七末那識（Manas）及び第八阿賴耶識（Ālaya）を加へたるを云ふ。唯識宗の法門なり。

【三六】九識＝八識の外に第九識菴摩羅（Amala）識を加ふるを云ふ。これ性宗所立の說にして、眞諦三藏は九識建立に際して第七識を阿陀那識、第八識を阿梨耶識と譯せり。

※その三、說十王斷罪相

【三七】魂魄＝支那思想によれば、魂は天氣、魄は地氣、とせらる。卽ち魂は陽氣、精神にして、魄は陰氣、形骸を若し人死すれば魂は天に昇り、魄は地に歸るとせらる。

【三八】胎光業魂神識＝法身を云ふ。胎內より具足し來る佛

衣無くして、寒苦自身を逼む。　翁鬼惡眼ありて、利牙を出せり。

第三[五六]　宗帝王官

二江の岸上官廳の前に於いて、惡猫群集し、大蛇並びに出で來る。時に亡人[五七]嬭房を割破せられ、身體を繫縛せらる。時に閻魔率、亡人を呵して言く、「我等慈無くして逼むるに非ず。汝が邪婬の業なり。此の苦猶輕し。後、王の逼むるを何んせん。」と。

爾の時に天尊是の偈を說いて言く、

三七に亡人轉た[五八]悽惶す。　始めて覺ゆ、冥途の險路の長（はるか）なることを。
各各名を點じて所在を知らしむ。　群群駈け送る五官王。

第四[五九]　五官王官

三江の間に於いて官廳を建立す。大殿の左右に各一舍有り。左は秤量舍、右は[六〇]勘錄舍なり。左に高臺有り。臺の上に秤量幢有り。業匠の構巧みにして、七の秤を懸け、身口の[六一]七罪を量り、輕重を糺すことを爲す。意業の所作は秤量に懸けず。次に鏡臺に至つて當に鏡の影を見るべし。此の秤量の點目に於いて三の別有り。一には[六二]斤の目を斷つて重罪と爲す。重中に輕を開きて[六三]二八獄の罪と爲す。二には兩の目を斷つて中罪と爲し、餓鬼の罪と爲す。三には分の目を斷つて下罪と爲し、畜生の罪と爲す。先づ不妄語戒を破り、餘の造惡に從つて秤の前に至る。時に秤の錘、自動して自然に低昂す。亡人に課して言く、「汝が造る所の罪、秤目、重きに定れり。」と。亡人欺笑して曰く、「我れ未だ秤に昂らず。闇に何ぞ重と爲すや。我れ[六四]敢て信ぜず。」と。

爾の時に[六五]訪羅、罪人を取へて秤の盤上に置くに、

性なり。
【二九】幽精轉魂神識＝應身を云ふ。幽遂純精の智。物に隨つて轉現し來る了因の佛性なり。
【三〇】相靈現魂神識＝應身を云ふ。靈とは靈妙不測の義、その物に隨つて心相現行するを云ふ。
【三一】覺樹＝菩提樹(Bodhi-vṛkṣa)のこと。釋尊はこの樹下に於て正覺を得たまふ。
【三二】雙樹＝沙羅雙樹(Sāla)のこと。佛の入滅したまへる所の林の名なり。雙樹とは沙羅樹の並木を云ふ。
【三三】雀陰魄神識＝舌識を云ふ。
【三四】天賊魄神識＝耳識を云ふ。
【三五】非毒魄神識＝眼識を云ふ。
【三六】尸垢魄神識＝身識を云ふ。
【三七】臭肺魄神識＝鼻識を云ふ。
【三八】除穢魄神識＝意識を云ふ。
【三九】伏尸魄神識＝第七末那識を云ふ。
【四〇】奪精鬼＝精とは魄なり。陰の精を云ふ。人死して地に歸るべき精を奪ふ鬼なり。
【四一】無常鳥＝杜鵑なり。
【四二】拔目鳥＝鴉なり。

秤目故の如し。亡人口を閉づ。造惡のものは面を變ず。訪羅之を下して勘錄舍に傳ふ。赤紫の冥官秤書に合點し、光祿司侯、印を錄張に押し、具に憲章に載せて閻魔宮に奏す。

爾の時に大尊、是の偈を說いて言く、

五官業秤[六六]空に向つて懸り　左右の雙童の業の簿全し。
輕重豈情の願ふ所に由らんや。　低昂は自ら昔の因緣に任ず。

雙童子形狀の偈に曰く、

善を證明せる童子は　時として離れざること影の如し。
耳を低くして善を修するを聞き　微善をも記さざること無し。
惡を證明せる童子は　響の聲體に應ずるが如し。
目を留めて惡を造るを見る。　小惡をも錄さざること無し。

[六七]第五　閻魔王宮

閻魔王國を無佛世界と名く。亦は[六八]預彌國と名く。亦は閻魔羅國と名く。大城の四面に周圍して鐵墻あり。四方に鐵門を開けり。左右に[六九]檀茶幢有り。上に人頭の形を安んず。人能く人間を見ること掌中の[七〇]菴羅菓を見るが如し。右は黑闇天女幢、左は太山府君幢なり。

爾の時に世尊、衆に告げて言く、「諸の衆生、[七一]同生神、[七二]魔奴闍耶といふもの有り。左の神は惡を記す。形、羅刹の如し。常に隨つて離れずして悉く小惡をも記す。右の神は善を記す。形、[七三]吉祥の如し。常に隨つて離れずして皆微善をも錄す。惣じて雙童と名く。亡人の先身の、若しは福、若しは罪の諸の業を皆書して盡く閻魔法王に奏與す。其の王、簿を以つて亡人を推問し、所作を算計し、惡に隨ひ、善に隨つて之を斷分す。復た二幢主、人頭の所見を以つて重ねて彼の王に奏す。次に二

【四三】謁獨=郭公のこと。
【四四】膜=肉理の分際を云ふ。
【四五】隨求陀羅尼=隨求尊勝陀羅尼經(不空譯)の陀羅尼にして、唵跛羅跛羅三跛羅三跛羅印捺哩野尾戎馱頼吽吽嚕嚕遮黎蘇婆賀と云ふ。
【四六】繕那=Yojana　又、由旬と云ふ。印度の里程にして、帝王一日の行軍數を云ひ、或は三十里、或は四十里と云ふ。
＊その三、說十王斷罪相
【四七】奏廣王=奏、廣、共に廣大の義。一切に遍ずる義なり。本地(本體)を不動明王とす。初七日亡人の居處に配す。
【四八】天尊=釋迦牟尼佛のこと。佛は能く第一義諦淸淨本空の理を窮めたまひ、天中の尊なればなり。同時に道敎の術語。
【四九】一七亡人=初七日を經し亡人のこと。
【五〇】中陰の身=中有の五陰(蘊)を云ふ。死生二有の中間を中有と名く。
【五一】奈迦津=奈は捺にして捺落迦(Naraka)、卽ち地獄、受苦處を云ふ。津とは渡場なり。
【五二】初江王=三津(山水瀨、江深淵、有橋渡)の初に居せばこの名あり。本地(本體)を釋迦如來とす。二七日の亡人の

院有り。一を光明王院と名け、二を善名稱院と名く。光明王院、中殿の裏に於て、大鏡臺有つて光明王鏡を懸く。[七四]淨頗梨鏡と名く。昔、[七五]無遮の因に依つて一大王鏡を感ず。閻魔法王此の王鏡に向つて自心の事、三世の諸法、情、非情の事を鑑るに皆悉く照す。然も復た八方に圍むに方毎に業鏡を懸く。一切衆生の[七六]共業增上の鏡なり。時に閻魔王、同生神の簿と人頭の見とをもて亡人を[七七]策髮し、右遶して見せしむ。卽ち鏡の中に於いて前生に作す所の善福惡罪を現ず。一切の諸業各形像を現ずること、猶し對せる人の面、眼、耳を見るが如し。

爾の時に同生神、座より起つて合掌して佛に向つて是の偈を說いて言はく、

我れ閻浮にて見しが如し。　今現に業鏡を與へらる。
毫末も差別無し。　質と影と同一の相なり。

爾の時に亡人驚悸、心に逼り、頌して曰はく

前に業鏡有りと知らば　敢て罪業を造ざらん。
鏡を鑑れば身を劍るが如し。　何ぞ此に男女を知らん。

爾の時に閻魔王重ねて大衆に告ぐ。「我れ閻浮の日月の行る所の正五九月の長月と十齋とを以つて、殊に閻浮に向つて人の[七八]衆同分に於いて、善福を作す人の爲めに監福監醮使を遣し、[七九]飛面白馬に乘つて須臾の項に至り、所作の業を見る。卽ち還つて須臾にして我れに向つて見し所の福を說く。惡を作す人の爲めには通奏通府使を遣して、至ること上の使の如し。我れ今殷勤に衆生の業を斷ぜん。衆生は知らず、恣に惡業を作して三惡道に隨す。我れ悲心無きには非ず。善福の衆生は十齋日に於いて十戒を受持し、當苦の悲を存せよ。一日には至心に[八〇]定光佛を進念す。八日には至心に[八一]藥師瑠璃光如來を進念す。十四日は至心に[八二]賢刧の千佛を進念す。十五日には至心に[八三]阿彌陀佛を進念す。十八日には至心に地藏菩薩を進念し、且より食するに至るまで供養し、稱名せば必定して

居處に配す。
【五三】二七亡人＝二七日を經し亡人のこと。
【五四】引路＝亡人を引導する義。
【五五】牛頭＝地獄の獄卒にして牛頭をなすもの。馬頭をなすものなり。馬頭亦同じ。
【五六】宗帝王＝宗は主又は尊の義、帝は主君の義。冥官の崇敬する帝君の意なり。本地を文殊師利菩薩とす。三七日の亡人の居處に配す。
【五七】㜷房＝㜷は乳なり。乳房のこと。
【五八】悽惶＝悽は煩惱の貌。惶は懼又は恐の意。怖畏の義なり。
【五九】五官王＝五官とは五刑の意。五刑を主る王なり。本地を普賢菩薩とす。四七日の亡人の居處に配す。
【六〇】勘錄舍＝亡人の姓名、死生定數を勘考筆錄する處。
【六一】身口の七罪＝十惡業の中、殺生、偸盜、邪淫（以上身業の三）妄語、綺語、惡口、兩舌（以上口業の四）の七業を云ふ。
【六二】斤＝目方の數量を斤、兩、分の三分とせしなり。
【六三】二八獄＝八寒八熱の十六地獄を云ふ。本願經第五品參照。
【六四】敢＝一本改に作る。

四惡道の苦を受けず。二十三日には至心に[八四]勢至菩薩を進念す。二十四日には至心に[八五]觀世音菩薩を進念す。二十八日には至心に[八六]毘盧舍那如來を進念す。二十九日には至心に藥王菩薩を進念す。三十日には至心に[八七]釋迦牟尼佛を進念す。是の如く十齊の修習一年に能く十尊を念ぜば、能く疫病、[八八]五病鬼使を除き、壽を得ること百年、福を得ること百秋、命終の後、諸の佛國に生ず。復た能く我れ及び奪魂神[八九](努吉尼と名く。)衆と幷びに傳屍鬼[九〇](起死鬼と名く。)に於いて、[九一]制咀囉月(正月)、[九二]室羅伐拏(五月)、[九三]末伽始羅(九月)、白黑の七日に於いて黃昏の時に至るまで我等を供養せよ。正に北方に向つて皆諸供を備へ、一心に頂禮し、至心に請し、大神呪一百八遍を念ぜば、我れ閻魔王幷びに諸の眷屬哀愍し、納華、金米、銀錢、銀旛、銀幣、仙菓二種(柘榴、棗菓。)、淸茶なり。所謂、香受せん。供養し已つて後、錢旛、幣等皆是れ之を醮くべし。爾の時に當つて本誓の力を以つて死簿に著すと雖も反つて生の書に著し、横死、非命必ず轉じて壽を延べん。不妄語戒を受持するの人は必定して横死非命を受けず。卽ち佛前に於いて神呪を說いて曰はく、

唵炎魔曳達羅闍耶薩嚩賀

爾の時に閻魔法王根本呪を說き已つて監福使に告げて言はく、「若し衆生有つて日日に一百八遍を持念せん者は、汝無量の閻魔卒を具して左右を離れざること眼精を守るが如くすべし。若し求むる所有らば速疾に圓滿せしむべし。若し苦痛有らば[九四]阿伽陀を與へ、若しは蘭林を求め、若しは浴池を願ふに、種種の衆願皆滿足せしむべし。」と。

爾の時に監福使等合掌し、恭敬し、進んで敎勅を承け、退いて當に奉行し、善惡の業に隨つて七[九五]七道の報を定む。

爾の時に天尊是の偈を說いて言はく、

五七亡人淨聲を息む。　　罪人心に恨んで未だ甘情せず。

七

【六五】訪羅＝阿訪羅刹のこと。獄卒の名。
【六六】空＝虛空の義。亡人懸らざる以前は秤盤懸くべきもののなければ虛空といふ。
【六七】閻魔王＝王名について本願經脚註參照。本地を地藏菩薩とす。五七日の亡人の居處に配す。
【六八】預彌國＝預彌は我が邦の黃泉(よみ)、夜見(よみ)ならん。我が邦古代人の、死後、靈魂の行くべき處と考へし所なり。これ本經の本邦製作の證明か。
【六九】檀荼幢＝檀荼(Daṇḍa)とは杖・棒のこと。人頭幢と云ふ。棒頭に人頭を載せしものにして琰魔王の標識なり。
【七〇】菴羅菓＝Āmra。果物の名「掌中の菴羅菓を見るが如し」の喩は楞嚴經卷二にも出づ。一目瞭然の意なり。
【七一】同生神＝倶生神のこと。
【七二】摩奴闍耶＝Mānusa 又は Manusya 譯して人と云ふ。
【七三】吉祥＝吉祥天女(Mahāśrī)のこと。陀羅集經によれば、その相貌端正にして白皙美麗、種種の瓔珞、鐶釧、耳璫、天衣、寶冠をもち、莊嚴殊勝、右手に施無畏印を結び、左手に如意珠を持して寶臺上に端坐すといふ。
【七四】淨頗梨鏡＝頗梨(Spha

策髮して頭を仰けて業鏡を看る。　悉く先世の事を知ること分別なり。

復た善名稱院を說くに、此の處殊勝にして無佛の處に於いて別に淨土を立つ。金沙を地に滿し、銀玉を道に疊み、四畔に[九六]四寶を築き、四門には順金を開く。樹、[九七]七珍を分ち、枝に妙華を開き、房毎に微菓を結び、華尋いで華を開き、長春にして散らず、菓尋いで菓を結び、長秋にして落ちず。池には七寶の蓮を開かしめ、青、黃、赤、白を重ね、汀には[九八]六種の鳥を鳴かしめ、[九九]宮、商、角、徵、羽を和す。莊嚴微妙なること兜率天中の殊勝殿に五寶座を安ずるが如し。即ち是れ地藏菩薩の入定室の處なり。四方に座有るは四大菩薩の所座なり。所謂、[一〇〇]破惡趣菩薩、[一〇一]悲旋潤菩薩、[一〇二]金剛咲菩薩、[一〇三]除憂闇菩薩なり。爾の時に無佛世界の能化導師、悲願金剛地藏菩薩、中央の座に坐したまふ。毎日晨朝に恒沙の定に入り、定より起ち已つて十方國に遍し、有情の室宅、門戶に住立す。淨信にして我を念じ、兩手を開いて[一〇四]熈怡微笑し、[一〇五]智咲士を現ず。[一〇六]不淨を行ふを聞かば[一〇七]左の中指を以つて臆の上を針し、悲泣して去りて悲旋潤を現ず。或は地獄に入りて皆苦を離れしめ、及び餘の惡趣に遍く入りて生を救ふ。願力自在にして日日怠らざるは、昔、[一〇八]因地に在つて大願を發せし故なり。我れ過去無數劫の中を念ふに、佛有りて出世したまふ。號して覺華定自在王佛と名く。彼の佛世尊、涅槃に入りたまひし後、像法の中に於いて佛の形像有り。爾の時に我れ[一〇九]聖近士女と爲つて大深信を起し、供養し、恭敬す。我れ悲母の地獄に墮在するを知つて、苦を救はんが爲めに七日斷食し、一心に祈請す。第七日の第五更の時に於いて、室中の空內に忽に佛身を現じて而も我れに告げて言はく、「善哉。善哉。聖近士女。悲母の極苦を度脫することを得んと欲せば當に無上の大菩提心を發し、能く三世の一切の父母を度し、能く無佛世界の衆生を化すべし。能く地獄を化すること悲母に等しき類の故に地藏と名く。地獄の衆生庫藏と爲せばなり。故に未來世に於いて極苦を救ふに堪ふ。佛の教勅に依つて始めて善心を發し、初めて無上大菩提心を發すこと諸佛の行願に同じ。即ち母の苦を救

【七四】とは水精の如き寶石の名。これ珠羅玉の業鏡なり。
【七五】無遮＝遮は制止の義。所謂齋會を設けて親疎を論ぜず、平等に施捨して悔悋の心無きをいふ。
【七六】共業＝同業の因に依り、同じ苦樂の果報を受くる業をいふ。
【七七】策髮＝策は搏に訓ず。即ち獄卒亡人の頭髮を搏んで引寄するなり。
【七八】衆同分＝衆は人衆、同は同佮、分は量に過ぎざるを云ふ。類輩の意。
【七九】飛面白馬＝馬の名。飛面とは飛行自在の意なり。
【八〇】定光佛＝Dīpaṃkara. 又、燃燈佛ともいふ。過去七佛の一。
【八一】藥師瑠璃光如來＝Bhaiṣajyaguruvaidūryaprabhāsa 大醫王佛、醫王善逝と稱す。東方淨瑠璃國の教主なり。
【八二】賢劫の千佛＝現在の住劫を賢劫と名く。現在の住劫二十增減中には千佛の出世ありといふ。
【八三】阿彌陀佛＝Amitābha 又は Amitāyus 西方極樂淨土の教主なり。
【八四】勢至菩薩＝Mahāsthāmaprāpta 佛の智門を主り、その大智一切處に至るが故に大勢至と云ふ。阿彌陀佛の右

ひ、解脱を得せしむ。彼の佛の說きたまふが如く、我れ其の後哀願を發し、誓を立て頌して云く、

我れ若し眞を證して後、地獄に於いて苦に代らんに。代る可きに代らずんば誓つて正覺を取らず。

我れ若し眞を證して後、餓鬼に於いて食を施さんに、施す可くして施さずんば誓つて正覺を取らず。

我れ若し眞を證して後、畜生の齧噉するに於いて、救ふべきを救はずんば誓つて正覺を取らず。

我れ若し眞を證して後、修羅の諍苦に於いて、和すべくして和せずんば誓つて正覺を取らず。

我れ若し眞を證して後、有緣の衆生に於いて、三昧に入らずんば誓つて正覺を取らず。

我れ若し眞を證して後、短命を畏れて我を念ぜんに、長壽を得しめずんば誓つて正覺を取らず。

我れ若し眞を證して後、病苦の爲めに我を念ぜんに、除愈を得しめずんば誓つて正覺を取らず。

我れ若し眞を證して後、王難を除かんとして我を念ぜんに、恩赦を得しめずんば誓つて正覺を取らず。

我れ若し眞を證して後、怨賊を離れんとして我を念ぜんに、速疾に遠離せずんば誓つて正覺を取らず。

我れ若し眞を證して後、貧苦を厭ひて我を念ぜんに、衣食を豐かならしめずんば誓つて正覺を取らず。

我れ若し眞を證して後、官位を求んとして我を念ぜんに、高官を得しめずんば誓つて正覺を取らず。

我れ若し眞を證して後、臨終に於いて我れを念ぜんに、其の時、身を現ぜずんば誓つて正覺を取らず。

脇に侍す。

【八五】觀世音菩薩＝Avalokiteśvara 本願經脚註參照。

【八六】毘盧舍那如來＝Vairocana 譯して大日如來と云ふ。佛の眞身なり。

【八七】釋迦牟尼佛＝Śākyamuni 印度、迦毘羅城、嵐毘尼園に生誕せられ、正覺山菩提樹下に成道せられ、八十歲にして入滅あらせられたる生身の釋迦牟尼世尊を云ふ。

【八八】五病鬼使＝これ傳尸病鬼なり。第一鬼は頭頸は鳥形、身は人骸。第二鬼は屍骸鬼と云ひ、頭は女の形、髮長く、身は人骸。第三鬼は天魔羅醯室施鬼と云ひ、頭は鷄、手の指は二、足は人の形なり。第四は兜醯羅鬼といひ、頭は僧形、腰より下は蛇なり。第五鬼は猪鬼といひ、頭は猪、身は人形なり。

【八九】拏吉尼＝Ḍākinī 鬼類の一。六ケ月以前に人の死を知り、その心藏を取て食ふと云ふ。

【九〇】起死鬼＝Kṛtya 鬼の名。

【九一】制呾羅＝Caitra 星の名。正月なり。

【九二】室羅伐拏＝Śrāvaṇa 五月なり。

【九三】末伽始羅＝Mārgaśīrṣa 九月なり。

【九四】阿伽陀＝Agada 藥名。

我れ若し眞を證して後、六道の衆生の爲めに、應に得度すべき所に隨つて甘露の法を施さん。
我れ趣に隨つて分身し、緣熟の衆生に於いて、[一〇]六種の名字を以つて當當の身に應ぜん。
爾の時に世尊、[一一]乞叉底蘗波菩薩に告げて言はく、
「善哉。善哉。諦に聽け。地藏は未來世に於いて緣の爲めに身を現ず。我れ當に六種の名字を授記すべし。」と。頌して告げて言はく、

預天賀地藏は　左に如意珠を持す。
右の手は[一二]說法の印なり。　諸の天人衆を利す。
放光王地藏は　左手に[一三]錫杖を持す。
右は[一四]與願の印　雨を雨して[一五]五穀を成す。」
金剛幢地藏は　左に金剛幢を持す。
右手は[一六]施無畏なり。　修羅を化して幡を靡す。
金剛悲地藏は　左手に錫杖を持す。
右手は[一七]引攝の印なり。　傍生の諸趣を利す。
金剛寶地藏は　左手に寶珠を持す。
右手は[一八]甘露の印なり。　餓鬼に施して飽滿せしむ。
金剛願地藏は　左手に[一九]閻魔幢を持す。
右手は[二〇]成辦の印なり。　地獄に入りて生を救ふ。

爾の時に乞叉底蘗波菩薩歡喜踊躍して、起つて合掌し、前んで佛に白して言く、「今佛より此の授記を聞き、未曾有なることを得。若し未來世に於いて當に惡趣の衆生を利益するに堪ふべくんば、此の身を捨てずして大丈夫と成らん。」と。

無價、無病と譯す。
【九五】七道＝六道及び仙道を云ふ。
【九六】四寶＝金、銀、瑠璃、頗梨を云ふ。
【九七】七珍＝金、銀、瑠璃、頗梨、硨磲、瑪瑙、赤珠なり。
【九八】六種の鳥＝白鵠、孔雀、鸚武、舍利、迦陵頻伽、共命鳥の六鳥なり。
【九九】宮・商・角・徵・羽＝五音と云ふ。佛教音樂中の聲明の音階にして、宮を以て主音（基礎音）とし、商・角・徵・羽と次第に高昇す。尙その高音、低音はそれぞれ二重、三重と層を付けて標示す。
【一〇〇】破惡趣菩薩＝Sarvapāyajaha 又除惡趣菩薩と云ふ。大悲三昧に住して地獄等の三惡趣を破却する菩薩なり。
【一〇一】悲旋潤菩薩＝Karuṇāmredita 又、悲愍菩薩と云ふ。大悲の法水を以て衆生を潤澤するが故にこの名あり。破惡趣菩薩と共に胎藏界曼荼羅十三大院中の除蓋障院中にあり。
【一〇二】金剛笑菩薩＝Vajra-hāsa この菩薩、衆生の作福修善を見て適悅せばこの名あり。金剛界曼荼羅の南方寶性佛の四親近の四金剛笑菩薩これなり。
【一〇三】除憂闇菩薩＝この菩薩

爾の時に世尊、我れに告げて言はく、「善哉。願の如し。善哉。願の如し。」と。即ち時に地を動かし、即ち天より華を雨し、忽然として變じて大丈夫僧と成り、即ち[一三一]大乘の第三果の位を得たり。

爾の時に世尊、我れに告げて言はく「今、無佛世の能化に堪忍せり。未來世に於いて佛有り。名けて釋迦牟尼佛と爲す。忉利天に處して、先より汝が來らんことを知りたまふ。滅後の弟子を皆悉く汝に付したまはん。其の裟婆國の人は多く惡を好む。實に汝が願に非んば能く化を見ざらん。若し地獄に入らば[一三二]五八戒を授けて惡趣に生を救はん。此の一事に於いて恒沙無數の菩薩に超過せん。即ち我れ略して汝が未來世の善權、方便の功德を說かん。と。偈をもつて言く、

若し母の敎に順なるもの有らば皆是れ地藏の身なり。慇懃に悲母を化して願力自在なるが故也。

若し我が名を念ずること有つて、每日百返を稱へば、四惡趣の中に於て苦に代つて解脫を與へん。

若し正王臣有らば帝釋と爲つて擁護し、若し邪王臣有らば閻魔と爲つて之を罸すべし。

極惡罪人の海、能く渡し導く者無し。地藏の願船に乘らば、必定して彼岸に到らん

爾の時に空佛是の偈を說き已つて忽然として變化し隱れて現ぜず。我れ大丈夫、佛の記莂を聞きて、即ち[一三三]善現色三昧を得たり。其れより已來每日定に入り、衆生を利益すること暫くも怠ること無し。

第六[一三五] 變成王廳

爾の時に大會の閻魔王等の諸の羅刹婆、乞叉薩婆、菩薩の宿世の因緣を聞いて深く因果の無量の功德を信じ、皆眷屬と爲つて化導を扶助せり[一三四]。善名處に於いて略して往古本願の事を說き畢る。

前の二王の秤鏡兩ながら現ずるに依つて、若し罪あらば惡を逼め、若し福あらば善を勸む。

爾の時に天尊是の偈を說いて言く、

は分明ならざるも、思ふに胎藏界曼荼羅中の除蓋障院と地藏院との二院間の菩薩ならん。

【一〇四】熈怡微笑＝熈怡とは心の中に喜ぶこと。微笑とはその笑を顏に出すことを云ふ。

【一〇五】智笑士＝金剛咲菩薩のこと。

【一〇六】不淨を行ふを聞かば＝これ不信を憐れむ相を說く。

【一〇七】左の中指を以つて＝これ衆生墮獄の因緣を作すを見て憂忍することを現す。もと右の中指は願波羅蜜に配す。又、旋潤菩薩の印相は右の手を以て心を拄ふるなれば、左右異なれど心を拄ふる相同一なるを知るべし。

【一〇八】因地＝地藏菩薩の因地に關する以下の事例は、地藏本願經第一忉利神通品に出づ。參照。

【一〇九】聖近士女＝Upāsikā又、優婆夷、近事女に作る。在家にして五戒を受けし女子の稱にして、近事(士)とは三寶に近づき如來に奉事する義なり。

【一一〇】六種の名字＝地藏菩薩は六道を救拔せんが爲めに、夫々の等流身を現じて之に當ることを云ふ。異說多けれど今一例を示さば、占察地藏は地獄道を、無二地藏は餓鬼道を、觀察地藏は畜生道を、勝

亡人六七冥道に滯す。　切に人を坐することを怕れて意愚を警む。
日日只功德の力を看る。　天堂、地獄須臾に在り。

第七[二六]　太山王廳

前の三王の處斷に依つて兩舌の罪を勘決して、善因惡緣を求む。爾の時に天尊是の偈を說いて言く

七七には冥途中陰の身、　專ら父母の情に會ける親を求む。
福業此の時仍未だ定まらず。　更に看る、男女何れの因をか造る。」と。

亡人苦に逼められて愁歎し、頌して曰く。

七七箇日を待つて飲食せずして寒に逼めらる。男女遺財を以つて早く善を造して我を扶けよ。設し親禁ぜられて獄に入らば子として靜かに家に居る哉。何に況んや闇獄の苦をや。頭の然ゆるすら猶喩に非ず。

第八[二七]　平等王

內に慈悲を含み、外に怒相を現じ、且く施さば之を敎化し、且く貪られば之を刑罰す。

爾の時に天尊是の偈を說きて言く、

亡人百日更に恓惶すべし。　身は枷械に遭ひ、鞭傷せらる。
男女努力て功德を造さば、　茲の妙善に從つて天堂を見るべし。

第九　都市王廳[二八]

亡人を哀んで言く、諸經の中に於いては法華經を造れ。龍女は海を出でて無垢に成道す。諸佛の中に於いては阿彌陀佛を造れ、光明徧く照して熱寒の苦を除したまふ。緣ある人の男女亡人を救はんと欲せば、今日追善に八齋戒を受けよ。福力殊勝なり。男女瞋ること勿れば能く亡苦を救ふ。

論地藏は修羅道を、空靜地藏は天道は人道を、不休察地藏は天道を救はんが爲に現ずるが如し。

【二一】乞叉底蘗波菩薩＝Kṣitigarbha 地藏の原音。

【二二】說法印＝右手の中指と親指とを捻し、餘の三指は散立す。

【二三】錫杖＝Khakkhara 譯して智杖と云ふ。他をして知を發さしむる杖の意なり。

【二四】與願の印＝右手の臂を立て、五指を散立す。

【二五】五穀＝米、大麥、小麥、大豆、胡麻(又は小豆)なり。

【二六】施無畏＝右の掌を開いて右膝の上に置く。

【二七】引攝の印＝深祕の故に古來說かれず。故に不明なり。

【二八】甘露の印＝不明なり。

【二九】閻魔幢＝檀茶幢のこと。

【三〇】成辨の印＝或は施無畏と同じか。

【三一】大乘第の三果＝大乘とは小乘に對する語。乘とは運載の義、人を乘せて解脫(理想)に至らしむる敎法を云ふ。その敎法の中、敎、理、行、果、倶に大且深にして、從つて之を受くる機も大器ならざるべからざるを要する敎法を大乘と云ふ。第三果とはこの大乘菩薩の修行階梯なる十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺・妙覺の五十二位と、及

爾の時に天尊是の言を說いて言く、

一年此を過ぎなば轉た苦辛なり。　男女齋福の業因を修せよ。
六道の輪回仍を未だ定まらず。　經を造り、佛を造らば迷津を出づ。
極惡、極善の來らざる處　微惡、微善は[二九]亡賓と爲す。
佛經の力[三〇]二報を定むるに依り、　以つて追修すれば福金人に登る。

第十[三一]　五道輪王廳

爾の時に天尊是の偈を說いて言く、

後に三たび歷る所是れ關津なり。　好惡唯だ福業の因を憑む。
不善は尙千日の內を憂ふ。　胎生、產死、夭亡の身。
邪見、放逸の過、愚癡、無智の罪　猶し車輪の廻るが如く、常に三途の獄に在り。

*爾の時に十王の諸の羅刹婆、冥官、司候、座より起つて合掌し、佛に向ひ、佛に白して言く「世尊、我等諸王、或は權、或は實、實類等の如く苦を受くること忍び難し。何んかして[三二]苦官を離れて[三三]無爲の家に歸らん。」と。

爾の時に世尊、諸の王に告げて言く、「汝等先の世に他の惡苦を見て、悅んで自の樂と爲し、他を勸めて惡を造らしめ、他の善を聞いては憎み、死を得ること有りと聞いては以つて歡樂と爲し、貪心にして財を惜み、瞋恚にして理を失ふ。是の如き等の衆生閻魔國に生ずることを得。前分の涅槃の中に廣く說くが如く、佛性は常住なり。凡そ心慮有れば當に佛性を具すべし。悉く皆當に[三四]無上菩提を得べし。汝等心有れば當に佛性なりと知るべし。必定して永く三熱の大苦を離る。佛性なり。

[三五]頌に曰く、

び佛を加へたる中の第三位の意にして等覺を云ふなり。

【二二】五八戒＝五戒と八齊戒なり。五戒とは殺生、偸盜、邪淫、妄語、飮酒を云ひ、八齊戒はこの五戒に、塗飾香鬘歌舞觀聽、眠生高廣嚴麗牀坐、食非時食の三戒を加へたるを云ふ。

【二三】善現色三昧＝具には普現色身三昧と云ふ。この三昧に入らば、色身に自在を得、石壁にも礙無く、隱現自在を得といふ。

【二四】善名處＝前來說ける無佛世界に淨土を建立することを云ふ。

【二五】變成王廳＝變成王は本地彌勒菩薩の垂迹とす。六七日の亡人の居處に配せらる。彌勒菩薩(Maitreya)は賢劫千佛中の第五佛にして、今より五十六億七千萬歲の後、再びこの娑婆世界に下生すべき一生補處の菩薩とせらる。

【二六】太山王廳＝太山王は本地藥師如來の垂迹とせらる。此處を七七日の亡人の居處に配す。

【二七】平等王＝この王、善惡の亡人を見るに、一子に慈悲を垂るる如ければ平等王と名く。本地觀世音菩薩の垂迹とせらる。百箇日の亡人の居處に配せらる。

一三六 諸行は無常なり。　是れ生滅の法なり。
生滅滅し已りて　一三七 寂滅なるを樂と爲す。
我れ過去無量劫を念ふに、爾の時に我れ雪山童子と爲り、始めて此の義を聞き、永く生死を離れて涅槃道を得たり。
一三八 爾の時に諸王、佛の偈語を聞いて深く歡喜を生じ、甘露の膳を味ひ、卽ち熱惱を離れて不退轉を得たり。爾の時に大衆、佛の所説を聞いて皆大いに歡喜し、悉く禮を作して涅槃處を去り、閻魔國に還り信受し奉行す。

佛地藏菩薩發心因緣十王經（終）

【一二八】都市王廳＝都市とは此處に多くの罪人集ればなりと。本地を阿閦如來とす。一周忌の亡人の居處に配せらる。阿閦如來（Akṣobhya）は往昔阿比羅提國の大日如來の下に於て、一切衆生の無瞋恚たるべきことの甚だ難事なるを聞き、遂にその難事を成滿すべき無瞋恚の願を發し、東方の佛となり、其國を善快（又は妙喜）と名け、今現に說法しつつあるものとせらる。

【一二九】亡賓＝賓とは客のこと。微善、微惡の人は十王等の客なることとの意なり。

【一三〇】二報＝善惡の二報。

【一三一】五輪王廳＝五道輪王とは五道の衢に住して妙法輪を轉じ、衆生の惡業を摧破する意なり。本地を阿彌陀如來とす。三周忌の亡人の居處に配せらる。

※　その四、說十王厭離相。

【一三二】苦官＝燒熱等の極苦を宰る官を云ふ。

【一三三】無爲＝Asaṃskṛta 有爲に對する語。爲は造作の義。從つて造作せられず、生滅變化なきものを無爲と云ふ。大乘にて、佛教修行の理想としては涅槃を云ひ、宇宙の本體としては眞如を云ふ。

【一三四】無上菩提＝Anuttarasamyaksaṃbodhi.　佛教最上の理想たる佛果の智慧のこと。又、阿耨多羅（An-uttara 無上）三藐三菩提（Samyak-saṃbodhi 正遍智、又は正等正覺）と云ふ。眞正完全にして普遍に一切の眞相を知る無上の智慧（覺）なり。

【一三五】頌に曰く＝この頌は涅槃經第十三聖行品の文なり。

【一三六】諸行＝行とは五蘊（陰）中の行蘊にして因緣に依りて造作せられ、時間的に移り變るものを云ふ。五蘊は全て有爲法（變るもの）なれば皆此の義あれど、此の行蘊は色、受、想、識の四蘊より遙かに多くの法を收むれば、總名にて行と云ふ。

【一三七】寂滅＝涅槃なり。

【一三八】第三流通分。

昭和十一年一月十五日印刷
昭和十一年一月二十日發行
昭和十四年十月十五日再版發行

不許複製

國譯一切經 大集部 五
【定價 金一圓五十錢】

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
株式會社 大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝 三九四四番 / 三〇四〇番

製本所　兩角製本所

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 5964